

熊本県文化財調査報告 299 集

玉名平野条里跡 3
両迫間日渡遺跡 2
玉名の平城跡

県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査
県道 6 号（玉名立花線）拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査



熊本県教育委員会

2014

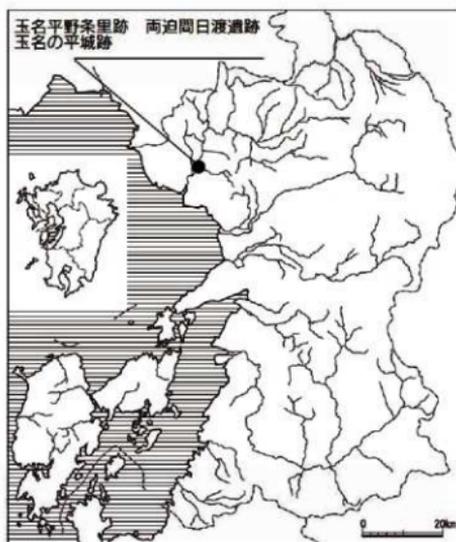
巻頭カラー 1
敷粗架技法大哇畔





玉名平野条里跡 3
両迫間日渡遺跡 2
玉名の平城跡

－ 熊本県玉名市所在の埋蔵文化財 －



熊本県教育委員会

2014

序 文

熊本県教育委員会は、国道 208 号（玉名バイパス）の建設工事や九州新幹線の建設に伴い、玉名地域の調査を実施し、その結果、縄文時代の集落や弥生時代から古墳時代の集落、古代の集落、中世の区画溝や集落等を検出しました。

今回報告する玉名平野条里跡及び両迫間日渡遺跡は、木製短甲を出土し弥生時代の堰等が出土した柳町遺跡の北側に隣接する区域です。地形的には玉名平野でも低い地域ですが、調査の結果、各所の微高地から弥生時代から古墳時代の遺構を検出しました。特に西側の柳町遺跡に隣接する区域では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物や井戸等が重複して出土しています。玉名地域での古墳時代の始まりを解明する上で貴重な資料と云えます。

東側の玉杵名神社周辺では中世の墓地及び集落を検出しました。玉杵名神社周辺のやや高くなった隣接地には中世の集落がさらに広がっていることが解明できました。

様々な成果があった調査ですが、さらに特筆すべきは、玉名平野の開発の歴史の一端を紐解く弥生時代から中世までの各時代の水田面を検出したことです。その中でも特に弥生時代後期にさかのぼると推定できる水田面に伴う大畦畔や足跡等が見つかったことは、この地域の開発を考える上で貴重な発見と云えます。報告書が刊行されております玉名市教育委員会の調査の杭列や柳町遺跡の堰等は弥生時代中期以前の資料と併せて、弥生時代の水田技術の推移を考える資料であり、隣接地域に存在すると考えられる弥生時代前期の水田面の検出に迫るものと云えましょう。

記録保存という形ではありますが本報告が地域の発展とともに、将来、地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ、生かされていくことを望んでおります。

なお、本調査を実施するにあたり、御理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田崎 龍一

例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市両迫間・玉名に所在する玉名平野条里跡第3次・両迫間日渡遺跡第2次・玉名の平城跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県土木部道路整備課及び玉名地域振興局土木部の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部局が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成12年度から平成20年度まで実施し、整理報告作業を平成23年度から25年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の2万5千分の1地形図・玉名市教育委員会「両迫間日渡遺跡」掲載図面等をもとに作成した。
また遺跡の基準点測量及び水準測量は有明測量開発者・有限会社古家測量設計・坂井設計コンサルタント・株式会社バスコに委託して実施した。
- 6 現地での写真撮影は各調査員が行い、長谷部善一(参事)の協力を得た。遺構実測は現場作業員の

協力のもと各調査員が実施した。遺物の実測・製図は、坂本千恵・春川香子・出家麻里・濱崎清子・園田智子・山下義満が主に実施し、一部を桐埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・桐有明測量開発社の委託事業とした。遺物洗浄・接合・復元は、文化財資料室で行った。

遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・蓮池千恵が行い、一部、山下が行った。

- 7 自然科学分析(炭素同位体年代測定・花粉分析・樹種同定、種実同定等)は株式会社バリノ・サーヴェイに委託した。
- 8 本書の執筆は第V章自然科学分析を、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム・株式会社バリノ・サーヴェイが行い、第II章 遺跡の環境、第III章 第3節基本土層・平成12・13年度(01-1~8区)の調査成果は亀田が、その他を山下が執筆した。
- 9 整理後の遺物・写真・図面等は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、坂本の援助を得て山下が担当した。

凡 例

- 1 方位/座標 国土座標第II系(日本測地系)を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区(第2・3図)の通りである。また玉名平野条里跡THJ・両迫間日渡遺跡KHJで簡略記号化した。
- 3 遺構名略号 次の通りである。SH SI;住居・SA;楯列・SB;掘立柱建物・SK;土壇墓;ST・土坑・SD;溝・SE;井戸・溝;・SX;不明遺構。
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海面(Tokyo Peil [T.P.])による。
- 6 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。
- 7 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また攪乱および調査区範囲については一点破線で示した
- 8 遺構図版 本杭の断面については木目の方向で(斜線)で示している。これに該当しないものは各図

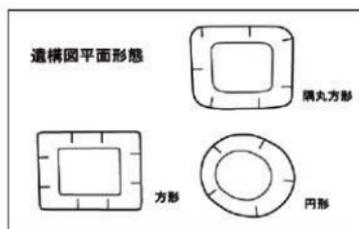
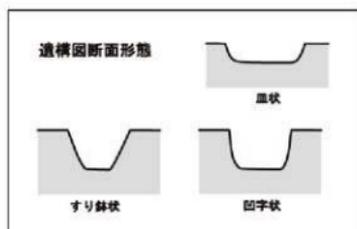
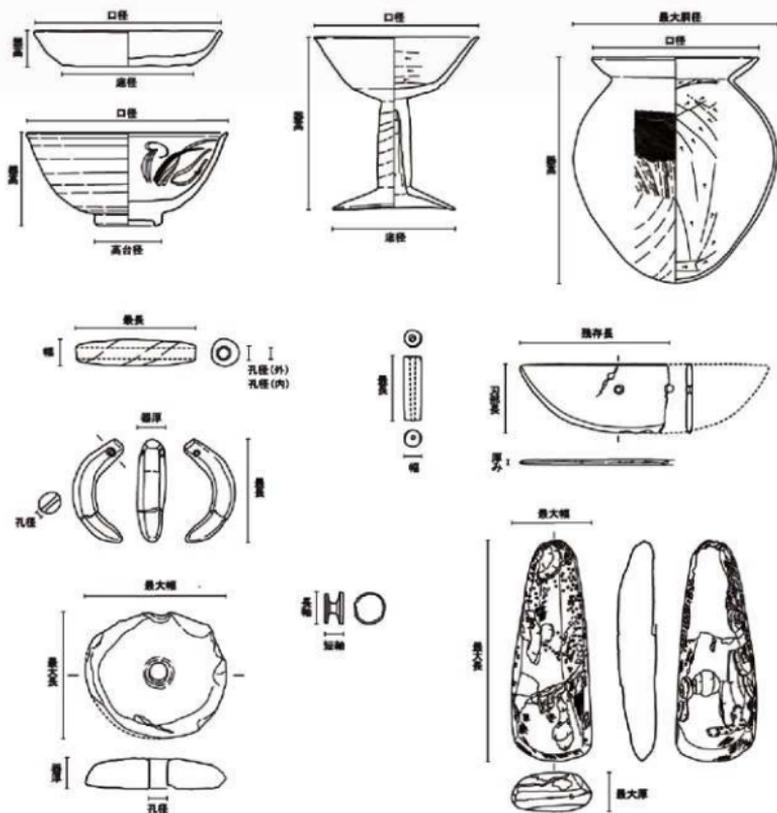
面上で凡例を示した。

- 9 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では一ラインの内側をポイントとしている。
- 10 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器は1/3、一部1/8で行い、石器は1/3、その他は1/2で掲載した。またこれに該当しないものは、その縮尺を図中に示した。
- 11 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、破線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。
- 12 遺物図版 土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。須恵器は断面を黒塗りしている。
- 13 接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。
- 14 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項

にて注記している。

15 色調 本書で用いた土壌・胎土色調名は、農林水産省技術事務局監修「新版 標準土色帳」を用いた。

陶磁器・玉類については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第2版（1986）を用いた。



本文目次

第I章 調査の経過	1	第VI章 遺物観察表・データ	402
第1節 調査に至る経緯と経過	1	玉名平野条里跡・阿迫間日渡遺跡	
第2節 調査の組織	1	遺物 1	
		(金属器・古銭・土錘・投石・種実) …	402
		遺物 2	
		(土器・石器 他) …	415
第II章 遺跡の環境	3	遺構 …	428
		玉名の平城跡	
		遺構・遺物 …	442
		植生 …	444
第III章 調査の概要	4	第VII章 総括	449
第1節 調査区の位置	4	第1節 遺物	449
第2節 調査の概要	4	第2節 結言	453
第3節 基本土層	5	1 本調査の調査法	453
		2 水田としての認識	453
		3 弥生後期後半の水田概念	454
		4 水田の広がり	459
		5 条里制について	459
		6 地域の中での本遺跡	461
第IV章 調査の成果	47		
第1節 縄文時代	47		
第2節 弥生時代	50		
第3節 古墳時代	70		
第4節 古代	71		
第5節 中世から近世	72		
第6節 時期不明	74		
第7節 玉名の平城跡	76		
第V章 自然科学分析	339		
第1節 人骨	339		
第2節 05- I -1 区 SX-03	344		
第3節 05- I -1 区・2 区	354		
第4節 05- I -1 区・2 区・05- II -2 区	366		
第5節 木樋 (SX-43)	376		
第6節 種実	392		

図 版 目 次

第 1 図	水田概念図及び擬似畦畔概念図…………… 8	第 34 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図及びコンタ図 (縄文) …… 78
第 2 図	遺跡範囲図 1 (熊本県遺跡地図) …… 9	第 35 図	玉名平野条里跡 01-3 区 3b 層遺構配置図 (縄文) …… 79
第 3 図	遺跡範囲図 2 (玉名市遺跡地図) 13 ~ 14	第 36 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-42・円形周溝状遺構実測図 …… 80
第 4 図	玉名平野条里跡 01-1 ~ 8 区 グリッド図…………… 16	第 37 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43 実測図 …… 81
第 5 図	玉名平野条里跡 01-2 区西壁土層柱状図・ 01-1 区トレンチ東壁土層断面図・SX-13・ 14 東壁土層断面図 …… 17	第 38 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 1 及び 出土遺物実測図…………… 82
第 6 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 柱状図・土層断面図…………… 18	第 39 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 2 …… 83
第 7 図	玉名平野条里跡 01-6 区土層柱状図・ トレンチ 1・2 土層図 …… 19	第 40 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-163 01-1・2 区 SD-07・08 実測図…………… 84
第 8 図	グリッド図 1 …… 20	第 41 図	両迫間日渡遺跡 06-1 区 ST-01 実測図及び 出土遺物実測図 (No. 3・4) 玉名平野条里 跡 07-Ⅲ区出土遺物実測図 (No. 5) …… 85
第 9 図	グリッド図 2 …… 21	第 42 図	両迫間日渡遺跡 06-1 区 北側流路土層断 面図及び出土遺物実測図…………… 86
第 10 図	グリッド図 3 …… 22	第 43 図	両迫間日渡遺跡 06-1 区 11a 層 SD-13 実測図 …… 87
第 11 図	グリッド図 4 …… 23	第 44 図	調査区範囲図 (S = 1/10000) …… 88
第 12 図	グリッド図 5 …… 24	第 45 図	玉名平野条里跡 01-1 ~ 8 区 遺構配置図 (弥生) …… 89
第 13 図	グリッド図 6 …… 25	第 46 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (弥生) …… 90
第 14 図	グリッド図 7 …… 26	第 47 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-34・SX-20 実測図及び出土遺物実測図…………… 91
第 15 図	グリッド図 8 …… 27	第 48 図	玉名平野条里跡 02-1 区 SH-01 実測図 …… 92
第 16 図	土層柱状図 (2002 ~ 2008 年度) 1 …… 28	第 49 図	玉名平野条里跡 02-1 区 SH-02 実測図 …… 93
第 17 図	土層柱状図 (2002 ~ 2008 年度) 2 …… 29	第 50 図	玉名平野条里跡 02-1 区 SH-01・02 遺物 出土状況及び出土遺物実測図…………… 94
第 18 図	基本土層図 1 …… 30	第 51 図	玉名平野条里跡 02-1 区 22 層遺構配置 図・SD-13・ST-03 実測図 …… 95
第 19 図	基本土層図 2 …… 31	第 52 図	両迫間日渡遺跡 03-1 区 SX-03 ~ 05 実 測図…………… 96
第 20 図	基本土層図 3 …… 32		
第 21 図	基本土層図 4 …… 33		
第 22 図	基本土層図 5 …… 34		
第 23 図	基本土層図 6 …… 35		
第 24 図	基本土層図 7 …… 36		
第 25 図	基本土層図 8 …… 37		
第 26 図	基本土層図 9 …… 38		
第 27 図	基本土層図 10 …… 39		
第 28 図	基本土層図 11 …… 40		
第 29 図	基本土層図 12 …… 41		
第 30 図	基本土層図 13 …… 42		
第 31 図	基本土層図 14 …… 43		
第 32 図	調査区範囲図 (S = 1/10000) …… 76		
第 33 図	玉名平野条里跡 01-1 ~ 8 区 遺構配置図 (縄文) …… 77		

第53図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 9層・05- I -2区 10b-1層遺構配置図及 び出土遺物実測図…………… 97	第71図	玉名平野条里跡 06- III区 SX-36・38・39・SK-06実測図…………… 117
第54図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 9層 05- I -2区 10b層コンタ図 … 98	第72図	玉名平野条里跡 07- III区 遺構配置図及びSD-01実測図…………… 118
第55図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03・小畦畔実測図…………… 99～100	第73図	玉名平野条里跡 07- IV区 8層コンタ図・SD-01土層断面図及び出土 遺物実測図…………… 119
第56図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03拡張部実測図…………… 101	第74図	調査区範囲図 (S = 1/10000)…………… 120
第57図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03水口・小畦畔実測図…………… 102	第75図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 古墳層…………… 121
第58図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 枕列出土状況及び出土遺物実測図 103～104	第76図	玉名平野条里跡 01-1～8区 遺構配置図 (古墳上面)…………… 122
第59図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03トレンチ土層断面図…………… 106	第77図	玉名平野条里跡 01-1～8区 遺構配置図 (古墳下面)…………… 123
第60図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 足跡位置図及び実測図…………… 106	第78図	玉名平野条里跡 01-2区 SI-02・SK-18実測図…………… 124
第61図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 足跡グルーピング図…………… 107	第79図	玉名平野条里跡 01-3区 SI-103・104・107・141実測図…………… 125
第62図	両迫間日渡遺跡 05- I -2区 10b層 SX-01・02・SA-01実測図及び出土 遺物実測図…………… 108	第80図	玉名平野条里跡 01-3区 SX-136・161・SE-140実測図…………… 126
第63図	玉名平野条里跡 05- III-1区 8層遺構配置図及びSD-01・02実測図 109	第81図	玉名平野条里跡 01-3区 SI-51・52・SK-01実測図…………… 127
第64図	玉名平野条里跡 05- III-2区 6b層遺構配 置図及びSD-03・04実測図…………… 110	第82図	玉名平野条里跡 01-3区 SI-51・52・SK-01上層遺物出土状況及び 出土遺物実測図…………… 128
第65図	両迫間日渡遺跡 06- I区 10a層・10b層 コンタ図及び出土遺物実測図…………… 111	第83図	玉名平野条里跡 01-3区 SI-51・52・SK-01下層遺物出土状況 実測図…………… 129
第66図	両迫間日渡遺跡 06- I区 10b層 SD-11・SX-21・22実測図及び投石 出土位置実測図…………… 112	第84図	玉名平野条里跡 01-3区 SI-53・SX-102 実測図及び出土遺物実測図…………… 130
第67図	玉名平野条里跡 06- II区 7層直上遺構配 置図及びSD-05実測図…………… 113	第85図	玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15・41実測図…………… 131
第68図	玉名平野条里跡 06- II区 SH-01・02・ SX-01実測図…………… 114	第86図	玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31・SK-27・SX-04-2実測図及び出土遺 物実測図…………… 132
第69図	玉名平野条里跡 06- II区 SH-01・02・SP-01～04・06・SK-01実測 図及び出土遺物実測図…………… 115	第87図	玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-19・36実 測図及び出土遺物実測図…………… 133
第70図	玉名平野条里跡 06- III区 7a層遺構配置図…………… 116	第88図	玉名平野条里跡 01-3区 SE-114実測図…………… 134

第 89 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 出土遺物実測図 ……………	135	第 105 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-153 実測図 ……………	151
第 90 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-115 実測図及び出土遺物実測図 ……	136	第 106 図	玉名平野条里跡 01-7 区 SD-708 ~ 710・717・SK-713・715・716・ SX-718 実測図 ……………	152
第 91 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 実測図 ……………	137	第 107 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 2b 層遺構配置図及び SD-46・SX-47・61 実 測図 ……………	153
第 92 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 1 ~ 6 層実測図 ……………	138	第 108 図	玉名平野条里跡 01-6 区 3a 層上面遺構配置図 ……………	154
第 93 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 8・9 層遺物出土状況及び出土遺物 実測図 ……………	139	第 109 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-401 ~ 408・410 実測図 ……………	155
第 94 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 出土遺物実測図 ……………	140	第 110 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409・411 ~ 416・SP-418・420・421 実 測図 ……………	156
第 95 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SK-101・SX-106・118・124 ~ 126・128・ 130・137 実測図 ……………	141	第 111 図	玉名平野条里跡 01-8 区 3 層上面遺構配置図 ……………	157
第 96 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図(古墳) ……………	142	第 112 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SX-802・805・808・829・SD-823・SP-809 ~ 813・P-3 実測図 ……………	158
第 97 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SD-03・25・28・29・SX-06・38 実測図及 び出土遺物実測図 ……………	143	第 113 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SX-801・803・804・806・807 実測図	159
第 98 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SK-37・44・45・SX-04-1・35・39・SP-46 実測図 ……………	144	第 114 図	玉名平野条里跡 01-6 区 4 層上面遺構配置図 ……………	160
第 99 図	玉名平野条里跡 01-3 区 2b・2c 層遺構配置図(古墳) ……………	145	第 115 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409A・B・SX-422 ~ 425 実測図 ……	161
第 100 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SD-117・129・131 ~ 134 実測図及び出土 遺物実測図 ……………	146	第 116 図	玉名平野条里跡 01-8 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図 ……	162
第 101 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 3a 層 ~ 3b 層遺 構配置図及びコンタ図 ……………	147	第 117 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SD-822・SK-832・SX-821・824・825・ 828・SI-831 実測図 ……………	163
第 102 図	玉名平野条里跡 01-4 区 SD-103・203 ~ 206・SX-202・206・207 実 測図 ……………	148	第 118 図	両泊間日渡遺跡 03-1 区 5a 層上層遺構配置図・コンタ図及び出土 遺物実測図 ……………	164
第 103 図	玉名平野条里跡 01-7 区 SD-701・702・SX-704・705・712・SP- 706・707 実測図 ……………	149	第 119 図	両泊間日渡遺跡 03-1 区 SX-01・02 実測図 ……………	165
第 104 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図 ……	150	第 120 図	両泊間日渡遺跡 03-1 区 5b 層上層遺構配置図 ……………	166
			第 121 図	両泊間日渡遺跡 03-1 区 SD-05・06 実測図 ……………	167

第 122 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅰ区 SD-05・SH-01・P8 実測図 ……………	168	第 139 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-01・02・SX-03 実測図 ……………	185
第 123 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅰ区 ST-03 ～ 10 実測図 ……………	169	第 140 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-03・04 実測図 ……………	186
第 124 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅰ区 ST-11 ～ 14・16・17・P-1・9 実測図	170	第 141 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-04 遺物出土 状況及び出土遺物実測図 ……………	187
第 125 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 4a層・5a層遺構配置図及び杭1～6・SX-06 実測図 ……………	171	第 142 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-04 出土遺物実測図 ……………	188
第 126 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 5b層上面遺構配置図及びSD-07・P-19 ～ 22 実測図 ……………	172	第 143 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-05・06 実測図及び出土遺物実測図	189
第 127 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 ST-18 ～ 20 実測図及び出土遺物実測図 ……………	173	第 144 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-07・09・SX-04 (焼土坑) 実測図及び 出土遺物実測図 ……………	190
第 128 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 SX-07 実測図及び出土遺物実測図 ……	174	第 145 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 SX-04 実測図及び出土遺物実測図 ……	191
第 129 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 SX-07 杭群実測図 1 ……………	175	第 146 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-08 実測図 ……………	192
第 130 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅱ区 SX-07 杭群実測図 2 及び包 3b 層出土遺物 実測図 ……………	176	第 147 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-08 出土遺物実測図 ……………	193
第 131 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 5b層遺構配置図及びSX-09 実測図 ……	177	第 148 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 自然流路実測図 ……………	194
第 132 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 SH-01 実測図 ……………	178	第 149 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 土器集中区出土遺物実測図 1 ……………	195
第 133 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 P-1・2 実測図及び出土遺物実測図 ……	179	第 150 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 土器集中区出土遺物実測図 2 ……………	196
第 134 図	玉名平野条里跡 04-Ⅰ区 6層遺構配置図・SD-01・SX-01 ～ 03 実測 図及び出土遺物実測図 ……………	180	第 151 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-1区 7b層遺構配置図及び出土遺物実測図	197
第 135 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 5e層・5c層・5d層上面遺構配置図 ……	181	第 152 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-1区 SD-03 実測図 ……………	198
第 136 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 6b層・6f層・6h層上面遺構配置図及び出 土遺物実測図 ……………	182	第 153 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-2区 7b層直上遺構配置図 ……………	199
第 137 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 SX-01 (溝 4 ～ 10・12) 実測図 ……	183	第 154 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-2区 8層遺構配置図 ……………	200
第 138 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 SX-02 (杭 1 ～ 11) 実測図 ……………	184	第 155 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅱ-2区 7a層上面・7b層遺構配置図及び出土遺物 実測図 ……………	201
			第 156 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅱ-2区 7a層上面コンタ図 ……………	202
			第 157 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅱ-2区 SD-01・02 実測図 ……………	203

第158図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b層・9a層・9b層遺構配置図…………… 204	第178図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a層遺構配置図・足跡配置図…………… 224
第159図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 出土遺物実測図 06- I 区7b層・8層・9b 層コンタ図…………… 205	第179図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4b層遺構配置図及び出土遺物実測図 SK-01 実測図…………… 225
第160図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b層 SX-04 ~ 06 実測図…………… 206	第180図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 出土遺物実測図…………… 226
第161図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9a層遺構配置図…………… 207	第181図	調査区範囲図 (S = 1/10000)…………… 227
第162図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9a層 SX-16 ~ 20・SD-10・12・17 実測図… 208	第182図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 中世層…………… 228
第163図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-23 実測図…………… 209	第183図	玉名平野条里跡 01-1 ~ 8 区 遺構配置図 (中世)…………… 229
第164図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-23 (杭1 ~ 40) 実測図…………… 210	第184図	玉名平野条里跡 01-5 区 2a層上面遺構配置 図・土層柱状図・SE-56 実測図…………… 230
第165図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9b層検出杭列実測図…………… 211	第185図	玉名平野条里跡 02- I 区 11層遺構配置図…………… 231
第166図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SD-14・15・20 実測図…………… 212	第186図	玉名平野条里跡 02- I 区 SD-07・08 実測図…………… 232
第167図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SD-16 実測図…………… 213	第187図	玉名平野条里跡 02- I 区 13層遺構配置図 及びSD-10・SX-03 実測図…………… 233
第168図	玉名平野条里跡 06- II 区 6a層コンタ図及 び出土遺物実測図…………… 214	第188図	玉名平野条里跡 02- I 区 13層コンタ図…………… 234
第169図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 6b層遺構配置図及びコンタ図…………… 215	第189図	玉名平野条里跡 02- I 区 13層稲株痕実測図…………… 235
第170図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SD-31・37・SX-39・42 実測図…………… 216	第190図	玉名平野条里跡 02- III 区 7層遺構配置図…………… 236
第171図	調査区範囲図 (S = 1/10000)…………… 217	第191図	玉名平野条里跡 02- III 区 7層水田面実測図…………… 237
第172図	玉名平野条里跡 02- I 区 18層遺構配置図…………… 218	第192図	玉名平野条里跡 02- III 区 SD-11・SX-04 実測図…………… 238
第173図	玉名平野条里跡 02- I 区 SD-09・ST-02 実測図…………… 219	第193図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 杭検出配置図…………… 239
第174図	玉名平野条里跡 02- III 区 9層遺構配置図…………… 220	第194図	両迫間日渡遺跡 03- I 区杭9・11 ~ 20 実 測図及び出土遺物実測図…………… 240
第175図	玉名平野条里跡 02- III 区 9層水田面稲株痕実測図…………… 221	第195図	両迫間日渡遺跡 03- III 区遺構配置図及び出 土遺物実測図…………… 241
第176図	玉名平野条里跡 02- III 区 SD-12・15・SX-10 実測図及び出土遺物実測図…………… 222	第196図	両迫間日渡遺跡 03- III 区 杭検出位置図…………… 242
第177図	玉名平野条里跡 02- III 区 杭3 ~ 14 実測図及び出土遺物実測図 223	第197図	両迫間日渡遺跡 03- III 区杭列予想図… 243

第198図	両迫間日渡遺跡03-Ⅲ区 杭1～155実測図1……………244	第216図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 5層遺構配置図及び出土遺物実測図…262
第199図	両迫間日渡遺跡03-Ⅲ区 杭1～155実測図2……………245	第217図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 SD-01・02実測図……………263
第200図	両迫間日渡遺跡03-Ⅲ区 出土杭実測図……………246	第218図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区ST-01～07・ 09実測図及び出土遺物実測図……………264
第201図	玉名平野条里跡04-I区 3層遺構配置図・ST-01実測図及び出土遺 物実測図……………247	第219図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 ST-08・10～14・16・17実測図……………265
第202図	両迫間日渡遺跡04-I区 3層遺構配置図……………248	第220図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 ST-15・18～27実測図……………266
第203図	両迫間日渡遺跡04-I区 SD-01・SX-01～06・ST-01実測図…249	第221図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 ST-28～34実測図……………267
第204図	両迫間日渡遺跡04-I区 4b層上面遺構配置図及びコンタ図…250	第222図	玉名平野条里跡05-Ⅲ-2区 ST-35～43実測図……………268
第205図	両迫間日渡遺跡04-I区 SD-02実測図……………251	第223図	両迫間日渡遺跡06-I区 6a層・6b層・6c層コンタ図……………269
第206図	両迫間日渡遺跡04-I区 SX-06～08・11実測図……………252	第224図	両迫間日渡遺跡06-I区6c-2層・7a層コ ンタ図・6c-2層鉄分沈着範囲図……………270
第207図	両迫間日渡遺跡04-II区 4層遺構配置図……………253	第225図	両迫間日渡遺跡06-I区SX-02・SP-01実 測図・6a層足跡検出範囲……………271
第208図	両迫間日渡遺跡04-II区 SX-01（畦畔・溝1～3）実測図・05-I -1区SX-01（疑似畦畔）実測図……………254	第226図	両迫間日渡遺跡06-I区 6b-2層SD-09・SX-10・15実測図……………272
第209図	両迫間日渡遺跡05-I-1区 5b層遺構配置図……………255	第227図	両迫間日渡遺跡06-I区SX-03実測図・ 6c-2層足跡検出範囲……………273
第210図	両迫間日渡遺跡05-I-1区 6c層遺構配置図・SD-01・02実測図…256	第228図	両迫間日渡遺跡06-I区 6c-2層遺構配置図……………274
第211図	両迫間日渡遺跡05-I-2区 6b層木杭（1～20）出土状況及び出土遺 物実測図……………257	第229図	両迫間日渡遺跡06-I区6c-2層SX-08・09・ 11・13～14・SD-08実測図……………275
第212図	両迫間日渡遺跡05-I-2区 6b層杭出土状況及び実測図……………258	第230図	両迫間日渡遺跡06-I区6c-2層SD-05・ 18・SX-12実測図・杭1～23検出位置図 ……………276
第213図	両迫間日渡遺跡05-I-2区 7a層遺構配置図及びコンタ図……………259	第231図	両迫間日渡遺跡06-I区6c-2層SD-19・ SX-24実測図……………277
第214図	両迫間日渡遺跡05-II-2区 5層遺構配置図及びコンタ図……………260	第232図	玉名平野条里跡06-Ⅲ区・07-II区5層遺 構配置図及び5層直上コンタ図……………278
第215図	両迫間日渡遺跡05-II-2区5層コンタ図 及びSX-03・04土層断面図……………261	第233図	玉名平野条里跡06-Ⅲ区 SD-02・05・SX-04・SP-03実測図……………279
		第234図	玉名平野条里跡07-II区 SX-44～53実測図……………280

第 235 図	玉名平野条里跡 06- III区 6a 層遺構配置図・6a 層直上コンタ図及び 出土遺物実測図…………… 281	第 253 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01・02 実測図 及び出土遺物実測図…………… 299
第 236 図	玉名平野条里跡 06- III区 SX-30・SP-07～21 実測図及び出土遺物実 測図…………… 282	第 254 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SE-03 実測図及び出土遺物実測図 …… 300
第 237 図	玉名平野条里跡 07- I 区 4 層遺構配置図及 び出土遺物実測図…………… 283	第 255 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-01 実測図及び出土遺物実測図 …… 301
第 238 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SB-01・SK-02・SX-01 実測図 …… 284	第 256 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-02・05・22 実 測図及び出土遺物実測図…………… 302
第 239 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SE-01・SD-02 実 測図及び出土遺物実測図…………… 285	第 257 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-03・ST-10 実 測図及び出土遺物実測図…………… 303
第 240 図	玉名平野条里跡 07- IV区 5 層コンタ図 及び出土遺物実測図…………… 286	第 258 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-04 実測図及び出土遺物実測図 …… 304
第 241 図	玉名平野条里跡 07- V区 5 層遺構配置図・ コンタ図・SD-01・02 実測図及び出土遺物 実測図…………… 287	第 259 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-06・07・10～12・20 実測図及び出土 遺物実測図…………… 305
第 242 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図…………… 288	第 260 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-08・09・15 実 測図及び出土遺物実測図…………… 306
第 243 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図 (SD のみ) …… 289	第 261 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-13・21 実測図 及び出土遺物実測図…………… 307
第 244 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図 (SA・SB のみ) 及びコンタ図…………… 290	第 262 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-14 実測図及び出土遺物実測図 …… 308
第 245 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SA-01～03 実測図…………… 291	第 263 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-14 出土遺物実測図…………… 309
第 246 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-01・03 実測図…………… 292	第 264 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-16～19 実測 図及び出土遺物実測図…………… 310
第 247 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-02 実測図及び 出土遺物実測図…………… 293	第 265 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図 …… 311
第 248 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-05 実測図…………… 294	第 266 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-02・03 実測図 及び出土遺物実測図…………… 312
第 249 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 実測図及び出土遺物実測図 …… 295	第 267 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-04・05 実測図 及び出土遺物実測図…………… 313
第 250 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 実測図…………… 296	第 268 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-06・09 実測図 及び出土遺物実測図…………… 314
第 251 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 出土遺物実測図…………… 297	第 269 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-07・08・10 実 測図及び出土遺物実測図…………… 315
第 252 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 実測図及び出土遺物実測図 …… 298	第 270 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-11～16 実測 図及び出土遺物実測図…………… 316
		第 271 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-17～21 実測 図及び出土遺物実測図…………… 317

第272図	玉名平野条里跡08-Ⅰ区SX-01・02実測図及び出土遺物実測図……………	318	第290図	玉名の平城跡出土遺物実測図……………	336
第273図	玉名平野条里跡08-Ⅰ区包4・5層・調査区一括出土遺物実測図……………	319	第291図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土金属製品実測図……………	402
第274図	玉名平野条里跡02-Ⅱ区遺構配置図及び出土遺物実測図……………	320	第292図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土銅銭一覽……………	403
第275図	玉名平野条里跡07-Ⅰ区5a層遺構配置図及び5層コンタ図 ……	321	第293図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土土鏃実測図……………	405
第276図	玉名平野条里跡07-Ⅰ区SD-03・04・SX-06実測図及び出土遺物実測図……………	322	第294図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石実測図……………	406
第277図	玉名平野条里跡07-Ⅰ区SX-02・SD-06実測図及び出土遺物実測図……………	323	第295図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図弥生1……………	408
第278図	玉名平野条里跡07-V区8層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図……………	324	第296図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図弥生2……………	409
第279図	玉名平野条里跡07-V区SX-01～08(粘土探掘坑)実測図1 ……	325	第297図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図古墳……………	410
第280図	玉名平野条里跡07-V区SX-01～08(粘土探掘坑)実測図2 ……	326	第298図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図中世1……………	411
第281図	玉名平野条里跡07-V区SX-07土層断面図……………	327	第299図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図中世2……………	412
第282図	玉名平野条里跡07-Ⅱ(06-Ⅲ)区7b層遺構配置図・7b層直上コンタ図 ……	328	第300図	両迫間日渡遺跡04-Ⅱ区・玉名平野条里跡06-Ⅱ区種実(桃)層別出土範囲図 ……	413
第283図	玉名平野条里跡07-Ⅱ(06-Ⅲ)区SX-43(木樋)実測図……………	329	第301図	両迫間日渡遺跡05-Ⅰ-1区・05-Ⅰ-2区種実(桃)層別出土範囲図……………	414
第284図	玉名の平城跡区画……………	330	第302図	SK-02出土遺物(No.241)と丸アバ ……	452
第285図	玉名の平城跡遺構配置図……………	331	第303図	農事曆……………	455
第286図	玉名の平城跡SA-01～04・07実測図1……………	332	第304図	両迫間日渡遺跡05-Ⅰ-1区・2区における水田概念図……………	456
第287図	玉名の平城跡SA-01～04・07実測図2……………	333	第305図	両迫間日渡遺跡05-Ⅰ-1区・2区及び両迫間日渡遺跡1(Ⅷ層)との整合性 ……	457
第288図	玉名の平城跡SA-05・06・SB-01～03実測図……………	334	第306図	玉名平野条里跡02-Ⅰ区13層稲株痕実測図……………	458
第289図	玉名の平城跡S19実測図及び出土遺物実測図……………	335	第307図	時代ごとの水田の広がり……………	460

目 次

第1表	遺跡地名表1	10	第10表	石器類観察表	
第2表	遺跡地名表2	11		(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 427	
第3表	調査時期	15	第11表	土製品観察表	
第4表	金属製品観察表			(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 427	
	(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 404		第12表	木製品観察表	
第5表	銅銭一覽表			(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 428	
	(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 404		第13表	玉類観察表	
第6表	土錘観察表・出土土錘分類表			(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 428	
	(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 405		第14表	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡	
第7表	投石サンプル一覽表			遺構データ表 … 429	
	(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 406		第15表	玉名の平城跡遺物観察表 … 442	
第8表	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡		第16表	玉名の平城跡遺構データ表 … 443	
	投石出土 … 407		第17表	花粉分析・プラントオパール分析における	
第9表	土器観察表			草木参考 … 444	
	(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) … 415				

写真図版目次

Ph. 1	…………… 456	Ph. 4	…………… 468
	玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-42と円形周溝状遺構・玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43・玉名平野条里跡 01-1・2区円形周溝状遺構・玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43・玉名平野条里跡 01-1・2区縄文時代(SI-42・43円形周溝状遺構ほか) 遺構検出		玉名平野条里跡 01-3区 SI-51炭化物出土状況・玉名平野条里跡 01-3区 SI-51下層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3区 SE-114・121 3層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況全景・玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 5～7層遺物出土状況
Ph. 2	…………… 466	Ph. 5	…………… 469
	玉名平野条里跡 01-3区 SI-164 遺物出土状況 玉名平野条里跡 01-3区 SI-162 遺物出土状況 玉名平野条里跡 01-3区 SI-166 竪穴建物 玉名平野条里跡 01-3区 SI-166 石器出土状況 玉名平野条里跡 01-3区東側遺構検出		玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 8層9層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15埋土1層中央部遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-4区溝検出状況 SD-203・204 (701)ほか・玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28・SI-02 竪穴建物・溝・遺物出土状況
Ph. 3	…………… 467	Ph. 6	…………… 470
	玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-02・玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 3層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 NE→SW・玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 S→N・玉名平野条里跡 01-1・2区 SX-35 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3区 SI-52・153 全景		両迫間日渡遺跡 05-I-1区 SX-03 (大畦畔) 東側壁・両迫間日渡遺跡 05-I-1区 SX-03 (大畦畔)
		Ph. 7	…………… 471
			両迫間日渡遺跡 05-I-1区 SX-03 (大畦畔) 検出状況

Ph. 8	472	Ph. 17	481
	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 人骨出土 状況 (NW → SE)・玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 人骨出土状況 (S → N)		両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (NW → SE) 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (SE → NW)
Ph. 9	473	Ph. 18	482
	玉名平野条里跡 04- I 区 SX-01 石埋納出 土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-07 遺物出土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 遺物出土状況・両迫間日渡遺跡 06- I 区 ST-01 縄文土器出土状況・玉名平野 条里跡 07- II 区木樋出土状況 (SE → NW)		木杭・石包丁
Ph. 10	474	Ph. 19	483
	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 遺物出土 状況・玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 遺 物出土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 検出状況時・参考水口まつり (天草 市河浦町今田)		投石サンプル一覧・出土投石
Ph. 11	475	Ph. 20	484
	両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 8 層小畦畔検 出状況・両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-10 検出状況・両迫間日渡遺跡 05- II -1 区中 世水田足跡痕 (NW → SE)・玉名平野条里 跡 07- V 粘土探掘坑検出状況		玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 出土土器 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-115 出土土器 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 出土土器 両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 出土土器 両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 網代
Ph. 12	476	Ph. 21	485
	玉名の平城跡 (W → E)・玉名の平城跡 S19 遺物出土状況 (SE → NW)		小型丸底土器・ミニチュア土器
Ph. 13	477	Ph. 22	486
	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔)		両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 出土土器 玉名平野条里跡 01-2 区 SE-36 出土土器・ 両迫間日渡遺跡 05- I 区金属製品 (小柄)・ 両迫間日渡遺跡 04- II 区被熱塊
Ph. 14	478	Ph. 23	487
	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 10b 層		玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-02・SD-03 出 土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-03 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 出土土器
Ph. 15	479	Ph. 24	488
	玉名平野条里跡 02- III 区 7 層稲株痕検出状況 玉名平野条里跡 02- III 区 9 層稲株痕検出状況		土罐・浮子・生活用具・石礎・榼
Ph. 16	480	Ph. 25	489
	玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稲株痕検出状況 (N → S)・両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a 層足跡・玉名平野条里跡 02- II 区溝 (大型溝)		小型丸ノミ・打製・磨製石斧・敲石
		Ph. 26	490
			玉名平野条里跡 08- I 区出土勾玉 (クロム 白雲母)・装飾品 (勾玉・ガラス玉・管玉)・ 円形装飾品・土製勾玉・石剣・土製管玉・ 土玉
		Ph. 27	491
			玉名の平城跡出土遺物 巡方 (表・裏)・ミニチュア土器 玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SX-43 木樋 (地 理後)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地は県道玉名山鹿線道路整備事業に伴う調査で、これまでの県道拡幅を行い、新玉名駅交通アクセスの利便性を高める目的とし、既存の道路県道玉名山鹿線の拡幅事業であり、工事箇所によっては路線を新設した。調査区は未買収地を多く抱え取得地からの調査となり、このため調査区年度の連続性がないのはこのためである。

この「玉名平野条里跡」は熊本県文化財報告第25集（昭和52年3月31日）で報告された周知の遺跡である。平成11年4月28日付け玉土第361号での依頼を受け、確認調査を実施した。この結果により、調査は平成12年8月23日から埋蔵文化財発掘調査を実施したことが、広義での「玉名平野条里跡」調査の嚆矢であった。平成12年8日から平成21年3月24日まで長期に亘る調査の為、その間、県道長洲玉名線単線橋梁改築事業に伴う文化財調査「玉名平野条里跡」（旧玉名郡岱明町所在 熊本県文化財調査報告 第226集）・玉名平野条里跡【古閑前地区】（熊本県文化財調査報告書 第261集）・両迫間日渡遺跡1（熊本県文化財調査報告 第268集）の調査・報告がなされた。

第2節 調査の組織

玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡

発掘調査（平成12年度～平成20年度 2000～2008）

調査主体 熊本県教育委員会

- 田中力男（熊本県教育長 H12～15）
- 柿塚純男（熊本県教育長 H16～19）
- 山本陸生（熊本県教育長 H20～23）
- 田崎龍一（熊本県教育長 H24～25）

調査責任者

- 阪井大文（文化課長 H12・13）
- 成瀬烈大（文化課長 H14・15）
- 島津義昭（文化課長 H16）
- 梶野英二（文化課長 H17～19）
- 米岡正治（文化課長 H20）

調査総括

- 島津義昭（課長補佐 H12・13）・吉田 恵（課長補佐 H15）江本 直（主幹兼文化財調査第2係長 H12・課長補佐 H19・20）・倉岡 博（課長補佐 H16・17）・木崎康弘（文化財調査第2係長 H13・14）・島津義昭（教育審議員兼課長補佐 H14・15）・小田信也（教育審議員兼課長補佐 H14）・西住欣一郎（文化財調査第2係長 H15～18）

調査事務局

- 川上康治（課長補佐 H12）・小田信也（課長補佐 H13）・吉田 恵（課長補佐 H15～18）・宗村士郎（教育審議員兼課長補佐 H19・20）・中村幸宏（主幹兼総務係長 H12～14）・櫻杭正義（主幹兼総務係長 H15・16）・四元正明（主幹兼総務係長 H17）・高宮優美（主幹兼総務係長 H18・19）・川上勝美（主幹兼総務係長 H20）・廣瀬泰之（参事 H12・13）・上村修治（参事 H12）・塚原健一（参事 H17～19）・山田京子（参事 H20）・杉村輝彦（主事 H12～15）・天野寿久（主任主事 H14～16）・小谷仁志（主任主事 16～18）・高松克行（主任主事 H19）

調査担当

- 亀田 学（主任学芸員 H12・13）・山下義満（文化財保護主事 H14・15・参事 H16～20）・河野真理子（文化財保護主事 H14）・後藤克博

(文化財保護主事 H16・17)・高山直也(文化財保護主事 H17)・山中智恵(文化財保護主事 H17)・中川浩司(文化財保護主事 H18・19)・布田哲久(文化財保護主事 H20)・水上 仁(非常勤職員 H13)・大倉千寿(非常勤職員 H12・13)・北原美和子(非常勤職員 H14)・西 慶喜(非常勤職員 H14)・宮崎 拓(非常勤職員 H14～16)・西口貴志(非常勤職員 H14)・野満彰子(非常勤職員 H15)・本多麻紀(非常勤職員 H16・17)・柿本 慧(非常勤職員 H16・17)・上土井朋美(非常勤職員 H16・17)・稲富陽子(非常勤職員 H16)・多賀晴司(非常勤職員 H17)・福田匡朗(非常勤職員 H17・18)・戸田英祐(非常勤職員 H18)・来原 愛(非常勤職員 H18・19)・牛島晋二(非常勤職員 H18)・中尾健照(非常勤職員 H19・20)

玉名の平城跡

発掘調査(平成15年度2003)

調査責任者

成瀬烈大(文化課長)

調査総括

島津義昭(教育審議員兼課長補佐)・西住欣一郎(文化財調査第2係長)

調査事務局

吉田 恵(課長補佐)・欄杭正義(主幹兼総務係長)・天野寿久(主任主事)・杉村輝彦(主事)

調査担当

水野哲郎(参事)・米村俊治(非常勤職員)・松野直子(非常勤職員)

整理・報告書作成(平成22年度～平成25年度)

整理責任者

小田信也(文化課長 H22～25)

整理総括

木崎康弘(課長補佐 H22)・西住欣一郎(文

化財調査第2係長 H22・23 課長補佐 H24・25)・岡本真也(文化財調査第2係長兼主幹 H24・25)

整理事務局

宗村士郎(教育審議員兼課長補佐 H22)・元嶋 茂(高校教育課課長補佐兼総務係長 H22)・川上勝美(課長補佐 H23・24)・水元敬浩(高校教育課主幹兼総務係長 H23)・中津幸三(課長補佐・総務・助成担当 H24)・馬場一也(課長補佐 H25)・廣石啓哉(主幹兼総務・文化係長 H25)・山田京子(参事 H22・23)・稲本尚子(参事 H24)・有馬綾子(参事 H25)・松島英樹(主任主事 H22)・天草英子(主任主事 H24・25)

整理担当

山下義満(参事 H22～25)・坂本千恵(非常勤職員 H22～25)・丸吉ゆかり(非常勤職員 H22・23)・春川香子(非常勤職員 H24・25)・出家麻里(非常勤職員 H25)

専門調査員

甲元真之(熊本大学名誉教授)
山崎純男(福岡市教育委員会文化財部長)
高倉洋彰(西南学院大学教授)
西谷 正(九州大学名誉教授)
大坪志子(熊本大学助教)

調査指導・助言及び協力者(調査当時)

玉名市教育委員会 福岡県埋蔵文化財センター 広瀬雅信・川瀬貴子(大阪埋蔵文化財センター)・野田拓治(熊本県文化財資料室長)・岡本真也・坂田和弘・木村元治・廣田静学・坂井田端志郎・木村龍生・坂口圭太郎(熊本県文化課) 池田朋生(熊本県立装飾古墳館) 西田道世・末永 崇・兵谷有利・荒木隆宏・竹田宏司(玉名市教育委員会) 河合幸行(鳥取県埋蔵文化財センター) 高木康博(熊本県立図書館) 宮緑育夫(森林総合研究所)

第二章 遺跡の環境

両迫間日渡遺跡は、菊池川下流の右岸に位置する遺跡で山鹿地区から熊本県玉名市両迫間の字日渡・龍王田・御琴・阿弥陀田、上徳等に広がる遺跡群で東西約300m、南北約600mの範囲に広がる遺跡であるが、南側に柳町遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代及び古代にかけての遺跡であることが判明している。また両迫間日渡遺跡や柳町遺跡を包むように古代からの生産遺跡（水田跡）として玉名平野条里跡が広がっていると推定されている。

九州新幹線建設工事に伴い約400m南東の古閑前地区で、弥生時代後期の堅穴建物15軒、古墳時代の堅穴建物13軒やそれらに伴うであろう土坑が出土している。また、総柱の建物群も想定され、古墳時代から古代にかけて集落が存在していることが判明している。地形をみると当遺跡は菊池川右岸の自然堤防と西側から伸びる丘陵に挟まれた中央部分にあたり、いわゆる低湿地にあたり、古くから菊池川水系の氾濫していた箇所であり、水抜きに苦勞したことが伺え、現在も玉名山鹿線沿いに北東から南西に灌溉水路が流れており、生産区域として重要な役割を果たし生産区域を取り囲むように微高地には井戸等を持つ集落が点々と営まれたと考えられる。すなわち、この区域は弥生時代から古墳時代及び古代の集落及び水田跡と推定され、集落と生産遺跡をセットとして考えられる遺跡である。

九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う玉名市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査では標高約3.7mで弥生時代中期以前に遡る杭列が4群検出されており、方向等から大別して2列の杭列を検出している。杭列の木杭の放射性炭素年代推定（AMS法）などや本報告の成果も合わせると、弥生時代の後期以前のものと考えられる。注目されるのは、杭列内から刻目凸帯土器が出土しており、どこまで水田遺構が遡れるか注目される。

また、小田宮の前遺跡のボーリング調査の結果、菊池川の流路が東側に蛇行していることが推定される。そうすると小田宮の前遺跡も菊池川右岸の遺跡になり一連の遺跡と考えられる。

調査区の西側には熊本県及び玉名市教育委員会が調査を実施した柳町遺跡がある。平成22年度から平成23年度の玉名市の詳細分布調査により玉名市の遺跡地図が改訂され、柳町遺跡、布毛遺跡、田中遺跡等と遺跡の名称が変更されたが、遺跡の性格としては一連の遺跡と考えられ、「柳町遺跡群」との表記も可能かと考えられる。

柳町遺跡群に南側（布毛遺跡）では6SX049（自然流路）に6SX054堰状遺構（杭列・矢板列）や網代等が出土しており、流路からは縄文時代晩期から弥生中期の土器が出土しており、それらの時期の集落が周辺に広がっていたことを示唆するものである。今回報告する01-1～8区（柳町遺跡）の隣接地は土坑群が検出し、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて堰状遺構が機能していれば、玉名平野における水田開発が弥生時代早期にさかのぼる可能性を示唆する遺跡でもある。

西側調査区（県調査区『柳町遺跡Ⅰ』報告分）の北端では弥生時代終末から古墳時代前期の堅穴建物（7基）や井戸（5基）、土坑8基、さらに南東側には弥生時代終末期から古墳時代にかけての木器を多量に含む自然流路、また、南側100から200m（県調査『柳町遺跡Ⅱ』報告分；布毛遺跡）には弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落（堅穴建物11基、井戸6基、土坑17基、溝4条以上を検出し、溝（SX049-040）は底面を区画して平坦にした特異な構造を持つものである。幅7m以上で検出できた所もあり、集落を囲む溝としての機能があると考えられる。その他この溝には他木製品も出土していることから貯木場や

水生生物の糞い場や掘削単位の構造等様々な解釈がなされているものである。いずれの用途にも使われていた可能性があるものである。

01-1～3区の多くの遺構は柳町の様相3～5を中心とする時期の遺構が検出されていると考えられる。

小田宮の前遺跡では、古墳時代中期と推定される水辺の祭祀と推定できる遺物群が出土している。鏡を模造した土製品や滑石製の有孔円盤や剣形等が出土し、流路等からは古墳時代前期にさかのぼる遺物も出土している。

また、縄文時代後・晩期では野蒜が炭化して土器に付着している状況が観察された。さらに7世紀代の竪穴住居や中世の掘立柱建物群が検出されている。01-7区でも土坑が検出され、周辺に7世紀代の遺構群が広がっていたと考えられる。

奈良時代では、柳町遺跡群西側調査区（柳町遺跡）には敷粗雑技法を用いた互層積みの幅約20mの土塁状遺構や杭列が、南側調査区布遺跡（100～200m南西）には4間×2間の構造のものを主とする掘立柱建物で構成される集落や井戸6基等が出土しておりまた溝や灌漑施設等の遺構が出土している。

布毛遺跡では中世にも掘立柱建物などからなる集落、溝や灌漑のための遺構が出土している。また近世初期にも灌漑の機能を持つ大溝で囲まれた集落を検出している。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査区の位置（第3図参照）

一般国道208号玉名バイパスに隣接する（交差する）旧県道玉名橋線（改良後県道玉名山鹿線）部分である。一般国道玉名バイパスへアクセス部分であり、柳町遺跡に隣接する調査区である。調査区は現道の県道玉名橋線を挟んで北西部分が01-1・2・3・4・7区、南東部分が01-5・6・8区である。玉名平野の幹線水路でも分断されている。

国道208号玉名バイパス交差地点から北西側位置し、これから県道玉名山鹿線が玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡・玉名条里平野と存在し（02～08）、さらに北西の玉件名大橋線左岸が玉名の平城である。05-1区北東に隣接するのが九州新幹線に伴う両迫間日渡遺跡1区（06-Ⅱ・平成18年度調査）で、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が見つかり、古墳時代の塩を作った土器等の出土により注目された玉名市の玉名平野条里跡（古閑前地区 平成19年度調査）から西へ500mほど離れた地点である。

第2節 調査の概要

今回は、主に弥生時代終末から古墳時代後半にかけての水田跡を検出した。

弥生時代の水田跡についてはこの遺跡では県道玉名山鹿線改良工事（県文化課 平成17年度調査）や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う調査（平成19年度調査；玉名市文化財調査報告第19集2009）で見つかっておりその広がり及び時代ごとの区画のあり方を調べ、玉名平野の開発の歴史を解明することが求められていた。

今回の調査では熊本日日新聞で、「弥生時代の水田跡」（平成17年11月7日教育長定例記者会見）にて

発表された。また根拠になった水田に伴う大畦畔の続きを検出している（両迫間日渡遺跡1 2012）。畦畔の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期であろうと現在のところ考えている。古墳時代初頭まで大畦畔に伴う区画は機能し、古墳時代後期には、西側の安定した区域を中心に水田は立地していると考えられる。

区画については、弥生時代終末から古墳時代初頭については、小区画水田で5～10m前後の区画と推定でき、明確な水路や水口や排水口を検出できなかったが、敷粗雑技法を用いて畦畔の補強している様子や畦畔内に直交して杭列が並ぶ等の様子が観察できたことは意義深い。

ただ、玉名市教育委員会が杭列で畦畔を推定したように畦やそれに伴う溝が検出するのは困難であった。畦畔自体は上層で水田の区画が変わると削平されており、下層の畦畔に影響された擬似畦畔等の認定など難しい面が多かった。さらに湧水地帯のため、十分に水が切れずに土層の観察は困難を伴った。

玉名市教育委員会調査「両迫間日渡遺跡」（平成17・18・19年度調査）1区の標高3.7mで弥生時代中期以前の杭列を検出している。下層にも水田面が存在した可能性が高いと推定できる。また、水田面の広がりも本調査区の北西に、後に南東にも広がっていることは確認できた。古墳時代中頃の祭祀遺構（ミニチュア土器や鏡や剣等の石製模造品の出土）が玉名市教育委員会の調査で検出されているが、その時期に対応できる水田面は明確にできなかったが、一方、丘陵上に位置する古墳時代の水田面は検出できた。古墳時代の玉名平野の開発の一端を解明できた意義は多い。

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財調査の報告や周辺は、今後、九州新幹線の新玉名駅に伴う開発が進む可能性も高い。開発事業とともに玉名平野の開発を支えてきた地域であるため、周辺の埋蔵文化財の分布を再考・検討し、町づくりに活かして欲しいと感じている。

第3節 基本土層

県道玉名山鹿線を挟んで調査を実施しており土層が分断されており、遺構のありかたも異なる事からそれぞれの土層を記載しておきたい。

1 (01-1・2・3・4・7区)の基本土層

基本的には中央が高く、西側及び東側が低くなっている地形である。

I a層は表土であり土質は灰色砂質土で現在の耕作土である。厚さは10～15cmのである。I b層は淡灰色粘質土である。床土と推定でき、その厚さは20～25cmである。II a層は黄灰褐色粘質土、厚さは30～40cmである。5区ではこの層で中世の井戸56-SEを検出している。II b層は淡灰色粘土で厚さは約20cmで、古代の杯が出土している。III a層は灰褐色粘質土混じりの茶褐色粘質土、厚さ約20cmで、この層から44-SKを検出している。III b層は黄褐色粘質土混茶褐色粘質土、III c層は灰褐色粘質土混茶褐色粘質土である。III a層からIII c層までは弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層。

IV a層は黄褐色粘質土で約10cmの厚さである。（縄文時代後晩期から弥生時代後期までの遺物包含層）IV b層は黄灰色粘質土（これが縄文時代後晩期の遺構検出面）、V層は青灰色粘質土である。

2 (5・6・8区)

2a層は（淡灰）黄褐色粘質土、5区の井戸はこの面の途中で検出しており、中世面であろう。2b層は灰粘質土から茶褐色粘質土系の土である。古代が存在するとすればこの層であろう。3a層は灰褐色粘質土か

ら黄褐色粘質土、部分的には3層に分層できそうな箇所がある。3b層は茶褐色から灰黒色粘質土系の土の層で堅穴建物らしきもの(SX-803・804等)を数軒検でできたが、1～3区のように明確なものでなく検討が必要である。4a層は黄褐色粘質土、4b層は茶褐色から黄緑色粘質土で、4b層でも堅穴建物らしきもの(SX-828～SX-831)を検出している。5層は灰色粘質土、6層は青灰色粘質土、7層も暗灰色粘質土混青灰色粘質土で一部締まる土で下層に有機物を含む土質である。8層は淡灰色粗砂、9層は淡灰色粘土、10層は灰色粗砂等とつづく。各層分層できる箇所があるが、基本的にはこのような堆積である。

[01-1区の基本土層のまとめ]

1・2・3・4・7区と5・6・8区の調査区の土層をそれぞれ記載したのは、この地域の土層の堆積が黄色系の土と茶褐色系の土の交互の堆積を示し、層の堆積の認定が難しいことにある。谷地形が入り土層の堆積の比定が難しく、微地形が入り込んで質や色での認定は危険であるためである。さらに調査時は1層分ずれている可能性があると考えていたためである。

まとめるにあたり、ほぼ同一の基本土層と考えて良いと考えるに到ったが、周辺の調査により細かい対応関係を検証する必要があると思われる。

なお、明確に弥生時代後期から古墳時代前期の水田面を検出した調査区の基本土層を参考に記載した。

標高的には古墳時代前期の集落の立地する標高とあまり変わらないが、土層の違いは今回の調査区は微高地を含む柳町遺跡から続く集落と耕作地にあたり、水田面を検出した所は周辺からすると緩やかな谷地形であることである。

九州新幹線両迫間日渡遺跡06-II区のⅤ層下層からⅤb層と今回の3a～4層が時期的に対応していると考えている。

3 両迫間日渡遺跡1(2005年)の基本土層と両迫間日渡遺跡05-I-1区の層位(【】にて表記)

I層は現代耕作土でオリブ黒色(5YR3/2)、II a層は灰オリブ(5Y4/1)細砂混シルト。若干斑鉄、

II b層灰色シルト(わずかに細砂(7.5Y2/1)最上部にマンガ班、全体的に斑鉄著しい。しまり良。

III a【3a】層灰色シルト(5Y4/1)細砂及び粗砂混上下の層に比較して暗色で砂質が強い。

III b【3b】層7.5Y4/1灰色細砂混シルト。粗砂が若干混じる。若干根根状鉄あり。

IV層との境は不明瞭なところがある。また、細砂が埋土となる踏み込みが点々と見られる。

IV【4】層灰色細砂混シルト(7.5Y5/1) V a【5a】層暗灰黄色シルト。全体に斑鉄が著しい。上層よりシルト質が強い。

V b【5a】層オリブ黒色細砂混シルト。しまり良好。

I層は現代耕作土、II層は現代耕作土床土。III層は近世から近代の耕作土及び床土近世後期以降の陶磁器を含む。IV層は近世の床土。木の葉痕や青銅製の煙管の吸い口等も出土している。V層は中世の耕作面及び床土と推定できる。瓦器も出土。

VI a【6a】層(淡)灰色シルト(10YR6/1)淡褐色細砂を含む。やや青みあり。

VI b【6b】層灰色シルト(10YR5/1)。やや砂質が強い。

VI c【6c】層灰色粘質土で砂粒を多く含む。マンガ、鉄分が多い。

この層までは一部県道玉名山麓線道路改良工事に伴う両迫間日渡遺跡2005年I区の調査結果や出土遺物を参照している。

VI c層は古代の耕作面の可能性がある。

VII a【7a】層灰色粘質土（砂質土を顕著に含む）で、古墳時代後期の耕作面と考えられる。

VII b【7b】層は灰色粘土でシルト質だが粘性強い。（砂質土を含む）。鉄分、マンガンを含む。古墳時代後の床土もしくは耕作土と推定できる。

VII【2a】層灰色粘土（10YR4/1）砂質を部分的に含む。ややシルト質。鉄分、マンガン多い。

VII【8】層下層オリーブ黒色シルト質土。ところどころに鉄分を含む。しまりが無い。粘性が強いシルト。古墳時代初頭（弥生終末カ）の耕作面と推定できる。

VII b層オリーブ黒色（5Y3/2）シルト質土。鉄分をところどころに含む。

VII b～IX層に伴う小畦畔より南側がやや砂混じりの土を含み、上下2層に分層できる。上層はところどころに鉄分を含み、しまりが無い粘性が強いシルト層。弥生時代終末の水田の耕作面と推定できる。下層は上層に比べ粘性が強く、鉄分がほとんど混じらない。細砂が斑に混じる。調査区の北側に行くほど層が安定し、調査区南側から2つ目の調査区の土層観察用アゼ（ベルト）付近B12付近で分層はできなくなる。洪水堆積にともなう水田区画を表す層と考えられる。敷き組だ技法に伴う畦畔の形成もこの土を含む土で行われたと推定できる。

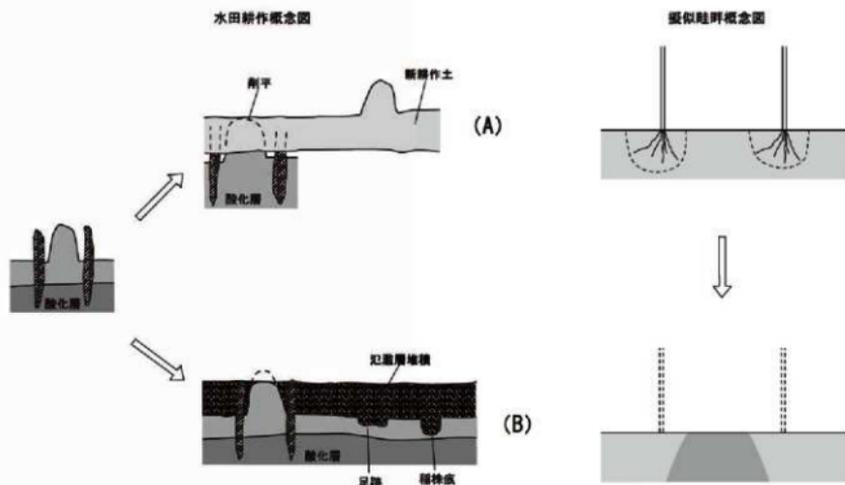
IX【9】層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。ややシルト質。上層部はシルト質が強く、下層部ほど粘性が高い。上層では砂質が強いことから耕作面の可能性が高い。小畦畔もこの時期から存在していた可能性が高い。IX層上層は、部分的な調査にとどまったため、時期や区画に不明な点も多く、夏の湧水期に重なったため十分な分層ができなかったことも一因である。

X層はオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）。IX層より粘性が強く、やや暗い色調である。両道間日波遺跡 06-I区は11a層から縄文中期の土坑が出土している。X層より下位層にあたり本遺跡の各調査区はこの層で調査を終えている。ただし05-I-1区は保存の為、【9層】の検出を行い埋め戻した。X層の標高は標高4.3mくらいと考えられ、玉名市教育委員会で平成19年に調査した調査I弥生中期以前の杭列が3.7mの標高で見つかっている。70cm以上のことから、弥生後期の水田面が存在した可能性がある。

4 本遺跡における水田形成 概略

水田の土層は田起こし等の耕作で攪拌が見られる。いわゆる耕作地である。本遺跡では川氾濫による川砂が堆積したのであろう、川砂が斑状に顕著に入り込んでいた。耕作土下位は作土中に含まれる鉄分やマンガンが還元し下層に移動するため酸化する。この酸化層が水田層のキーワードであったし、耕作土と酸化層がセットで存在すると水田としての可能性が高く調査の中心とした。

上記した図は半環田の性格を持つ本遺跡の水田形成の概念図で、畝を保護する杭を打ち込む傾向が見られ、自然土積の場合、上層が耕作地となり、畝及びそれに伴う杭まで耕作により削平されてしまう。従って本遺跡から多くの杭が検出されたが、杭検出面より深度を重視した。（A）また氾濫により土積の場合、従来の水田面は放棄し、畝はその状態で耕作に入るため氾濫層にバックされた状態で検出がされ、状況によっては足跡までの検出ができた。（B）

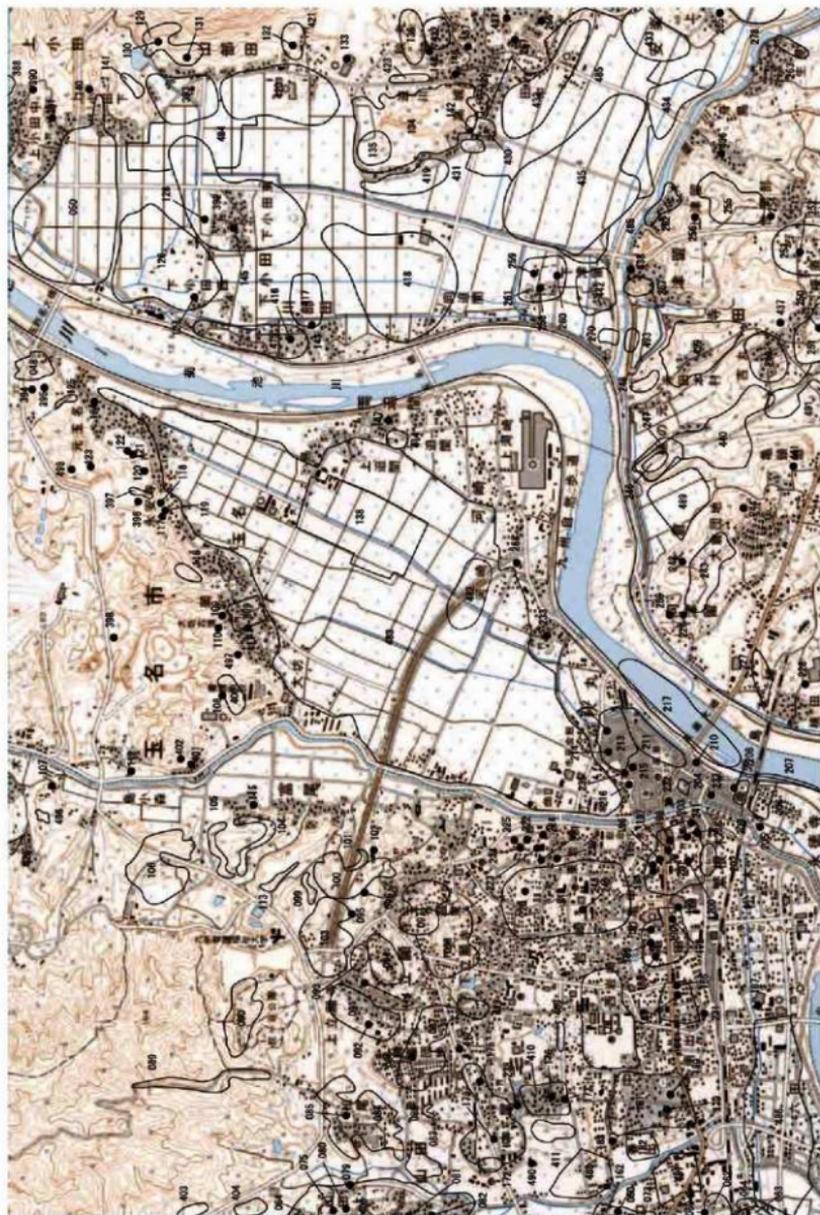


第1図 水田概念図及び擬似畦畔概念図

擬似畦畔

「稲の根が地中深く伸びるに従い、それを伝って地下水が下に浸透することや、地下水位の変動によって、その痕跡にマンガン等が沈着して褐色に変化する。しかし地上の畦畔の下方へは根が入りにくいから変色することなく、その部分はあたかも畦のように目立つというものである。」(水田の考古学)

このような土層が本遺跡でも見られ(06-I区 東壁断面 第225・229・230図など)、この遺跡に慣れない当初は礎分と鑑儀した。



第2図 遺跡範囲図1 (熊本県遺跡地図) S=1/25000

基本表 (43) 五名寺 (206)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	類別
038	上原山	石冢 上原山	古墳	古墳跡
048	五名の平城跡	五名 平城	中世	城
058	上小田宮の礎	上小田 宮の礎など	古墳	古墳跡
064	山崎山口	山田 山口	古墳～平安	古墳跡
075	万寿寺跡	山田 上馬場	中世	寺社
079	地蔵の前古瓦葺跡	山田 地蔵前	中世	石造物
090	西村坊跡	山田 上馬場	中世	寺社
091	大力坊跡	山田 下馬場	中世	寺社
092	宝寿坊跡	山田 下馬場	中世	寺社
093	山崎中島	山田 中島	古墳	古墳跡
094	山崎北尾平	山田 平	古墳	古墳跡
095	乙姫塚	山田 北尾	中世	墳墓
096	藤基古墳	山田 藤基	古墳	古墳
097	藤基	山田 藤基	中世	古墳跡
098	高塚	山田 高塚	古墳～古代	古墳跡
099	蛇ヶ谷御供所	立籠寺 蛇ヶ谷	古代～中世	寺社
099	蛇ヶ谷古墳群	立籠寺 蛇ヶ谷	古墳	古墳
091	五名御家跡	立籠寺 石丸	古代	古墳跡
092	石丸塚	立籠寺 石丸	古代	墳墓
093	松尾塚	立籠寺 松尾原ほか	古墳	墳墓
094	立籠寺跡	立籠寺 塚の尾	古代	寺社
095	大塚古墳	立籠寺 大塚	古墳	古墳
096	小塚古墳	立籠寺 大塚	古墳	古墳
097	五名御家跡	立籠寺 塚の段	古代	古墳跡
098	下立籠寺	立籠寺 塚の段	縄文～中世	古墳
099	草尾いびり塚古墳	草尾 塚	古墳	古墳
100	大塚・惣塚	立籠寺 大塚など	古墳	古墳
101	冷水塚六跡	草尾 冷水	古墳	古墳
102	冷水塚古墳	草尾 冷水	古墳	古墳
103	松尾	立籠寺 松尾など	古墳	古墳跡
104	草尾塚横穴六跡	草尾 塚	古墳	古墳
105	草尾塚横穴六跡	草尾 辻・浦谷	古墳	古墳
106	新原	草尾 新原	古墳	古墳跡
107	石丸の十字ある塚	石丸 六塚	古墳	石造物
108	西原古墳群歩道地	五名 西原	古墳	古墳
109	大田古墳	五名 大田	古墳	古墳
110	大田寺跡	五名 東原	中世	寺社
111	大田五輪塚群	五名 大田	中世	石造物
112	小塚六塚跡	石冢 小塚	中世	石造物
113	草尾中尾塚六跡	草尾 中尾	古墳	古墳
114	上立籠寺石天守	立籠寺 塚の尾	中世	寺社
115	草尾塚横穴跡	草尾 塚	中世	石造物
116	岡部式石御所	岡部 上原	古墳	墳墓
117	永安寺古墳	五名 (遺跡永安寺)	古墳	古墳
118	永安寺古墳	五名 (遺跡永安寺)	古墳	古墳
119	永安寺跡、永安寺古瓦葺跡	五名 (遺跡永安寺)	中世	寺社
120	伝玉塚群	五名 駒込	古墳	石造物
121	馬出古墳 (1～2号)	五名 馬出	古墳	古墳
122	小塚古墳	五名 小塚	古墳	古墳
123	輪下塚群古墳	五名 輪下	古墳	古墳
124	大木・乳鉢の横穴群	五名 横穴	中世	石造物
125	五名赤塚六跡	五名 東原	古墳	古墳
126	上小田古墳群	上小田 古墳群	縄文～中世	古墳跡
127	下小田丸塚	下小田 陣の礎	古墳	古墳
128	下小田寺丸塚	下小田 寺	中世	墳墓
129	小藤宮跡	山田町 藤城	古代	古墳跡
130	長壽寺跡	山田町 瀬戸原	中世	寺社
131	諏訪宮跡	山田町 四所	中世	寺社
132	小藤宮七石壇門跡	山田町 藤宮	近世	墓
133	山下古墳、山下古墳群	山田町 山下	古墳	古墳
134	高塚	下 高塚	古墳	古墳跡
135	下村塚群	下 高塚	中世	城
136	秋丸	下 秋丸	古墳	古墳跡
137	松村・水島兄弟墓	下 井尻	近世	墓

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	類別
138	両道間日置	両道間 日置	古墳	古墳跡
139	遺丸古墳群	上小田 下遺丸など	古墳	古墳跡
140	上小田下丸塚	上小田 宮の礎	古代	墳墓
141	上小田塚群	上小田下 遺丸など	中世	城
142	大宮院跡	下 和野	中世	寺社
143	金丸寺跡	川部田 東原	中世	寺社
144	海蔵寺跡	下 白丸	中世	寺社
145	養寿寺跡	下小田 養寿寺	中世	寺社
146	養門寺跡	下 田中	中世	寺社
147	養徳寺跡	両道間 上川端	中世	寺社
162	東原大門	高塚 東大門	古墳～中世	古墳跡
172	高岡塚跡・高岡古墳	山田 高岡	古墳～中世	古墳跡
172	高岡古墳	山田 高岡	古墳	古墳
174	高岡塚	山田 高岡	古墳	古墳跡
175	高岡いっちょろ塚群式石壇	山田 高岡	古墳	墳墓
176	高岡塚群出土地	山田 高岡	古墳	古墳
177	中庭尾塚古瓦葺跡	中庭 尾塚	中世	古墳跡
178	五名高塚+尾	中 高塚	古墳	古墳
179	田島地下式穴六	中 田島	古墳	古墳跡
180	新田丸塚	中 寺塚	中世	古墳跡
181	田島	中 田島	古墳	古墳跡
182	野田	中 野田	古墳	古墳跡
183	春日山伏塚	中 春日山	古墳～中世	古墳
184	内田	中 内田	古墳	古墳跡
185	内田地下式穴六	中 内田	古墳	古墳
186	内田塚群	中 内田	古墳	古墳跡
187	だいの島古墳	中 (遺跡だいの島)	古墳	古墳
189	肥後国出雲守御所跡	龜甲 上野・内田	中世	寺社
189	肥後国出雲守御所跡	龜甲 上野	中世	寺社
190	五名龜甲	龜甲	縄文～中世	古墳跡
191	上野丸塚	龜甲 上野	縄文～中世	古墳跡
192	内野寺跡	龜甲 東	中世	寺社
193	坂下高岡塚	高岡 坂下	近世	古墳跡
194	高岡塚群御所	高岡 坂下	中世	石造物
195	高岡塚土蔵	高岡 坂下の後	近世	塚
196	伝田山古墳	高岡 北	古墳	古墳
197	横穴地下式穴六跡 (4基)	高岡 高塚	古墳	古墳
199	高岡山寺塚群跡	高岡 高塚	中世	寺社
200	横穴寺古墳 (創4石群)	高岡 高塚	古墳	古墳
201	高岡寺古墳	高岡 高塚	古墳	古墳跡
202	高岡寺古墳	高岡 高塚	縄文	墳墓
203	高岡寺古墳式石壇 (高岡寺古墳)	高岡 高塚	古墳	墳墓
204	高岡寺古墳 (高岡寺群、石群)	高岡 下町	中世	古墳跡
205	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
206	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
207	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
208	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
209	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
210	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
211	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
212	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
213	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
214	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
215	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
216	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
217	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
218	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
219	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
220	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
221	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
222	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
223	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
224	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡
225	高岡寺古墳 (高岡寺群)	高岡 下町	中世	古墳跡

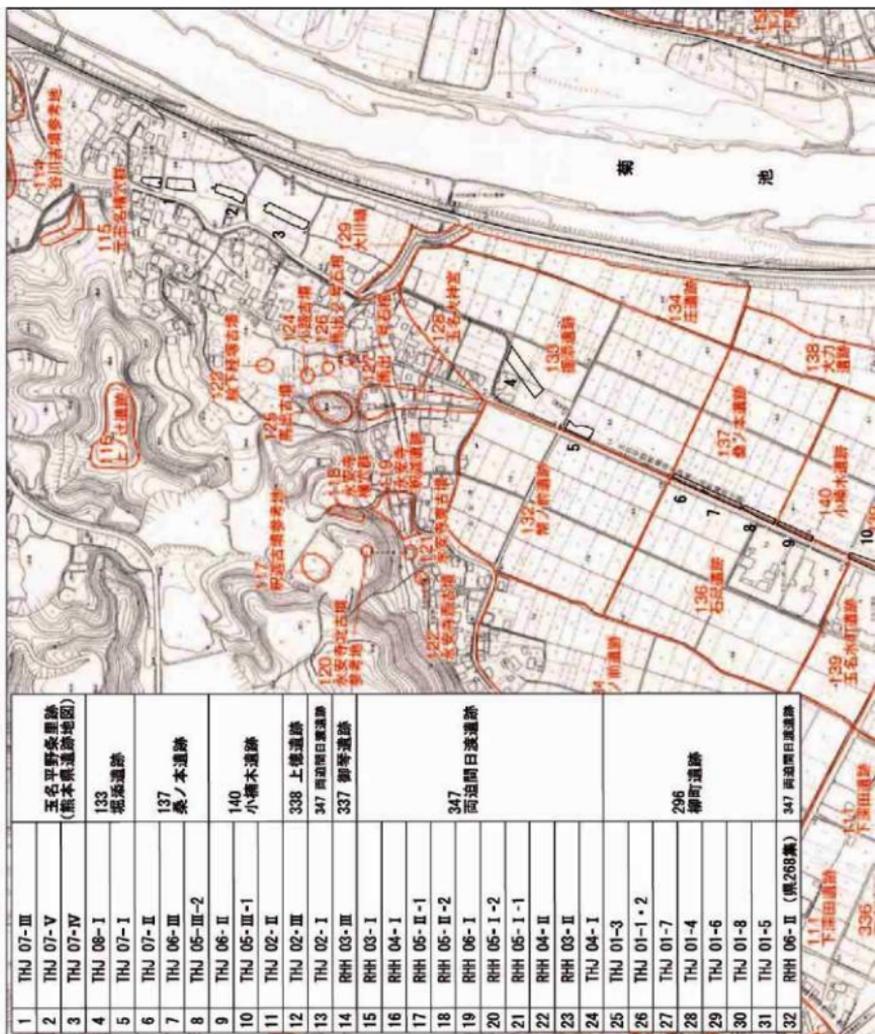
第1表 遺跡地名表1

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	類別
236	船形寺古墳	内海部 下	古墳	古墳
237	桃田貝塚	大倉 桃田原	縄文	貝塚
238	桃田古墳	大倉 桃田原	古墳	古墳
231	高倉勾陣(秋風塚)	中 寺加	近世	石造物
232	高倉勾陣(晴雨塚)	高瀬 横町	近世	石造物
233	金鉱山玉敷寺跡	川端 沼の上	中世	寺社
234	油江文石墓参道地	岩崎 池田	弥生	埋葬
235	高瀬宮家墓跡	高瀬 横町	近代	墓跡
236	阿波知加米跡立礎	野原本 高瀬	中世	基礎
227	長福寺跡	高瀬 八日町	中世	中世
228	知成跡跡	中瀬 高瀬	中世	寺社
229	白崎寺	岩崎 池田	縄文～中世	包蔵地
240	高瀬神社自噴室跡	岩崎 中沢原	近世	包蔵地
241	玉名御部河跡	野原本 高瀬	近世	包蔵地
242	飯塚古墳	内海部 飯塚	古墳	古墳
243	龜岡遺	大倉 龜岡遺	弥生～中世	包蔵地
244	水戸御太の墓	大倉 龜岡遺	近代	墓
246	城戸辻古墳群(1～5号)	寺田 城戸辻	古墳	古墳
247	城戸辻城跡	寺田 城戸辻	中世	城
248	寺田古墳群(1～4号)	寺田 宇上	古墳	古墳
249	吉丸	寺田 吉丸	古代・中世	包蔵地
250	ナカント製古墳	寺田 吉丸	古墳	古墳
251	吉丸遺	寺田 吉丸	縄文～中世	包蔵地
252	久保地下式墓穴	寺田 久保	古墳	古墳
253	寺田久保	寺田 久保	縄文～中世	包蔵地
254	世間御塚古墳	寺田 世間部	古墳	古墳
256	飯田	津留 飯田	弥生～中世	包蔵地
256	上津留古墳	津留 小部田	古墳	古墳
257	花野山古墳群	津留 堂園	中世	中世
258	安楽寺跡	津留 太坂丸	中世	寺社
259	安楽寺石塔跡	津留 太坂丸	中世	包蔵地
260	菅原神社の六地藏	津留 白崎子	中世	石造物
261	安楽寺	津留	中世	寺社
262	上津留	津留 部田	縄文～中世	包蔵地
263	朝日古墳	安楽寺 池見	中世	中世
265	朝日古墳	安楽寺 池見	古墳	古墳
266	朝日寺跡	下 平野	中世	中世
267	賢長寺跡	下 桑迫	中世	中世
268	金鉱山玉敷寺跡	川端 飯尾	中世	寺社
269	金鉱山山形寺跡	内海部 下	中世	寺社
270	津留中林	津留 中林	縄文～中世	包蔵地
278	中神丸	安楽寺 中神丸	古代・中世	包蔵地
288	名称不明			
296	名称不明			
291	名称不明			
292	名称不明			
293	名称不明			
294	名称不明			
295	名称不明			
296	名称不明			
297	名称不明			
298	名称不明			
299	大坊	王名 大坊		
400	名称不明			
401	名称不明			
402	名称不明			
403	名称不明			
404	名称不明			
408	名称不明			
409	名称不明			
410	名称不明			
411	名称不明			
412	高瀬屋了	山田 高瀬原	縄文	包蔵地
413	名称不明			

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	類別
414	河邊院西廡敷	河邊院西廡敷		
415	川原田	川原田 下小田		
416	名称不明			
417	名称不明			
418	名称不明			
419	名称不明			
420	新宮吉前	山形田	弥生・古代	包蔵地
421	名称不明			
422	名称不明			
423	名称不明			
427	名称不明			
429	名称不明			
430	名称不明			
431	名称不明			
432	名称不明			
433	名称不明			
434	稲沢	安楽寺 稲沢	古代～中世	包蔵地
435	飯田下	津留 飯田下	古代～近世	包蔵地
436	名称不明			
437	名称不明			
438	名称不明			
439	名称不明			
440	寺田山口	寺田 山口	縄文～近世	包蔵地
441	名称不明			
442	名称不明			
443	神町	玉名市阿崎御町	縄文～平安	集落
453	玉名平野赤塚跡	玉名、道開ほか	古代・中世	生産
454	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
455	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
456	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
457	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
458	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
459	玉名平野赤塚跡		古代・中世	生産
460	平嶋遺跡			
491	吉丸前	寺田 吉丸前	縄文～中世	包蔵地
493	神野	寺田 神野		
495	御法	安楽寺 船島ほか	弥生～古代	
496	小瀬	石真 小瀬	中世	
497	西廡敷	玉名 西廡敷		
498	上ノ辻	玉名 上ノ辻		

熊本県(43) 防府町(361)				
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	類別
060	北尾崎	野口 北尾崎	弥生	包蔵地
062	新船塚	野口 貞船	弥生	包蔵地
063	尾崎	野口 尾崎	弥生後晩期	包蔵地
064	尾崎貝塚	野口 尾崎	縄文	貝塚
069	大塚五輪塚	野口 大塚	中世	石造物
073	伊塚	野口 北尾崎	中世	跡跡

第2表 遺跡地名表2

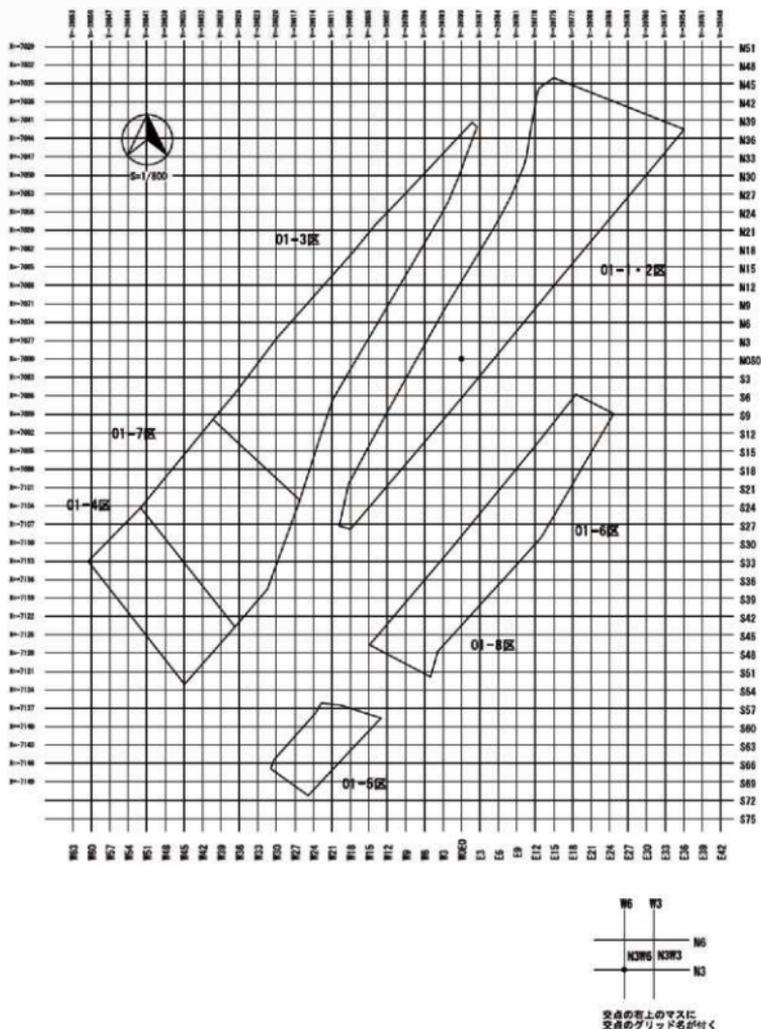


第3図 遺跡範囲図2(五名市遺跡地図)

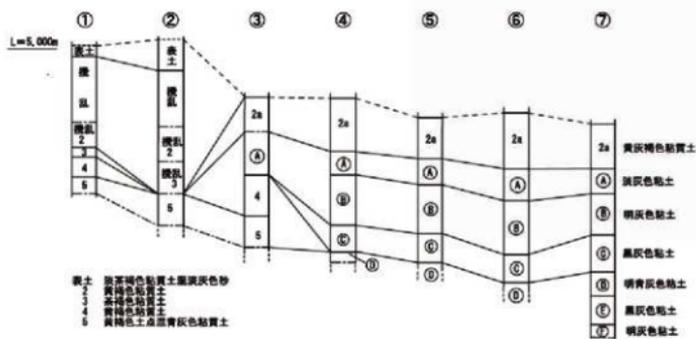
1	THJ 07-III	五名平野茶園跡 (熊本県遺跡地図)
2	THJ 07-V	
3	THJ 07-IV	
4	THJ 08-I	133 堀築遺跡
5	THJ 07-I	
6	THJ 07-II	137 桑ノ本遺跡
8	THJ 05-III-2	
9	THJ 06-II	
10	THJ 05-III-1	140 小橋木遺跡
11	THJ 02-II	
12	THJ 02-III	338 上徳遺跡
13	THJ 02-I	347 高畑間日置遺跡
14	RHH 03-III	337 御等遺跡
15	RHH 03-I	
16	RHH 04-I	
17	RHH 05-II-1	
18	RHH 05-II-2	347 高畑間日置遺跡
19	RHH 06-I	
20	RHH 05-I-2	
21	RHH 05-I-1	
22	RHH 04-II	
23	RHH 03-II	
24	THJ 04-I	
25	THJ 01-3	
26	THJ 01-1・2	
27	THJ 01-7	
28	THJ 01-4	296 横町遺跡
29	THJ 01-6	
30	THJ 01-8	
31	THJ 01-5	
32	RHH 06-II (標269.5)	347 高畑間日置遺跡

年度 調査区	平成12 (2000)	平成13 (2001)	平成14 (2002)	平成15 (2003)	平成16 (2004)	平成17 (2005)	平成18 (2006)	平成19 (2007)	平成20 (2008)
07-Ⅲ								■■■■	
07-V								■■■■	
07-Ⅳ								■■■■	
08-I									■■■■
07-I								■■■■	
07-II								■■■■	
06-Ⅲ (07-II)							■■■■	■■■■	
05-Ⅲ-2						■■■■			
06-II							■■■■		
05-Ⅲ-1						■■■■			
02-II			■■■■						
02-Ⅲ			■■■■						
02-I			■■■■						
03-Ⅲ				■■■■					
03-I				■■■■					
04-I					■■■■				
05-II-1						■■■■			
05-II-2						■■■■			
06-I							■■■■		
05-I-2						■■■■			
05-I-1						■■■■			
04-II					■■■■				
03-II				■■■■					
04-I					■■■■				
01-1	■■■■	■■■■							
01-2	■■■■	■■■■							
01-3	■■■■	■■■■							
01-4	■■■■	■■■■							
01-5	■■■■	■■■■							
01-6	■■■■	■■■■							
01-7	■■■■	■■■■							
01-8	■■■■	■■■■							
五名の平城跡				■■■■					

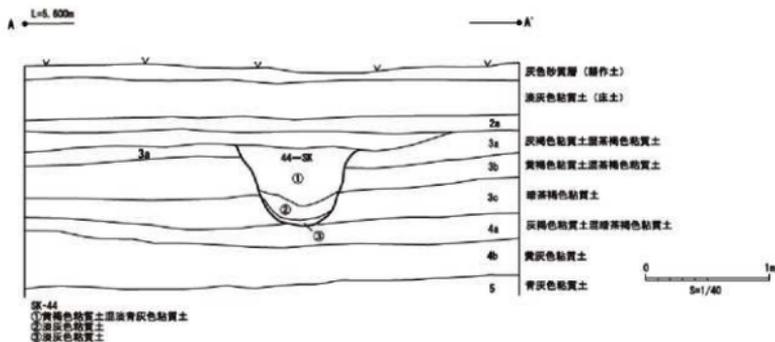
第3表 調査時期



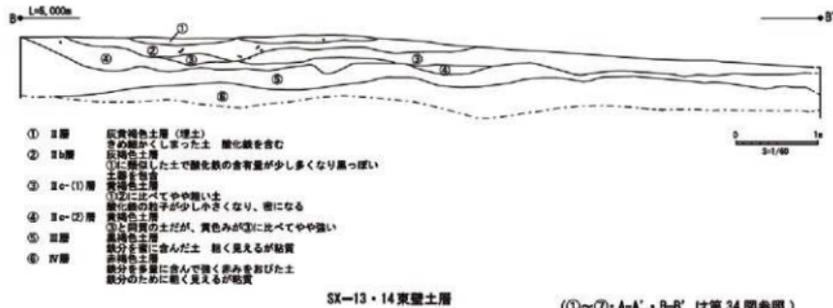
第4図 玉名平野条里跡 01-1～8区 グリッド図



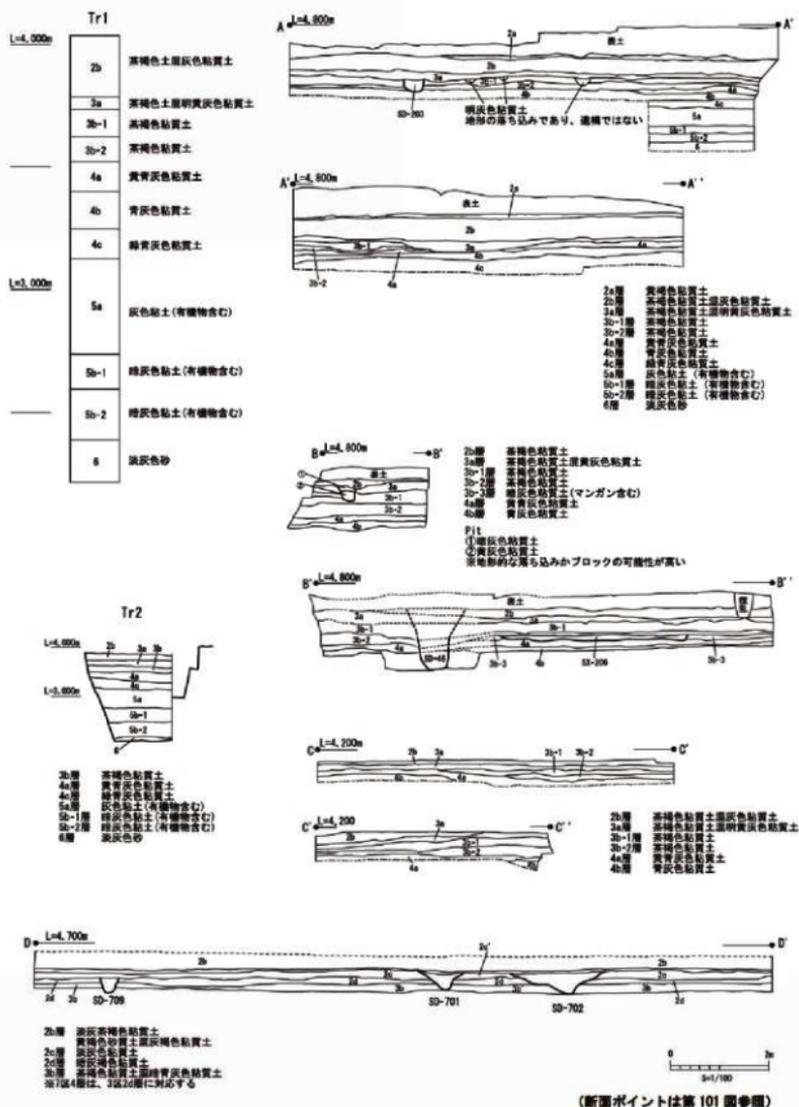
五名平野条里跡01-2区 西壁土層柱状図



五名平野条里跡01-1区 トレンチ東壁土層断面図

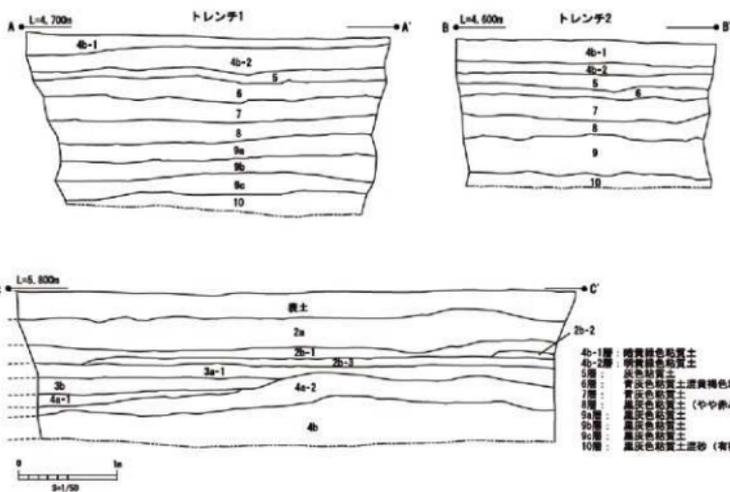
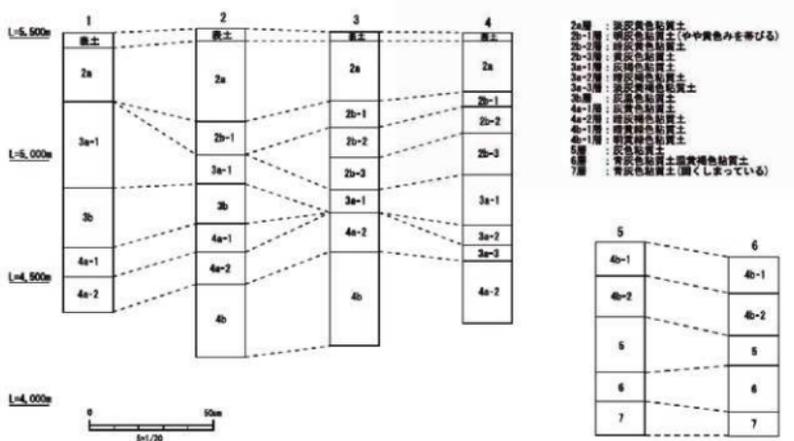


第5図 五名平野条里跡 01-2区 西壁土層柱状図
01-1区 トレンチ東壁土層断面図・SX-13・14 東壁土層断面図

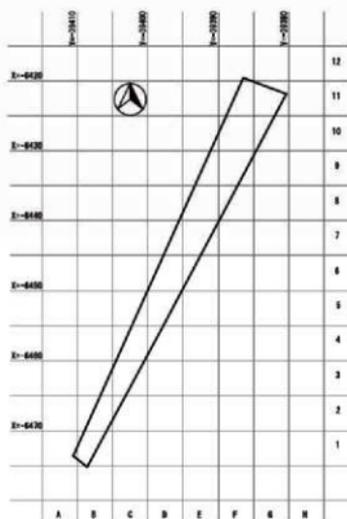


第6図 玉名平野条里跡 O1-4・7区 柱状図・土層断面図

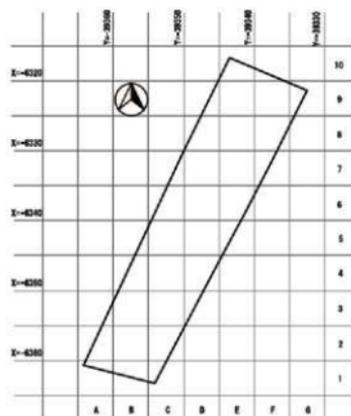
土層柱状図



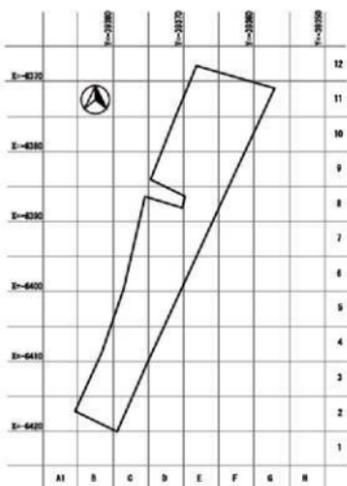
第7図 玉名平野条里跡 01-6区 土層柱状図・トレンチ1・2土層図



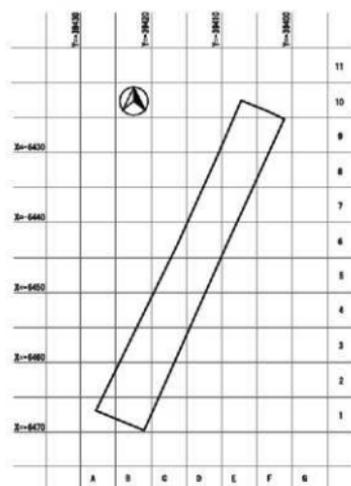
五名平野条遺跡 02-1区



五名平野条遺跡 02-II区

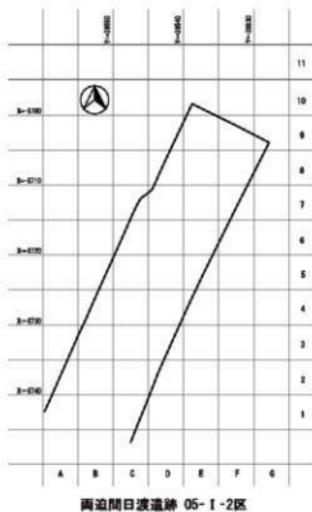
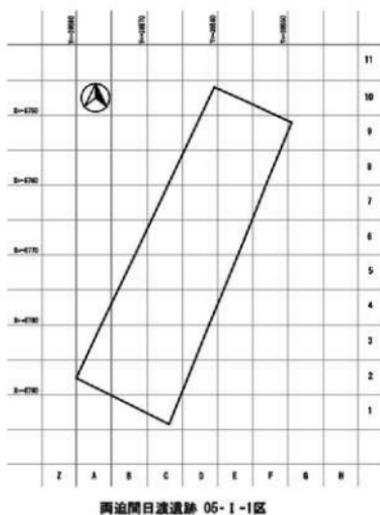
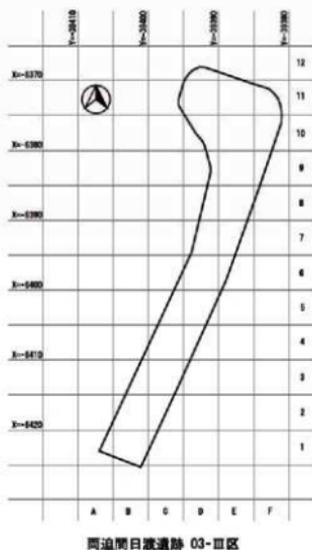
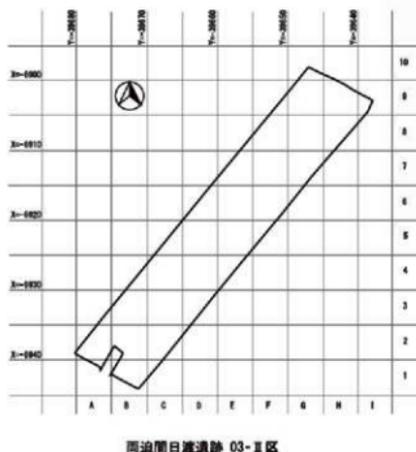


五名平野条遺跡 02-III区

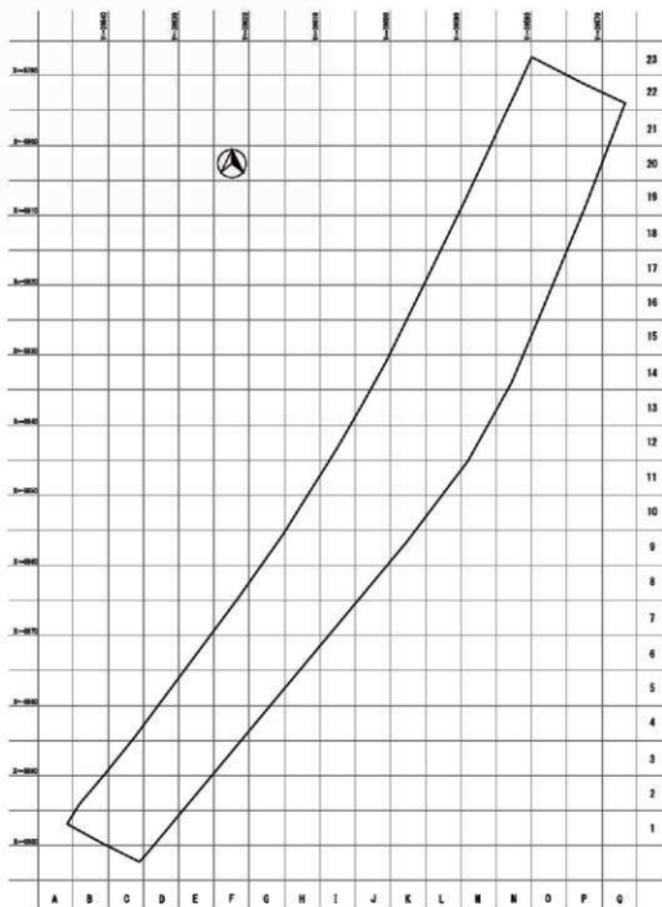


両泊間日波遺跡 03-1区

第8図 グリッド図1 (S=1/700)

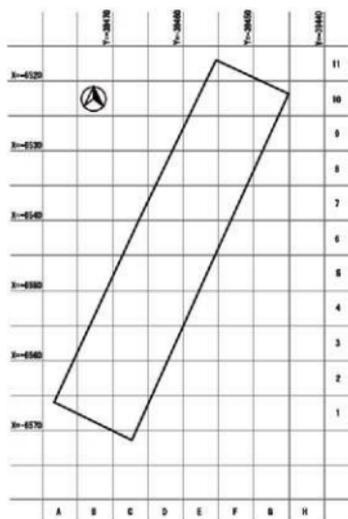


第9図 グリッド図2 (S=1/700)

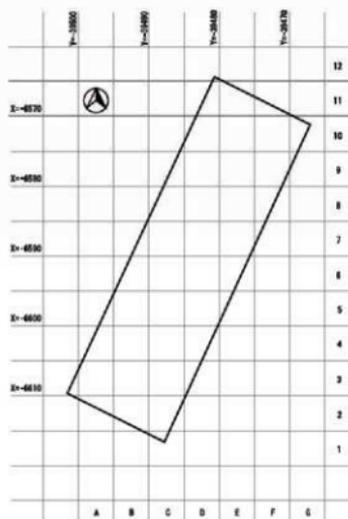


両池間日渡道跡 04-II区

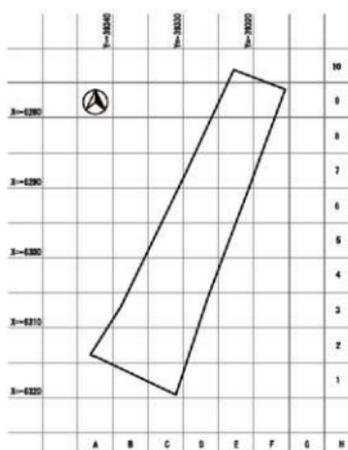
第10図 グリッド図3 (S=1/700)



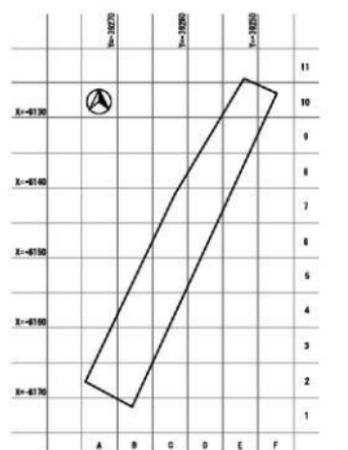
両辺間日渡遺跡 05-II-1区



両辺間日渡遺跡 05-II-2区

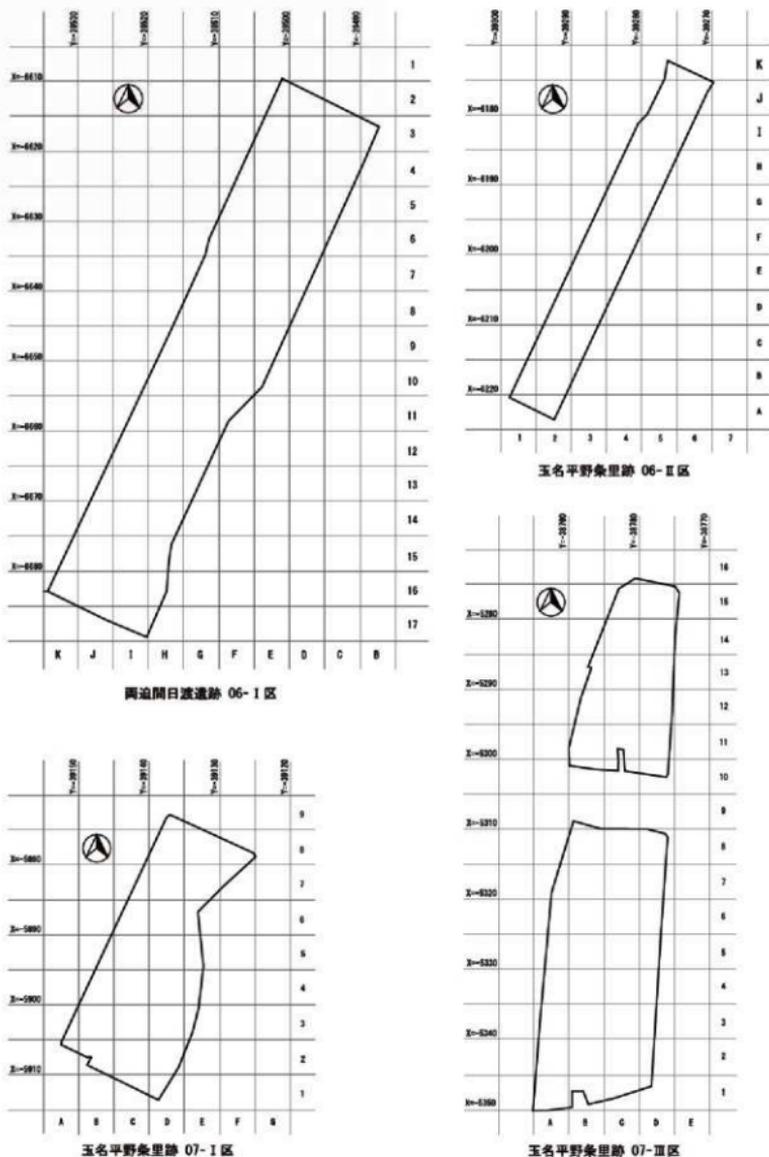


五名平野条里跡 05-III-1区

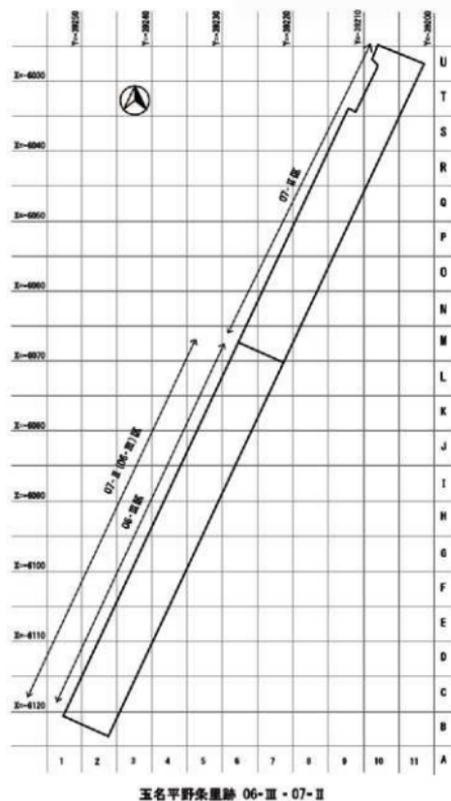


五名平野条里跡 05-III-2区

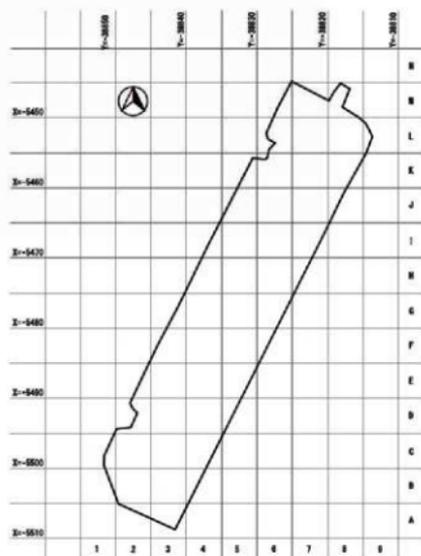
第 11 図 グリッド図 4 (S=1/700)



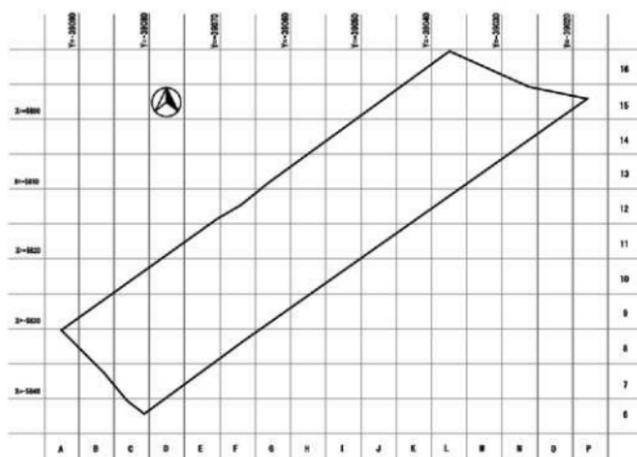
第12図 グリッド図5 (S=1/700)



第13図 グリッド図6 (S=1/700)

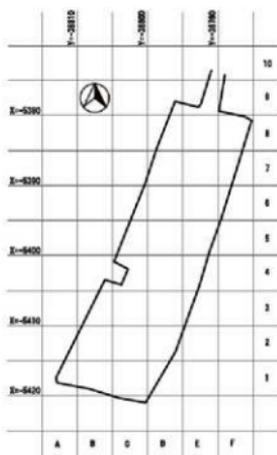


五名平野条里跡 07-IV区

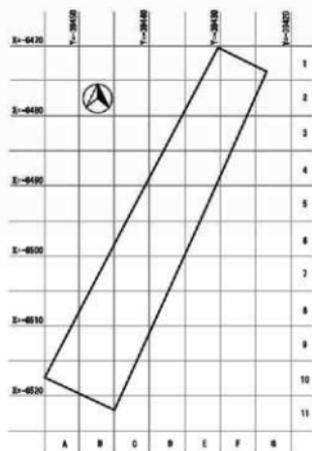


五名平野条里跡 08-I区

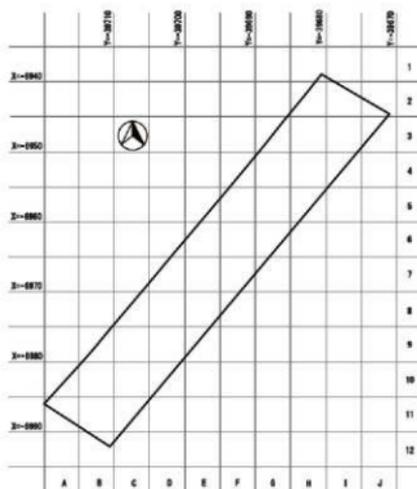
第14図 グリッド図7 (S=1/700)



五名平野衆里跡 07-V区



両道間日談遺跡 04-I区



五名平野衆里跡 04-I区

第15図 グリッド図8 (S=1/700)

104-1	1階 2階 3a階 中世 3b階 中世 4a階 4b階 5a階 5b階 6a階 古墳 6b階 古墳 7a階 7b階	R03-Ⅱ	1階 2階 3階 4階 5階 6階 7階	R04-Ⅱ	1階 2階 3階 4階 中世 5a 古墳 5b 古墳 5c 古墳 5d 古墳 5e 古墳 5f 古墳 6a 古墳 6b 古墳 6c 古墳 6d 古墳 6e 古墳 6f 古墳 7a 7b	R05-Ⅰ-1	1階 2a階 2b階 3a階 3b階 4階 5a階 中世 5b階 中世 6a階 中世 6b階 中世 6c階 中世 6d階 中世 6e階 中世 6f階 中世 7a階 7b階 8階 9階 10a階 10b階 10c階 10d階 11階	R05-Ⅰ-2	1階 2階 3階 4階 5階 6a階 中世 6b階 中世 6c階 中世 7a階 中世 7b階 中世 8階 9階 10a-1階 10a-2階 10b-1階 10b-2階 11階	R05-Ⅰ	1階 2階 3階 4a階 4b階 5階 6a階 中世 6b-1階 中世 6b-2階 中世 6c-1階 中世 6c-2階 中世 7a階 中世 7b階 古墳 8階 9階 10階	R05-Ⅱ-2	1階 2階 3階 4a階 4b階 中世 5階 5a階 中世 5b階 中世 6a階 古墳 6b階 古墳 7a階 古墳 7b階 古墳 8a階 8b階	R05-Ⅱ-1	1階 2a-2b階 古墳 3階 中世 4a階 古墳 4b階 古墳 5階 古墳 6a階 古墳 6b階 古墳 7a階 古墳 7b階 古墳 8階 9階 10階	R04-Ⅰ	1階 2階 古墳 3a-1階 中世 3a-2階 中世 3a-3階 中世 4a階 4b階 5a階 5b階 6a階 6b階 7a階 7b階	R03-Ⅰ	1階 現代 2階 近代古墳 3階 中世古墳 4階 古代 5a階 古代 5b階 古代 6a階 古代 6b階 古代 7a階 7b階	R03-Ⅱ	1階 2階 3階 4階 5階 6階 7階 8a階 8b階 9階 10階 11階
-------	--	-------	--	-------	---	---------	---	---------	---	-------	---	---------	---	---------	--	-------	---	-------	--	-------	--

※階層は5a-5cを境に北側は古水

I = 五ヶ所野金遺跡
R = 藤辺新田遺跡

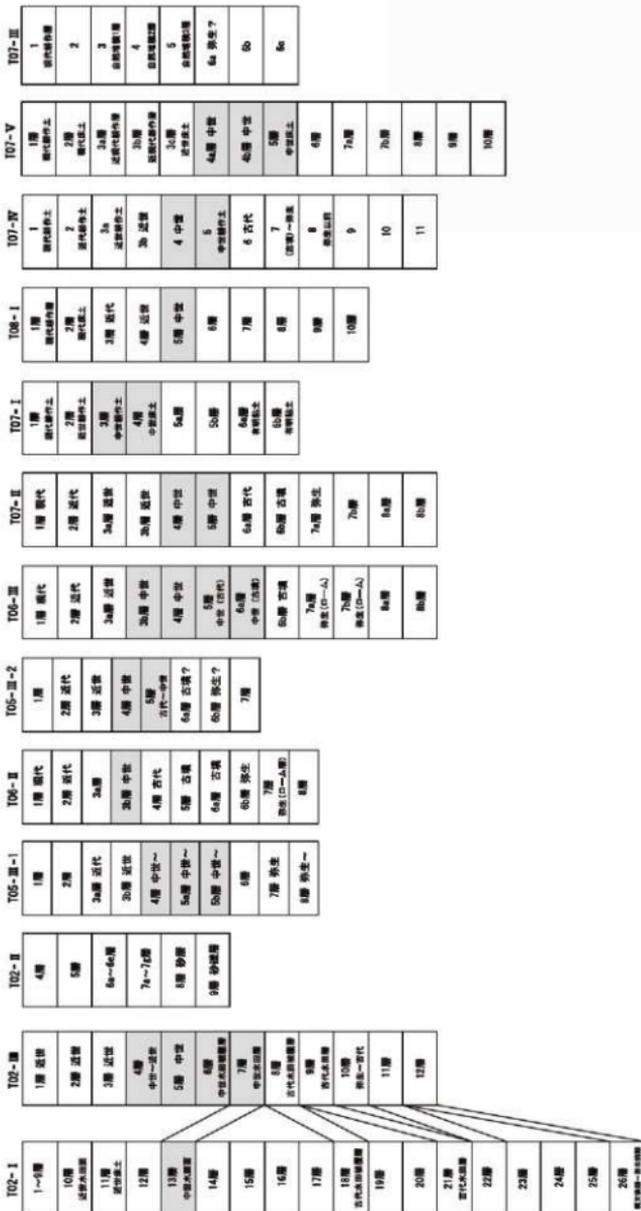
調査区の南から北の順に掲載

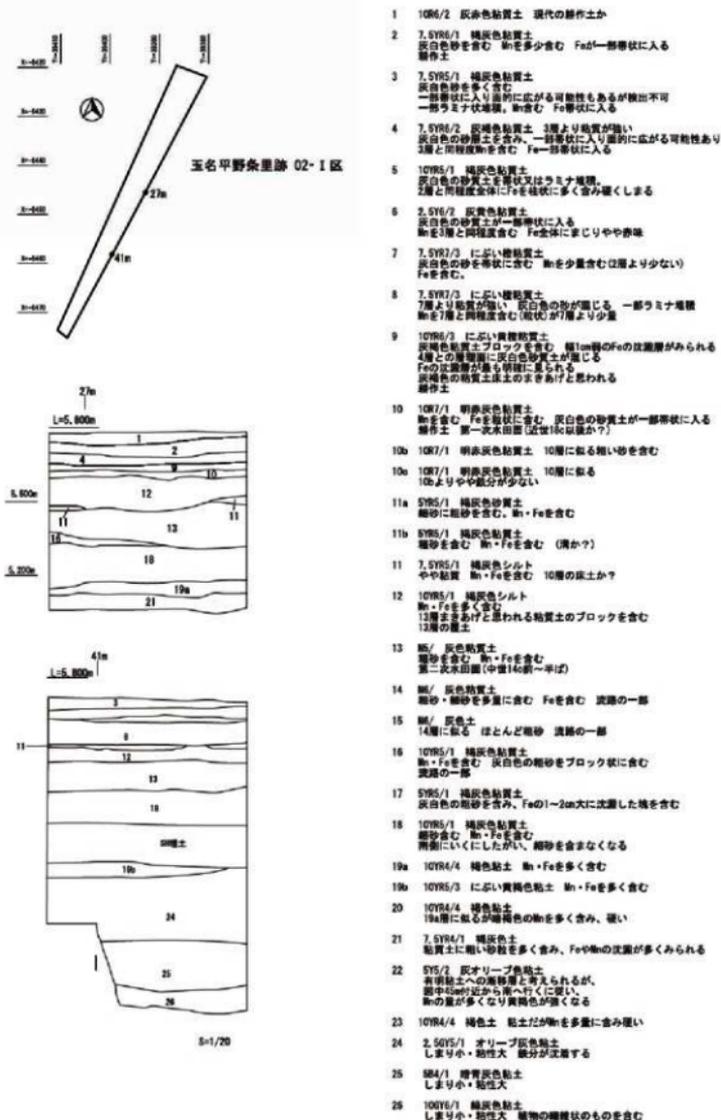
第16図 土層柱状図 (2002~2008年度) 1

T = 玉手塚野舎集落
R = 岡辺地区調査地

調査区の南から北の順に掲載

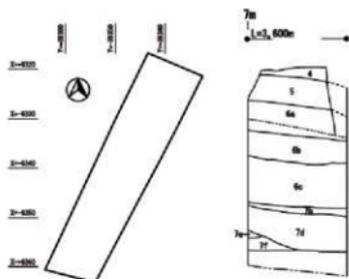
第17図 土層柱状図 (2002～2008年度) 2





第 18 図 基本土層図 1

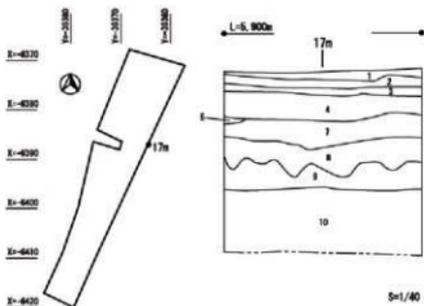
五名平野条里跡 02-II 区



S-1/40

- 1 記載なし
- 2 記載なし
- 3 記載なし
- 4 2.5Y5/1 黄褐色粘質土
非常に細かい砂粒を含み、植物遺体をわずかに含む
植物を含む
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色土
おびただしい量の植物遺体を含む
木片・木葉・木葉、ほとんど腐葉土状態である 遺物を含む
- 6a 10Y3/1 オリーブ藍色粘質土
わずかに遺物を含む
- 6b 10Y4/1 灰色粘質土
時節とともに2.5Y6/4に近い黄色に変化する
遺物を含む
- 6c 50Y3/1 暗オリーブ灰色粘質土
きのめかいが粘性は強くなくなった感じ
サクサクッ、ガリガリッと響く
時節とともに、にぶい黄色に変化する
まだらに10G3/1暗緑灰色の色が入る
- 6d 50Y2/1 オリーブ黒色粘質土
きのめかいが粘性はない
6a層ほど硬く、硬くはくつかつとしている
- 6e 50Y3/1 暗オリーブ灰色土 6a層に似る
- 7a 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 7b 10Y3/3 暗褐色土 7a層に似る
- 7c 10Y3/3 暗褐色土
7f層に似るが、7f層より砂が多く入る
- 7d 7.5Y3/2 黄褐色土
5層に似る。おびただしい量の植物遺体を含む
- 7e 10Y3/3 暗褐色土
わずかに粘性を帯び、植物遺体を多く含む
- 7f 10Y3/3 暗褐色土
わずかに粘性を帯び、植物遺体を多く含む
ラミナ構造状に砂層が入る
- 7g 7.5YR2/3 暗褐色土
多量の植物遺体を含む ラミナ構造状に砂層が入る
- 8 2.5Y3/1 黄褐色土 砂層
- 9 砂層 水が湧く

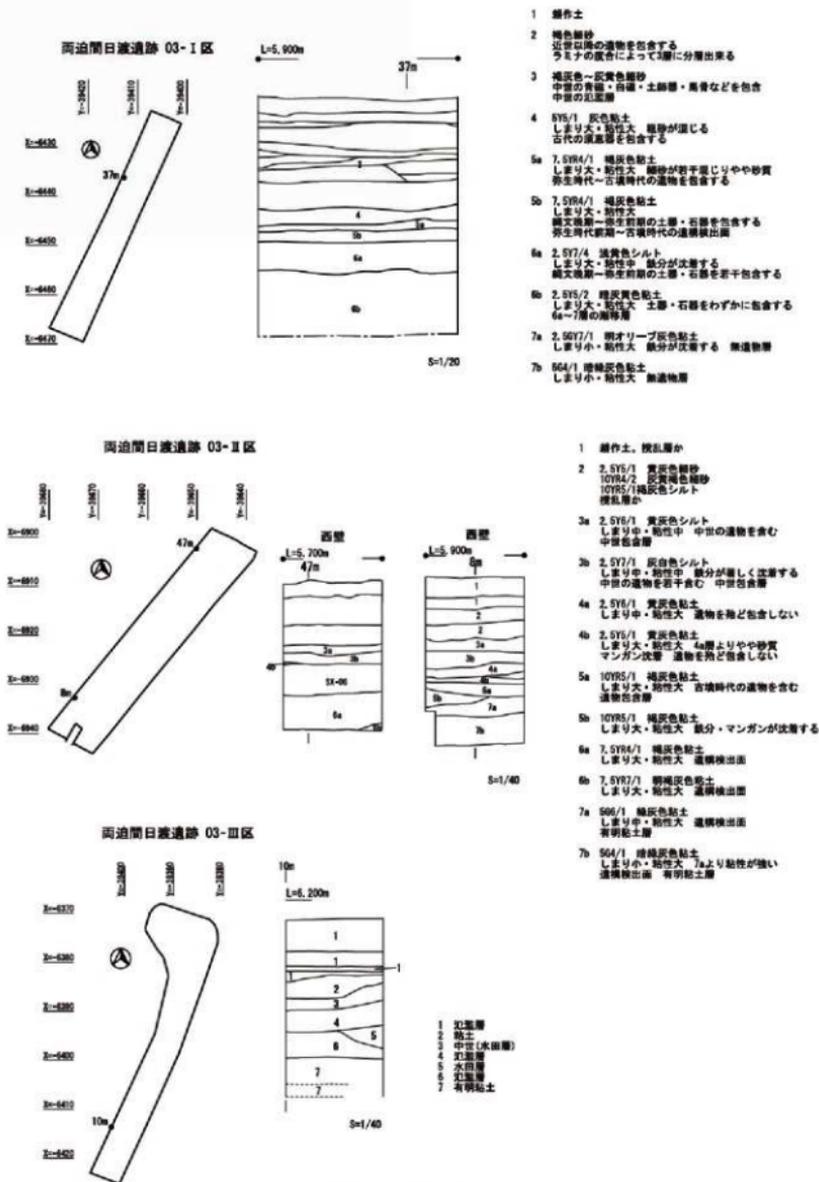
五名平野条里跡 02-III 区



S-1/40

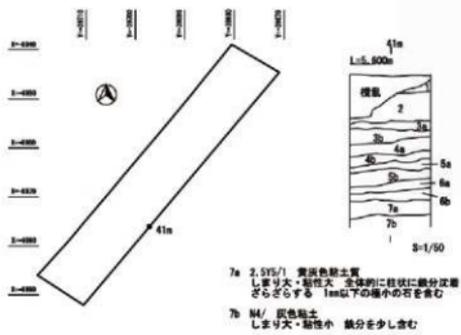
- 1 2.5Y5/3 黄褐色粘砂
しまり大・粘性小 マンガンが沈着する
近世の包含層
- 2 2.5Y5/3 黄褐色粘砂
しまり大・粘性小 灰色粘土が混じる
鉄分・マンガンが沈着するが層より少ない
近世の包含層
- 3 2.5Y5/3 黄褐色粘砂
しまり大・粘性小 灰色粘土が混じる
マンガンが1層と同様に沈着する
近世の包含層
- 4 2.5Y7/1 灰白色粘土
しまり大・粘性小 灰白色粘粒が混じる
鉄分・マンガンが若干沈着する
中世～近世の遺物包含層
- 5 10YR4/1 暗灰色粘砂
しまり大・粘性中 暗灰色粘土が混じる
中世の遺物包含層
- 6 10YR4/1 灰白色粘砂
しまり中・粘性小 灰色粘土が若干混じる
鉄分・マンガンが沈着する
中世水田被覆層 中世の遺物包含層
- 7 10YR6/1 暗灰色粘土
しまり中・粘性大 灰色粘土が若干混じる
マンガンが沈着する 中世水田層
- 8 7.5YR5/1 暗灰色粘土
しまり中・粘性大
古代の水田被覆層 古代の包含層
- 9 10YR5/1 暗灰色粘土
しまり中・粘性大 鉄分・マンガンが著しく沈着する
古代水田層
- 10 2.5Y7/2 灰黄色シルト
しまり小・粘性小 中・細砂
鉄分・マンガンの沈着が著しい
弥生時代～古代の遺物包含層
- 11 2.5Y7/6 明黄褐色粘土
しまり大・粘性大 暗灰色粘土のブロックが混じる
鉄分・マンガンが著しく沈着する
- 12 10YR6/1 暗灰色粘土
しまり小・粘性大 植物の繊維状のものを含む
縄文後期～弥生前期の包含層

図 40 同 並上上同



第20図 基本土層図3

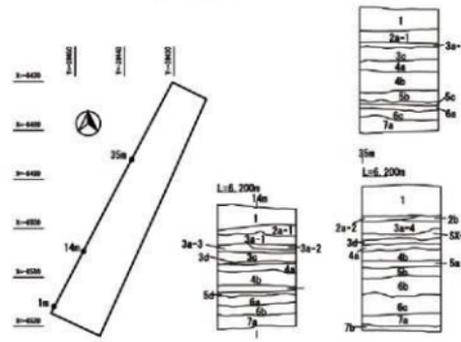
五名平野条里跡 04-I 区



- 7a 2.515/1 黄灰色粘土質
しまり大・粘性大 全体的に柱状に級分沈着
ざらざらする 1m以下の極小の石を含む
- 7b 7d/ 灰色粘土
しまり大・粘性小 級分を少し含む

- 1 耕作土
- 2 10194/2 に近い黄褐色細砂
しまり中・粘性小 マンガンを少し含む 級分沈着
- 3a 10194/2 灰青褐色細砂
しまり中・粘性中 マンガンを含む 2層より多い
級分を含む
- 3b 2.573/2 黒褐色粘土質
しまり小・粘性大 全体に級分を多く含む
- 4a 10194/2 灰青褐色粘土質
しまり大・粘性小 全体に級分、少しマンガン含む
- 4b 2.573/2 黒褐色粘土質
しまり大・粘性大 砂を含む
4層より少ないが級分沈着している
- 5a 10194/1 褐色粘土質
しまり中・粘性小 砂を含む ふかみかしている
級分沈着、マンガンを少し含む
- 5b 2.574/2 褐色粘土質
しまり中・粘性中 5a層より多く級分沈着している
マンガンを少し含む
- 6a 2.574/1 黄灰色粘土質
しまり中・粘性大 全体に級分沈着
マンガンは5a層より多く含む 砂を少し含む
- 6b 2.573/2 黒褐色粘土質
しまり中・粘性大
級分は少し沈着し、全体にマンガンを含む ざらつて感じ

両道間日渡遺跡 04-I 区

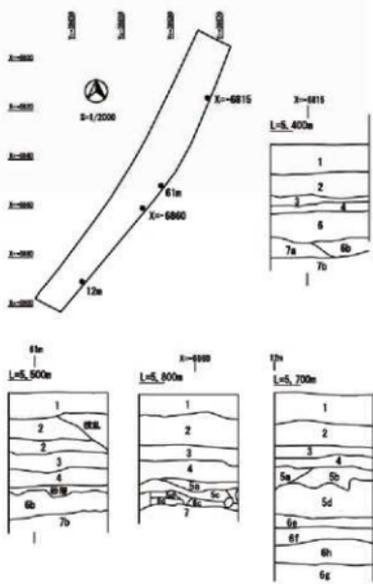


- 2a-1 10195/2 灰黄褐色細砂
しまり中・粘性小 褐色粘土が混じる
級分・マンガン沈着
- 2a-2 2.575/1 黄灰色細砂
しまり大・粘性小 下部に黄褐色細砂が混じる
級分・マンガン沈着
- 2b 10195/6 黄褐色細砂
しまり中・粘性小 褐色粘土が混じる
級分・マンガンが沈着する 近位の遺物を含む
- 3a-1 2.575/2 黄褐色細砂
しまり小・粘性中 灰褐色粘土が混じる
級分・マンガンが沈着する 中位の遺物を含む
- 3a-2 10195/2 灰黄褐色細砂
しまり中・粘性小 黄褐色粘土・黄褐色細砂が混じる
マンガンが沈着する 中位の遺物を含む
- 3a-3 2.575/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性小 灰褐色粘土が混じる
級分・マンガン沈着 中位の遺物を含む
- 3a-4 2.575/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性小 灰褐色粘土がより多く混じる
級分・マンガン沈着 中位の遺物を含む
- 3a-5 10194/2 灰黄褐色細砂
しまり小・粘性小 級分・マンガン沈着
- 3a-6 10195/1 褐色粘土質
しまり中・粘性小 黄褐色細砂混じる
マンガン沈着 中位の遺物を含む
- 3a-7 2.577/1 灰白色細砂
しまり中・粘性中 灰白色粘土が混じる
下部に級分沈着 中位の遺物を含む
- 3b-1 2.577/1 灰白色細砂
しまり中・粘性小 級分・マンガン沈着する
- 3b-2 10195/1 褐色粘土質
しまり中・粘性小 級分が混じる
- 3b-3 7d/ 灰色細砂
しまり中・粘性小 マンガン・級分が混じる
灰白色粘土混じる
- 3c 10195/1 褐色粘土質
しまり中・粘性大 級分が若干混じる 級分若干沈着
灰化層若干含む 水田層と考えられる
中位の遺物を含む
- 3d 10195/1 褐色粘土質
しまり中・粘性中 褐色粘土質混じる
級分・マンガン沈着
- 4a 2.575/2 灰黄色細砂
しまり中・粘性大 級分多く沈着する
40cm以下の硬質層と考えられる
- 4b 575/1 灰色粘土
しまり中・粘性大 礫物が混じる
水田層と考えられる 遺物層等を含む
- 5a 10195/1 褐色粘土質
しまり中・粘性大 礫物が混じり中や砂質
発生時代前期～古縄文時代前期の遺物を含む

- 5b 7.576/1 褐色粘土
しまり大・粘性大
細砂が混じる (5a層より少ない)
発生時代前期～古縄文時代前期遺跡層土質
発生時代前期～古縄文時代前期の遺物を含む
- 5c 2.576/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性中 褐色粘土のブロックが混じる
発生時代前期～古縄文時代前期の遺物を含む
- 5d 10195/1 褐色粘土
しまり大・粘性大 灰黄色細砂が混じる
遺物を包含 現場の特点では時期不明
- 6a 2.576/1 黄灰色粘土
しまり中・粘性大 級分・マンガン沈着
遺物を若干含む
- 6b 2.577/4 黄灰色シルト
しまり大・粘性中 級分が沈着する
02-1区 6a層に相当
縄文中期～発生前期の遺物を含む
- 6c 2.575/2 褐色粘土質
しまり中・粘性大 級分が沈着する
遺物を若干含む 02-1区 6a層に相当
- 7a 2.5074/1 暗グレイ系灰色粘土
しまり小・粘性大 級分沈着 無遺物層
- 7b 10194/1 褐色粘土質
しまり小・粘性大 級分沈着 無遺物層

第 21 図 基本土層図 4

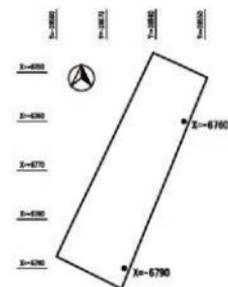
両池間日流遺跡 04-II 区



- 6 2.5Y4/1 黄灰色粘土
しまり小・粘性强 大層に砂が混入する
層の厚さなどにより10cm前後が層を貫つて
透じる。黄褐色のマンガン沈着は全体に
見られる。黄褐色の土質が混入している
層の厚さ、厚さ、混入している土質など、層下に
砂が多く、ところどころに黄褐色の土質が混入する
- 砂層 2.5Y5/1 黄灰色粘土
しまり小・粘性强 大の砂を砂層
黄灰色(2.5Y6/1)粘砂・白色粘砂が混入するように堆積
白色粘砂は土層を貫つて、自然露出の層として露出
した層もある。層の下層が砂層だといえてよい
- 6a(上) 2.5Y4/2 褐色灰色粘土
しまり大・粘性强
砂層の下に厚い砂層の沈着がみられる
砂層に土質の可塑性を奪った層であったが、
砂層の沈着以外には水田を掘削したものでなく、
自然露出などの自然の土の存在に起因する砂層である
と判断。マンガン沈着も混入、元々土質に黄褐色土質を
砂分とマンガンにより黄褐色にしている、ともいえる
砂層を砂層
- 6a(下) 2.5Y4/2 褐色灰色粘土
しまり中・粘性强
6a(上)層と同じ土質に堆積(2.5Y2/1)粘土層
(上)層より粘土成分多く、同じ砂も少ない
北へいくにつれて粘(上)層、6a(下)層は同一層となっていく
6a(上)層は砂層と混入しているが、砂分・マンガンの沈着
みられる
- 7a しまり大・粘性强 黄褐色粘土・砂層
土質は黄褐色粘土だが、砂が混入することで区別
砂分・マンガンの沈着がみられる。黄褐色土質
土質は砂の混入による不定形の色となっているものが数個/m²
言われている
- 黄褐色粘土 10G5/1 粘灰色-10Y5/2 オリーブ灰色粘土
しまり大・粘性强
7a層の堆積から10cmほど堆積(10G4/1)粘土が
くるくると混入している。7a層と混入して不定形の白色土層

- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土
しまり小・粘性强 黄土
- 2 10Y5/3 に近い黄褐色粘土
しまり小・粘性强 全体に細砂とマンガン層を含む
下層に粘砂を含む。10cm前後の層を含む
砂分が厚く沈着している
- 3 10Y5/1 粘灰色シルト
しまり小・粘性强
全体的に砂分が厚く沈着し、黄褐色もよく見える
10cm前後の層がつかみ入っている
- 4 10Y5/1 粘灰色粘土
しまり中・粘性强
全体的に厚く砂分が沈着し、部分的に5cm前後の砂分の
層がある。マンガン層も少し入っている
葉面へ行くほど砂分が厚くなり、粘土になっていく
- 5a 2.5Y4/1 粘灰色粘土
しまり大・粘性强
全体的に砂分が沈着し、部分的に粘砂を含む
5cm前後の層が混入している
全体的に混入している
5a層の下層から粘砂層があり、下層に伸びている
土層が多いため、土層の砂分が混入している
土層層が多いが、ローリングを受けている
- 6b 2.5Y5/1 粘灰色粘土
しまり中・粘性强
全体的に砂分・マンガンが多く、土色が褐色に見える
土層の土質も混入している
5a層と同様に土層が多く、下層に伸びている
- 6c(北) 2.5Y5/1 黄灰色シルト
しまり中・粘性强
全体的に砂分が非常に多く沈着しており、全体的に
粘土に見える。10cm前後の層の多い
4層の粘土もブロック状に混入している
4層に対して黄土と混入する
- 6c(南) 2.5Y5/2 褐色灰色粘土
しまり中・粘性强
全体的に砂分が厚く沈着し、黄褐色に見える
ブロック状に粘灰色粘土(10Y5/1)が混入している
下層は砂分が多く混入している。マンガン層が全体に入っている
- 5d(北) 10Y5/1 粘灰色粘土
しまり小・粘性强
砂分・粘砂の沈着が厚く、まばらにマンガン層が
チョコチップ状に全体に入っている
粘砂を非常に多く含む
- 5d(南) 2.5Y4/4 褐色土
しまり中・粘性强
全体的に砂分が厚く沈着し、マンガン層が非常に多い
ため、土色が褐色になっている
ブロック状に粘灰色(黄)粘土が入っており、上層に
粘砂を混入している
- 6e 2.5Y4/2 黄褐色粘土
しまり中・粘性强
全体にマンガン層が非常に多く、土色は黄褐色に見えている
5cm前後のマンガン層の混入が多い
5cm前後の粘灰色(10Y5/1)粘土にマンガンが沈着し、
黄化しようとする
粘砂を非常に多く含む
わずかに砂分を砂分・混入している 黄土
- 6f 50Y5/1 オリーブ灰色粘砂
しまり中・粘性强
全体に粘砂・粘土、土色が褐色(2.5Y4/2)に見える
上層の影響を受け上部に少しマンガンが沈着している
- 6g 10Y5/1 粘灰色粘土
しまり中・粘性强
全体に砂分が混入し、部分的に黄褐色(10Y5/6)に
変えるところもある
マンガン層がチョコチップ状に全体に入っている
土層が多く混入する 南にいくほど砂分が少なくなる
- 6f 10Y5/1 粘灰色粘土
しまり中・粘性强
全体に砂分が非常に多く、土色が暗く見える
砂分が沈着し、少し砂を混入している 土層が多い
- 6h 2.5Y6/2 灰黄色粘土
しまり中・粘性强
全体に砂分が混入し、灰黄色になっている
マンガン層も少し、砂を少し含む
砂層の粘灰色土をブロック状に混入している
土層にマンガン層も少し、下層より混入している
10cm前後の層を含む
- 6g 10Y7/1 黄褐色粘土
しまり大・粘性强
全体的に砂分・マンガンが厚く沈着し、にぶい黄褐色
10Y5(北)に見える
土層が下層になる砂分が非常に多い
マンガンが多い砂分があり、混入しているところがある
土層が多い
- 7(南) 50G5/1 黄褐色粘砂
しまり大・粘性强
下層の方が粘強い色で、粘灰色(50Y4/1)になっており、
上部より水を含まずベタツとする
- 7b 50G5/1 粘灰色粘砂
しまり大・粘性强
全体に砂分が厚く沈着し、上層には砂分が多く、
黄褐色(10Y5/6)に見える
土層にマンガン層も少し、下層より混入している
土層になるほど砂分・マンガン層が厚くなり、粘灰色が
はつきりする

第 22 図 基本土層図 5



両迫間日越遺跡 05-I-1区

1 5YR2/2 暗赤褐色
細砂～中粒砂がわずかに混じる(上部には泥とどんだし)
中粒サイズは砂石のような感じ 下部にわずかに蕨類
植物の残多い 遺物断片土

2a 5Y4/1 灰色細砂混じりシルト
若干粗砂 2b層との境に中粒砂がわずかに入る

2b 7.5Y4/1 灰色シルト
しまり わずかに細砂 最上部に粗砂
全体に黒炭が多い

3a 5Y4/1 灰色細砂～粗砂混じりシルト
角礫状Fe²⁺・上・下層と比して粗質 しまりやや良

3b 7.5Y4/1 灰色細砂混じりシルト
細砂若干混じる 赤土層状Fe²⁺
4層との境は不明瞭の所あり
下部細砂が混入となる部が込みが点々と見られる
上部はシルト状 粗粒質

4 7.5Y5/1 灰色シルト
細砂混じる 頂へ向かってわずかに粗質改善する
角礫状Fe²⁺ わずかに粗砂

5a 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト
全体に炭酸が著しい 上層とも比してシルト質
しまり良

5b 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混じりシルト
しまり良

6a 5Y5/1 灰色細砂混じりシルト
角礫状鉄燻 上部にわずかにマンガン燻
痕跡を受けている

6b 7.5Y4/1 灰色シルト細砂
細砂混じる 上部下部付近に酸化鉄のやわらかい
細粒状Fe²⁺20%程多く多い 炭酸 中や粗粒質
痕跡を受ける
中央近距離植物(5a層上層砂)より東側では
2.5Y5/1シルト質

6c 7.5Y4/1 灰色細砂混じりシルト
角礫状鉄燻(マンガン燻?)ゆるく痕跡

7a 2.5Y4/1 黄灰色シルト
炭酸が顕著

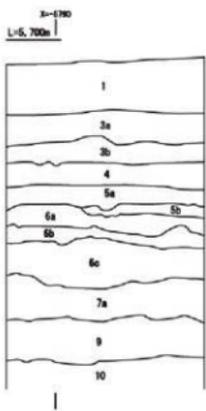
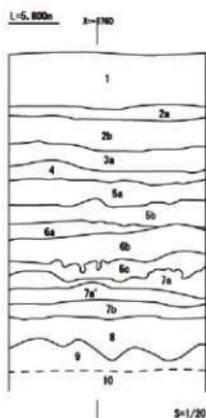
7b 10YR4/1 暗灰色シルト
土色の違いはあるが、おそらく7a層と同層

7c 7.5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性小 砂が混じる

8 7.5Y4/1 灰色シルト
細砂が混ざる しまり中・粘性小
上層から角礫状鉄燻が入り、炭酸も見られる
側部へいくと5Y4/1灰色シルト 粗砂も混ざる
平層である。北側は砂が強く、洪水による砂の堆積層と
思われる

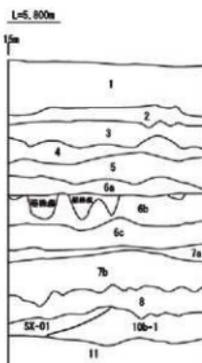
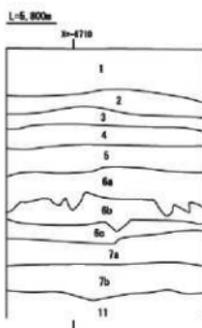
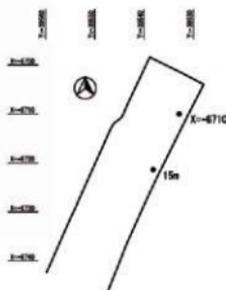
9 8Y3/ 暗灰色シルト
しまり中・粘性中 酸化鉄が入る 細砂が混ざる
中央未掘から両側は鉄分が次増し、8Y4/灰色粘土
(シルト)に変化していく

10 2.5Y2/1 黒色粘土
しまり中・粘性中 北側へいくと黒が濃くなり、
5Y3/1オリーブ黒色に変化していく
10層の下には8Y3/暗灰色粘土の層が入るが、
北側はFe²⁺の多かった為強く盛り下りられず、
下の層は未確認



第 23 図 基本土層図 6

両迫間日渡道跡 05-1-2区

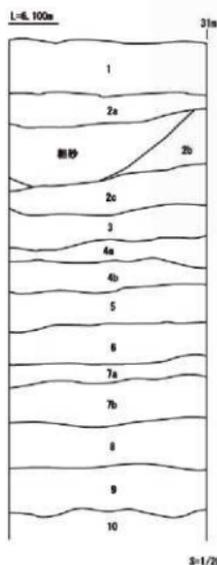
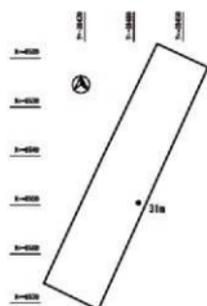


3=1/20

- 1 5Y3/2 暗赤褐色シルト
耕作土
- 2 5Y3/1 オリーブ褐色シルト
砂と粘土が混じる
- 3 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性小 全体に鉄分が入る
- 4 10YR5/1 褐色シルト
しまり中・粘性小 全体に鉄分が入る 砂が混ざる
- 5 5YR4/1 褐色細砂
しまり中・粘性中 φ2mmの塊が混ざる
全体に鉄分が入り、6cよりも多少粘性がある
下部は5YR4/1褐色細砂 しまり中・粘性中
全体に鉄分が入る
- 6a 5YR4/1 褐色細砂
しまり中・粘性小 細砂が混ざる
- 6b 10YR4/1 褐色細砂
しまり中・粘性小 6cよりも多少粘性が弱い
- 6c 7.5YR4/1 褐色細砂
しまり中・粘性小 鉄分・マンガンが混着する
- 7a 2.5Y5/3 黄褐色埋砂シルト
粘質 しまり中・粘性 中量鉄土層
- 7b 2.5Y4/1 黄褐色シルト
砂混じり しまり中・粘性小 鐵分混着
マンガン少量 古墳初期耕作層
- 8 5Y4/1 灰色シルト
砂混じり しまり中・粘性中
塚家区中央部は粘質細砂になる
塚家区は粘土の割合により粘性悪い 古墳初期塚土層
- 9 2.5Y4/2 褐色細砂
しまりなし 粘性非常に弱い 05-1-1区23と対応か
弥生終末淡水砂層
- 10a 7.5Y2/1 褐色粘質細砂シルト
5X-01埋土
- 10b-1 5Y3/1 オリーブ褐色シルト
弥生終末埋土、05-1-1区1と対応か
新羅2.2.5Y3/1暗褐色シルトに黄化していく
10b-1と10c-2は同一層(05-1-1区2と対応)
10b-1を耕作時、10b-2の砂を混ざりながら耕作が続けられ、
10b-2は耕作が及ばなかった自然堆積の砂がそのまま
残されている
- 10b-2 5Y3/1 オリーブ褐色シルト
しまり中・粘性中 細砂が混ざる
自然堆積下のシルト層を巻き上げながら砂が
堆積した模様
- 10b-3 7.5Y3/1 オリーブ褐色シルト
しまり大・粘性中 05-1-1区10と対応
弥生終末後平塚土 有明粘土
- 11 5G3/1 暗緑灰色粘質土
鉄分多く含む 生埋明礫 しまり非常にあり 無遺物層

第 24 図 基本土層図 7

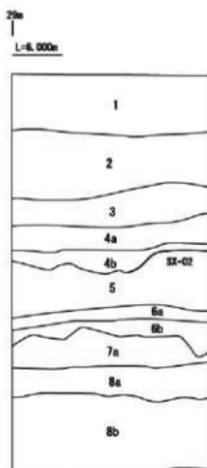
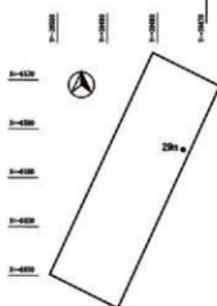
両道間日線道路 05-II-1区



- 1 5Y3/1 オリーブ褐色
しまりあり 砂を多く含む 耕作土 現代
- 2a 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
しまりやや多い 腐植状 砂を含む 近世
- 2b 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
しまりやや多い 腐植状 砂を含む 近世
- 2c 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂
しまりあり 腐植状 マンガンを含む 近世
- 3 2.5G3/1 暗オリーブ灰色シルト
しまり非常に多い 腐植状に含む 中世
- 4a 2.5Y4/2 暗黄褐色細砂
しまりなし 腐植状に多く含む 古代
- 4b 5G3/1 暗オリーブ灰色シルト
しまりあり 腐植状に多く含む 古代
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色
しまり中・粘性中 (土壌化作用) 細砂が入る
全体的に鉄分がブロック状に入る
マンガンが全体に入る 古墳前縁
- 6 5G4/1 暗黄灰色粘土
しまり小・粘性大 土壌化作用を受ける
鉄分は5層の半分の量
マンガンは極小のものがわずかに入る
有明粘土
- 7a 5G3/1 暗黄灰色粘土
しまり小・粘性大 腐植状に少量に含む
有明粘土
- 7b 5G3/1 暗黄灰色粘土
しまり小・粘性大 有明粘土
- 8 8Y/ 灰色粘土 しまり中・粘性大
- 9 8Y/ 灰色粘土
しまり中・粘性大
鉄分がみよ、黄・黒礫に赤土層あり
礫や中礫も込みがあり、10層との境界は
でこばこで自然の層の込みではないかと
考えられる
- 10 5G6/1 緑灰色粘土 しまり小・粘性大

S-1/20

両道間日線道路 05-II-2区

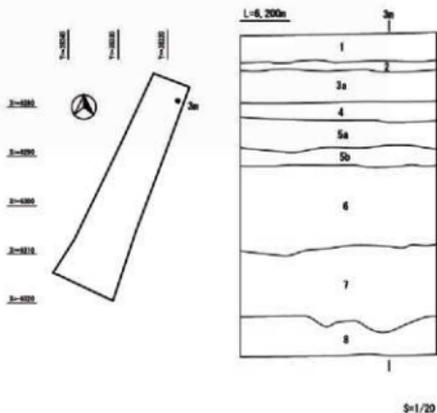


- 1 耕作土
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂
しまり大・粘性中 マンガン・鉄分含む
2層中鉄分は部分的に粘性が強いといつがある
調査深部側は全体的に砂の砂の性質はあまり変わらない
- 3 2.5Y3/2 黒褐色細砂
しまり大・粘性小 マンガンを含む
- 4a 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
しまり大・粘性小 3層より少ないがマンガンを含む
鉄分含む
- 4b 2.5Y4/2 暗黄褐色シルト
しまり大・粘性小 マンガン・鉄分が全体に入る
(4a層より多い) 15mより北側はほぼあつたりかつたります
中世末期耕作土と思われる
- 5 5Y4/1 灰色粘土
しまり大・粘性中 砂が混じる
(2層半分は粘土、黄礫が中が混(出る)
マンガン含む、鉄分わずかに含む、5層上面で耕作土
の層耕作土に対する床土と思われる 中世
- 6a 10Y6/1 暗灰色細砂
しまり中・粘性中 マンガン鉄を少量含む
腐植状の塊を多く含む 灰色粘土を多く含む 古墳
- 6b 10Y6/1 暗灰色細砂
しまり中・粘性小 マンガン鉄を少量含む
腐植状の塊を非常に多く含む 灰色粘土を下部に含む
水田耕作土と思われる 古墳
- 7a 7.5Y5/1 暗灰色粘土
しまり大・粘性中 マンガン鉄を少量含む
腐植状を縦状に含む
細砂を非常に多く含む、シルト質
7a層上面で耕作土
の層耕作土に対する床土と思われる 古墳
- 7b 7.5Y5/1 暗灰色粘土
しまり大・粘性中 マンガン鉄・酸化鉄を少量含む
細砂を含む 古墳
- 8a 7.5Y5/1 灰色粘土
しまり大・粘性大 5cm層のマンガンの塊を上部に含む
腐植状を縦状に多く含む わずかに砂を含む
- 8b 10G5/1 緑灰色粘土
しまり大・粘性大 上部に縦状に酸化鉄を多く含む
砂をわずかに含む

S-1/20

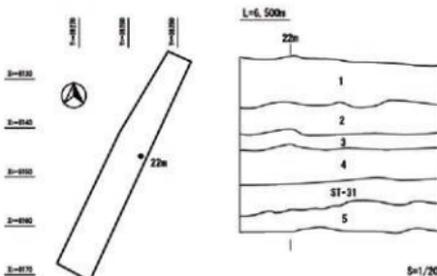
第 25 図 基本土層図 8

五名平野発見跡 05-III-1区



- 1 耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色細砂
しまり大・粘性小 磁砂を多く含む
マンガン粒をわずかに含む 1層の灰土
- 3a 5Y4/3 緑オリーブ色細砂
しまり大・粘性小 灰色粘土をブロック状に少し含む
マンガン粒をわずかに含む
酸化鉄をわずかに灰状に含む
下方が磁砂が多い 近代
- 3b 2.5Y5/3 に近い黄色細砂
しまり大・粘性中 マンガン粒を多く含む
酸化鉄をわずかに灰状に含む 土層小片・炭粒が出土
近代
- 4 2.5Y5/3 に近い黄色シルト
しまり大・粘性中 マンガン粒を含む
土層小片・青磁が出土 中世一
- 5a 2.5Y5/2 緑灰黄色シルト
しまり小・粘性中 酸化鉄を多く灰状に含む
マンガン粒をわずかに含む 土層小片が出土
中世一
- 5b 2.5Y5/2 緑灰黄色細砂・細砂混じり
しまり中・粘性中 酸化鉄を多く含む
マンガン粒をわずかに含む 土層小片が出土
下部粘土混じりの部分もある
6層より下の部分に磁石
(動物の足跡・磨痕・耕作跡と思われる)中世一
- 6 5Y5/1 灰色粘土
しまり小・粘性大 磁石に貫入する
酸化鉄を少し含む 磁砂状に貫入する
マンガン粒を少し含む
土層小片・須磨器小片・青磁・白磁・土層・
赤土土層小片が出土 下部からは磁石が出土 発生
- 7 5Y5/1 灰色粘土
しまり小・粘性大 6層より色がやや暗い
マンガン粒・酸化鉄を多量に含む
7層より上の発生層
赤土土層・磁石・黒曜石・磁石が出土 発生
- 8 7.5Y5/1 灰色シルト
しまり小・粘性大 マンガン粒を少量含む
酸化鉄を多量に含む
上部は7層からマンガン粒・酸化鉄が貫入
30-01・30-02を抽出 発生一

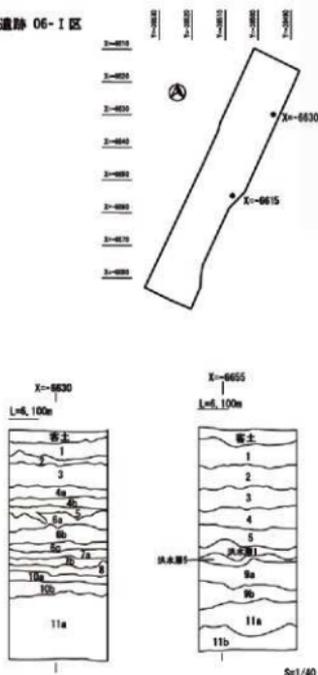
五名平野発見跡 05-III-2区



- 1 耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色細砂
しまり小・粘性小
2mm程度のマンガン粒を多く含む、酸化鉄を多く含む
1mm程度の小塊を多く含む、灰色粘土をブロック状に混ざりに含む
近代
- 3 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
しまり小・粘性小
1mm程度のマンガン粒を混ざりに含む、酸化鉄を薄く灰状に含む
近代
- 4 5Y5/2 灰オリーブ色粘土
しまり大・粘性中 磁砂を全体的に含む
1mm程度のマンガン粒をわずかに含む(3層よりは多い)
酸化鉄を多く灰状に含む
土層小片を少量含む、炭粒等を微量に含む
中世の遺物を含む 中世
- 5 5Y5/1 灰色粘土
しまり大・粘性大
2mm-5mm程度のマンガン粒を多く含む
酸化鉄を多く灰状に含む 土層小片・青磁も含む
31-01・31-02を抽出
(中世一古代)30-01・30-02を抽出
- 6a 10Y5/4 黄褐色粘土
しまり中・粘性大 酸化鉄を全体に多量に含む
灰色粘土をブロック状に部分的に含む
マンガン粒をブロック状に部分的に含む
上部で土層小片を少量含む
- 6b 10Y5/4 反黄褐色粘土
しまり小・粘性小
6層からの酸化鉄が貫入し、マンガン粒を多量に含む
1mm程度のマンガン粒を少量部分的に含む
灰色粘土をブロック状に含む 磁砂が多量に混入する
遺物なし。30-03・30-04を抽出
- 7 5B5/1 青灰色粘土
しまり大・粘性大
酸化鉄を少量含む、細砂粒が少量混入する

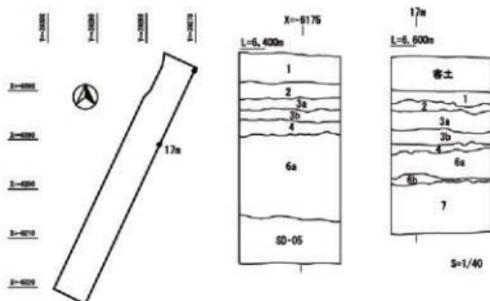
第 26 図 基本土層図 9

岡迫間日渡遺跡 06-I 区



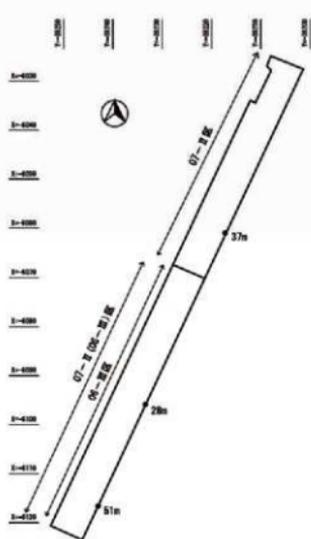
- 1 5YR2/2 暗赤褐色シルト
しまり中・粘液中 近代
- 2 5YR2/1 高褐色シルト
しまり中・粘液中 砂と粘土混じり 近代
- 3 5YR2/1 高褐色シルト
しまり中・粘液中 炭分を少量含む 近世
- 4a 10YR5/1 黄灰色シルト
しまりなし 粗砂混じり マンガン少量 近世
- 4b 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト
しまりややある 炭酸・マンガン含む 近世
- 5 5YR4/1 黄灰色細砂
しまり中・粘液中 2mm程度の塊混じり
全体に炭分が入る 近世
- 6a 5YR4/1 黄灰色細砂
しまり小・粘性小 粗砂混じり 中世
- 6b-1 10YR4/1 黄灰色細砂
しまり小・粘性小 粗砂混じり 中世
- 6b-2 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性中 粗砂混じりシルト 中世
- 6c-1 7.5YR4/1 黄灰色土
しまり中・粘性小 粗砂混じりシルト 中世
- 6c-2 5Y4/1 灰色シルト
しまり小・粘性なし 粗砂・細砂を含む 中世
- 7a 2.5Y5/3 黄褐色シルト
しまり中や多い マンガン少 砂混じり
中世 灰土
- 7b 2.5Y4/1 黄灰色シルト
しまり中・粘性小 炭分の沈着あり マンガン少
砂混じり 古墳 耕作土
- 8 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘液中 砂混じり 古墳 灰土
- 9a 10Y3/1 オリーブ褐色シルト
しまり中・粘液中 粗砂混じりシルト
全体に炭酸の沈着が見られる
- 9b 10Y3/1 オリーブ褐色シルト
しまり中・粘性中 全体に炭分の沈着が見られる
9a層に比べ細砂の混じりが多く、サラサラしている
古墳
- 10a 2.5Y3/1 高褐色シルト
しまり大・粘液中 全体に炭やマンガンの沈着あり
厚2-3mm程度のブロック(7.5YR4/0)含む
弥生後期耕作土
- 10b 5Y3/1 オリーブ黒シルト
しまり大・粘性大 炭の沈着が多く見られる
- 11a 2.5R5/1 オリーブ灰色シルト
しまり大・粘性大 粗砂混じりシルト
炭酸を多く含む
- 11b 2.5R7/4 暗オリーブ灰色シルト
粗砂混じりシルト 炭酸や生炭あり

玉名平野糸屋跡 06-II 区



- 1 2.5Y3/2 高褐色粗砂混雑砂
近代
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混雑砂
近代
- 3a 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂混雑砂
- 3b 2.5Y5/3 に近い黄色細砂
土師器・輸入磁器 中世
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混雑シルト
須原層・黄色土層 古代
- 6a 5Y4/1 灰色粘土
しまり非常にあり 粒砂Fe(鉄)含む
粘土を含む
須原層・黄色土層・古式土師器・弥生土層含む
05-1-1区 6層と同じ 古墳
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
しまりあり 物多量・Fe(鉄)多量含む
層厚が中して5層と見られる
弥生土層含む 弥生
- 7 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
粗砂Fe(鉄)多量含む ローム層
- 8 8B/ 黄灰色粘土
しまり非常にあり 06-1-1区 7・8層と同じ

第 27 図 基本土層図 10

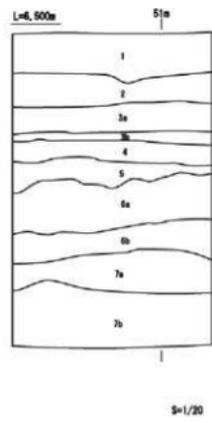
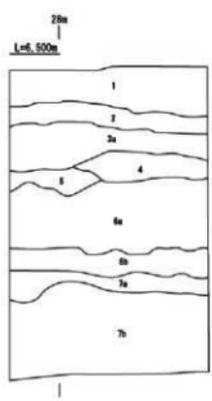
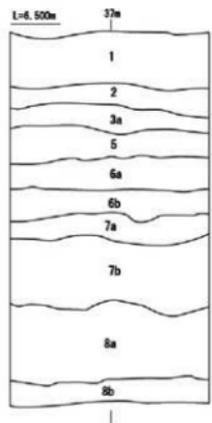


五名平野条里跡 06-II区

- 1 2.SY3/2 黒褐色細砂混細砂
現代耕作土
- 2 SY5/3 灰オリブ色細砂混細砂
近代
- 3a SY4/3 暗オリブ色細砂混細砂
近世
- 3b 2.SY6/3 にぶい黄色細砂
中世
- 4 2.SY4/2 暗灰黄色細砂混シルト
中世
- 5 7.SY3/1 オリブ黒色細砂混シルト
(古代) 中世
- 6a SY4/1 灰色粘土
しまり赤紫にあり
柱状化(小)多・細(小)
(古溝) 中世
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
しまりあり 粘・非粘多
透伏少 柱状多
古溝
- 7a 7.SYR2/2 黒褐色シルト
田舎土、粘土(古溝)
- 7b 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
透伏多 コーム
06-II区では分層できなかった
- 8 N3/ 暗灰色土
しまり赤紫にあり

五名平野条里跡 07-II区

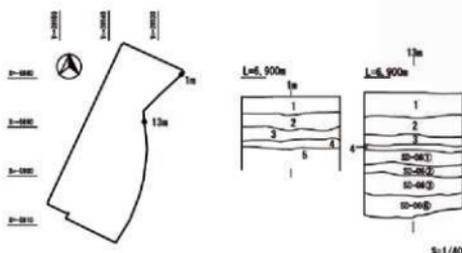
- 1 2.SY3/2 黒褐色細砂混細砂
現代耕作土
- 2 SY5/3 灰オリブ色細砂混細砂
マンガン鉄を少量に含む 近代
- 3a SY4/3 暗オリブ色細砂混細砂
弱粘性 マンガン鉄を少量に含む
柱状酸化鉄を少量に含む 近世
- 3b 2.SYR3/3 にぶい黄色細砂
弱粘性 マンガン鉄を少量に含む
柱状酸化鉄を少量に含む 近世
- 4 2.SY4/2 暗灰黄色細砂混シルト
弱粘性 柱状酸化鉄を少量に含む
中世
- 5 7.SY3/1 オリブ黒色細砂混シルト
ややしまりあり マンガン鉄少量
柱状酸化鉄を少量に含む
土跡跡・黄褐色含む 中世
- 6a SY4/1 灰色粘土
透粘性・よくしるる マンガン鉄少量
柱状酸化鉄を少量に含む
黄褐色含む 古溝
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
透粘性・しまりあり マンガン鉄少量
柱状酸化鉄を少量に含む
古式土跡跡含む 古溝
- 7a 7.SYR2/2 黒褐色シルト
透粘性 柱状酸化鉄を少量に含む
無透物 赤土
- 7b 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
透粘性 柱状酸化鉄を少量に含む
無透物
- 8a 7.SYR4/2 灰褐色粘土
透粘性・よくしるる マンガン鉄少量
柱状酸化鉄を少量に含む 無透物
- 8b 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト
しまりあり 柱状酸化鉄を少量に含む
無透物



9=1/20

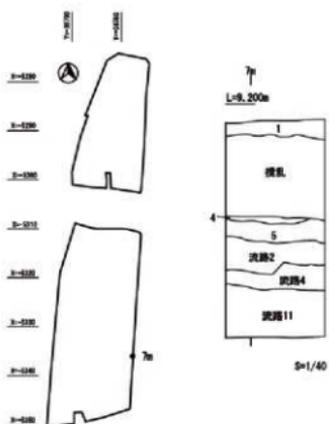
第 28 図 基本土層図 11

玉名平野条里跡 07-Ⅰ区



- 1 5YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト
しまり中・粘性中
2~3mm程度の礫を含む
近代耕作土
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂混じりシルト
しまり中・粘性中 マンガンの沈着あり
近代耕作土
- 3 2.5Y5/3 黄褐色細砂・細砂混じりシルト
しまり中・粘性中
中世段階に大規模な墾地が行われ、
その後耕作が行われた。中世耕作土
- 4 10YR5/1 暗灰色シルト
しまり中・粘性わりと強い
マンガンの沈着が強く、鉄分も少量あり
土層の厚地によりカットされ、墾地直後に
広がっておらず、前後のみ 中世区工?
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルト
しまり中・粘性やや弱い
マンガンの沈着あり 鉄分の沈着非常に強い

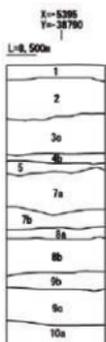
玉名平野条里跡 07-Ⅱ区



- 1 10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルト
しまり中・粘性中 マンガン・鉄分沈着あり
近代耕作層
- 2 5Y4/1 灰色粗砂混じりシルト(粘質土)
しまり強い・粘性中 鉄分・マンガン含む
礫の沈着が強く、(基準のみ)で基準であるが
耕作層との判断は難しい(耕作層か?)
- 3 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト(粘質土)
しまり強い・粘性強い 全体に鉄分沈着あり
マンガン少 上部で耕作を行っていた可能性あり
自然増積層I層
- 4 5Y7/2 灰白色細砂混じりシルト
しまり中・粘性弱 鉄分が全体的に広がっている
自然増積層II層
- 5 5Y6/1 灰色~黄褐色(明黄褐色)細砂混じりシルト
しまり中・粘性中 細砂を含む
鉄分を非常に多く含む(須賀) 自然増積層3層
- 6a 10YR6/6 明黄褐色細砂混じりシルト(粘質土に近い)
しまり中・粘性わりと強い 2~3mm程度の礫を含む
鉄分の沈着非常に強い
- 6b 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性わりと強い
マンガン少、鉄分沈着強い
- 6c 7.5YR6/4 にぶい暗褐色細砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性わりと強い
鉄分含量に比べ少ない 若干ばさばさした土を含む
3cと同一層でし可

第 29 図 基本土層図 12

五名平野条里跡 07-V区

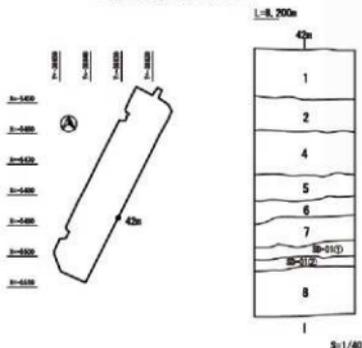


S=1/40

- 1 2.5V4/3 オリーブ褐色細砂混じりシルト
粘性中 鉄分少量 炭代層作層
- 2 2.5V4/2 緑灰黄色土
しまり1層に比べやや強い・粘性中 炭灰の影響を受ける
鉄分・マンガンの沈着あり 炭代法土
- 3a 2.5V4/3 オリーブ褐色細砂混じり
しまりやや強い・粘性中 鉄分・マンガンの沈着あり
若干ふたふたした空気を含む 炭代法作層
- 3b 2.5V4/3 オリーブ褐色土
しまり中・粘性中 3a層と比べているもの若干しまりあり
2~3a層程度の礫を含む 炭代法作層
- 3c 2.5V4/2 緑灰黄色細砂混じりシルト
しまり・粘性わりと強い マンガン少ない
鉄分も多く含む 炭代法土?
- 4a 2.5V4/1 黄灰色細砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性中 3~4a層程度の礫を含む
鉄分やや強く、マンガンの沈着 中世
- 4b 2.5V4/1 黄灰色細砂混じりシルト
鉄分あり マンガンやや強く沈着 中世
- 5a 2.5V3/1 黒褐色細砂混じりシルト(粘質土)
しまり・粘性やや強い 3~5a層程度の礫を含む
鉄分・マンガンの沈着あり カarbonを多く含む
礫層作層を含む
即作層の可能性もあるがフラットになつておらず、
遺物も少量にあることから判断が難しい 中世
- 5b 2.5V5/1 黄灰色粘質土(粘質土)
しまり・粘性やや強い 鉄分あり
マンガンの層に比べ多い
遺物5層と同層にしていたが、遺物の出土状況、
マンガンの沈着などから判断した
5層が作層土とし、6層が炭土の可能性があると考えた
中世 炭灰のみ確認
- 6 2.5V2/1 黒褐色細砂混じりシルト
しまり・粘性中
礫が多く、炭灰込みに確認した可能性あり
基本土層だが、5層礫にカットされたと考えられる
炭灰のみ確認 鉄分・マンガンの少量
6層より下層に礫砂が確認している
- 7a 5V5/2 灰オリーブ色粘質土
しまり強い・粘性非常に強い 細砂混じり
鉄分少量・マンガンの少量 灰色土の粘土が入る
- 7b 5V6/2 灰オリーブ色粘質土
しまり強い・粘性非常に強い 鉄分少量
7a層の影響を若干受ける
- 8a 2.5V4/2 緑灰黄色粘質土
しまり・粘性強い 鉄分の沈着あり
炭灰がたまっていたため礫に炭灰 マンガンを含む
8a層と同一のものだと思われる 粗砂を含む
- 8b 2.5V6/2 灰黄色土
基本的には8a層と同様の土質 土色が異なる
- 9a 7.5V6/1 灰色シルト
しまり強い・粘性強い 鉄分の沈着あり
粘性のある土をブロック状に含む(少量)遺物出土なし
- 9b 2.5V6/2 灰黄色土 鉄分少量沈着あり
しまりなし・粘性なし
- 9c 2.5V5/1 黄灰色細砂(粗砂混じり)シルト
しまり中・粘性強い 鉄分の沈着あり
部分的にはシルトに近いものもあるが、基本粗砂
- 10a 5B7/1 明青灰色シルト
しまり強い・粘性中 鉄分の沈着少量
少量礫砂を含む 遺物出土なし 有明粘土か
- 10b 5B7/1 明青灰色粘土
しまり強い・粘性強い 鉄分の沈着少量
シルト質の土を少量含む 有明粘土か

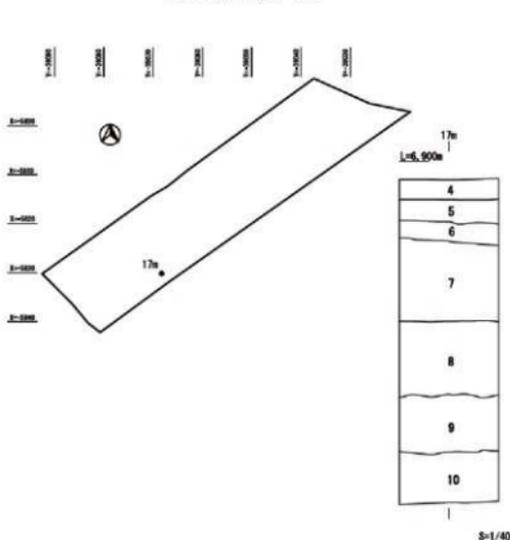
第 30 図 基本土層図 13

五名平野条里跡 07-IV区



- 1 2.SY2/2 黒褐色細砂土じり細砂
しまりなし・凝結性 腐代堆作土
- 2 SY5/3 灰オリーブ色細砂土じり細砂
しまりなし・凝結性 マンガン酸を少量含む
腐代堆作土
- 3a 2.SY6/2 灰黄色粘土
凝結性 マンガン酸多量
上部に腐代酸化鉄を少量含む 近郊堆作土
- 3b 2.SY7/2 暗灰黄色粘土
凝結性 上部にマンガン酸多量
下部に酸化鉄を多量を含む 近郊
- 4 7.SY96/2 灰褐色細砂シルト
凝結性 マンガン酸少量 腐代酸化鉄を含む 中世
- 5 7.SY94/1 暗灰色シルト混細砂
ややしまりあり・凝結性 マンガン酸少量
腐代酸化鉄を少量含む
120cmの土層礫片少量出土 輸入凝結を含む
中世堆作土
- 6 10Y95/2 灰黄褐色シルト混細砂
ややしまりあり・凝結性 腐代酸化鉄を少量含む
流水の影響あり 30・100cm程度の礫層片少量出土
近代
- 7 10Y95/2 灰黄褐色シルト
凝結性 マンガン酸少量 酸化鉄を多量を含む
水田の可能性あり
(古式土器層・弥生後期土器)野原田式型の細砂片出土
(古式)一発生
- 8 2.SY7/2 灰黄色シルト
よくしまる・凝結性 酸化鉄を縦筋状に少量含む
腐代堆物
- 9 SY7/1 灰白色細砂混シルト
凝結性 酸化鉄を縦筋状に少量含む 腐代堆物
- 10 SY7/2 灰白色土
よくしまる・凝結性 上部砂層より細砂少量の介入あり
腐代堆物
- 11 SY96/1 オリーブ灰色粘土
しまりあり・凝結性 腐代堆物 有硝結土

五名平野条里跡 06-I区



- 1 10Y94/2 灰黄褐色細砂混シルト
しまりなし・凝結性 0.5mm程度の細砂を含む
腐代堆物
- 2 2.SY4/3 オリーブ褐色シルト
ややしまりあり・凝結性 マンガン酸少量
腐代酸化鉄を多量を含む 腐代堆土
- 3 2.SY5/3 黄褐色細砂混シルト
しまりなし・凝結性 マンガン酸多量
腐代酸化鉄を多量を含む 近代
- 4 2.SY5/2 暗灰黄色細砂混シルト
しまりなし・凝結性 マンガン酸多量
腐代酸化鉄を少量含む 近代
- 5 2.SY4/2 暗灰黄色シルト
ややしまりあり・凝結性 マンガン酸少量
腐代酸化鉄を少量含む 礫土層少量
酸化鉄を少量含む 5層出土、中層礫層出土
土器層・瓦器層出土、瓦器層出土
中世
- 6 2.SY3/3 暗オリーブ褐色シルト
しまりなし・凝結性 マンガン酸多量
腐代酸化鉄を少量含む 土器層がみられる
腐代堆物
- 7 10Y95/3 に近い黄褐色シルト混細砂
しまりなし・凝結性 マンガン酸少量
腐代酸化鉄を多量含む
0.5mm程度の細砂を下部に少量含む
5.0-10cm暗灰色(10Y95/1)粘土を小ブロック状に
少量含む
腐代堆物
- 8 10Y94/3 に近い黄褐色細砂
しまりなし・凝結性 細砂多量 流水の影響あり
腐代堆物
- 9 10Y96/3 に近い黄褐色シルト
しまりあり・凝結性 粒状に酸化鉄を多量を含む
腐代堆物
- 10 7.SY96/1 暗灰色粘土
しまりあり・凝結性
上部に腐代酸化鉄を少量を含む
腐代堆物 有硝結土

第 31 図 基本土層図 14

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代

(1) 縄文時代 中期の遺構と遺物 (平成14～20年度・02～08区)

本遺跡では縄文中期遺構は1基のみであった。06-Ⅰ区 ST-01 (第41図)である。長軸70cm・短軸55cm・検出の深さは約10cmの小規模の不定形土坑であるが、破片ではあったが阿高式土器を伴う時期の廃棄土坑になるであろう。検出層は06-Ⅰ区 11a層で土色は2.5GY 5/1 オリーブ灰色、細砂混じりのシルト質で斑鉄を多く含む。よく締り粘性も強い。埋土はこの土質とほぼ変化がなく、やや締りがなかったことが検出に繋がった。これを含め、本遺跡では下層にこのオリーブ灰色(青灰色土)が存在し、遺構検出に努めたがこの土層での遺構は06-Ⅰ区 ST-01 だけであった。

流れ込みであるが縄紋を持つ胴部片が1点(Na5)と02-Ⅱ区の流路では後期中葉の北久根山式土器が流れ込みの中に存在した。

(2) 縄文時代後晩期の遺構と遺物 (平成12～13年度・01～08区)

概要 標高4mを中心に位置する。北側は谷地形になっており、地形の等高線に併行しSD-07、SD-08の2条の溝を検出しており、縄文時代後晩期の土器がまとまって出土している。

また南側の標高4.2mの高い微高地には大きさは径6.5～7mの円形の掘り方を持つ柱穴が円形に廻る構造の竪穴建物を2軒検出している。

① 竪穴建物

SI-42 (第36図)

01-Ⅰ区の標高4.2mの一番高い部分に位置する。東側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約7mと推定される。検出の深さは約10cmである。主柱穴は5基以上検出されている。柱穴の掘り方は約30～50cmで深さは20～35cmで平均の深さは約30cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

SI-34 (第45図)を検出した真下に検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。炉はそうした状況のため検出できなかった可能性がある。遺物はSI-42、SI-43を検出する際にSI-41として検出した際に上層には弥生時代終末～古墳時代前期の高杯や甕片等が出土しているが下層には刻目凸帯文土器の破片が数点含まれる。また、胴部の屈曲部が明瞭でない深鉢片も出土している。

掘り方が円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代後晩期の刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-43 (第37図)

01-Ⅰ区の標高4.2mの一番高い部分に位置する。東側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約6.8mと推定される。検出の深さは約10cmである。主柱穴は5基以上検出されている。柱穴の掘り方は約30～50cmで深さは20～35cmで平均の深さは約30cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

SI-34を検出し、掘削して、さらに下層に掘削し検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。

炉はそうした状況のため検出できなかった可能性がある。遺物はほとんど検出できていない。

遺物はSI-42、SI-43を検出する際にSI-41（第85図）として検出した際に上層には弥生時代終末～古墳時代前期の高杯や甕片等が出土しているが下層には刻目凸帯文土器の破片が数点含まれる。また、胴部の屈曲部が明瞭でない深鉢片も出土している。

掘り方が円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。2重に柱穴を検出されていることから、建物が拡張された可能性もある。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代晩期の刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-166 (A) (第38図)

01-3区の標高4.2～4.4mの一番高い部分に位置する。西側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約8mと推定され、検出の深さは約10cmである。主柱穴は6基以上検出され、柱穴の掘り方は約20～40cmで深さは20～25cm、柱痕跡は約10～15cmである。掘り方の中央やや北側に軸長55cmの不整形な円形の焼土の範囲を検出している。地床炉と考えられ焼土の深さは3cm程とごく浅い。

炉の北東約1m離れた範囲に黒色磨研土器様式の浅鉢や粗製深鉢片と打製石斧4点が出土している。土師器片も1点混入している。浅鉢は口縁端部に一条の沈線が施され、黒色磨研土器様式の古閑式併行期と推定できる。その他の細片は多数出土しているが、黒色磨研土器の浅鉢の破片が数点の他深鉢の胴部片等多い。突帯文土器も3点出土している。

No.2は先端部に擦痕を持つ一部分磨いた石斧と考えられる。先端部及び基部は欠損している。厚さ1.3cmと扁平で土掘り具の用途の可能性がある。No.1は使い込んだ石製穂積み具と考えられる。孔部距離が1～1.5cmの穿孔を持つもので径も8mmと比較的大きく古い様相を持つが明らかに弥生時代中期以降のものであり、上からの混入品の可能性がある。後述するがSI-34に併行する竪穴建物が存在した可能性を示唆するものと考えたい。

炉があり、円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代晩期古閑式併行期から刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-166 (B) (SI-162) (第38図)

01-3区の標高4.2～4.4mの一番高い部分に位置する。西側が調査区外に伸びている。SI-166 (A)に似られて検出している遺構である。SI-166に大部分が重複している状況である。掘り方は楕円形を呈すると推定され、南北軸が推定約6.5mと推定される。短軸は約6m、検出の深さは約10cmである。主柱穴は6基以上検出され、柱穴の掘り方は約20～40cmで深さは20～25cm、柱痕跡は約10～15cmである。掘り方の中央やや北側に軸長55cmの不整形な円形の焼土の範囲を検出している。地床炉と考えられ、焼土の深さは3cm程とごく浅い。

床面近くに粗製深鉢（条痕が残るもの）、精製深鉢の胴部片・底部、黒色磨研土器様式の鉢の破片等が出土している。弥生後期の長頸壺や甕の脚台も出土しており混入品と考えられる。炉があり、円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から黒色磨研土器の黒色磨研土器様式古閑式以降と考えられる。

SI-163 (第40図)

01-3区のやや標高の低い部分に位置する。北側が古墳時代の竪穴建物SI-103(SX)が建てられたため、十分検出できていない。

掘り方は楕円形を呈すると推定され、軸が推定約5.3～6mと推定、検出の深さは約20cmである。主柱穴は3基以上検出され、北側はSI-103により壊されている可能性があり、柱穴の掘り方は約25～40cmで深さは22～40cmである。炉は検出されていないが、東側の調査区外に存在する可能性がある。

粗製の土器の深鉢の破片が1点出土し、横方向の条痕が残存する。また弥生土器製の脚台等が混入している。円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代後晩期晩期と考えられる。

② その他の建物 (第33図)

SI-165とSI-164は、はSI-163とSI-166(A)の間に検出されており、径6m程の円形の掘り方と推定しているが、調査区外に伸びているため明確ではない。SI-164では柱穴を2基検出しているが、円形には柱配置を検出できていない。遺物は刻目凸帯文土器片1点と黒色磨研系土器(精製土器)及び条痕が残る粗製土器を出土しており、黒色磨研土器様式から刻目凸帯文土器様式併行期の時期と考えられる。

SI-167はSI-166(A)の南東に位置するもので円形の掘り方とだけしか判明していないが、埋土から刻目凸帯文土器(口縁部からやや下がって刻目凸帯が付く形式)が出土しており、刻目凸帯文土器様式に併行する時期のものと考えられる。

③ 円形周溝状遺構 (第36図)

01-1区の標高4.2mの一番高い部分に位置する。SI-42の南西側にSI-42を切って位置する。幅20～40cm、深さ約15cmの溝が円形に巡る。溝に囲まれた範囲は長軸1.2mの楕円形から円形でやや隅丸方形にも見える形状で、少なくとも4回及び6回の小工程に分けて掘削されているような形状である。SI-34を検出し、掘削して、さらに下層に掘削し検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。本来は弥生時代のSI-34とさほど検出面は変わらず、20cm以上深かった可能性がある。

検出状況から熊本市石の本遺跡や熊本県上益城郡益城町の古閑北遺跡出土の縄文時代後晩期の円形周溝遺構等と同様な性格の遺構と推定できる。

④ 溝

SD-07 (第40図)

01-2区の東側の低い部分に位置する。

幅2.6m、断面台形状の深さ35cmである。埋土は3層に分けられる。底面の幅は約1mである。北から南方向に流れている。

埋土から縄文時代後晩期の粗製土器及び精製土器が出土している。埋土2層からの出土が多く、1/3以上復元できるものも3点以上あり、比較的大きな破片が多い。横方向の条痕文が顕著に残存し、波状になる浅鉢や1条の沈線を施す黒色磨研土器浅鉢、沈線を施されず横方向の丁寧なミガキを施し上方に広がり、

端部がやや内傾する形式のもの、屈曲部が胴部の下の方で明瞭になった破片も出土している。このことから黒色磨研土器様式古閑式新段階を中心とする時期に埋没したと考えられる。

SD-08 (第40図)

01-2区の東側の低い部分に位置する。平面で十分確認できていないが、SD-08に切られている。幅2m、断面台形状の深さ35cmである。埋土は3層に分けられる。底面の幅は約1mである。北西から南東に向かい伸びている溝と考えられる。

埋土から縄文時代後晩期の粗製土器及び精製土器が出土している。

⑤ 遺物包含層

01-3区の溝の重複地域の埋土に粗製の縄文土器深鉢片が入っている。下層に縄文時代後晩期の遺構が存在した可能性がある。

第2節 弥生時代

(1) 後期の遺構・遺物

概要 01-1・2区の標高4.6m微高地に長軸7.5mの竪穴建物1基、やや下がった標高約4.5mにSX-20(土坑)が1基検出されている。明確に弥生後期と認定できるものはそれだけである。

① 竪穴建物

SI-34 (第47図)

01-1区の標高4.6mの一番高い部分に位置する。西側が一部調査区外や排水のためのトレンチ上層からの溝等により壊されており検出できていない。

掘り方は隅丸方形を呈すると推定される。南北軸が推定約8mと推定される。検出の深さは約40cmである。主柱穴は十分検出できていない。下層のSI-166を検出した際の柱穴等が主柱穴になる可能性がある。例えばSI-166のP7やSI-166の炉の周りに検出されている柱穴等で2本柱の主柱穴構造の竪穴建物の可能性がある。柱穴の掘り方は約30～50cmで深さは20～35cmで平均の深さは約30cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

中央より南側に長軸80cm、短軸50cm、深さ40cmの土坑を検出している。埋土2層に焼土を、3層に炭を検出しており炉と考えられる。埋土から径約2mmの水色のガラス小玉(No.7)が出土している。

埋土1層には口縁部が大きく外反し、胴部に刻目突帯文が付く内外面ハケ目が残存する甕の上部1/4程に接合できる3片の口縁部を含む破片が出土している。また、口縁に平坦面を持たない甕の口縁部も出土している。また、埋土3層から長頸甕の破片も出土している。

なお、埋土1層から庄内式から布留式にかけての口縁部の特徴を持つ破片も出土しているが細片で摩滅が著しい。混入品と考えられる。縄文時代晩期の浅鉢の破片も2点出土している。方形で炉も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺構検出状況等から弥生時代後期前葉から中葉と考えられる。

② 土坑

SK-20 (第47図)

SI-34の北側の掘り方から5m程離れたところに位置する。長軸70cm、短軸65cmの楕円形の平面で、深さ60cmである。東側の谷部に隣接し、深さは浅いが地下水位によっては井戸の用途を果たしていた可能性も考えられる。埋土の最下層は灰色の粘土が堆積していた。最下層に弥生土器の壺が大きく2つに分けられて出土している。復元する口縁部、底部が欠損し、それぞれ1/2から1/3程しか残存していないが、意図的に廃棄された状況である可能性がある。

No.8は弥生土器の壺で頸部が上方に大きく立ち上ることから考えて長頸壺と考えられる。細かい型は口縁部及び底部が欠損して適用できないが長胴で、肩部があまり張らないが、タキが残存しなく、縦ハゲが明瞭に残存することから考えて弥生時代後期後半と位置づけられる。SI-34と関連する遺構の可能性はある。

(2) 弥生時代終末から古墳時代前期 (平成12・13年度・01-1～8区)

概要 01-1・2区の中央及び3区の東側の標高4.8mの微高地に竪穴建物、その西側に近接するように南北方向の溝及び井戸を検出している。切り合い関係から見て少なくとも3時期、溝等のあり方等から小時期を設定するなら5～6時期の時期差を設定できると考えられる。

時期的には庄内式土器から布留式中段階、北部九州久住福年2A～3B期に併行する時期と考えられる。

① 竪穴建物

概要 調査区の高い部分に重複して検出されている。調査区外へ伸びる建物が多く規模等を比較するのは困難であるが、4～5mの規模のものが多い。また比高差20cm程のものであるがベッド状遺構が多く、弥生時代以来の構造が古墳時代前期まで踏襲されていることがわかる。

また焼失した建物とそうでない建物があり、焼失建物も2軒切り合っているものがあり、また位置的に考えて焼失建物も2時期ある。焼失していない建物もSI-103・104・107・141が切り合っており、位置関係から考えて3～4時期あるとすれば、5時期以上の小時期が考えられる。井戸の掘削時期と考え合わせると集落の密度も考える必要がある。さらに、柳町遺跡に隣接する区域であり、土坑等の貯蔵エリアが南東に分布していること北東側に谷が存在する事等から考えて、柳町遺跡で検出した集落部分の南東端に位置する集落と考えている。

SI-02-1 (第78図)

01-1区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-02-2及びSI-02-3と重複して検出されている。3つの建物では一番新しいものと推定できる。構造は隅丸方形を呈する軸長約4mの竪穴と推定される。検出の深さは約15cmである。

位置関係からSP-1・SP-3・SP-6の3本を主柱穴とする竪穴建物と考えている。柱穴の掘り方は30～40cmで深さは約35～40cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやく大きく検出されると考えられる。中央より北側に長軸20cm、短軸15cm、深さ3cmの焼土範囲を検出している。炉と考えられる。SK-18はSI-02-1南東隅に位置し、長軸短軸約1m、深さ約20cmで貯蔵穴と考えられる。埋土は3層に分けられる。1層上層に土師器片を含む。

堅穴が方形で炉も確認できることから建物と推定でき、年代の推定は困難であるがSI-02-2出土遺物や構造や遺構検出状況から古墳時代前期と考えられる。

幅4.5cm、高さ2cm、厚さ3mmの手づくね土器、径12cm程で高さ8cm程の小形丸底皿、厚さ2mmで口縁部付近が内傾し、内側を丁寧になでた赤焼きの精製した杯、口縁部を強くなでて外側に外反させた鉢や高杯脚部等特徴的な器種が良好な遺存状況で出土している。口縁部高杯の脚部や内面削りの厚さ4mmの甕片に混じって脚台も2点出土している。検出した深さも浅く、一番標高の高い箇所位置するため廃棄するにあたり、祭祀を行っていた可能性が考えられる。

推定時期は、流れ込んだ遺物から北部九州久住編年Ⅱ期併行期と考えられ、庄内式中段階から布留式併行期と考えられる。北部九州久住編年のⅡA期まで上る可能性も考えたい。

SI-02-2 (第78図)

01-1区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-02-1及びSI-02-3と重複して検出されている。3つの建物では時期的には間に位置する時期のもので推定できる。構造は隅丸方形を呈する長軸長約4.8m、短軸3.8mの堅穴と推定される。検出の深さは約10cmである。

位置関係からSP-12・SP-4・SP-9・SP-8の4本を主柱穴とする堅穴建物と考えている。柱穴の掘り方は30～40cmで深さは約30～35cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。炉は検出できていない。遺物はほとんど検出できていない。

堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。炉はSI-02-1により削平された可能性がある。年代の推定は困難であるが、床面近くに流れ込んだ細片や構造や遺構検出状況から弥生時代終末から古墳時代前期にかけてと考えられる。(SI-02-1参照)

SI-02-3 (第78図)

SI-02-1及びSI-02-2と重複して検出されている。3つの建物では時期的には一番古い時期のもので推定できる。掘り方は隅丸方形を呈する堅穴である。SI-02-1やSI-02-2に覆われて明確でないが、長軸長4.5m前後の堅穴と推定される。検出の深さは約10cmである。

位置関係からSP-11・SP-10・SP-7もしくはSP-3・SP-7・SP-11等を主柱穴とする4本柱構造のもので考えている。柱穴の掘り方は30～35cmで深さは約30～35cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。炉も遺物はほとんど検出できていない。

堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。炉はSI-02-1等により削平された可能性がある。年代の推定は困難であるが、SI-02-1床面に流れ込んだ遺物や構造や遺構検出状況から弥生時代終末から古墳時代前期にかけてと考えられる。(SI-02-1参照)

SI-103 (第79図)

01-3区の標高4.6～4.7mの一番高い部分に位置する。SI-104及びSI-141を切るように位置する。北側東側南側が調査区外に伸びる。大部分が調査区外のため、規模を推定するのは困難であるがベッド状遺構及びその他の掘り方の形状から考えて6m以上の掘り方と考えられ検出の深さは約40cmである。西側に幅約15cm、深さ約8cmの壁溝、西側の高まりは幅約60～70cm長さ3.6m以上のベッド状遺構と考えられる。主柱穴は不明であり炉も遺物はほとんど検出できていない。

堅穴建物と断定するには要素が足りないと考えられるが、ベッド状遺構を持つこと、壁溝と考えられる

溝があることから堅穴建物と推定したい。時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

埋土から出土した遺物を見るとハケ目の破片が多いが、その中に内面削りのものが5～6点入る。タタキを施し、内面もハケ目のものもある。口縁部は上方につまみ上げた土師器の甕口縁部片やや時期の下りそうな在地系の甕の口縁部片が出土している。

推定時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況や構造から北部九州久住編年ⅠB期～Ⅱ期併行期と考えられ、弥生時代終末期（庄内式中段階併行期）以降と考えられる。ただ、根拠が不足しており、内面削りの5mm程の厚さの破片もあり、北部九州久住編年のⅢA期以降まで下る可能性もないとは言えない。

SI-104（第79図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-107に西側の肩部を東側はSI-103に切られている。SI-141に切れ、南側は調査区外に伸びている。調査区外に伸びたり、SI-103に切られたりして規模を推定するのは困難であるが、4m以上の規模を持つ堅穴と考えられる。SI-103との境界に径35cm、深さ30cmの柱穴を検出している。2本柱もしくは4本柱の主柱穴の建物と考えられ炉は検出できていない。

幅1m、長さ1.4m以上のベッド状遺構を持つ。南側が平面で十分検出できず長さが確認できなかったがA-A'の断面からベッド状遺構を観察できることから、高さ10cmの西側一面にベッド状遺構が存在したと考えられる。遺物は小形丸底甕の口縁部や胴部片3点、甕の口縁部片の他は胴部細片で厚さ2mm程の細片と厚さ6mmの内面削りのものが出土し、堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定でき、西側の高まりはベッド状遺構と考えられる。

埋土2層からは口縁部の外側につまんだ土師器甕の破片や埋土1層からは口縁部を内側外側につまんだような口縁の形式のものも出土している。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から考えて幅を持たせて北部九州久住編年ⅡCからⅢA期併行期と考えられ、古墳時代（布留式古段階併行期）を中心とする時期と考えられる。

SI-141（第79図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。東側はSI-103に南側はSI-104に西側の肩部を東側はSI-103に切れ、北側は調査区外に伸びている。調査区外に伸びたり、SI-103に切られたりして規模を推定するのは困難である。掘り方の形状は方形で、径約40cm、深さ約30cmの柱穴を1基検出しているが堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。

埋土から厚さ6mmで底径2.5cmの甕の底片他が出土している。尖底で径2cmくらいの底部の痕跡を持つ。時期は埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅠBからⅡA期併行期と考えられ、弥生時代終末（庄内式中段階から新段階併行期）と考えられる。ただ年代を推定できる材料が少なく時期が下る可能性も考えられよう。

SI-107（第76・79図）

01-3区の標高約4.7mの一番高い部分の微高地に立地する。SI-107を切っている。SI-52も切っている。西側がSI-51に切られており、東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は4.2mの規模を持つ堅穴である。柱穴は検出できていない。また遺物もほとんど検出できていない。小形丸底甕の厚さ2mm程度の口縁部細片2点、胴部片1点、厚さ4mmの内面削りの胴部片等11点他に遺構検出がうまくできなくて他

の遺構番号で取り上げたりしたものも含めても30～40点程の細片が出土しているのみである。タタキを胴部に残す破片や布留式土器系の口縁を持つ破片も出土している。

竪穴建物と断定するには要素が少ないが、他の竪穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定できる。ベッド状遺構はSI-51に壊されている可能性が高い。時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

時期は、埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡBからⅢA期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。判断できる材料が少ないので時期は下る可能性もある。

SX-136（第80図）

01-3区の標高約3.6mの部分に立地する。

東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は2.3m・東西軸は2.6mの規模を持つ竪穴である。柱穴は検出できていない。また遺物もほとんど検出できていない。

竪穴建物と断定するには要素が少ないが、他の竪穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定でき、遺構西端にSE-140が存在する。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

SI-51（第81・82・83図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-52を切り北側は調査区外に伸びている。

調査区外に伸びているため全体の規模を推定するのは困難であるが、長軸4.2m短軸約3.7mの規模の方形の竪穴である。柱穴は深さ25～30cmで25～40cmの径を持つ楕円形から円形のを4基検出している。位置関係から4本柱を主柱穴とする構造のものと考えられる。焼失状況を確認でき火災建物と考えられる。焼土は中央付近及び南側に顕著であり、炭は全体に分布するが南側中央及び北東側に特に顕著である。しかしながら、よく見ると中央付近を指して炭が分布しており垂木材が焼失して炭になっている状況と考えられる。ただ壁際に細かな炭が多く、壁材に使われていた木材の焼失状況も混在していることが伺える。下層に南側及び西側に土器片も出土している。竪穴のほぼ中央に推定されているところに焼土が顕著であり、火災の時の焼土と重なって十分検出で出来なかったと考えたい。幅1m、長さ4m、高さ約20cmの高さのベッド状遺構を持つ。A-A'の断面からベッド状遺構を観察できることから、高さ10cm東側一面にベッド状遺構が存在している。焼土と共に土師器の細片が出土している。ほぼ穹形になるのは高杯1点である。複合口縁壺や直口壺の口縁等3点が甕や壺等の胴部片と共に床面に流れ込んだ状態で出土していると考えられる。

高杯は杯部の複合部分が明確でなくやや厚みがあり、裾がやや下方に広がる形式である。複合口縁壺の1つは端部の面が明確で複合部の接合部に厚みがあり古い様相はある。他の甕の破片は上方につまみ上げる庄内式系壺の影響を受けた破片や外方につまみあげる弥生後期の系壺を持つ破片や外面にタタキを残す破片も存在する。SI-52と似た出土状況である。

竪穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。西側の高まりはベッド状遺構と考えられる。

時期は、1層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況からセット関係が明確でないので幅を見込んで北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段階

併行期)と考えられる。

SI-52 (第81・82・83図)

01-3区の標高約4.7mの一番高い部分の微高地に立地する。SI-107を切っている。SI-52も切っている。西側がSI-51に切られており、東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は4.2mの規模を持つ竪穴である。柱穴は検出できていない。またNo.46の小形丸底壺以外の遺物は破片である。No.46は口径約9cmで口縁部が外方に広がり、つまみ上げ、胴部は肩が張り、口縁部に比べて小さいものである。長頸壺の口縁部と考えられる頸部付近で中に入り、口縁端部は中に入りながらつまみ上げているものがある。No.45は埋土1層からの出土である。壺の口縁端部が押さえてやや上方につまみ上げている。器壁は胴部で6mm、頸部で15mmと厚い。

No.44は鉢で有段鉢に後出する器形である。底部は厚みが7mmあり、口縁部は上方に広がり、端部は上方につまみ上げている。複合口縁壺の口縁部周辺の破片も出土しているがそれ以外は胴部片である。口縁端部は外側に丸みを持ち器壁は8mm程である。他にも細片が多数出土している。壺胴部にタタキ目を残し、内面ハケ目で口縁部は外方につまんでいる弥生後期土器の糸罫を引く破片も少なからず見られる。

竪穴建物と断定するには要素が少ないが、他の竪穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定できる。D-D'やG-G'の断面を見ると幅15から20cmの段を持つ。ベッド状遺構はSI-51に壊されている可能性が高い。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年(ⅡB～)ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半(布留式古段階から中段階併行期)を中心とする時期と考えられる。ただし、廻る土器も見られ、時期が2段階以上廻る可能性もある。それら古相の土器群は重複する建物に伴う時期と考えている。

SI-53・SX-102 (第84図)

01-3区の標高4.6mの一番高い部分に位置する。SI-52を切っている。南側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難であるが、長軸4.2m短軸約4.4m以上の規模の方形の竪穴である。柱穴は深さ30～40cmで25～30cmの径を持つ楕円形から円形のを4基検出している。位置関係から4本柱を主柱穴とする構造のものと考えられる。

埋土の東側の約3mの範囲で炭や焼土を検出している。この部分をSX-102として記録保存し、長さ30～50cmの比較的残存状況の良好な炭火物が出土している。焼土の範囲は上層が削平されているため、竪穴の全域に広がっていないと推定され、火災建物の可能性が考えられる。伊は中央付近が激しく焼失して特定できない。

SX-102からの土師器の壺(No.48)及び小形丸底壺(No.47)が下層に出土している。焼土と共に他に土師器の細片が出土している。床面に流れ込んだものと考えられる。上層には小形丸底壺の破片等が他に3点や厚さ2～3mmの薄手の破片が多数出土している。

竪穴が方形で柱穴も4基確認できることから建物と推定できる。ベッド状遺構の有無は不明とである。

時期は、埋土3層や1層に廃棄されて流れ込んだ遺物から北部九州久住編年ⅡBからⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式新段階から布留式古段階併行期)と考えられる。

SI-15 (第85図)

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-41の上層部分である。北側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難である。一方軸が3.0m以上の規模の方形の堅穴としか推測できない。柱穴は検出できていない。

状況は火災建物と考えられる。土器が中央付近に多く、焼土・炭化材は壁際に多い。焼失建物が片付けられてその時に土器を廃棄した（儀礼？）と推定したい。炭化材は中央付近を指向して出土した他壁に併行している小形の炭化材も出土しており、垂木材や壁抑えの杭材等も含まれている可能性がある。

焼土と共に土師器の細片が出土しているが、廃棄された遺物がほとんどである。床面からやや深い状況で流れ込んだものと考えられる。

埋土1層から小形丸底壺片7個体以上、高杯6個体以上、複合口縁壺の口縁部片1点等が出土している。

小形丸底壺は口縁部が4cm程度の高さのもので端部の外側に粘土のつまみ上げた痕跡(丸み)が残存する。高杯は脚部上部内面に横方向にへら削りが残存し、脚部の裾が明確に屈曲するものである。脚端部外面はやや下方に下がる。口縁部は屈曲するもので上方に広がるが直線的で口縁端部は外側につまみあげている。複合口縁壺は外方に大きく広がるもので、タテハケが外面に残存する。頸部の高さは4cm程で、口縁端部は面を明瞭に持つものでやや外方につまみあげている。

壺は布留式土器の特徴を持つものが存在する。口縁端部を上方につまみ上げるように丸みを持ち、端部内面を内側につまみあげるため、内面に粘土が丸みを帯びて残存する。そうした器形は大きく半分以上接合できるものも2点以上出土している。壺の胴部片は厚さ2mm～1cmのまで様々なものが出土している。また、口縁部が外方に伸び外側につまみ上げただけや端部に面を持ち、回線状に丁寧になでている在来系のものも存在する。1/3程接合できた個体は2～4mmの厚さである。壺片も7個体以上残存度の高いものが出土している。小形丸底壺は精製のものが3点、そのうち1点は肩部が張り、幅の方が器高より広いものである。また、粗製の精製土器を模倣したものも出土している。器壁は2mm程と薄いが調整はハケ目が残り、頸部が明瞭ではないものである。また、SX-35(第98図)の小形丸底壺に類似する器形で、径13cm、高さ14cmの完形のものも出土している。ミニチュア土器も1点出土している。

堅穴が方形だが、建物と特定するには、要素が足りない。しかしながら、壁が垂直に立ち上がることや下層にSI-40が検出でき、床面が埋土で検出が困難であることや半分以上が調査区外である事を考えると建物と考えたい。時期は、埋土1層に廃棄された遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡC期併行期と考えられ、古墳時代前期前半(布留式古段併行期)と考えられる。

SI-41 (第85図)

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。上層にはSI-15があり、ある程度堅穴が埋没してから、この建物が建てられていることから考えて、SI-15と関連するものと考えられる。北側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難である。一方軸が4.8m以上の規模の方形の堅穴としか推測できない。柱穴は検出できていない。焼土と共に土師器の細片が出土しているが、完形になる個体はない。床面に流れ込んだものと考えられる。

堅穴が方形だが建物と特定するには要素が足りない。しかし壁が垂直に立ち上がることや下層にSI-40が検出でき、床面が埋土で検出が困難であることや半分以上が調査区外である事を考えると建物と考えた

い。時期は、重複する遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

153-S1 (第105図)

01-3区の標高約4.6mに位置する。01-1区の標高の高い部分に位置するSI-52に隣接する。縄文時代の堅穴建物SI-166を検出している時に検出できた。掘り方の平面形は長軸約5m、短軸約4.7mの長方形である。検出した深さは約25cmである。北東隅に幅と長さが1.4m、高さ15cm程の規模のベッド状遺構が付属する。掘り方内に8基以上の柱穴を検出している。

南西隅がうまく検出できなかったため不明部分が多いため推定による箇所が多く、2本柱構造の可能性もあるが、4本柱構造の主柱穴の建物が建て替えられていると考えている。柱穴の規模は径20～35cmの円形で深さ25～40cmである。伊は不明である。

出土した遺物は細片が多く、量的に少ない。内面ハケ目の甕・壺片6～7点、内面削りの甕片2点が、出土している他、縄文晩期の堅穴建物(SI-166等)を検出する際に弥生後期の長頸壺や弥生土器片が混入している。口縁部端部が一部上方につまみあげている破片も出土している。いずれも流れ込みの遺物である。

方形でベッド状遺構伊も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺構検出状況等から弥生時代終末から古墳時代前期前半と考えられる。検出した手順や弥生後期の系譜を引く土器の方が多数を占めている点や赤彩しているものも1点含まれるため、弥生時代後期後半以前にさかのぼる可能性も指摘しておきたい。

② 建物の可能性がある遺構

SX-804 (第111図)

01-8区中央付近に位置する。西側は調査区外に伸びている。長軸5.5m以上、短軸4m以上、深さ10cm以上の掘り方を持つ。SX-801が掘り方内に検出されている。径1.2m程度の土坑と推定できるが深さ40cmだが中層に遺物の細片が出土している。この遺構の上から掘り込んでいるが掘り方の検出面が浅いため、使用時の床面に伴う可能性もあり、作業場の土坑か。径25～30cmで深さ25～30cmの柱穴も検出しており、4本柱の主柱穴構造の可能性もある。掘り方は浅いが、柱穴を2基検出しているので、土坑が伴えば、決め手には欠けるが、建物の可能性が高い。そうすると、新たな微高地が01-1～3区とは別に広がっている可能性があるが、周辺の調査で土坑を検出しているのでそれに伴う何らかの施設の可能性があるが、01-1～3区のような長期的な集落とは考えにくい遺物の量や他の明確な遺構が検出されていないことが弱い点である。

埋土1層からは胴部外面にタキキが残存する破片が2点出土している。内面はハケ目のものもある。5cm以下の細片であり、いずれも流れ込みの遺物である。

SX-803 (第111図)

8区中央付近に位置する。西側は調査区外に伸びている。長軸3.5m以上、短軸3m程度、深さ5cm以上の掘り方を持つ。中央に径35cmの平面円形の深さ15cmの土坑を検出している。遺物は細片が北側の底面付近に散らばって出土している。柱穴は検出できていない。

掘り方が浅く、柱穴を検出できていないのが、建物と認定するには難しいがSX-804が建物であれば、可能性が高いと考えられる。外面はタキキを残す8cm以上の甕の破片で器壁は薄く弥生土器終末以降のも

のと考えられる。

SX-718 (第106図)

01-7区の中央部に位置する。SD-717に切られている。十分に平面形を検出していないが、長軸5.6mで方形に検出している。深さは15cm程である。SX-718の中央やや北よりの上層部に土坑としてSK-716を検出しており、甕が1個体出土している。長方形でタタキを残し丸底である口縁部は外側及び上方にもつまみ上げている形式である。内面は丁寧にまで滑している。器壁は頸部付近では4mmだが、薄い部分では2mmである。SK-716はSX-718の上層部と考えられる。建物するには柱穴や炉やベツト状遺構等を検出していないので難しいが、可能性として上げておきたい。

時期はSX-718出土遺物から北部九州久住層年I B(～II A)期併行期と考えられ、弥生時代終末(庄内式古段階から中段併行期)と考えられる。

これが建物とすると水田と集落と区画溝の関係が難しくなり、そうした区画以前のSI-34等との関連も考える必要がある。

③ 井戸と関連する土坑

概要 建物が立地する南東側に位置する。建物から2～10mしか離れていないところに位置する。

井戸には最下層に甕等を完形で沈めているものもあり、一方そうした儀礼が見られないものもある。

廃棄の状況も2種類ある。上層に井戸の範囲よりさらに広い範囲に土器が廃棄されている状況が検出できるものと、そうした状況が見られないものがあり井戸に関する儀礼を考える上で貴重な資料と考えられる。

SE-31 (第86図)

01-1・2区・01-6区の間、標高は約4.6mに位置する。大局的な平面形は径約1.4mの円形ではあるが、残存している状況では辺50～80cm程の緩やかな多角形(六角形)を呈している。深さは約2mである。底面は約50cmの円形で底面から深さ70cmは直に掘削されている。当時の湧水の深さの可能性もある。それ以降は断面が地表面に至るまで広がる。少なくとも6段の工程を経て掘削されていると考えられる。

埋土最下層には遺物は見られない。埋土4層では自然木と共に小形丸底甕(No.52)が廃棄されている。埋土3層では甕(No.50・51)が出土している。埋土1層は土器の破砕された状況である。

No.52は小形丸底甕で底部は意図的に径2～3cm程が穿孔されており、4～6cm程の範囲が穿孔により剥離している状況である。底部は薄く丁寧に工具でなでられているが、立ち上がる部分から口縁部までは縦ハゲが残存しており口縁部はやや内傾しており、古墳時代前期でもやや時期が下るものと考えられる。

最下層に遺物が見られないが、埋土4層等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。小形丸底甕が4層で出土していることから、埋没過程において儀礼が行われていたと考えられる。

埋土1層からも多様な土器が出土している。SK-27と接合する赤褐色の外面積方向にミガキを施し、内外面を一定方向にミガキを施す底部と胴部に凸帯状の変化点を持ち、台が付くかもしれない精製の鉢がある。中形の直口壺、甕は外側につまんで調整したような口縁端部をもつもの、庄内式～布留式の口縁端部の影響を受けて上方につまみあげる形式をもつもの等がある。高杯については、脚部は緩やかに広がるが、

内面には筒部と裾部が明瞭になっているものや脚部径約12cmで筒部の下部が8cm、杯接合部が3.5cmとすばまっている形式で裾は平坦に近い形状のもの2種が含まれる。小形丸底甕はSK-27出土の破片と接合するもので、径約12cm・高さ約8cmで外面は口縁部と胴部の境は明瞭でないが、内面は後が明瞭に残り丁寧に作っているものも出土している。またSK-27とSE-31を検出する前にSX-04-2が検出されているが、SK-27との切り合い関係が問題となるが、この井戸の最終的な廃棄過程における儀礼と考えたい。SX-19とSE-36との関係が参考になる。SK-27が埋没過程の廃棄に伴う土坑の可能性であろうか。

SK-04-2としては、杯部の屈曲が明瞭でない高杯の破片や布留式系の甕の口縁、小形丸底甕の胴部片等の他多数の土器片が出土している。時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住福年ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段併行期）と考えられる。SK-27（第86図）

02-1・2区・01-6区の間、標高は約4.6mに位置する。

平面形は長軸径約1.5m、短軸約1mの楕円形である。程の円形ではある検出した深さは約60cmである。

埋土は長軸の方から交互に堆積しており双方から意図的に埋められた状況が見られる。遺物は埋土1層の肩部付近に土器の破片が出土している。口縁部がやや直立する甕と長頸壺の頸部片である。甕は内面削りで外面にはやや左上がりのハゲが残存する。壺の口縁は直立して胴部は張らない器形と推定できる。SE-31と接合する破片も何点か存在する。（SE-31参照）

この土坑の用途を特定するのは困難であるが、SX-19とSE-36との関係から推定してSE-36の埋没過程における土坑と考えたい。時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住福年ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段併行期）と考えられる。

SE-36（第87図）

02-1・2区の南側に位置する。標高は4.55mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-03を切っている。大局的な平面形は径約1mの円形ではあるが、残存している状況では一辺30～50cm程の緩やかな多角形（8角形）を呈している。深さは約2.2mである。底面は約45cmの円形で底面から深さ約70cmは直に掘削されている。当時の湧水の深さの可能性がありそれ以降は断面が地表面に至るまで広がる。少なくとも7段の工程を経て掘削されていると考えられる。

埋土最下層のやや上の①層に甕が2点出土している。No.53は口縁部が内傾し、布留式土器の系譜を持つが、端部はやや外反し、端部内側に肥厚しない。底部内面に指頭圧痕を顕著に残しプロボーションは平底に近い丸底で最大胴部（肩部）は上方にあり肩は張る。ただ、厚みは胴部上半から中下半上部で6～8mmもある。口縁部のみ1/4程欠損し、意図的に口縁部を打ち欠いているように見える。

No.54は庄内式土器の系譜を持つ土器で底部内面に指頭圧痕を顕著に残し、内面の胴部上半を薄い部分で3mmに削り、細かいハゲを胴部外面に残す。プロボーションは緩やかな丸底で最大胴部（肩部）は上方にあり、肩は張る。上方口縁部はややつまみあげているものの外反しているように見える。No.84のSE-121出土の甕より型式学的に下るものと考えられる。

最下層出土の甕の口縁部が打ち欠いていることや他にも完形の土器が出土していることから井戸を使用するあたり、儀礼として行われた行為と推定している。また、後述するSE-19は断面等の観察からこの井戸（SE-36）を廃棄するにあつての儀礼を行う土坑でさらに上層に土器の廃棄儀礼が行われていたと考え

られる。SK-27とSE-31との関係も同様なものと考えられる。

埋土12層やSK-27やSE-36の上層の出土土器等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。打製石斧（No.55）は混入して流れ込んだものか。

SE-19（第87図）

02-1・2区の南側に位置し、標高は約4.55mに位置する。SE-36の北東側の掘り方を切っている。平面形は長軸径約1.1m、短軸約0.8mの楕円形であり検出した深さは約90cmである。

埋土は長軸の方から交互に堆積しており双方から意図的に埋められた状況が見られる。遺物は埋土の最下層に破砕されたように出土している。甕の口縁は内傾しながら端部は上方につまみあげているもので庄内式系甕と布留式系甕の中間形式とも言えるもの、及び径約20cmの小形丸底甕の口縁及び小形丸底甕胴部片等が検出できている。

この土坑の用途を特定するのは困難であるが、断面等の観察や最下層の破砕された土器の出土状況等を見ると、SE-31も同様な状況であることも併せてSE-36の埋没過程における土坑と考えたい。

時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～ⅡC期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（庄内式古段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

SE-114（第88図）

SI-52から南東へ5mやSI-53から西へ約5m南側、標高は4.3mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-103を切っている。SE-121に切られている。

井戸の機能としての平面形の上部は長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形ではあるが、残存している状況では一辺30～60cm程の緩やかな多角形を呈している。検出面から40cm下は径60cm、底部付近は径40cmの小形の井戸である。深さは約1.3mである。

4層では1点精製の口縁部が立ち上がり若干内傾する口縁部外面を顕著にタテ方向に磨く小形丸底甕が出土している。3層までは形状から井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。埋土3層からは径約13cm、丸底で口縁部を若干つまみ上げた形状の内面にミガキを施す完形の鉢（No.61）が出土している。その他は完形に近く図化可能な土器は埋土1層である。No.66は口縁部が接合しないため、口縁部打ち割られている可能性がある。口縁部付近の器壁が1cmもある小形丸底甕（No.60）の他、器壁が3mmの典型的な小形丸底甕（No.59）が出土している。また口縁部を若干つまみ上げ、肩部が張る甕も出土している。器壁は3mm以下で薄いものである。底だけは器壁を削り2mm以下の器壁になっている。埋土5・6層には完形の遺物は出土していない。流れ込んだりしている土器の可能性が高い。

No.58は底部の器壁は1cmもある鉢であるが、口縁部が内傾し、やや内面が肥厚する様な形式である。No.62は小形の有段鉢で底部に顕著なハケ目を残す。

他の井戸（SE-36）のように廃棄するにあつての儀礼を行う土坑が埋土上層と考えられ、底では土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。典型的な器種としては小形丸底甕や有段鉢等の小形の器種である。

古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。ただ、SE-121出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するかSE-121の埋められた時期を考える必要がある。上層の土器の廃棄儀礼がどの井戸のものかと考えるより、井戸群の廃棄とも考えられ、本来の井戸の切り合い関係を追求するのが困難なことも事実であろう。いずれにしても埋土3層や1層の出土遺物から古墳時代

前期の段階で埋没したものと見られる。

時期は、埋土3層や1層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡBからⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

SE-115（第90図）

SI-52から南東へ5mやSI-53から西へ約5m南側、標高は4.3mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-03を切っている。

井戸の機能としての平面形は実質的には径約1mの円形ではあるが、残存している状況では一辺30～60cm程の緩やかな多角形を呈している。深さは約2mである。ただ、検出時及び上層部分の大きさは長軸約3m、短軸約2.2mの楕円形である。井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。井戸の底面は約1mの円形で底面から深さ約1mは直に掘削されている。それ以降は断面が地表面に至るまで上述したように大きく広がる。

埋土6層から甕の底部（No.71）及び自然木が出土している。埋土③層から底部の器壁が1cm以上ある鉢（No.69）や埋土1層から緩やかな頸部を持つ鉢（小形丸底壺と鉢の間の形式；No.68）も出土している。No.71は底部が丸底で顕著に指頭圧痕を残す。内面の胴部上半を薄い部分で3mmに削り、細かいハケを胴部外面に残す。プロローションは緩やかな丸底である。最大胴部（肩部）は上方にあるものの内面を削ったあとナデが遺存していることでは古い傾向があり、庄内式土器の承露を持つ土器であるが底部が尖底でなく、最大胴部径は上方にある形式は布留式土器と考えられる。No.84のSE-121出土の甕より型式学的に下るものと考えられる。

時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段併行期）と考えられる。

出土遺物のあり方から土器を埋納するような儀礼が行われた形跡はないと推定している。ただ他の井戸（SE-36）のように廃棄するにあつての儀礼を行う土坑でさらに上層に土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。埋土⑥層出土土器（No.71）や切り合うSE-114・121等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。ただSE-121出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するかSE-121の埋められた時期を考える必要がある。

SE-121（第91図）

SI-52から南東へ5mやSI-53から西へ約5m南側、標高は4.3mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-103を切り、SE-121に切られている。

井戸の機能としての平面形は実質的には径約1.2mの円形ではあるが、残存している状況では一辺30～60cm程の緩やかな多角形を呈している。深さは約3mである。検出時及び上層部分の大きさは長軸約3.4m、短軸約3mの楕円形である。井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。井戸の底面は約1mの円形で底面から深さ約1.5mは直に掘削されている。それ以降は断面が地表面に至るまで上述したように大きく広がる。井戸としての規模は今回検出した中で最大である。

最下層の9層（取り上げ層位8層）にやや器形の異なる直行壺が2点出土している。1点は底部の器壁が5～6mmで口縁部がやや内傾するもの（No.75）でもう1点は口縁部が直行しながらやや外反するもので

胴部下半から底部は1cm以上も器壁のあるもの(No.74)である。甕2点、壺1点である。甕1点は一部口縁部が欠損しているが、壺は完形である。意図的に沈められた可能性がある。底面からやや深い埋土8層では、型的には一番古そうな庄内式甕及び外側にやはり肥厚する甕(No.82・84)及び広口壺(No.88)や小形丸底壺系統の壺の完形(No.80)である。No.87の口縁部付近が薄いが底部の器壁が1cmもあり、器形も口縁部が直立するものの短いものや、口縁部の特徴が甕と同じようにややつまみあげられながらも内傾する小形の壺(No.86)の様なものがある。廃棄儀礼でなく使用に伴う儀礼の可能性が高い。6層までは井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。

埋土6層には在来の長胴形の甕の底部に類似する外面にタタキが残存し、内面はハケで調整した底部に焼成前の穿孔がある甕、庄内式系統の口縁部をつまみあげ器壁が2mmと薄い口縁を持ち細かいハケを施す甕や弥生土器系の頸部に凸帯を施し、ひさご状か脚台を持ちそうな破片等特異な器種が廃棄されている。埋土4層にも径約13cm、高さ約3cmの丸底の精製品の鉢が出土し、(同様な鉢は1層でも出土している。)外面は丁寧にミガキが施され、口縁部は若干つまみ上げられている。また埋土2層では、小形丸底壺の精製品が出土し、器壁は2mmで径約16cm、高さ約9cmである。外面胴部下半は削りをナゲた後、ヘラ先で丁寧に磨いており、胴部上半はハケをナメから上部は横方向のミガキで消している。口縁部外面にタテハケは残存するもののヨコ方向のミガキを施して調整している。内面も鉄分が付着しており明確ではない部分があるがミガキによる丁寧な調整である。直口壺で胴部外面にタタキを残す破片も出土している。埋土4・2・1層でも廃棄儀礼を行っていると考えられる。

まとめ たゞ他の井戸(SE-36)のようにを廃棄するにあつての儀礼を行う土坑が埋土上層と考えられ、底では土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。典型的な器種としては小形丸底壺や有段鉢等の小形の器種である。

SE-121出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するかSE-121の埋められた時期を考える必要がある。上層の土器の廃棄儀礼がどの井戸のものかと考えるより、井戸群の廃棄とも考えられ、本来の井戸の切り合い関係を追求するのが難しかった等の事実もあろう。いずれにしても埋土6層の出土遺物は口縁部をつまみ上げているNo.82の甕や、口縁部が外側に肥厚する等の特徴から弥生時代終末から、古墳時代前期の庄内式土器段階に井戸掘削されて布留式土器併行期以前に埋設したものと見られる。

時期は埋土6層や9(8)層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から、北部九州久住編年II AからII C期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式中段階から新段階併行期)と考えられる。遺構の切り合いがSE-114及びSE-115よりさかのぼる可能性が高い。

④ 土坑

SX-04-1(第98図)

01-1・2区のSI-02の約2m南、SI-15・SI-41等の約7mに位置する。平面形は径約85cmの円形であるが、深さ約20cmで段を持ち、実質的には平面形径約45cm、深さ約35cmの円形の土坑である。土器が上層に集中して出土し破片である。井戸の埋設の際の土坑と類似した平面形及び遺物の出土状況を示すことから祭祀を行った土坑の可能性もある。

埋土上層から多数の土器片が出土している。タタキを外面に顕著に残し器壁が2mmと薄い壺が出土して

いる。高杯の杯部も丁寧で広がることや小形丸底壺の口縁も薄く丁寧であることも併せて考えると時期は、北部九州久住編年ⅡB～ⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

SX-39（第98図）

SI-02から約5m南、SI-15やSI-41から約12m南に位置する。SD-03に切られている。半分しか検出できなかったが、長軸1m以上、推定1.3m程の楕円形の土坑と考えられる。深さは約25cm残存していて、検出面から考えて約70cmの深さと考えられる。底面の形状は逆台形状である。上層には遺物が出土している。破片である。

上層に土器が廃棄されている事からSX-04-1と同様な性格の土坑の可能性もあるが、全容が不明なため性格は不明である。出土した高杯は底径11.6cmで脚部内面には絞り痕跡を残す。筒状の部分は高さ9cm、径3.5cmである。時期は埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅢA期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（布留式古段階～中段階併行期）と考えられる。

SX-35（第98図）

SI-02から約6m南、SI-15やSI-41から約10m南に位置する。SD-03・SD-28に切られている。径約1.2mの円形と言えるが、実際は緩やかな多角形と言える。深さは約45cmである。上層に小形丸底壺（完形）と有段鉢（1/3残存）が廃棄されていた。（1面）上層に土器が廃棄されている事からSX-04-1と同様な性格の土坑の可能性もある。

埋土上層から出土した土器は、胴部径よりも口径が開く口径12cmの長頸壺（小形丸底壺よりやや大形）、段の部分が明瞭な径約17cm有段鉢である。前者はNo.59を長頸化したような器形、後者はNo.62と類似する器形である。最下層には径約8cm、高さ約4cmの尖底に近い完形の手づくねの鉢が出土している。（2面）時期は埋土1層に流れ込んだ遺物等の状況から北部九州久住編年ⅡC期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階）と考えられる。

⑤ その他の土坑

SX-35と同様な規模の土坑が存在する。SK-37やSK-44である。径50～70cmの円形の土坑で深さも50～70cmのものである。遺物は顕著に出土しておらず、性格は不明である。

SK-101・SX-118・SX-126・SX-126-2（SX-137）のように1.5から1.8m、短軸約1mの土坑が存在する。SK-101からは広口壺や布留式系の壺の口縁、厚さ6mmの小形丸底壺の胴部等が出土し、北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期（布留式古段階から中段階併行期）と考えられる。径1m前後の楕円形や円形の深さ30cm前後の土坑、SX-124・SX-128・SX-106等である。これらは、いずれも遺物が顕著には出土しておらず、性格は不明である。

⑥ 溝

概要 西側に南東方向から北西方向に走る溝が南北方向に屈曲して作られている。6から7本の溝が重複しながら走っている。溝の数はSI-51～SI-103までの竪穴建物の切り合いや同時期に存在する竪穴建物の時期区分に一致するため、竪穴建物の用途は明確ではないが、集落を囲む溝と考えられる。

01-3区のSD-131～SD-134までの溝の最大幅は約2.2m、最小幅は約1m、深さは標高4.4m付近であり、1本の溝を除いて逆台形の断面を有する。

U字形の溝は01-1・2区ではSD-29、01-3区ではSD-129は西側の端に位置する溝であり、両方とも切られている溝であり、溝の中では古い時期の可能性があり、一番幅が広い溝は01-3区ではSD-133、01-1区ではSD-03で2.2m程の溝が掘削されている。

SD-03が典型であるが、溝の上層に土器が多量に出土し、ミニチュア土器や小形丸底壺や高杯等の破片が出土しており、埋める際に祭祀を行っている可能性がある。

代表的な溝について詳述する

SD-117 (第100図)

3区に6条溝がある中で一番東側に位置する。SI-121に切られている。SD-129・131と隣接する。少し抱集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。幅約1.2m、深さ約30cmで断面は逆台形状である。北側は約2mの幅のSD-131として検出され、この2m程で蛇行しながら集落の方へ囲むように伸びている。上層に廃棄された土師器類(高杯・壺)が出土し、内面削りで外面にタタキをナゲ消した尖底の甕の他、脚台を持つ甕の底部も出土している。

SD-03 (第97図)

01-3区に6条溝がある一方、01-1・2区では溝は5条しか検出できていない。南側から2番目の溝である。SX-35・SE-36等に切られている。SD-129・131と隣接する。幅約1.8m、深さ約45cmで断面は逆台形状である。東側の幅の広い所で約2mである。SD-25・28に隣接する。2m程で蛇行しながら集落の方へ囲むように伸びている。検出する段階で上層に廃棄された土師器類(高杯・壺)が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SE-121の埋土9(8)層出土のNo.74・75、埋土1～3層出土のNo.87と同一形式(器種)である。埋土8層出土土器よりも肩部が下がり、底部は粘土を足して器壁が2cmあること口縁端部が面を持たず、厚みを持つことから後出する型式と考えたい。

埋土2層からほぼ完形の高杯、鉢が出土している。埋土3層からは頭部に櫛歯刺突文を持つ複合口縁壺、口縁が広がる鉢が出土している。埋土2層の高杯の端部は布留式土器の甕の特徴と共通する。

埋土3・4層の土器から北部九州久住編年ⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式新段階～布留式古段階併行期)の溝と考えられる。また、埋土2層からは径4cm程の平底の底部を持つ肩部が張る小形壺も出土しており、タタキも顕著に残るものであり、やや遅る土器かSD-29に伴っていた土器の可能性がある。

また埋土1層から口縁部径約5cmと3cmのミニチュア土器2点、内面をタテ方向に丁寧に磨いた口径約12.5cm、深さ約2.5cmの杯も出土している。共伴すると考えられる甕も端部に面を持つが内側に少しつまみ上げているもので、庄内式新段階から布留式古段階併行期に伴うものと考えられる。No.91は尖底だが、底部の厚さが1.5cmで口縁端部も庄内式や布留式の土器の系統の口縁の特徴がない。肩部がやや下がるものである。

SD-28 (第97図)

SD-28はSD-03に切られている。SD-03と同様な構造の同様な規模の溝と考えられる。最大幅90cm以上、深さ約50cmの台形状、重複している溝の中では一番古い溝と考えられる。埋土上層から土器が多数出土している。形式の復元ができる器形が20点以上ある。埋土1層からは弥生土器の系譜を持つ甕、高杯の脚部、庄内式系甕が出土している。弥生土器の系譜を持つ甕は口縁部が外方に広がり端部は面を持ち、内外面左上がりのハケが残る。高杯も筒部の所はヨコ方向に削っているが屈曲部が明瞭でなく袴状に広がる。弥生後期の土器の系譜を持つものである。口縁部だけ遺存するものは大きく外反し端部の厚みは2mmと薄く胎土も密である。庄内式系甕は口縁部がやや外反するがほぼまっすぐで口縁端部をやや上方につまみ上げている。器壁は2mmと薄い。

器壁が2～3mmの精製の鉢、台付の鉢2点、円形透かし(4方向)を持つ脚台、二重口縁壺、小形丸底壺(胴部にハケ目を残し、弥生時代後期の鉢の系譜を引くもの)も出土している。

二重口縁壺は口縁部外面に縦方向のミガキを丁寧に施し、二重口縁の接合部も明瞭なものである。

埋土下層からも庄内式系の甕が出土している。この庄内式系甕は口縁部は外方に広がりながら端部はつまみ上げ、器壁は2mmと薄く典型的なものである。SD-25出土遺物と接合するものでタタキを残し、内面に削りを施すものがある。胴部上半は器壁が4mm程で口縁端部に面を残している。

上層部にも二重口縁壺や径14cmの底径のタテ方向のミガキを施す器台の脚部、外側につまみあげた甕の口縁部片や叩きを胴部に施し、内面削りの長胴形の口縁端部を内外面につまみあげた口縁部から胴部片等残存率の高い大きな破片も出土している。

SD-29の上層出土の破片と接合するものには甕の胴部片しか出土していないが、それは内面にヘラ削りを残し、外面には顕著にタタキが残る。また口縁部が大きく外反し端部には面を持ち、内外面にハケを残すものもある。

土器群の標相から北部九州久住編年I B～II B期併行期と考えられ、弥生時代終末(庄内式中段階併行期)に廃絶した溝と考えられる。

SD-29 (第97図)

同じく01-1・2区の一帯北側の溝である。SD-28に切られている。幅約1m、深さ約40cmで断面はU字状である。溝の幅はほとんど同じである。集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土器器類(高杯・壺)が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SD-28は他の溝の断面と異なりU字状になっていること一番北側に位置することなどから溝の中では古い時期のものと考えられ、SE-121の古相の土器群に対応する時期には溝として機能していたと考えられる。

SD-29は口縁部をつまみ上げた庄内式の甕の口縁の特徴を持ち器壁が2mmの薄い土器が出土している。上層には甕の胴部片しか出土していないが、それは内面にヘラ削りを残し、外面には顕著にタタキが残るものも出土している。他の破片も内面にハケを残すものも多く、北部九州久住編年I B～II A期併行期とも考えられ庄内式併行期と考えられる。

SD-134 (第100図)

01-3区の南側の溝である。一番南側の溝である。SD-133に切られている。幅約70cm、深さ約40cmで断面はU字状～V字状である。溝の幅はほとんど同じである。集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土師器類（高杯・壺）が出土する。高杯の杯部の屈曲部が出土しており明確に礎が残る形式のものである。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で、遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SD-134は他の重複隣接する溝の断面と異なりU字状になっていること一番北側に位置することなどから溝の中では古い時期のものと考えられ、SD-29に続く溝（同一の溝）と考えられる。SE-121の古相の土器群に対応する時期には溝として機能していたと考えられる。

SD-133 (第100図)

01-3区の南側から2番目の溝である。一番南側の溝である。SD-134を切っている。SD-132に切られている。幅約1.1m、深さ約40cmで断面はU字状である。溝の幅はほとんど同じと推定できる。集落のある方へ蛇行しており、囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土師器類が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で、遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。SD-28・29等に続く溝の続きと考えられ、SD-134、S-132相前後する時期のものと考えられる。

SD-132 (第100図)

01-3区の重複する溝の1つである。132-SDを切っている溝である。幅1.5m、深さ約50cmである。断面の形状は逆台形状である。

埋土上層から甕の口縁部片、短頸壺が出土している。前者は口縁部がやや外反し、わずかに端部をつまみあげているもので庄内式甕の影響を受けているものである。後者はSE-121の埋土9(8)層出土のNo.74・75、埋土1～3層出土のNo.87と同一形式(器種)である。埋土8層出土土器よりも肩部が下がっており、SE-121埋土8層より後出する形式と考えられる。

時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～C期併行期前後と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式中段階から新段階併行期)と考えられる。

⑦ その他の溝

01-8区で検出されたSD-823は幅約1～1.2m、深さは20cm程でSX-803・804の間に検出している。SD-823からは外面に平行タタキ痕跡を残し、内面がケズリの甕の破片が出土している。

この遺構の性格が建物ならば、集落を区画する溝(特に位置的にSX-804を区画する溝)の可能性もあるが、仮にSX-803・804が水田の区画の水田の区画の溝になる。しかしながら、3層検出の他の遺構がピット等もいくつか存在することから集落域に存在する溝と考えたい。

SD-25の埋土1層からは口縁部の高さが4cm以上で肩部が張る小形丸底甕、口縁に凹線状の丁寧なナデ

を施している甕、小形器台の脚部、高杯の脚部及び口縁部が出土している。高杯の口縁部は屈曲部でやや丸みを帯び外方に伸びる形状のものである。甕は布留式土器の特徴を持つ口縁端部を持つものと庄内式系甕の系譜を引く上方につまみあげる椀形状のものも存在する。

SD-28 出土遺物と接合するもので、タタキを残し、内面に削りを施すものが含まれる。胴部上半は器壁が4mm程で口縁端部に面を残した古相のものである。小形丸底壺は口縁部が外方に大きく伸び、胴部は肩部が張り口径が小さいもので北部九州久住編年ではⅢA期まで下る可能性があるものである。その他口縁が広がる鉢や弥生後期の甕の系譜を引くがハケ目無く、接合痕が顕著な口縁部片等が存在する。

SD-25の時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～ⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

⑥ 水田関連遺構 1

概要 01-47区では、古墳時代の2面にわたって溝や畦等の水田関連の区画をしている遺構群を検出した。4層（弥生時代終末から古墳時代前期の古段階）と3a～3b層（古墳時代前期中葉から後葉）までの大きく分けて2層の時期の水田遺構である。

(1) 4層検出遺構

概要 集落を区画する溝から40m程離れた位置する。

大別して南北方向のやや東方向に振れているものと、やや西側に振れている方向を表すものがある。

標高は3.3～3.6mで古墳時代の集落の位置する微高地より、1m以上深い谷地形を呈している。

ア 南北から東方向に振れた区画

畦畔 1

集落を区画する溝から40m程離れて立地する。大別して南北方向からやや東方向に振れているものとやや西側に振れている方向を表すものがある。

南北方向から東側にやや振れる方向の区画は大きい畦 01-4区（SX-1001）では平坦面幅70cmから1.6mの畦幅と検出した幅が大きい。平均すると1m程の幅の大畦畔の可能性もある。その畦畔の東側に検出したものは幅20～30cmの小畦畔（1-4区 SX-1002）である。また南北の区画が明確でないが01-7区 SX-718が深さ約10cmの方形の落ち込みであると考えれば、5～7mの方形の区画が水田の小区画であった可能性を考えたい。

溝

畦畔1の方向に近いのは、SD-717である。

SD-717（第104・106図）

大きい畦（01-4区 SX-1001）から15mに位置しほぼ平行に位置する。その畦畔の東側に検出したものは

幅20～30cmの小畦畔(01-4区 SX-1002)から約10m東側に位置する。

幅1～1.3mで深さ20～30cm、長さ15m以上検出している、SD-708に北側15mで接し、切られている検出状況である。若干西側に振れていてSD-708に重複しているように伸びている可能性が高い。隣に畦畔が検出できていないが、畦畔の横に検出されるような深さ20cmのもので水路の役割を果たしていた可能性のあるものと考えたい。

埋土2層からは外面タタキ、内面ナデの器壁が1cm程の銅片が出土している。検出する面的には弥生時代終末から古墳時代の面でありその時期の溝と考えられる。

イ 南北から西方向に振れた区画

畦畔等の区画

畦畔とした形では検出できていない。しかしながら、01-4区 SX-1003・SX-1004等の方形状の区画(落ち)や段として検出し、集落を区画する溝から40m程離れて立地する。01-4区 SX-1003は深さ10～15cmで長辺5m以上の方形の落ち込みである。01-4区 SX-1004は4区的最南端に位置する。10～15cmの段しか確認できないが平面的に直線的に7m以上検出できた。

畦畔は明確に検出できていないが、01-4区 SX-1004付近の断面では20cmの平坦の畦畔状の遺構も確認できないわけではない。01-4区 SX-1003も同様の断面を観察できる事から十分平面的には検出できなかったが畦畔状の痕跡の一部を検出できたと考えている。

溝

01-4区 SX-1003やSX-1004と方向が類似するのはSD-709である。

SD-709(第106図)

01-4区 SX-1003と約20m、SX-1004と約10m離れて位置する。幅約1m、深さ約40cmで断面形はV字状である。北東側の高い方から埋没した様な断面である。埋土3層には炭が堆積しておりU字状の断面でも機能していたと考えられる。埋土4層及び1層からは器壁が5mmの内面削りの5cm程の甕の細片が出土している。外面タタキで内面ナデの銅片も埋土4層から出土している。SD-708はこの溝の南側部分だが、埋土から器壁が3mmの外面ハケ目の土師器も細片で流れ込みではあるが出土している。

(2) 3a～3b層検出遺構

概要 集落を区画する溝から40m程離れて位置する。

南北方向のやや西方向に振れている方向の区画を検出している。畦畔は平面で検出できなかったが、溝を検出している。標高は4～4.1mで古墳時代の集落の位置する微高地より、50cm以上深い谷地形を呈している。

溝(第101・102・103図)

01-4区から01-7区にかけてSD-701(SD-203・204)、SD-702(SD-205・207)、SD-103がほぼ同じような方向に検出され、集落を区画する溝から40m程離れた位置する。またSD-701・702-SDは60～100cm離れ

て位置する。SD-103はSD-702から約5m西側に検出している。

SD-702とSD-103は幅1～1.3mと平面形は共通するが、前者は深さ約40cmの深さでV字状を呈する。後者は緩やかなU字状である。ただ、前者も10cm程埋没した段階ではU字状であることから大きく機能に分かれるとは考えにくい。SD-701の構造はSD-702の断面構造と類似する。ただ幅が35～50cmしか検出していない。

SD-701とSD-702は対になって機能したと考えられる。01-4区の南端では大きくSD-702が西側に振れているが大区画の変換点と考えたい。SD-701とSD-702の間は畦畔と考えて西側のSD-702は当初は水路として機能していた可能性を考えたい。

SD-701の埋土4層から器壁が5mmの外面ナゲ調整、内面削りの土師器片が出土している。また、SD-702からは埋土3層から器壁が3mmの土師器甕、赤褐色の精製の鉢、小形丸底蓋の破片も出土している。

その他の検出遺構

深さ10～15cmの土坑状の遺構を検出しているが、集落に伴う土坑ではなく、耕作に伴うなんらかの痕跡が土坑状に検出された可能性を考えている。SX-206（第102図）は、1辺5m程、深さ10～20cm、検出できており、水田区画の痕跡を反映しているものと考えたい。

水田関連遺構

4層検出の遺構と3a～3b層検出の遺構と分けて検出した分を解説したが、断面・平面的にも十分検出できたとは言いがたい。推測の部分、またもっと細かい時期区分が必要であり、遺構の重複状況から少なくともそれぞれ2時期に細分され、合計4時期以上にわたり水田面の区画が変化していったことが伺える。

溝や竪穴建物等の切り合い関係からも6時期以上の時期の水田面がある可能性も指摘して置きたい。層的には、これらの水田面は弥生時代終末から古墳時代前期の中でおさまると考えたい。

水田関連遺構 2 (01-6・8区)

概要 01-6区の4層上面で検出した方形状の遺構（SX-422・423・424・425）は2mのもあるが、軸が揃っており、当初は竪穴建物の痕跡とも考えたが、遺物もほとんどなく、水田面の区画の痕跡と考えた方が理解できると解釈している。ただ、01-6区の南側で検出したSX-409A・Bは方向を別にする（第114・115図）。

SX-409Aは幅約1m、深さ25cmのV字に近い断面を持つ溝でありSD-702の構造に近い。遺構の振れは異なるが同一の性格の遺構と考えられる。現在のところ、2時期の水田関連遺構と考えたい。

01-6区の3a層上面の検出の遺構群も同様に水田関連遺構と考えたい（第108・109図）。

SX-404・414・401等の4m以上の方形の浅い土坑、SX-402・408等の幅25～30cm、深さ10cmの溝等は水田の区画の痕跡を検出したと考えている。その他の遺構はどれも浅く耕作にともなう痕跡の可能性を考えたい。SX-414からは器壁が2～3mmの土師器片が出土している。

(平成14～20年度・02～08区)

弥生期は4基の住居址が検出された。02-I区SH-01（第48図）の規模は不明であるが、ピットと炉穴、そして焼土面から住居址であろう。SH-02（第49図）は残存から2mの方形を呈していると想定され、

炉とピットも検出された。遺物から弥生終末の住居である。このSH-01・SH-02は重なるような切り合いのためほぼ同時期と考えられる。06-II区(第68・69図)では柱穴・炉の存在から2基の住居址が想定されるが出土遺物にも恵まれず詳細は不明であるが、検出土層・前述した遺構に類似するため弥生期と想定し掲載した。06-III区のSX-38(第71図)などは縄文期住居の可能性も否定できないが確証が持たない。

本遺跡、最大の遺構は05-I-1区にて検出されたSX-3(第55図)であろう。長さ13m・幅1mの遺構である。調査時、まず杭が姿を現した。これまでの調査において杭には遭遇していたが、やがて2列を成し50cm～60cmの規格深度を持つことが判明した。これから注目し、全体を掘り下げたところ夥しい木片が杭列間に出土した。この遺構の性格把握については調査員の能力を超えていたため専門調査員の派遣要求を必要とした。その見解として、

杭列が井桁状に組んだような部分が見られ、杭列の補強を図る畦畔であった。幅1m弱は人の往来が可能で運搬など農道としても機能したのであろう。大量の木片は半湿田の土質にこれらを敷き詰め、通路として沈下を防ぐ機能を果たす数粗朶技法が確認された。また東西に延びる遺構に杭列が沿うが、これに直行するように2列の杭が存在する箇所があり(C-C')、これは水取り入れ口、水口と推定しその概念図を提示した。その規模は幅30cmを測る(第57図)。これらのことから水田を区画する畦畔とは異なる大畦畔であった。また敷き詰められた木片中に土器片も存在し、これにより弥生後半の時期と想定できるが、これに埋土①が覆土として土層にあるため2時期に亘り使用されていた可能性がある。刊行されている「両道間日波遺跡 2010」はこのSX-03の北東を調査した報告書であるが、このSX-03の杭列は緩やかに連続していた。調査主査の見解では3時期が報告されている。このような大畦畔のこれまでの調査事例からその使用期間は15～30年と云われることから、弥生後期に構築を行い盛土などの補強を行いながら弥生終末まで使用と推定し、後の洪水による堆積で放棄したのであろう。

また05-I-1区SX-3の北東に位置する05-I-2区にて検出されたSX-03 SX-01・02(第62図)は不定形の浅い掘り込みであるが、花粉分析により湿田植生が確認された。SX-01内にはピットが並び杭の検出があることから水源地としての可能性があり、水源地から05-I-1区 SX-03の大畦畔への水の路を想定した。出土土器から時期は古墳初頭であろう。

07-IV区SD-01(第73図)からは土器片と石包丁を得た。遺物は流路であるため確証はできないが、弥生中期の「城の越式」であるため玉名平野において弥生中期の稲作を示唆することになるか。

第3節 古墳

03-I区(第122図)からは方形状の遺構が検出された。北東-南西軸は3mを測り、この軸に明確ではないがベッド状遺構が見られる。住居と思われ中央に炉穴を呈する掘り込み・ピットも確認され住居址と推定し提示した。03-II区SX-07(第128図)は大型流路である。71本の杭が出土し、これらは流路に沿うことが想定されラインで結んでみた。これによると杭列は流路の水調整を行っていた残存であろう。浅い流路であり、杭も比較的短いことから上位は削平されていた可能性がある。またミニチュア土器(Ns. 98)の出土から水関係の祭祀を行っていたか。

04-I区5b層(第131・132図)でも方形状の遺構が検出され住居址であろう。SX-09は杭列で1.3～

1.5mの杭間隔を持つ。04-Ⅰ区 6層（第134図）SX-01・02・03は土坑に礫が埋め込まれた状態で、特にSX-03の礫は大型である。目的はあろうが廃棄なのか儀礼なのか不明のためSXとした。

04-Ⅰ区も幾度も洪水を受けているのであろう。第133図で提示した遺物は突帯文（№101）から土製勾玉（№102）・弥生中期（№103）・輸入時期（№105）まで時代幅がある。

04-Ⅱ区 5a層上面からは小規模溝が多数検出された（第135・137図）。水路を幾度も構築した痕跡は土層図からも窺える。またこの水路に沿って北側に杭列が認められることから水路に伴うものであろう。（第138図）

04-Ⅱ区からは土坑が検出された。掘り込み形態は、大別すると凹状・槽鉢状・皿状となる。堀土からはレンズ状の自然堆積ではなく人為的に埋められた感がある。ST-04（第140・141図）は最下層に丸底壺（№116）が出土した。口縁部に打ち欠きがあり廃棄に伴う儀礼と考える。SX-04（第144・145図）は炭・焼土・煤と層を成し燃焼土坑であろう。このSX-04下位から凹状の掘り込みが検出されている。凹状を井戸と仮説としたならば廃棄後、上位を燃焼地に行っていることになる。ST-08（第146図）はオーバーハングを呈している。これは半掘田の壁が崩壊したのであろう。この遺構で注目されたのは下位層から網代（第147図・№137）の出土であった。完形体ではなかったが部位により編み方に相違があるため、網代の底部と側面部との作成方法によるものか。二本超え・二本潜・一本送が機能的には強固のため網代底部に相当するか。また№139・140を伴っていたためこの時期の網代として資料価値が高い。

04-Ⅱ区は全体に土器片が散乱している状況であり、これを取り除くと土坑が検出された。この散乱土器片は第149・150図に提示した。ジョッキ型土器（№159）を含む弥生期の遺物もあり、近在に住居の存在を窺わせる。

05-Ⅰ-2区 8層（第154図）ではV字状の高まりを検出した。これを小畦畔の畝と想定し、この時期の水田区画は直法ではなく自然地形を利用したことが窺えるが、06-Ⅰ区 9a層（第158図）にはSX-19・20が検出された。これは水田の小畦畔で幅は17mを測る直法で、方位はN-37°～47°-Wである。05-Ⅰ-2区 8層の小畦畔の畝とは異なるが、このことは古墳期明確な水田区画はまだ成立していなかったということである。

第4節 古代

奈良時代の遺構・遺物（平成12・13年度・01-1～8区）

概要 01-7区の2a層上面で径40cmくらいの円形と推定できる土坑を検出した。深さは約30cmで断面はU字形を呈する。

埋土上層に須恵器高台付き杯が出土している。須恵器は八の字形に広がる高台が付き、体部は立ち上がり、口縁部は内傾した後反するもので、大宰府編年ⅠB期併行期、7世紀末の年代が与えられよう。奈良時代の他の遺構は検出できていない。奈良時代の遺物がほとんど出土しておらず、集落があれば北側の微高地に存在して末端を検出したと考えられる。また、水田面の一面の祭祀等に伴う土坑等の可能性もある。

(平成 14 ~ 20 年度・02 ~ 08 区)

02-Ⅲ区は稲株痕を伴い、イネのプラントオパール試料が7,500/gと高い数値が検出された。SD-14は水田に伴う溝であり水を供給したのであろう。またSD-15は小溝であるが直線的で同一幅を持つことから人工的な溝である可能性が高い。これが水田に伴うならばその水田方位はN-56° -Wである。(第174図)

この調査区から出土した遺物は第176・177図に提示した。縄文後晩期から輸入時期まで広範囲であり、これも近在の氾濫によるものであろう。

05-Ⅱ-1区は調査区に溝が検出され、これを短絡的に古代の水田残存と仮定すると、N-58° ~ 68° -Wの範囲に入り、中世水田方位に類似する。ここには足跡が検出され、これより水田に入った農人の間を置かずに見舞われたとのことか。

この古代期は極端に遺構・遺物が希薄である。この課題には総括で述べる。

第5節 中世から近世

(1) 中世の遺構と遺物 (平成 12・13 年度・01-1 ~ 8 区)

概要 01-5区の南端の標高4.4m付近で径1.3m、深さ1.6mを測る井戸(SE-56)を検出した。検出面は2a層である。断面の形状はU字状で中世の遺物を含む(第184図)。

(2) (平成 14 ~ 20 年度・02 ~ 08 区)

調査は中世層から表土を剥いだ。これには中世以後は攪拌が激しく分層が困難であるためであったが、一部の近世層は検出した。02-Ⅰ区層遺構配置図(第185図11層)は近世水田層と思われ、細長い調査区の南端に溝・北端に僅かであるが畦畔を検出した。SD-08にSD-07が存在する(第186図)。溝で判定困難なのは自然流路か人工溝であるかどうかである。この場合SD-07はSD-08切り合い関係でSD-08は水流を意図的に変えたような印象を受ける。自然流路の場合、このようなことは考えにくく少なくともSD-07は人工的溝のようである。この粘性質に人工溝は構築することは水田に大きく関与していることが想定できる。この層に僅かではあったが11層畦畔が検出された。水田に伴う畦畔であろう。方位はN-64° -W。

中世層は残存率がよく、02-Ⅱ・07-Ⅲ区を除く全域で検出された。第182図に調査区の中世層のレベルを表記した。これによると水田に必要なフラットな土地耕作をなされており、北より南に向かいゆるやかに傾斜している。畦畔状高まりの残存がよいのは05-Ⅱ-2区・05-Ⅱ-1区で、特に05-Ⅱ-2区は畦畔から水田区画が想定でき、その規模は南北軸、15m前後を一つの区画として想定できる。05-Ⅱ-2・05-Ⅱ-1区は連続した遺構で水田区画を示唆するものでその方位はN-68° ~ 73° -Wである。また地形図から北東から南西に緩やかに傾斜しており、これから水流と水田の関係が示唆できる。

第203図(04-Ⅰ区SX-02・05)も畦畔状の高まりであり、この遺構間は水路が想定される。方位はN-55° ~ 60° -Wである。第189図02-Ⅰ区13層は稲株痕の状況である。科学分析の結果この13層はイネのプラントオパール試料が3,700/g検出されたことから水田層と考えられ、この稲株痕はイネ底と想定できる。径が10~20cmほどであるため現在にたとえと収穫前の7~8月頃であろうか。収穫前に大水に遭遇したのであろう。この時期の大水は台風が該当する。砂質層が覆うようにイネは死滅してその痕跡を残した。中

中央に僅かであるが畦畔がみられ、ここには稲株痕が存在していなため、これが水田区画の痕跡である。さらに02-Ⅲ区(第191図)7層は稲株痕を提示した。イネのプラントオパール試料が5,000個/gの高い数値を示す。ここにも稲株痕が検出されたが02-Ⅰ区13層と同じ自然災害の痕跡であろう。02-Ⅰ区と条件が類似することは幅5～6mほどの溝(SD-11)を伴うことで、これも水田に関与している遺構であろう。

密集地と空白地が存在している。SD-11(N-62°-W)の方位に平行するように中央部とやや北側、さらにこれに直行するように北東に空白地が見られる。これは畦畔の痕跡か。これからSD-11より水供給を行い、小畦畔を持つ水田が想定される。また南側は稲株痕密集地である。

05-Ⅲ-2区は土坑密集地であるが、遺物に恵まれずその性格は不明である。不定形のプランが多く、耕作されたような掘り込みであった(第216図)。

第229図 06-Ⅰ区は畝状の高まりSX-08・13・11が確認されたが、その方位はN-38°～45°-Wでありこれまでの方位と相違がある。SX-13・11の距離は16mとこれまでの範疇に納まる。東側土層は畦畔状の高まりや水路が入り乱れ、何度も水路を構築したことが窺える。

03-Ⅰ区は杭が出土した。(第193図)中世面と弥生前期～縄文晩期層にて検出。杭12(Na195)は残存70cm強を有し、杭上位は炭化している。このことは杭腐敗を防いだ加工の痕跡であろうか。杭6(Na194)も僅かに炭化痕跡を残す。何れもクリ材である。土層断面図から杭最下層レベルが大別すると杭13・杭12の深度と浅い深度で大別できるが、これは飽くまでも検出面であって耕作層の時期とは異なる。思考のヒントになるのは深度の浅い杭は杭としての機能は不可能で後世の開墾で削平されたのであろう。

03-Ⅲ区は中央に東西に幅広い大型の溝SD-04が位置する。全体が氾濫層で土製勾玉・石剣などが流れ込んできている。上位に中世水田層が僅かに確認され、この地は自然水路を活用した水田形成がなされたか。155の杭が検出され短絡的に杭列だけを図面上に配置(第196・197図)させると水路として大型溝(SD-04)から水を引いていたのか。

04-Ⅰ区(第202図)3層にはSX-02・05の畝状が検出され、この間に小溝が存在していたと想定され、SD-01はその痕跡であろう。ここに一つの水田区画を想起させる素材が存在する。同じく04-Ⅰ区(第204図)4b層はSX-07・08の畦畔に恵まれN-65°-Wを測る。両遺構の幅は15m程で、これを中世期水田幅の一つの目安とした。

05-Ⅰ-1区(第208図)は断面図に提示したように溝12まで有し、溝に自然堆積する土積を幾度も水流調整のために汗を流したことが窺える。

05-Ⅲ区〔05-Ⅰ-2区〕(第216図)は不定形土坑群で鉄等々などの掘り込まれた感を受ける。不明な部分が多い。

06-Ⅰ区6b層(第223図)からは小畦畔のSX-10が検出され、その方位はN-43°-Wである。その下層6c層からはSX-8・11・13と小畦畔が検出された。その方位はSX-11がN-38°-W、SX-13がN-45°-Wとやや扇状に広がる水田区画であろうか。またSX-14も存在し、これから水田幅はSX-13-14間5.5m・SX-14-11間は10mほどになる。同一層で検出されたSD-5群はN-68°-Wである。東壁断面観察で水路・畦畔と幾度も構築している。この地点は水田にとり重要な箇所であったのであろう。

06-Ⅲ区SX-04(第233図)は小規模遺構であるが、その断面は畝と溝のセット関係を示す良好な遺構である。畝は後世の開発で上位を削平されており、このように玉名平野は形成されていくのである。

06-Ⅲ区は土坑群であるがSX-30(第236図)はプラン・遺物から土墳墓の可能性が高い。人骨は出土しなかったが意図的に破砕された土師皿(№213)や瓦碗などその条件がある。

竈道の調査区によっては流れ込みの遺物が存在し、その遺物と層が必ずしも一致しない傾向がある。第195図03-Ⅲ区の石剣・土製勾玉などは中世水田層下位であるが出土遺物は古墳期の産である。

07-Ⅰ区SB-01(第238図)は3m強四方の掘立柱建物で住まいとしては小規模のため寺仏堂のような存在であったか。07-Ⅰ区のSE-01は井戸と思われるが、SD-02の北東側の石堆積もその理由が不明である。想定するならばこの調査区は寺仏堂を中心として井戸が存在し、そしてSD-02の石堆積は寺仏堂に関連した廃棄箇所か。信仰の地と想定した。

第242・243図08-Ⅰ区は溝が北東—南西・北西—南東に大別される。出土遺物は何れも流れ込みであるが12C～13Cの範疇で推移しそうである。SD-02とSA-02・SD-01とSA-01が対応するならば、全体が掘と掘列が想定され、この内にSK-01(第249図)が存在する。人骨を伴う土墳墓である。北軸で頭蓋は西を向き、右側肘関節は屈曲状態であった。頭部横に瓦器片があり、これを取り外すと土師皿(№225・227)が出土した。供献遺物であろう。これを土圧から保護するためであろうか。以上の条件から屋敷墓の可能性が高く、またSK-03(第252図)は腿の位置に土師皿を被せたような印象を受け出土した。これも屋敷墓であろう。何れも熟年男性であり、その詳細は第V章 自然科学分析 第1節「人骨」を参照とされたい。掘立柱建物も検出され、この調査区は中世の館の存在を窺わせる。

第6節 時期不明

ここで不明としたのは時期・性格等を含めて不明遺構調査区のことである。

02-Ⅱ区(第274図)は標高が5.00mほどであるが、かなりの深さまで表土を剥ぎ、調査時は随分と滑ったという記憶がある。調査区を南北に縦断するように大型の流路が存在し、多くの木片が伴った。北久根山式など縄文期の遺物が多い自然流路である。調査開始前は県道に沿った畑であったが、地区ではこの近辺を「沼の尻」と呼称していた。

07-V区(第278図)は不定形の土坑群でフラスコ形状のオーバーハングで八つ手状の掘り込みが顕著である。中世下位の層位からで石包丁(№406)の出土はあるが、この遺構時期に伴うかは不明である。遺構内からは遺物は出土せず時期の特定も困難であった。平成20年3月10日に熊本県装飾古墳館 池田朋生 主任学芸員に調査指導を頂いた。この調査指導以前に本遺跡の最下層 青灰色粘土は装飾古墳館で灰色顔料として活用されている。土色計を用いた調査で結果として装飾古墳の顔料として適さないことから、それを目的としないという結果が判明した。形状から採掘坑の可能性もありここでは「粘土採掘坑」として表記した。

07-Ⅱ区7b層検出のSX-43(第283図)について。検出層は弥生期下位、第7b層であるが当初は周囲から出土した土器片から古墳中期と推定された。東から西に約25°傾斜していることから排水機能を備えた木樋で、肉眼観察で材質はクスノキの大木である。

整理段階で課題が生じた。検出層は弥生層下位であり溝状の掘り込みの中に据えられていたこと。「この木樋の内面には数cmの幅の工具痕が内面の湾曲面を平滑にするように連続的に認められており、特に節に相当する部分などではこれを除去するように工具痕が集中していた。」(両道間日渡遺跡検出木樋の科学分

折より) この工具痕は鋭利な金属器によるものではなく、磨製石斧使用に近く鉄斧以前の工具使用の可能性が挙げられる。川漁で使用した丸木舟の存在も想定したが川漁に例えても吃水線に問題があり、また拡大の解釈であるが本来、丸木舟で使用されたものを再加工・利用したものか。

科学分析の結果、放射性炭素年代測定の結果は2,980 ± 40年と材質はクスノキという結果を得ている。また花粉分析では、この一帯、アカガシ亜科等の落葉広葉樹と部分的にモミ属・ツガ属などの温帯針葉樹も窺えるが、木樋覆土からは好流水性種が多数検出されたがイネ属の含量は微量である。したがって、この木樋の上流に稲作地が存在していたことは想定が困難であるが、木樋としての具体的な使用目的など課題は残したことを、逆に問題提示・類例として提唱したい。補足としてクスノキは大径木に成長する常用広葉樹であり、樟脳を多く含むため保存性・耐久性・防虫性が高く、古代から信仰の対象になる樹木でもある。この詳細は第V章自然科学分析第5節を参照されたい。この木樋は保存処理され熊本県文化財資料室にて保管されている。

第7節 玉名の平城遺跡

平城遺跡は「熊本県の中世城」(第30集 1978)に「玉名の平城」として記載されている。これによると「平城」という小字が存在し、土器片も認められる、とある。平成15年県道6号(玉名立花線)工事に伴う文化財調査で以下の遺構・遺物が検出・出土した。(第284～290図)

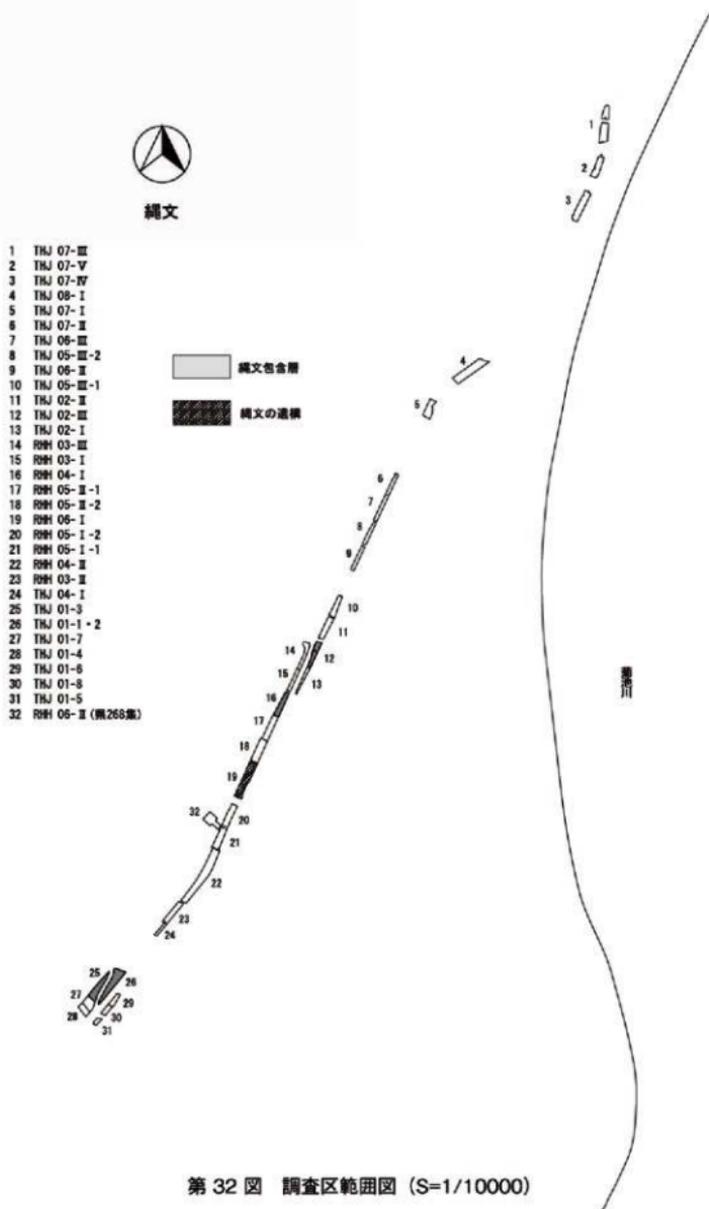
調査の結果から遺構は掘立柱建物3棟・櫓7列・土坑1基である。大別すると調査区北西と南に遺構集中区が存在している。北西区は標高20mに位置し本調査区で最高値に位置する。このエリアより櫓5列が検出されている。SA-01・02は台地縁に沿って検出された。外敵からの北西区画の防備の櫓であろう。SA-03・04・07は北西軸に約2.5m間隔で存在する。これらは三重の櫓であろうか。柱間隔一間も多くみられるからこの三重櫓は総柱の掘立柱建物も想定したい。またこのSA-03・04・07には小ピットが多く存在すことも三重の櫓に関係しているか。地形・遺構から平城遺跡の郭が想定される。

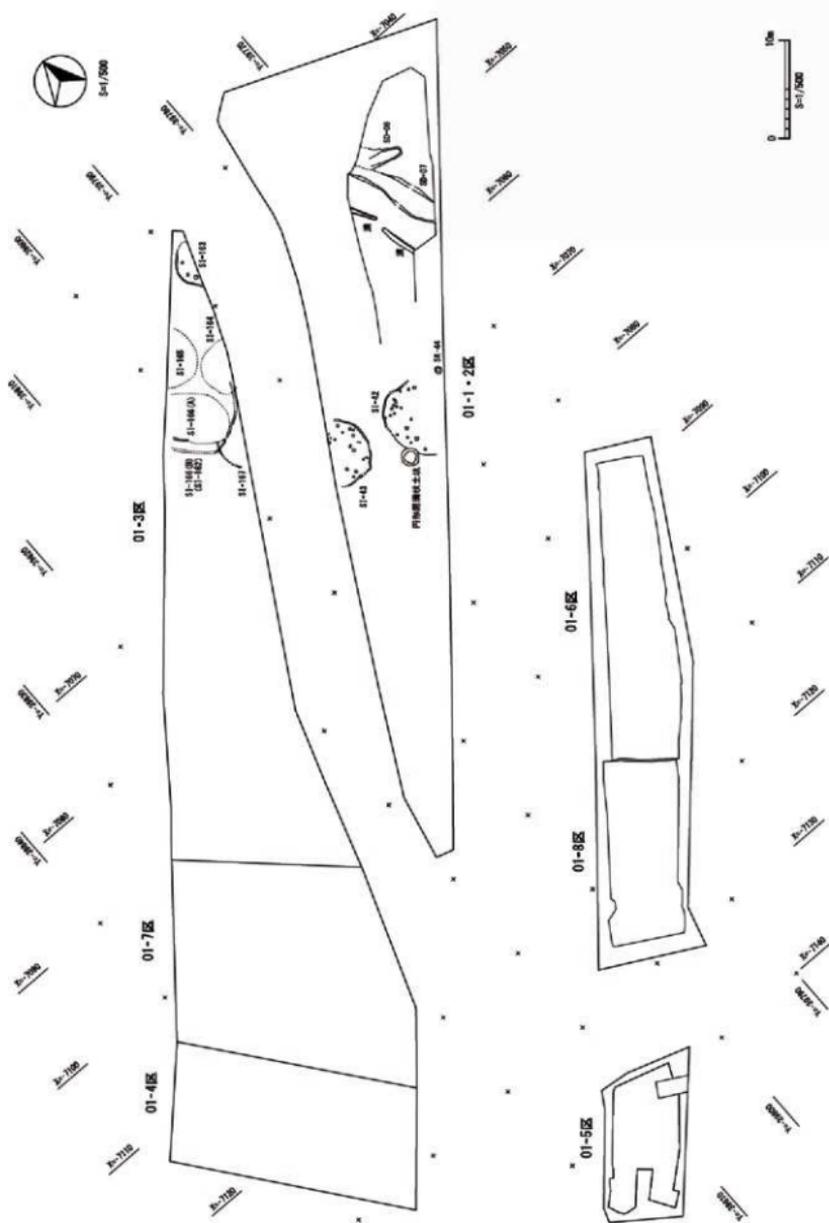
この北西区画から下位平坦部南に掘立柱建物が3棟検出されたが何れも調査区外に延びているため詳細は不明であるがSB-03はP5・4・2とP5・6間が床を持つ空間の可能性のある掘立柱建物であるか。SB-01はやや柱間隔の短く、検出された柱穴も小型を呈する。SA-05はこのA-A'ラインに存在する。多くは調査区外に情報が存在しているため櫓以外の機能も想定される。新旧は切り合い関係からSB-03・SA-05 < SB-01となる。

また遺跡東・西区に地形平坦部がみられる。全体は後世の開墾開発(「熊本県の中世城」)と報告されているが掘立柱建物・櫓などの遺構、輸入磁器出土から遺跡は中世期の山城であろう。また天目茶碗片は表土剥ぎにて出土したことから、開墾による削平が想定される。

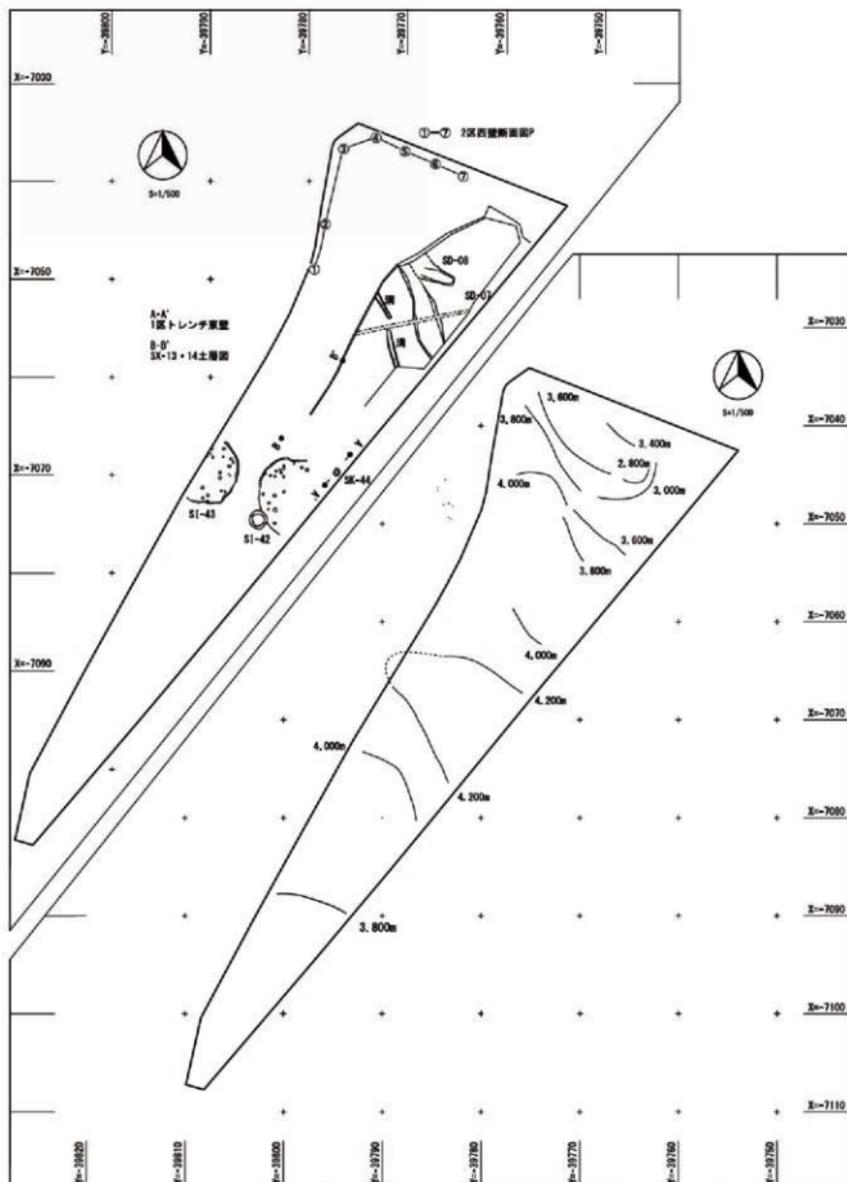
S-19 S-19は調査区南端にて検出された。遺構の大半を後世の開墾にて損失しているようで、ゆるやかな斜面に形成されている。ピットも確認され遺物も伴うことから住居地の可能性もある。埋土3は床平坦面を造成した痕跡か。炉穴状掘り込みから小型手掘ね土器(Na.410)が出土している。廃棄に伴うものか。出土物から弥生後期末。この遺跡では中世以前の遺構はこれだけである。

この平城遺跡出土物は弥生中期から近世磁器まで点描しているが、この遺構の位置付けについては弥生期・中世期と大別でき、そのピークは中世期であるが遺物は破片でローリングを受け実測に耐えられない。底部に僅かに糸切り痕が見られることから推測ということになった。

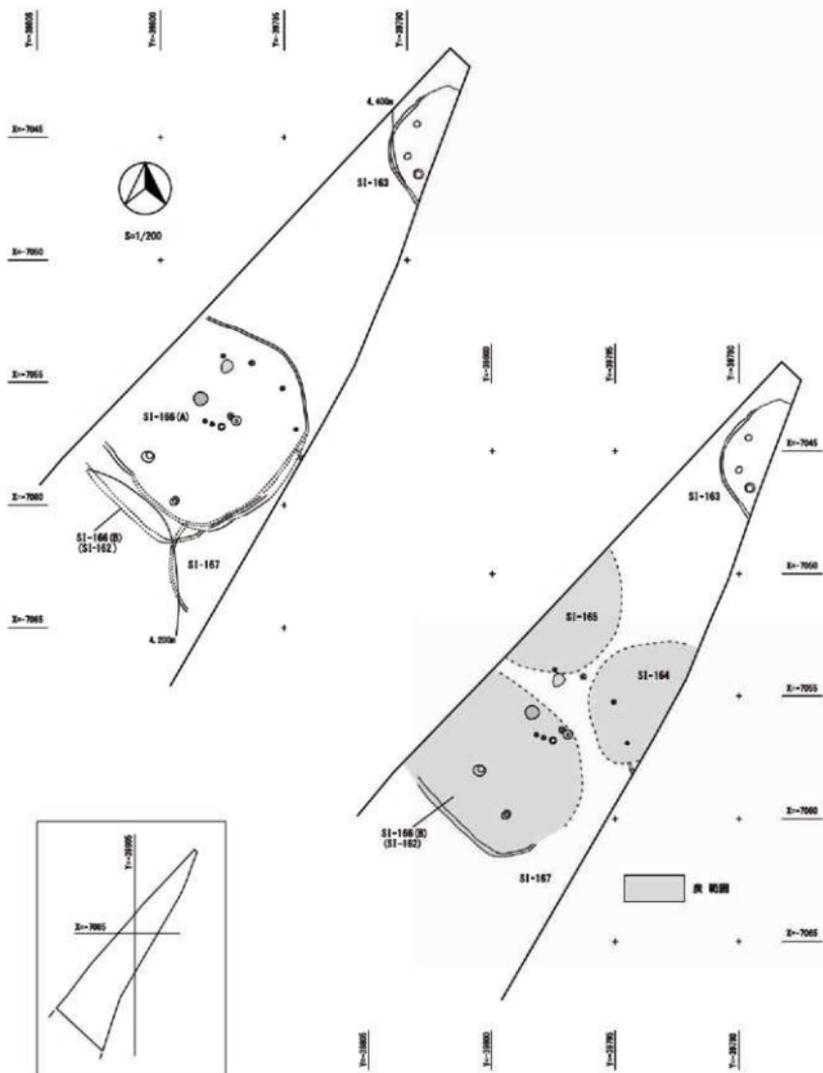




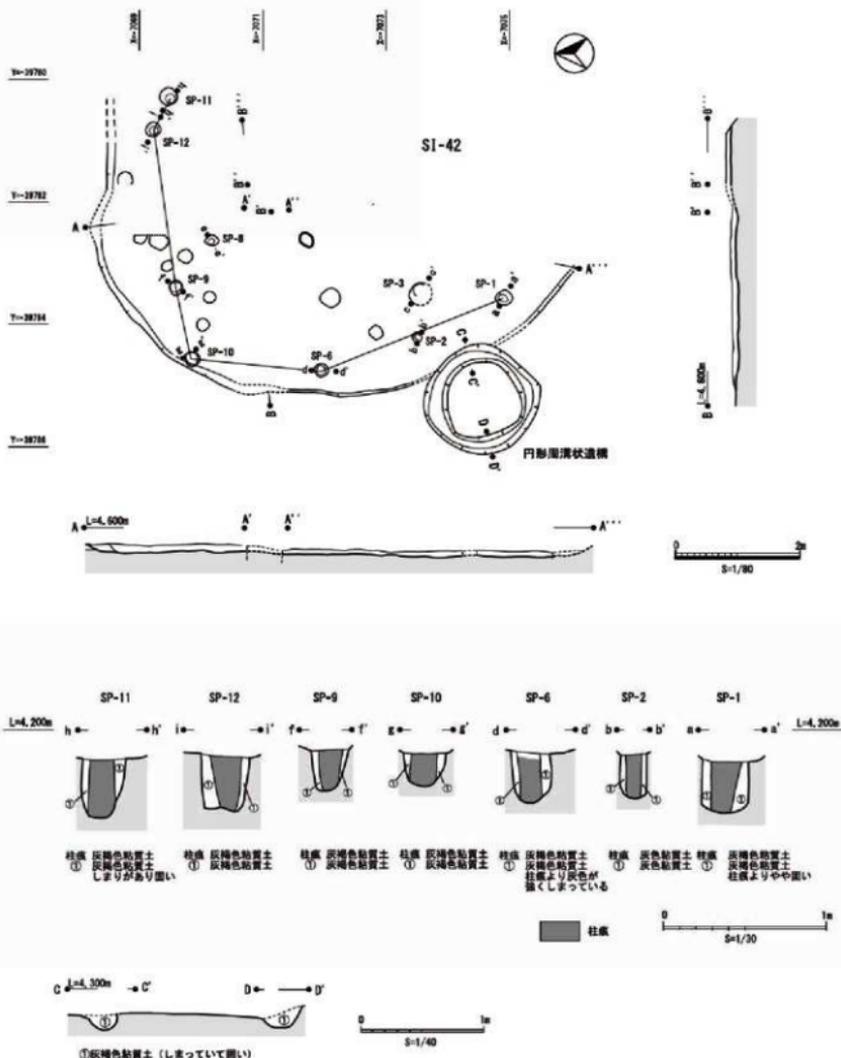
第33図 玉名平野桑里跡 01-1～8区 遺構配置図(縮文)



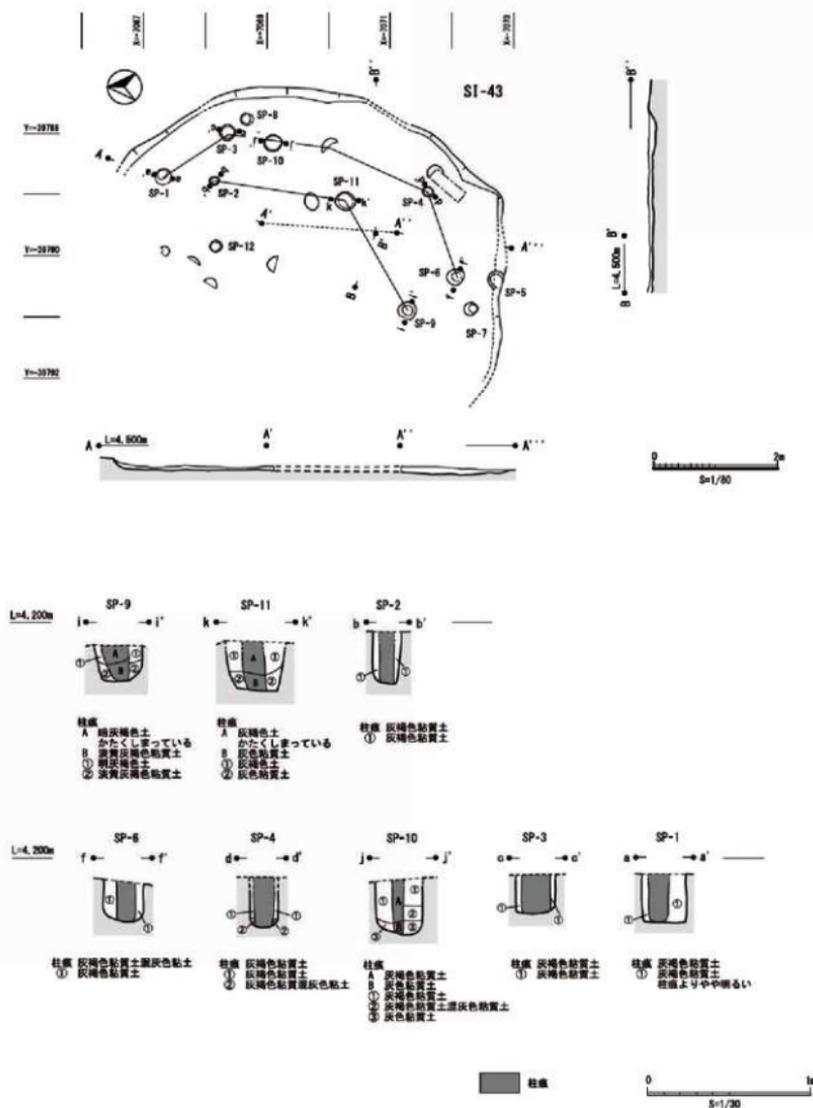
第 34 図 玉名平野条里跡 01-1・2区 遺構配置図及びコンタ図（縄文）



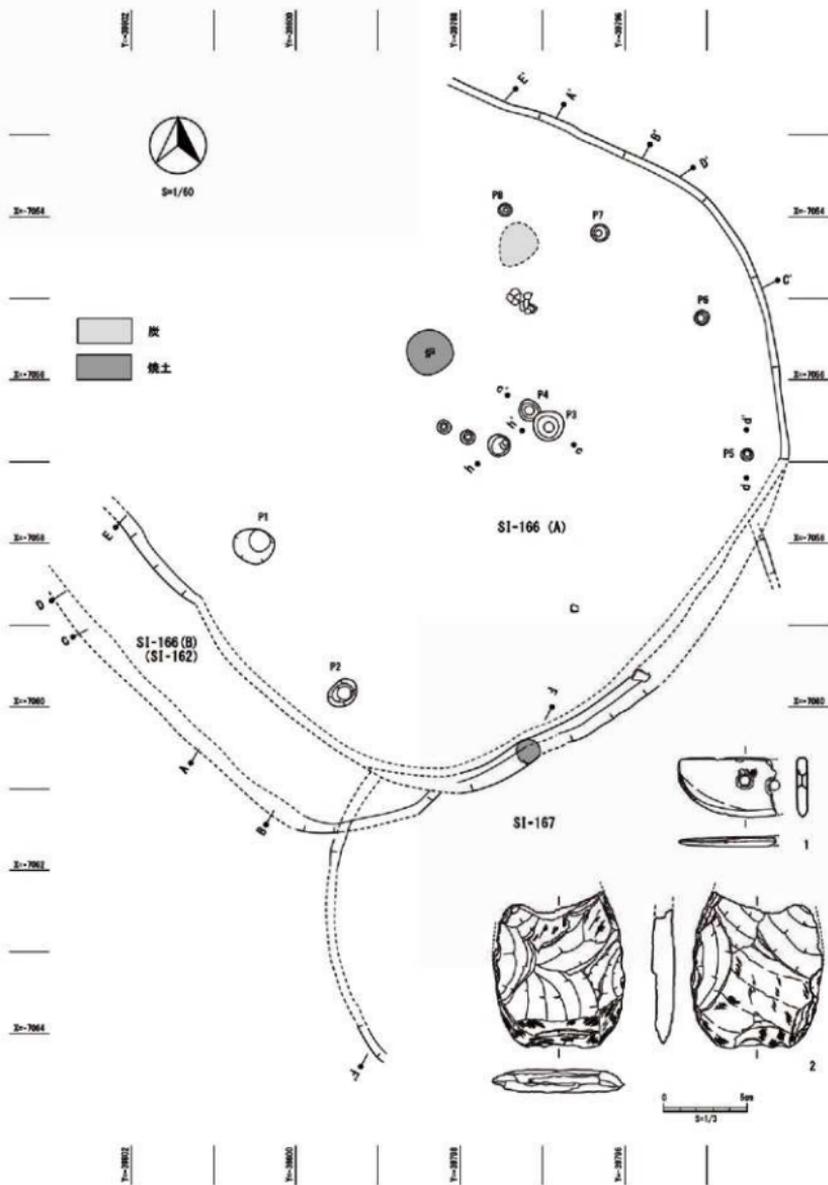
第 35 図 玉名平野条里跡 01-3 区 3b 層遺構配置図 (縄文)



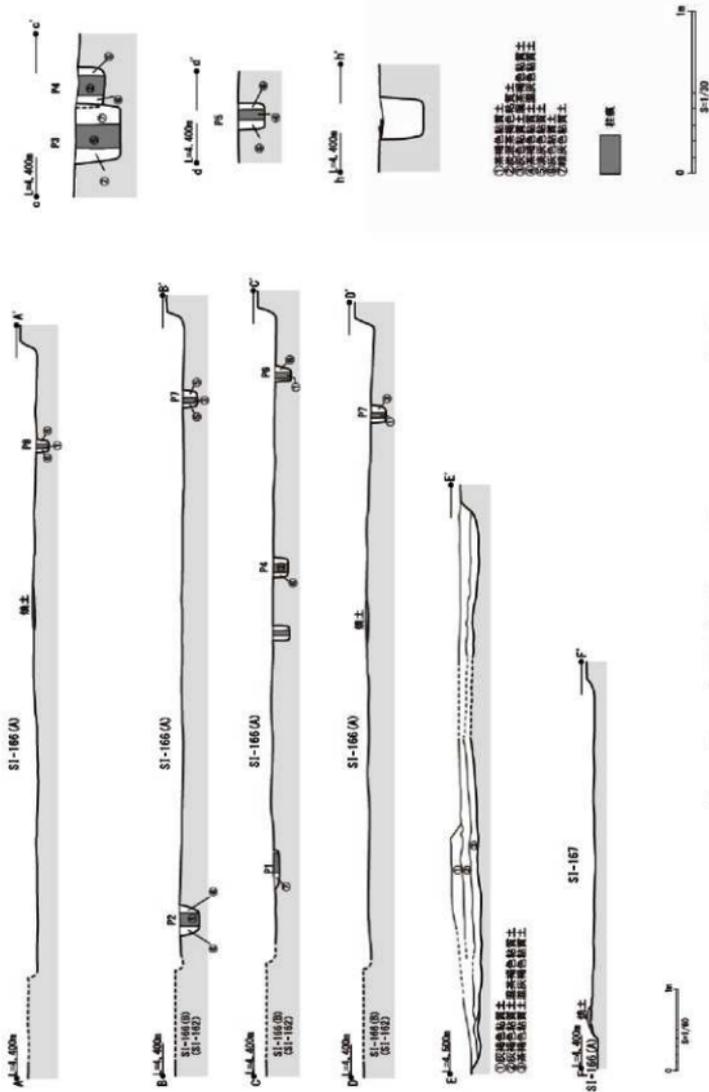
第 36 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-42・円形周溝状遺構実測図



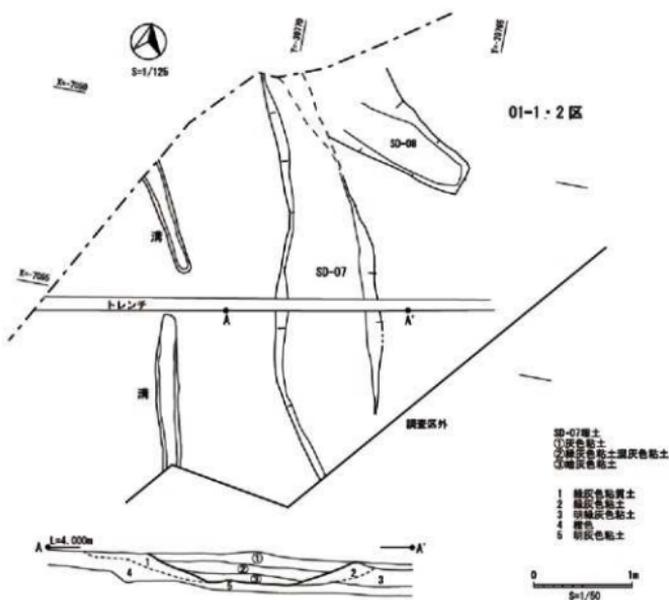
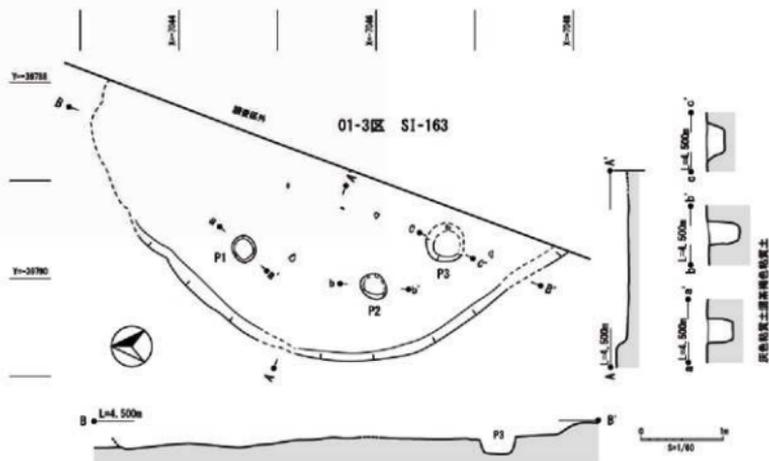
第 37 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43 実測図



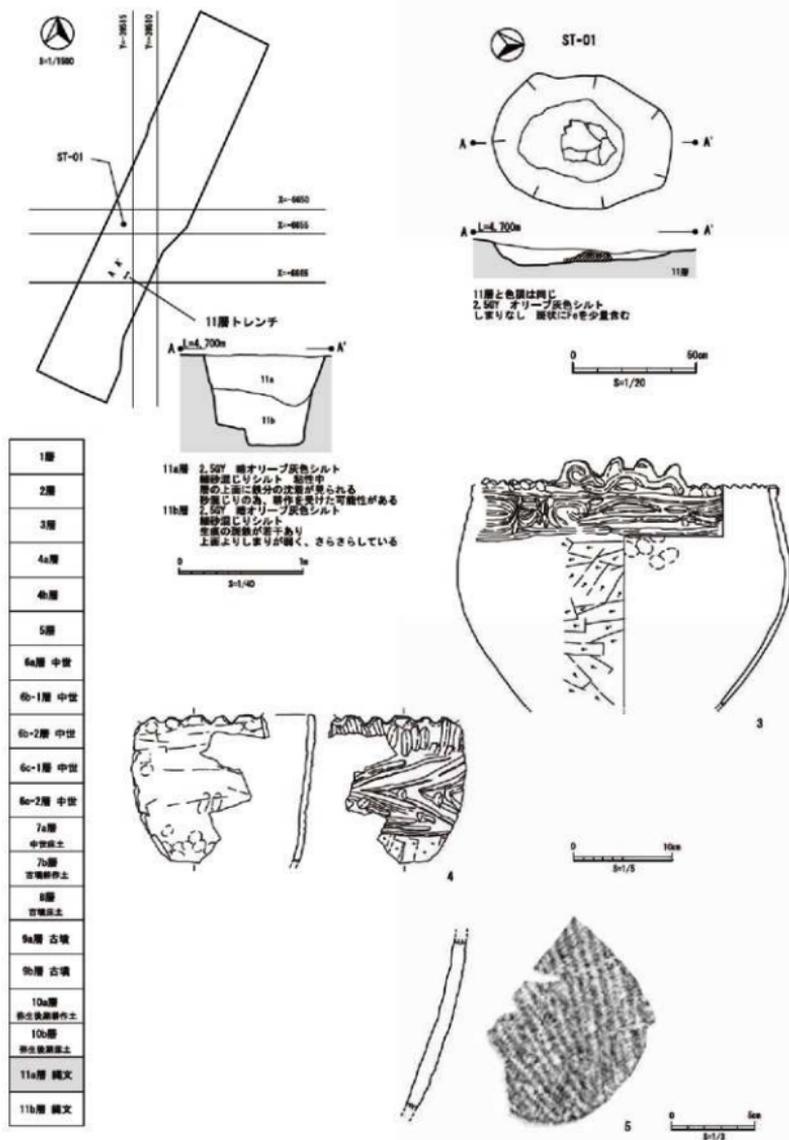
第 38 図 玉名平野条里跡 01-3 区 S1-166・167 実測図 1 及び出土遺物実測図



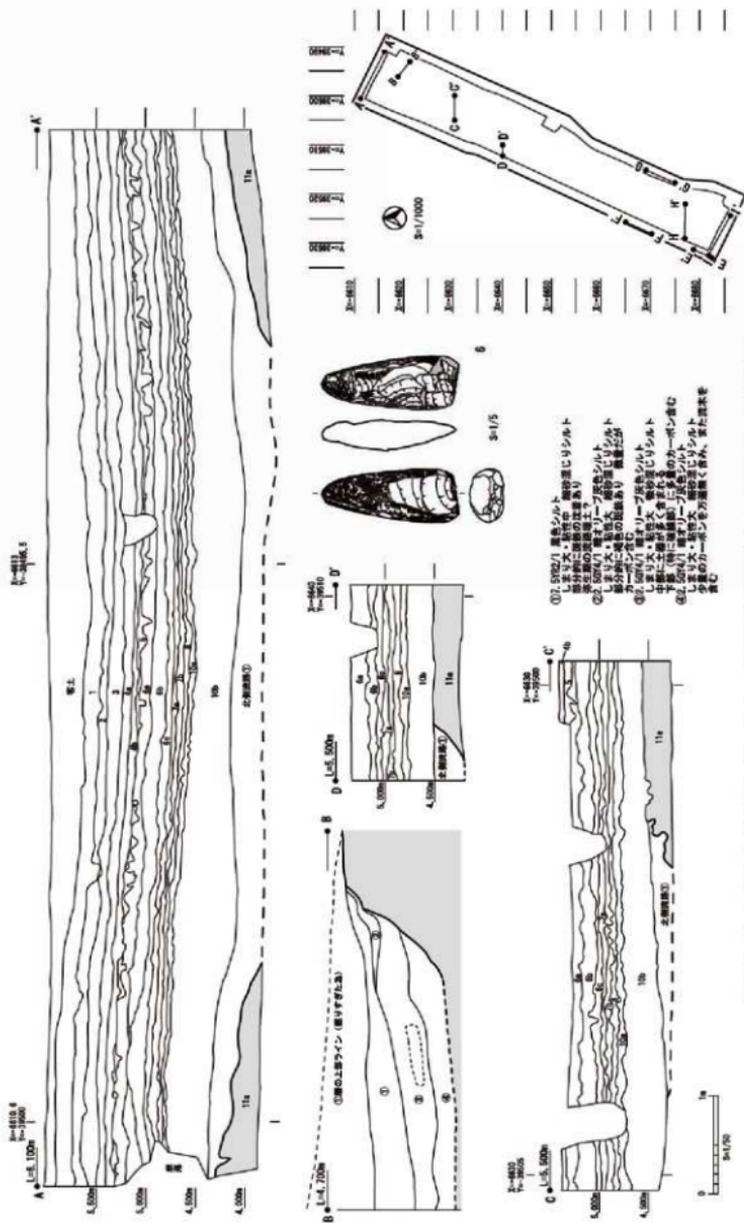
第 39 図 玉名平野条里跡 01-3 区 S1-166・167 実測図 2



第 40 図 玉名平野条里跡 01-3区 SI-163 01-1・2区 SD-07・08 実測図

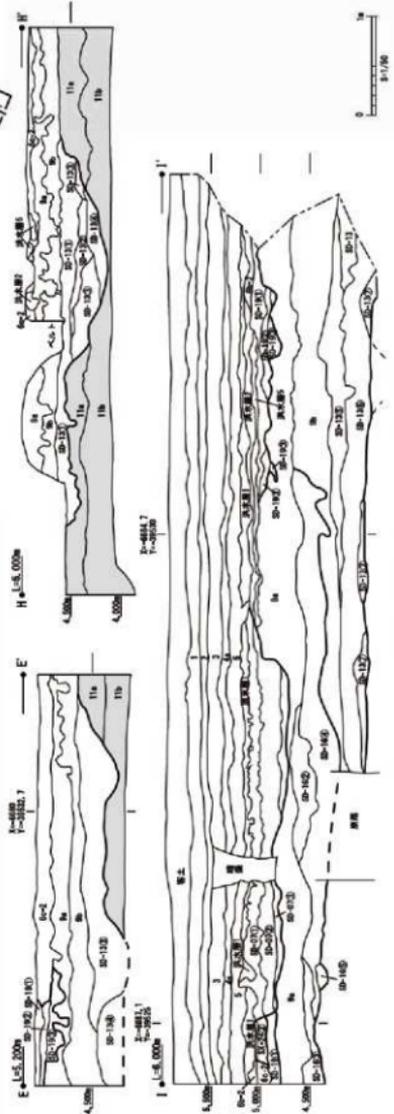
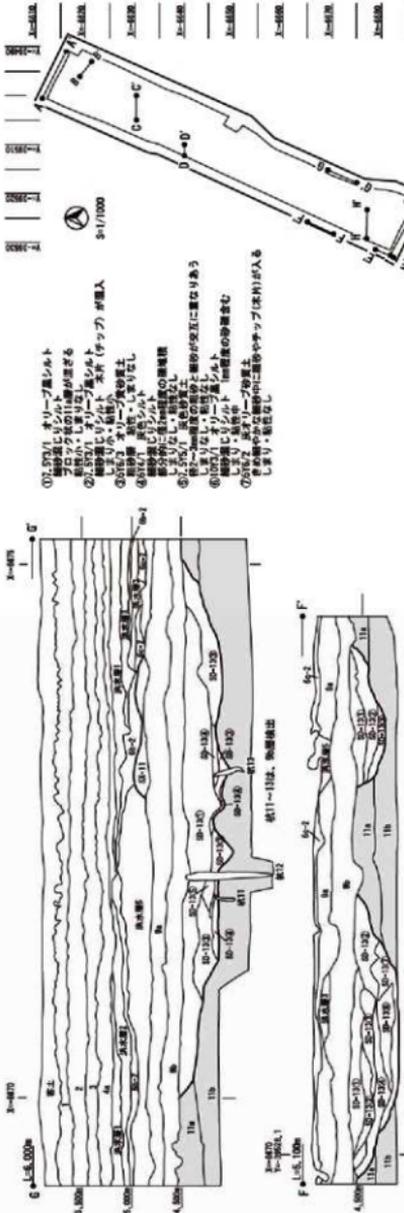


第 41 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図 (No.3・4)
玉名平野条里跡 07-III 区 出土遺物実測図 (No.5)

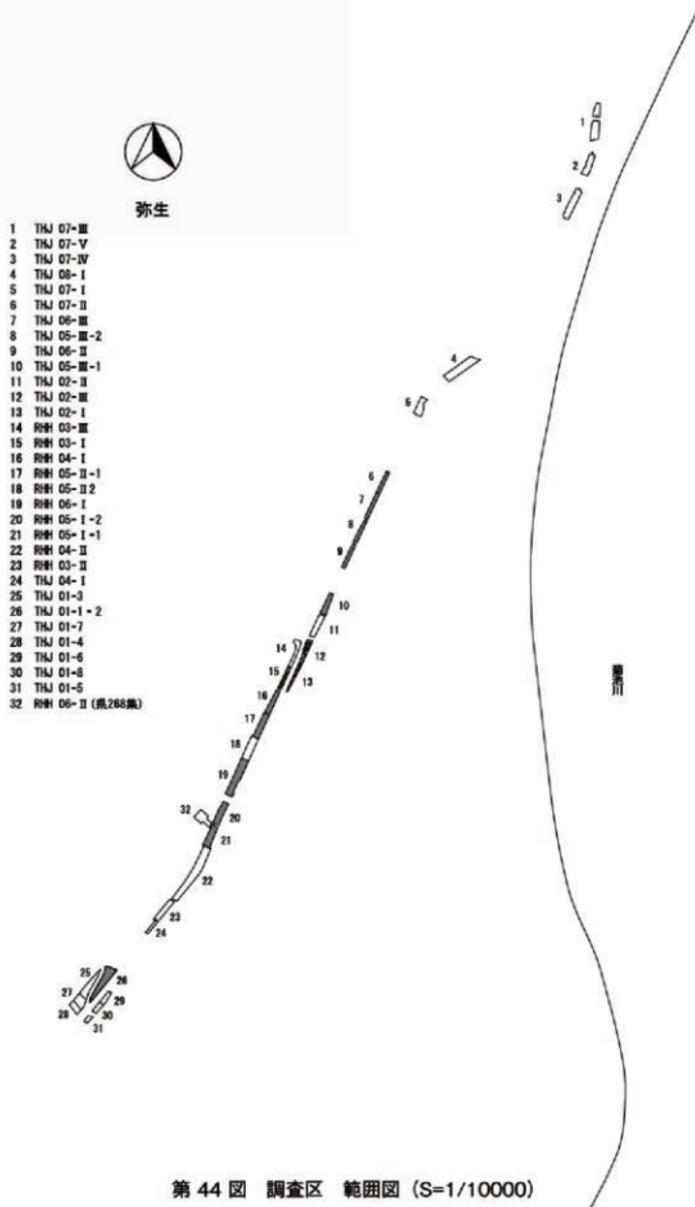


① 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ② 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ③ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ④ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑤ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑥ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑦ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑧ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑨ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)
 ⑩ 5000/1 層の土層ライン (掘り出し部)

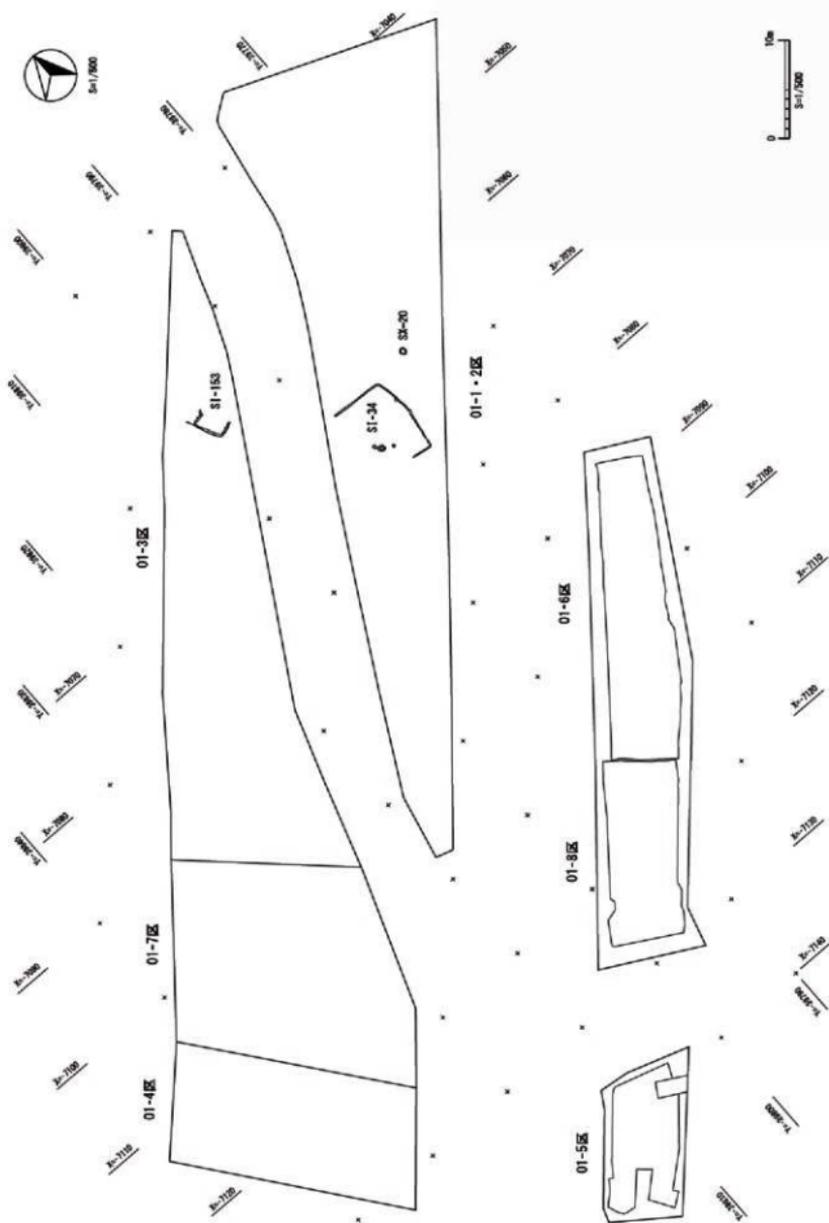
第 42 図 両迫間日波遺跡 O6-I 区 北側流路土層断面図及び出土遺物実測図



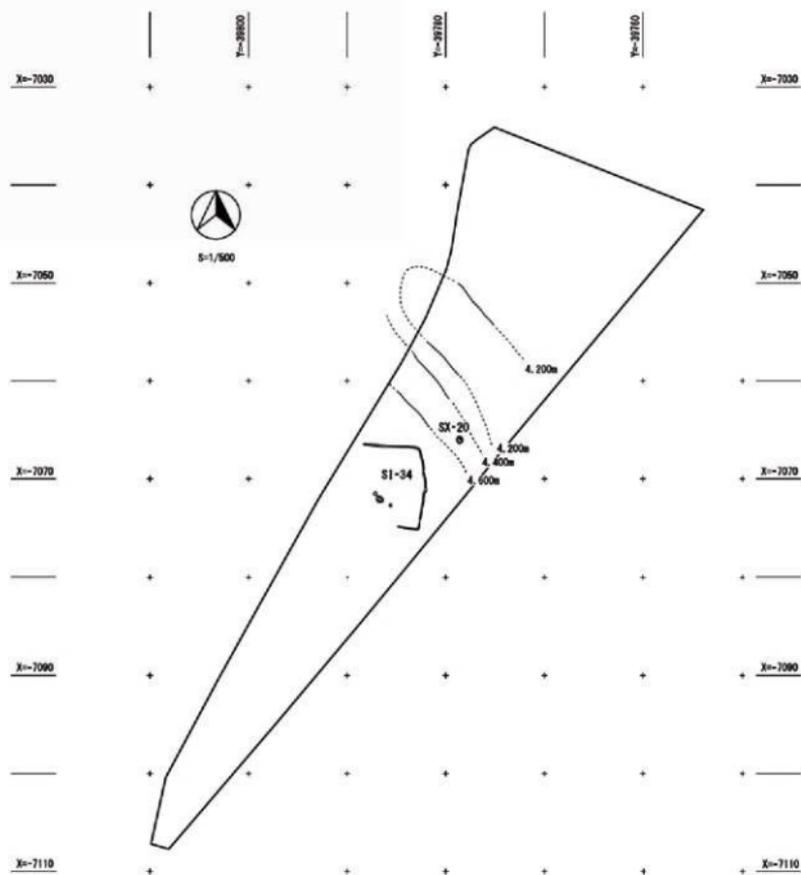
第43図 阿波間日波遺跡06-I区 11a層SD-13実測図



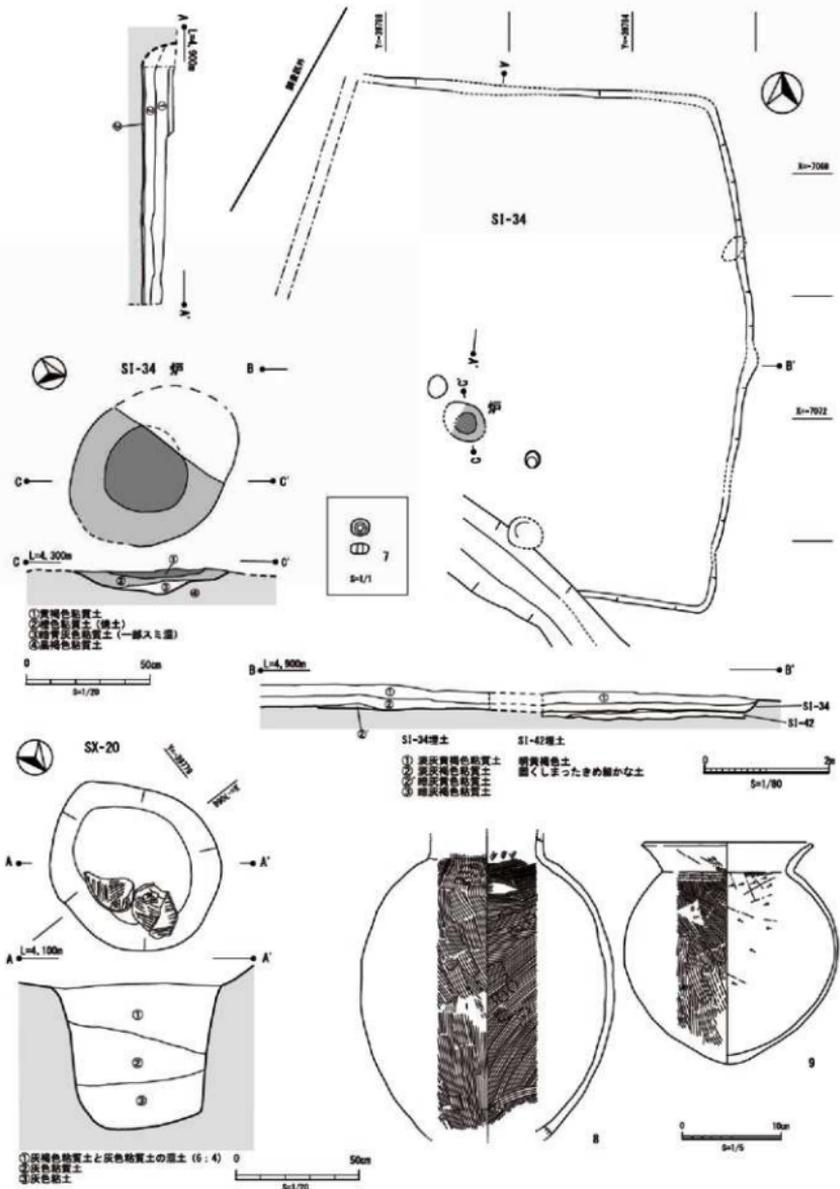
第 44 図 調査区 範囲図 (S=1/10000)



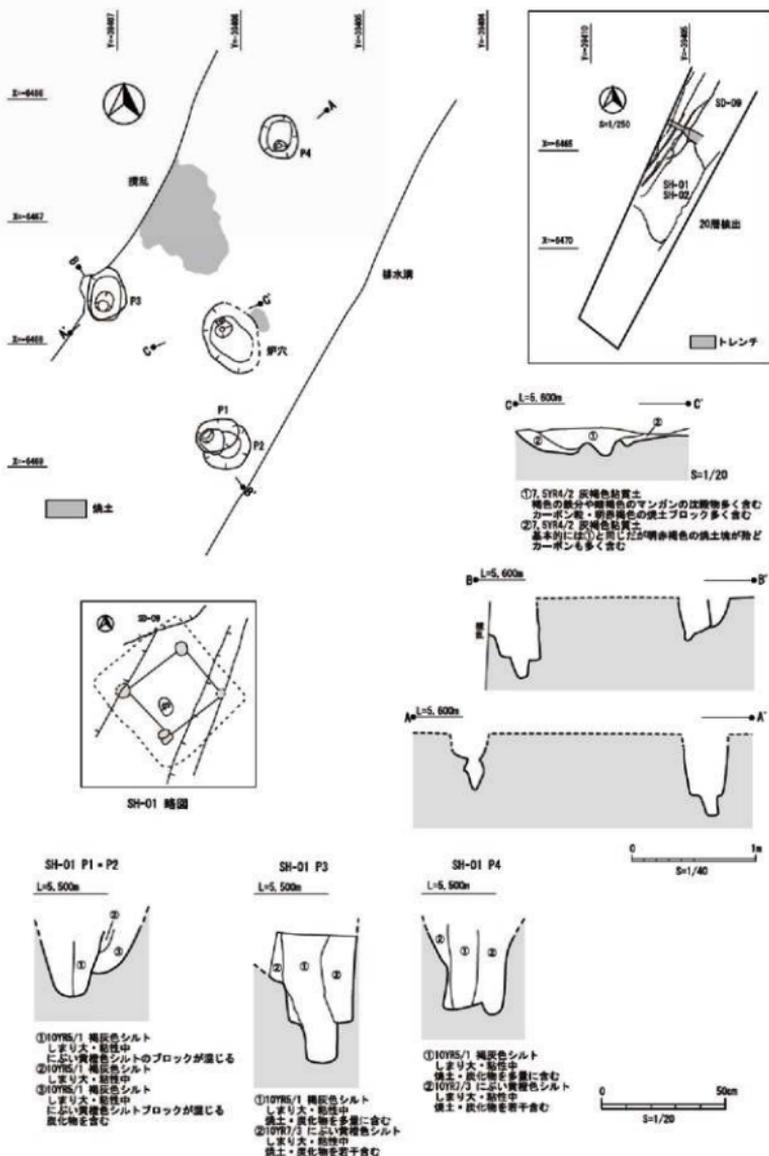
第45図 玉名平野条里跡 01-1～8区 遺構配置図(弥生)



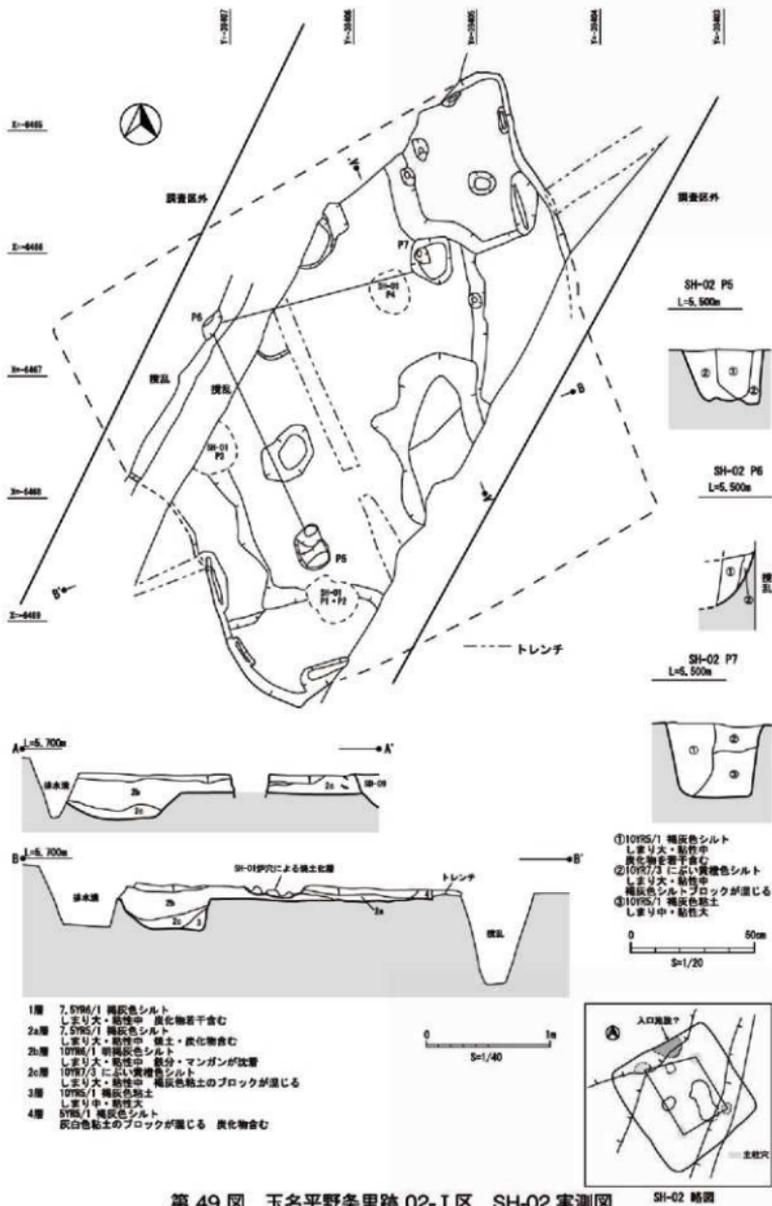
第 46 図 玉名平野桑里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (弥生)



第 47 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-34・SX-20 実測図及び出土遺物実測図

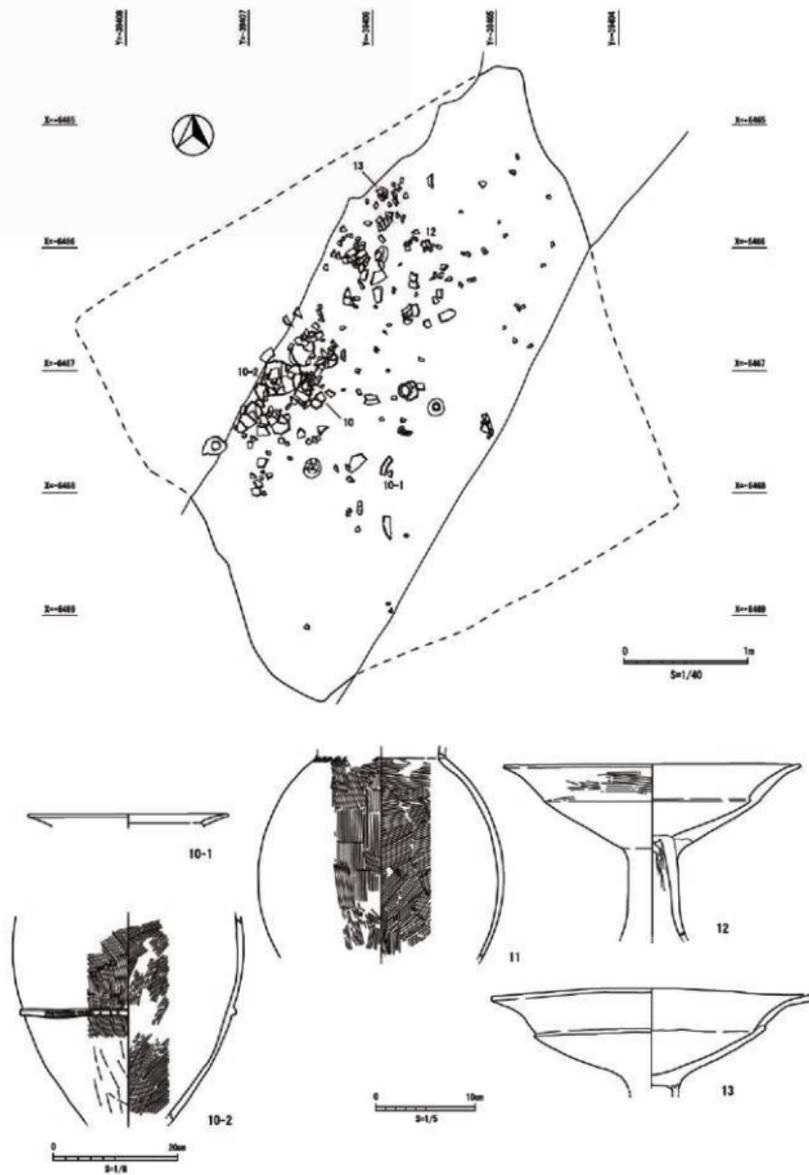


第 48 図 玉名平野条里跡 O2-I 区 SH-01 実測図

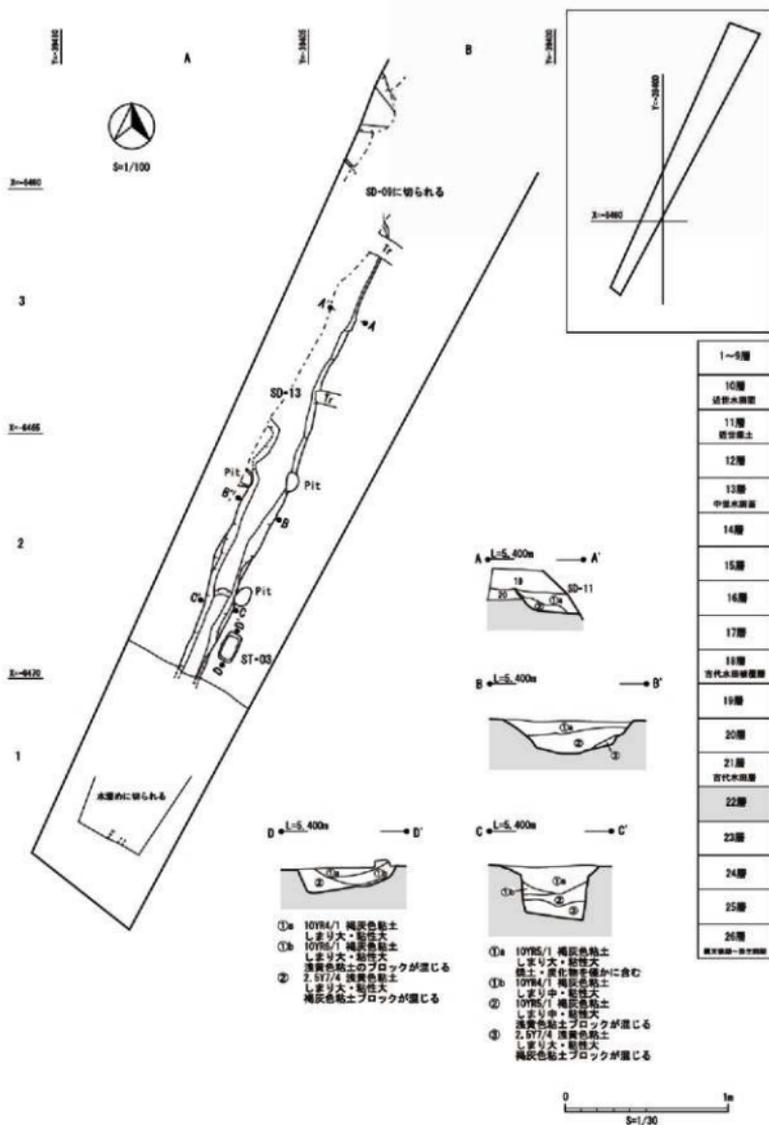


第 49 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SH-02 実測図

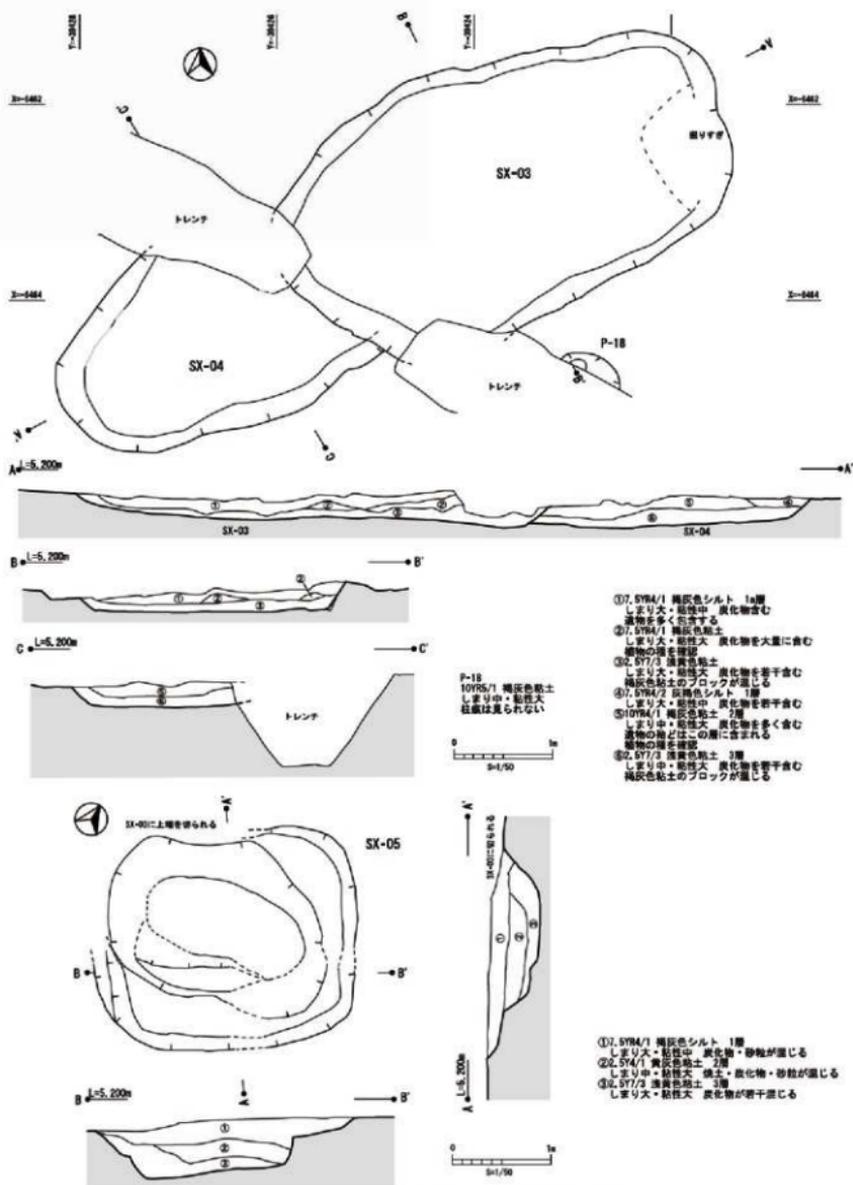
SH-02 略図



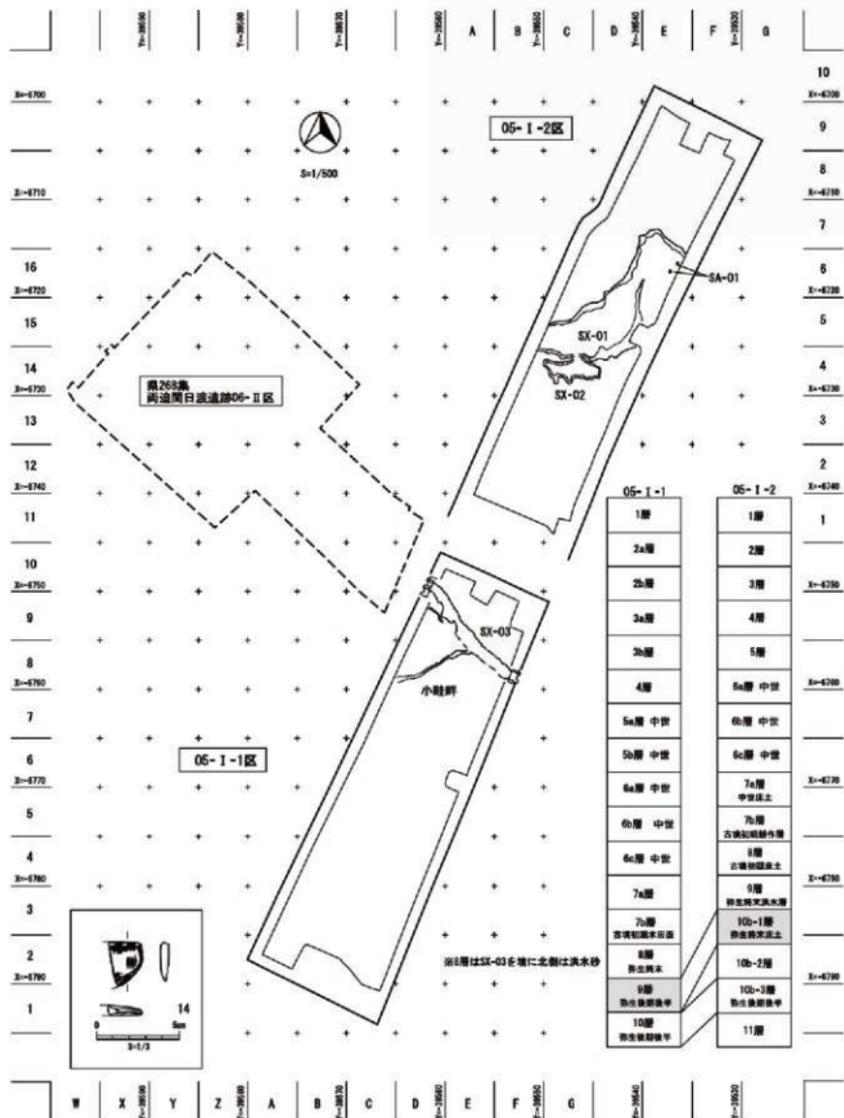
第 50 図 玉名平野条里跡 02- I 区 SH-01・02 遺物出土状況及び出土遺物実測図



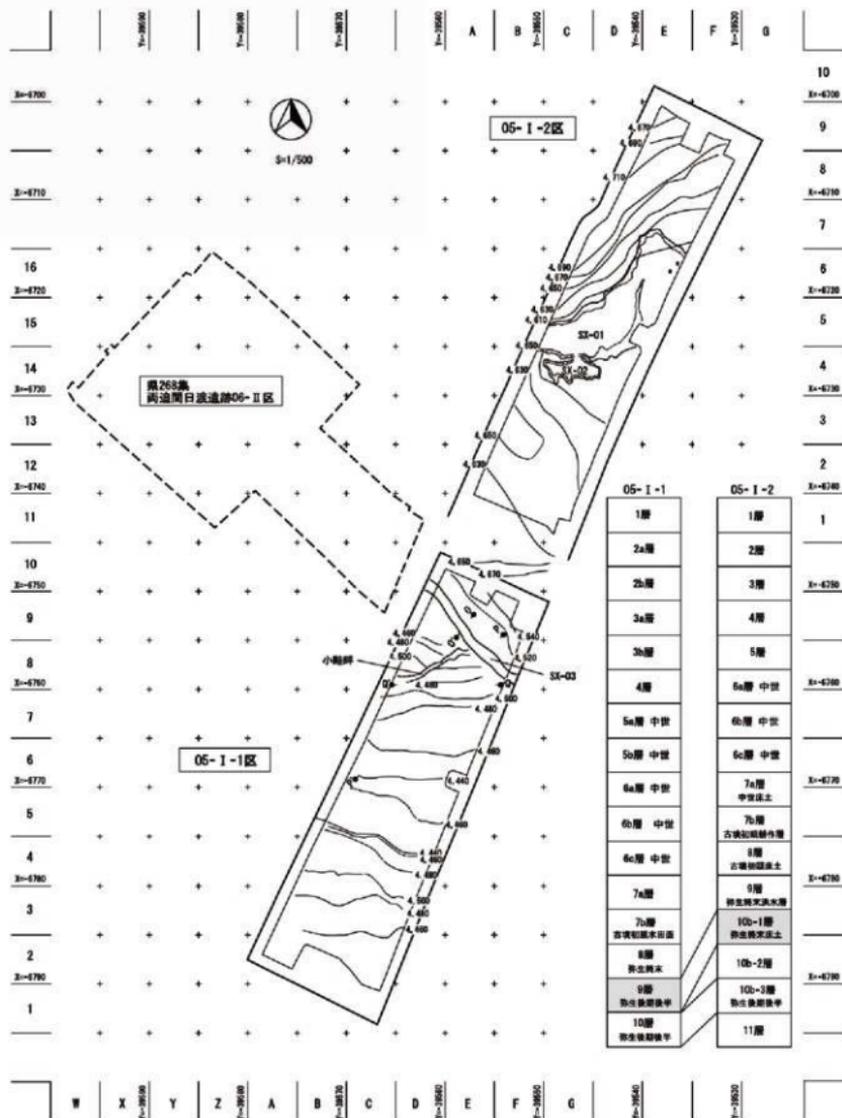
第 51 図 玉名平野条里跡 02-I 区 22 層遺構配置図・SD-13・ST-03 実測図



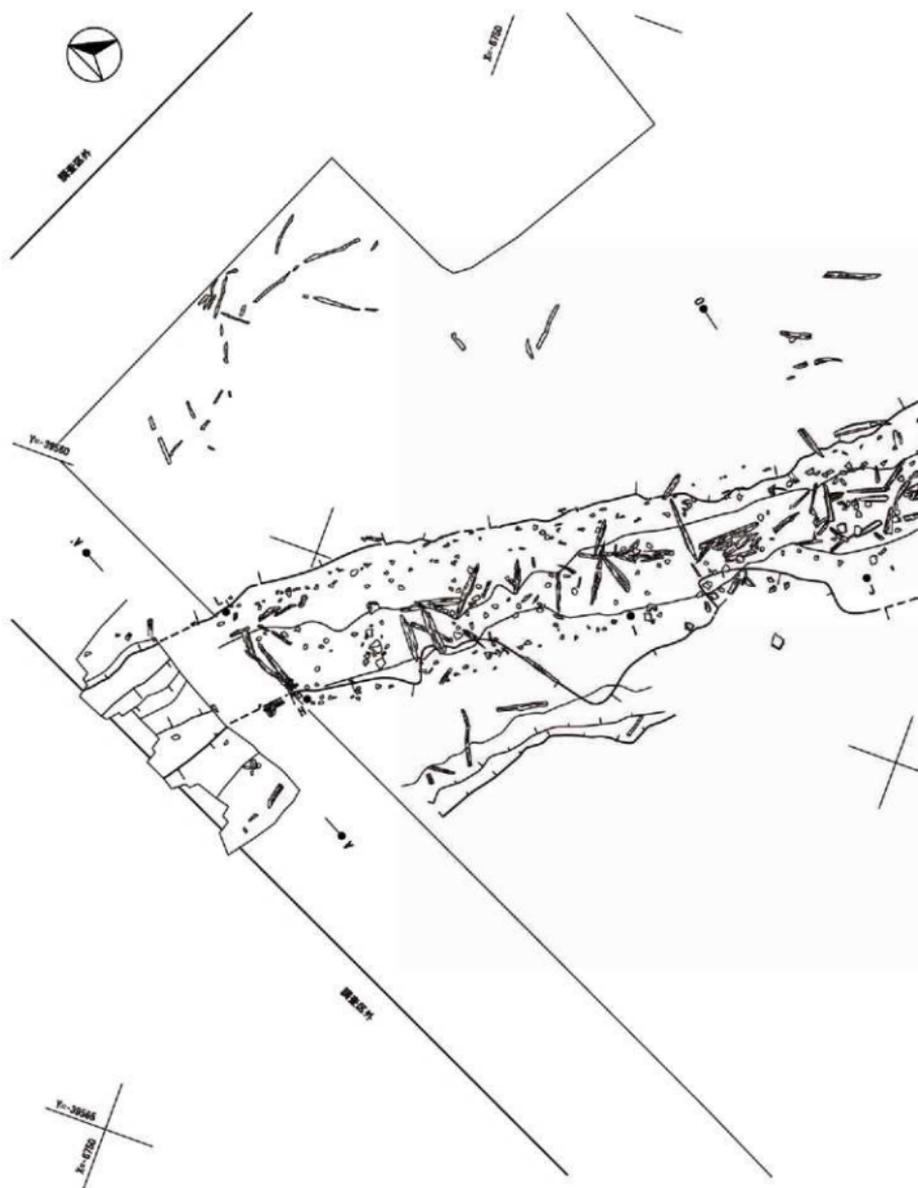
第 52 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SX-03~05 実測図



第 53 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 9 層
05-I-2 区 10b-1 層遺構配置図及び出土遺物実測図

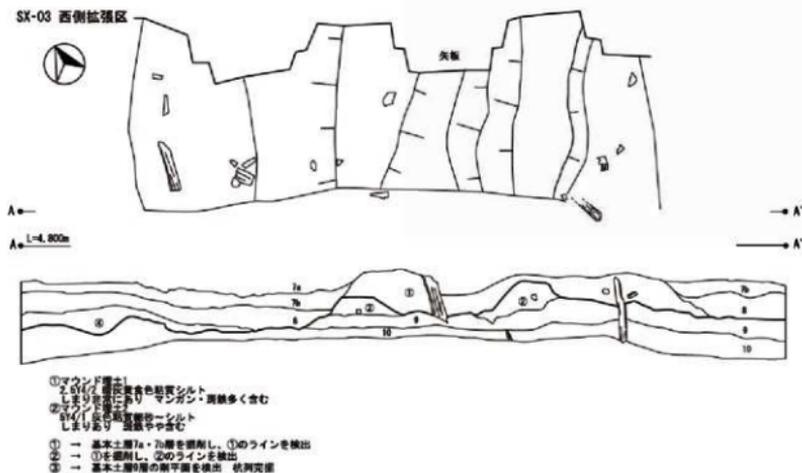


第 54 図 両泊間日渡遺跡 05-I-1 区 9 層 05-I-2 区 10b 層コンタ図

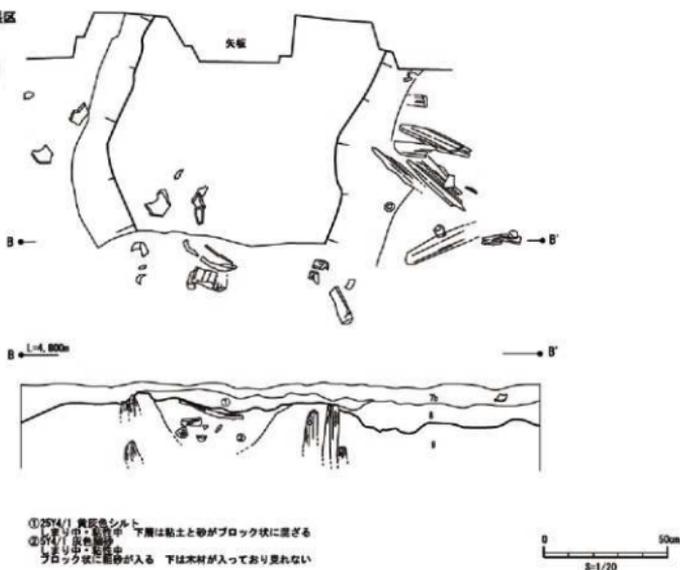


第 55 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03・小町

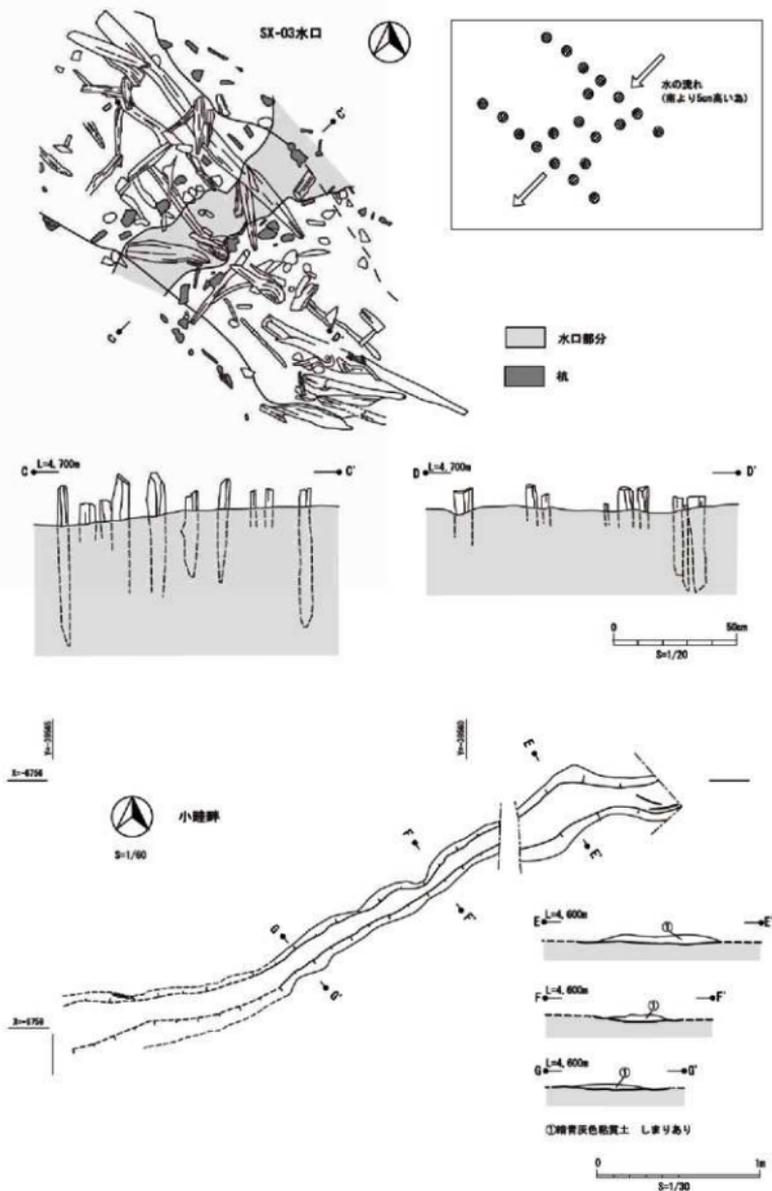
SX-03 西側拡張区



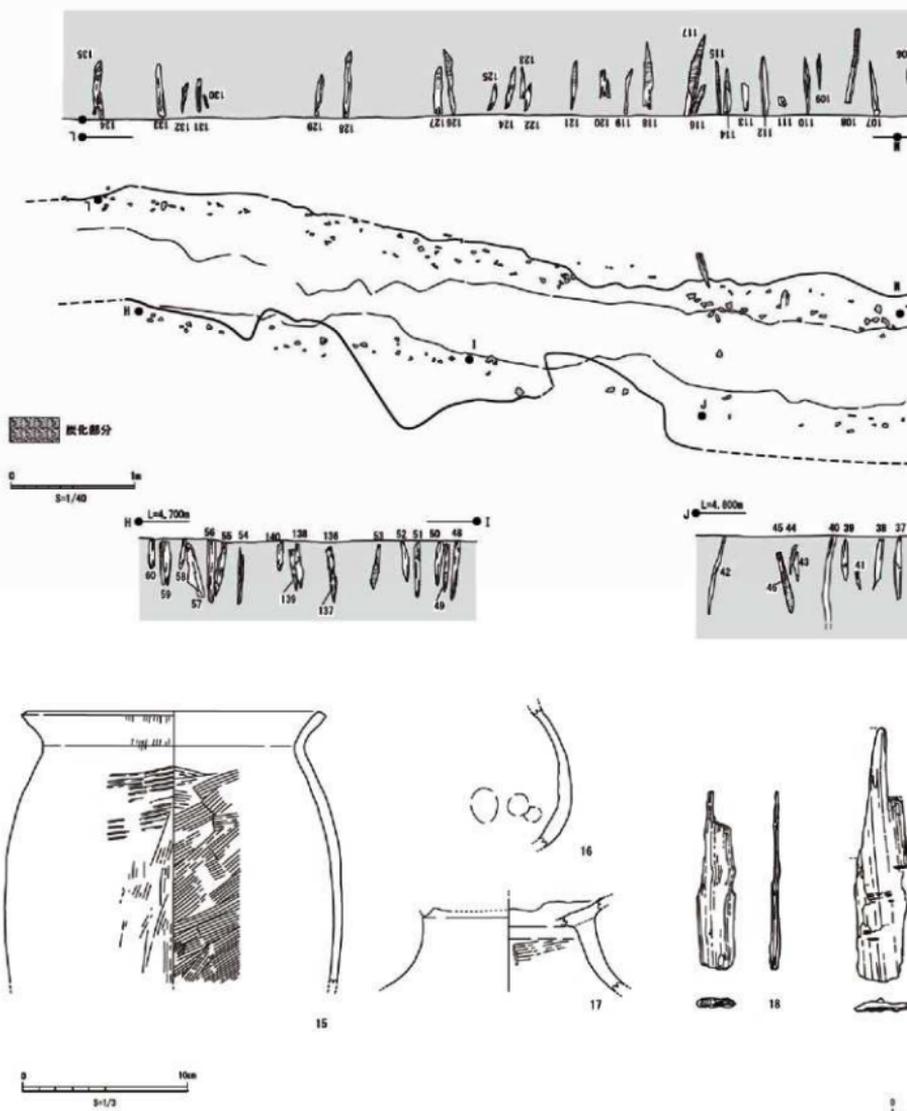
SX-03 東側拡張区



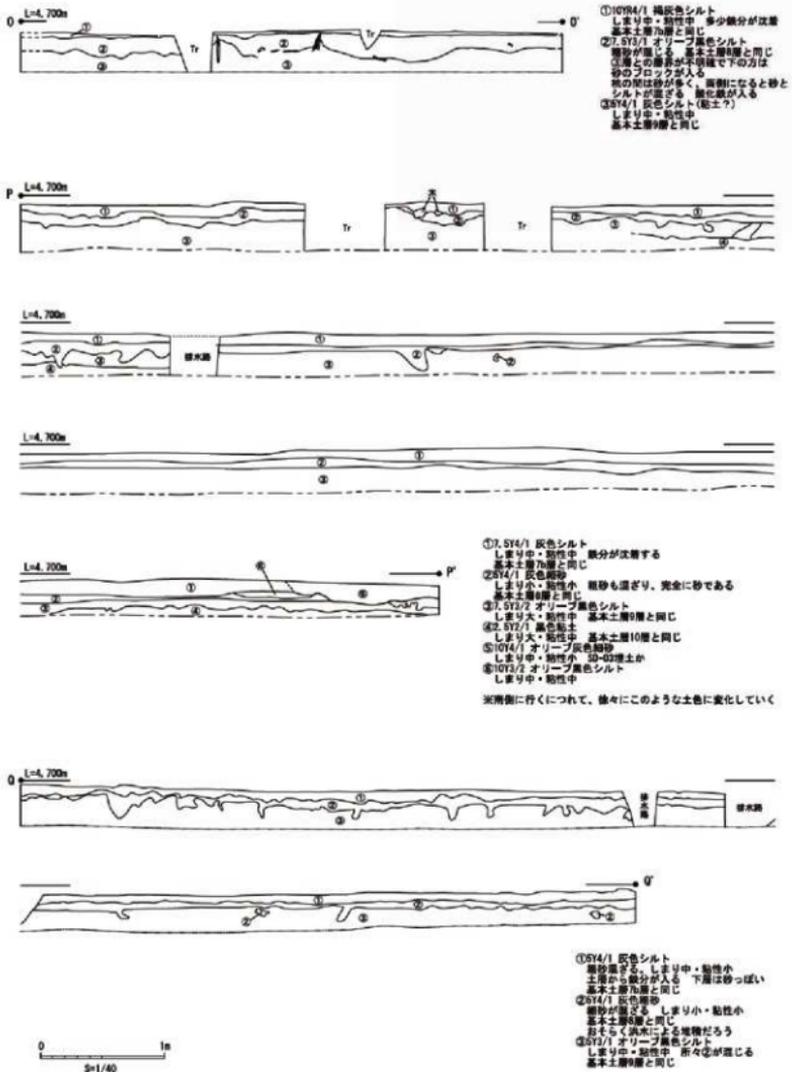
第 56 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 拡張部実測図



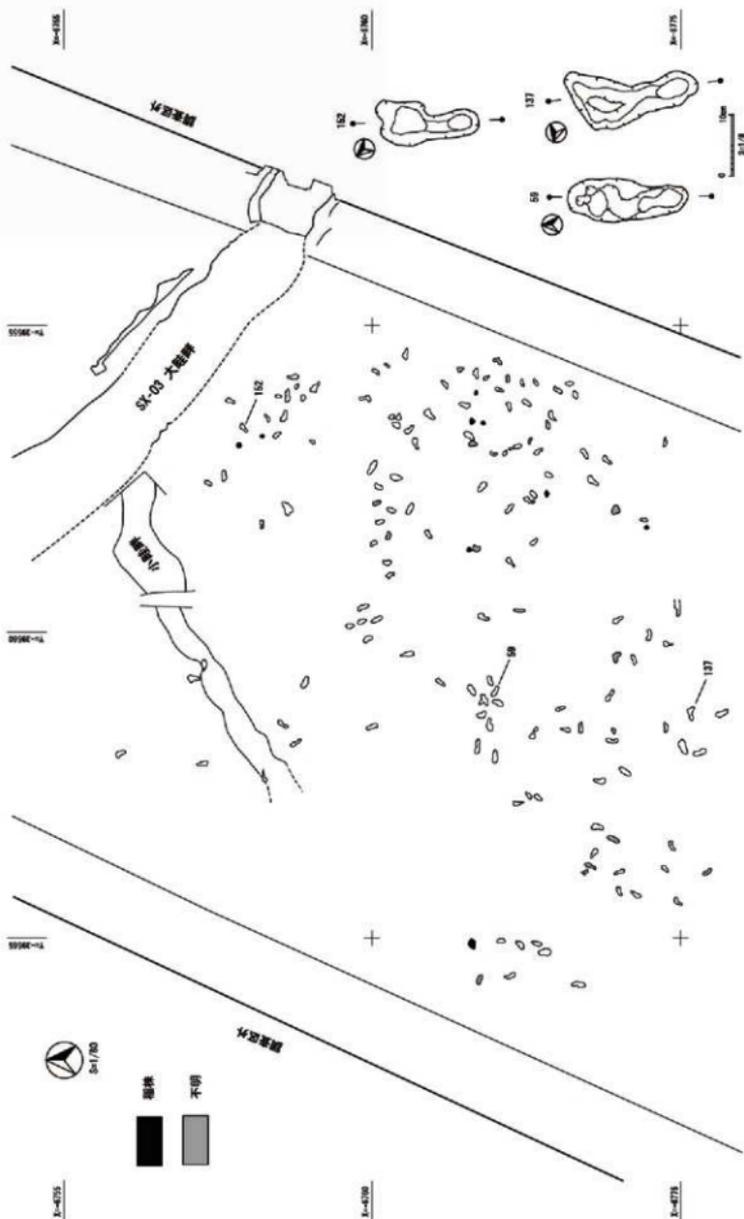
第 57 図 両泊間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 水口・小畦群実測図



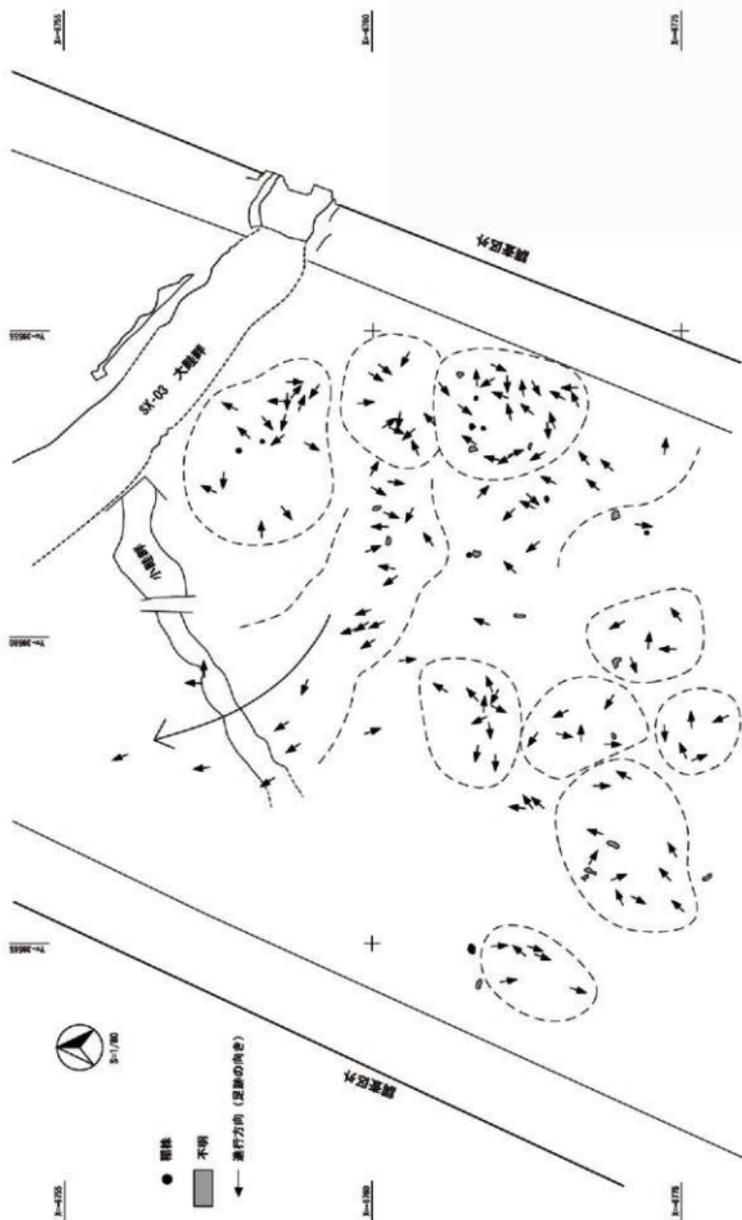
第 58 図 兩迫間日波遺跡 05-I-1 区 SX-03 杭列



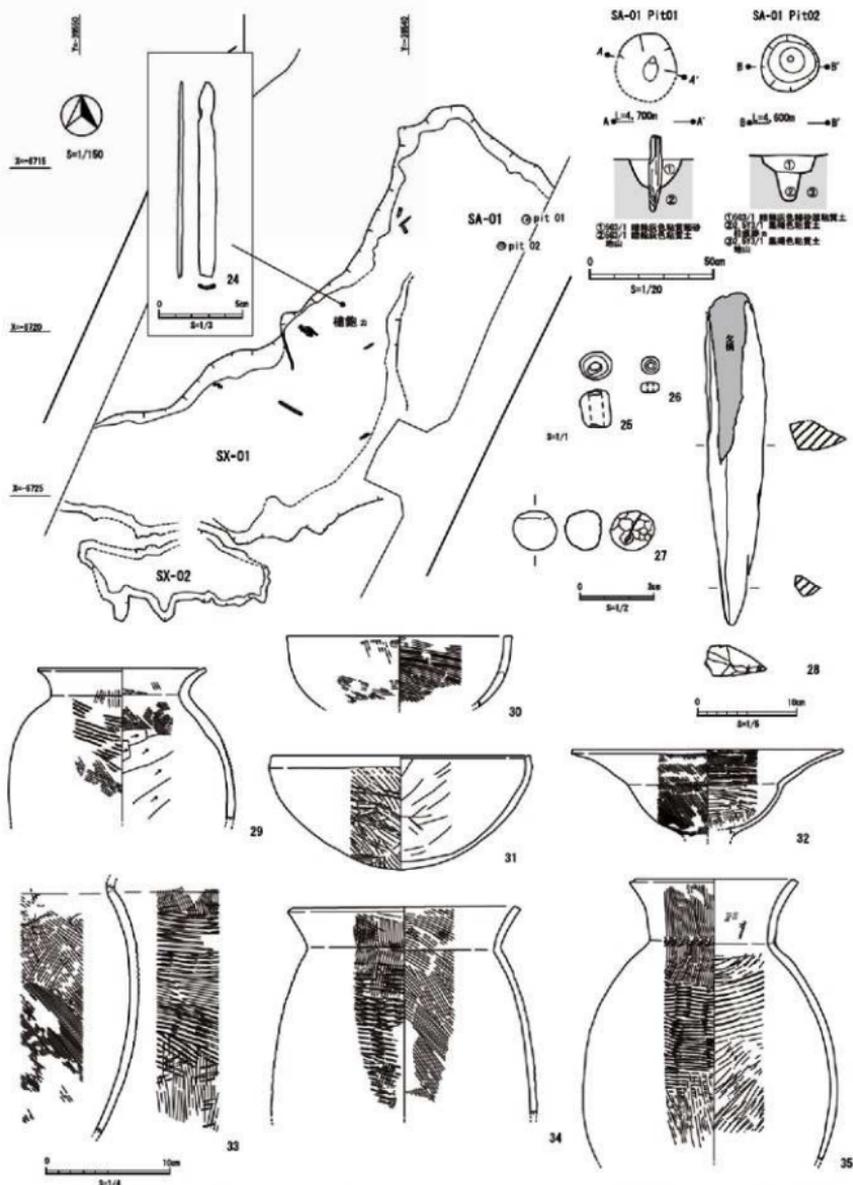
第 59 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 トレンチ土層断面図



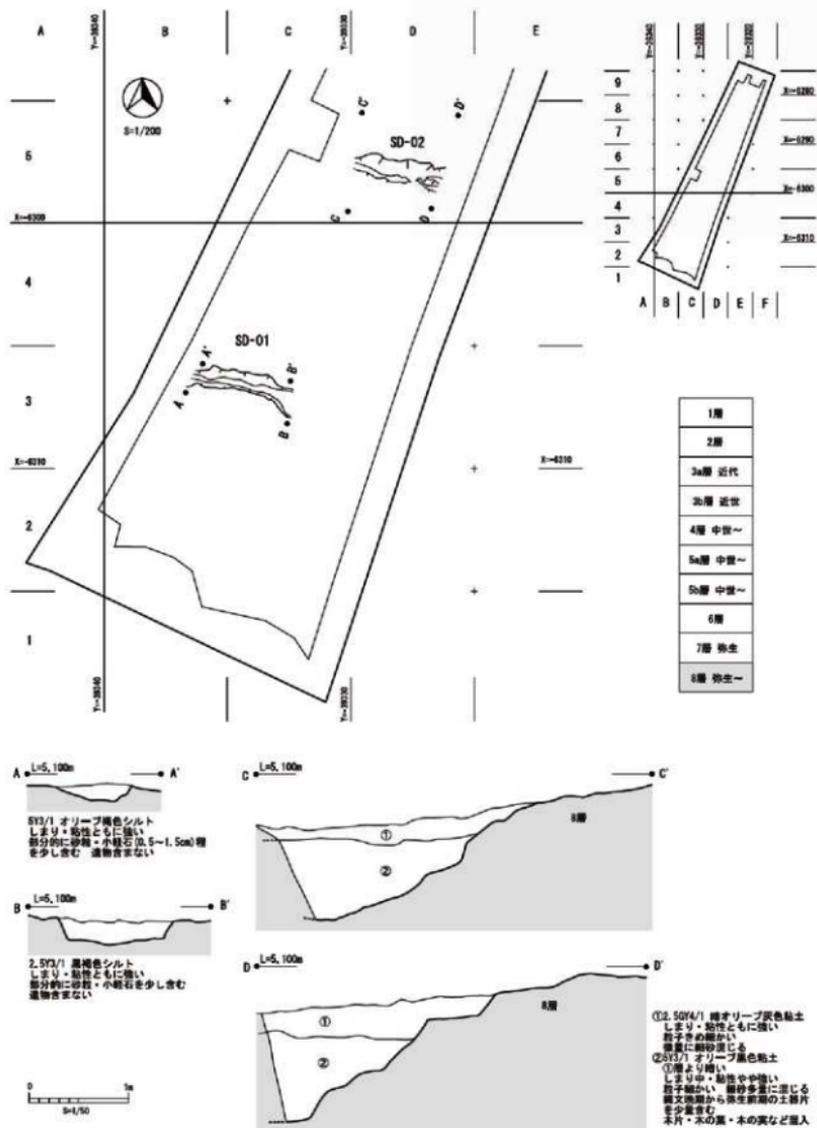
第60図 両道間日速遺跡05-I-1区 足跡位置図及び実測図



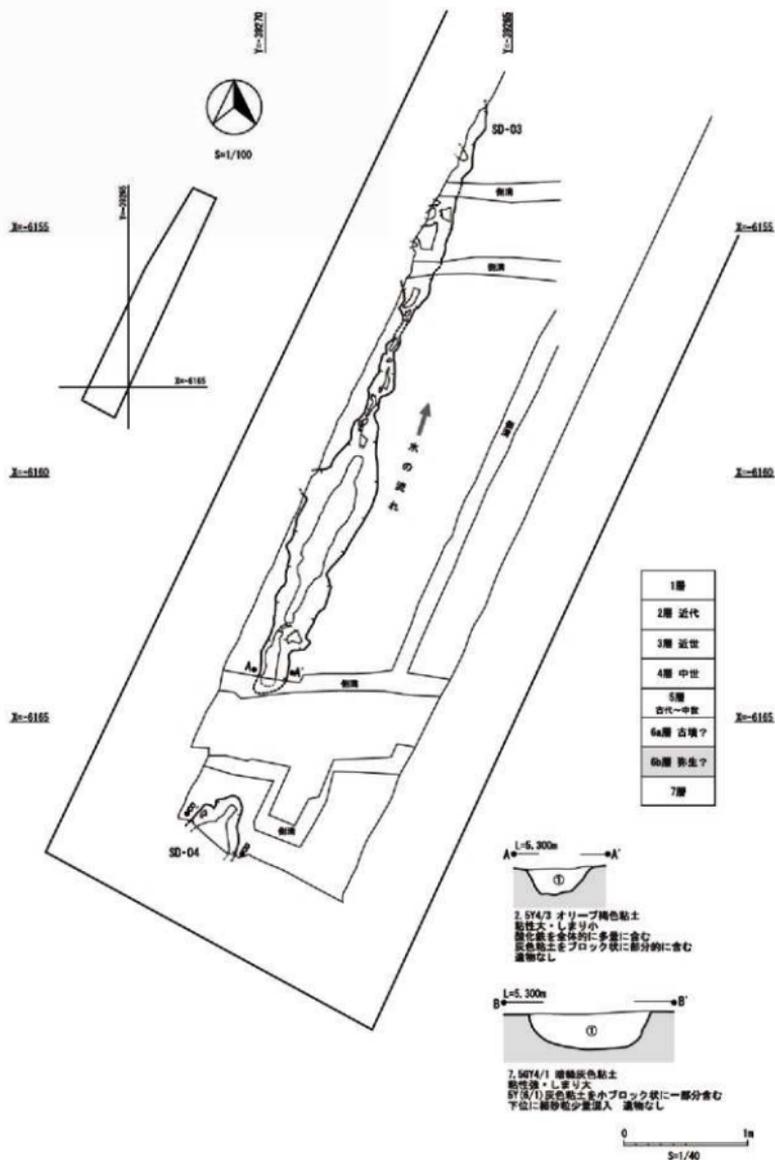
第 61 図 両泊間日差遺跡 05-I-1 区 足跡グループビギング図



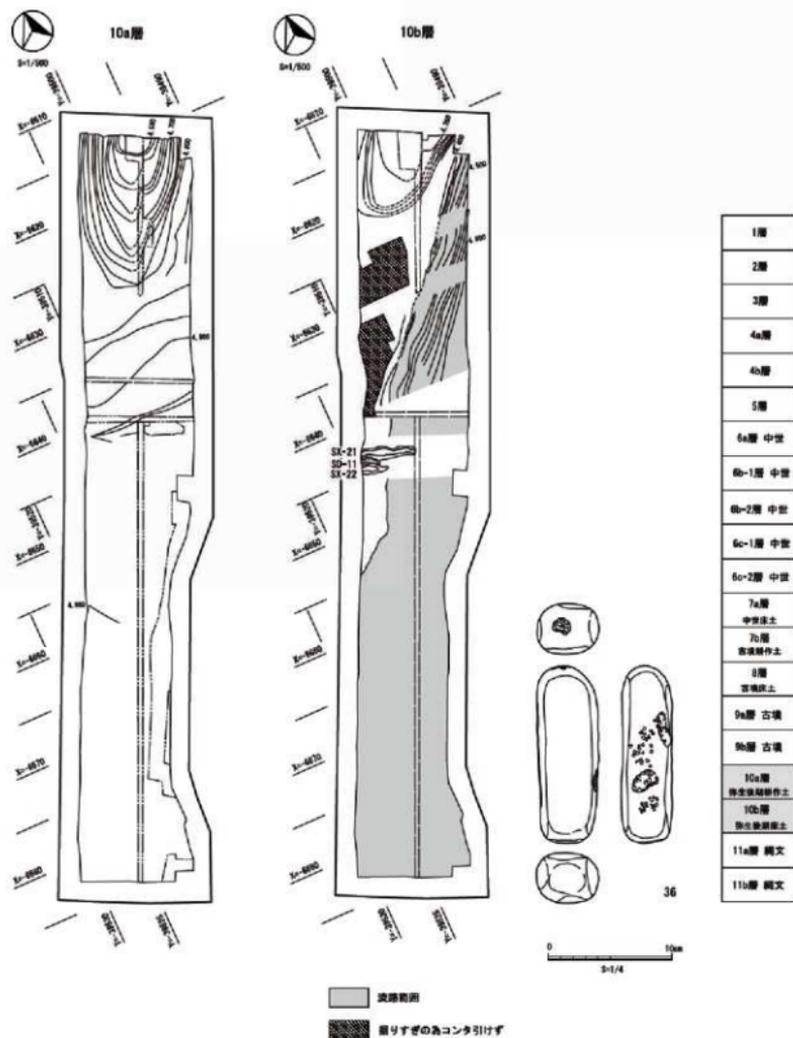
第 62 図 両迫間日波遺跡 05-I-2 区 10b 層 SX-01・02・SA-01 実測図及び出土遺物実測図



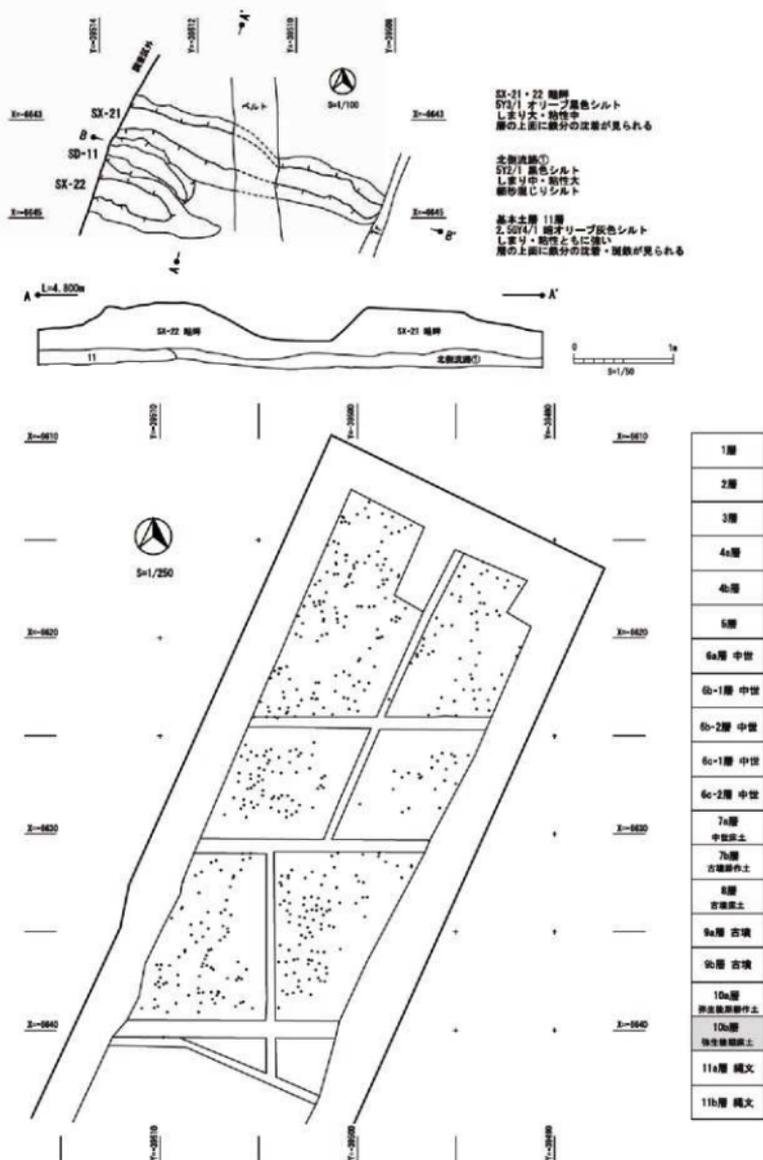
第 63 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-1 区 8層遺構配置図及び SD-01・02 実測図



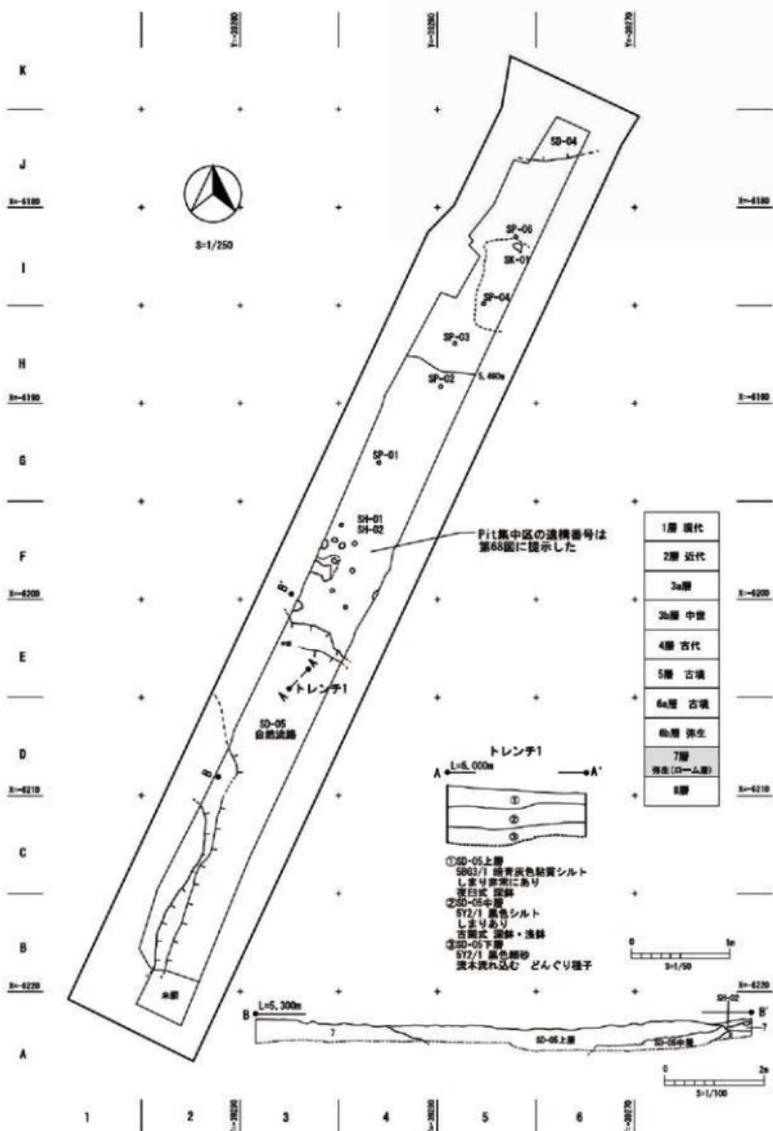
第 64 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 6b 層遺構配置図及び SD-03・04 実測図



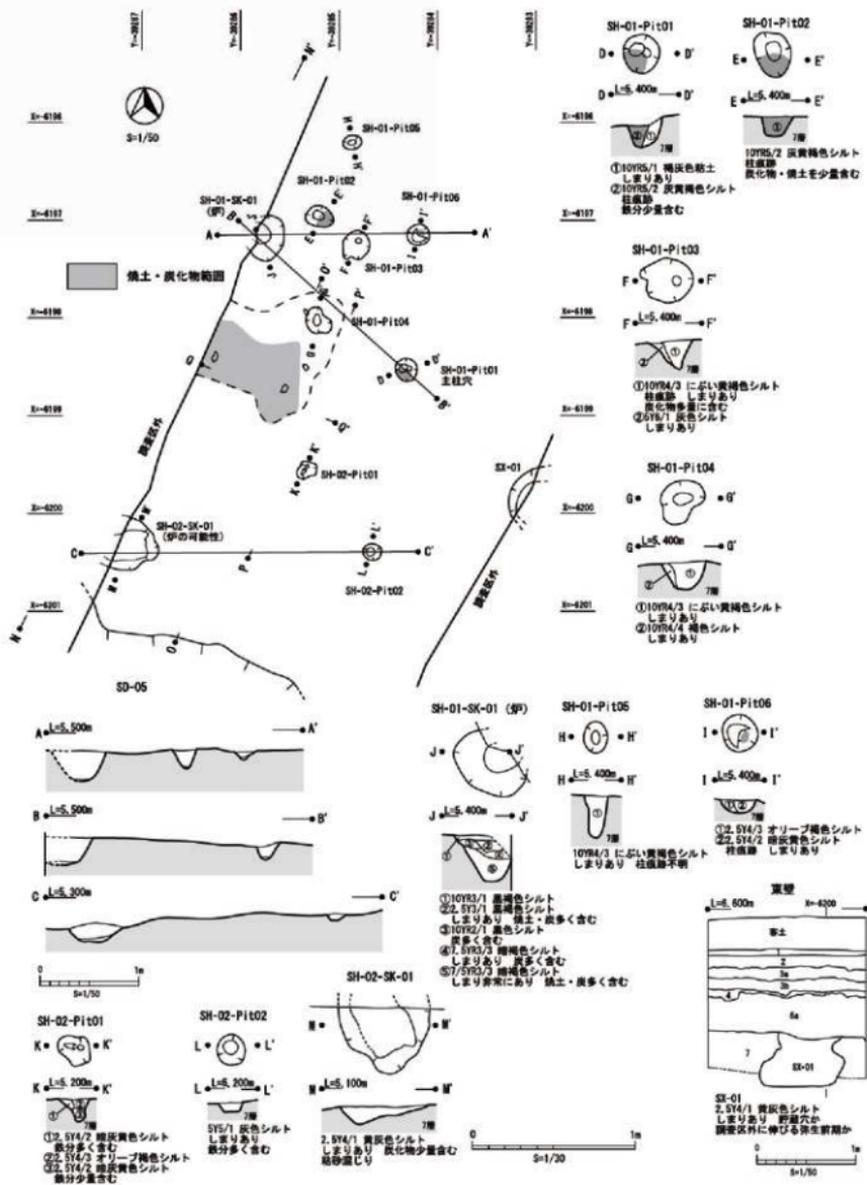
第 65 図 両泊間日渡遺跡 06-I 区 10a 層・10b 層コンタ図及び出土遺物実測図



第 66 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区
10b 層 SD-11・SX-21・22 実測図及び投石出土位置実測図

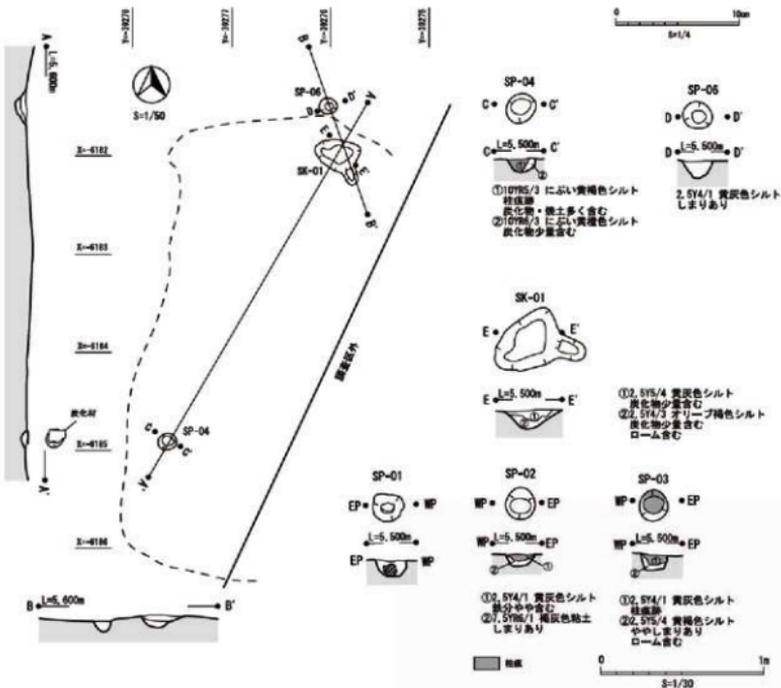
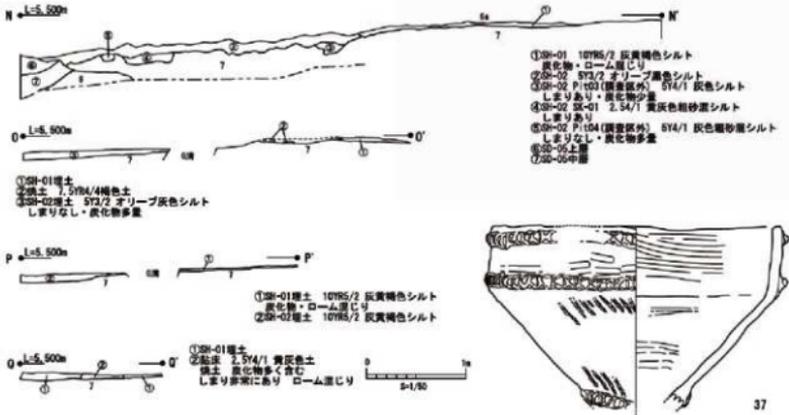


第 67 図 玉名平野条里跡 06-II区 7層直上遺構配置図及びSD-05実測図

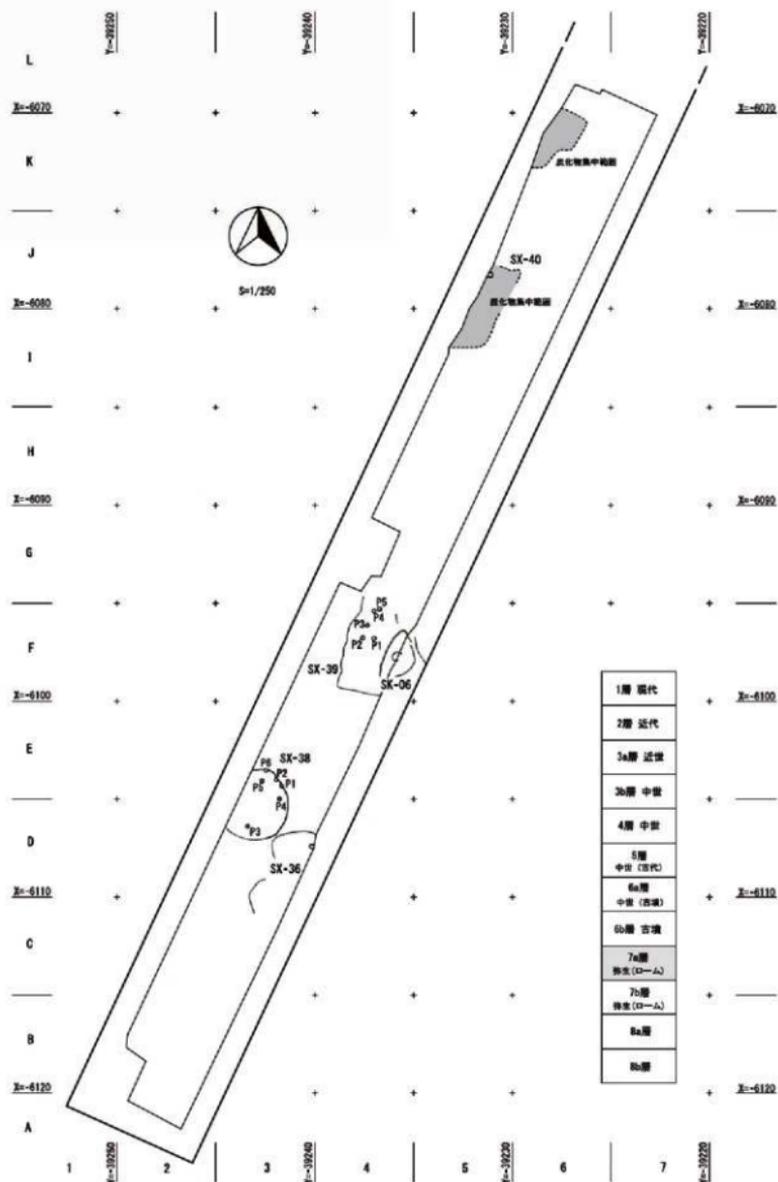


第 68 図 玉名平野築里跡 06-II 区 SH-01・02・SX-01 実測図

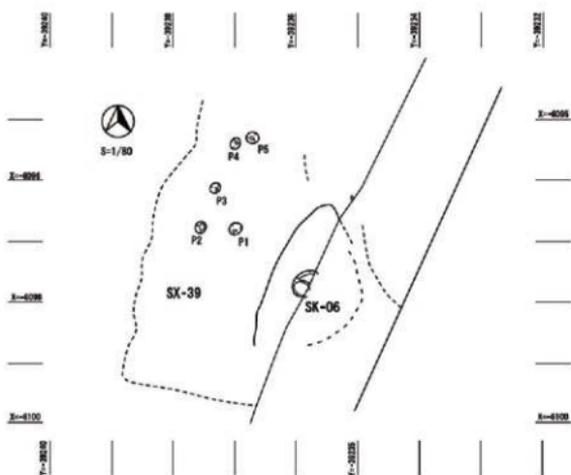
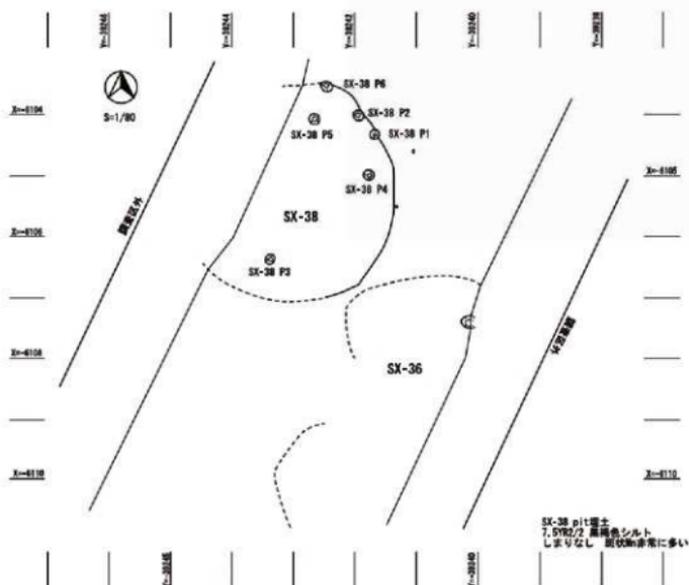
N-N' ~ Q-Q' SH-01・SH-02の土層断面図



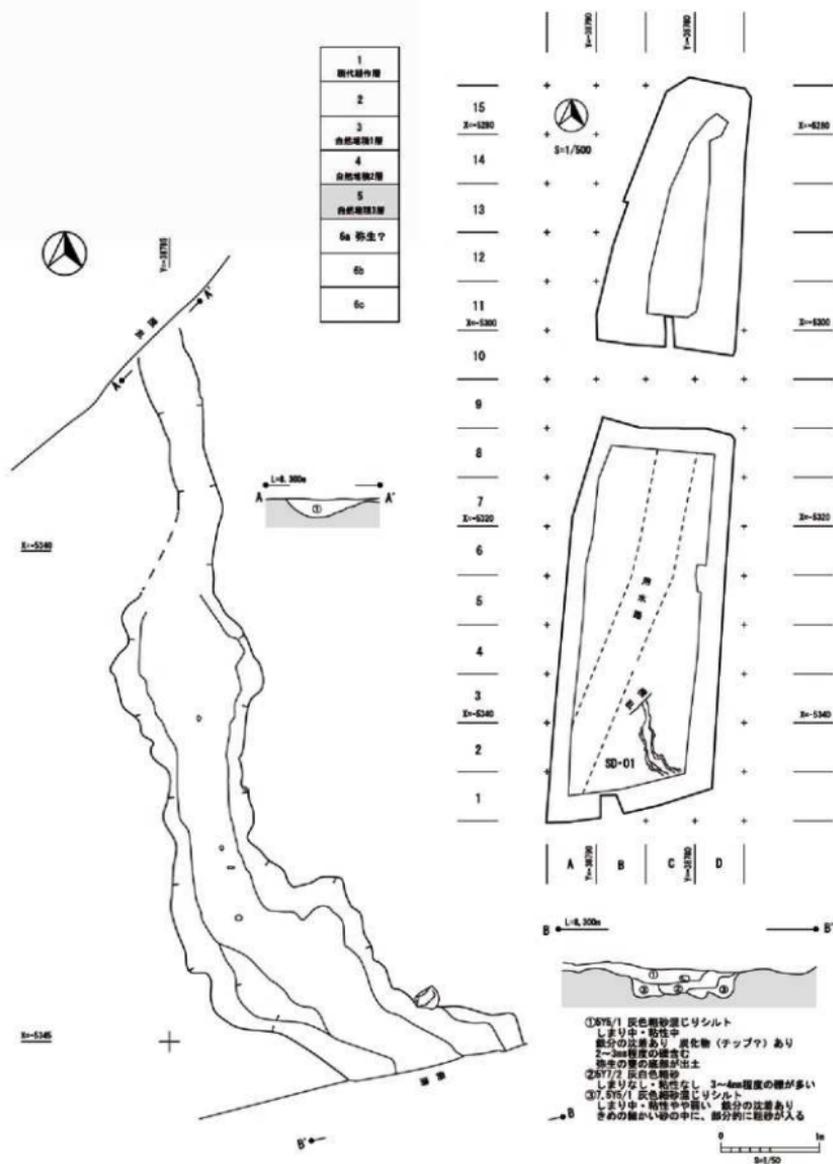
第 69 図 玉名平野条里跡 06-II 区
SH-01・02・SP-01~04・06・SK-01 実測図及び出土遺物実測図



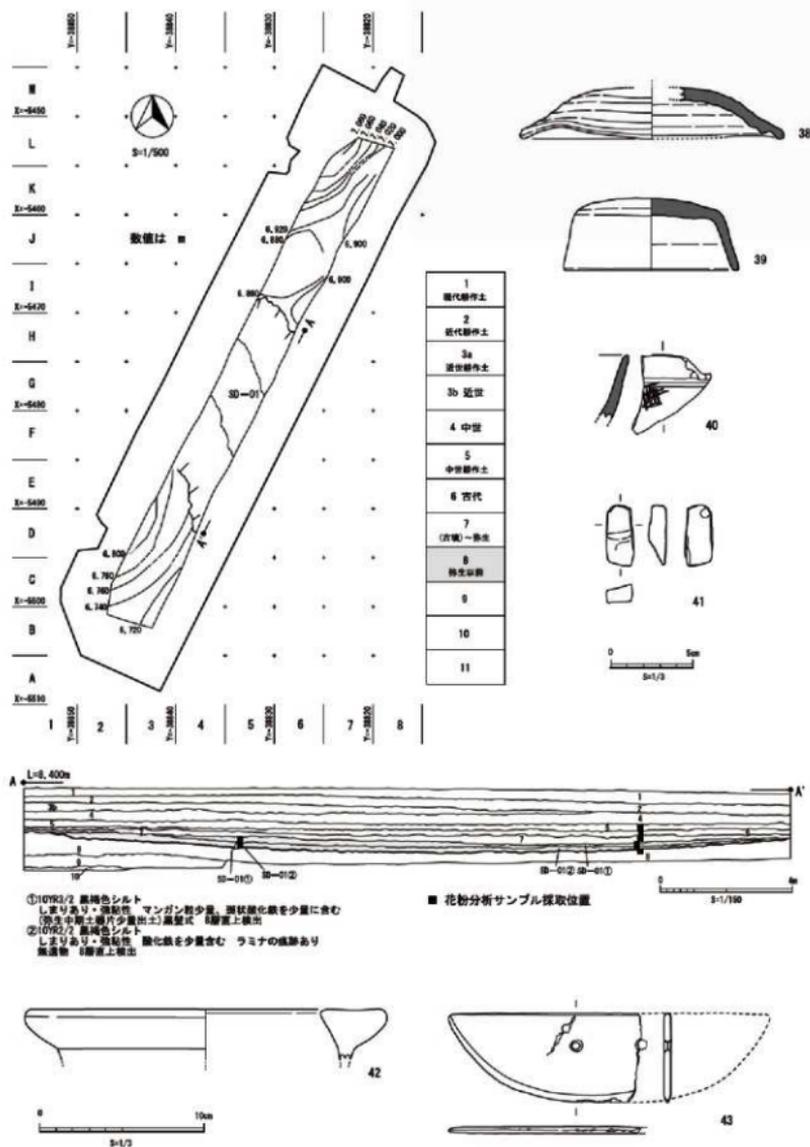
第 70 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 7a層遺構配図



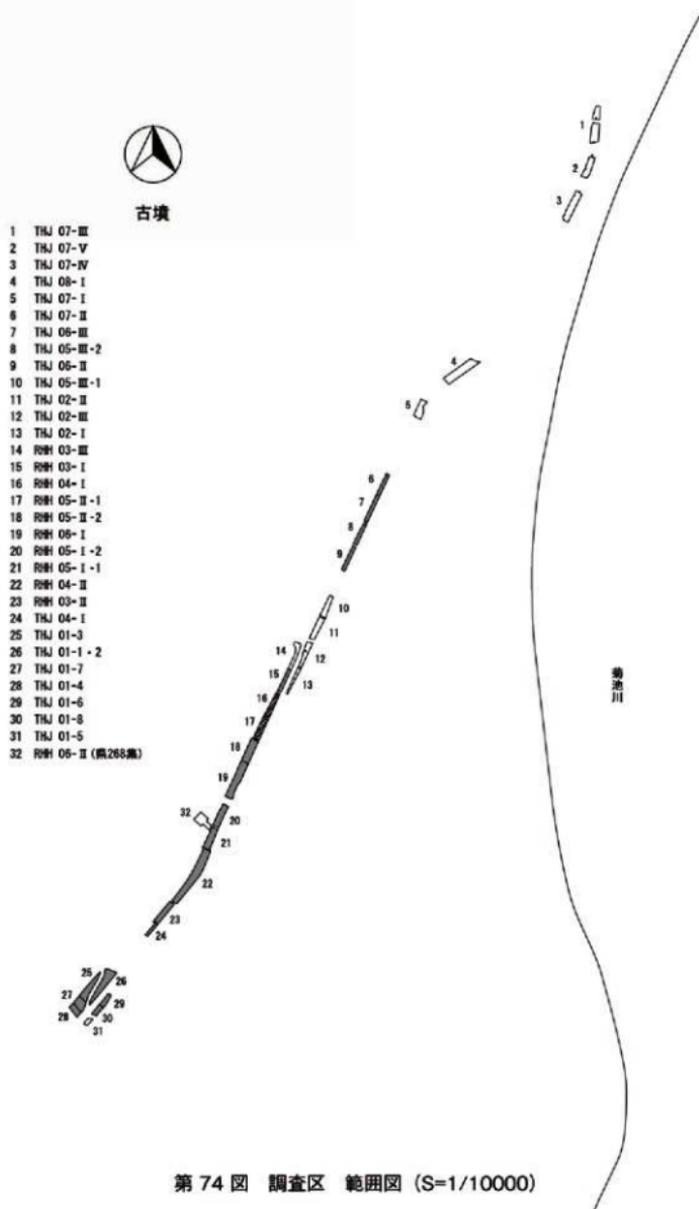
第 71 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 SX-36・38・39・SK-06 実測図



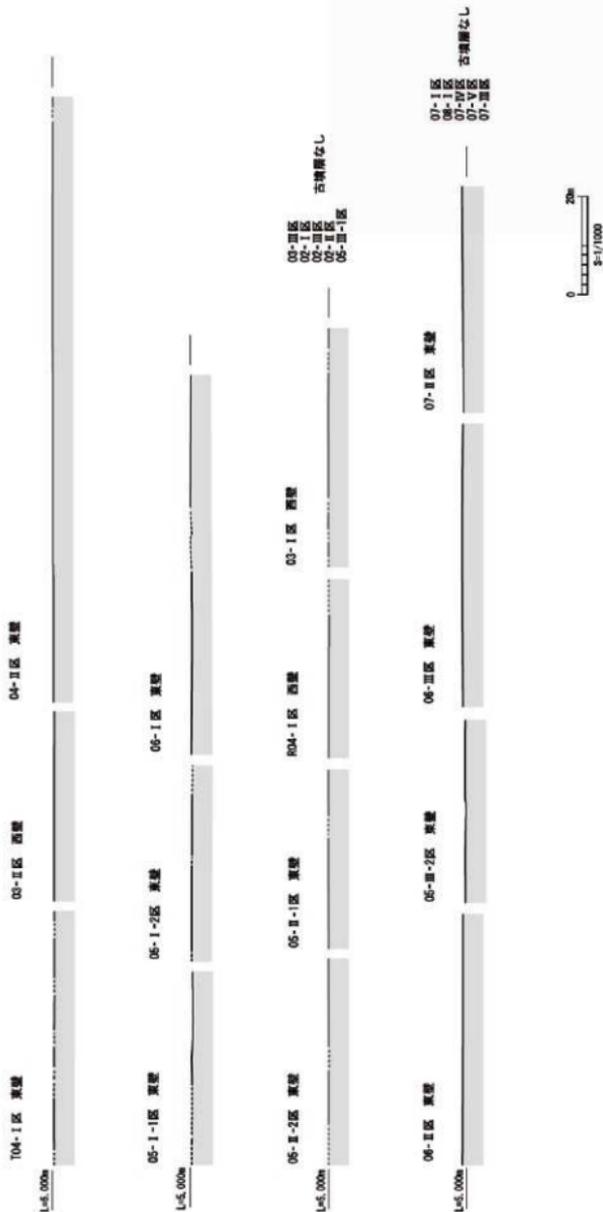
第 72 図 玉名平野条里跡 07-III区 遺構配置図及び SD-01 実測図



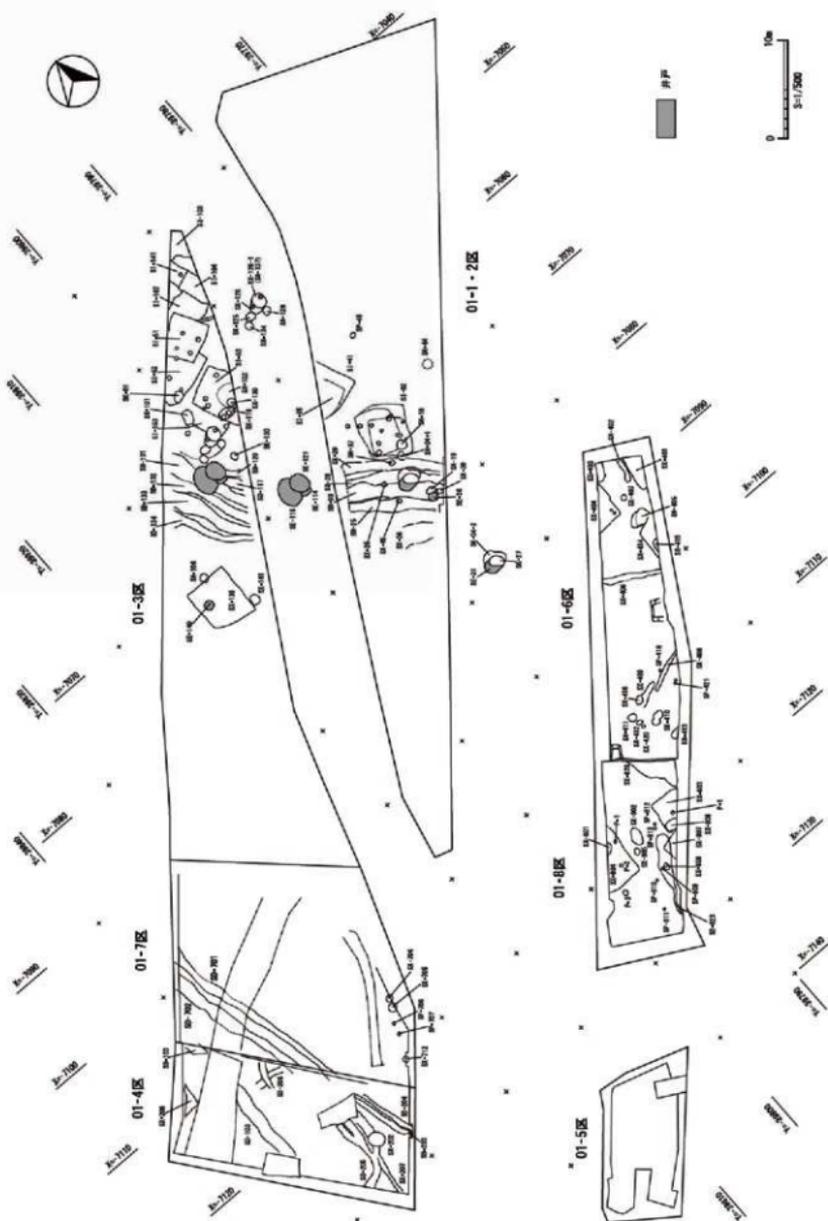
第 73 図 玉名平野条里跡 07-IV区
8層コンタ図・SD-01 土層断面図及び出土遺物実測図



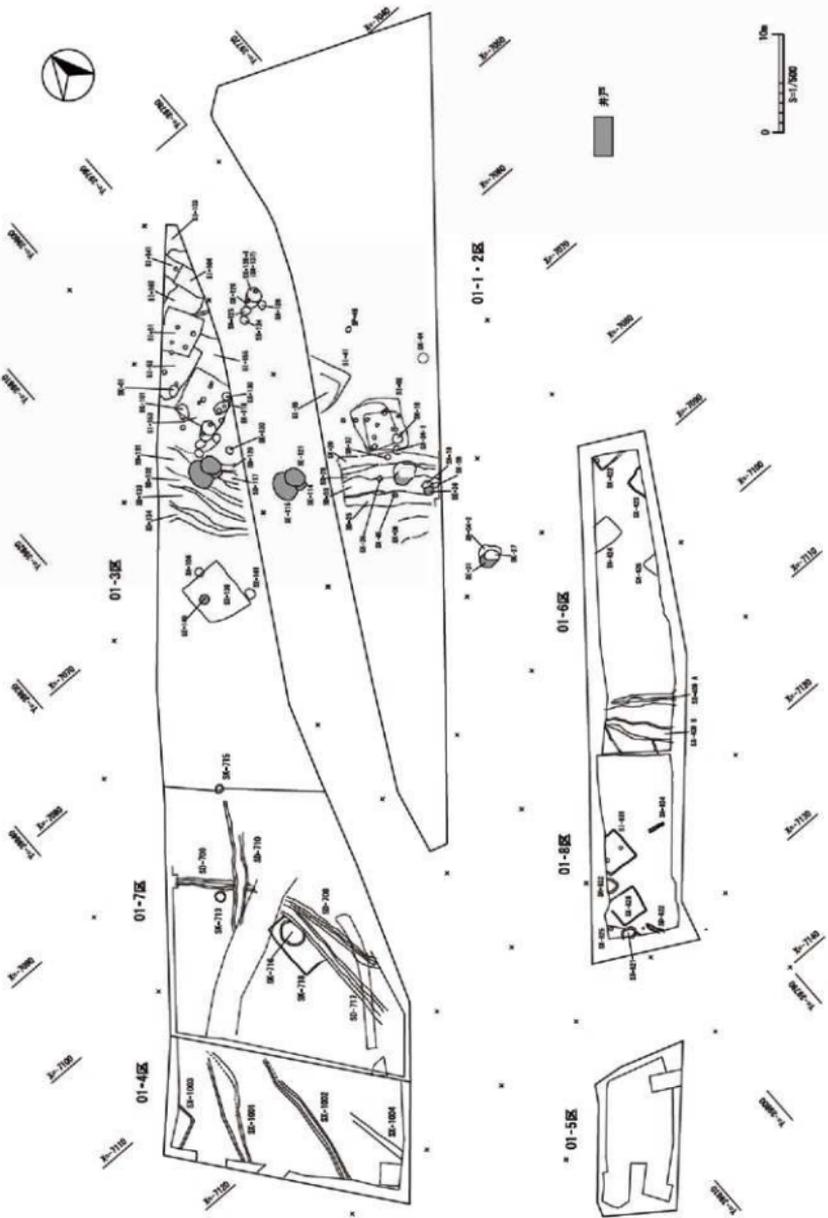
古墳層の層上面の土層レベルを、調査区の南から北の順に並べている



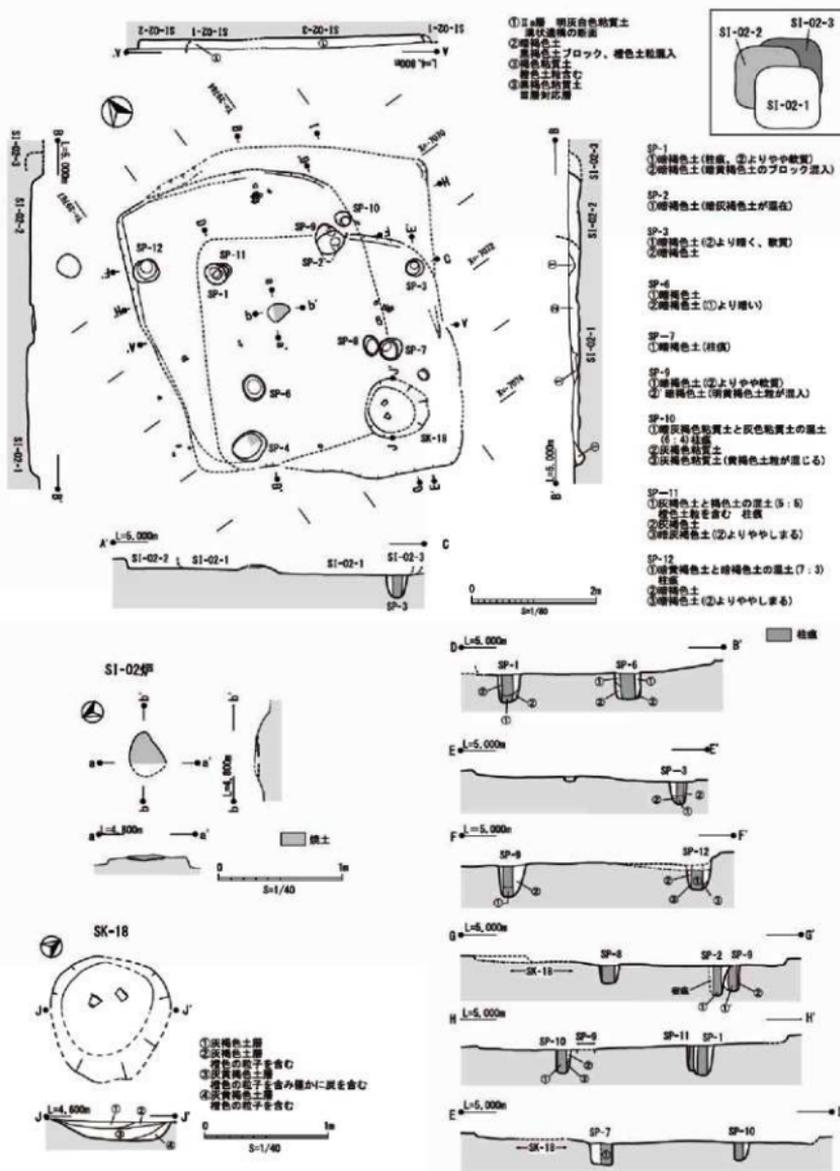
第75図 玉名平野桑里跡・阿迫間日流遺跡 古墳層



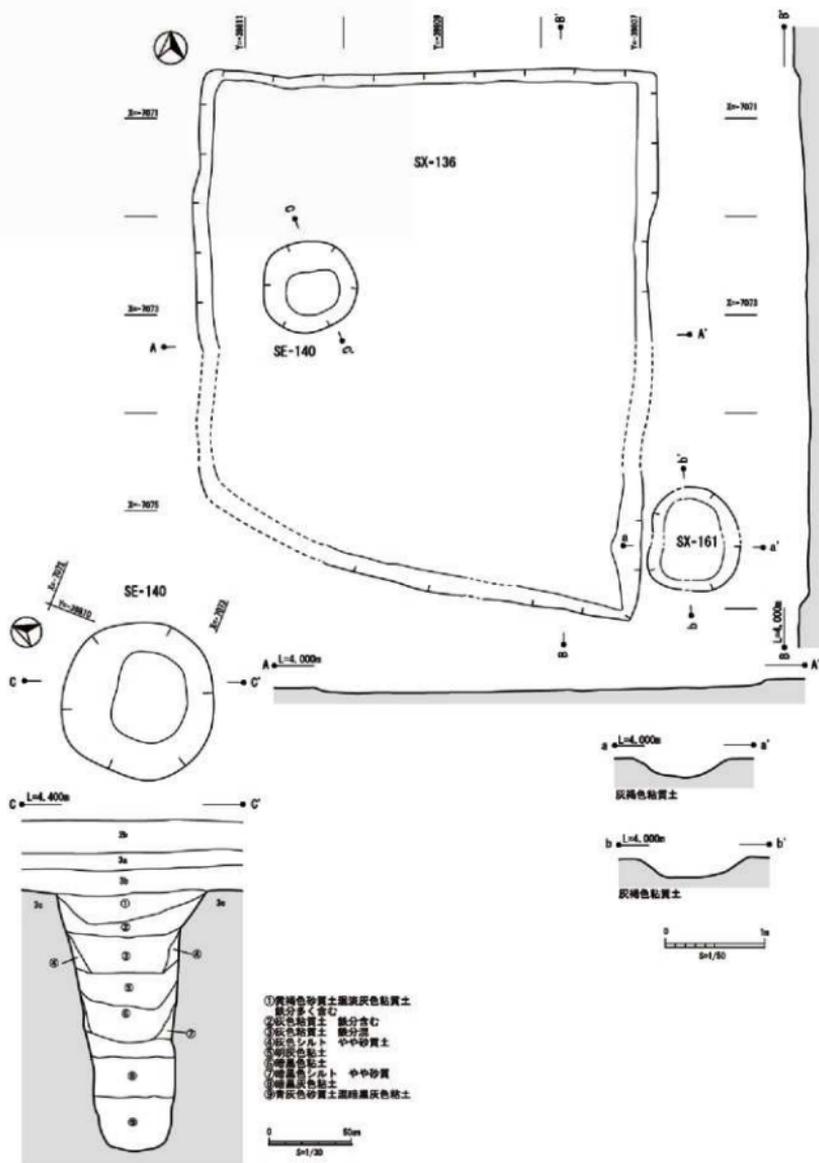
第76図 玉名平野条里跡01-1~8区 遺構配置図(古墳上面)



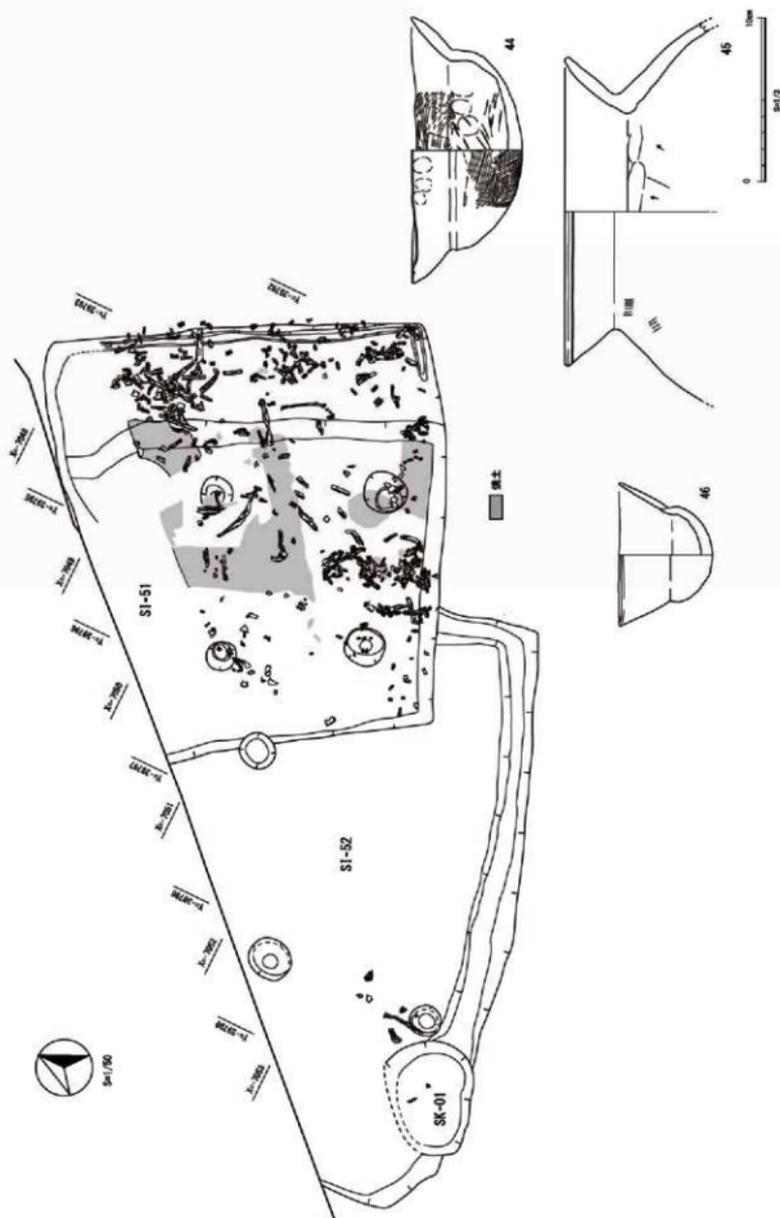
第77図 玉名平野条里跡01-1~8区 遺構配置図(古墳下面)



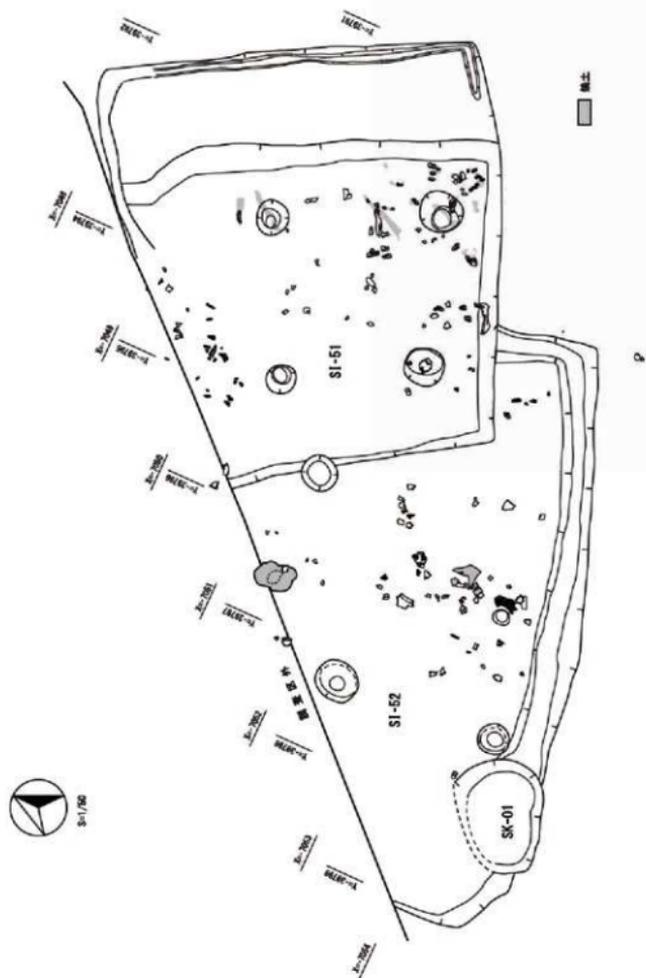
第78図 玉名平野条里跡 01-2区 SI-02・SK-18実測図



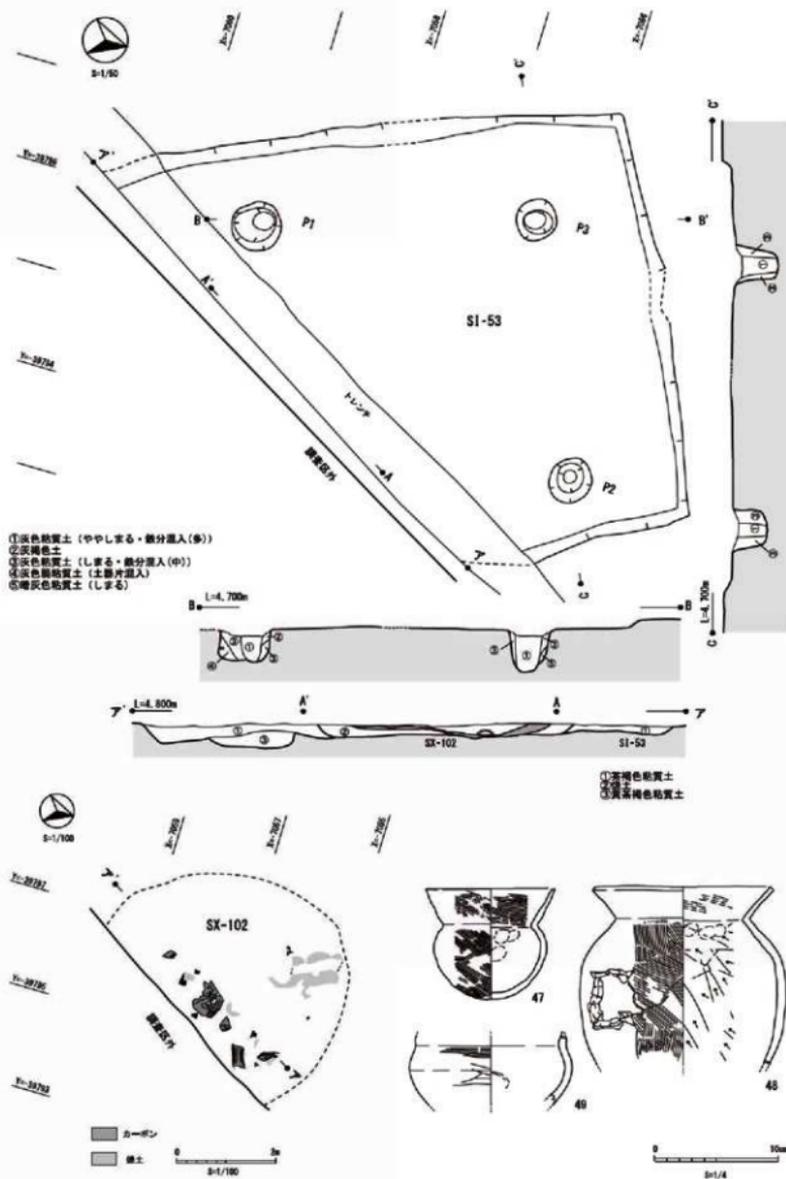
第80図 玉名平野条里跡 01-3区 SX-136・161・SE-140 実測図



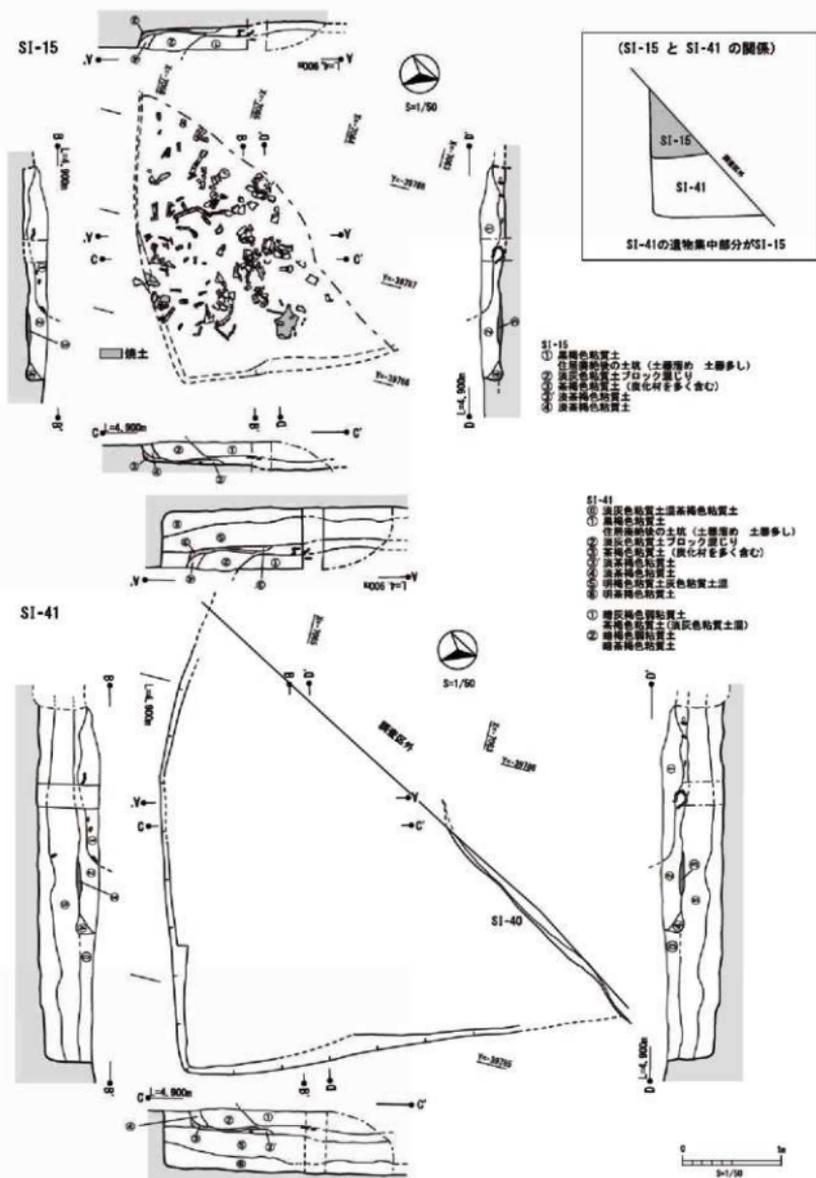
第82図 玉名平野条里跡 01-3区 SI-51・52・SK-01 上層遺物出土状況及び出土遺物実測図

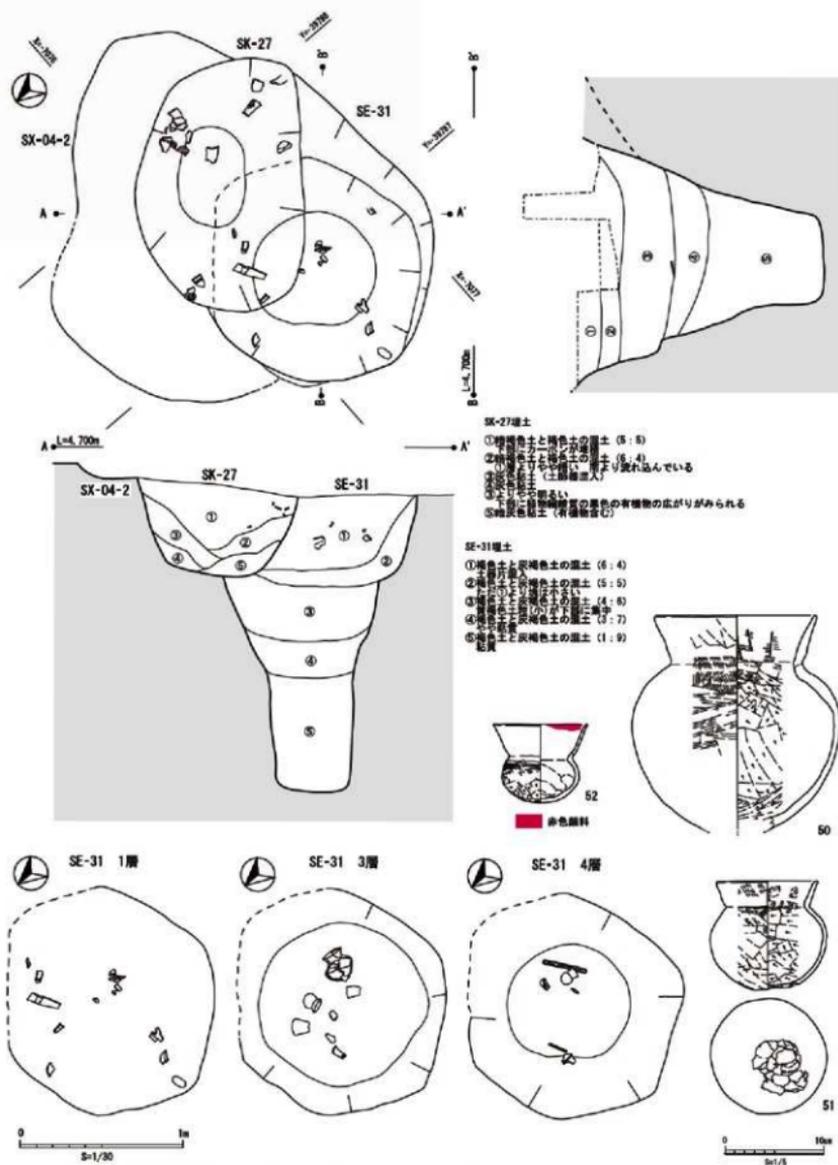


第 83 図 玉名平野桑里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 下層遺物出土状況実測図

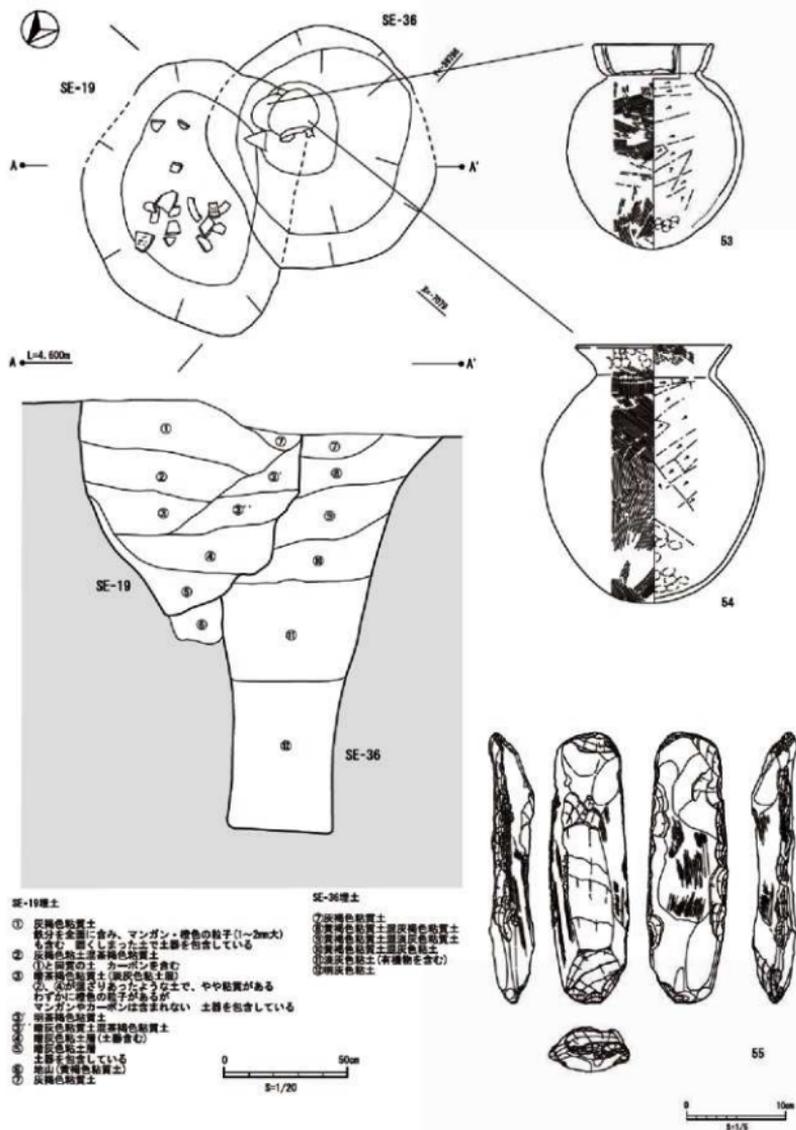


第 84 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-53・SX-102 実測図及び出土遺物実測図

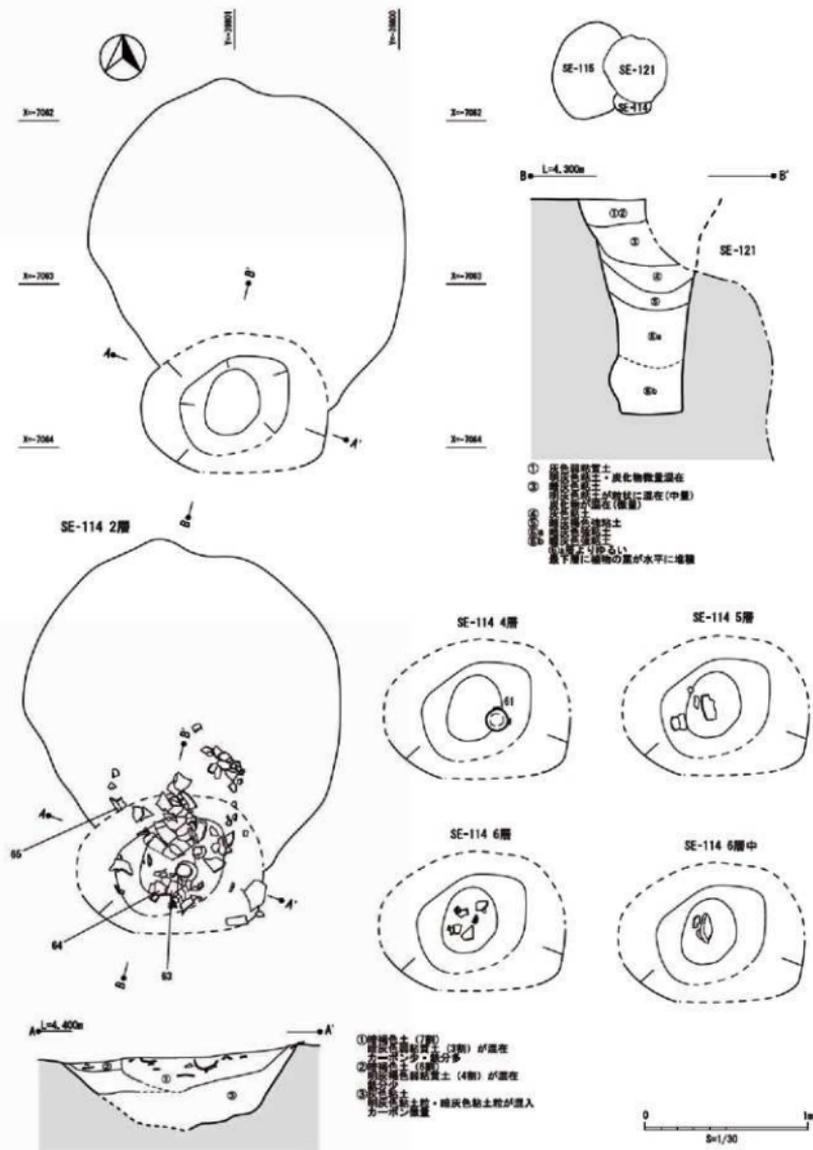




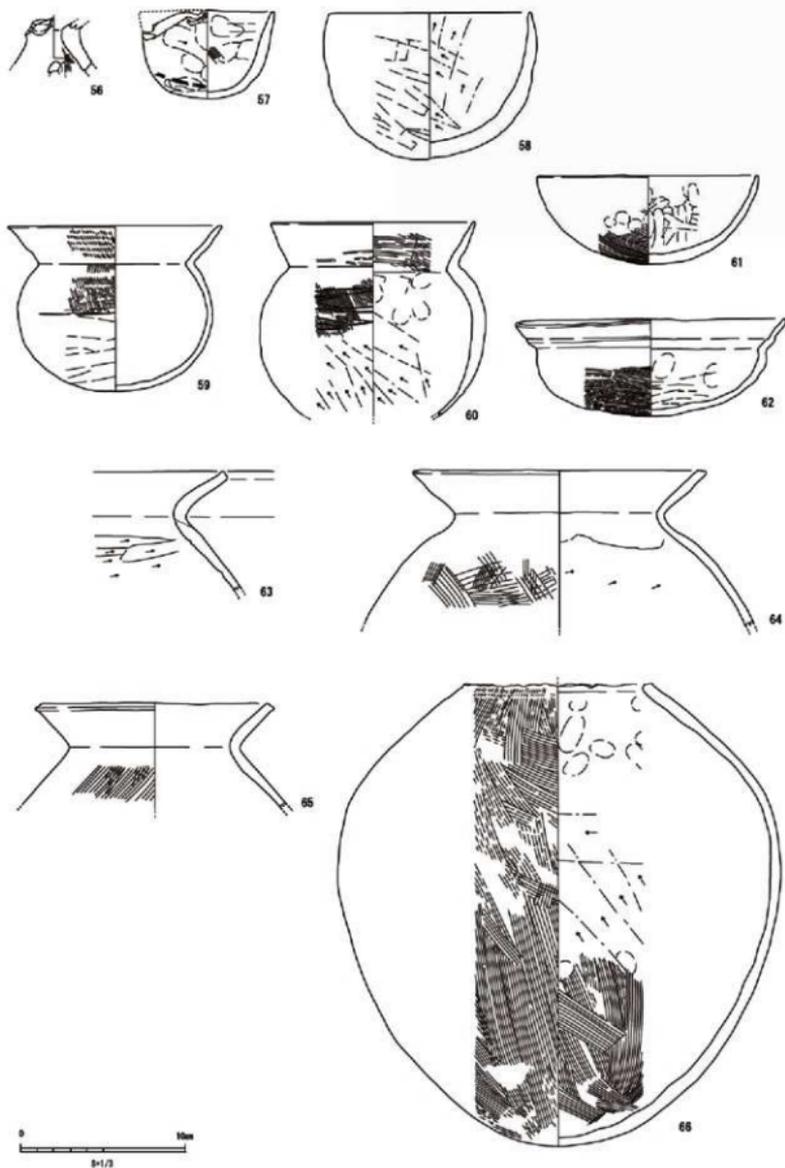
第 86 図 玉名平野条里跡 01・2 区
SE-31・SK-27・SX-04-2 実測図及び出土遺物実測図



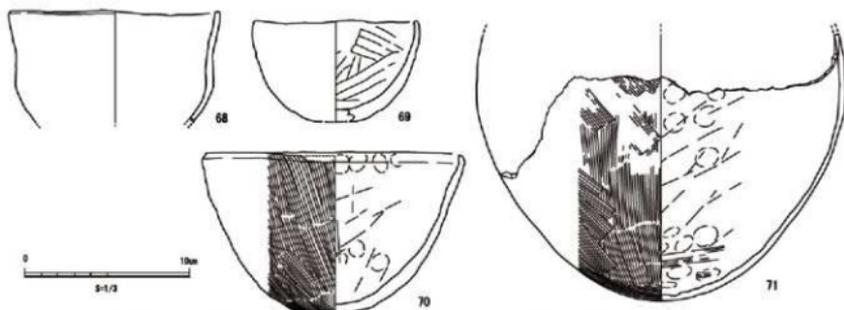
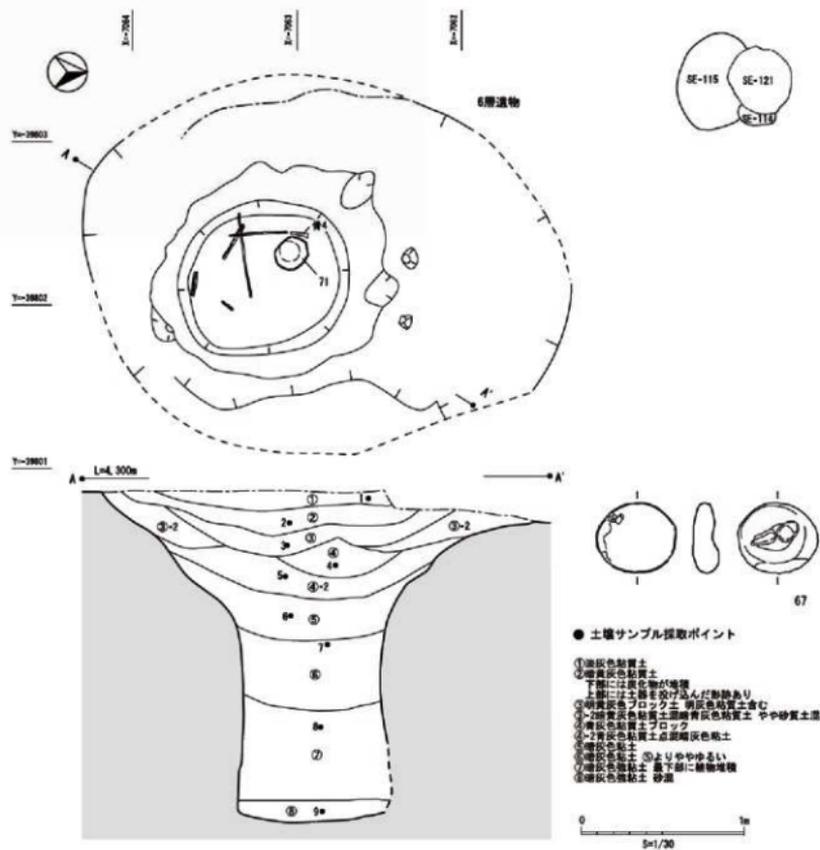
第 87 図 玉名平野条里跡 01・1・2 区 SE-19・36 実測図及び出土遺物実測図



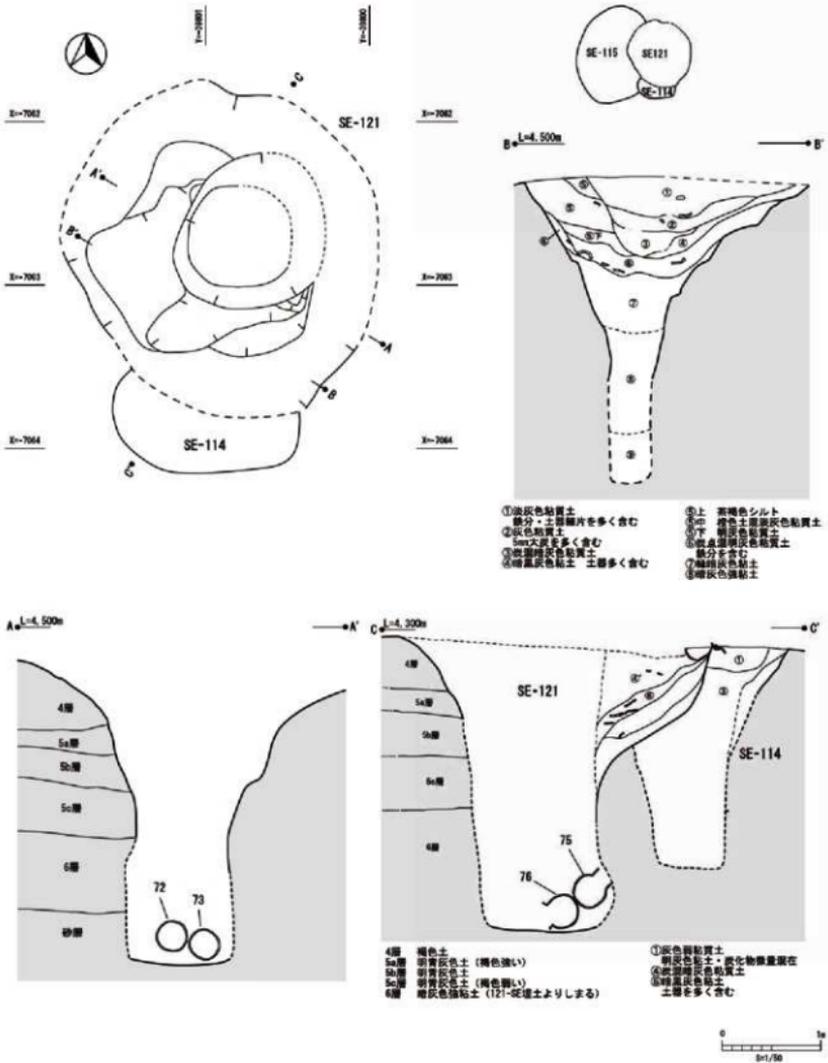
第 88 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 実測図



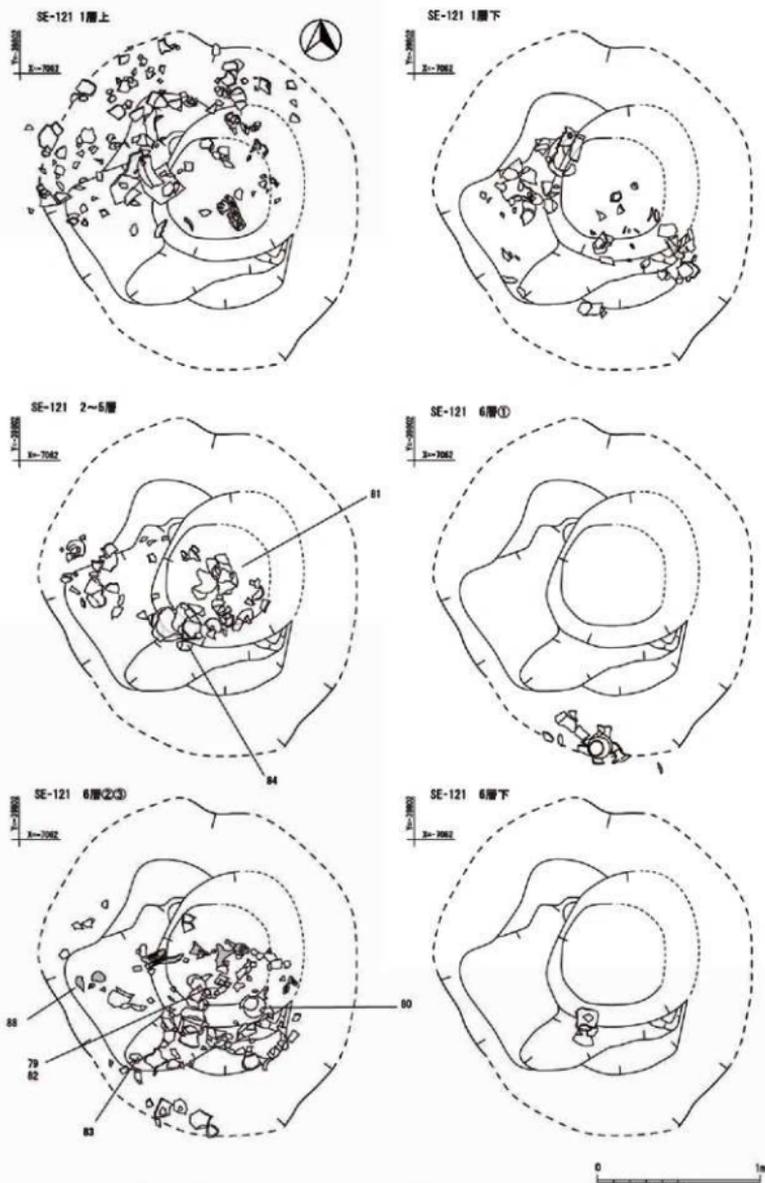
第 89 図 玉名平野桑里跡 01-3 区 SE-114 出土遺物実測図



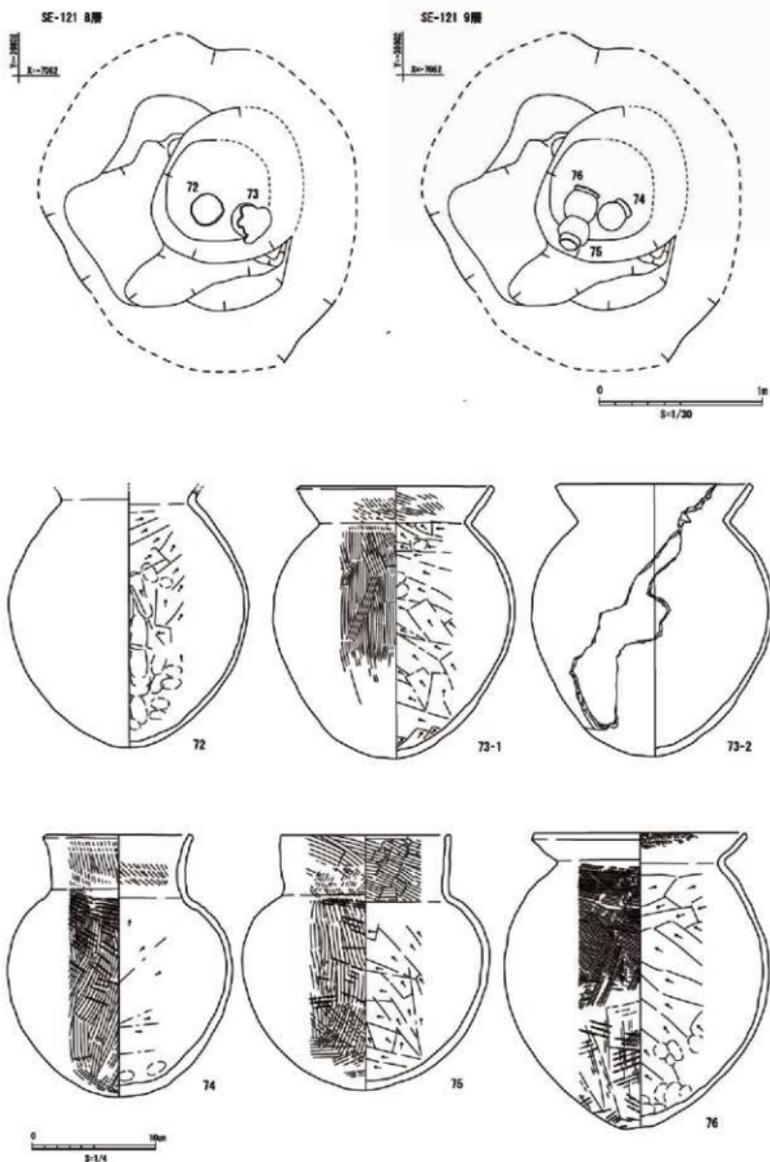
第90図 玉名平野条里跡 01-3区 SE-115 実測図及び出土遺物実測図



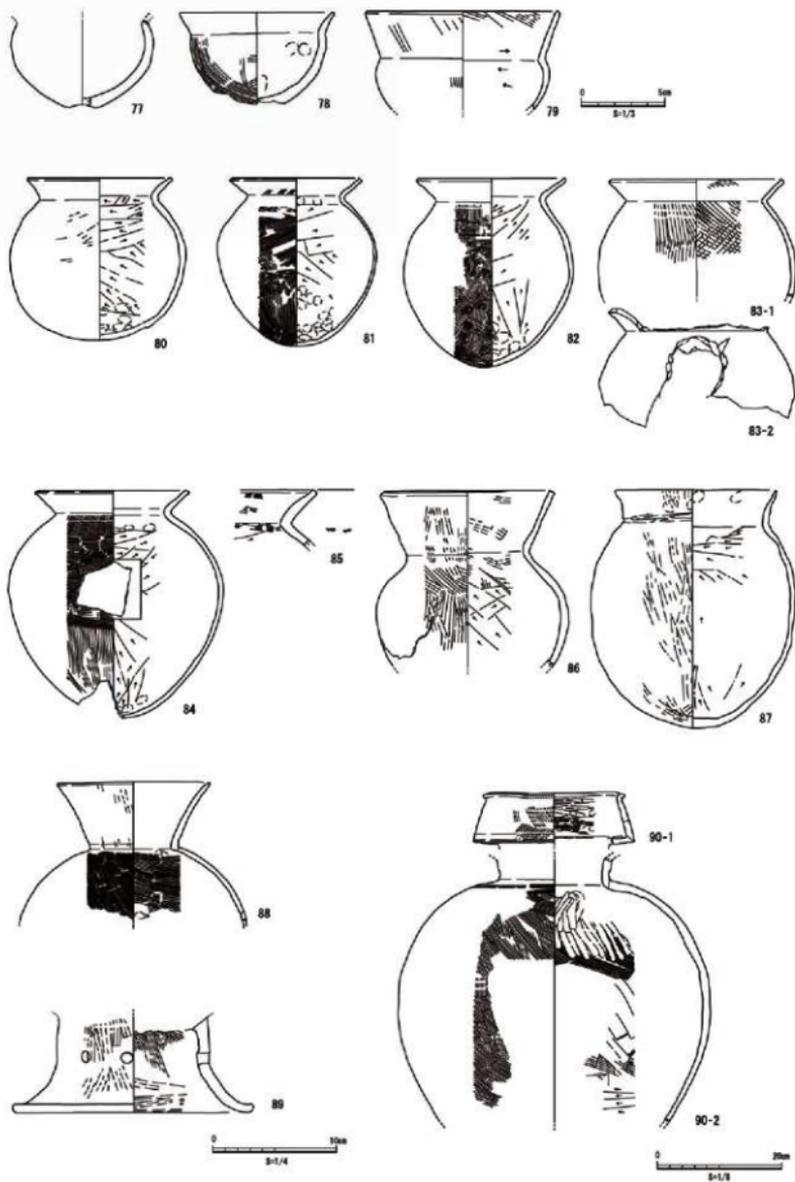
第91図 玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 実測図



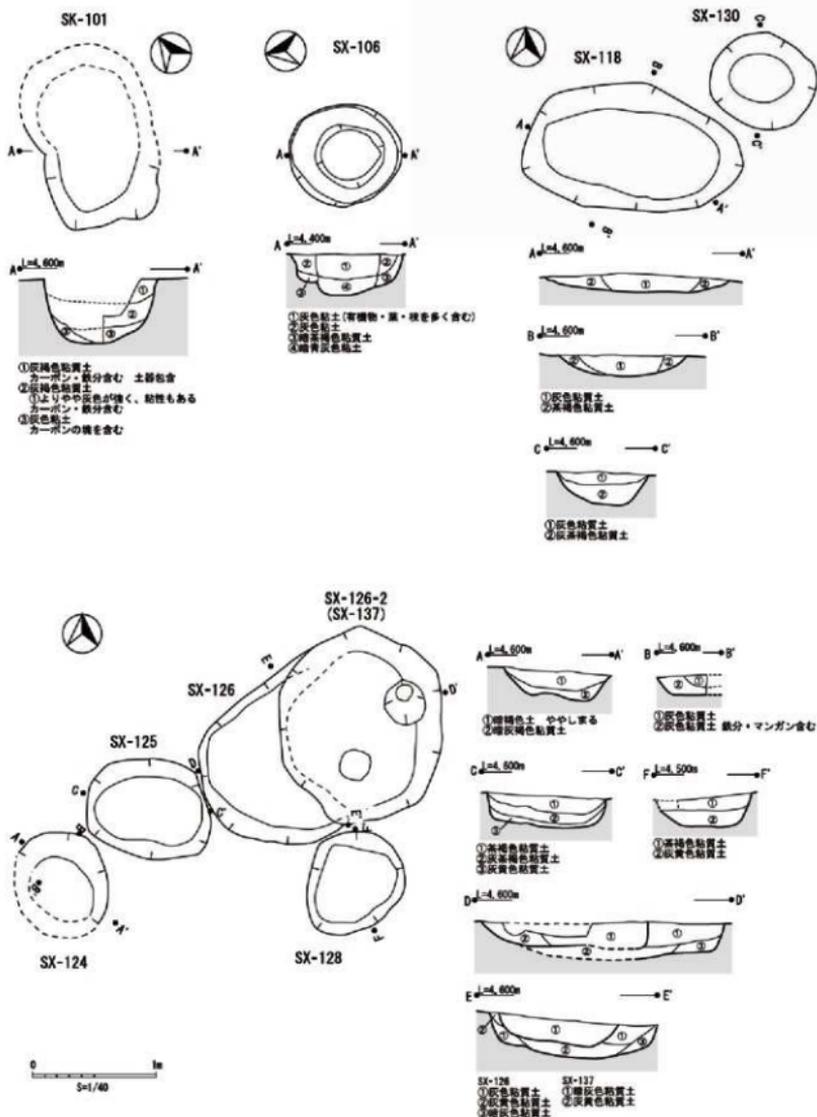
第92図 玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 1~6層実測図



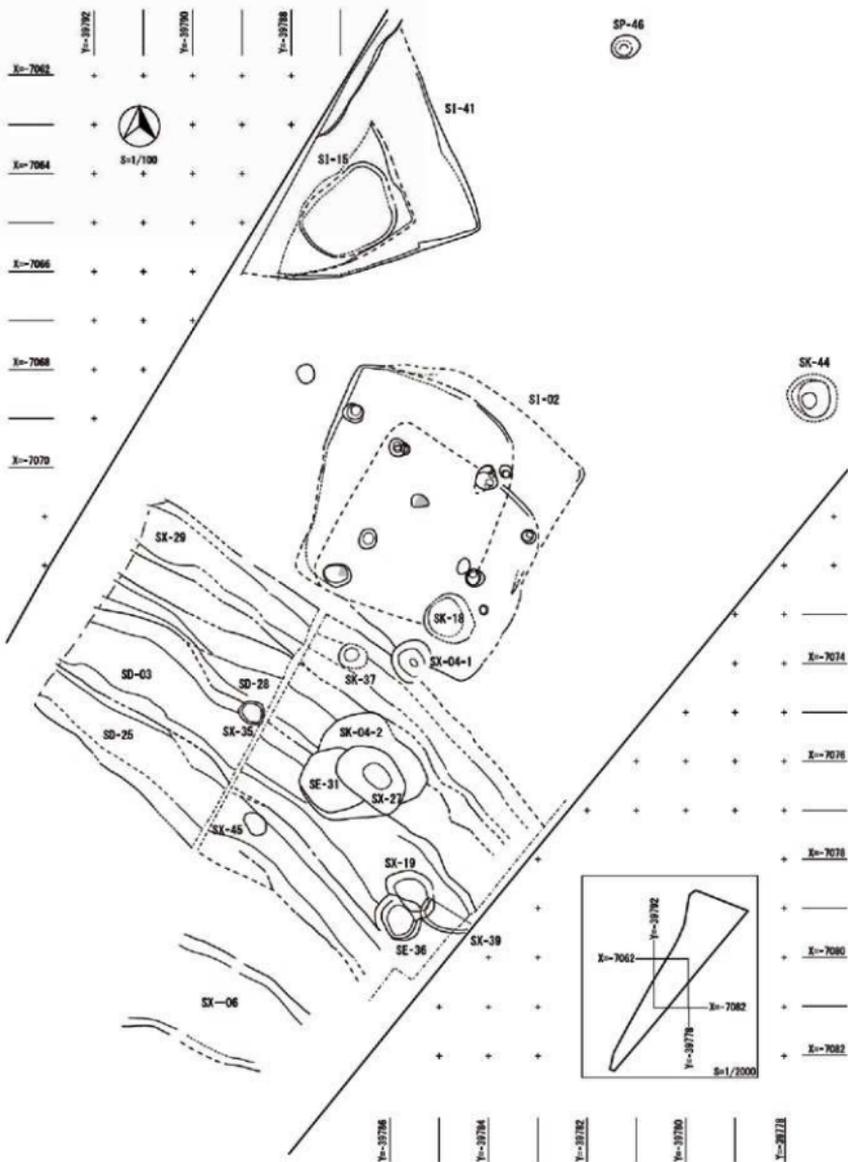
第 93 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121
8・9 層遺物出土状況及び出土遺物実測図



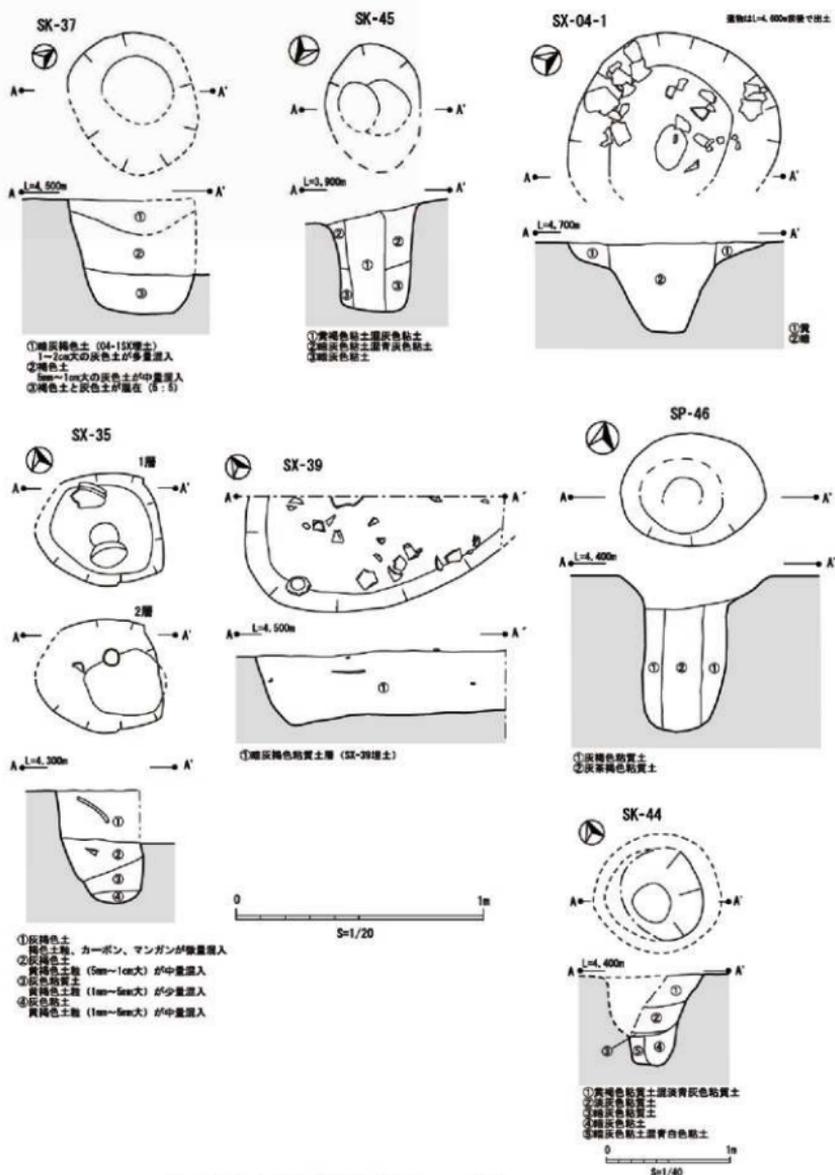
第94図 玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 出土遺物実測図



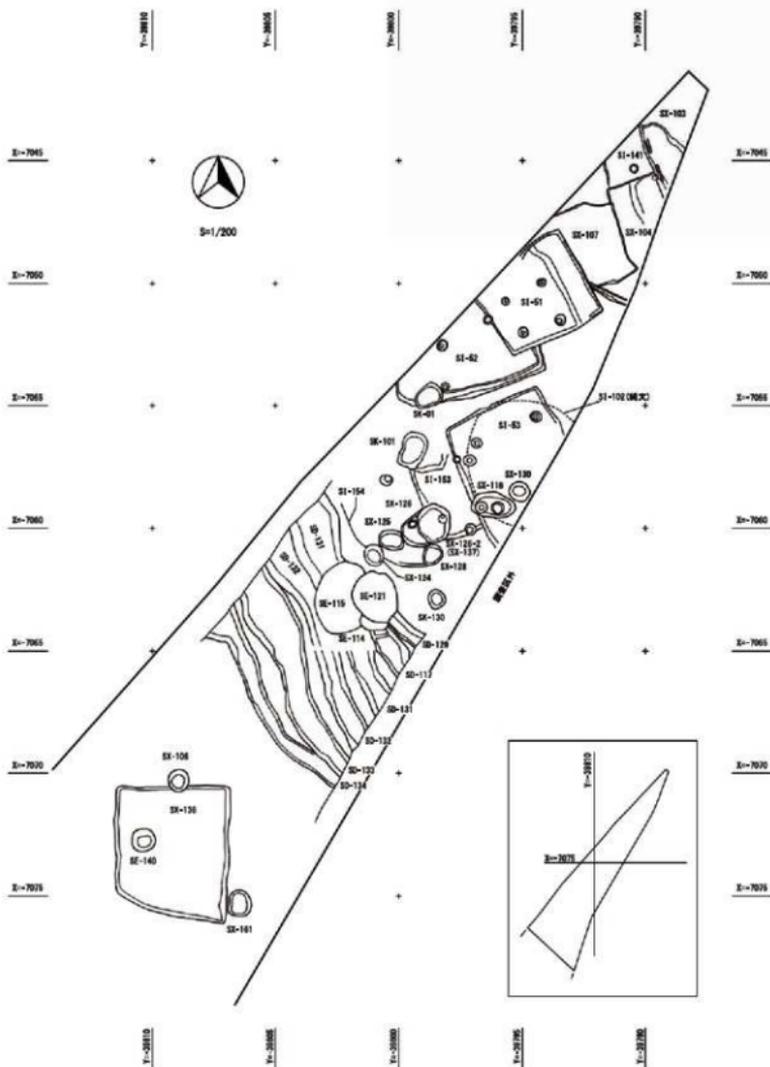
第 95 図 玉名平野条里跡 01-3 区
 SK-101・SX-106・118・124~126・128・130・137 実測図



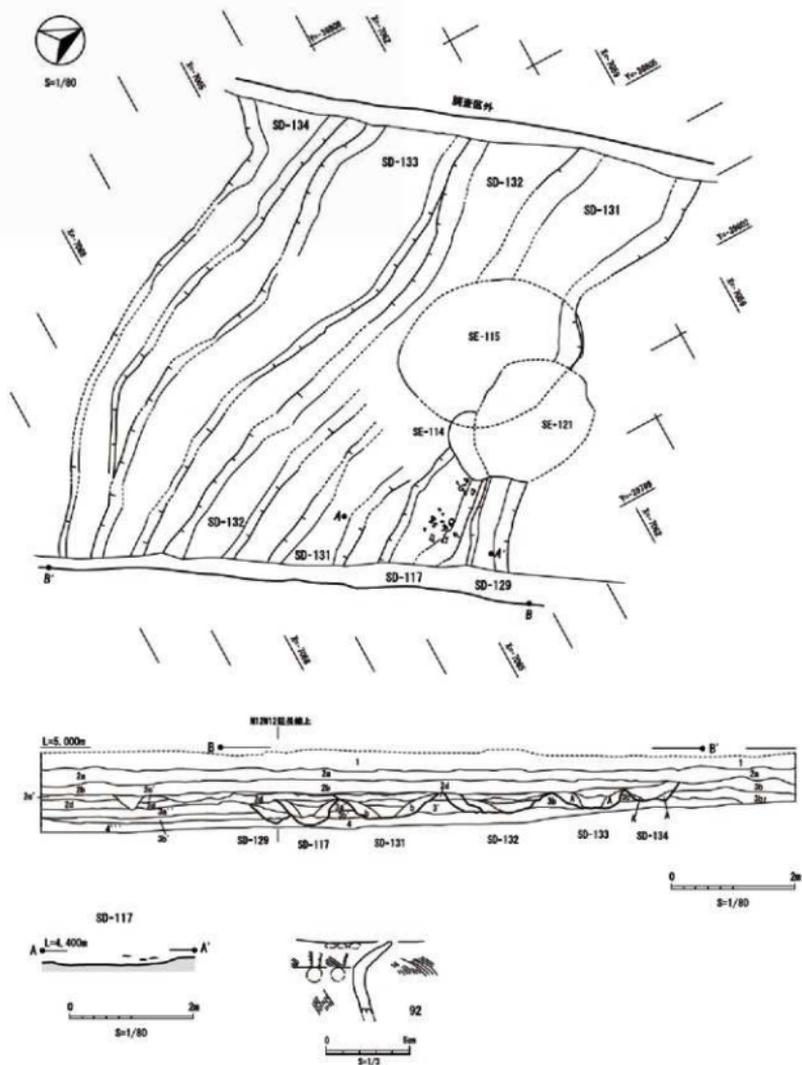
第 96 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (古墳)



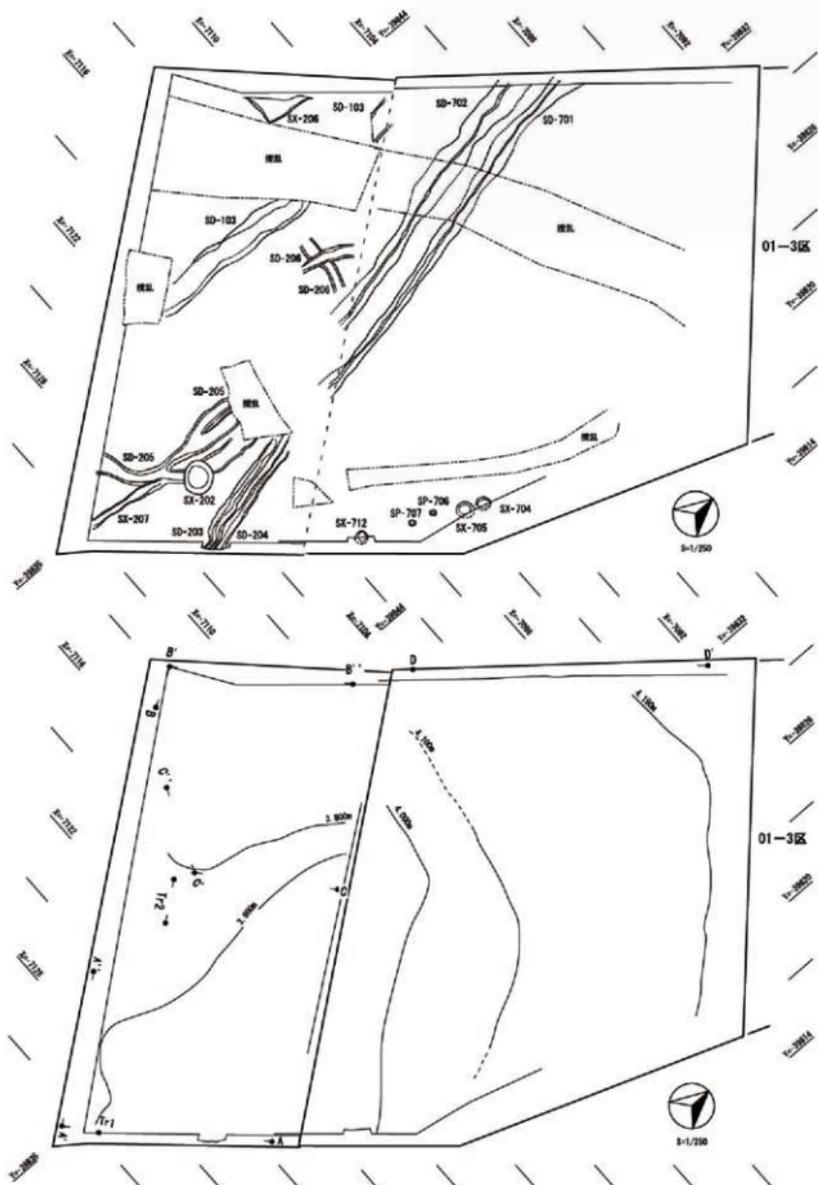
第98図 玉名平野条里跡 01-1・2区
 SK-37・44・45・SX-04-1・35・39・SP-46 実測図



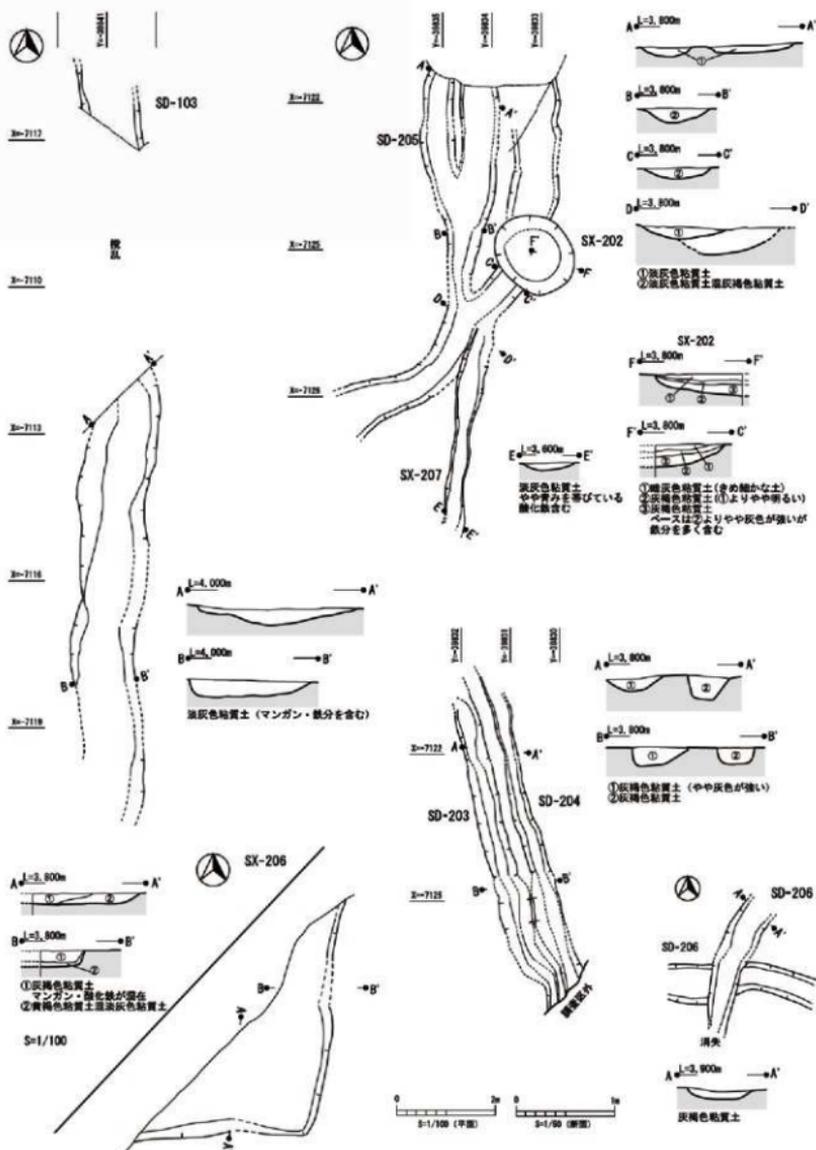
第 99 図 玉名平野条里跡 01-3 区 2b・2c 層遺構配置図 (古墳)



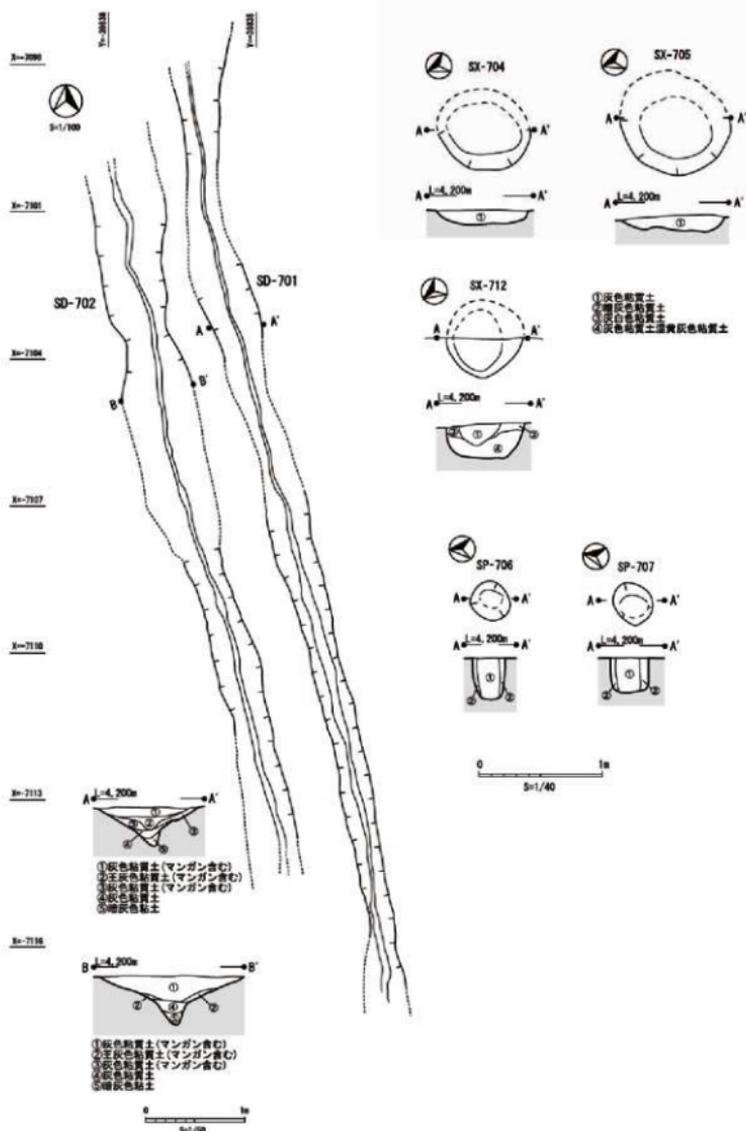
第 100 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SD-117・129・131～134 実測図及び出土遺物実測図



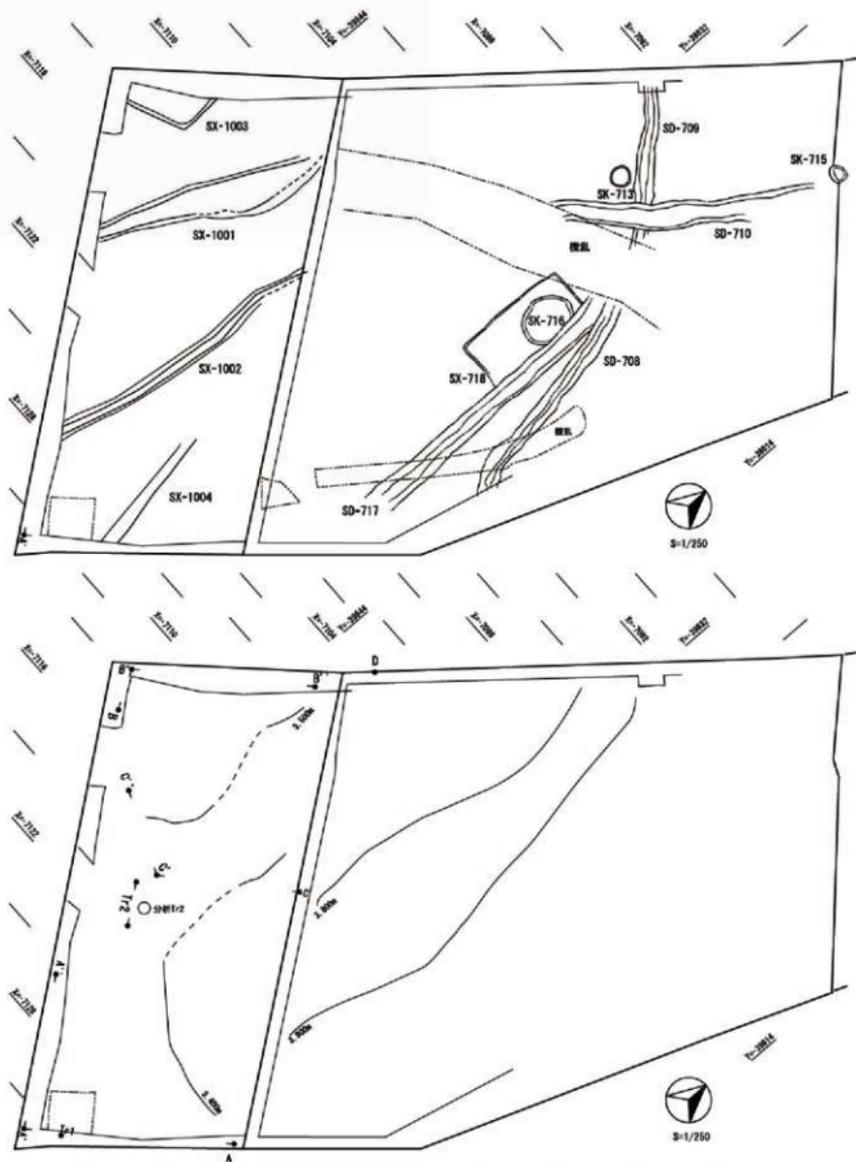
第101図 玉名平野条里跡 01-4・7区 3a層~3b層遺構配置図及びコンタ図



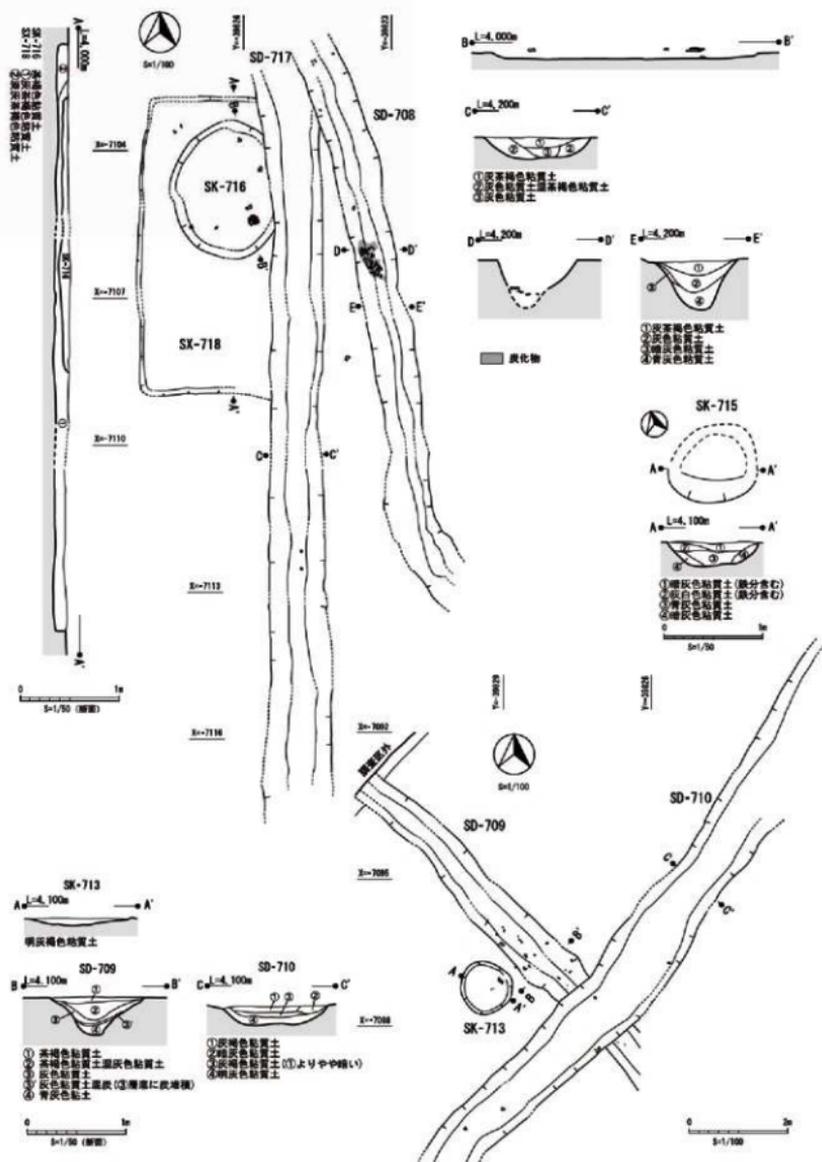
第 102 図 玉名平野条里跡 01-4 区
SD-103・203~206・SX-202・206・207 実測図



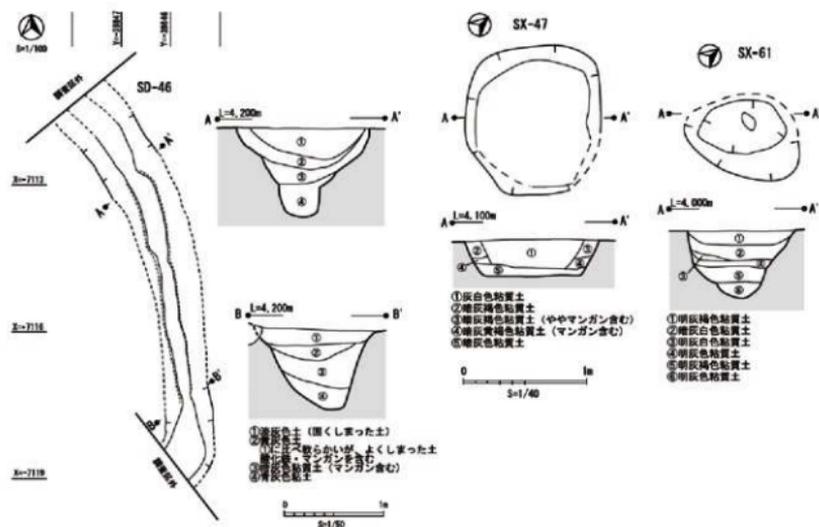
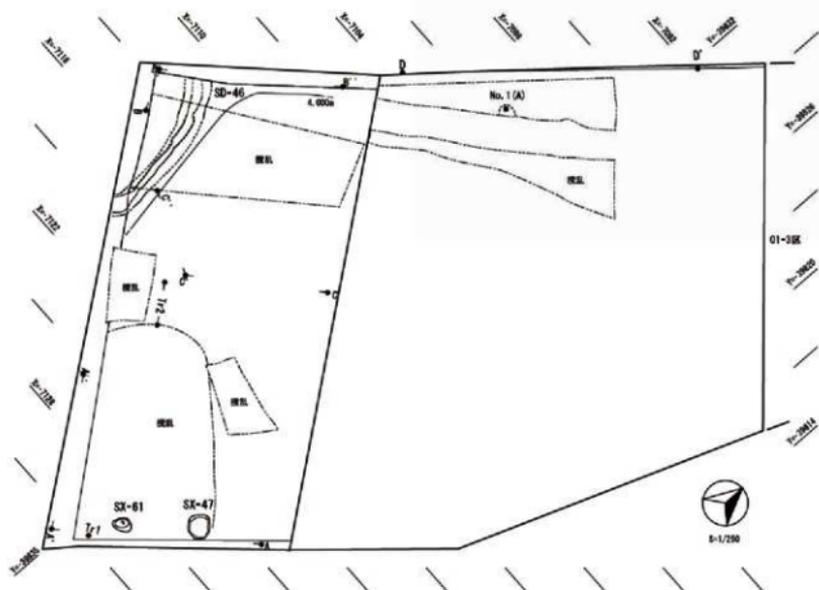
第 103 図 玉名平野条里跡 O1-7 区
SD-701・702・SX-704・705・712・SP-706・707 実測図



第104図 玉名平野築里跡 01-4・7区 4層上面遺構配置図及びコンタ図



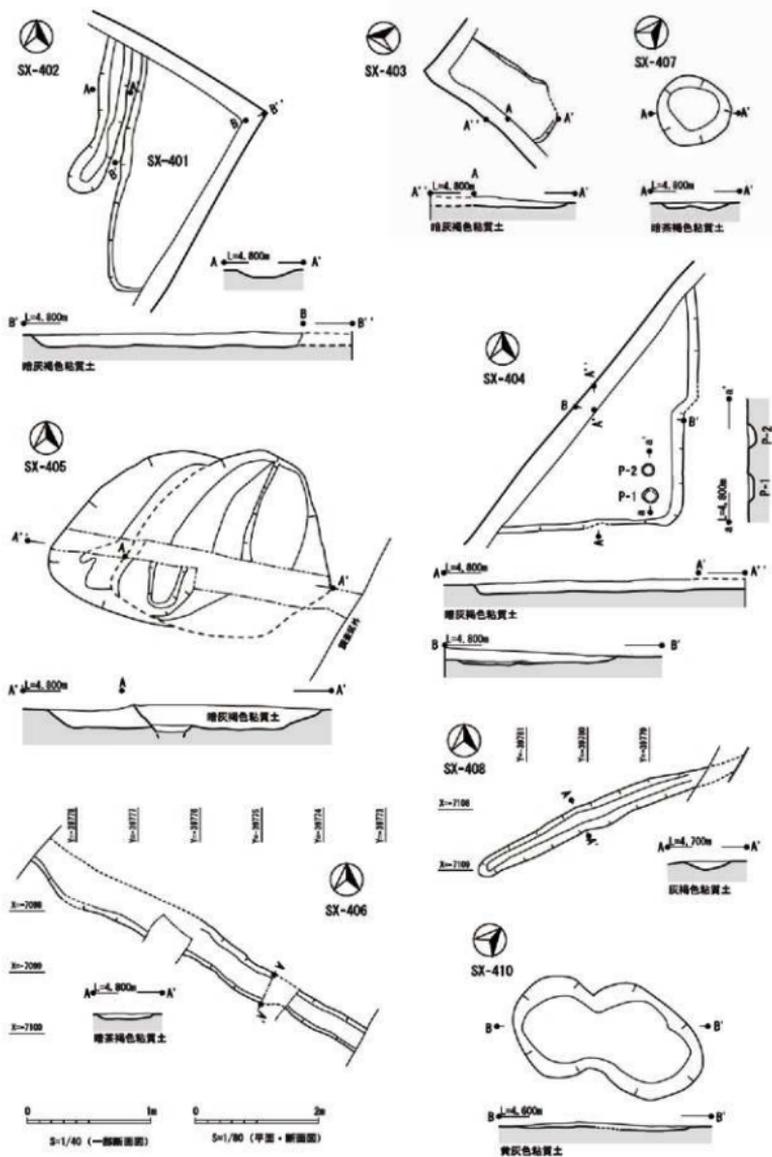
第 106 図 玉名平野条里跡 01-7 区
SD-708~710・717・SK-713・715・716・SX-718 実測図



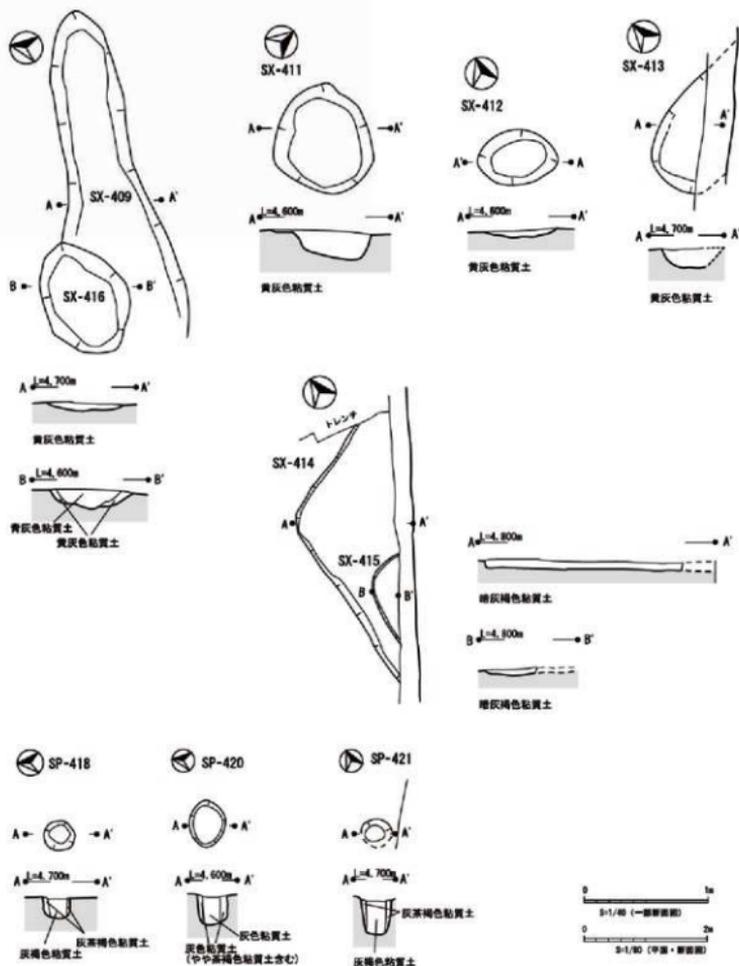
第 107 図 玉名平野条里跡 01-4・7 区 2b 層遺構配置図及び SD-46・SX-47・61 実測図



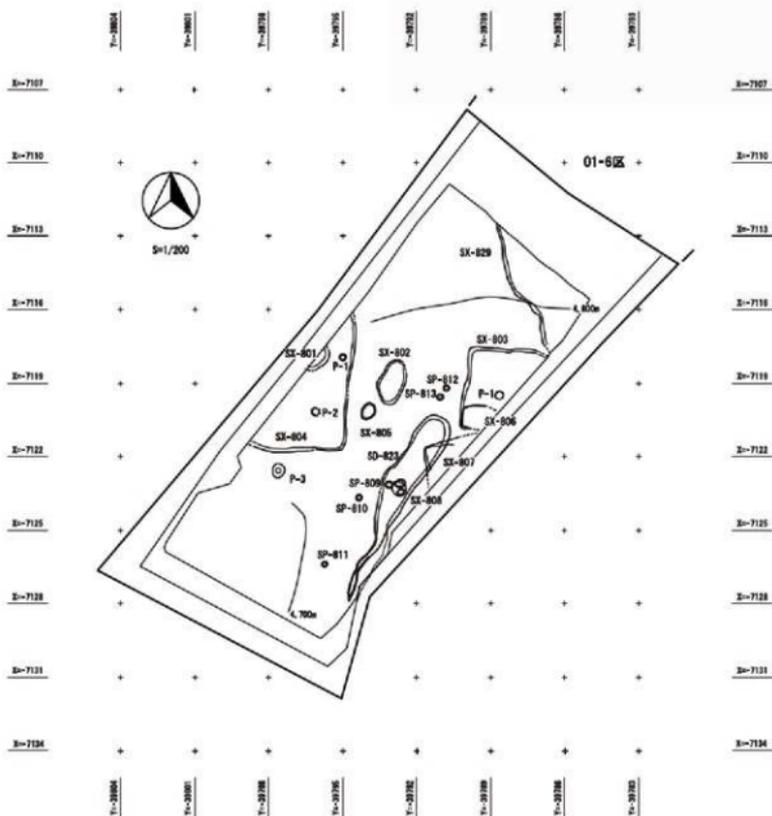
第108図 玉名平野条里跡01-6区 3a層上面遺構配置図



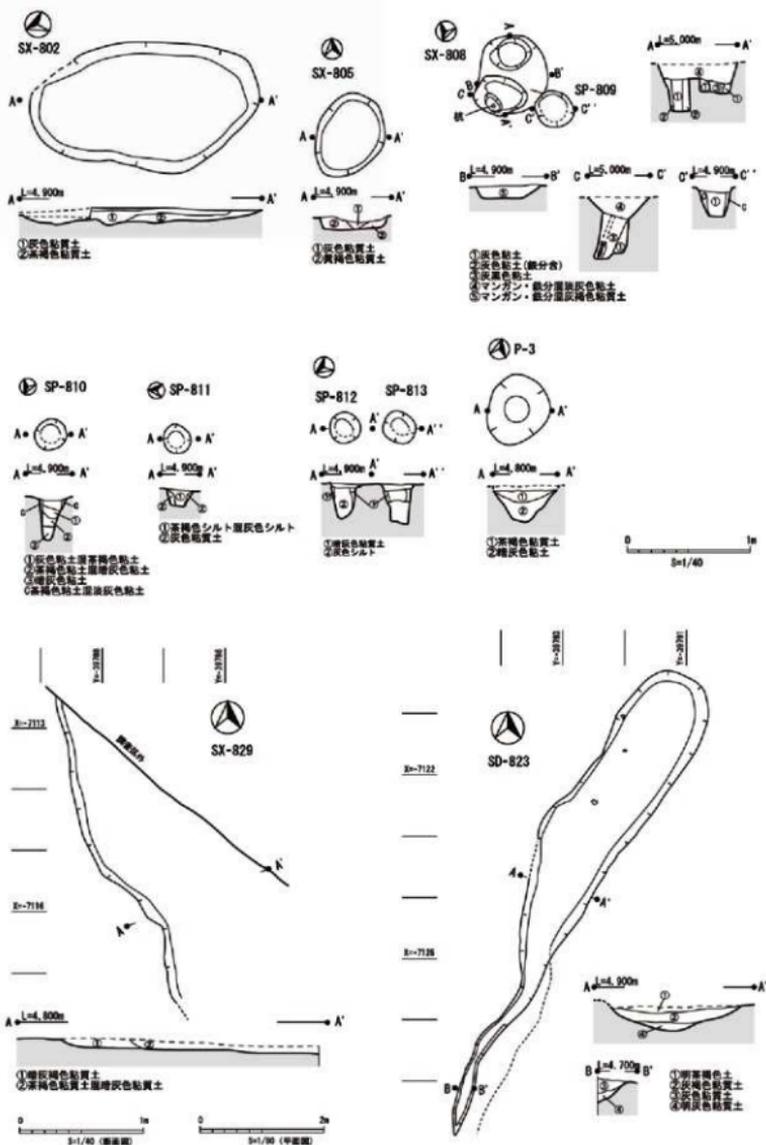
第 109 図 玉名平野条里跡 01-6 区 SX-401~408・410 実測図



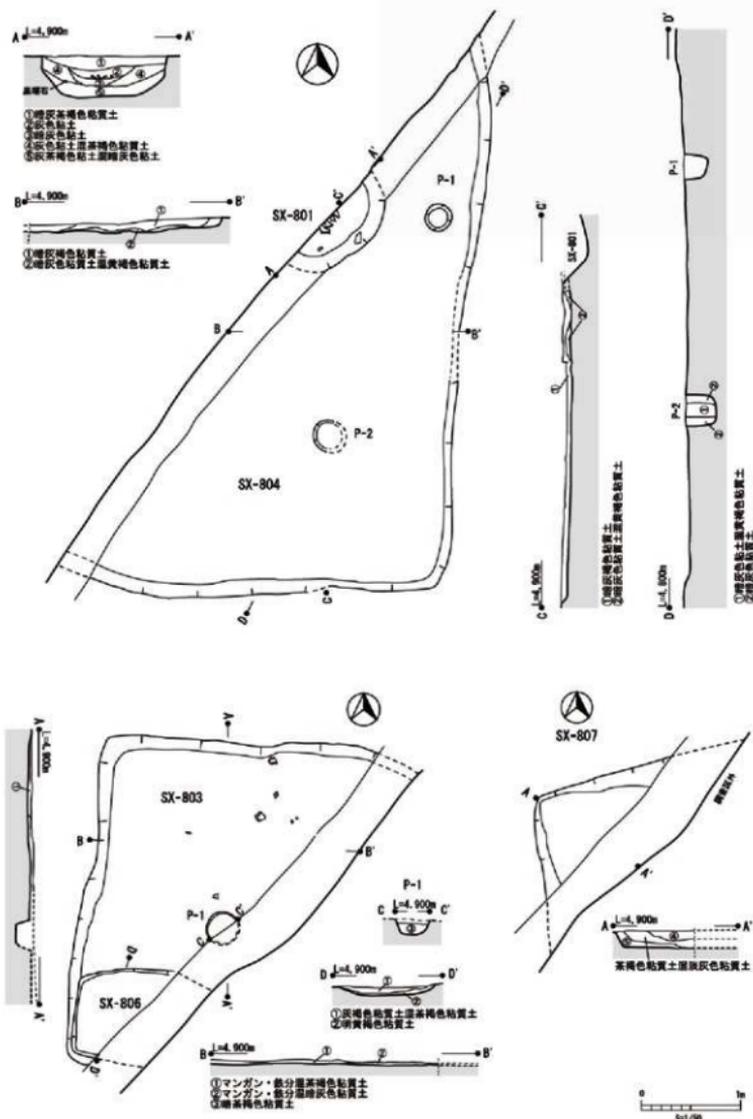
第 110 図 玉名平野条里跡 01-6 区
SX-409・411～416・SP-418・420・421 実測図



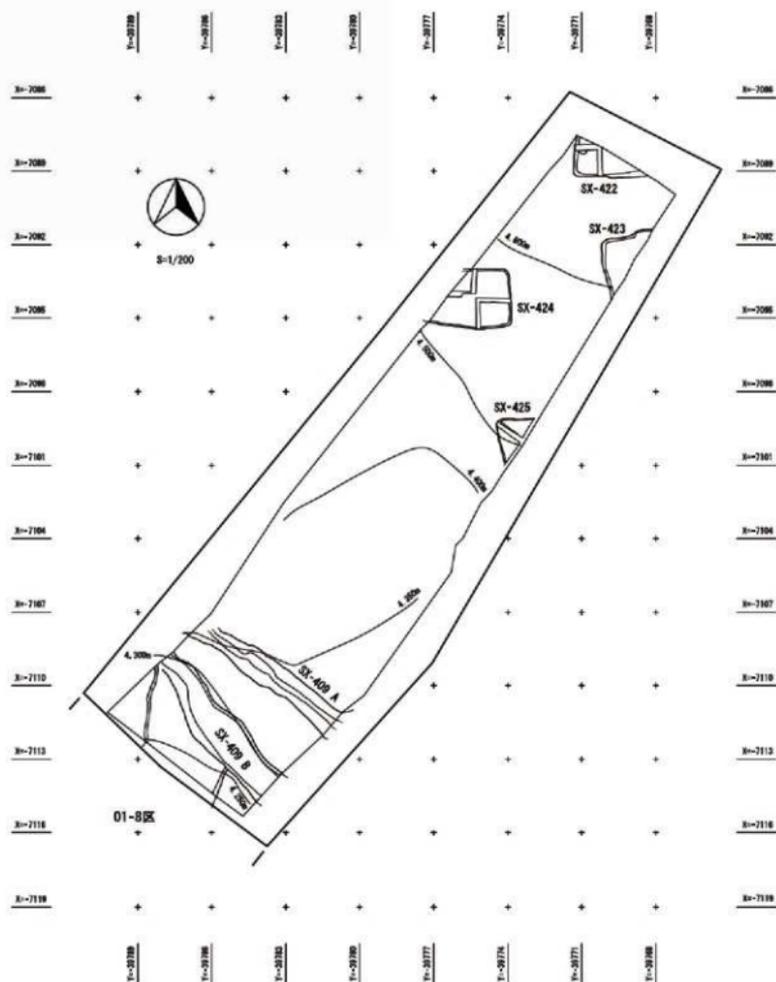
第 111 図 玉名平野条里跡 01-8 区 3 層上面遺構配置図



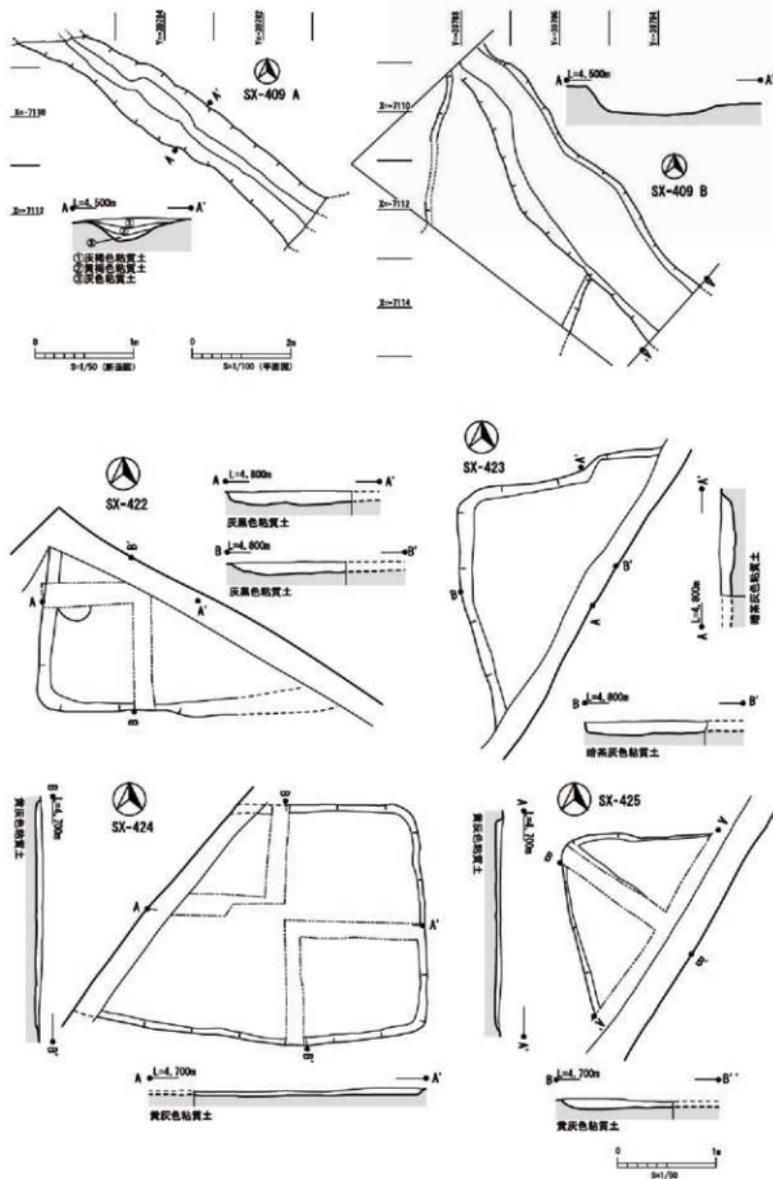
第 112 図 玉名平野条里跡 01-8 区
 SX-802・805・808・829・SD-823・SP-809~813・P-3 実測図



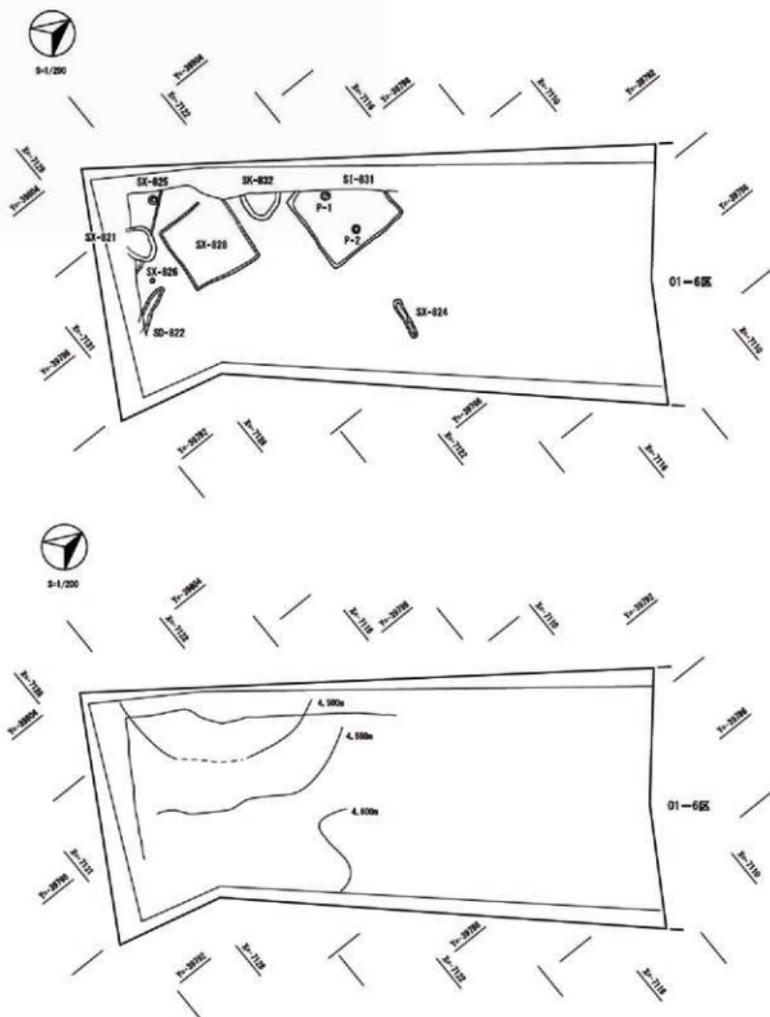
第 113 図 玉名平野条里跡 01-8 区 SX-801・803・804・806・807 実測図



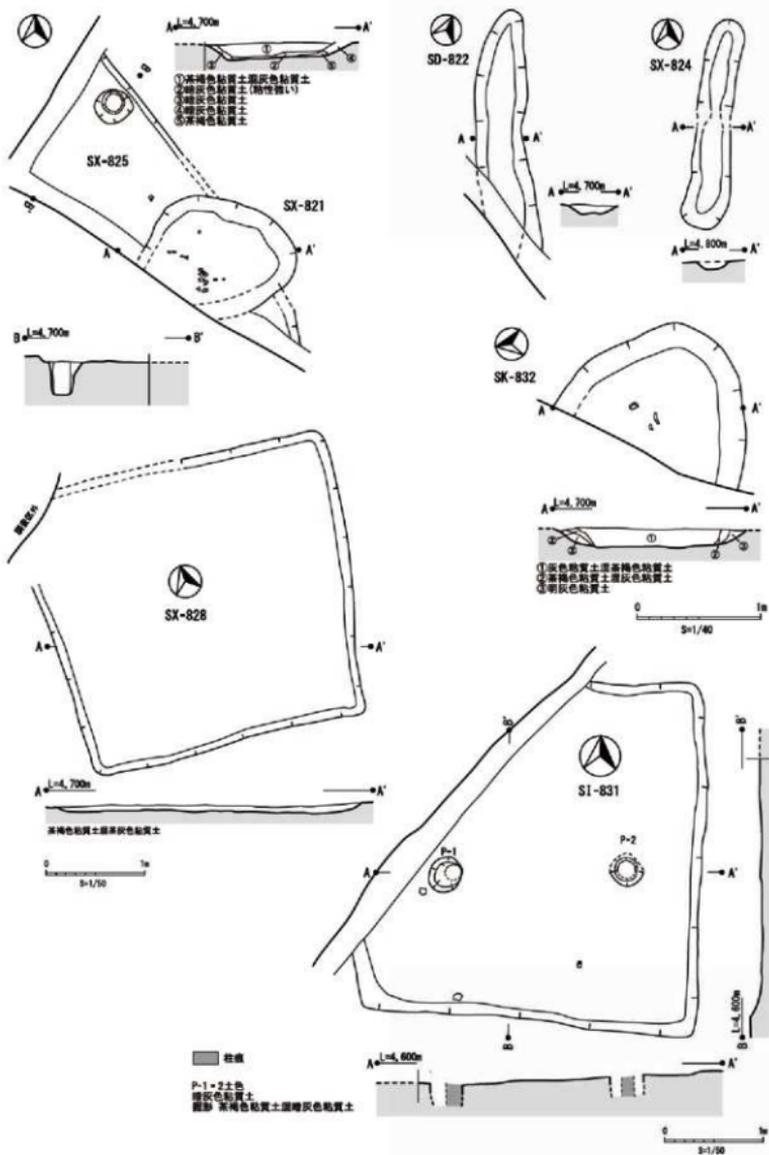
第 114 図 玉名平野条里跡 01-6 区 4 層上面遺構配置図

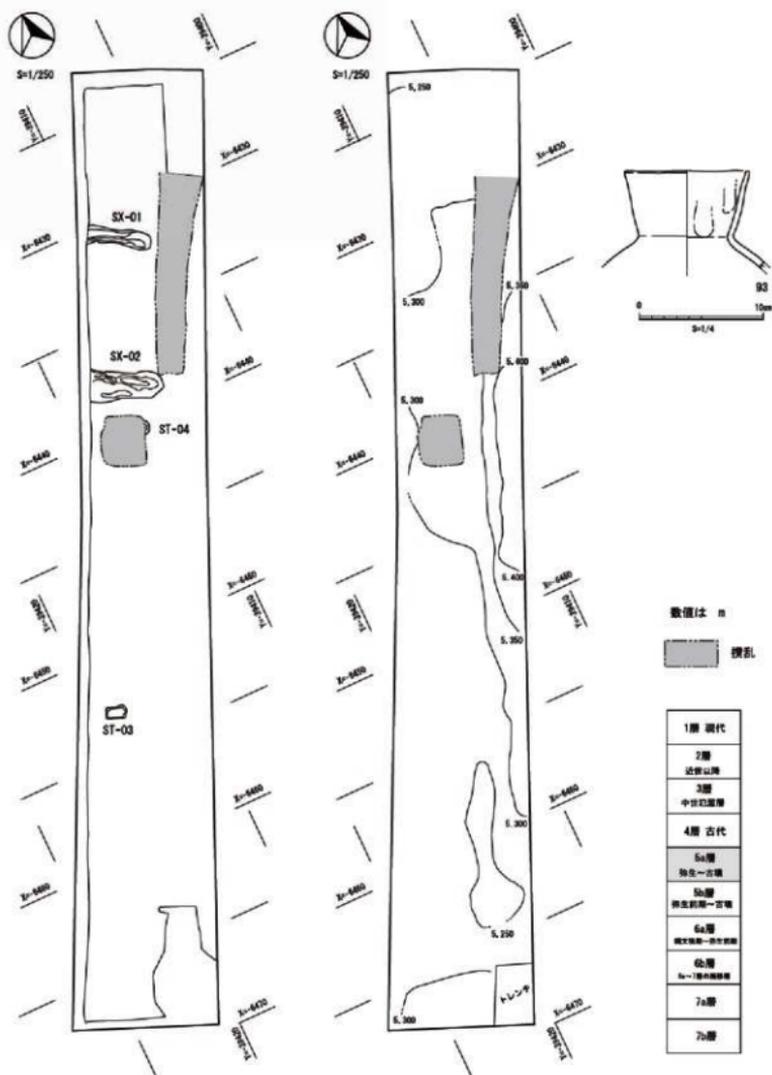


第 115 図 玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409A・B・SX-422~425 実測図

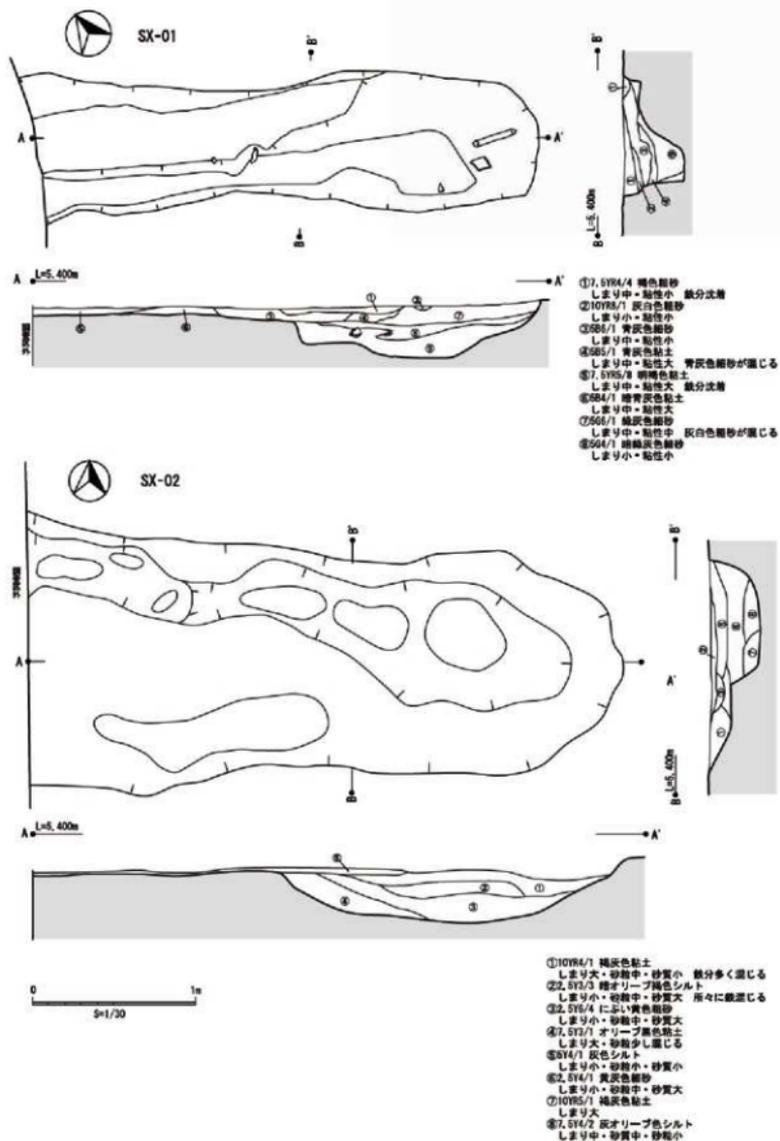


第 116 図 玉名平野条里跡 01-8 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図

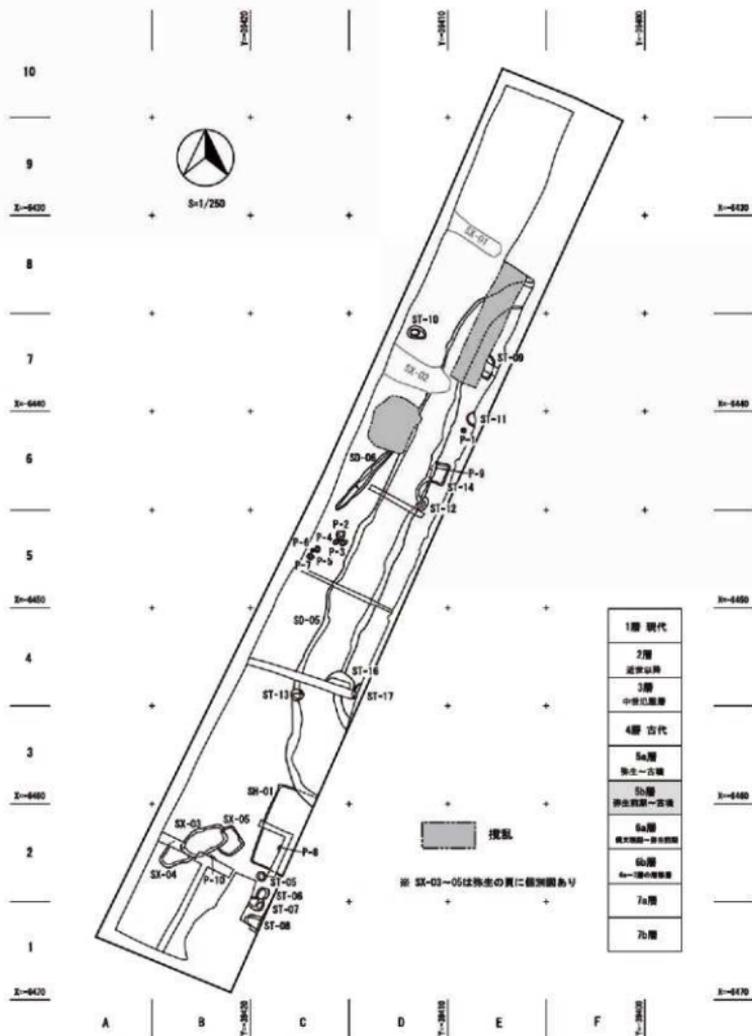




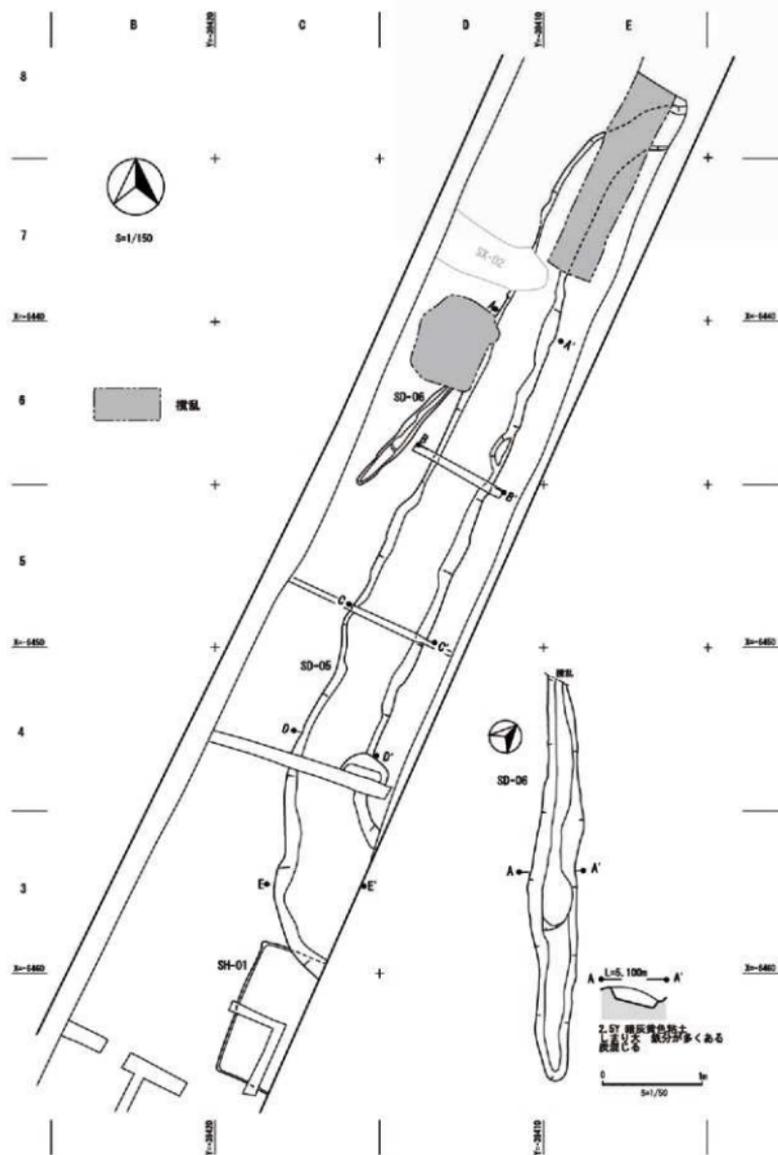
第 118 図 両泊間日波遺跡 03-I 区
5a 層上層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図

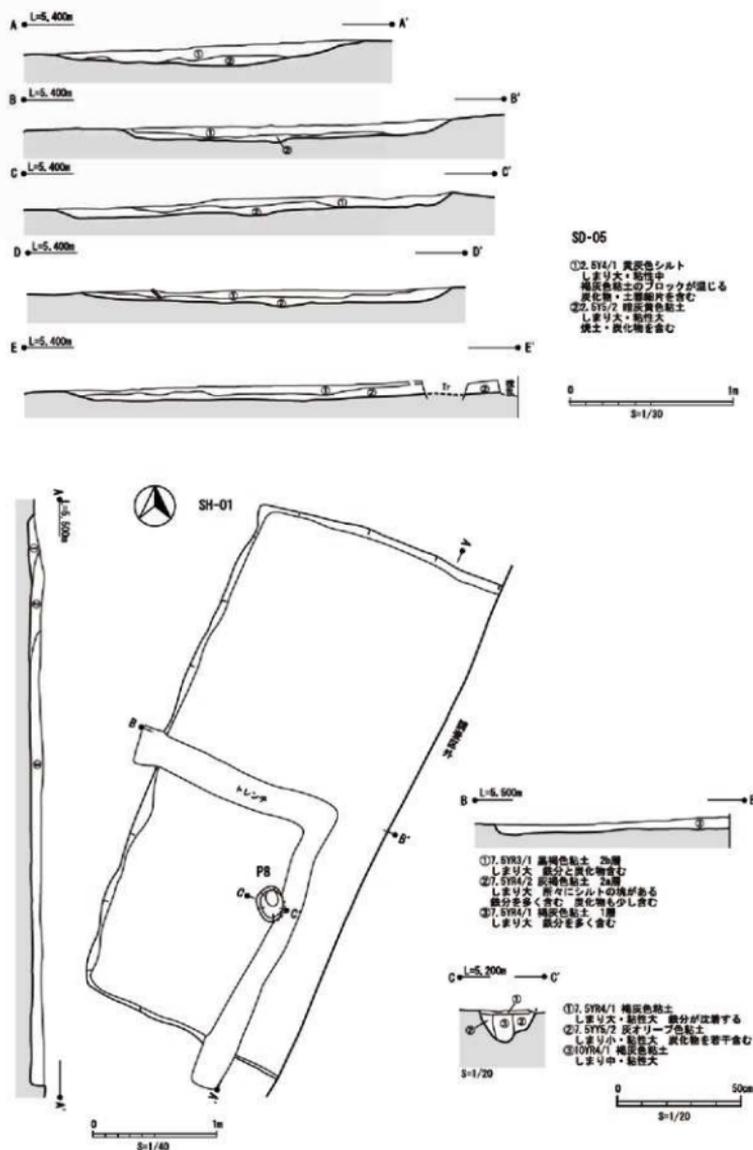


第 119 図 両迫間日波遺跡 03-I 区 SX-01・02 実測図

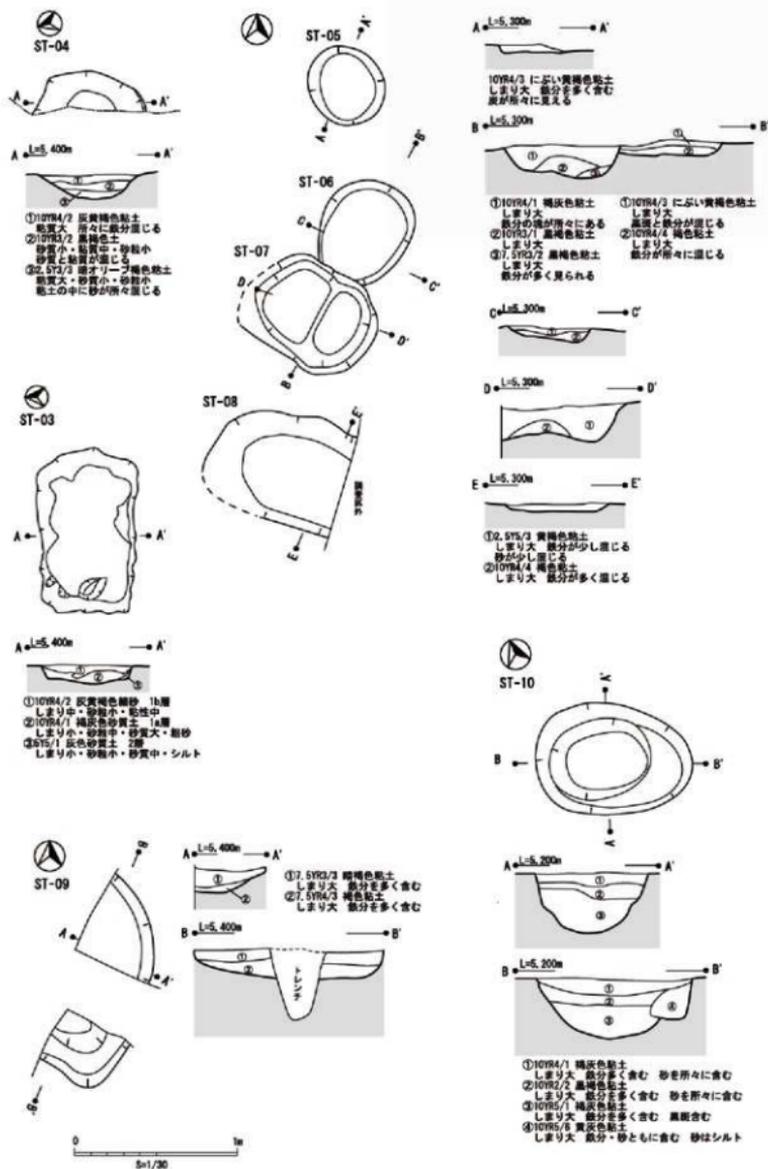


第120図 両迫間日渡遺跡 03-I区 5b層上層遺構配置図

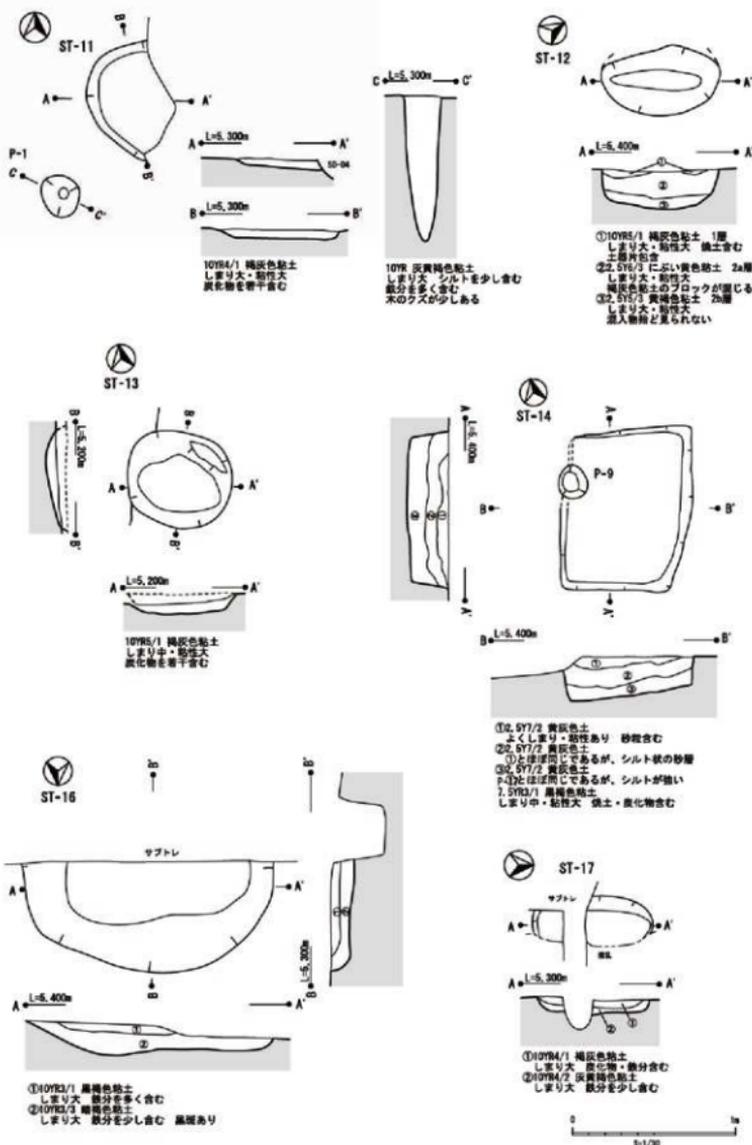




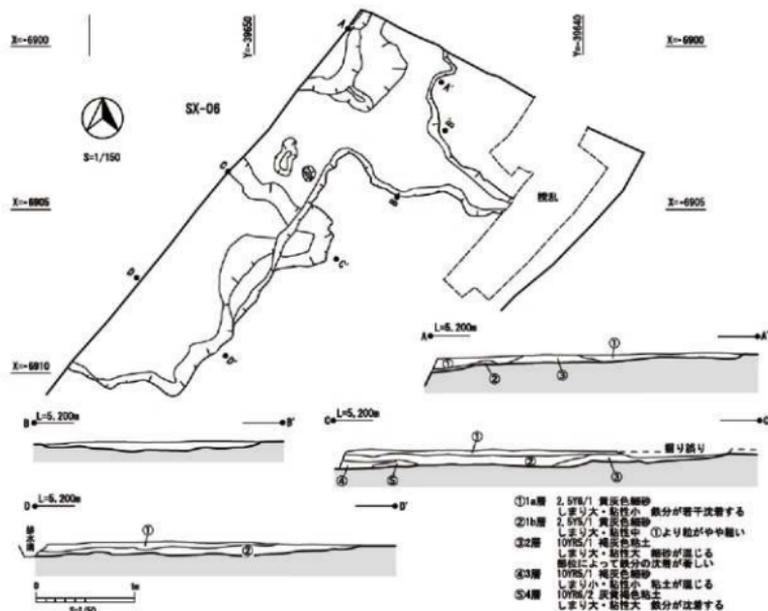
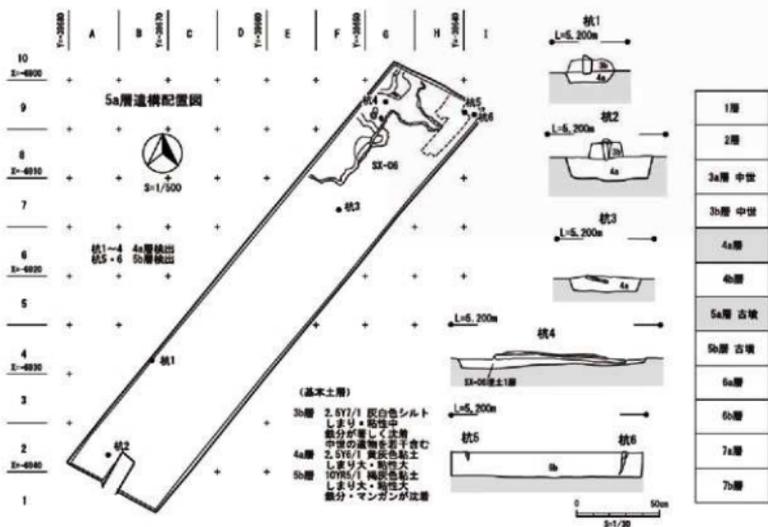
第 122 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SD-05・SH-01・P8 実測図



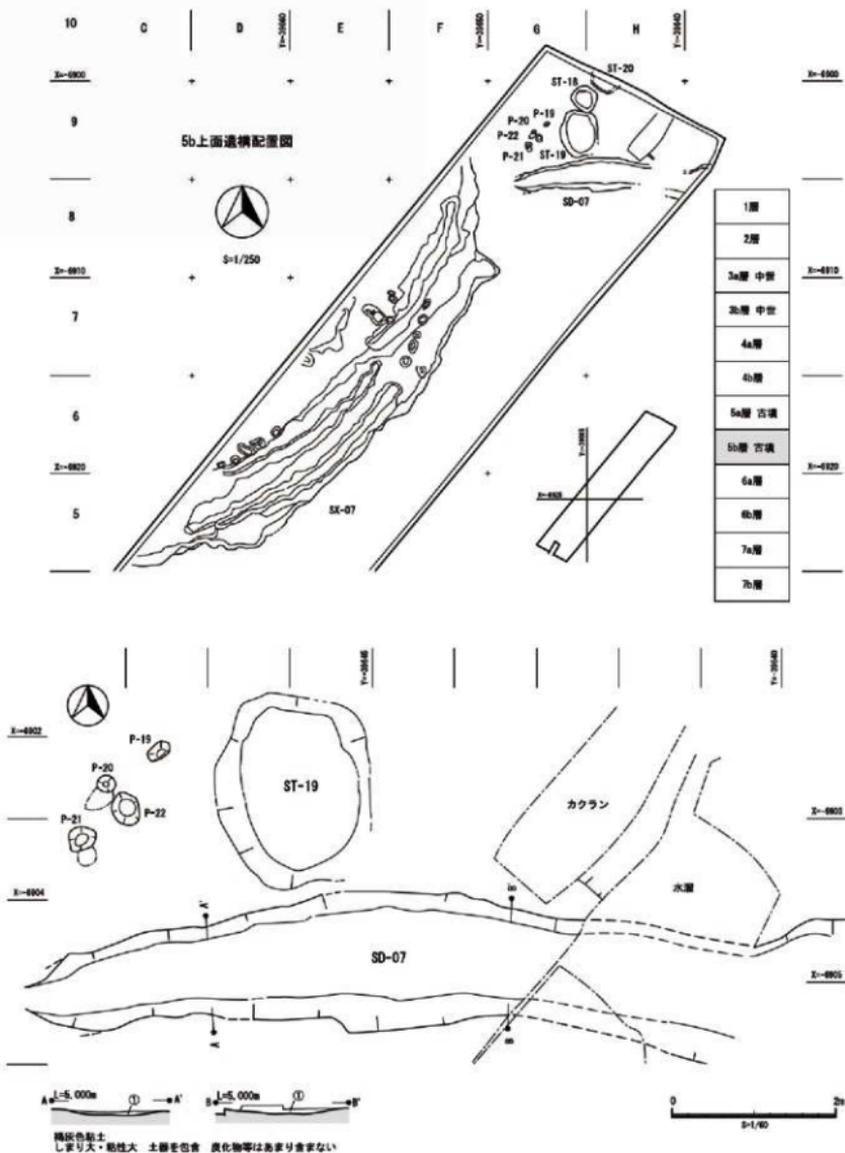
第 123 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 ST-03~10 実測図



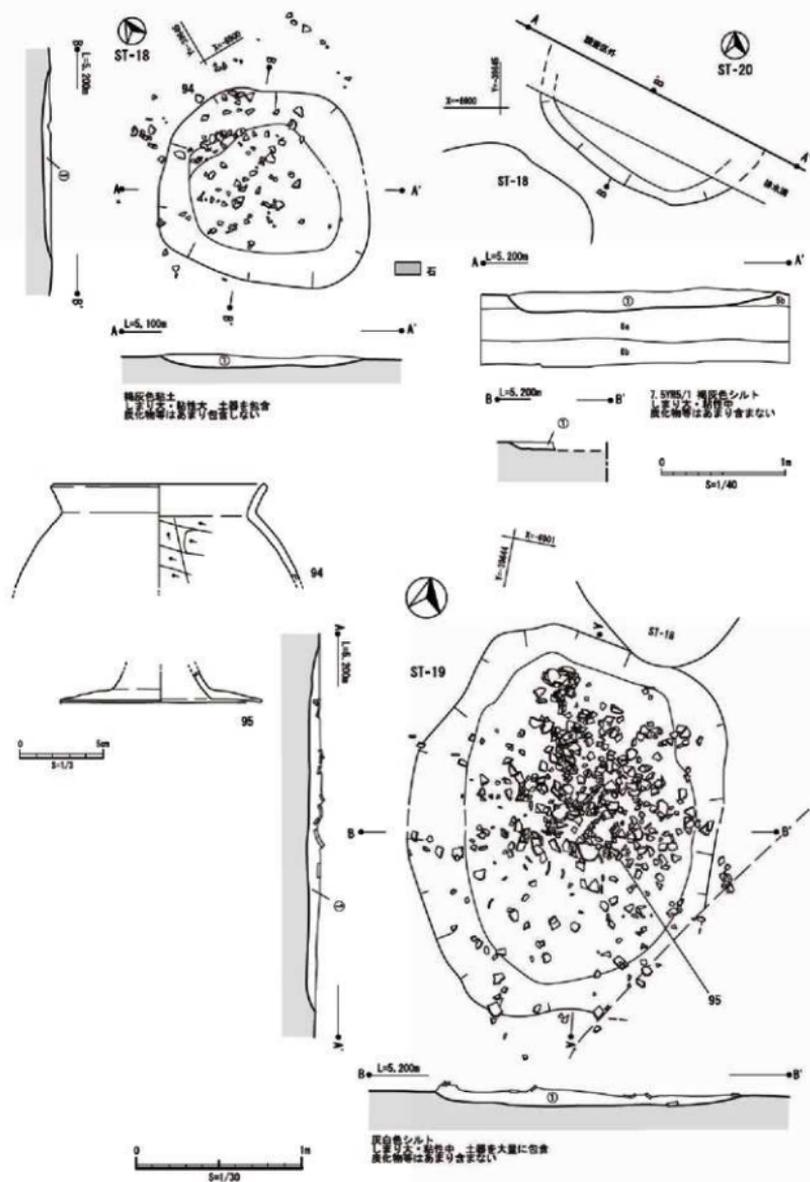
第124図 両迫間日渡遺跡 03-I区 ST-11~14・16・17・P-1・9実測図



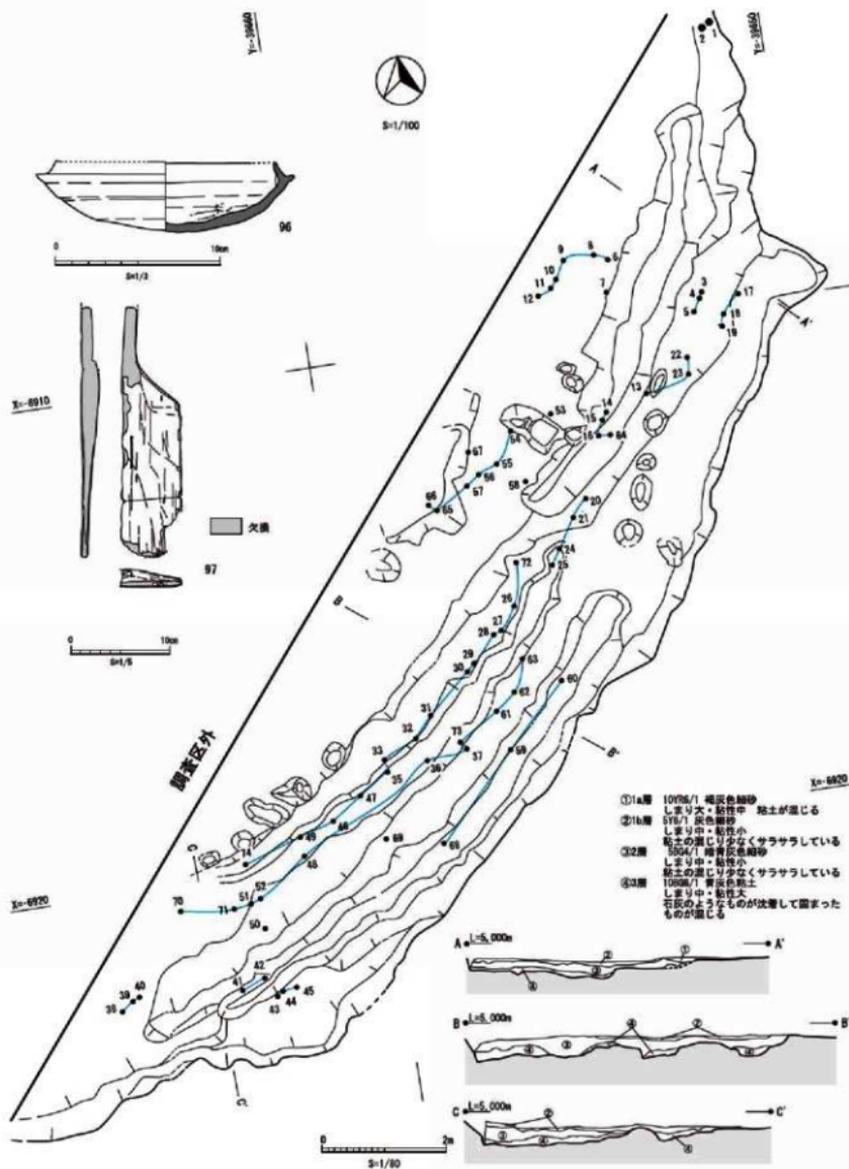
第 125 図 両迫間日波遺跡 03-II 区
4a層・5a層遺構配置図及び坑 1~6・SX-06 実測図



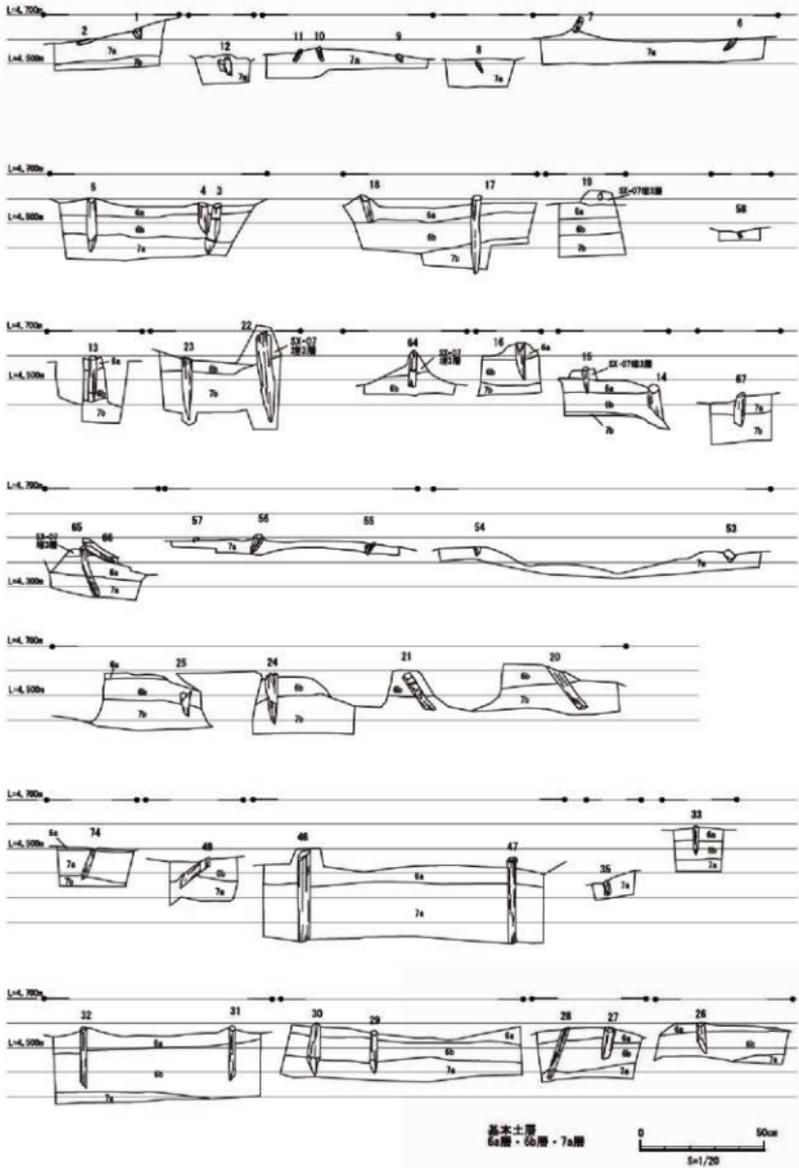
第126図 両迫間日渡遺跡 03-II区 5b層上面遺構配置図及びSD-07・P-19~22実測図



第127図 両迫間日波遺跡 03-II区 ST-18~20実測図及び出土遺物実測図



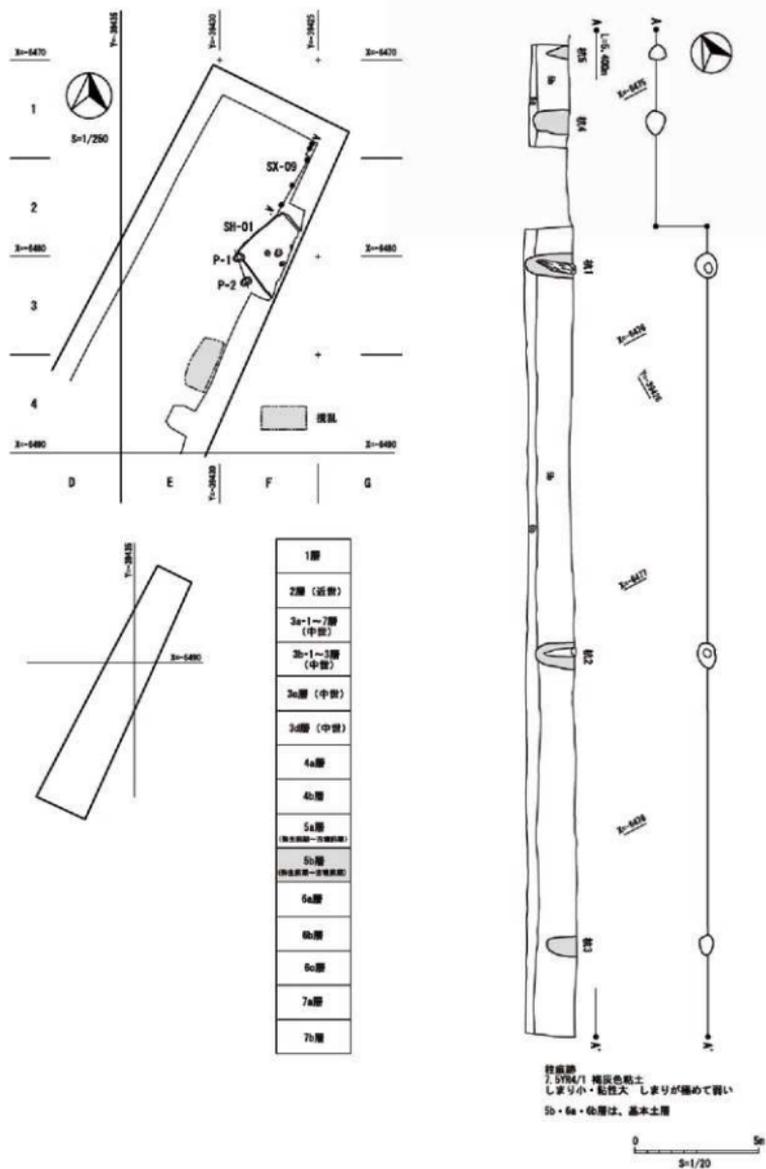
第 128 図 両泊間日波遺跡 03-II 区 SX-07 実測図及び出土遺物実測図



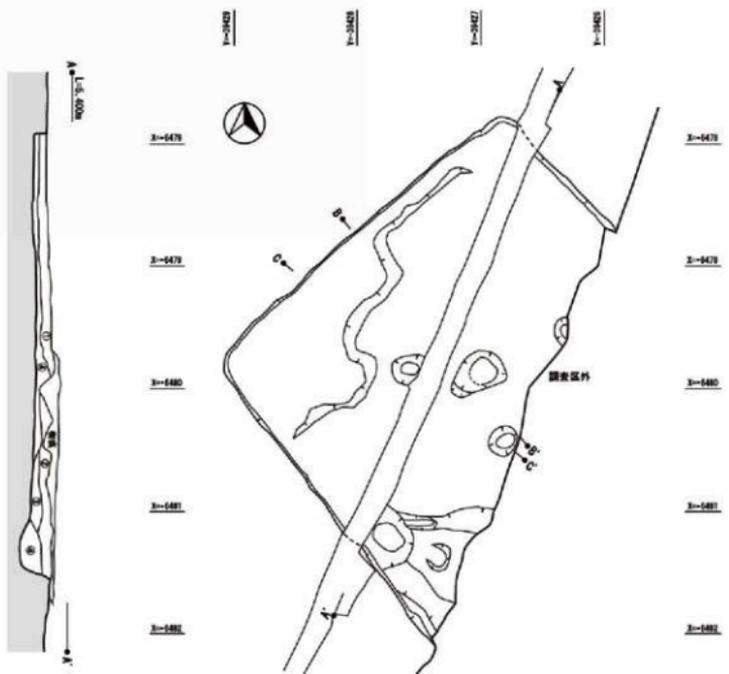
第 129 図 両迫間日渡遺跡 03-II区 SX-07 杭群実測図 1



第 130 図 兩迫間日波遺跡 03-II 区
SX-07 杭群実測図 2 及び包 3b 層出土遺物実測図



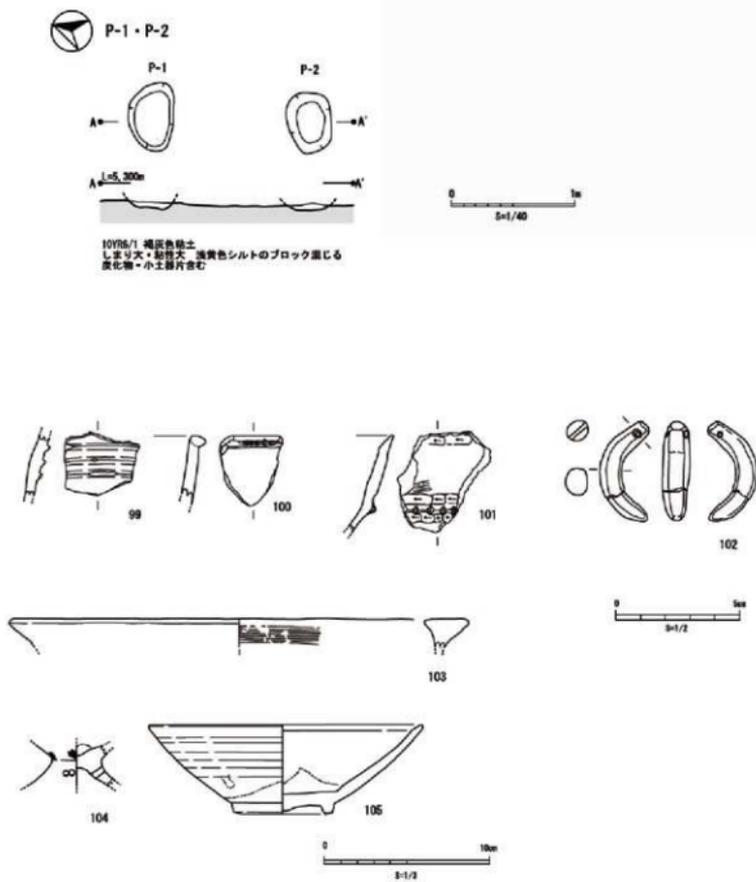
第 131 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 5b 層遺構配置図及び SX-09 実測図



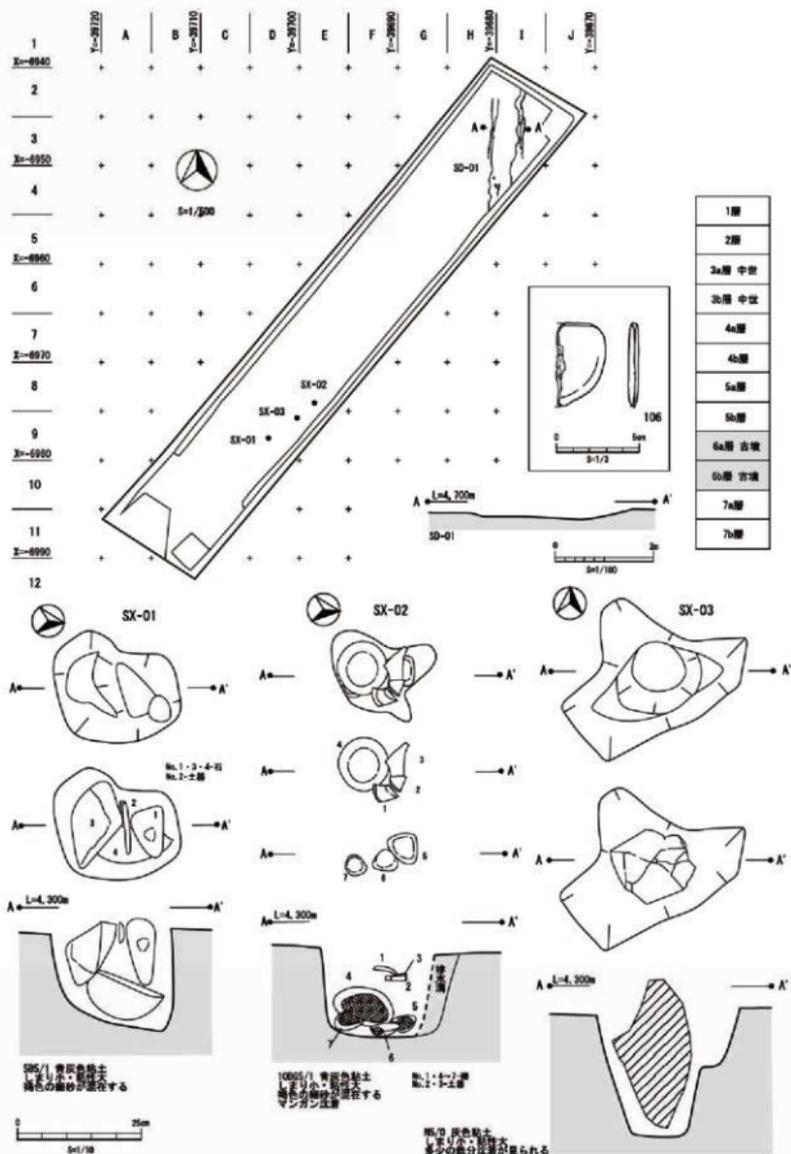
- ① 7.5796/1 褐色色粘土 1a層
しきり中・粘性大 鉄分多く沈着 マンガン酸沈着
- ② 7.5796/1 褐色色粘土 1b層
しきり中・粘性大 鉄分・マンガン沈着 1a層より少ない
- ③ 7.5794/1 褐色色粘土 2層
しきり小・粘性大 淡黄色シルトが若干混じる
- ④ 10794/1 褐色色粘土 3層
しきり中・粘性大 黒褐色粘土・淡黄色シルト混じる
マンガン酸・鉄分を多く含む



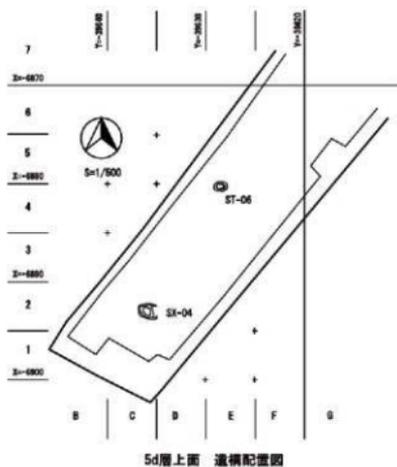
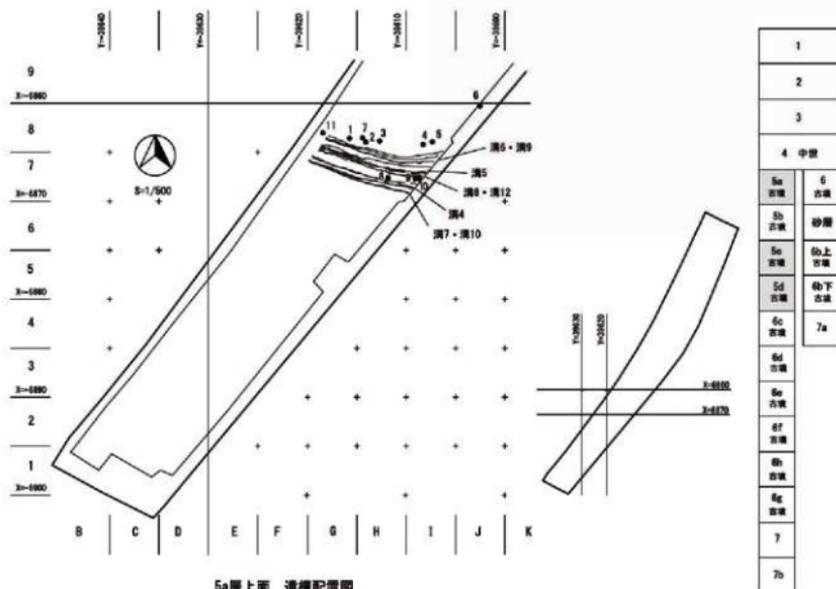
第 132 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SH-01 実測図



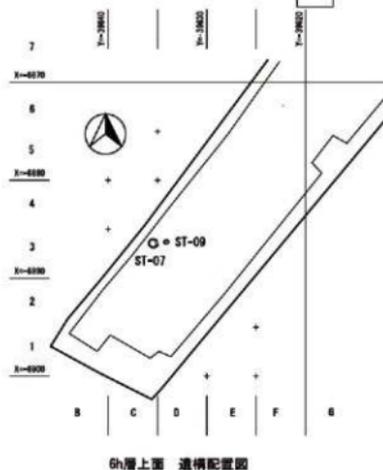
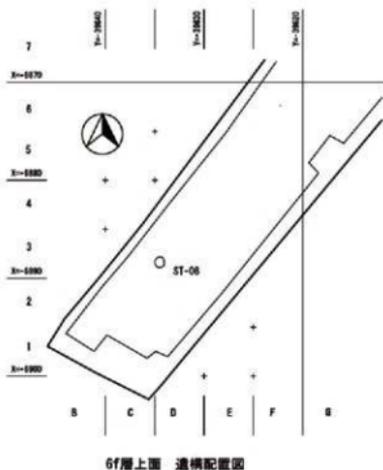
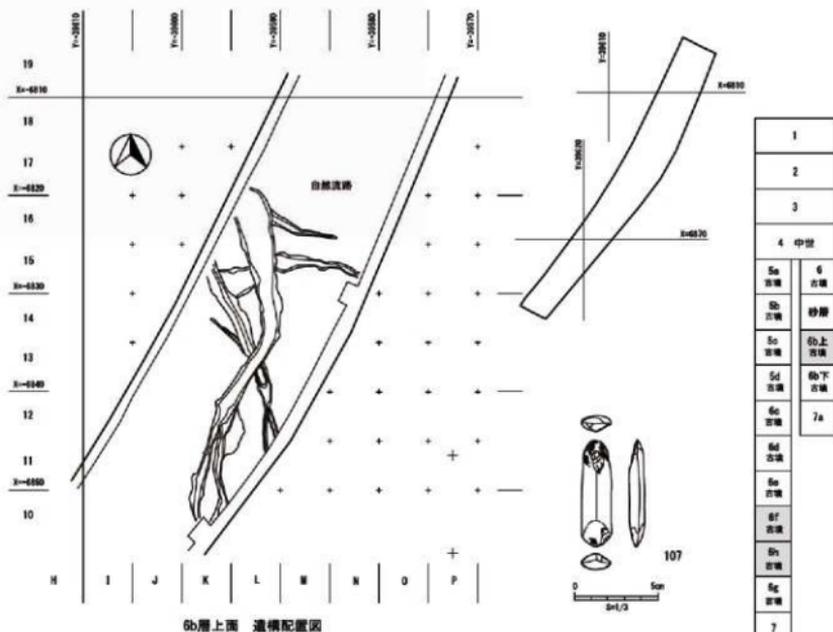
第 133 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 P-1・2 実測図及び出土遺物実測図



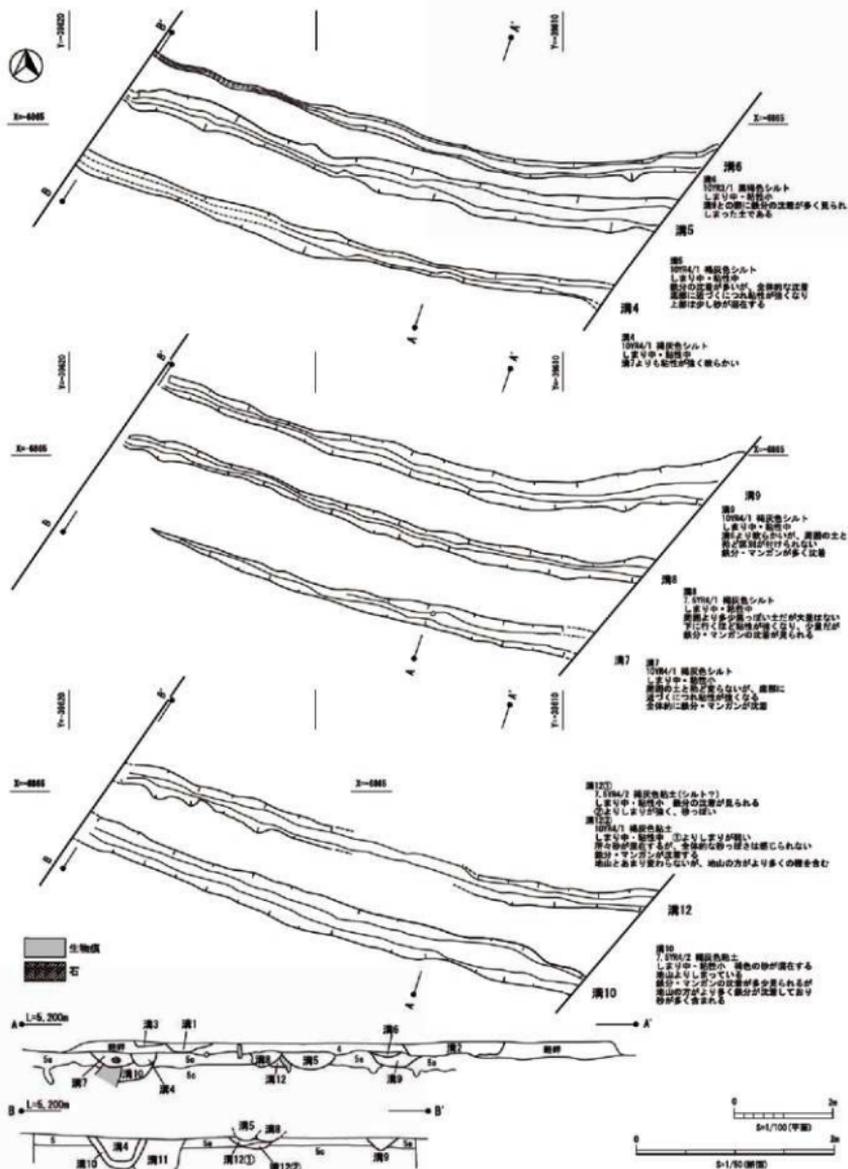
第134図 玉名平野条里跡 04-I 区
6層遺構配置図・SD-01・SX-01～03 実測図及び出土遺物実測図



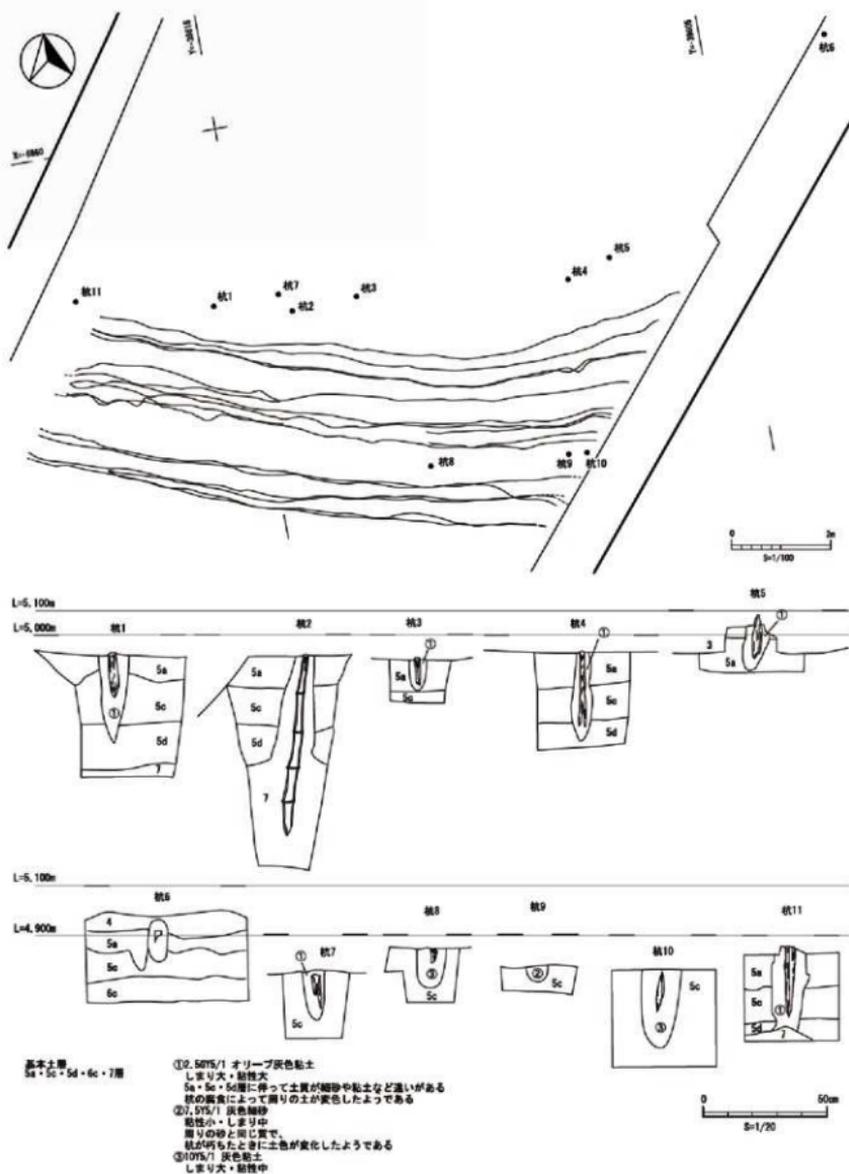
第 135 図 両迫間日波遺跡 04-II区 5a層・5c層・5d層上面遺構配置図



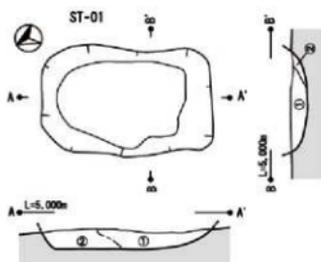
第136図 両迫間日渡遺跡 04-II区
6b層・6f層・6h層上面遺構配置図及び出土遺物実測図



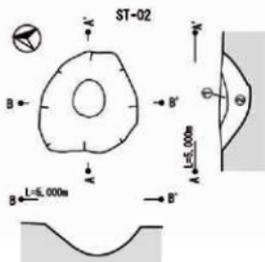
第 137 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 SX-01 (溝4~10・12) 実測図



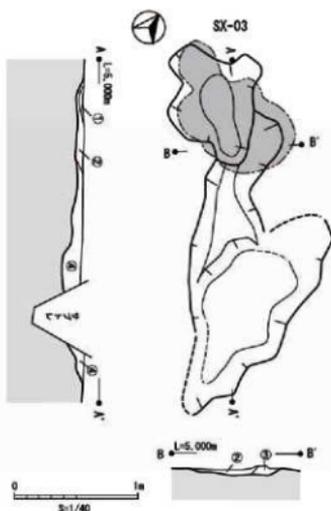
第 138 図 両迫間日渡遺跡 O4-II 区 SX-02 (杭 1~11) 実測図



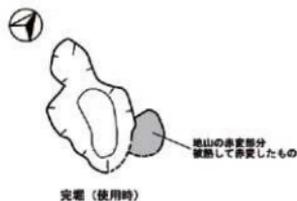
- ①D7, S15/1 褐色粘土
しまり大・粘性大 ペタッとしている
②より大きな塊(50cm程度)が多く含まれ
土色が黄っぽく厚みもある
断面が厚状に少し入っている
マンガン酸が少し含む
粘土を層状に含む
砂土をブロック状に含む
土層片を含む
- ②D6/2 赤子リープ色粘土
しまり大・粘性大 断面①より少し高い
上面に硬粒が多く、土色が黒っぽく見える
細砂を層状に堆積し多く含む
マンガン酸を少量含む
断面が厚状に含む
土層片が入っている



- ①D107B4/1 褐色色粘土
しまり大・粘性大
断面厚状に含む層あり
- ②D107B4/1 褐色色粘土
しまり中・粘性大 炭化物(1cm前後)を多く含む
D7, S14/2 褐色黄色粘土が断面上面に少し入っている
①は選じるものがないが、②は50cm以上に硬状



■ 粘土

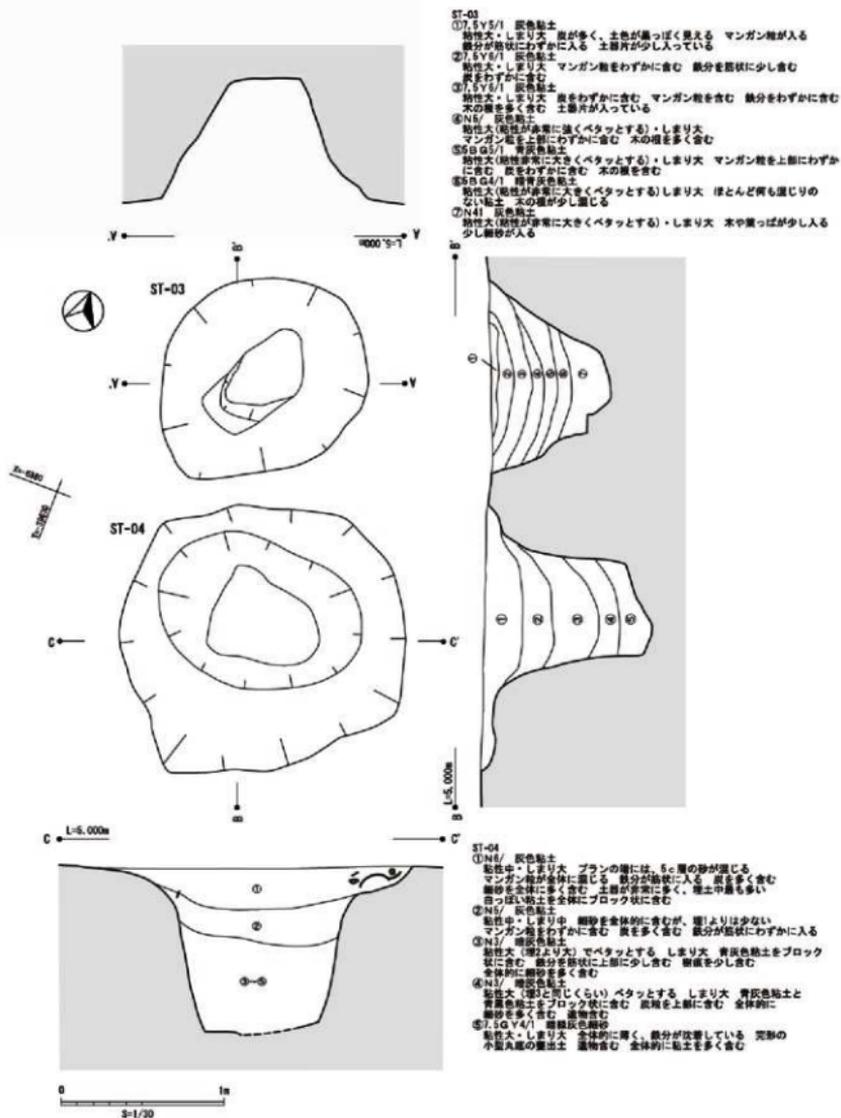


土山 (使用時)

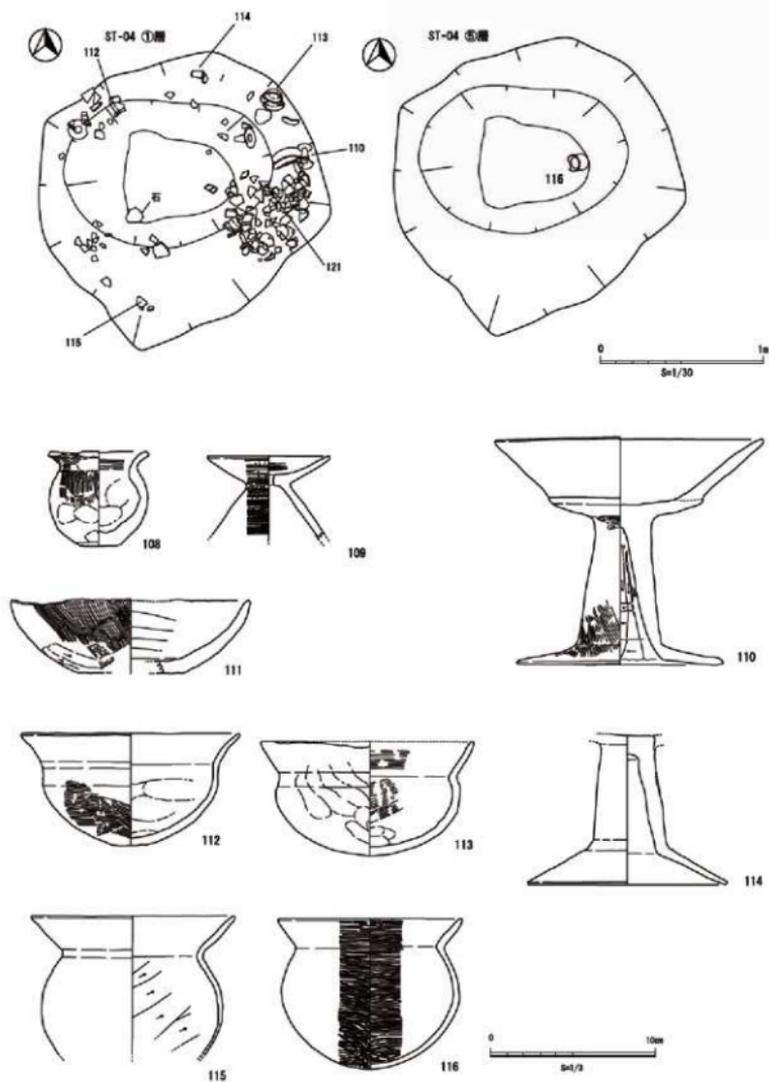
- ①埋1a層 2, S14/2 褐色黄色粘土
層厚0.5~2cm程度の炭化物が層状に入る
炭化物・粘土の混合が250cmしかない
SX-03最終使用時 しまり小・粘性小
- ②埋1b層 2, S14/1 褐色粘土に①層僅かに厚
①のように炭化した層状には検出されないが
1cm前後の炭化物が多く、均質に入ると
土色が暗いのは炭色が濃くしているため
層下に②があり、SX-03使用時の層といえる
しまり中・粘性大
- ③D7, S15/4/6 褐色~7, S15/5/6 明褐色粘質土
粘土層、元々50cmだった層が縮んで赤紫
粘性は失われ、砂質土のような質感 しまり大・粘性小
- ④埋2層 ②だが選じる土の量が少なくなる 数は0.2~1cm程度
①②のように傾けた炭化物が流れ出して炭化したもの
SX-03埋土中で最も土層片の出土量が多い
しまり大・粘性大

※SX-03完結後、SX-03裏面でST-03検出
ST-02と重なるため、SX-03がST-02に属し可能性あり

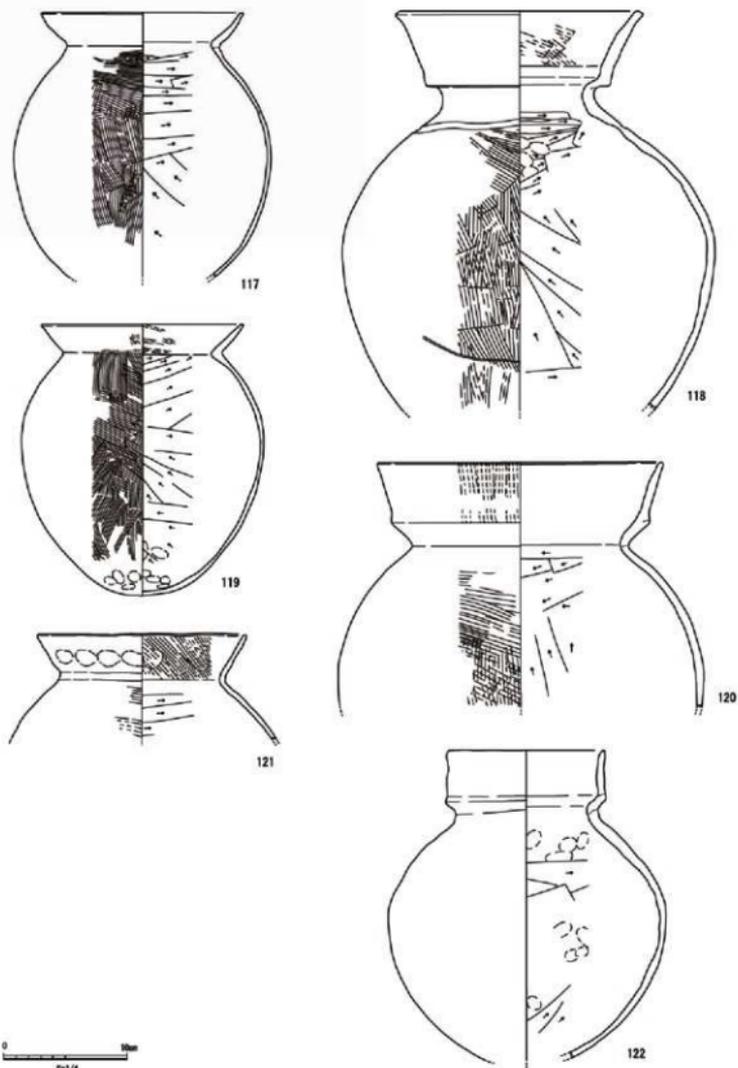
第 139 図 両泊間日渡遺跡 04-II区 ST-01・02・SX-03 実測図



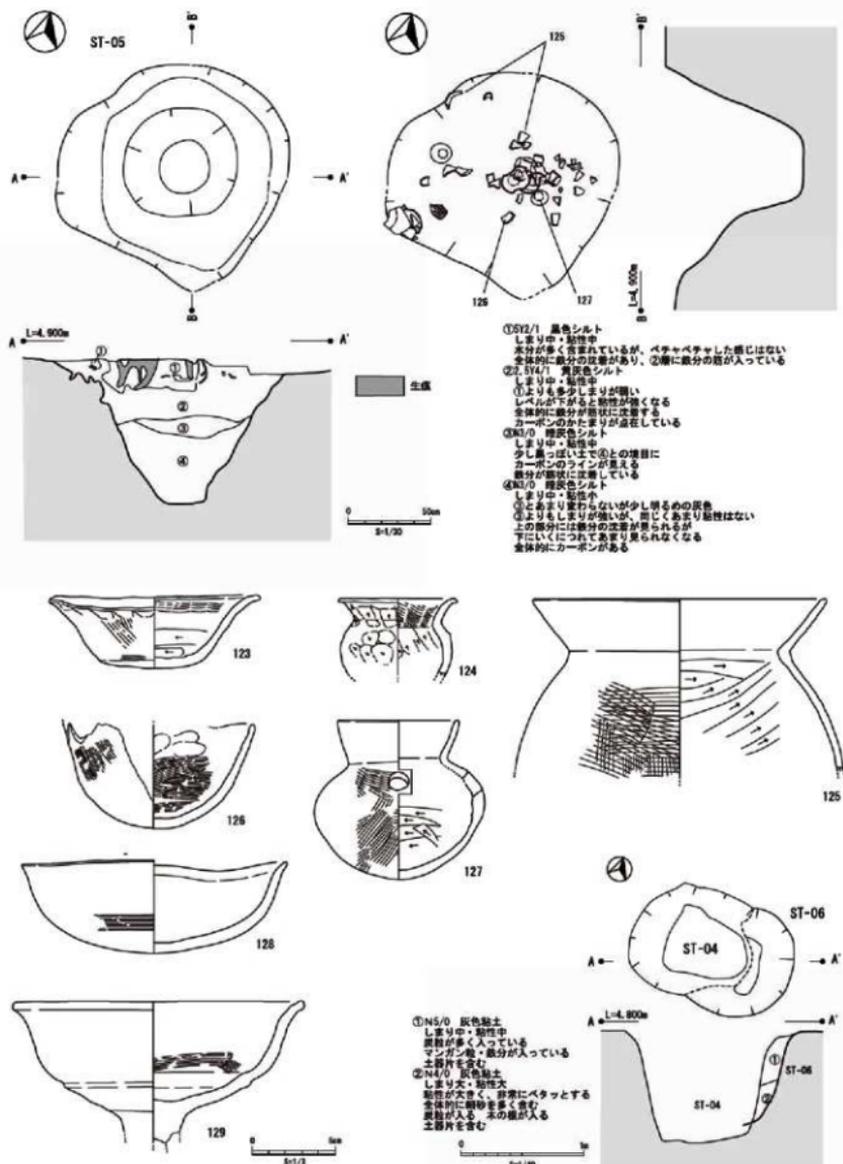
第 140 図 両泊間日波遺跡 04-II区 ST-03・04実測図



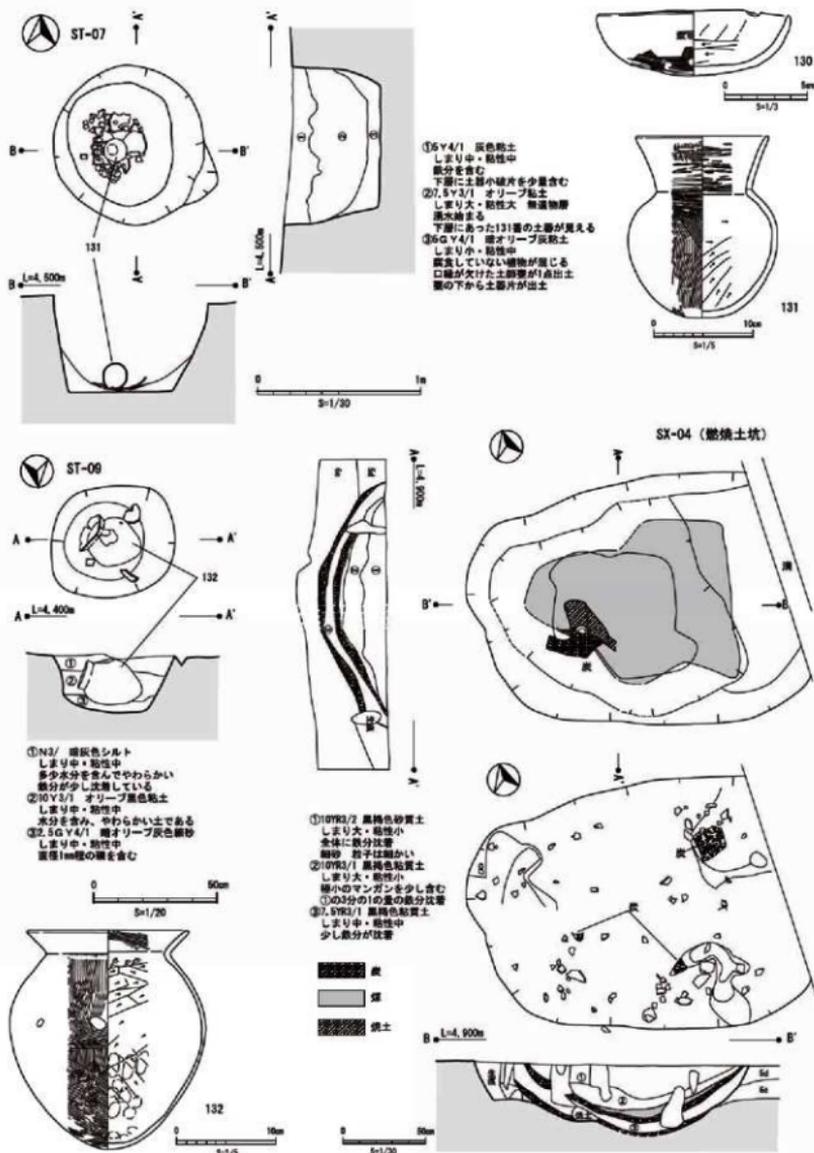
第 141 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 ST-04 遺物出土状況及び出土遺物実測図



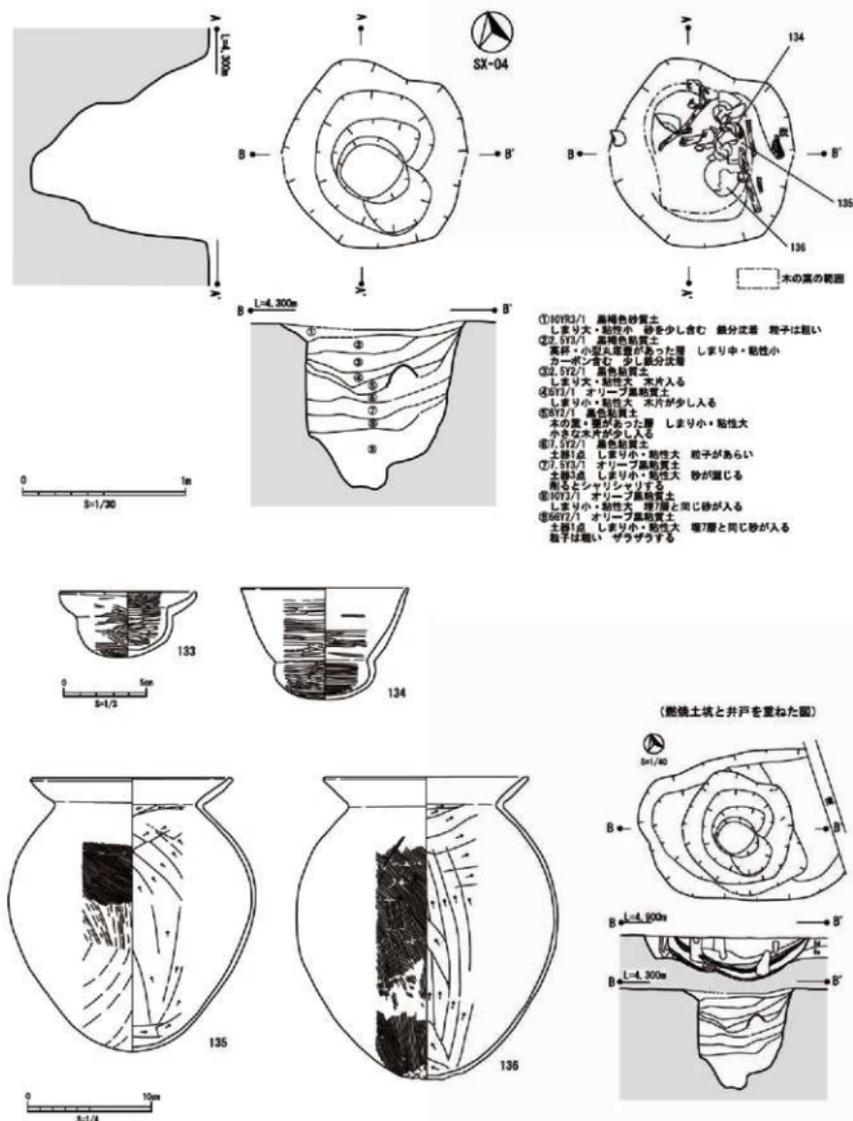
第142図 両迫間日渡遺跡 04-II区 ST-04 出土遺物実測図



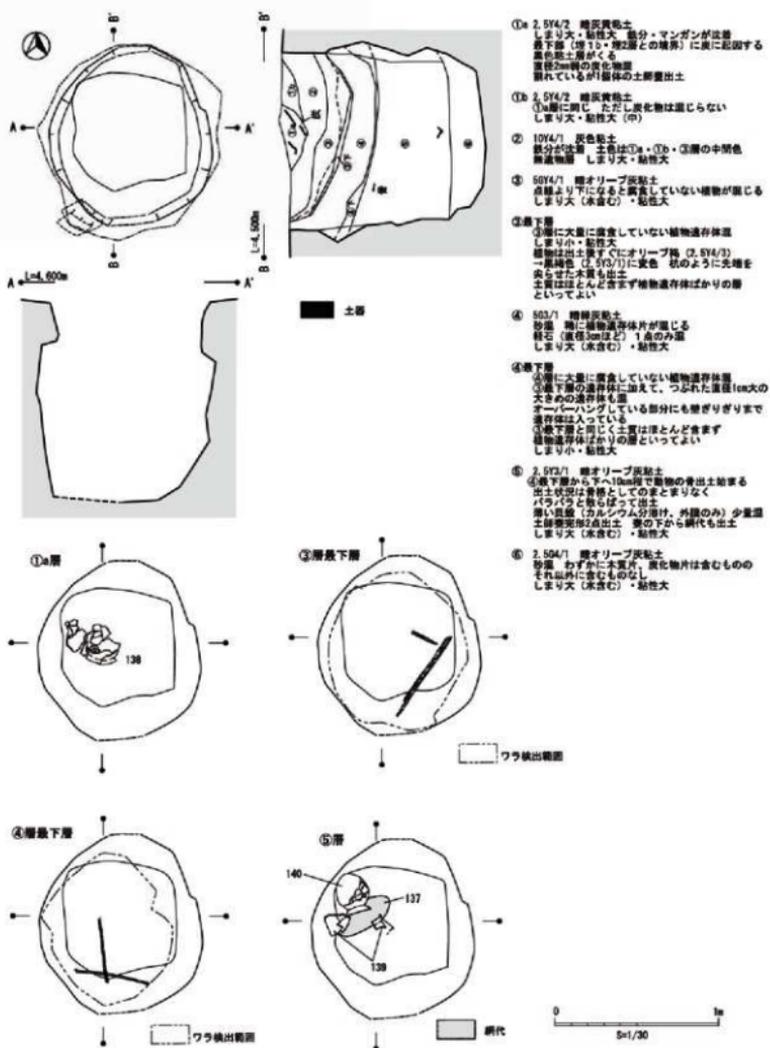
第 143 図 両泊間日渡遺跡 O4-II 区 ST-05・06 実測図及び出土遺物実測図



第144図 両迫間日波遺跡 04-II区
ST-07・09・SX-04 (燃焼土坑) 実測図及び出土遺物実側図



第 145 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 SX-04 実測図及び出土遺物実測図

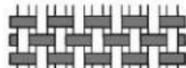


第 146 図 両迫間日波遺跡 04-II区 ST-08 実測図



(編み方の様式図)

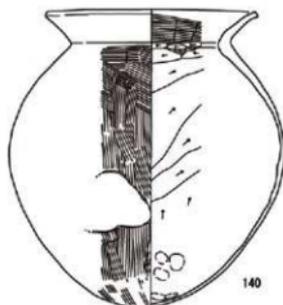
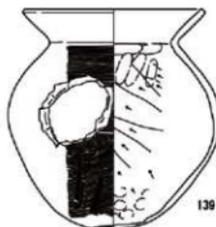
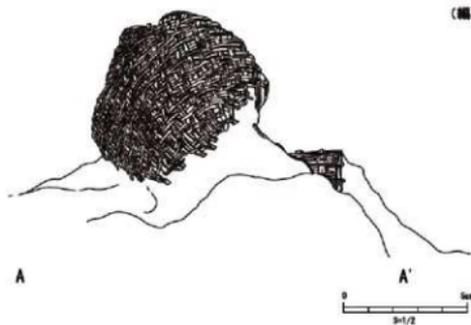
体部中央部カ
「表面」 一本超、一本潜、一本透



体部下部カ
「裏面」 二本超、二本潜、一本透(右上がり)

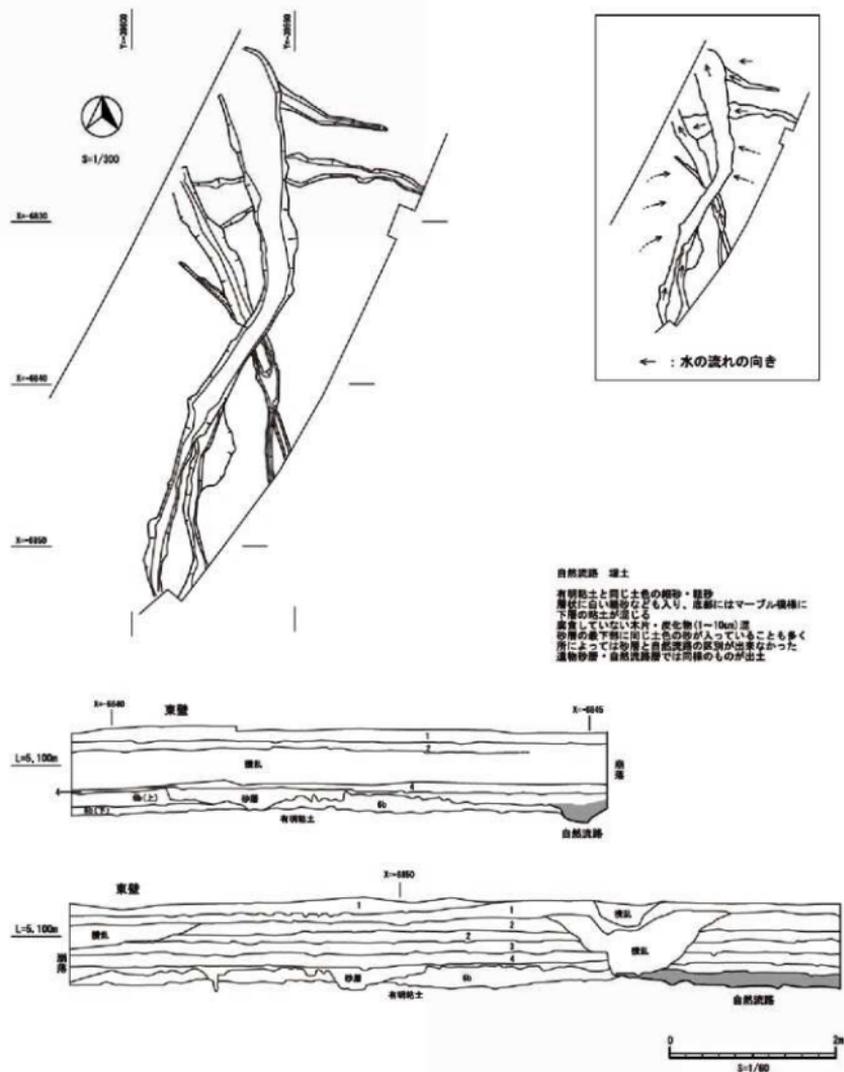


□ タ子材
■ ヨコ材

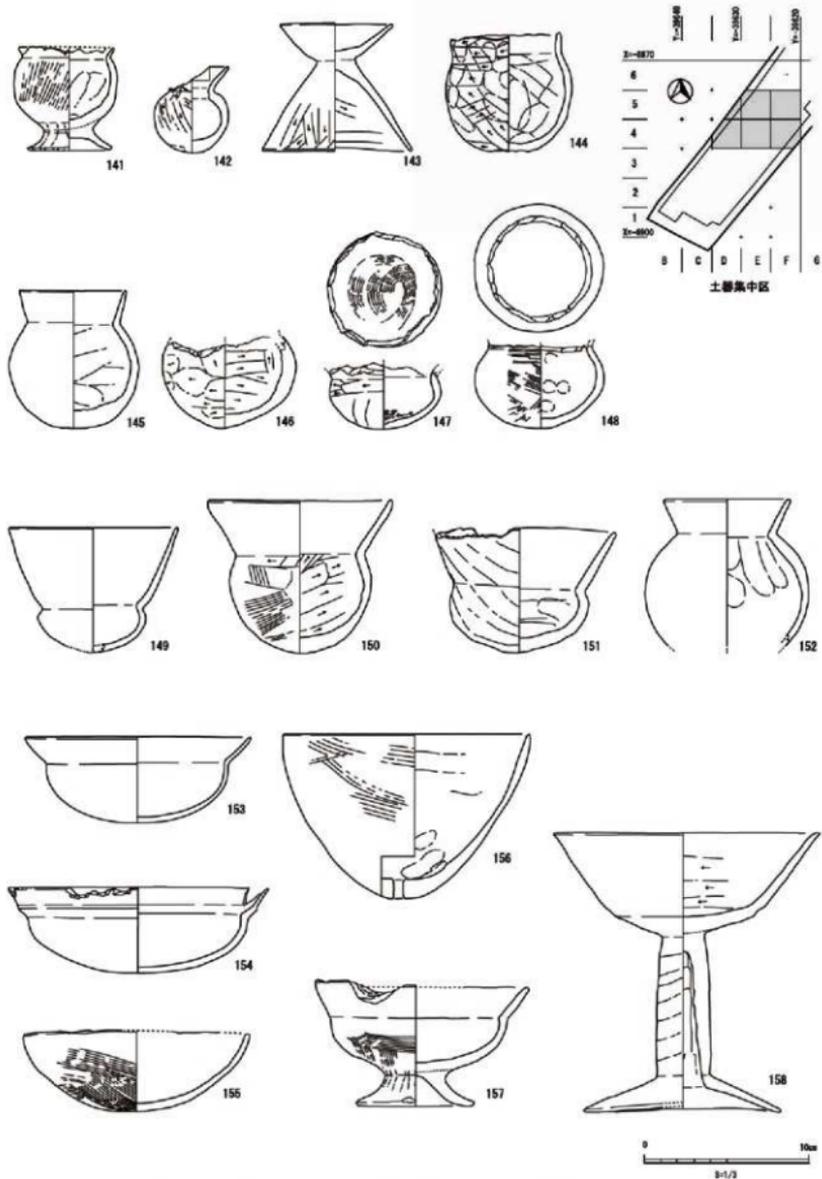


0 10cm
3cm/4

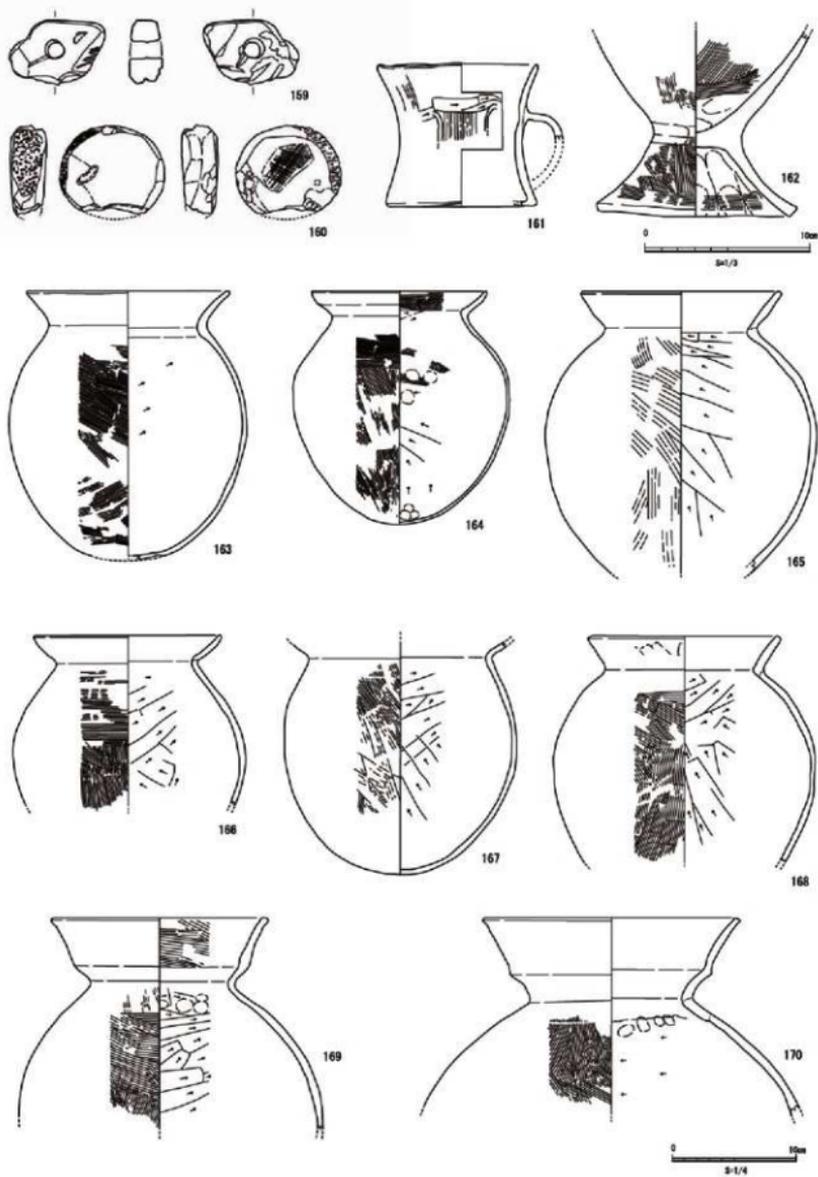
第 147 図 両泊間日渡遺跡 04-II区 ST-08 出土遺物実測図



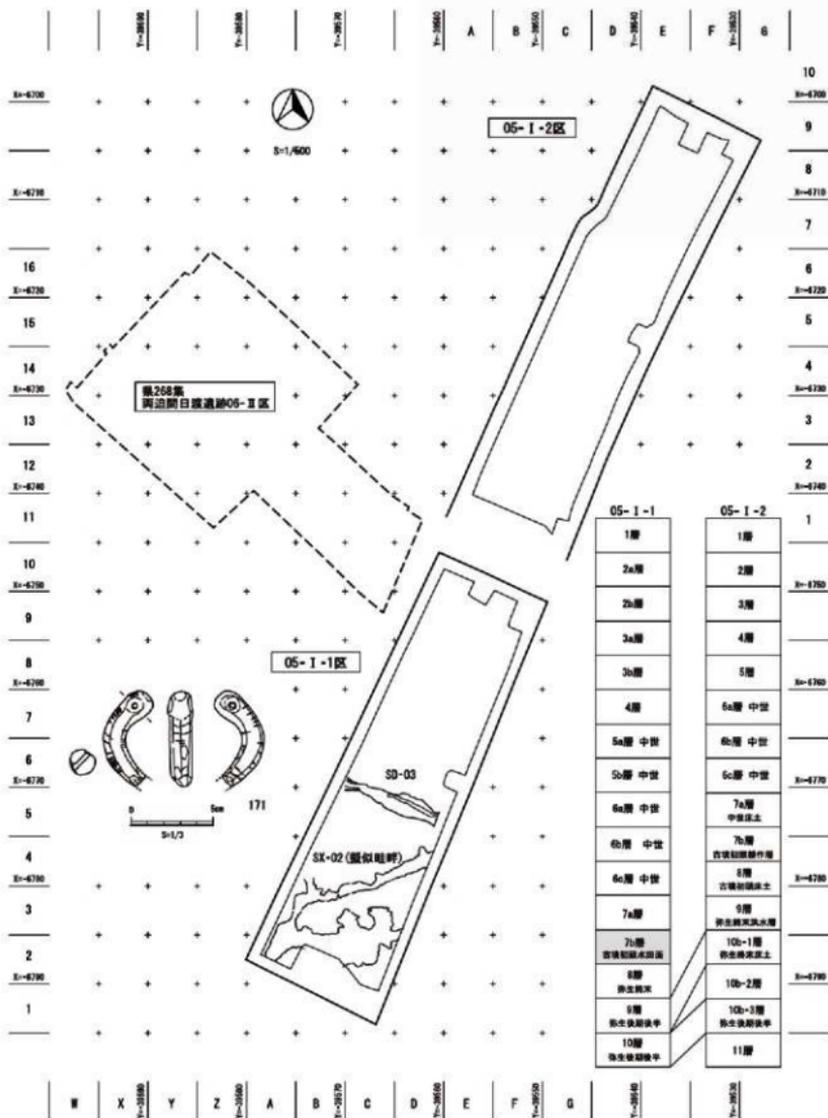
第148図 両迫間日渡遺跡 O4-II区 自然流路実測図



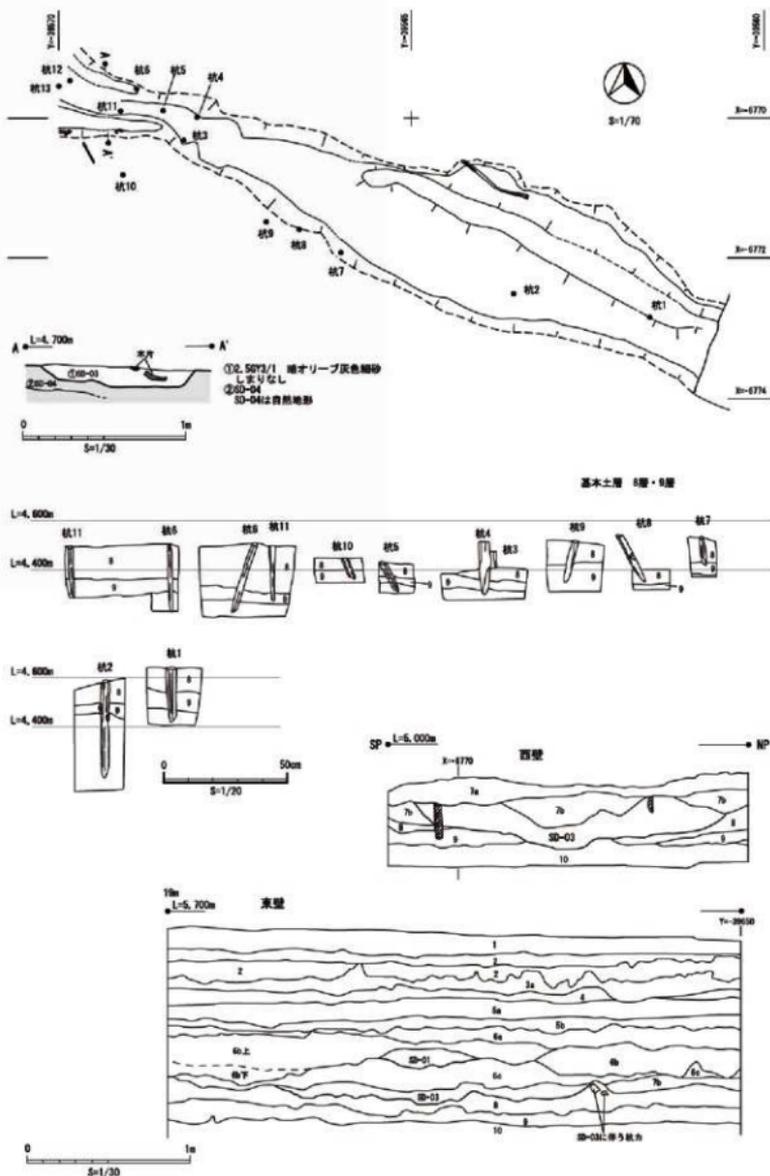
第 149 図 両迫間日波遺跡 04-II 区 土器集中区出土遺物実測図 1



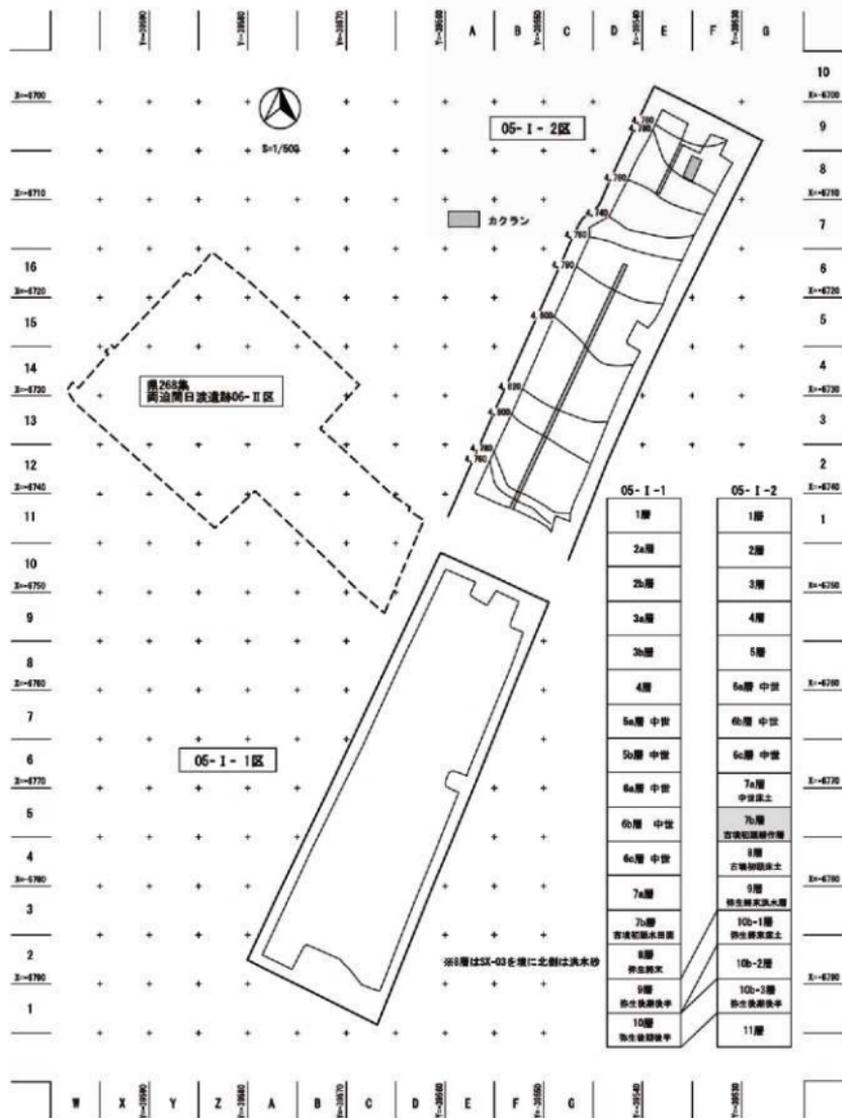
第150図 両迫間日波遺跡 04-II区 土器集中区出土遺物実測図2



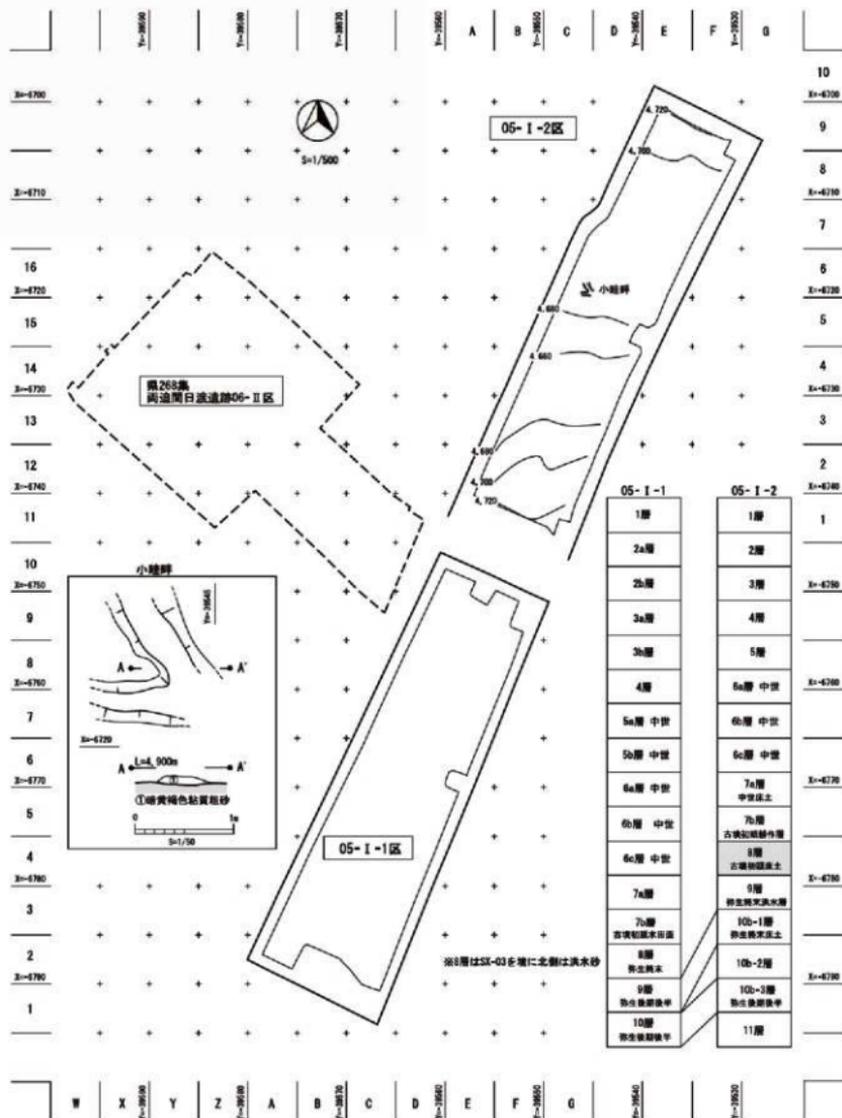
第151図 両泊間日渡遺跡 05-I-1区 7b層遺構配置図及び出土遺物実測図



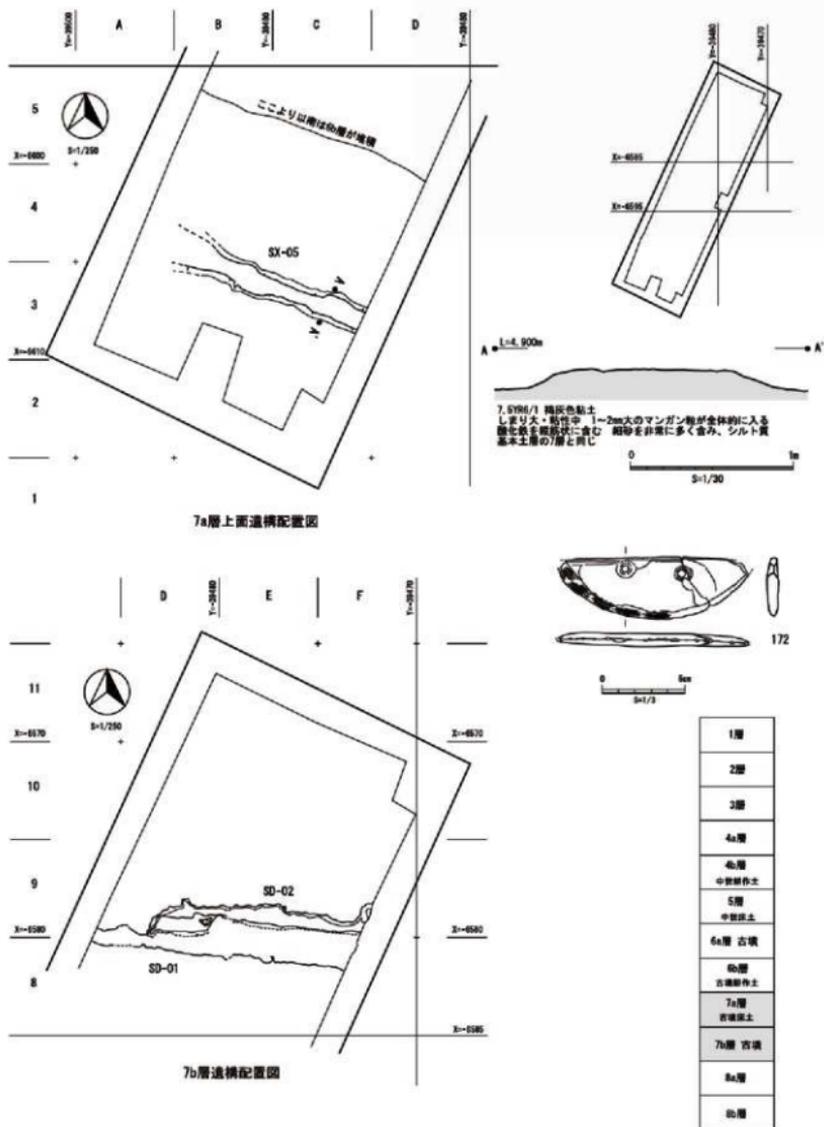
第 152 図 両泊間日渡遺跡 05-I-1 区 SD-03 実測図



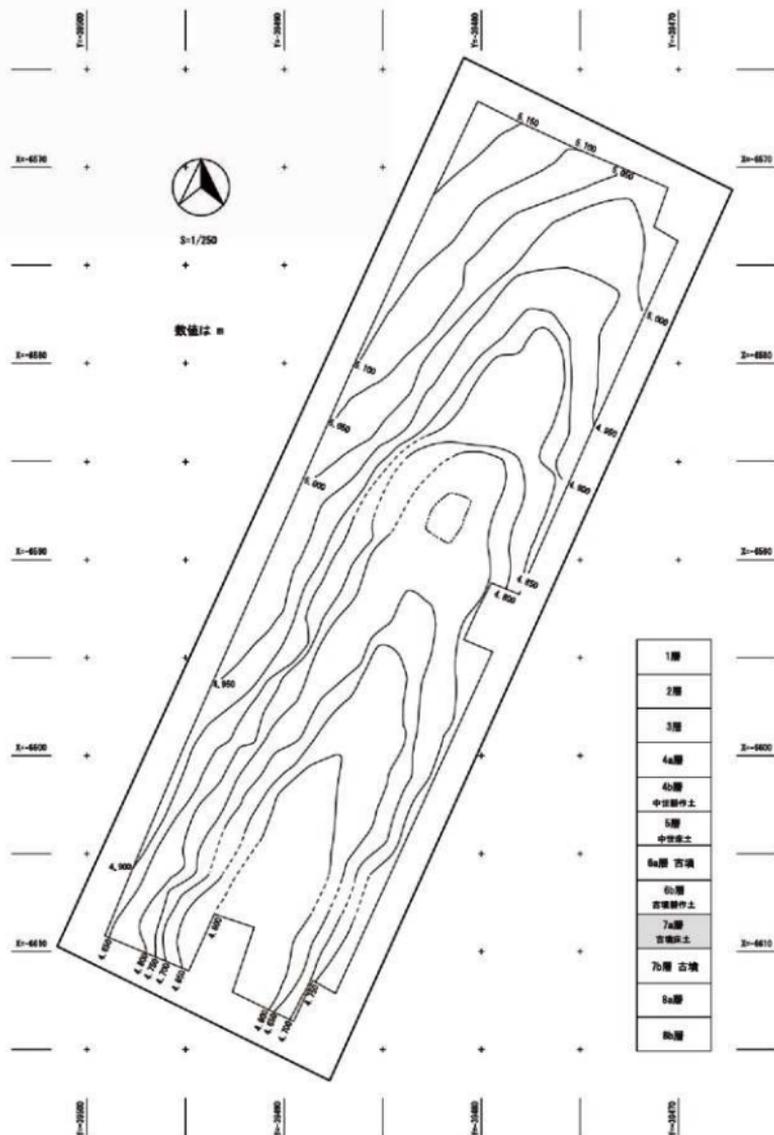
第 153 図 両迫間日波遺跡 05-I-2区 7b層直上遺構配置図



第154図 両迫間日波遺跡 05-I-2区 8層遺構配置図



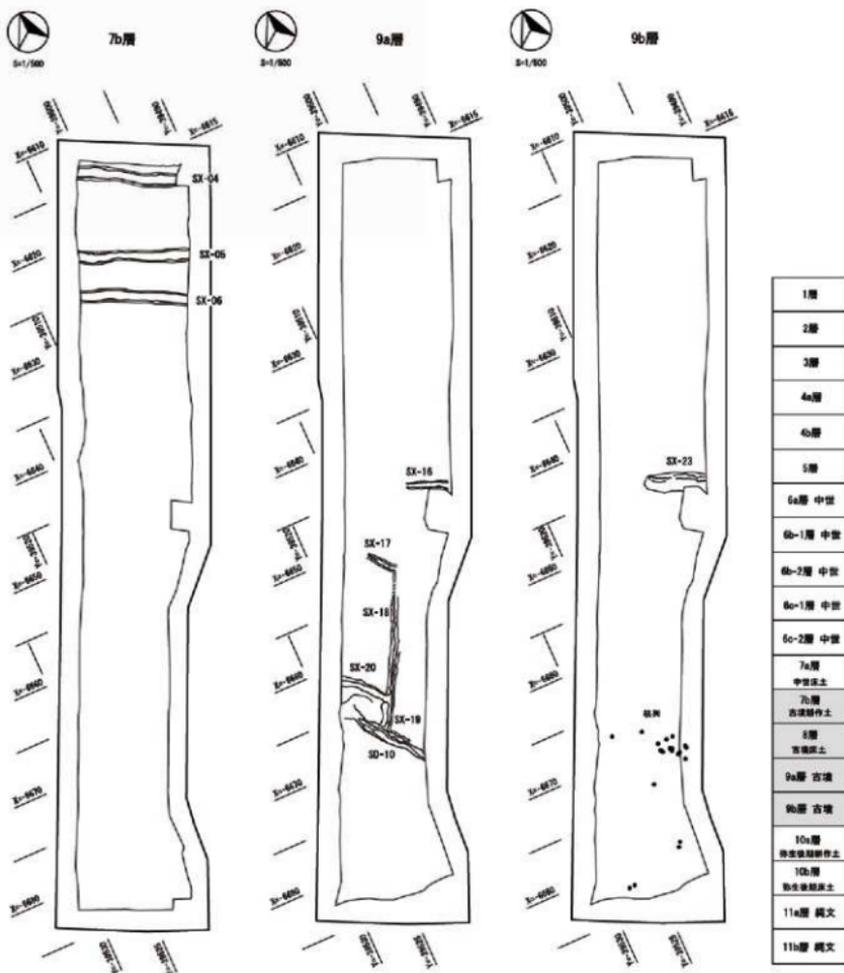
第155図 両泊間日渡遺跡 05-II-2区
7a層上面・7b層遺構配置図及び出土遺物実測図



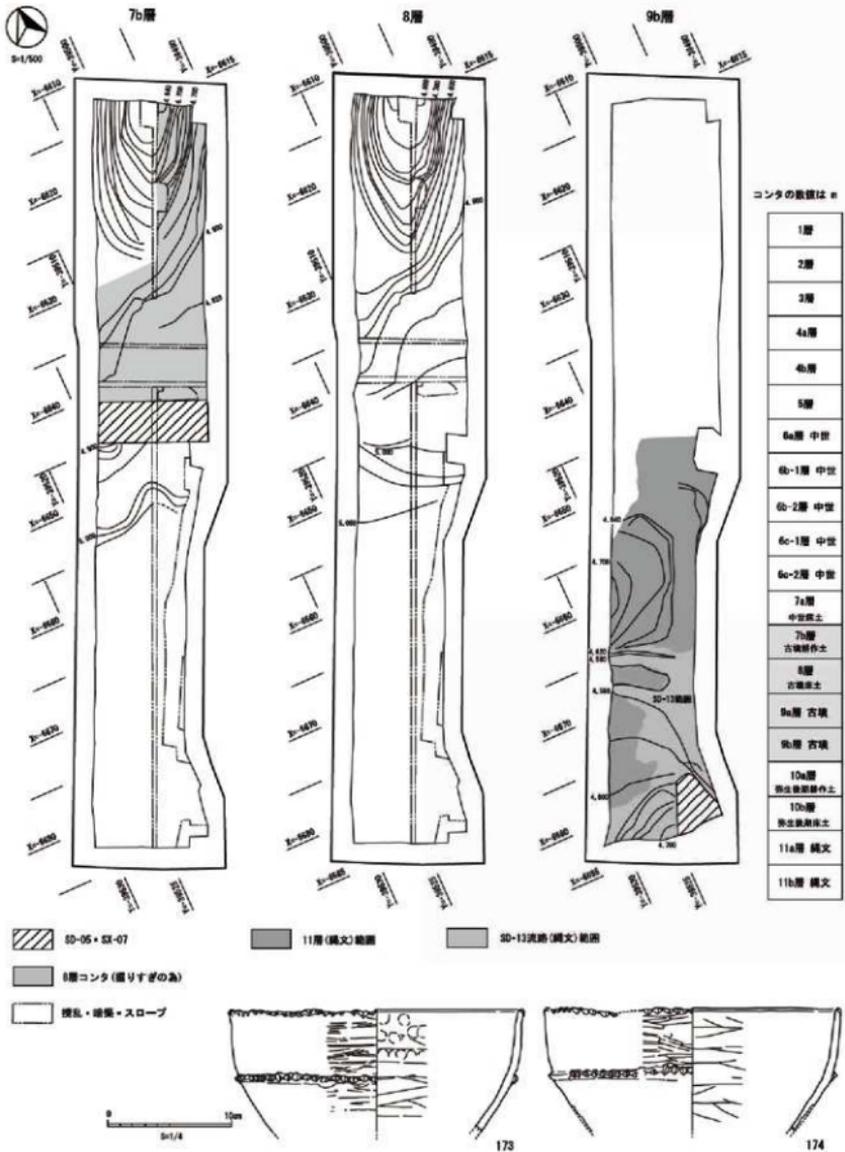
第 156 図 両迫間日波遺跡 05-II-2 区 7a 層上面コンタ図



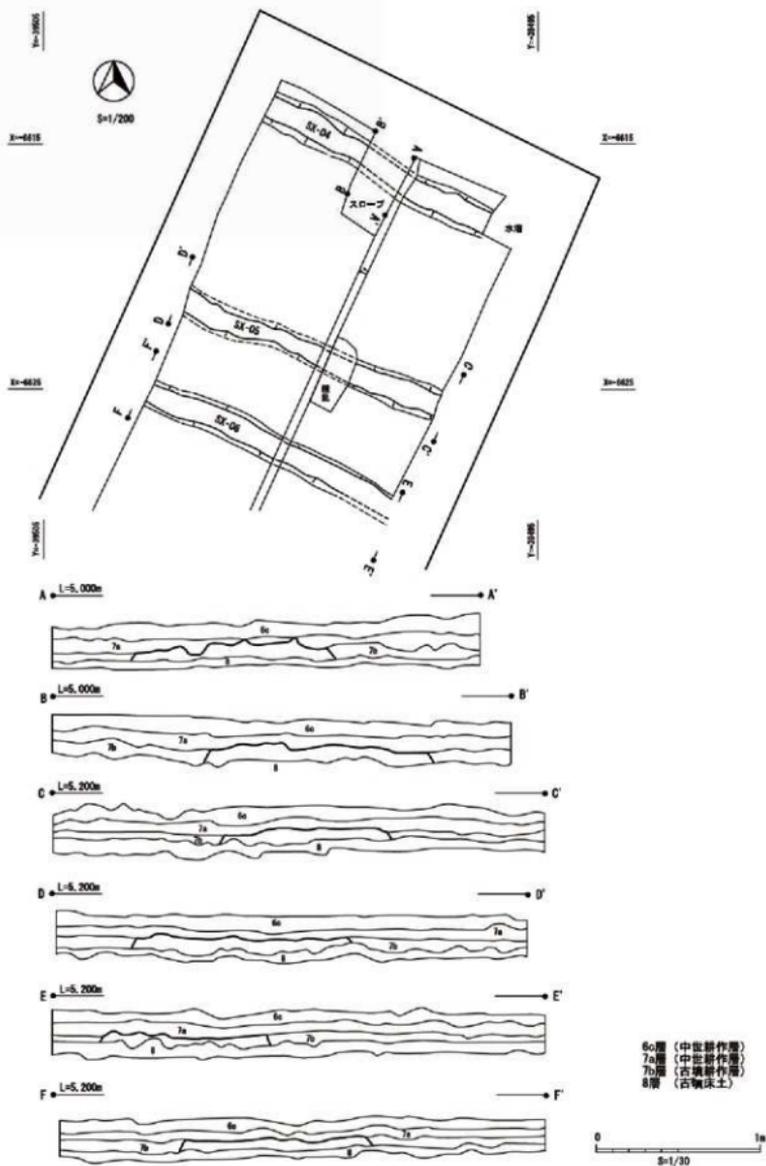
第157図 両泊間日渡遺跡 05-II-2区 SD-01・02実測図



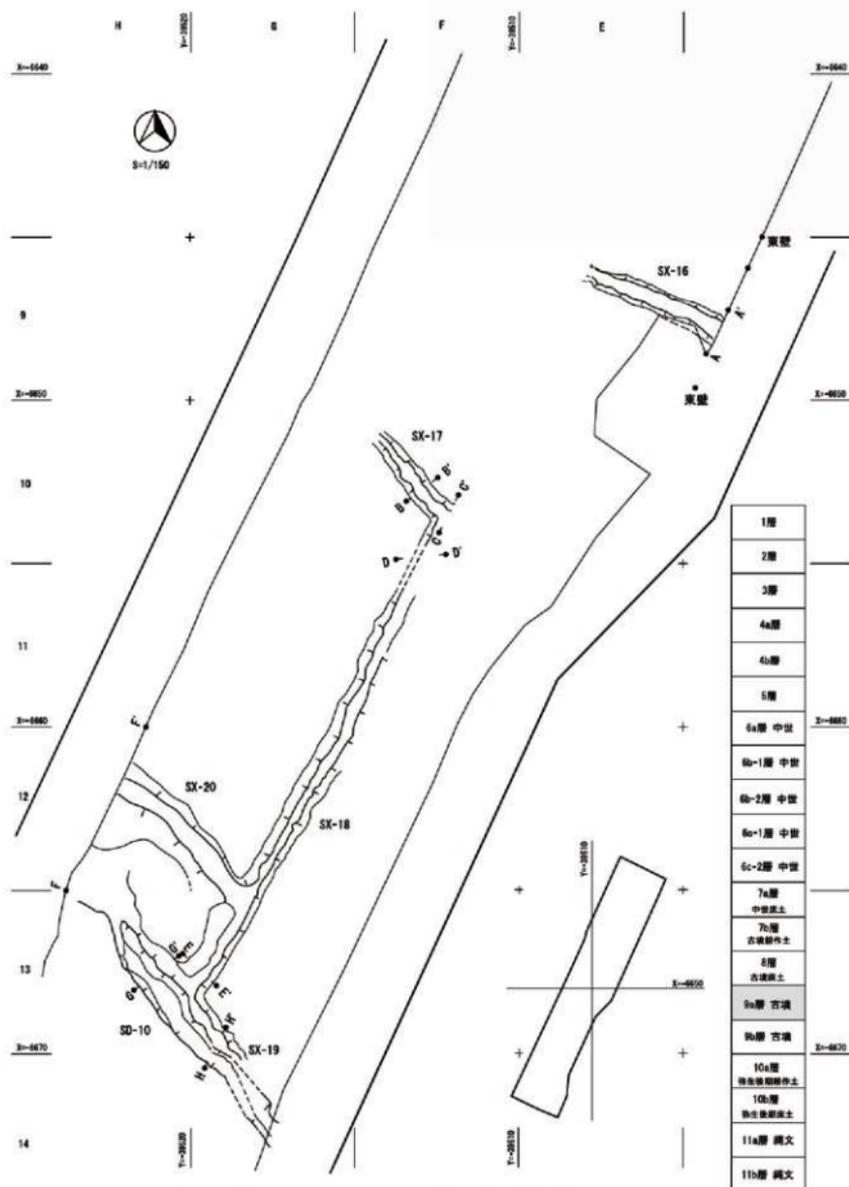
第 158 図 両迫間日波遺跡 06-I 区 7b層・9a層・9b層遺構配置図



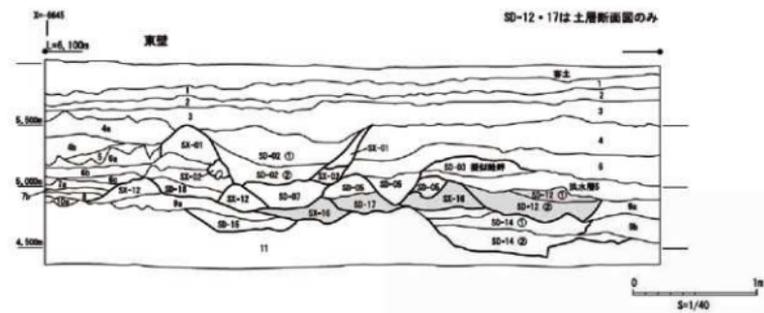
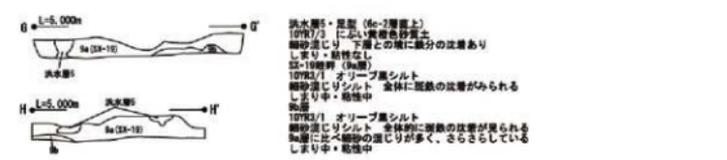
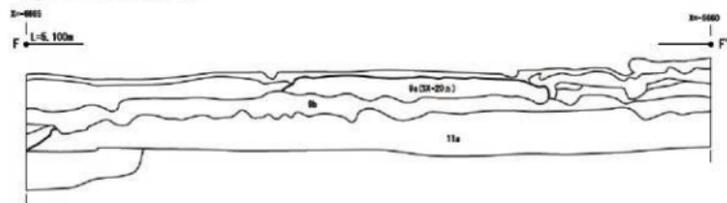
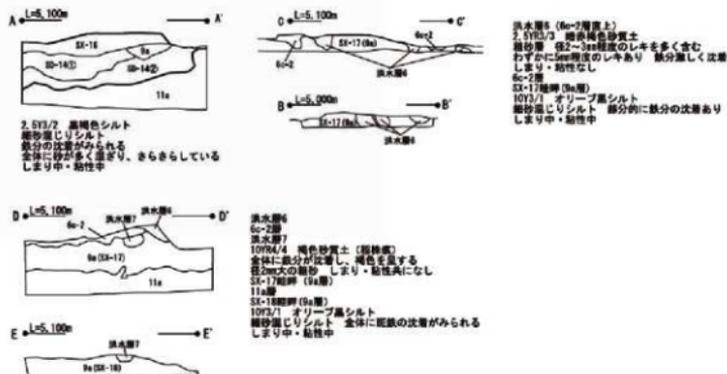
第159図 両迫間日渡遺跡 05-II-1区 出土遺物実測図
06-I区 7b層・8層・9b層コンタ図



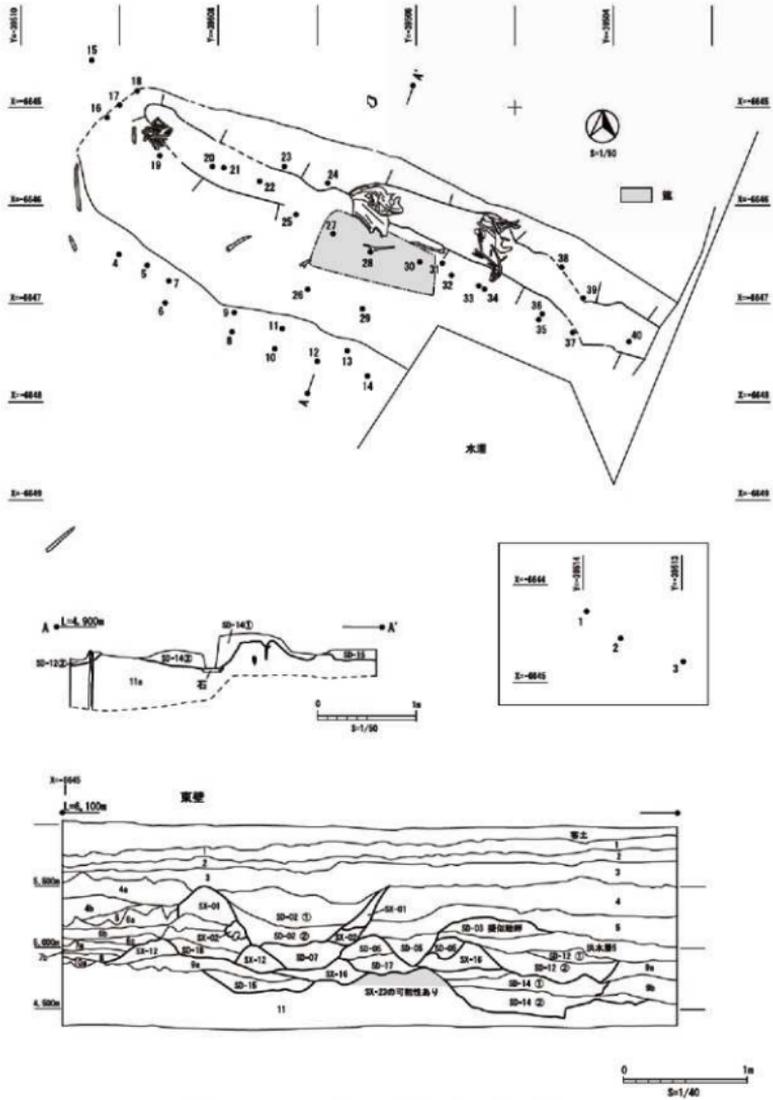
第 160 図 両迫間日波遺跡 06-I 区 7b 層 SX-04~06 実測図



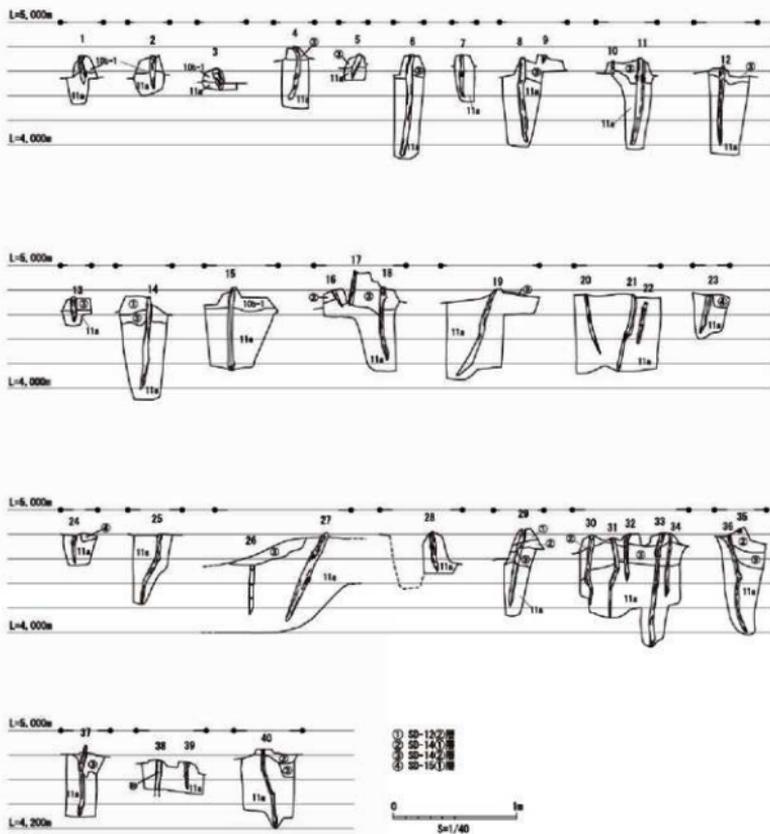
第 161 図 両迫間日波遺跡 O6-I 区 9a 層遺構配置図



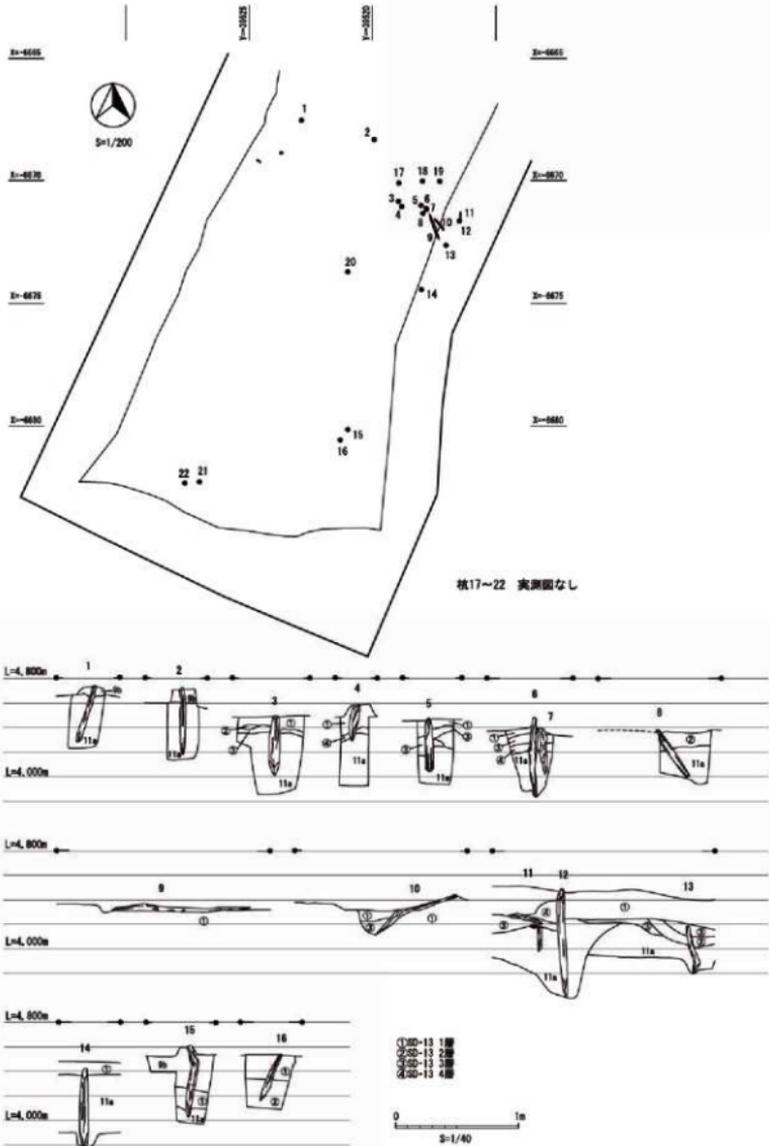
第 162 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 9a 層 SX-16~20・SD-10・12・17 実測図



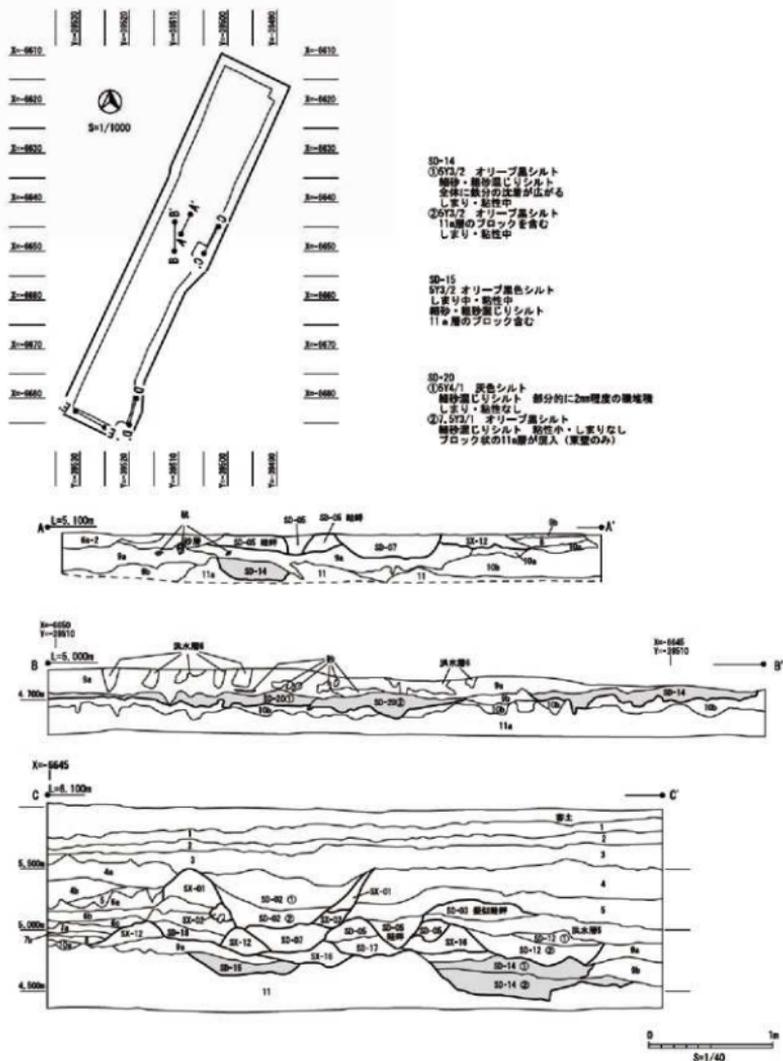
第 163 図 兩泊間日渡遺跡 06-I 区 SX-23 実測図

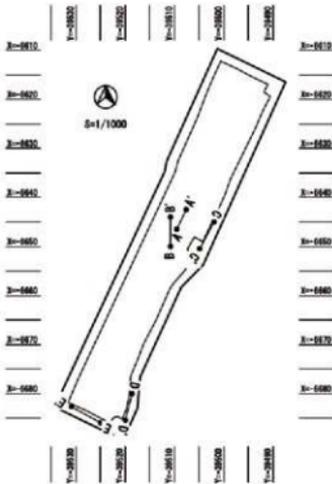


第 164 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SX-23 (杭 1~40) 実測図

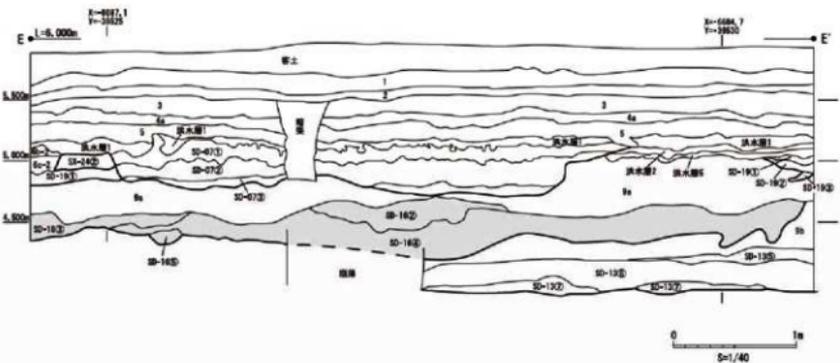
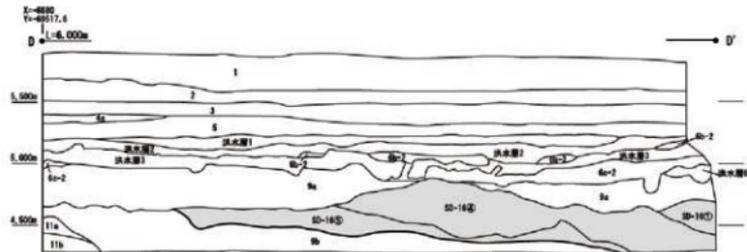


第 165 図 兩迫岡日渡遺跡 O6-I 区 9b 層検出坑列実測図

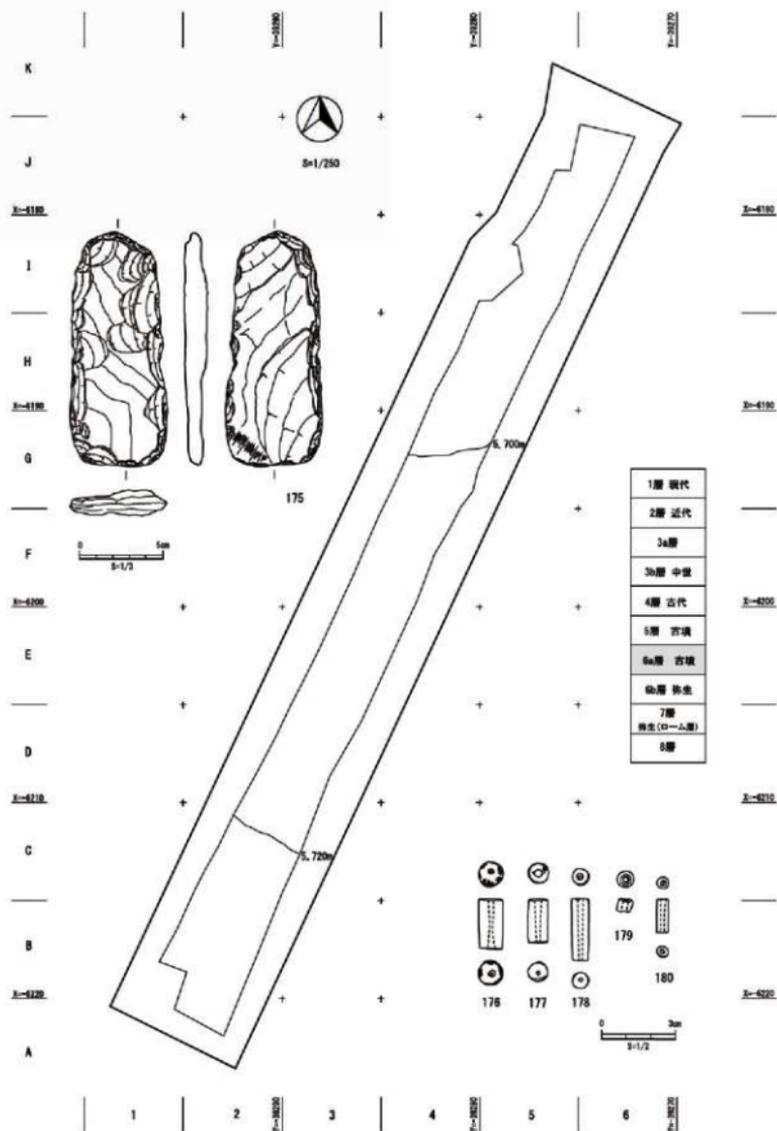




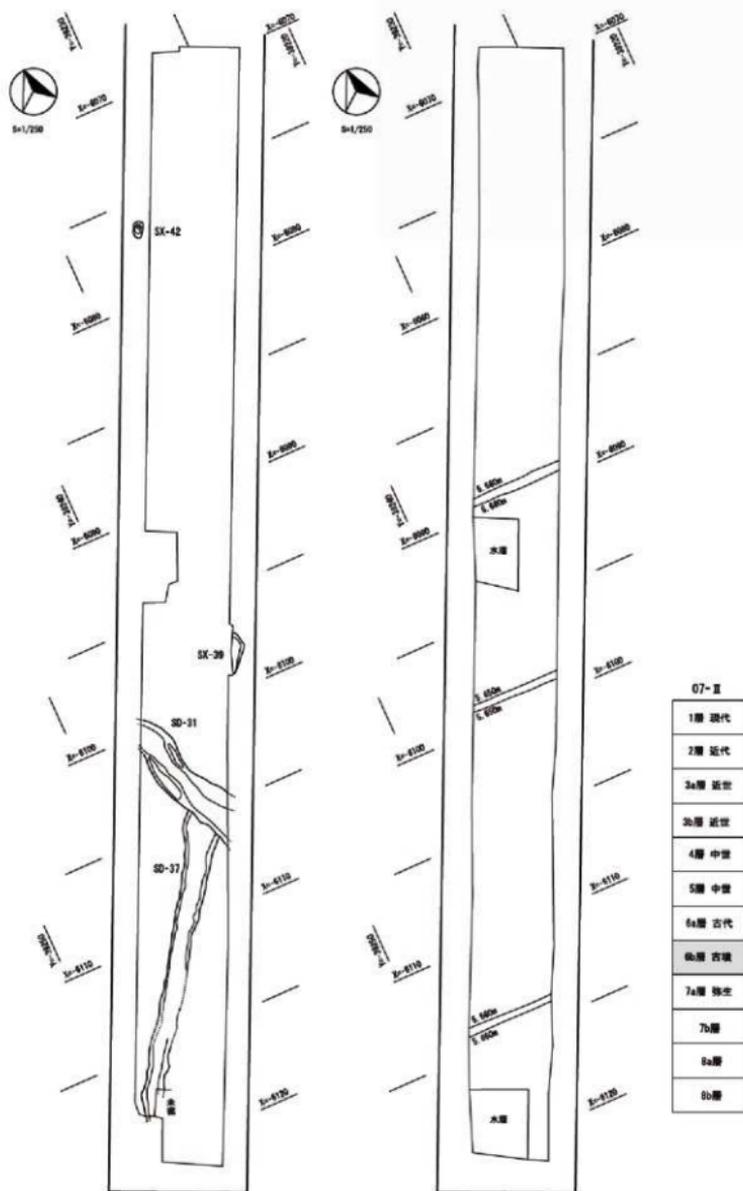
- ①SV4/1 灰色シルト
しまりなし・粘性なし 細砂混じりシルト
部分約2cm程度の薄層
- ②1. SV3/1 オリーブ褐色シルト
しまりなし・粘性少 細砂混じりシルト
ブロック状の11ヶ層が混入
- ③SV6/2 灰オリーブ色砂質土
しまりなし・粘性なし
身の細かな層中に薄砂・土片を含む
- ④1. SV3/1 オリーブ褐色シルト
しまり少・粘性少 細砂混じりシルト
土片が混入
- ⑤SV6/3 オリーブ黄色砂質土
しまりなし・粘性なし 細砂層



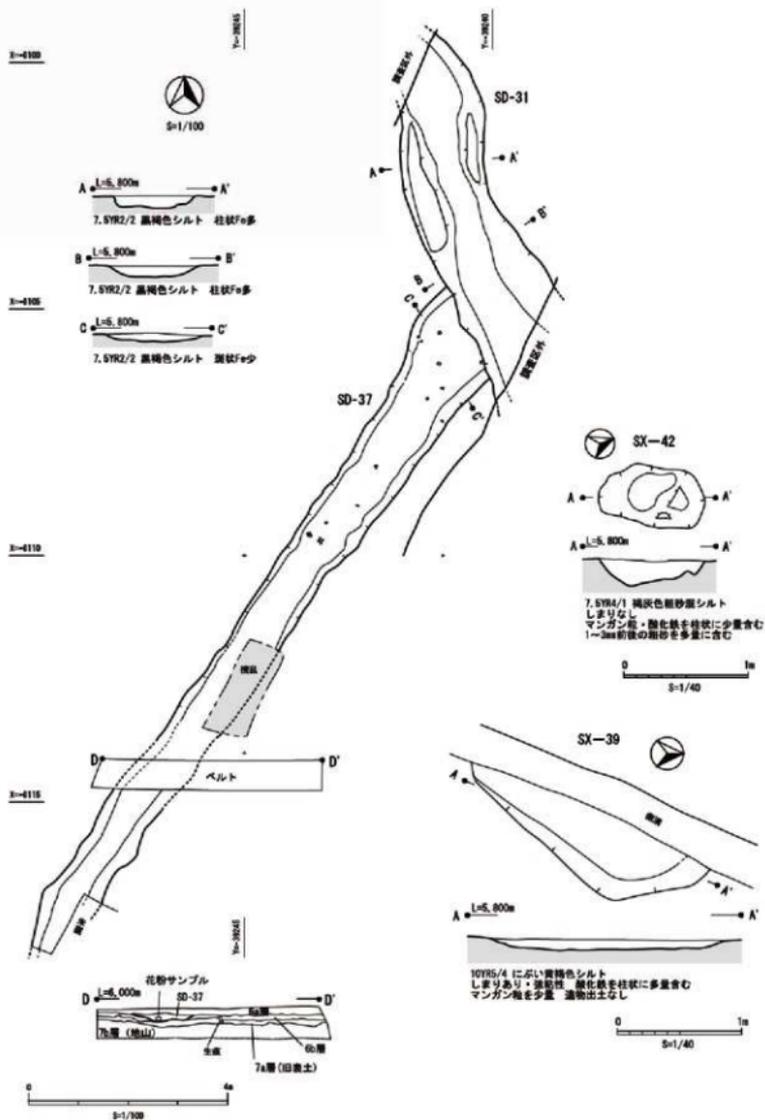
第 167 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SD-16 実測図



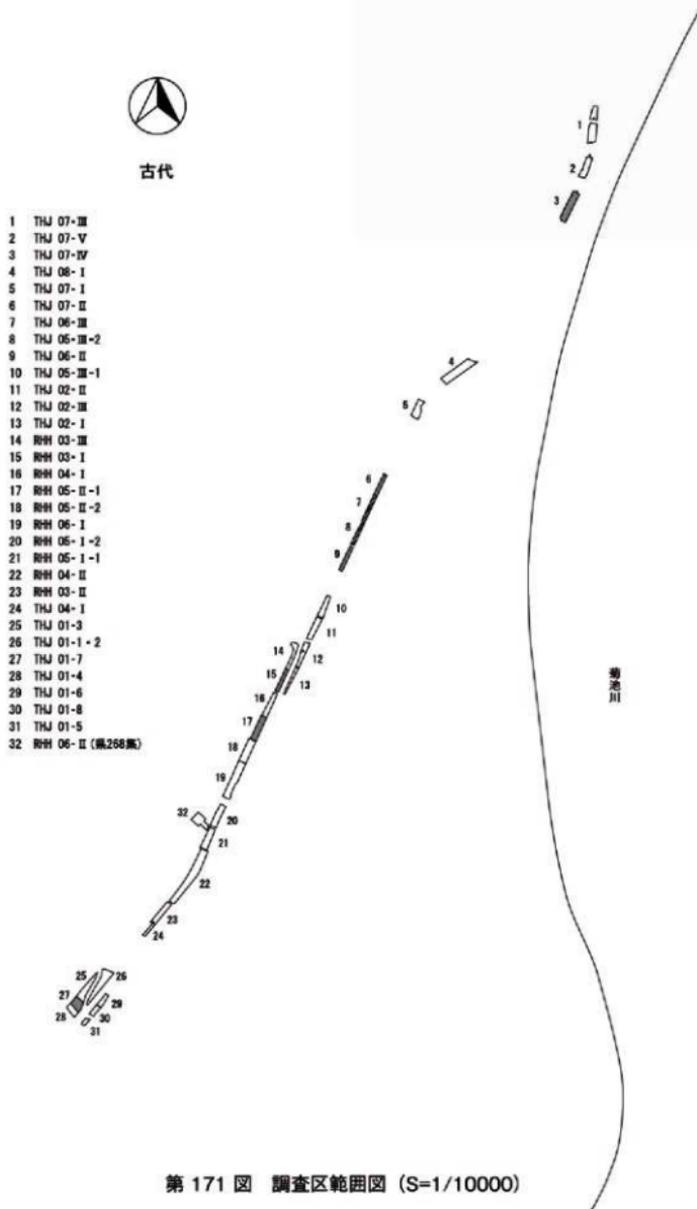
第 168 図 玉名平野条里跡 06-II 区 6a 層コンタ図及び出土遺物実測図



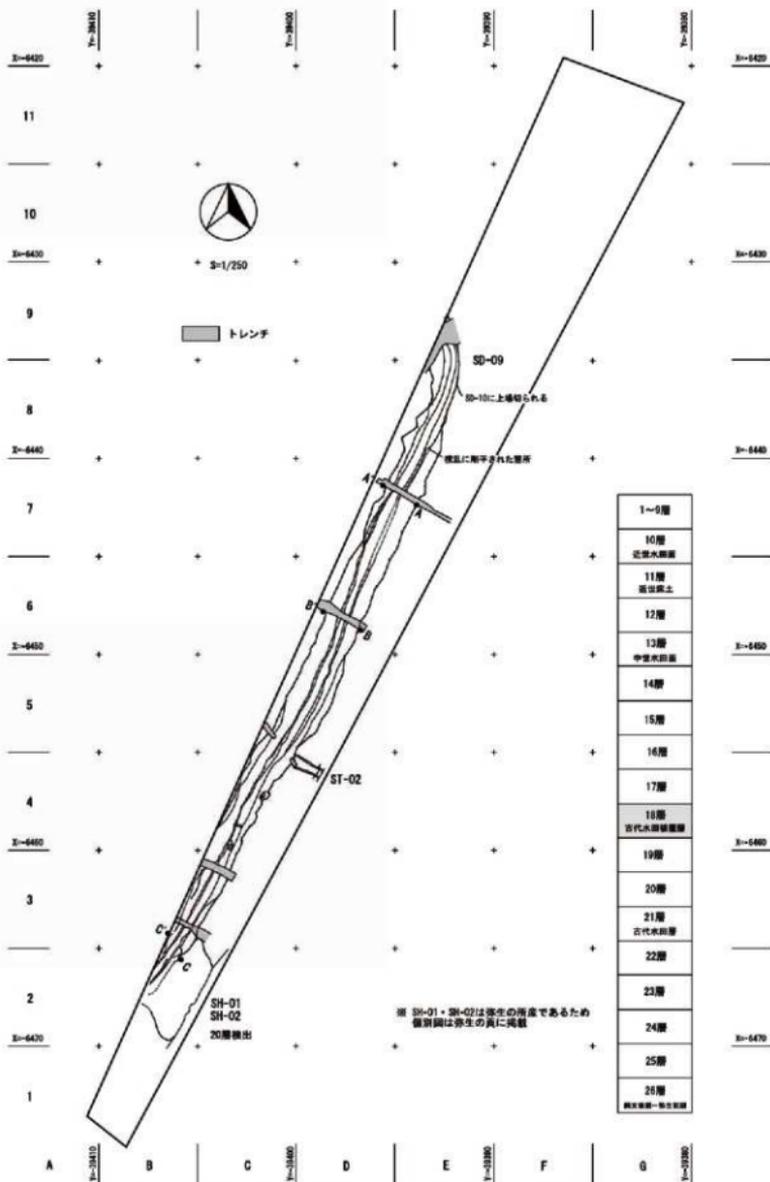
第169図 玉名平野条里跡 07-II (06-III) 区 6b 層遺構配置図及びコンタ図



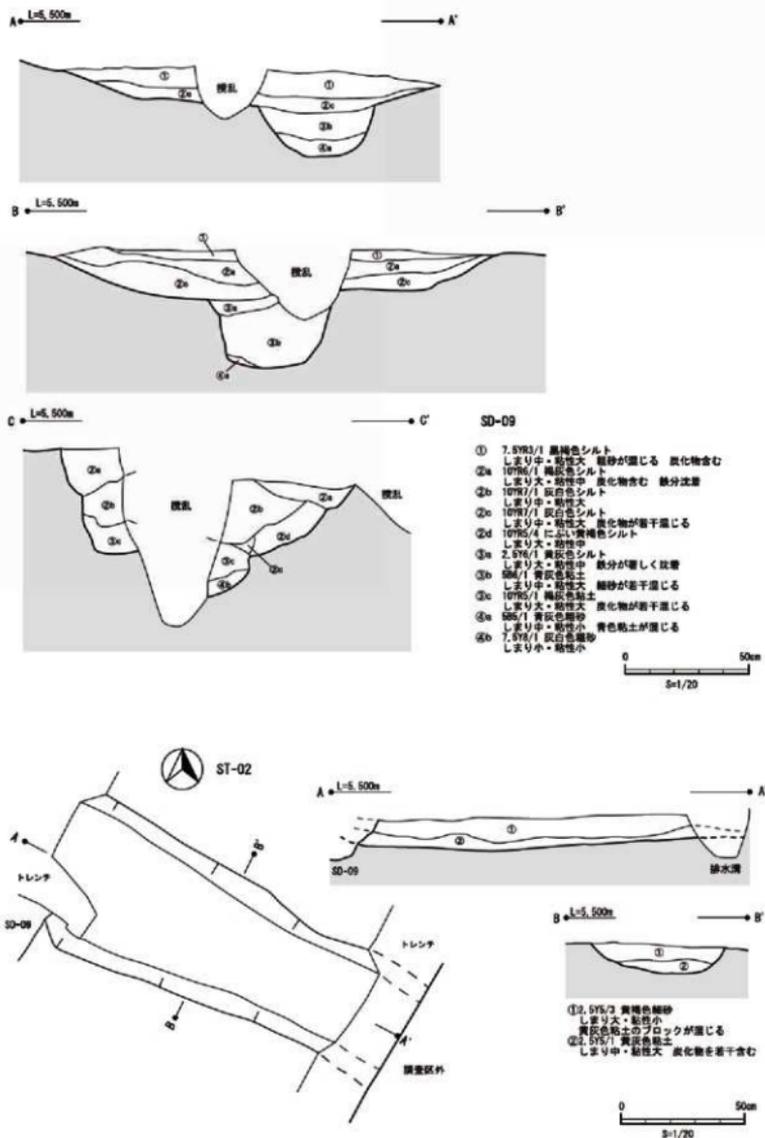
第 170 回 王立平野盗甲跡 07. II (06. III) 区 SD-31・37・SX-39・42 寄附図



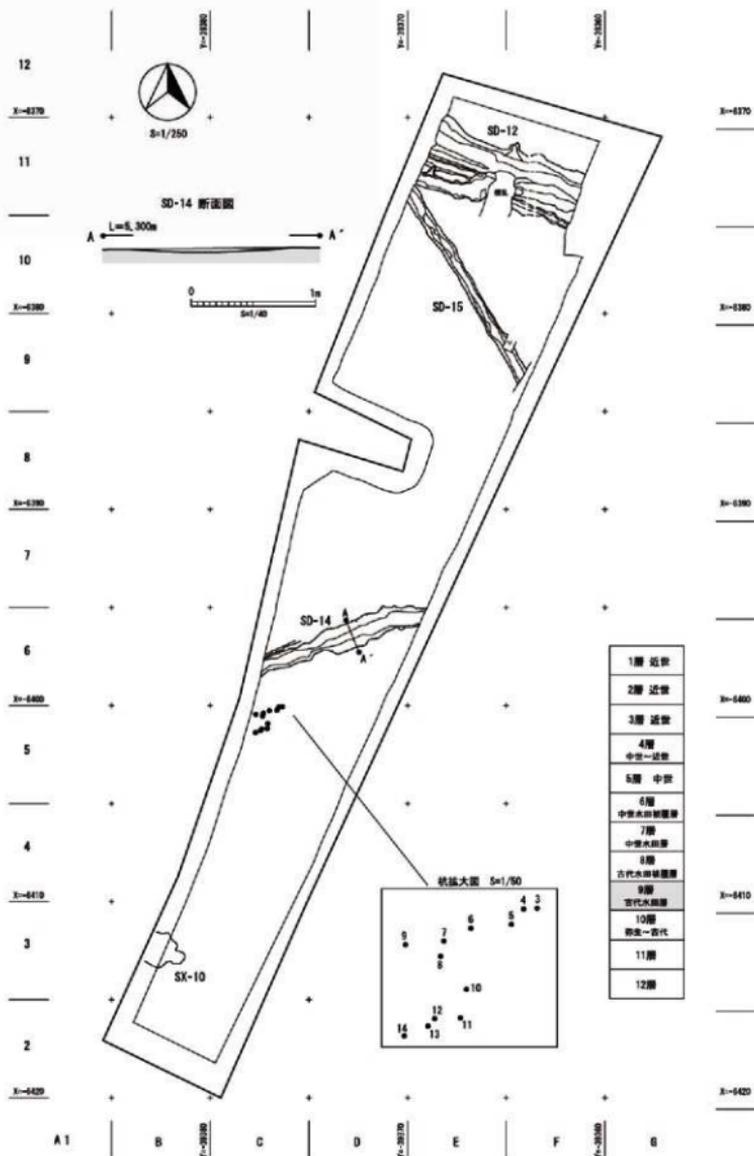
第 171 図 調査区範囲図 (S=1/10000)



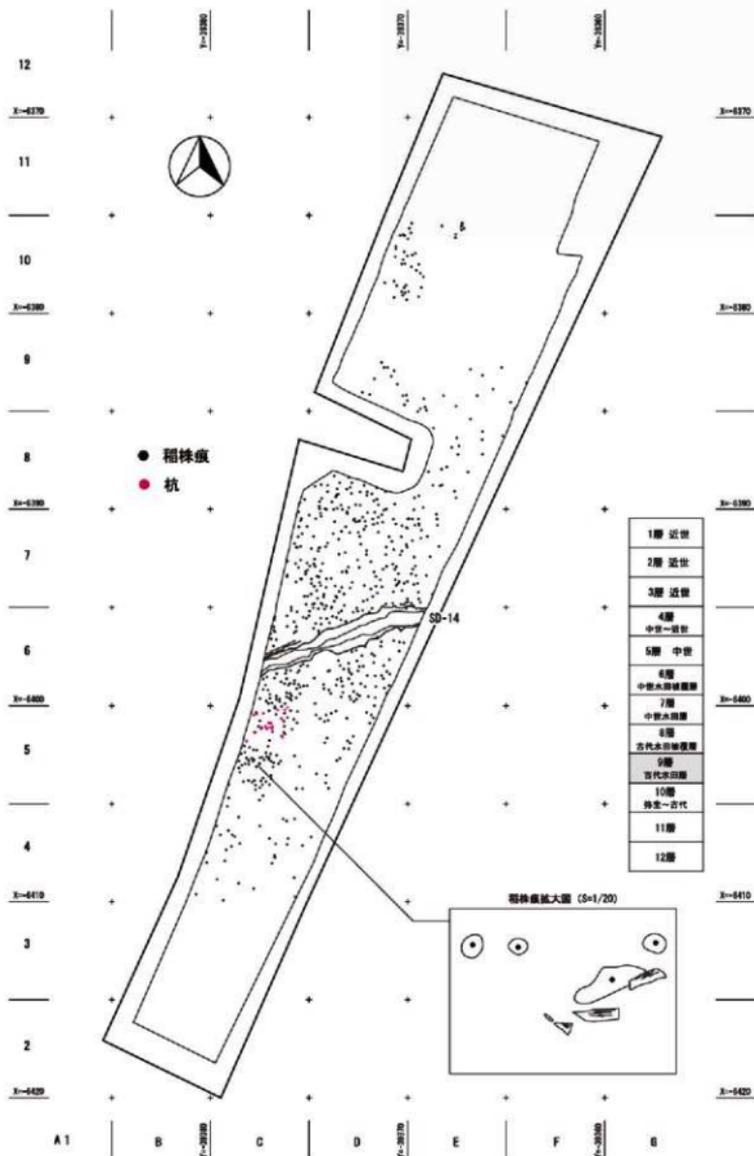
第 172 図 玉名平野築里跡 02-I 区 18 層遺構配置図



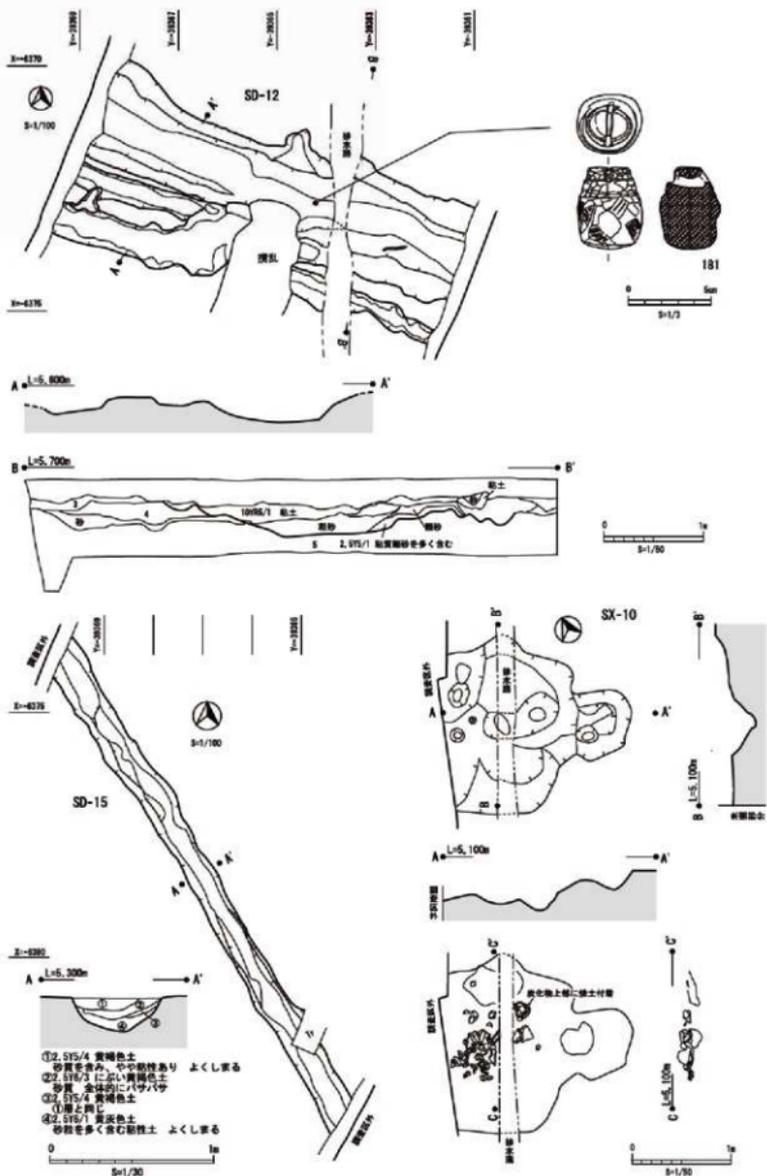
第173図 玉名平野条里跡 02-I区 SD-09・ST-02 実測図



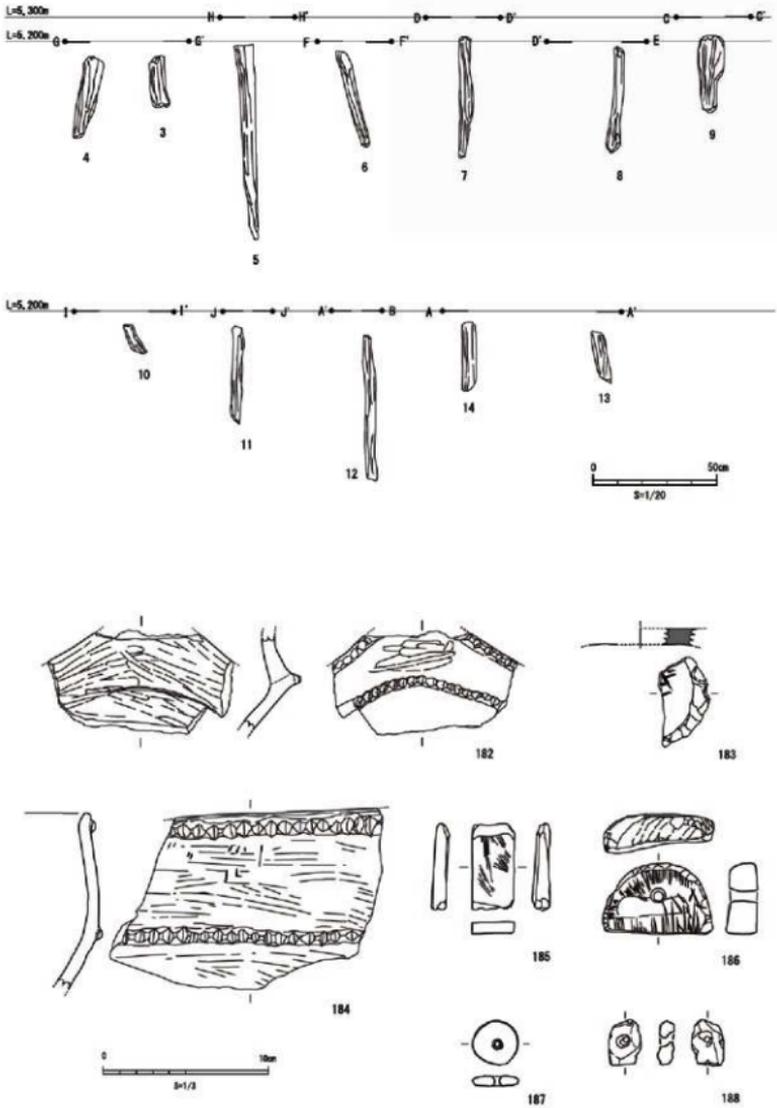
第 174 図 玉名平野桑里跡 02-III区 9層遺構配置図



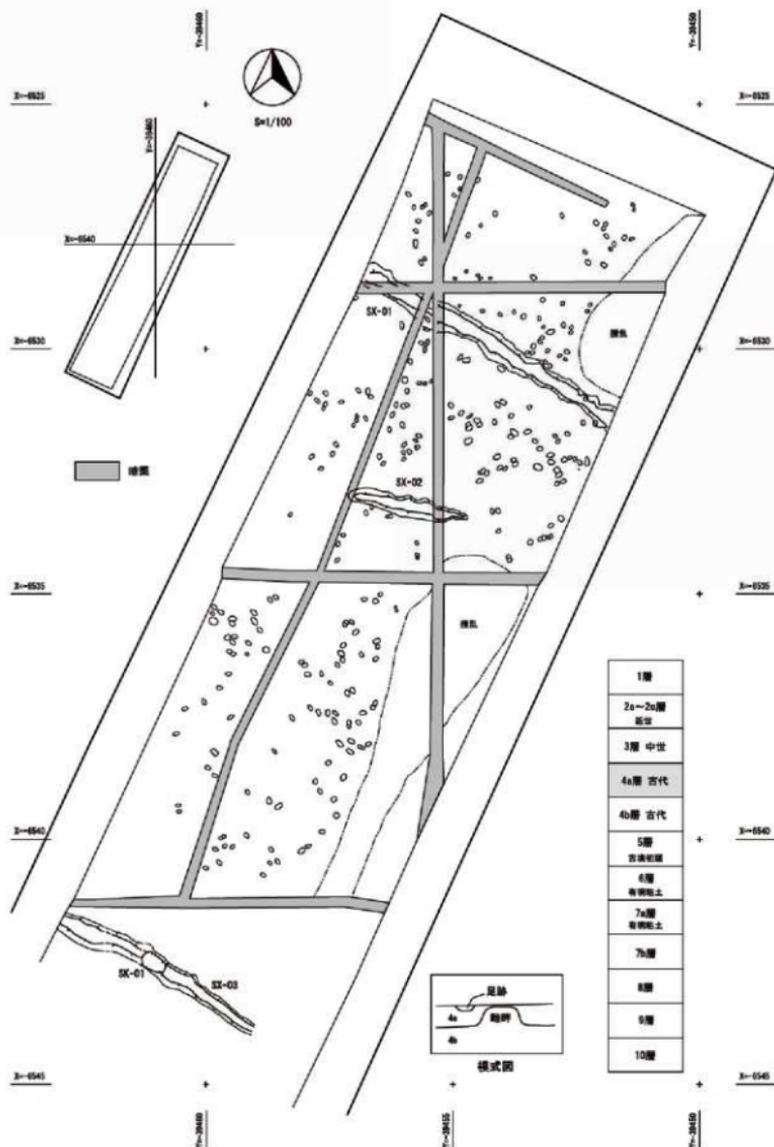
第 175 図 玉名平野条里跡 O2-III区 9層水田面稲株痕実測図



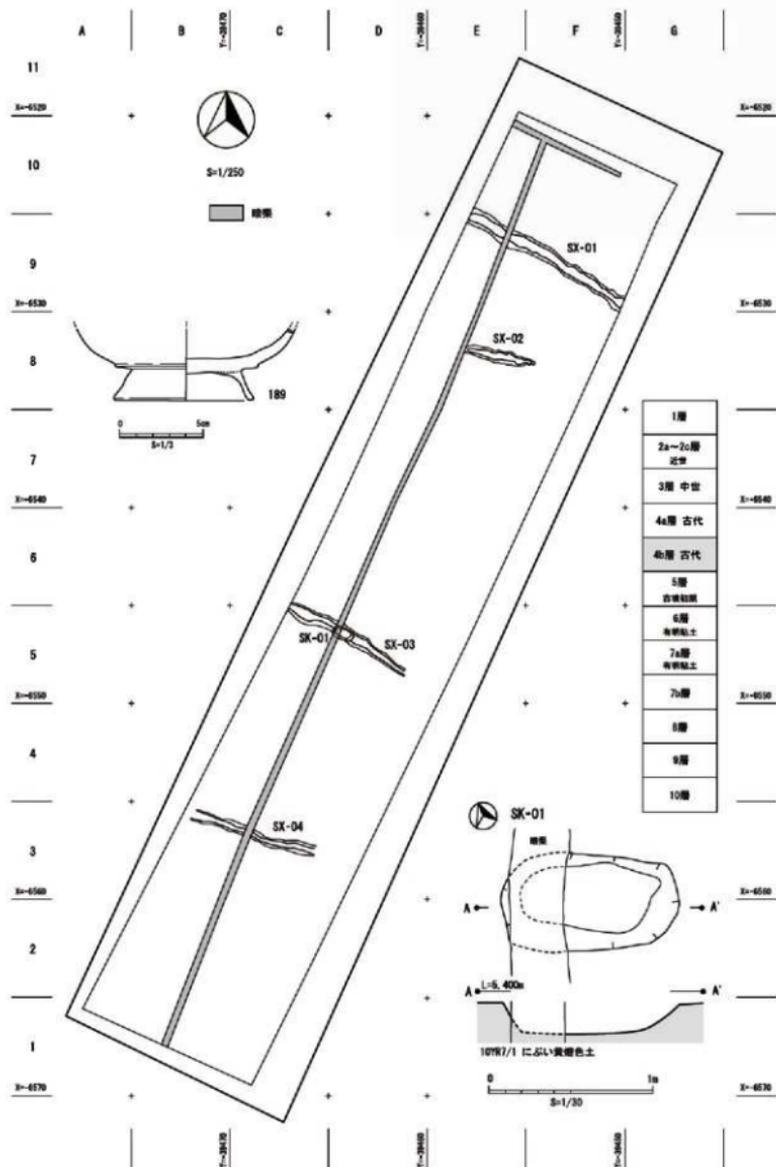
第 176 図 玉名平野条里跡 O2-Ⅲ区 SD-12・15・SX-10 実測図及び出土遺物実測図



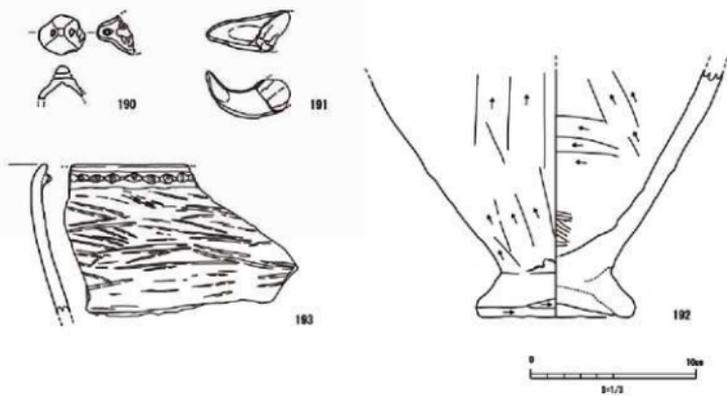
第 177 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 杭 3~14 実測図及び出土遺物実測図



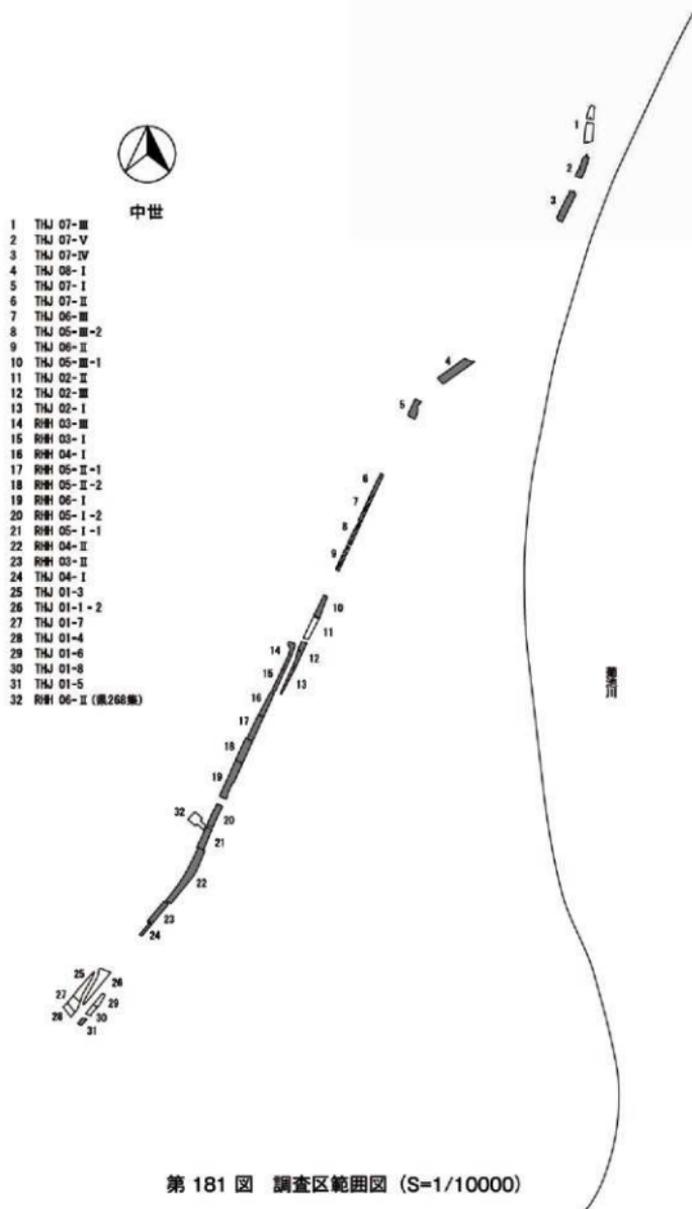
第 178 図 両迫間日渡遺跡 05-II-1 区 4a 層遺構配置図・足跡配置図



第 179 図 両迫間日渡遺跡 05-II-1 区
4b 層遺構配置図及び出土遺物実測図 SK-01 実測図

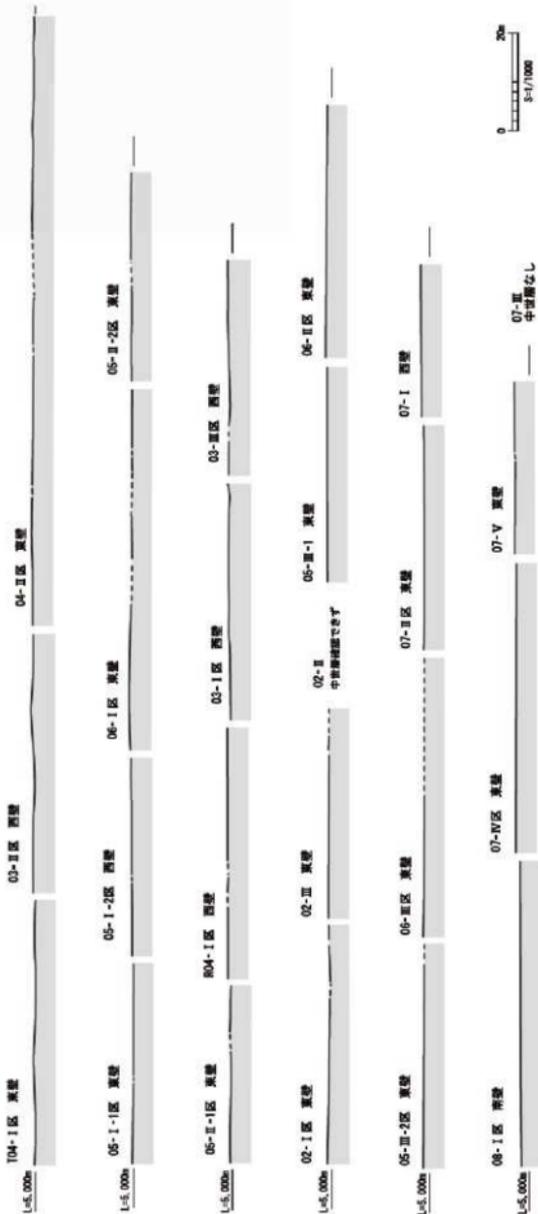


第 180 図 兩泊間日渡遺跡 05-II-1 区 出土遺物実測図

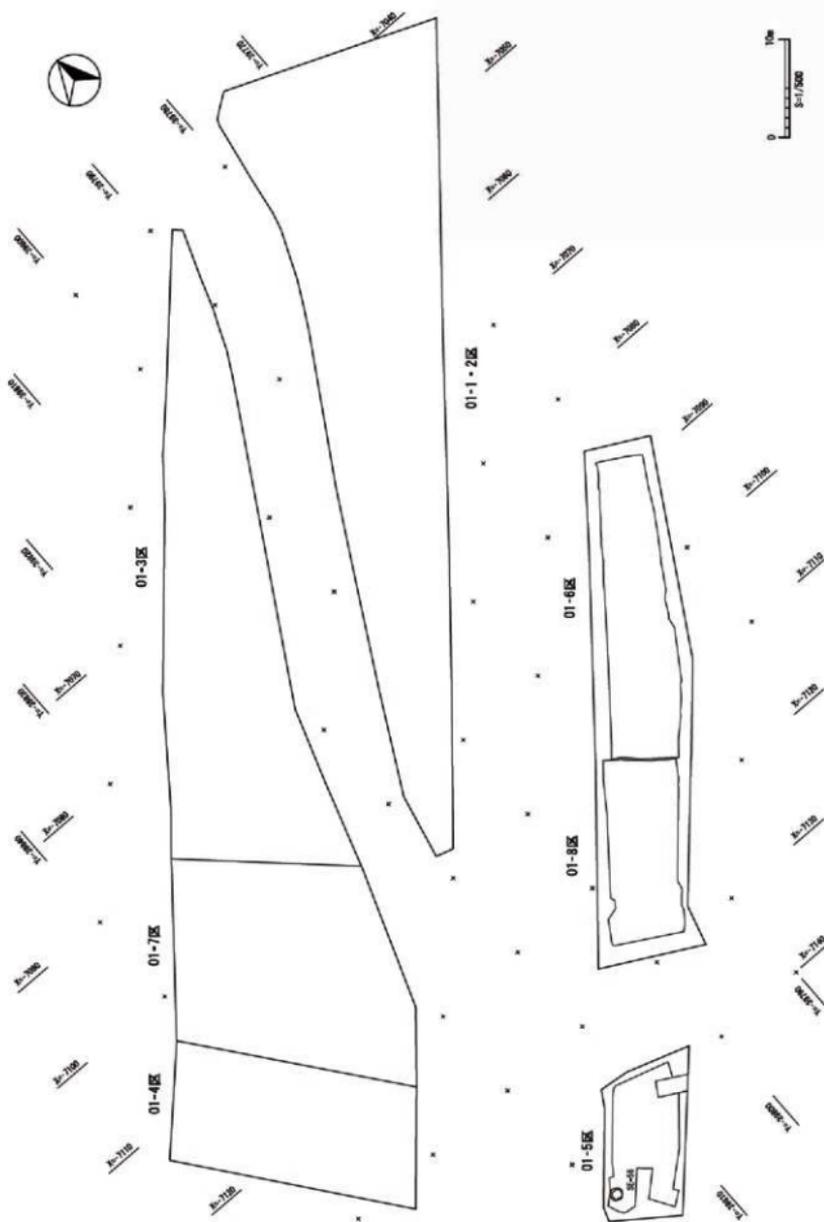


第 181 図 調査区範囲図 (S=1/10000)

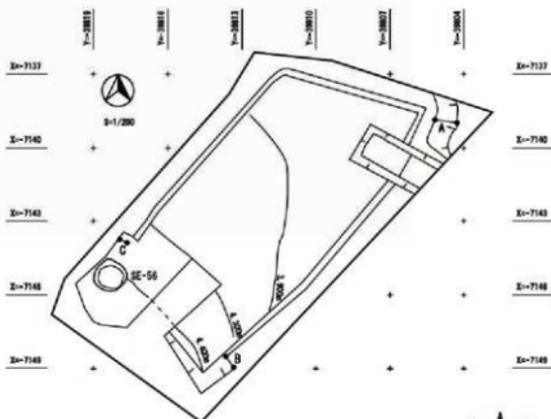
中世層の最上面の土層レベルを、調査区の南から北の順に並べている



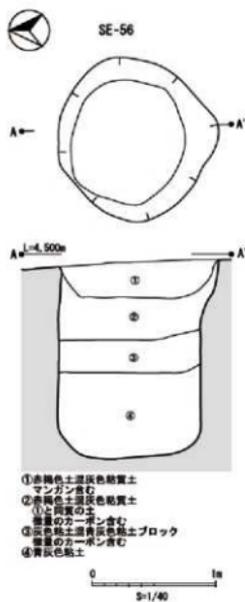
第 182 図 玉名平野条里跡・高迫間日速遺跡 中世層



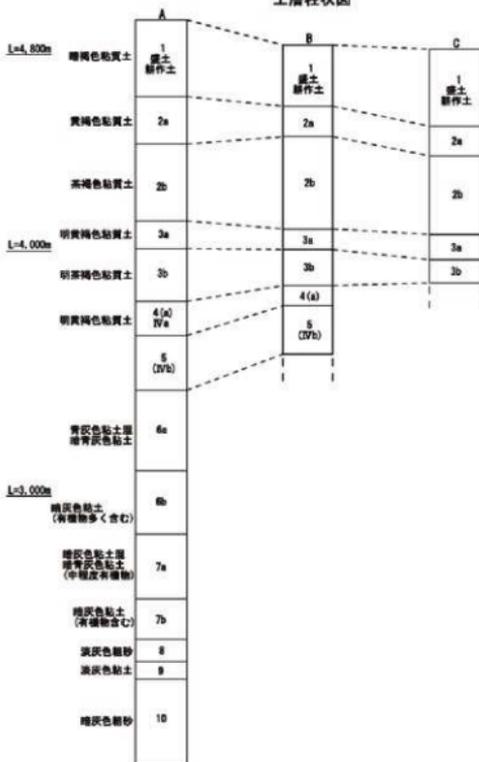
第183図 五名平野桑里跡01-1～8区 遺構配置図(中世)



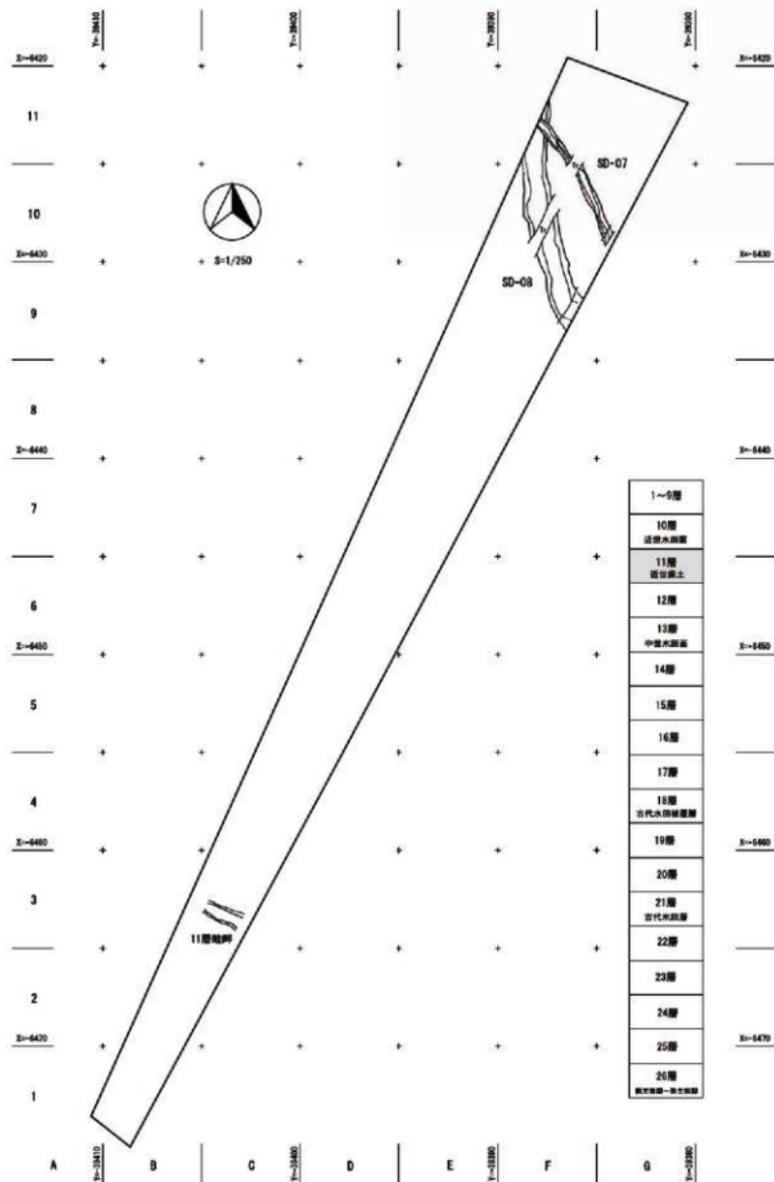
2a層上面遺構配置図



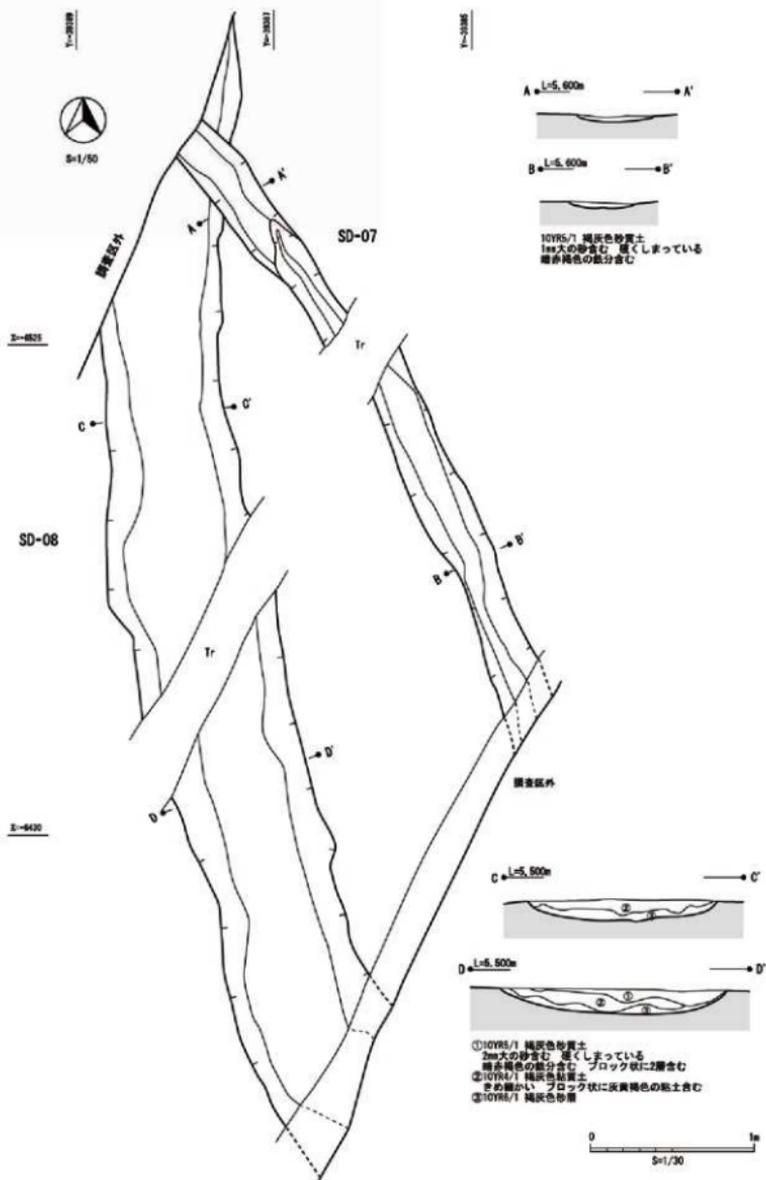
土層柱状図



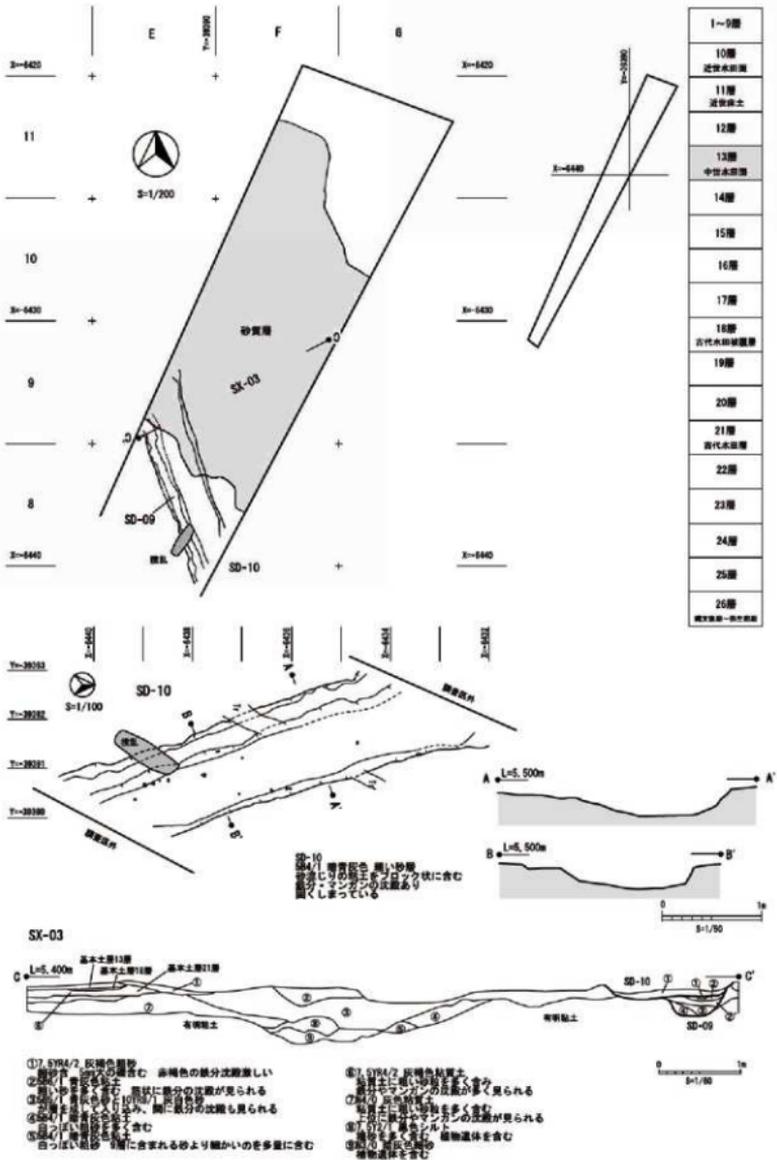
第 184 図 玉名平野条里跡 01-5 区 2a 層上面遺構配置図・土層柱状図・SE-56 実測図



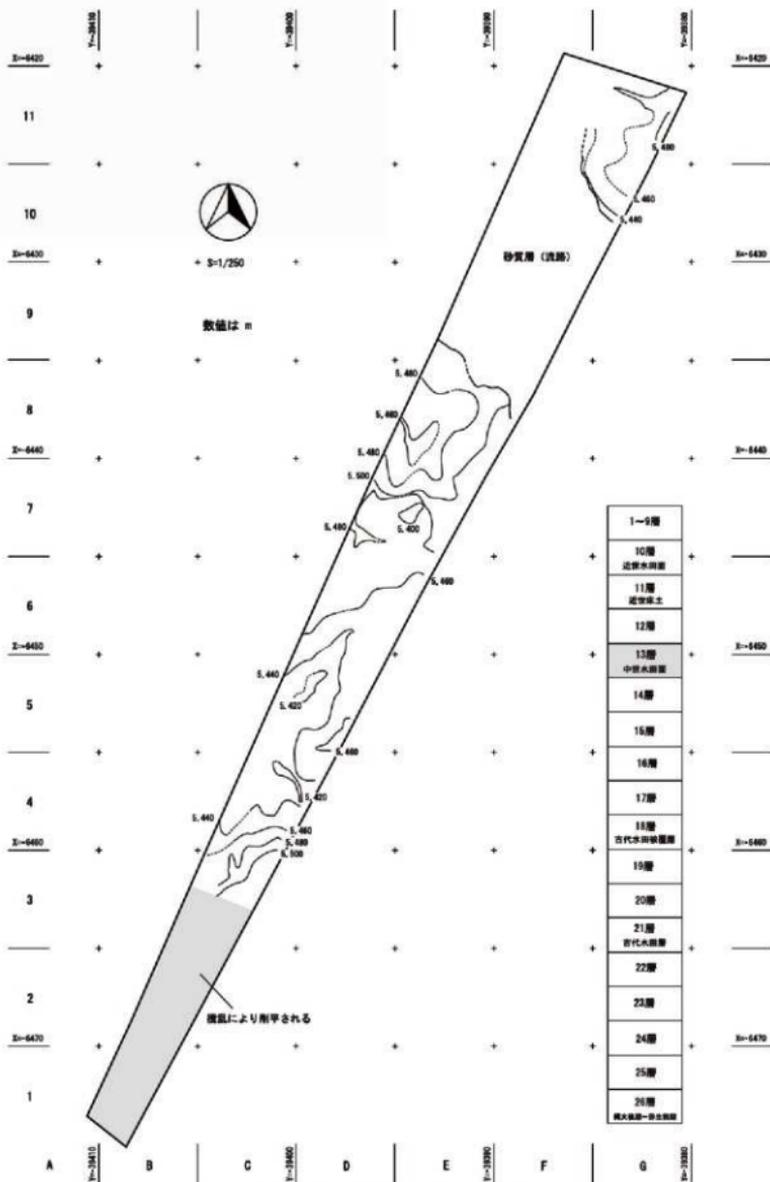
第 185 図 玉名平野条里跡 02-I 区 11 層遺構配置図



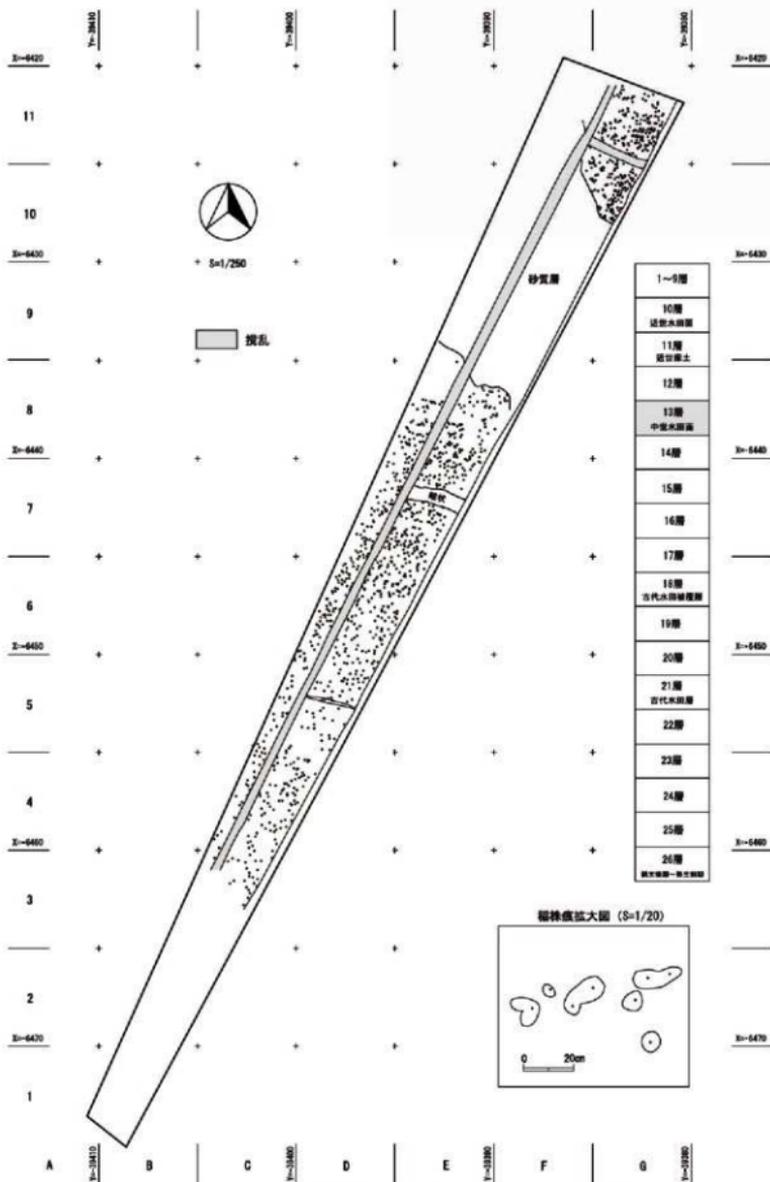
第 186 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SD-07・08 実測図



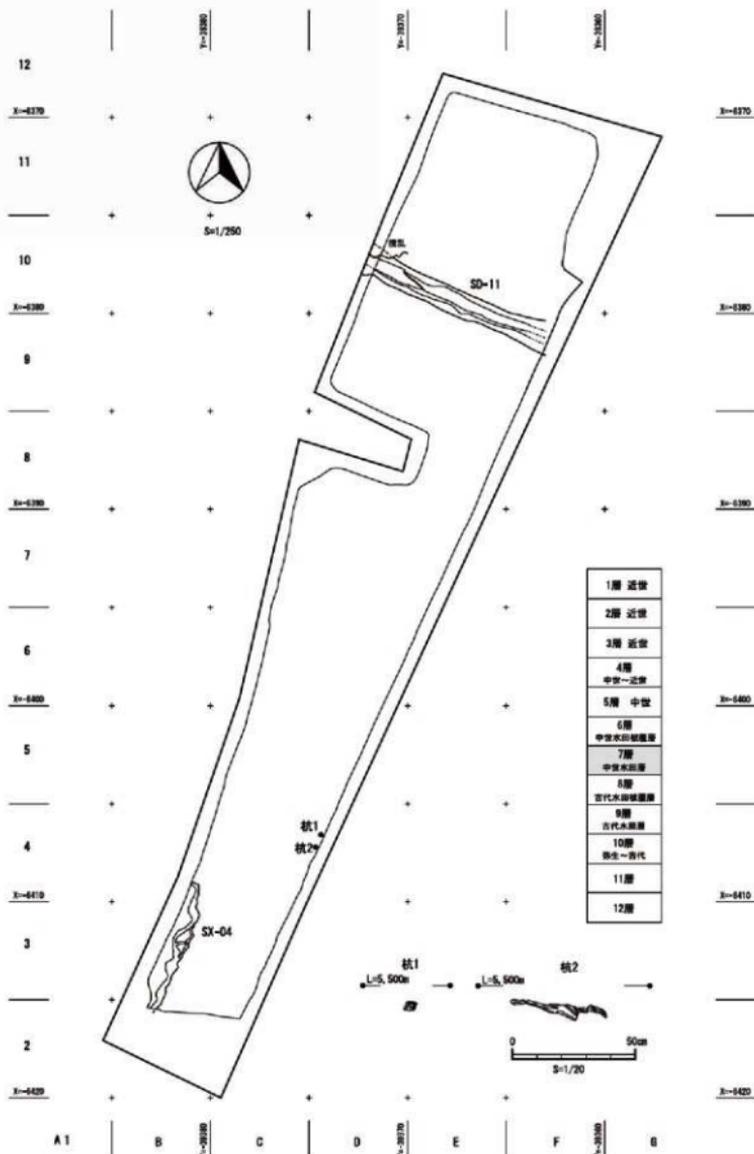
第 187 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層遺構配置図及び SD-10・SX-03 実測図



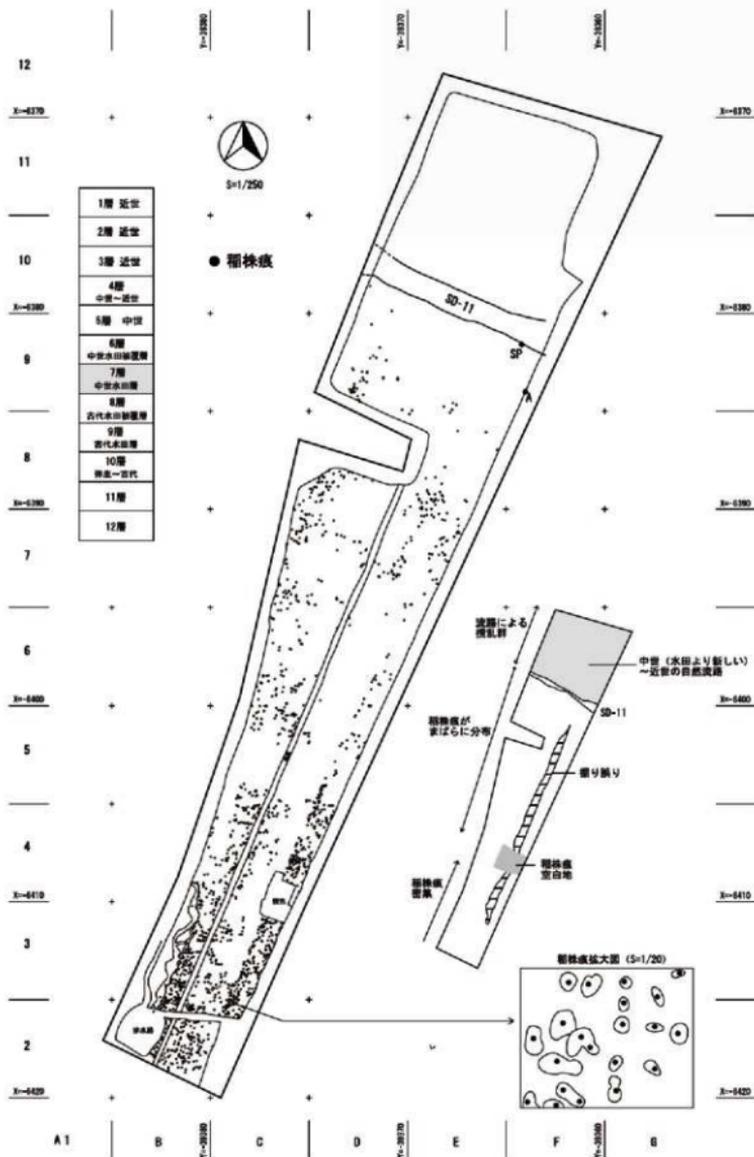
第188図 玉名平野条里跡 02-I区 13層コンタ図



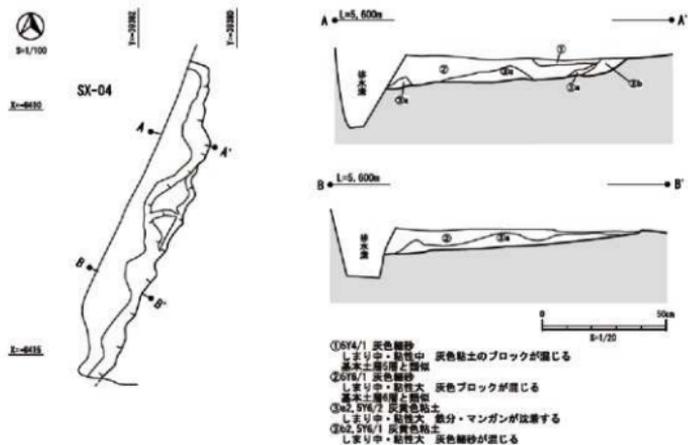
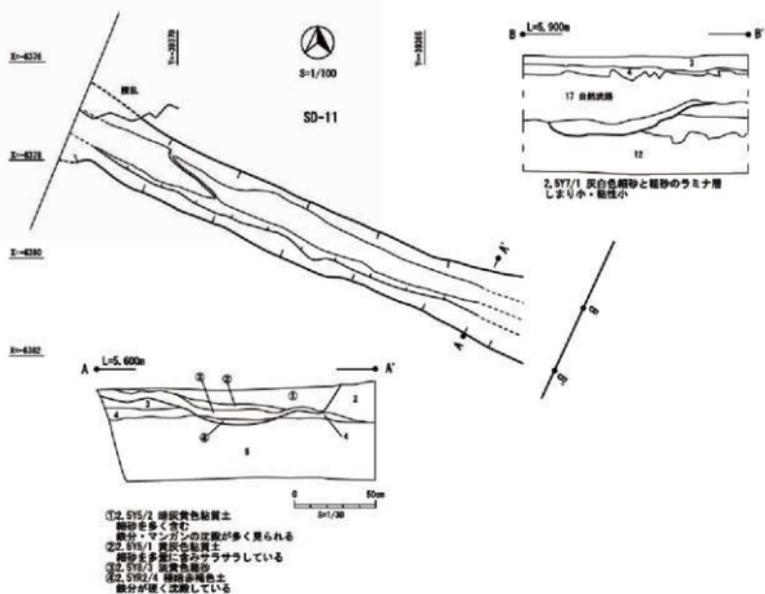
第 189 図 五名平野条里跡 02-I 区 13 層稲株痕実測図



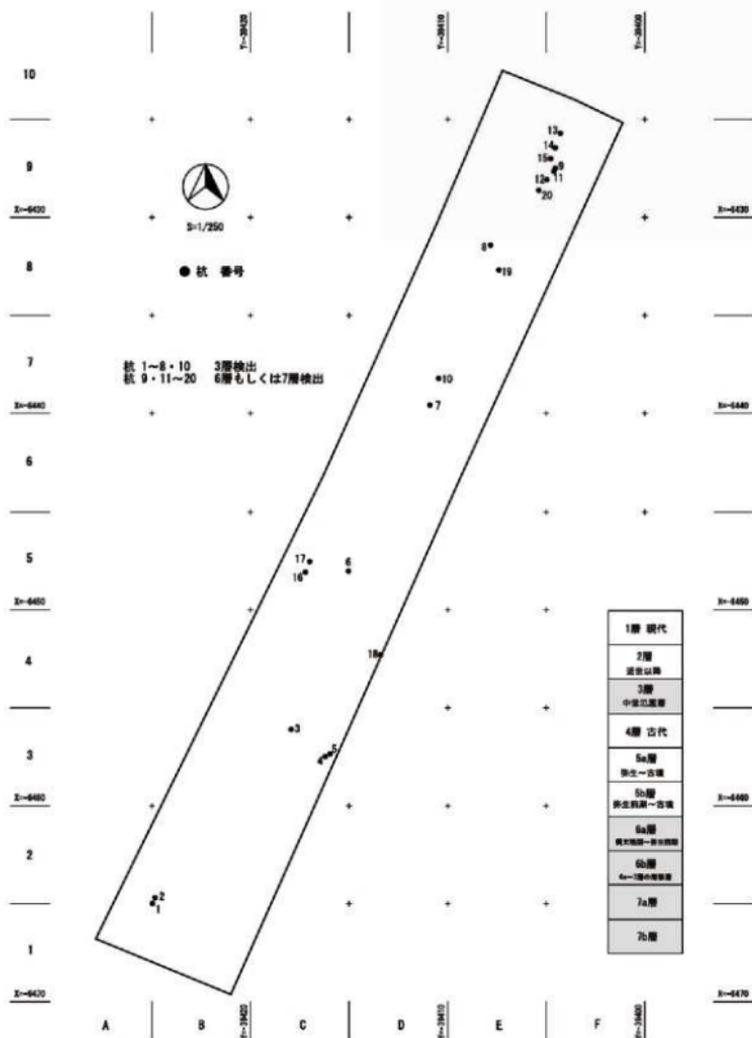
第190図 玉名平野条里跡 O2-III区 7層遺構配置図



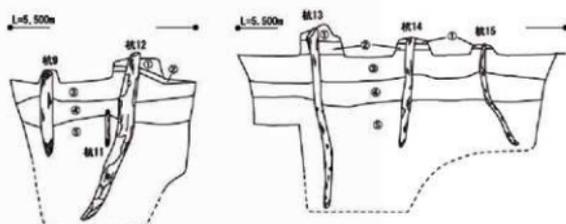
第 191 図 玉名平野条里跡 O2-Ⅲ区 7層水田面実測図



第 192 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 SD-11・SX-04 実測図

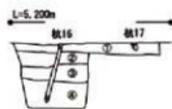


第 193 図 両迫岡日渡遺跡 O3-I 区 杭検出配置図



- 坑9・11・12
 ①J.573/1 オリーブ黒色シルト
 しまり小 所々に腐砂あり 腐分混じる
 ②J.575/2 灰オリーブ色粘土
 しまり中 シルト混じる
 ③564/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 腐砂が混じる
 ④1062/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ⑤1063/1 暗緑灰色粘土
 しまり中・粘性大 ややボロボロで崩れやすい
 腐物の繊維を多く含む

- 坑13・14・15
 ①J.575/1 オリーブ黒色シルト
 しまり小 所々に腐砂あり
 腐分混じる
 ②J.575/2 灰オリーブ色粘土
 しまり中 シルト混じる
 ③664/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 腐砂が若干混じる
 ④1062/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ⑤1063/1 暗緑灰色粘土
 しまり中・粘性大 ややボロボロ、崩れやすい
 腐物の繊維を多く含む



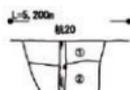
- 坑16・17
 ①1074/1 暗緑灰色粘土
 しまり大 腐分を多く含む
 暗緑灰色の粘土が層々に混じる
 ②610/1 暗緑灰色粘土
 しまり大 腐分を少し多めに含む
 ③610/1 暗緑灰色粘土
 しまり大 腐分を少し含む
 ④J.567/4/1 灰オリーブ灰色粘土
 しまり大



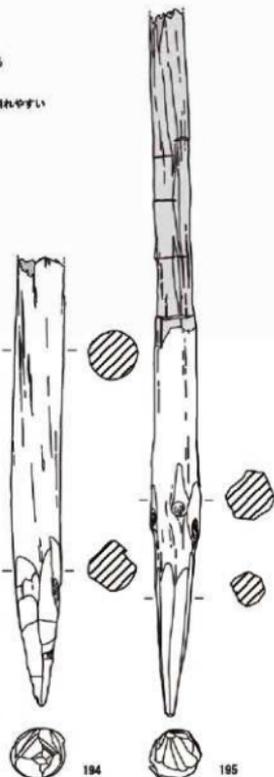
- 坑18
 ①794/1 暗オリーブ灰色粘土
 しまり中 腐砂を少し含む
 ②J.567/5/1 オリーブ灰色粘土
 しまり中 シルトを所々含む
 腐砂が混じる
 ③794/1 灰色粘土
 しまり大



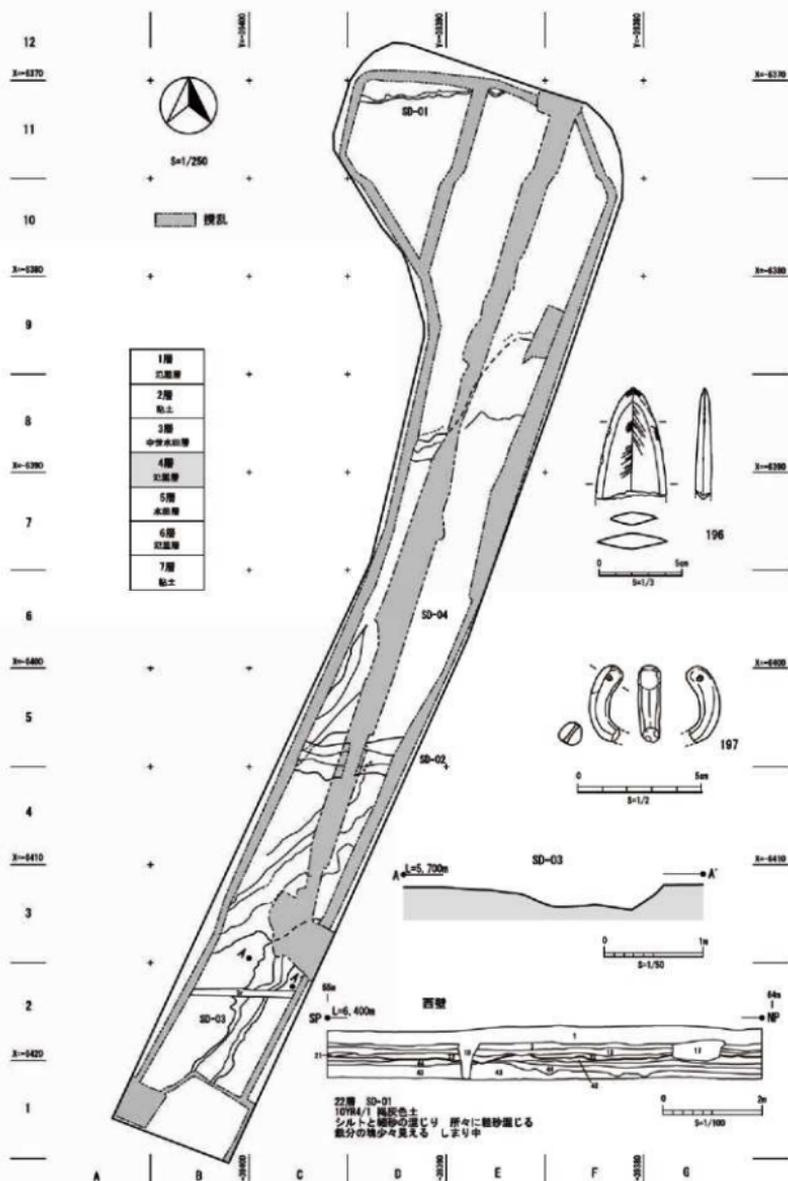
- 坑19
 ①J.571/3 黄褐色粘土
 しまり小・粘性大
 腐砂は腐物により青変
 粘土土層の間に腐物
 ②564/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ③1063/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 腐物の繊維を多く含む



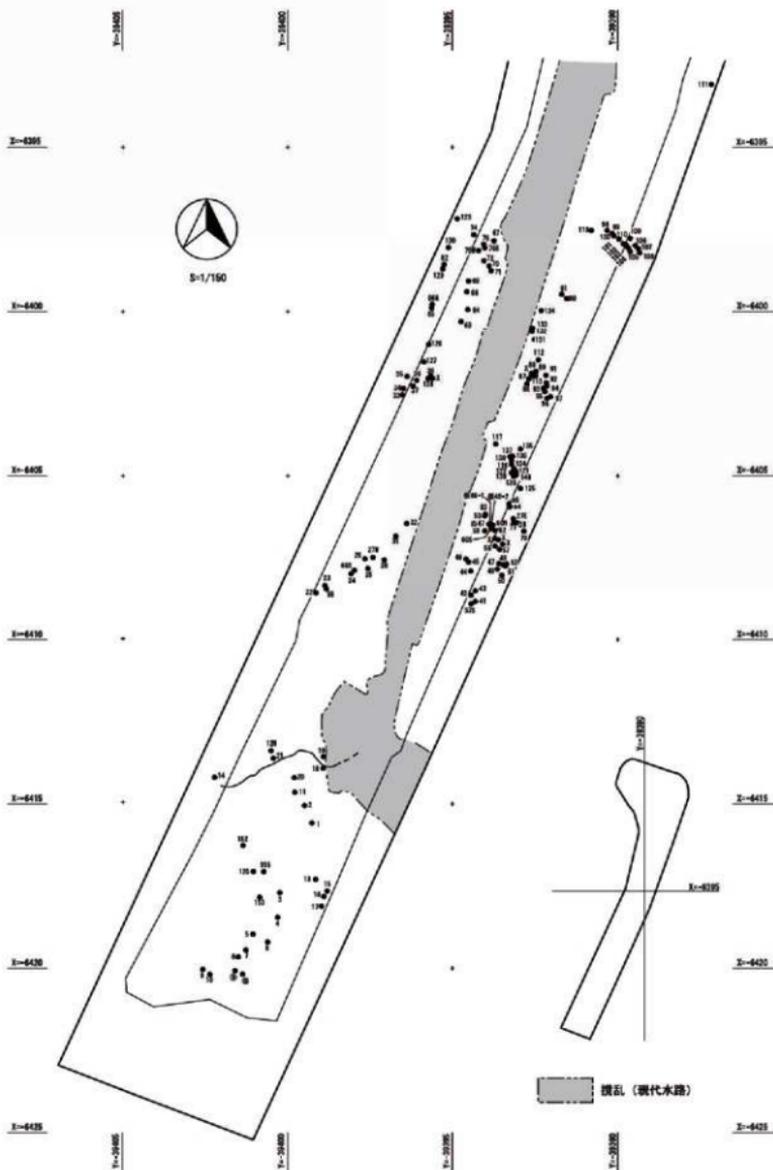
- 坑20
 ①564/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 腐砂混じる
 腐分少々見える
 ②563/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大



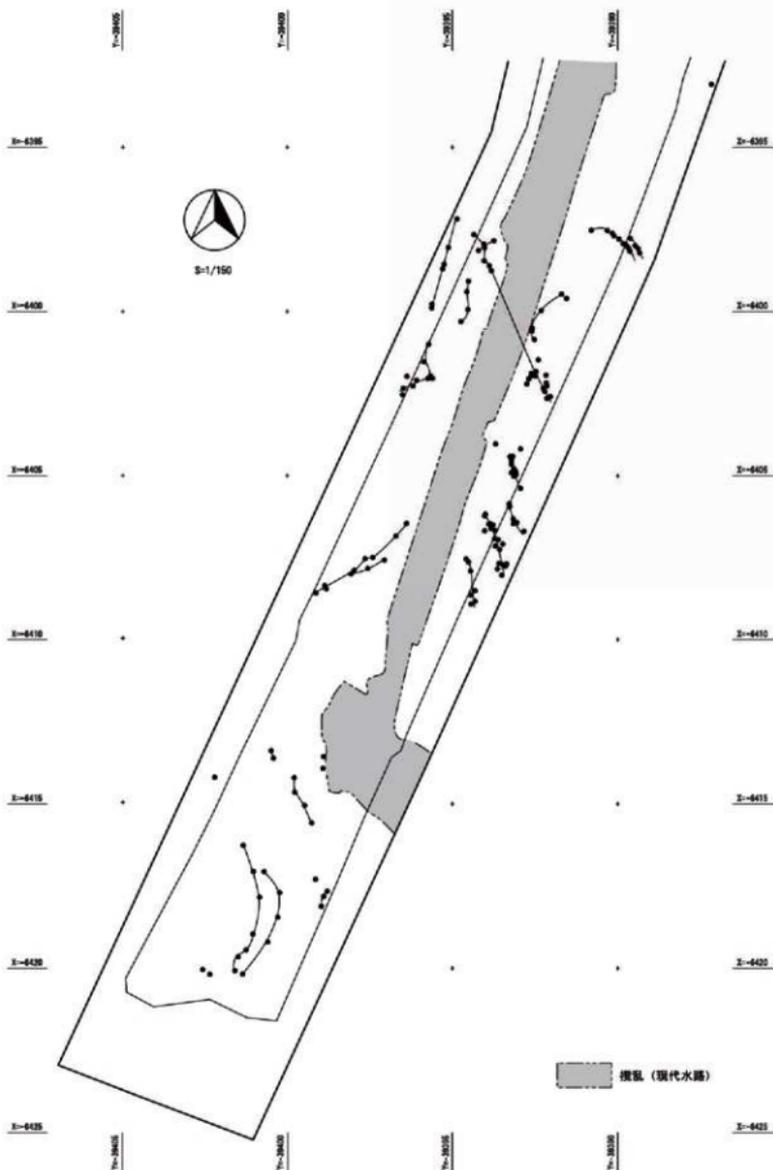
第194図 両迫間日渡遺跡 03-I区 坑9・11～20実測図及び出土遺物実測図



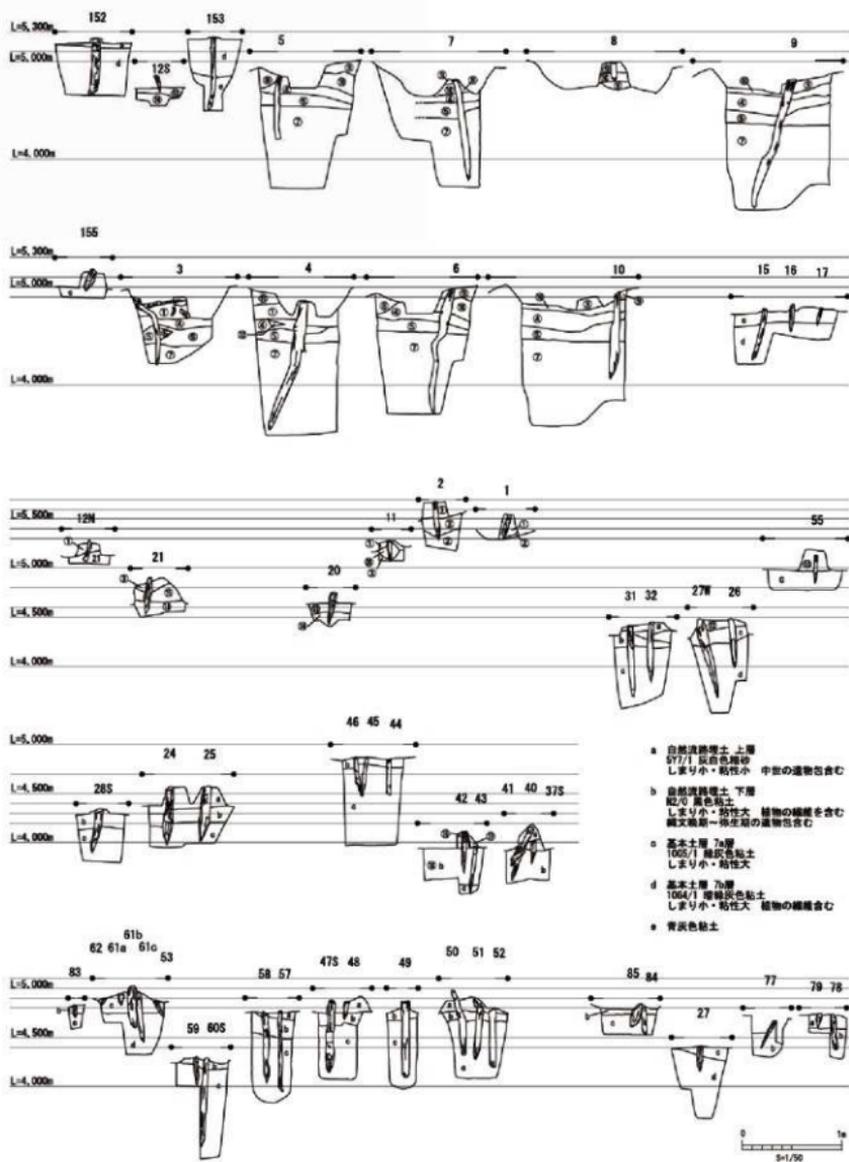
第 195 図 両迫間日波遺跡 O3-III区 遺構配置図及び出土遺物実測図



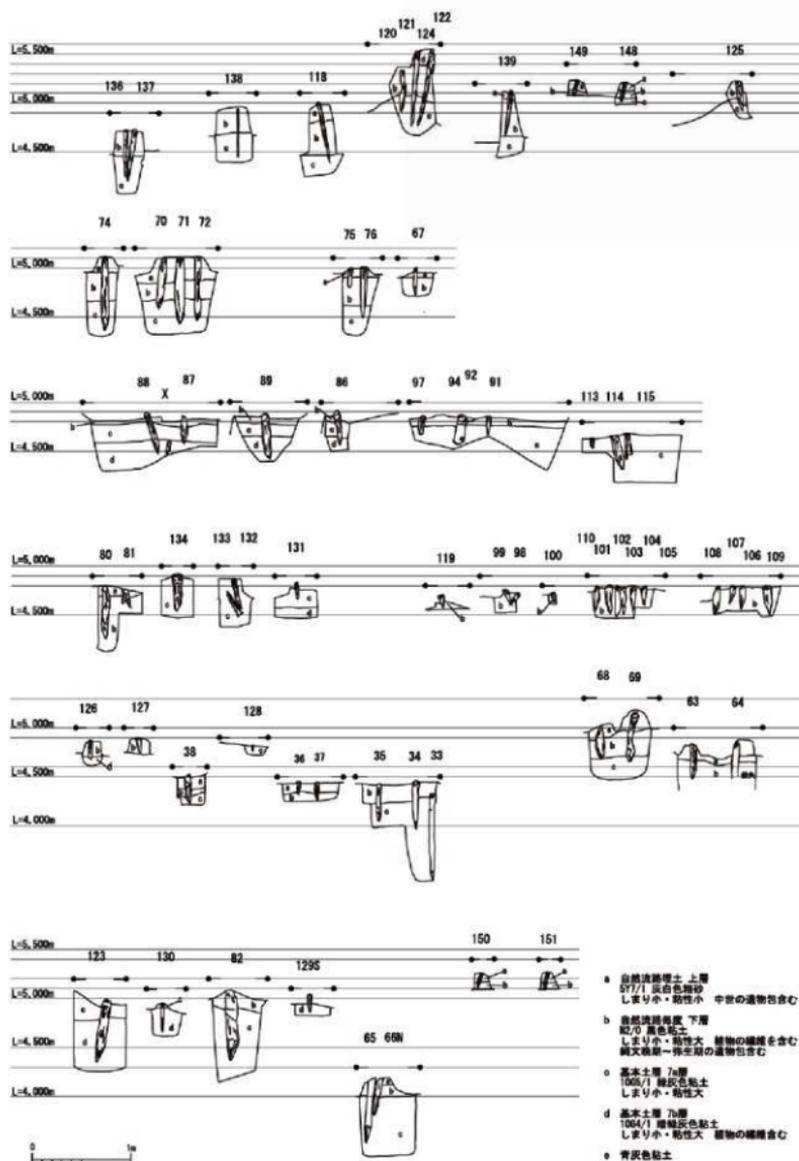
第196図 両迫間日渡遺跡03-Ⅲ区 杭検出位置図



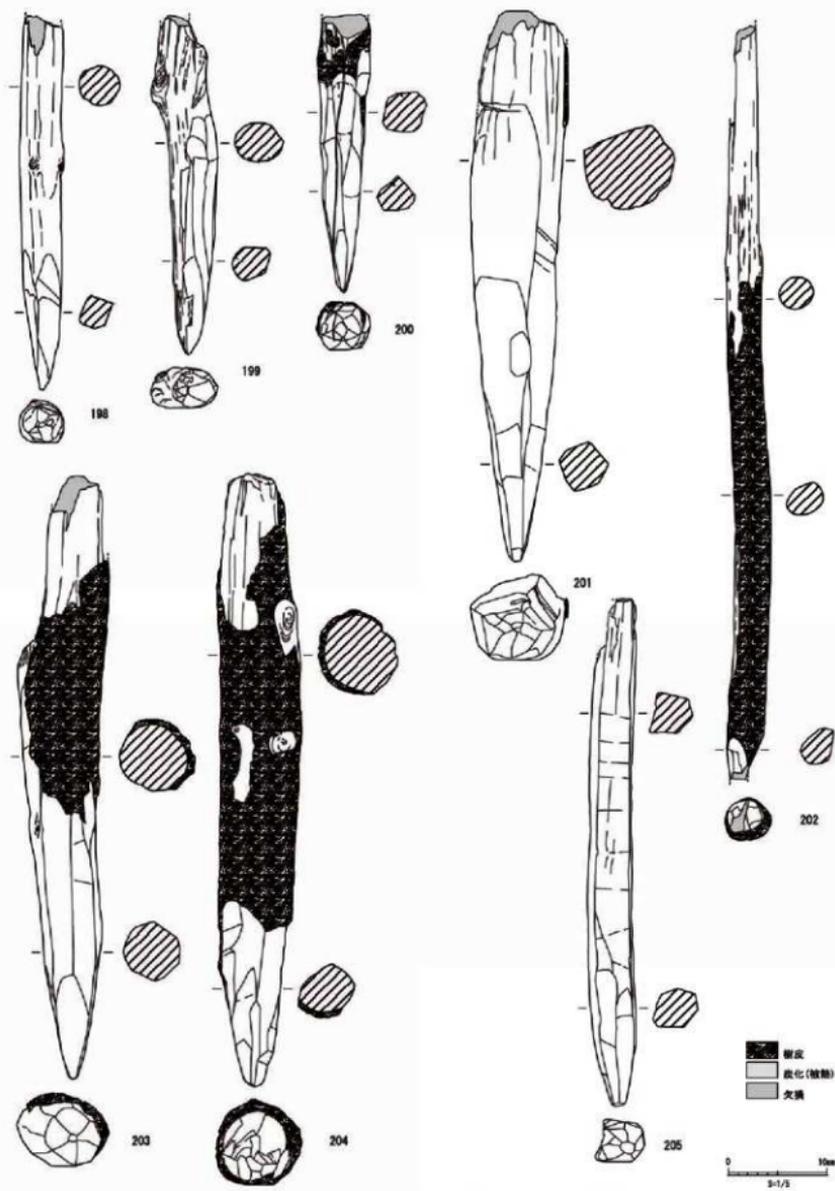
第 197 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭列予想図



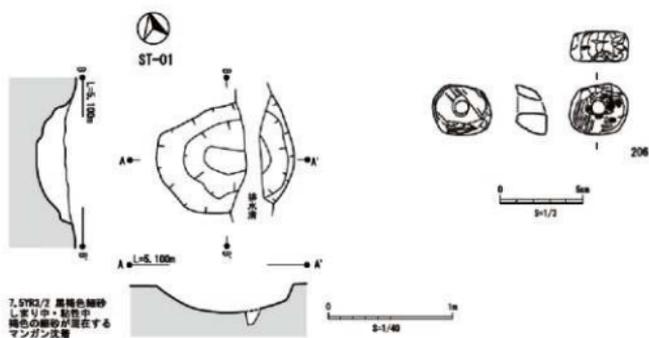
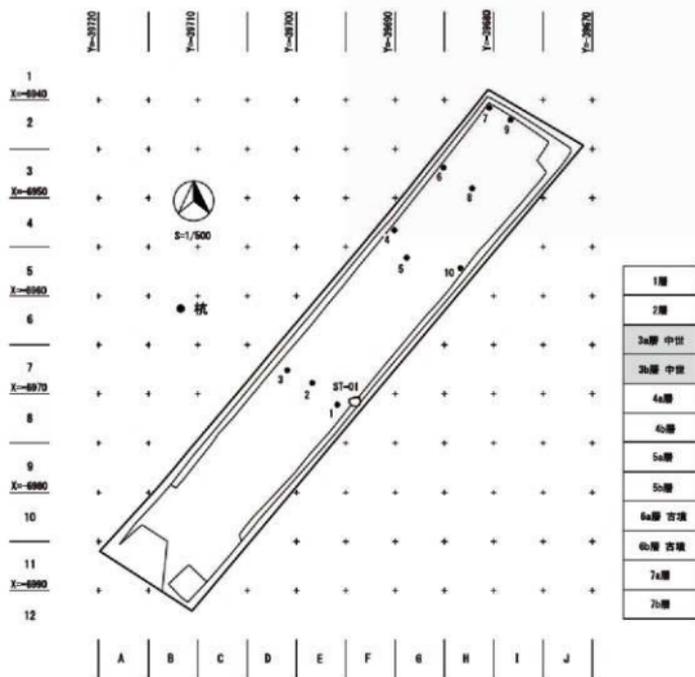
第198図 両迫間日渡遺跡 O3-Ⅲ区 杭1～155実測図1



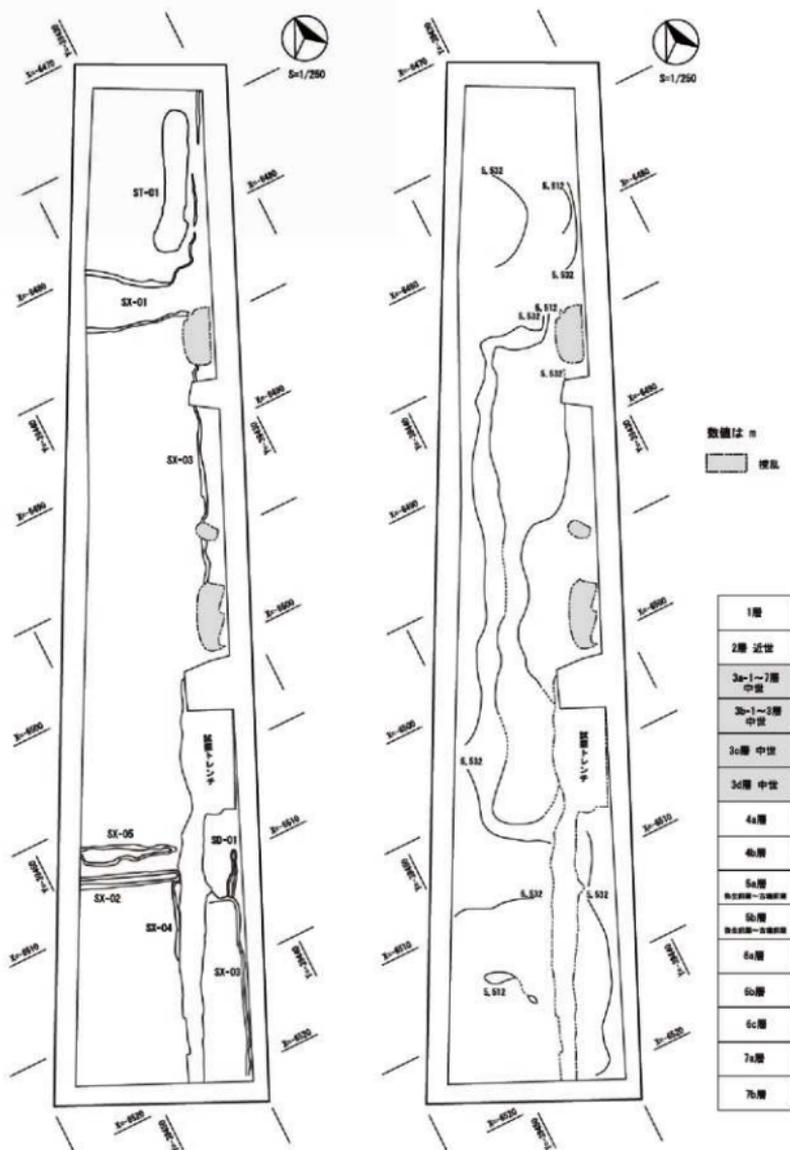
第199図 両迫間日波遺跡 03-III区 杭1~155実測図2



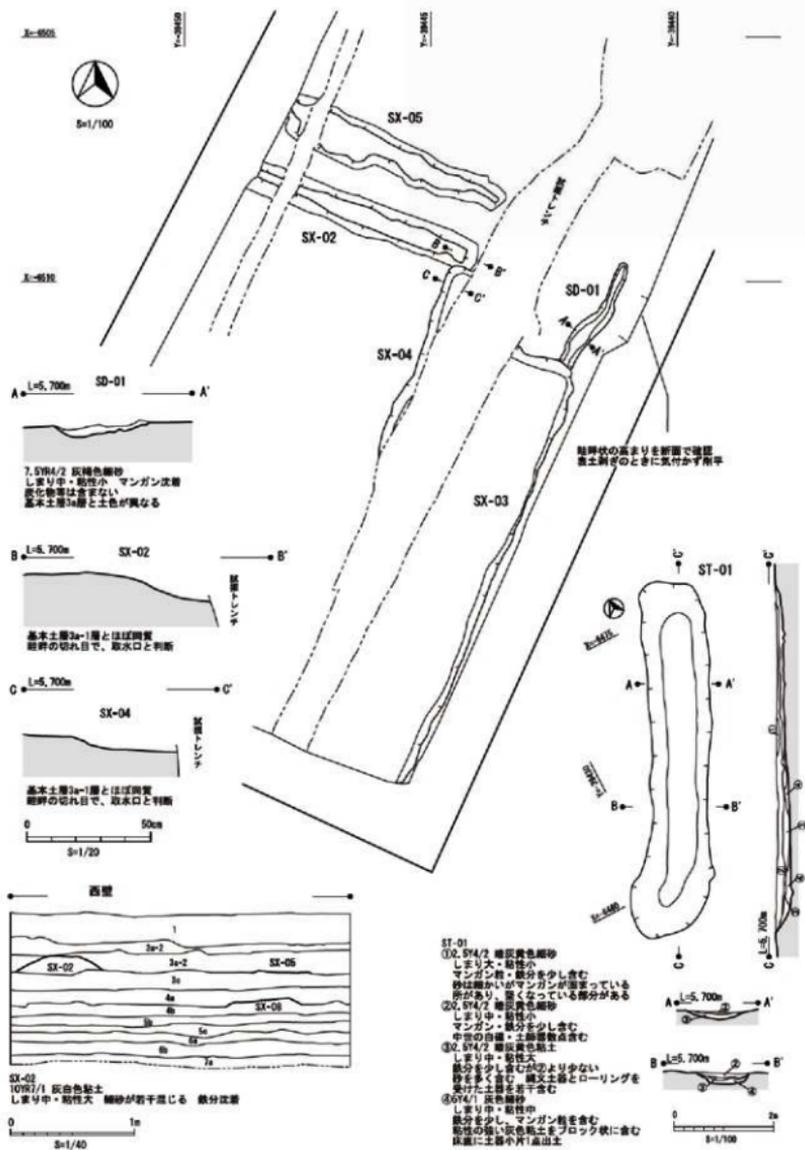
第 200 図 両迫間日波遺跡 O3-III区 出土杭実測図



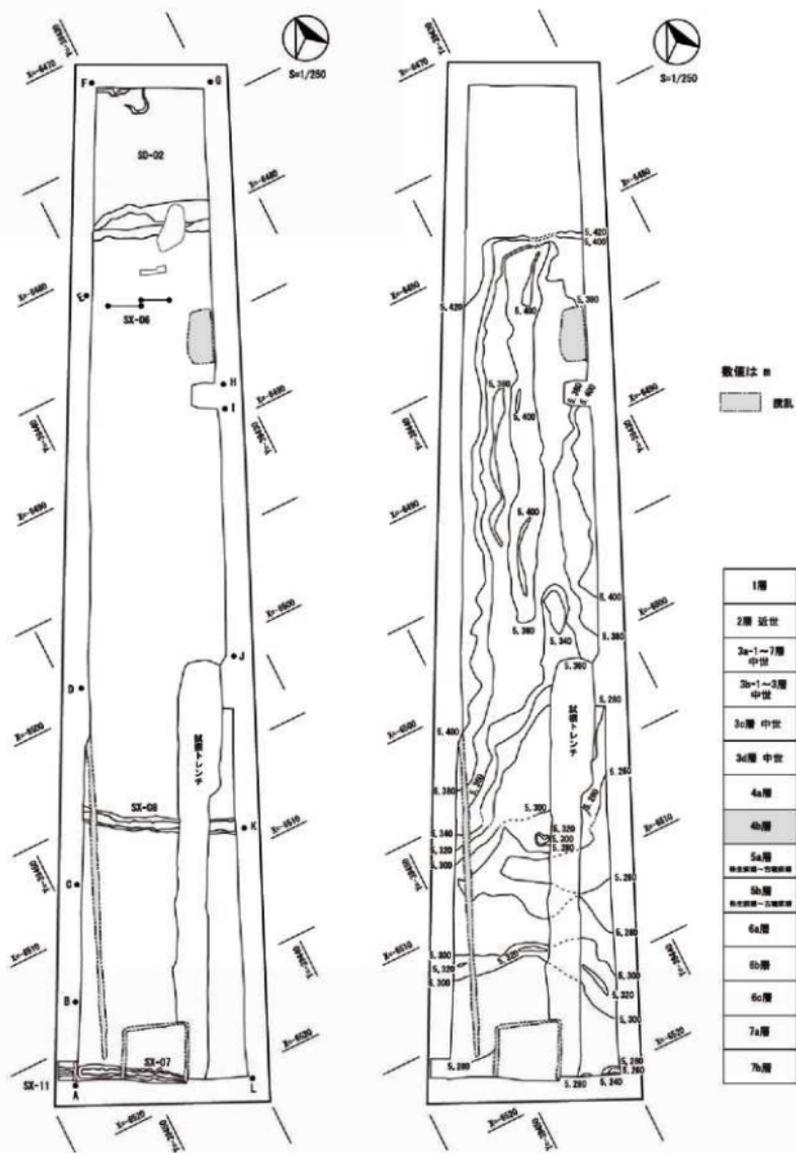
第 201 図 玉名平野条里跡 04-I 区
3層遺構配置図・ST-01 実測図及び出土遺物実測図



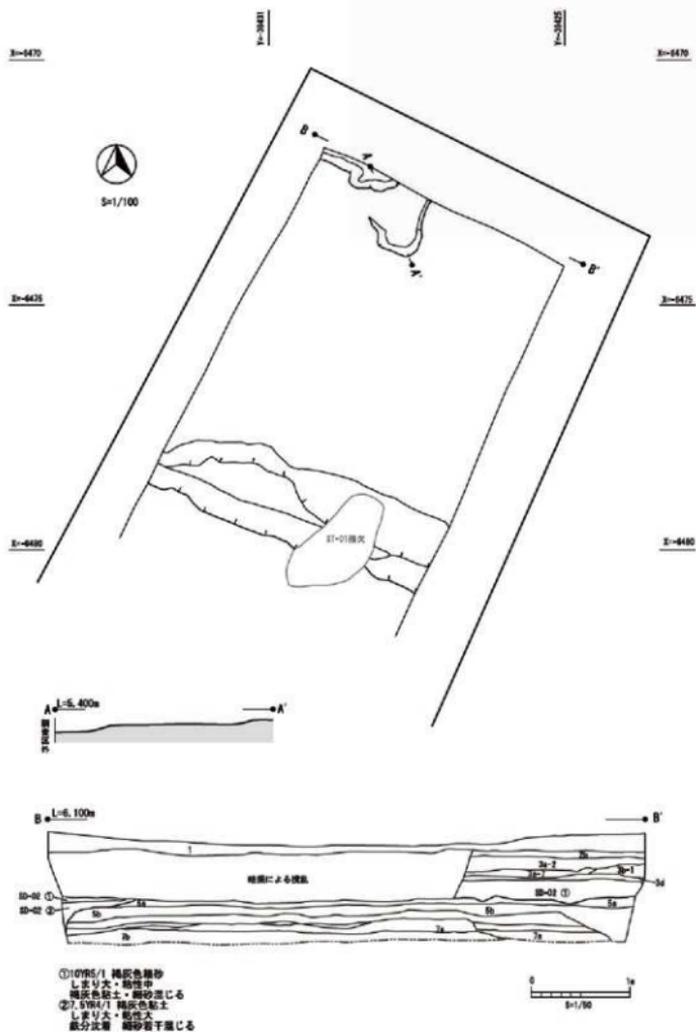
第202図 両迫間日波遺跡 04-I区 3層遺構配置図



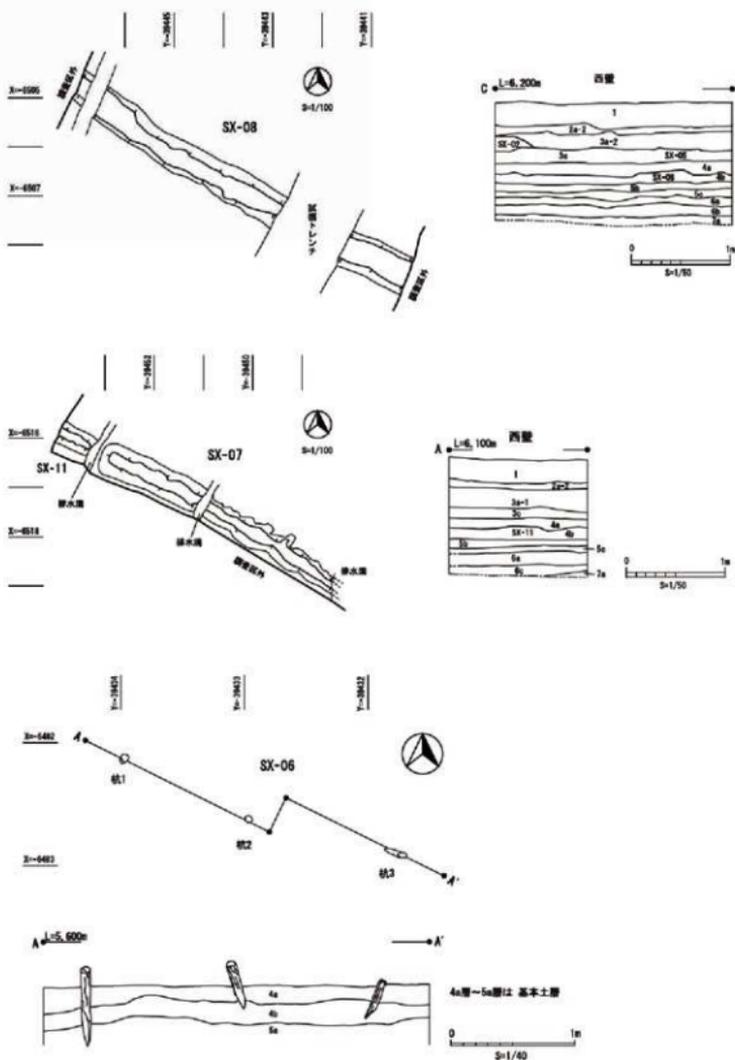
第 203 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SD-01・SX-01~05・ST-01 実測図



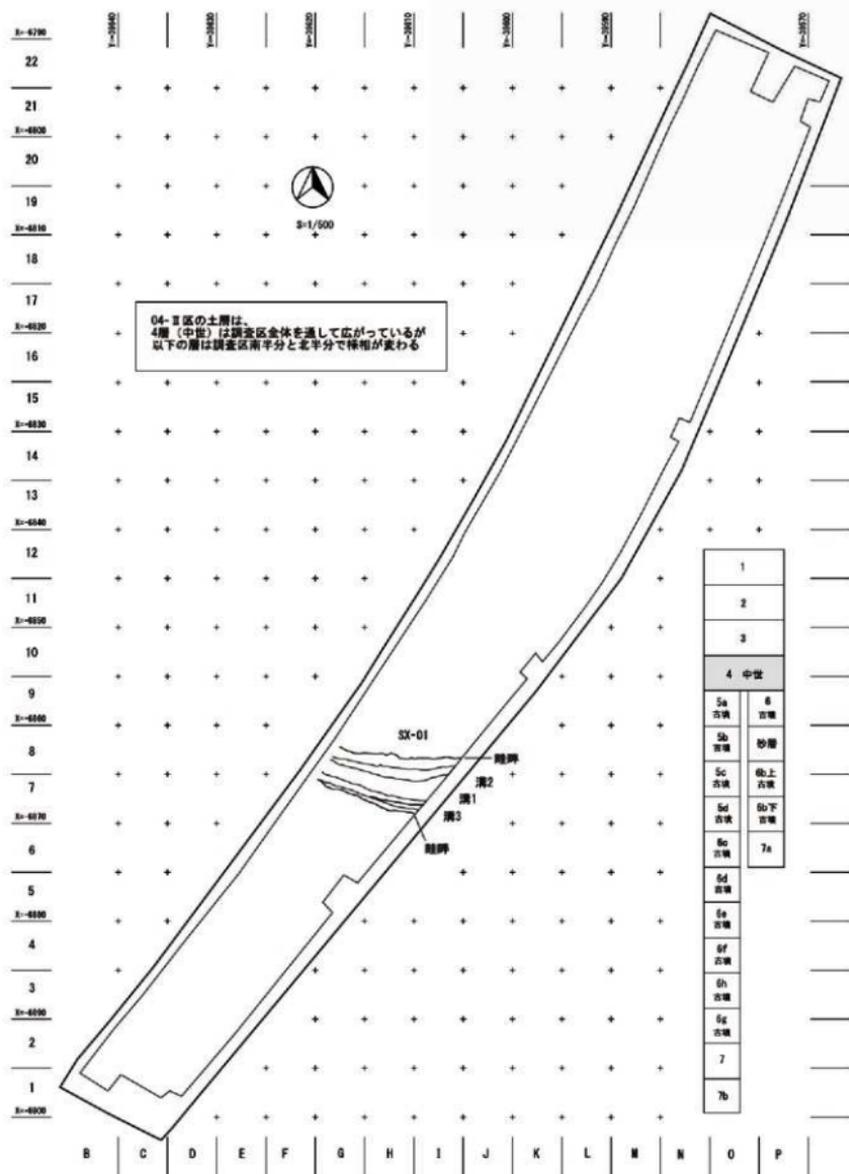
第 204 図 両迫間日波遺跡 04-I 区 4b 層上面遺構配置図及びコンタ図



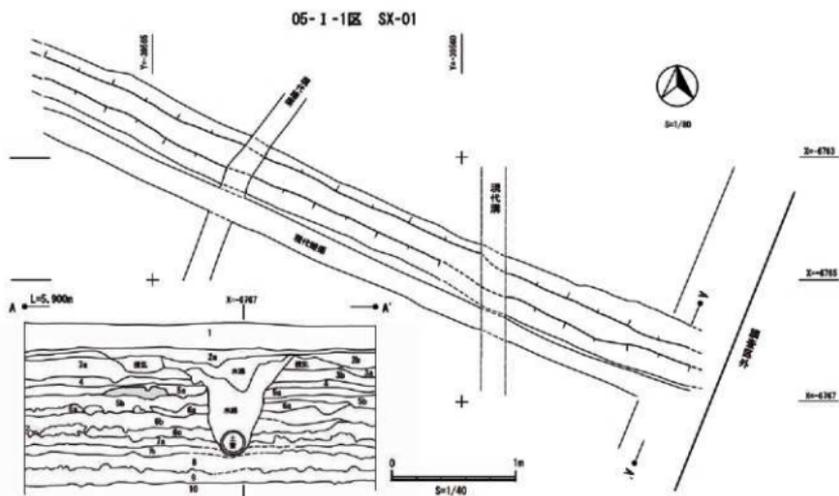
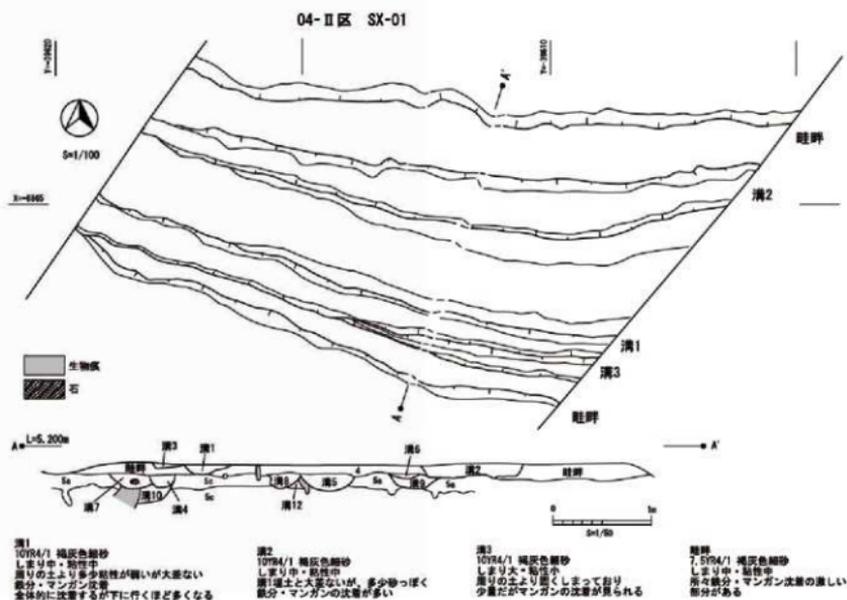
第 205 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SD-02 実測図



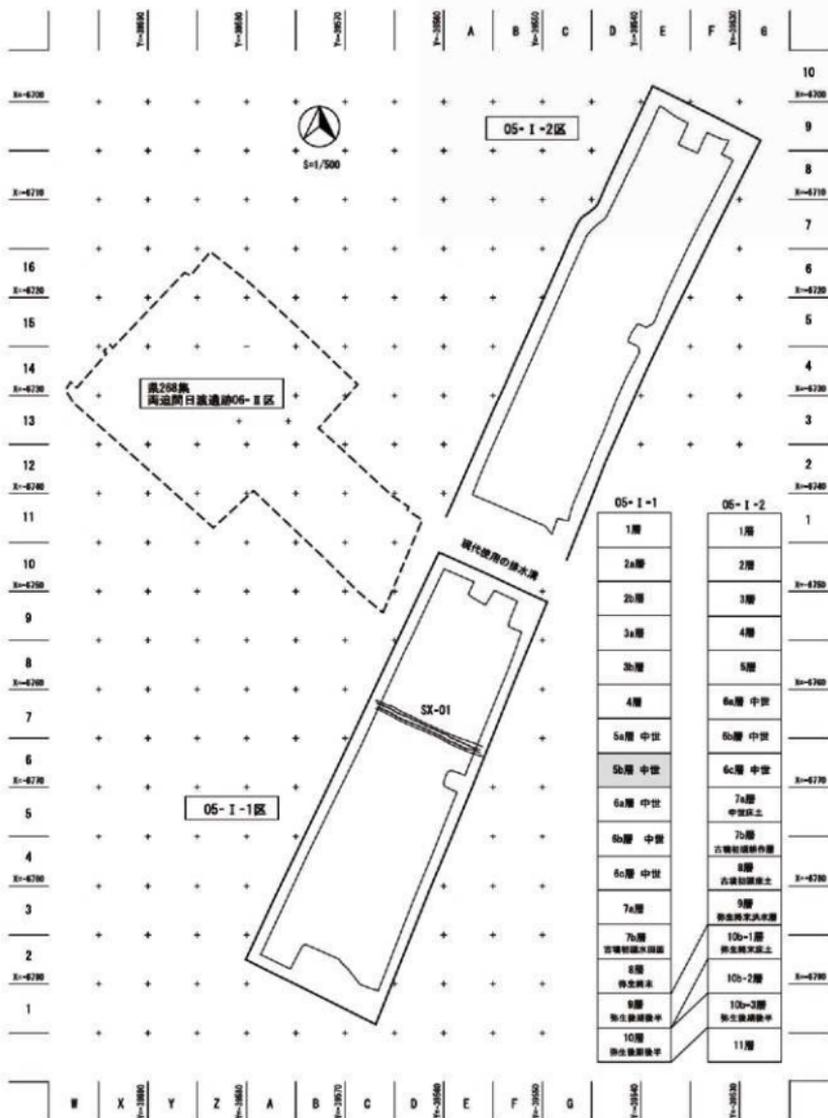
第 206 図 両迫間日波遺跡 04-I 区 SX-06~08・11 実測図



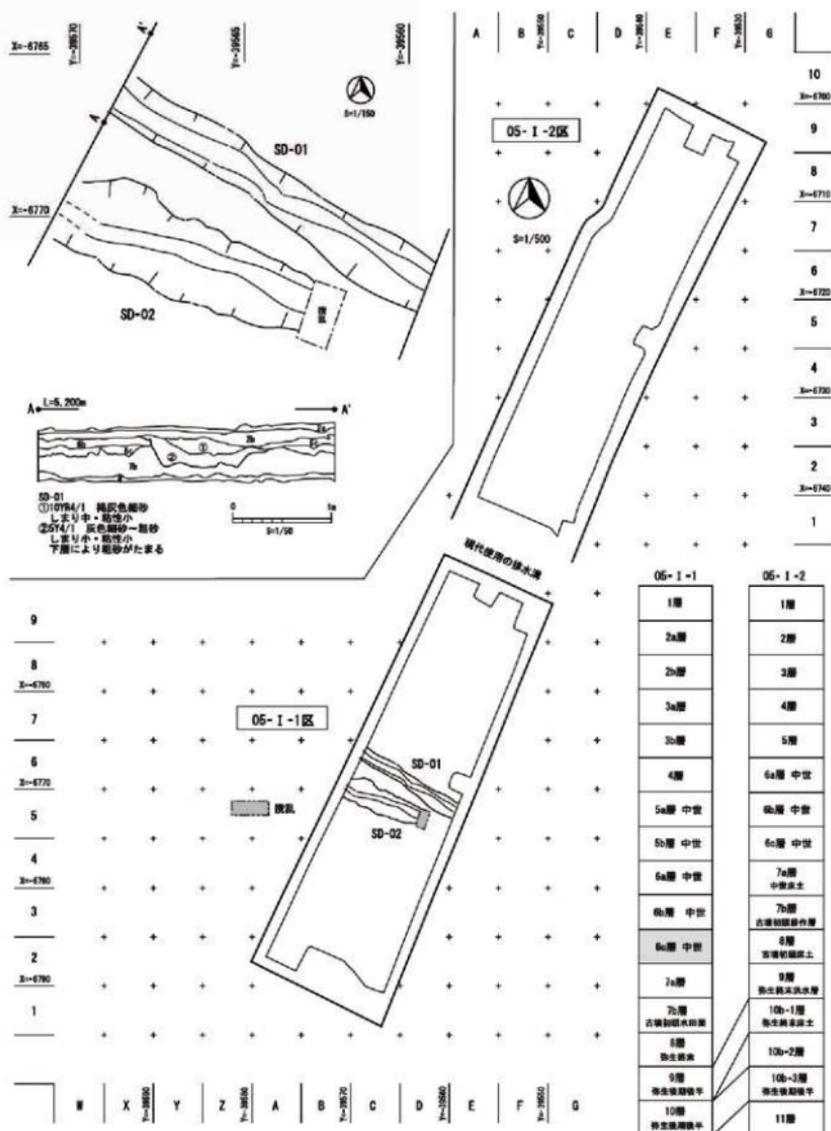
第 207 図 両迫間日波遺跡 04-II区 4層遺構配置図



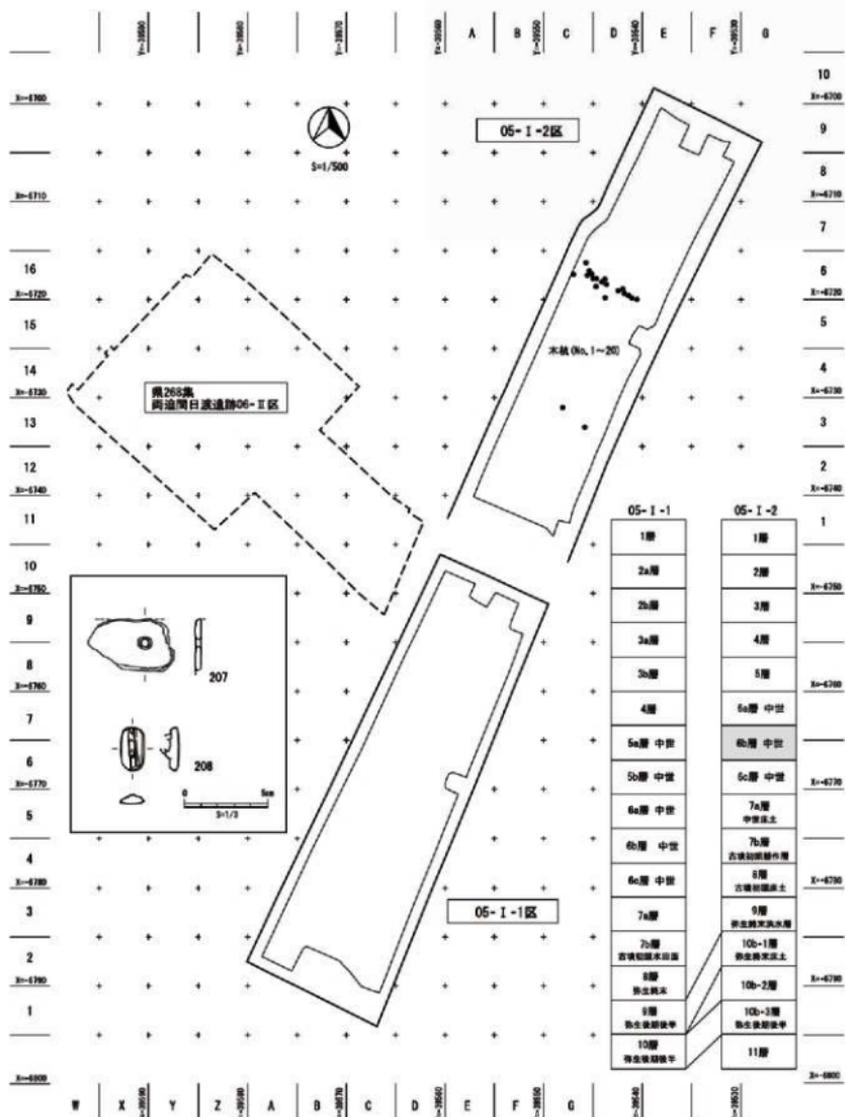
第208図 両泊間日波遺跡 04-II区 SX-01 (畦畔・溝1~3) 実測図
05-I-1区 SX-01 (疑似畦畔) 実測図



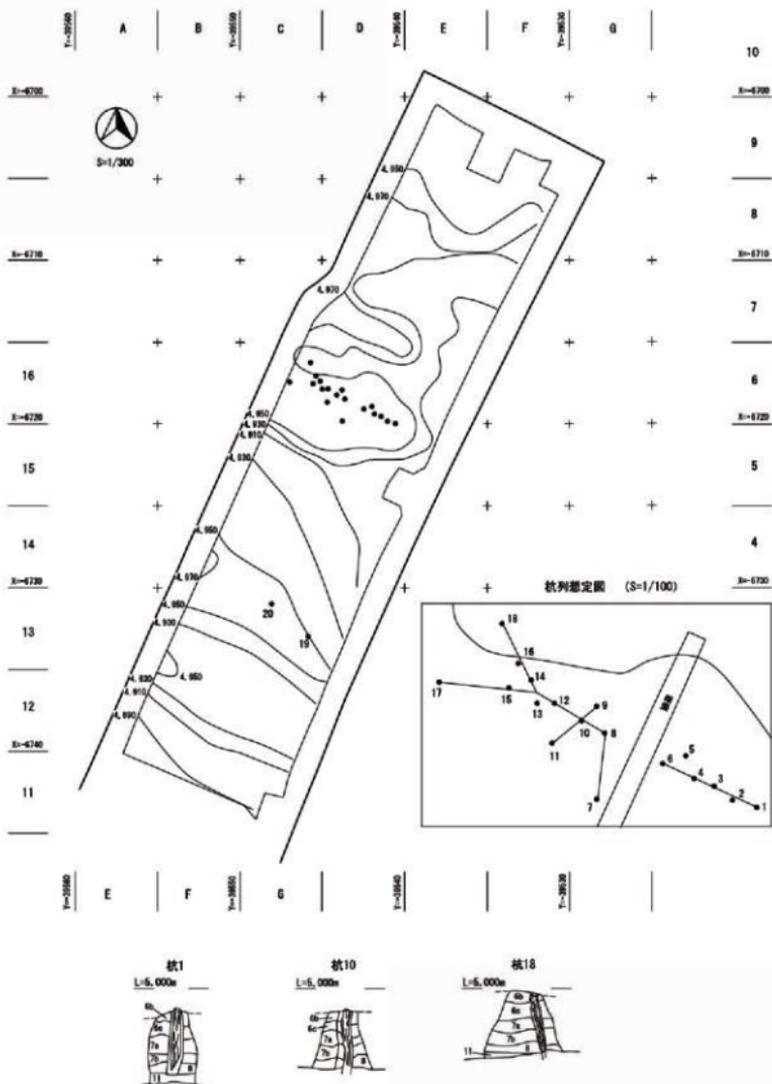
第 209 図 両泊間日渡遺跡 05-I-1 区 5b 層遺構配置図



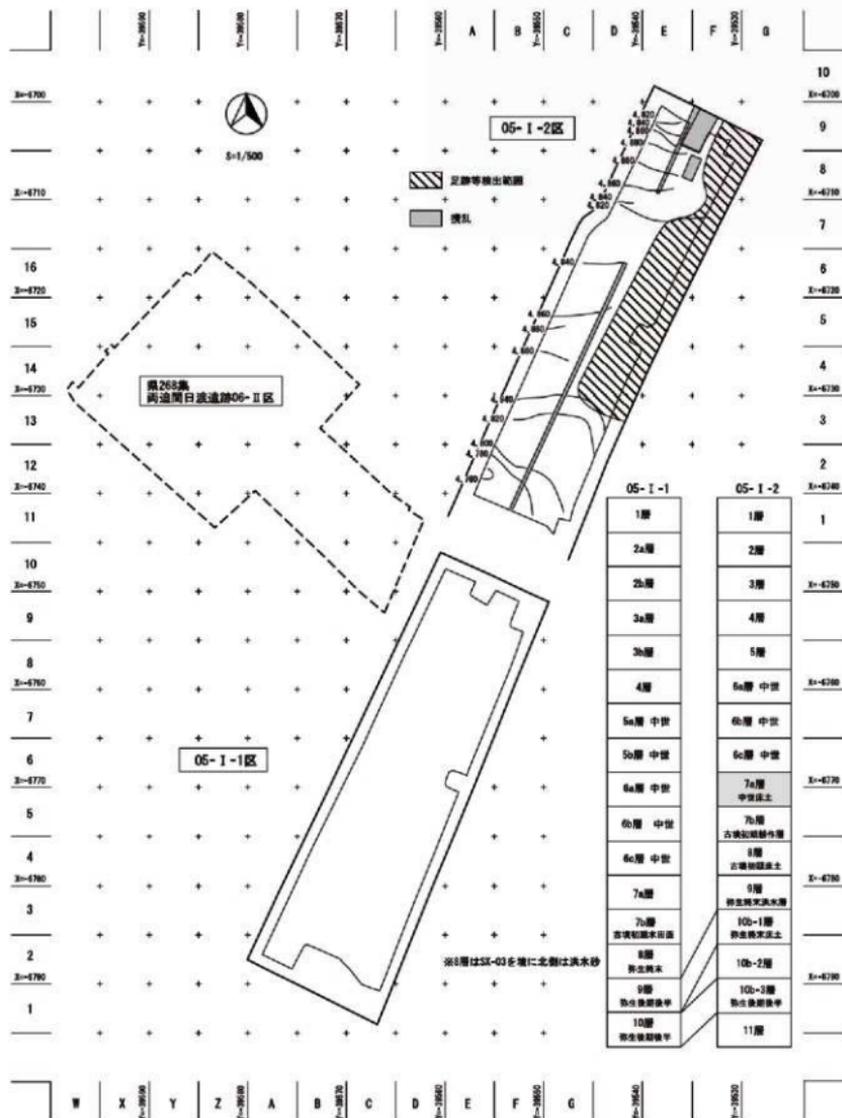
第 210 図 両泊間日渡遺跡 05-I-1 区 6c 層遺構配置図・SD-01・02 実測図



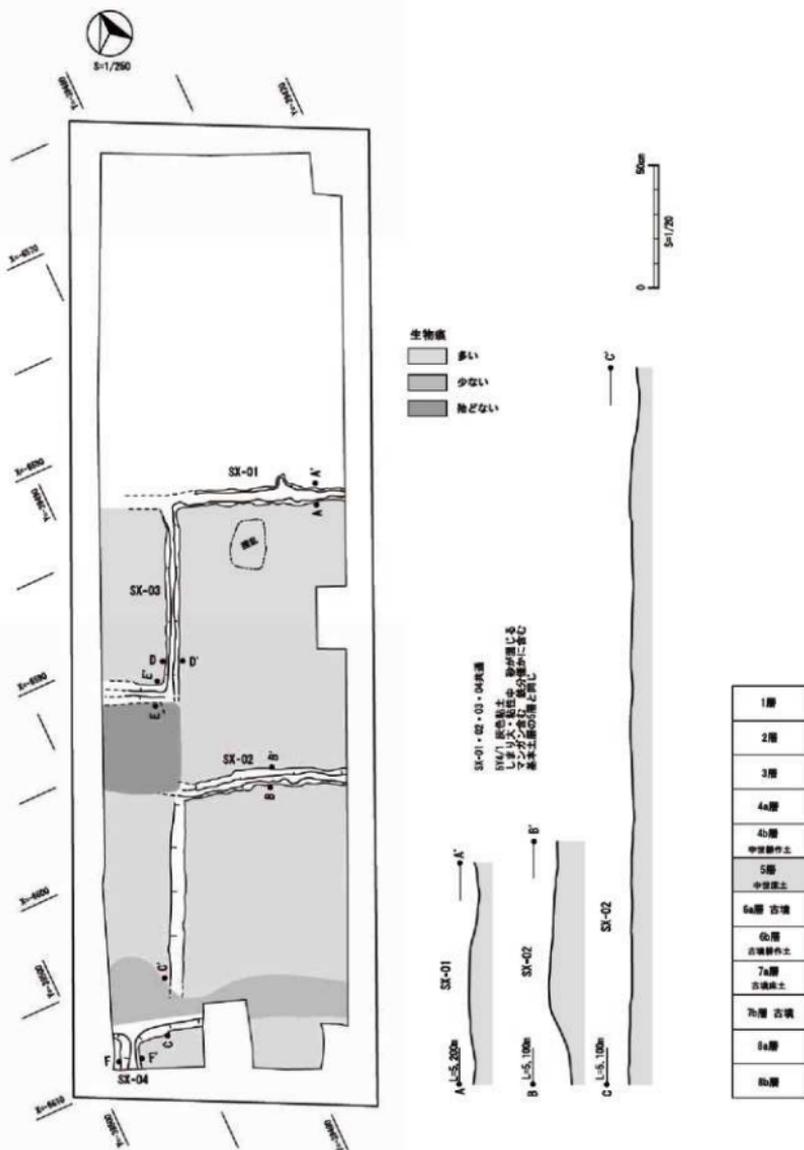
第 211 図 兩迫間日渡遺跡 05-I-2 区
6b 層木杭 (1~20) 出土状況及び出土遺物実測図



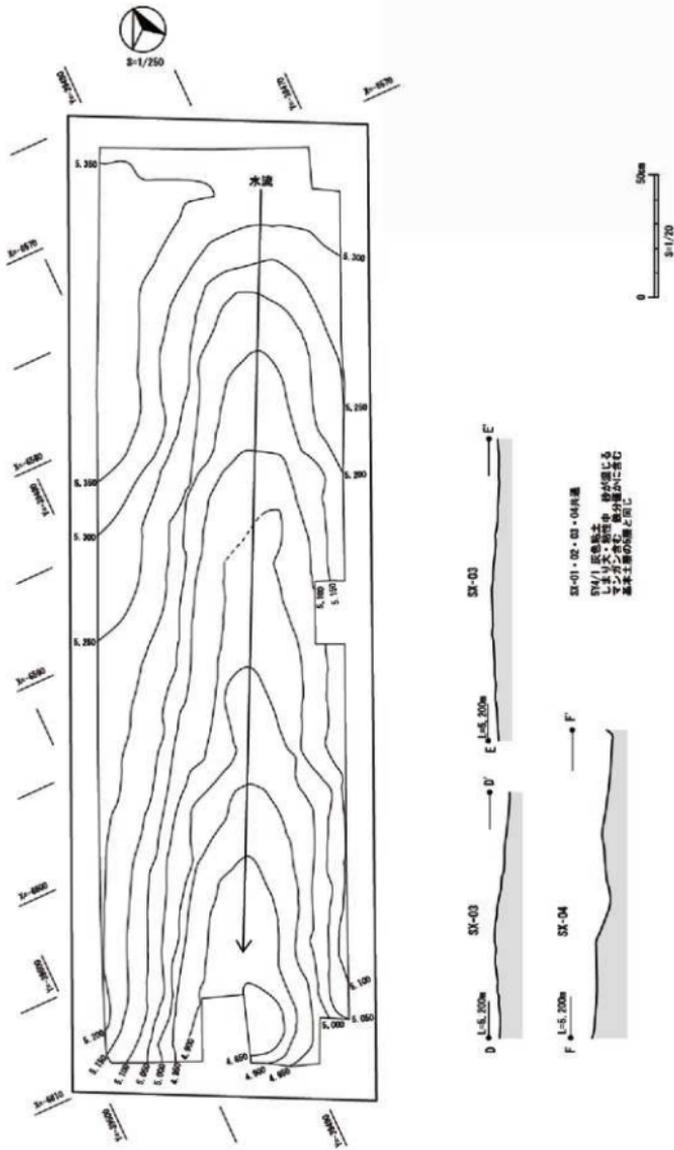
第 212 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区 6b 層杭出土状況及び実測図



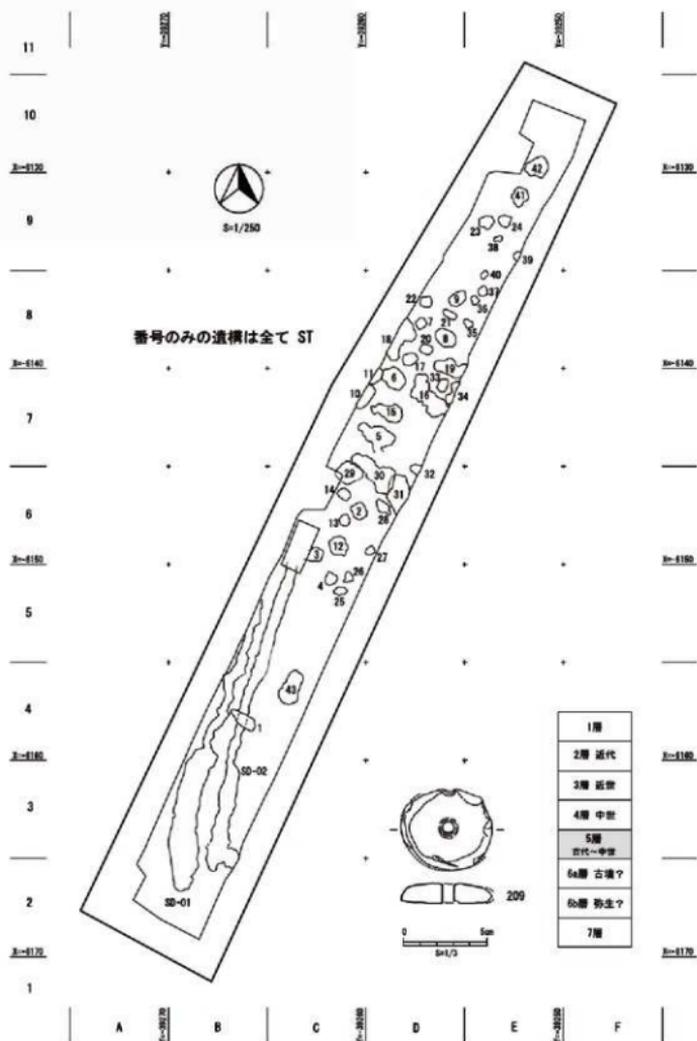
第 213 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区 7a 層遺構配置図及びコンタ図



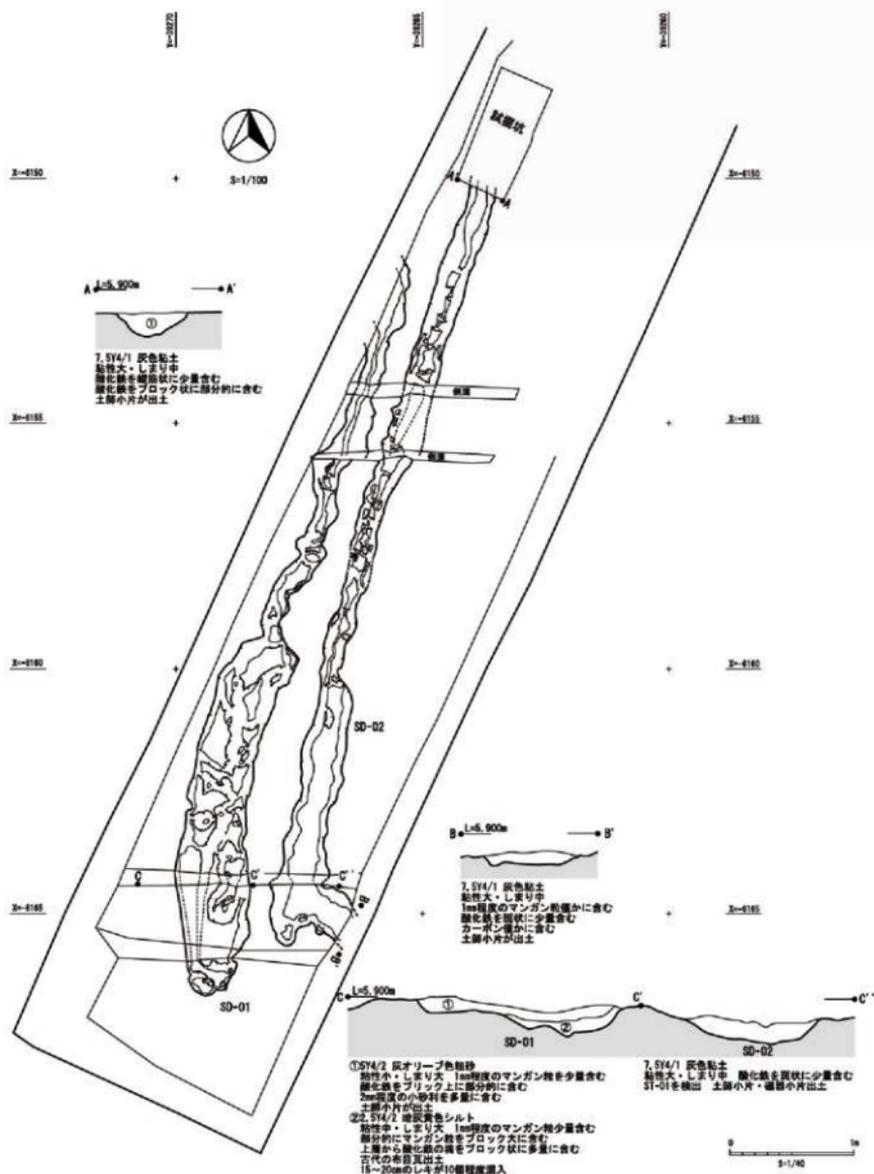
第 214 図 西泊間日渡遺跡 05-II-2 区 5 層遺構配置図及びコンタ図



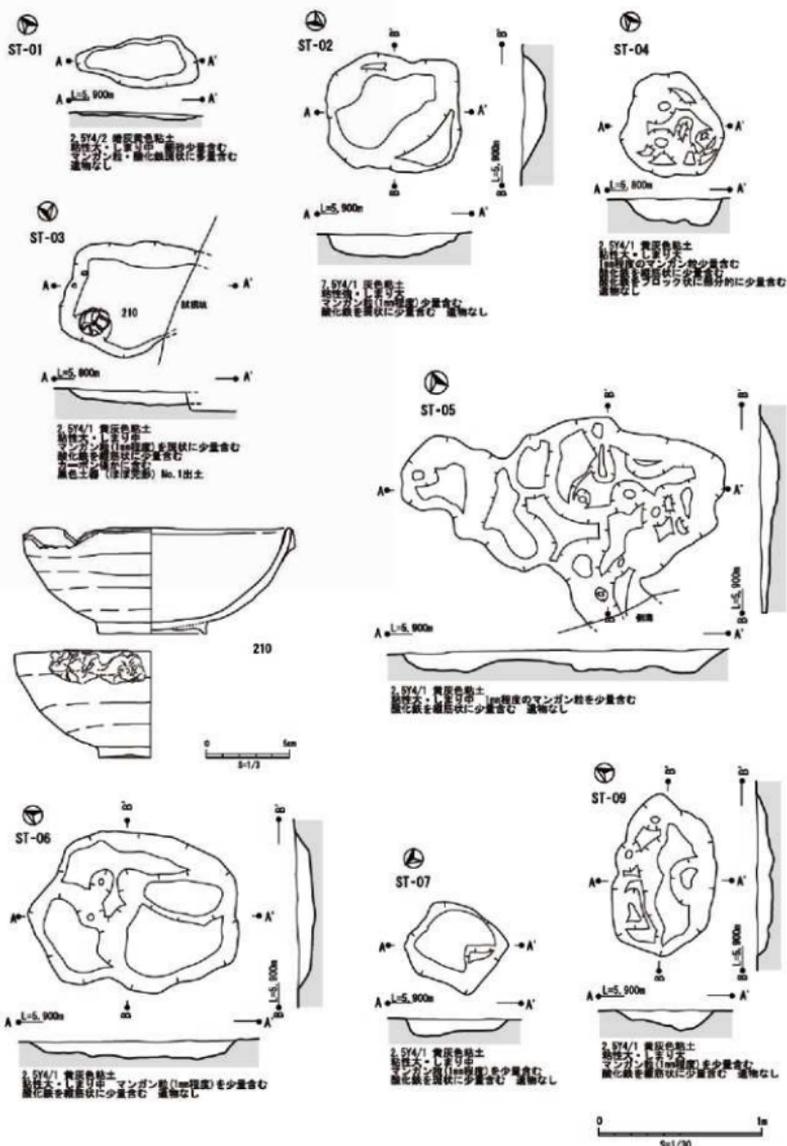
第 215 図 両泊間日渡遺跡 05-II-2 区 5 層コンタ図及び SX-03・04 土層断面図



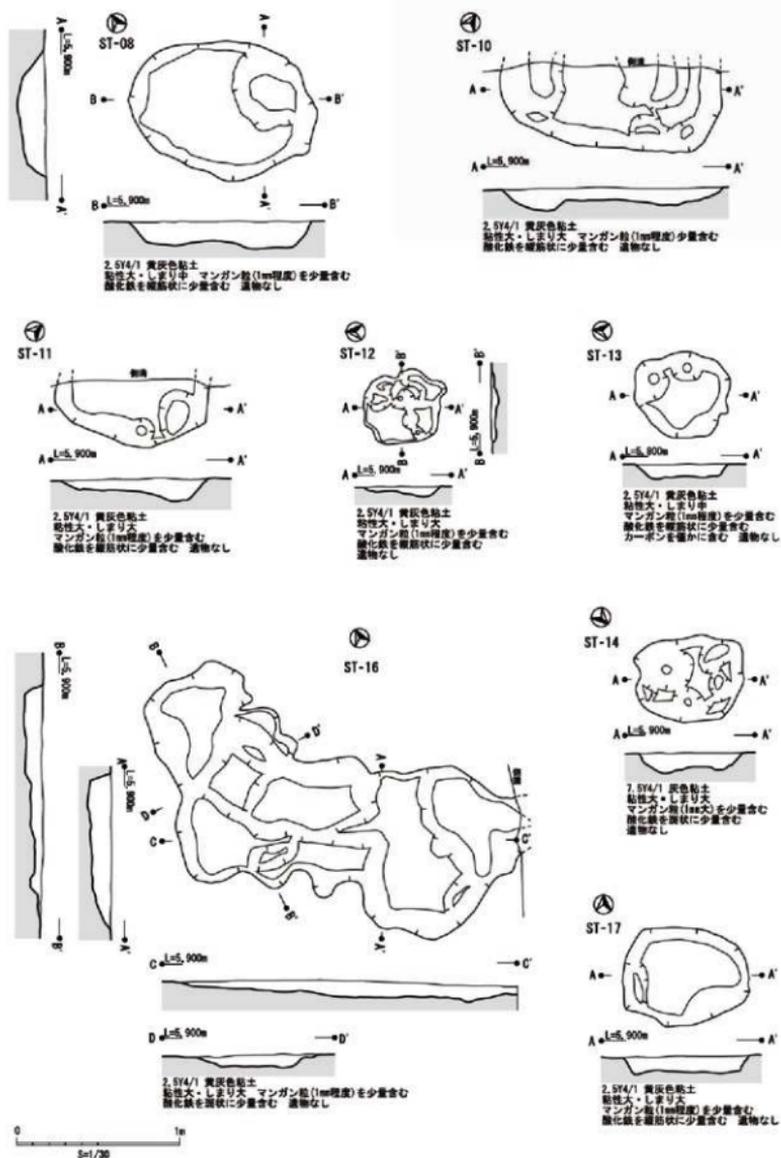
第 216 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2区 5層遺構配置図及び出土遺物実測図



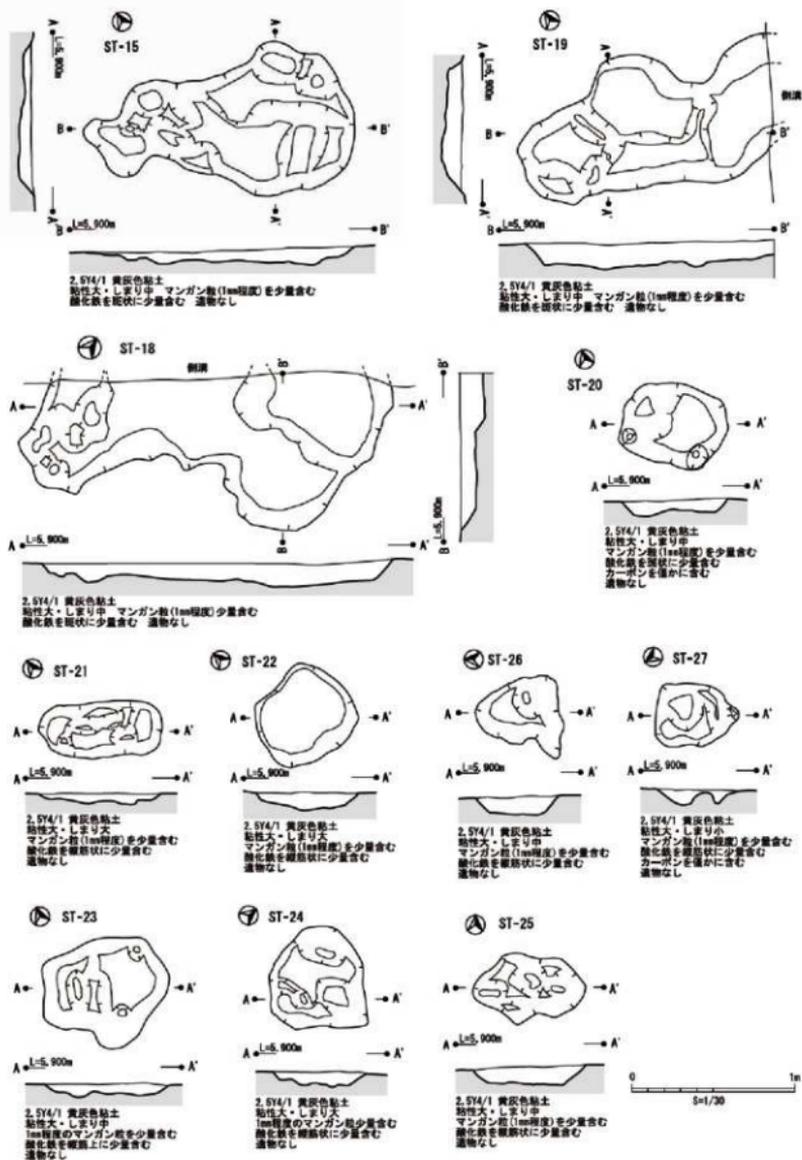
第 217 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 SD-01・02 実測図



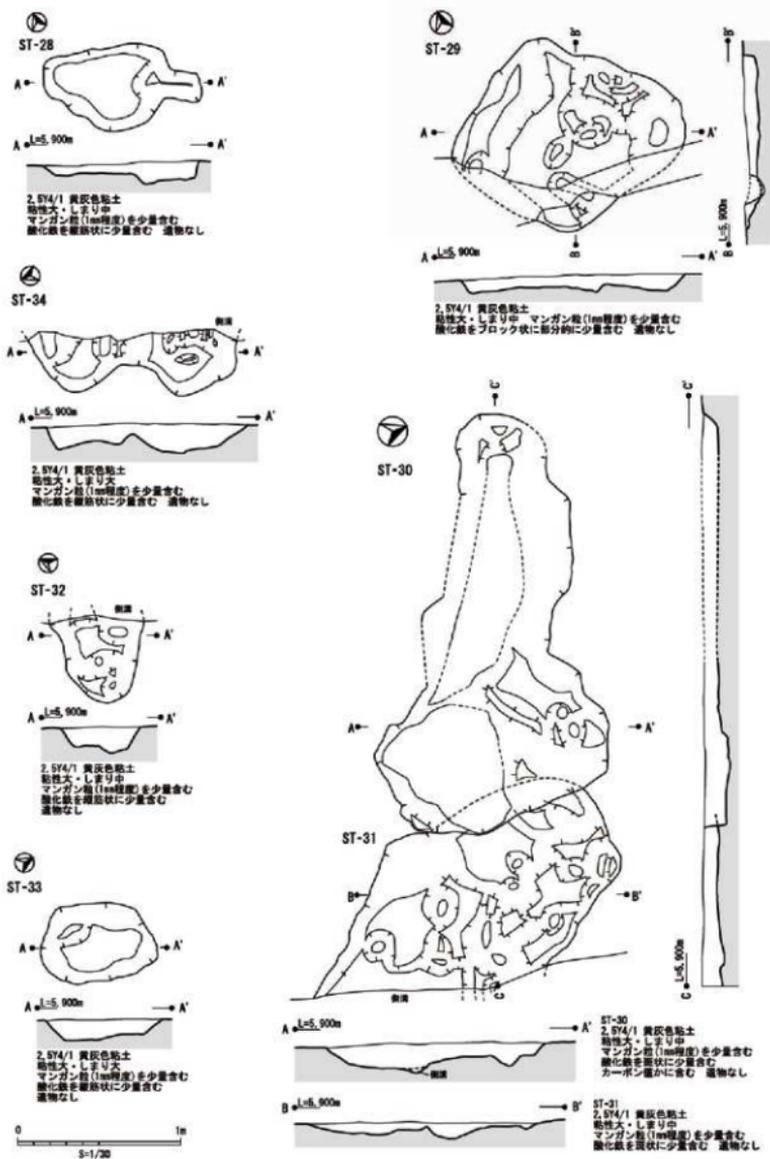
第 218 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区
 ST-01~07・09 実測図及び出土遺物実測図



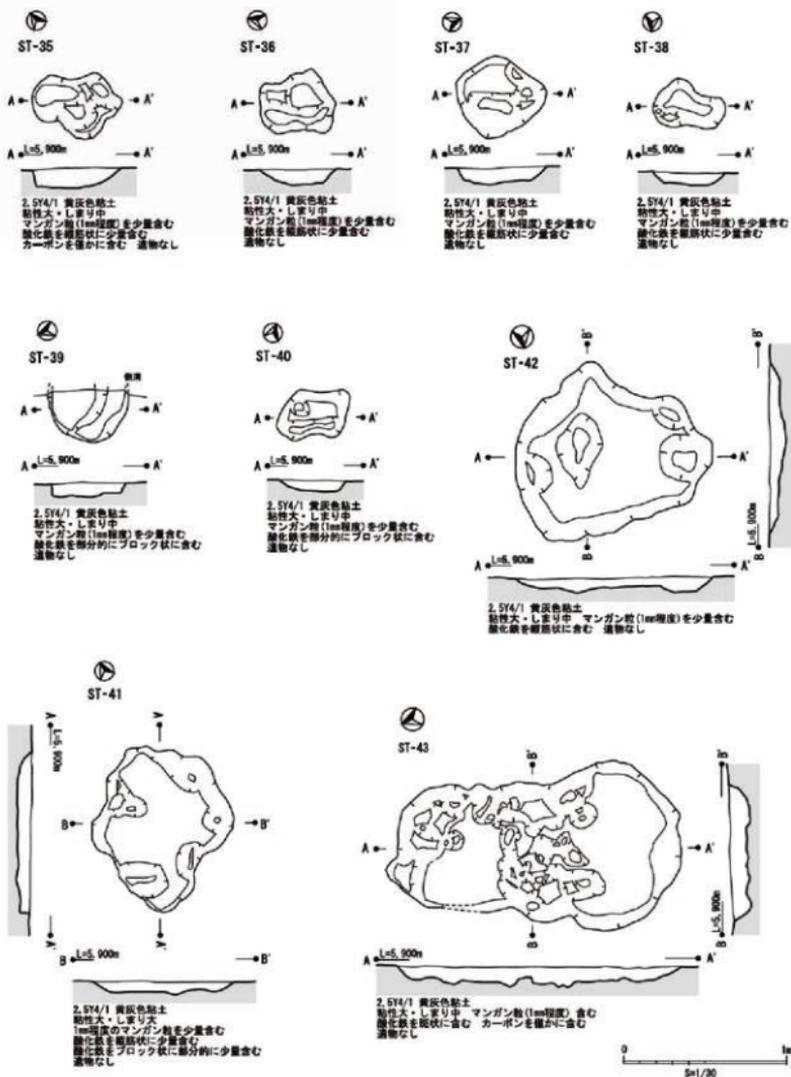
第 219 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-08・10~14・16・17 実測図



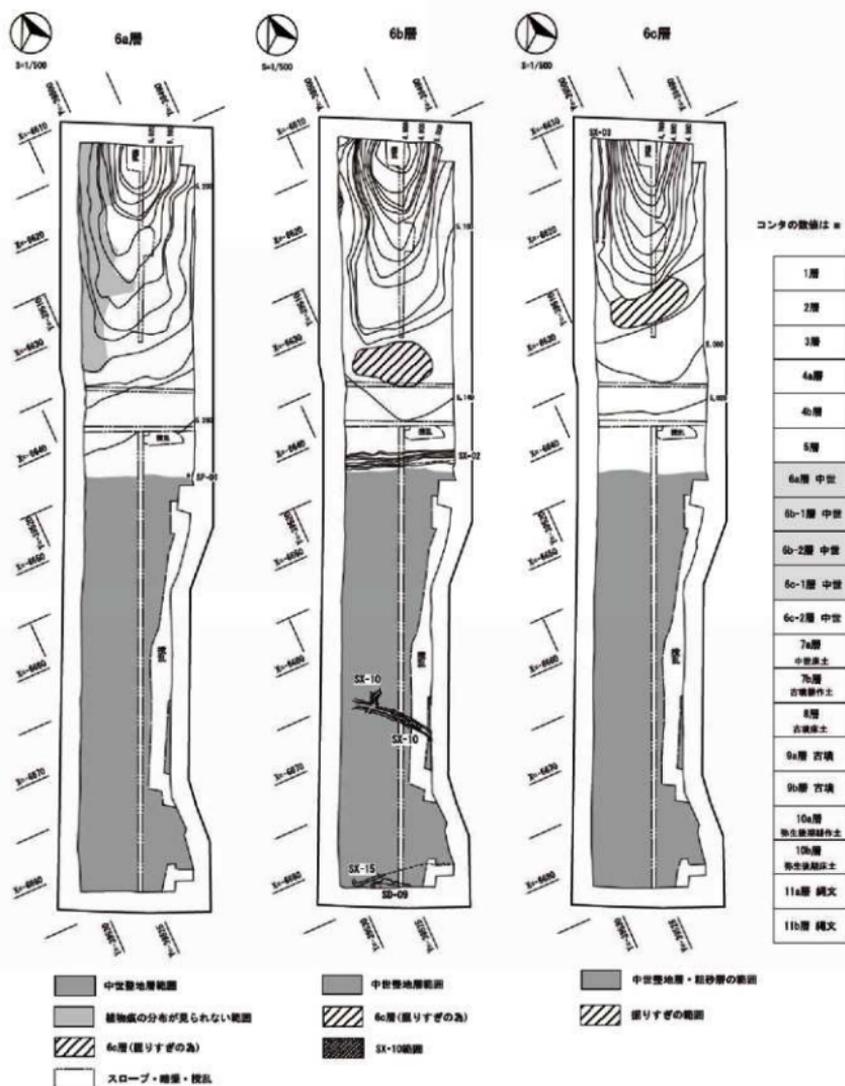
第 220 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 ST-15・18~27 実測図



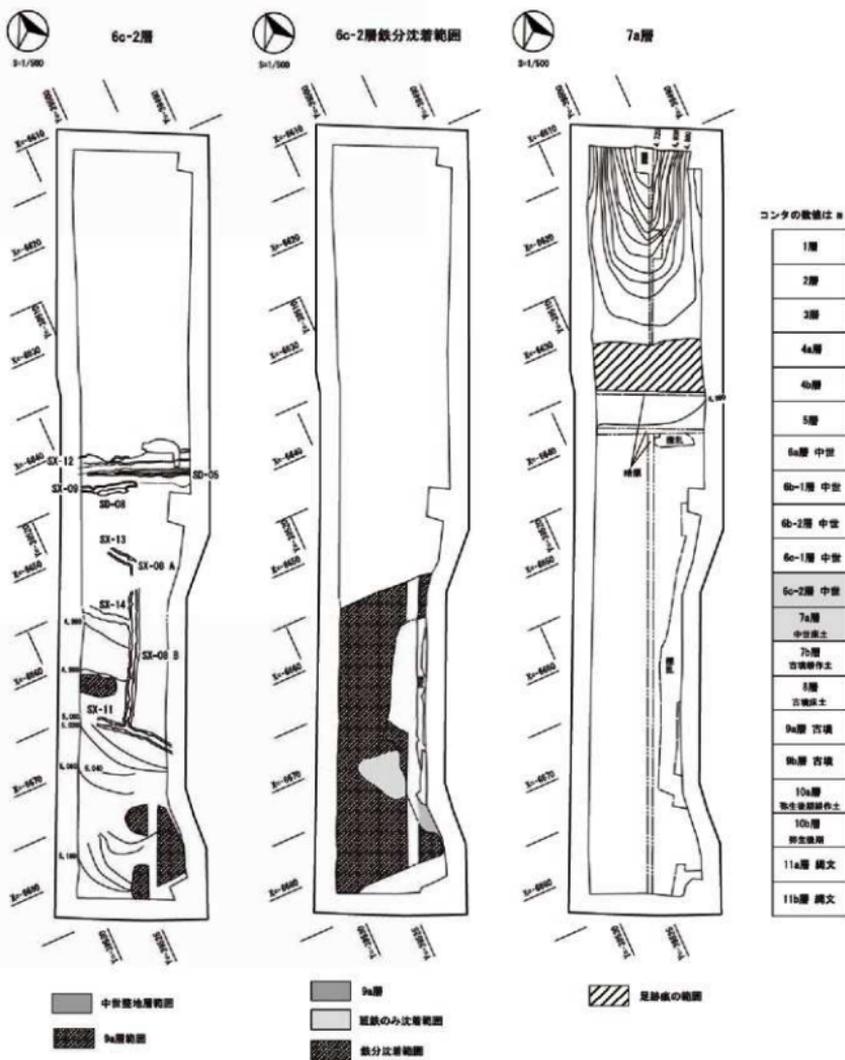
第 221 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-28~34 実測図



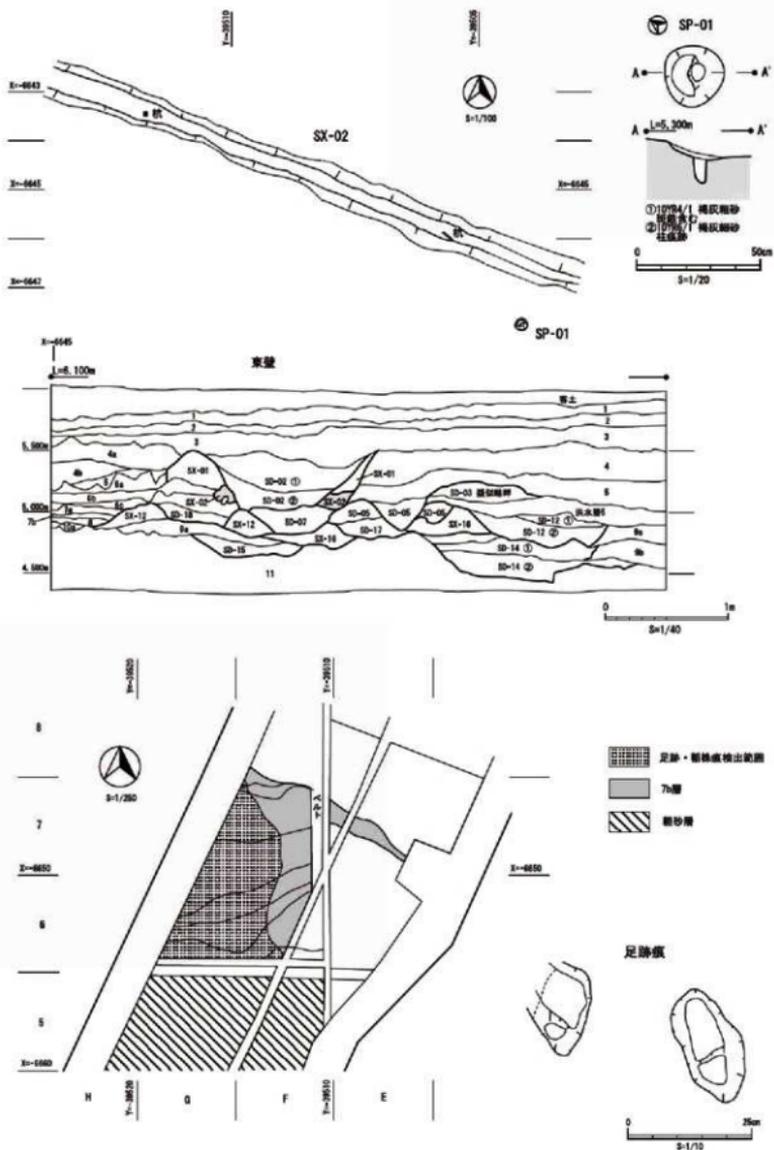
第 222 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-35~43 実測図



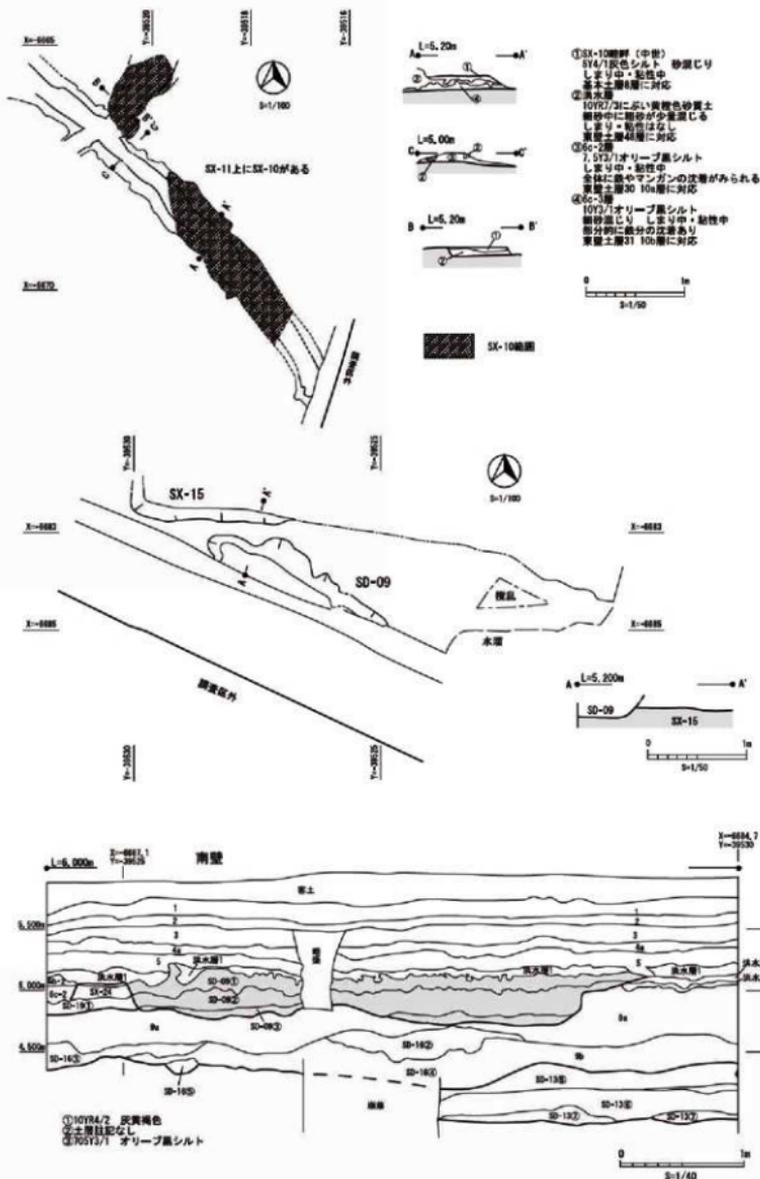
第 223 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6a層・6b層・6c層コンタ図

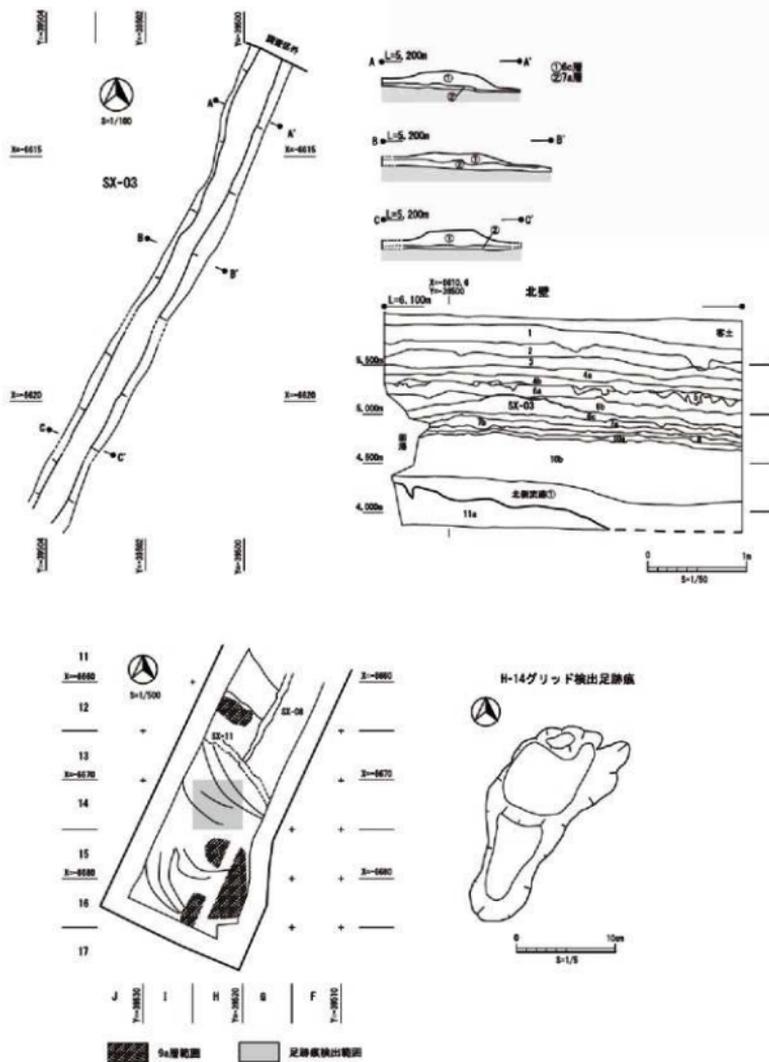


第 224 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6c-2 層・7a 層コンタ図・6c-2 層鉄分沈着範囲図

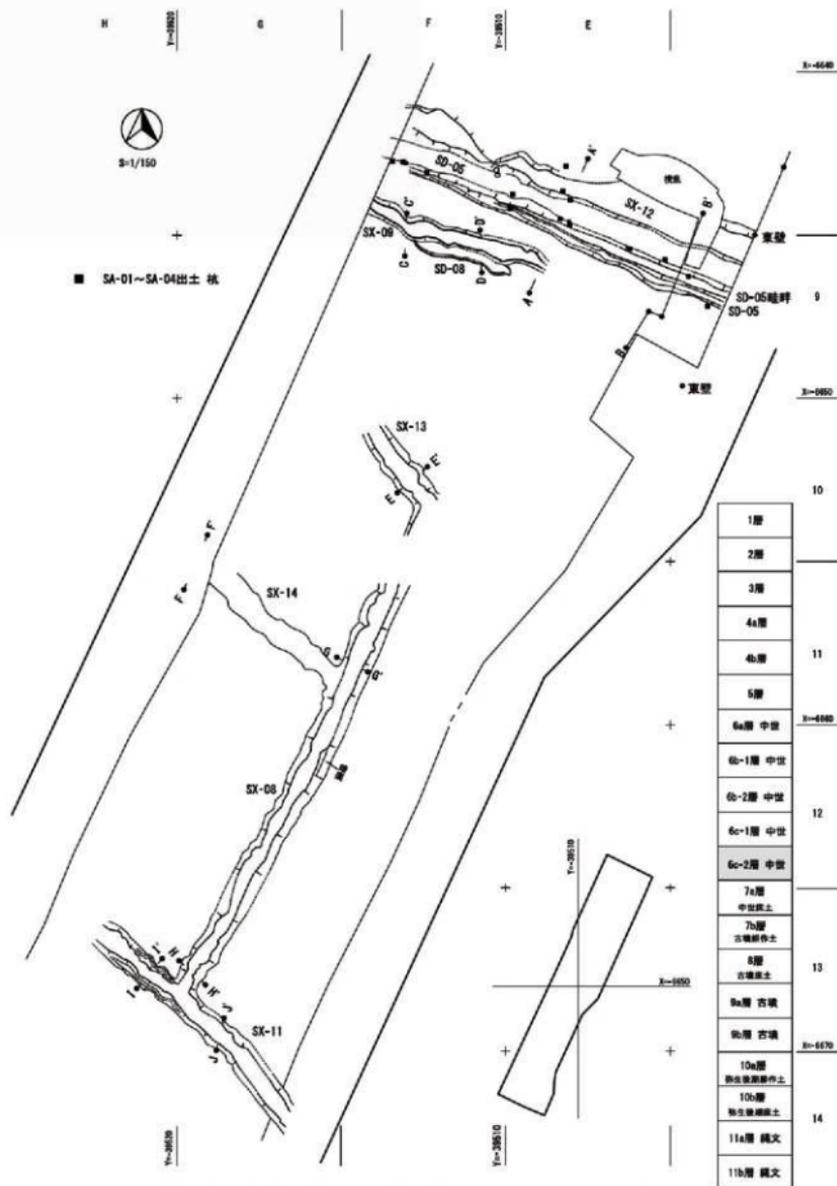


第 225 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SX-02・SP-01 実測図・6a 層足跡検出範囲

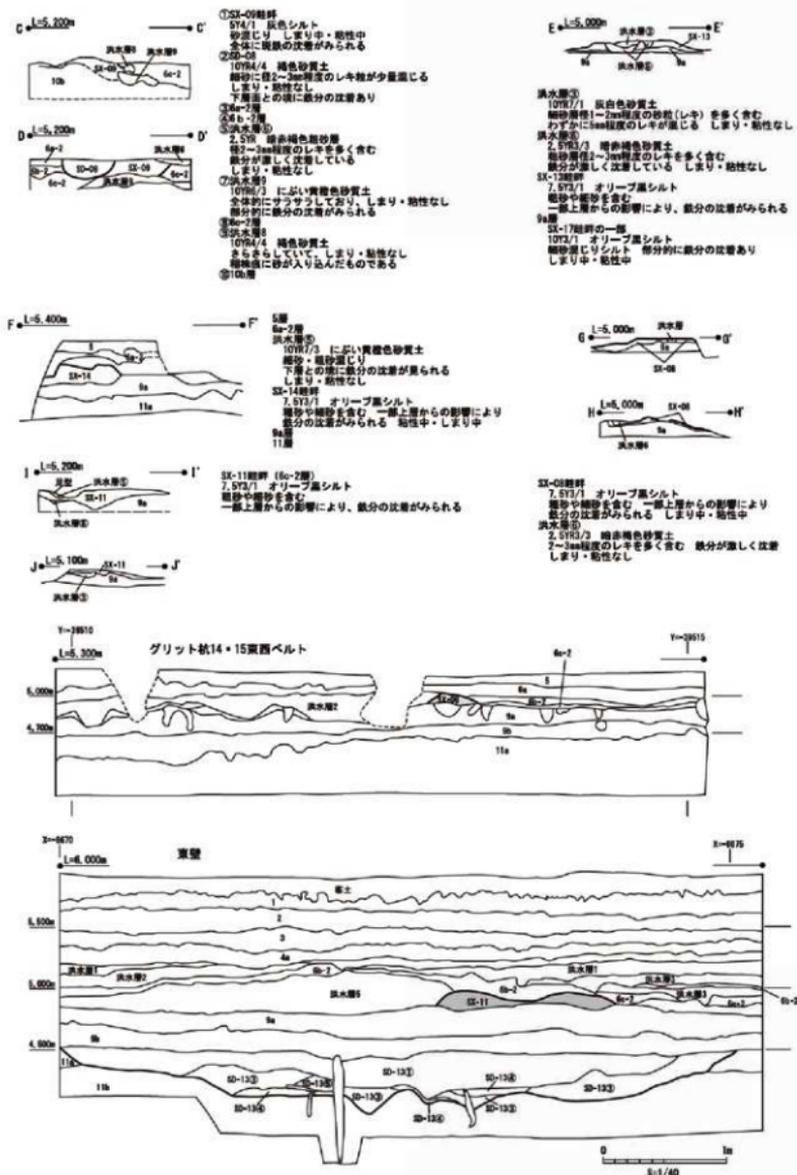




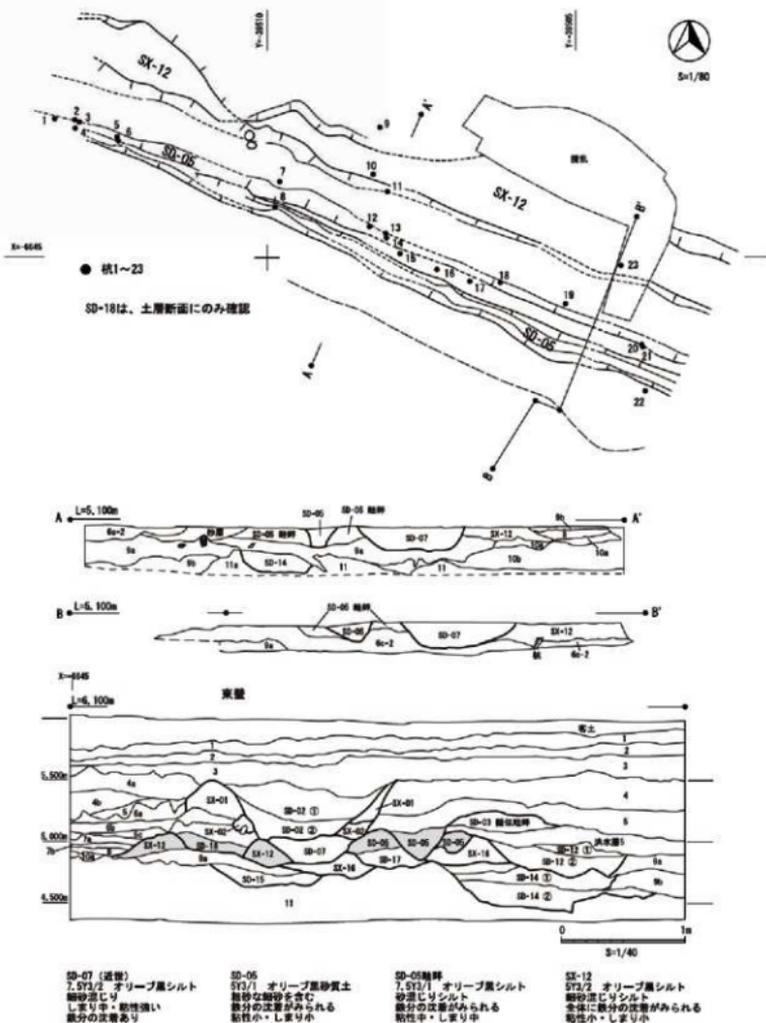
第 227 図 両迫間日渡遺跡 O6-I 区 SX-03 実測図・6c-2 層足跡検出範囲



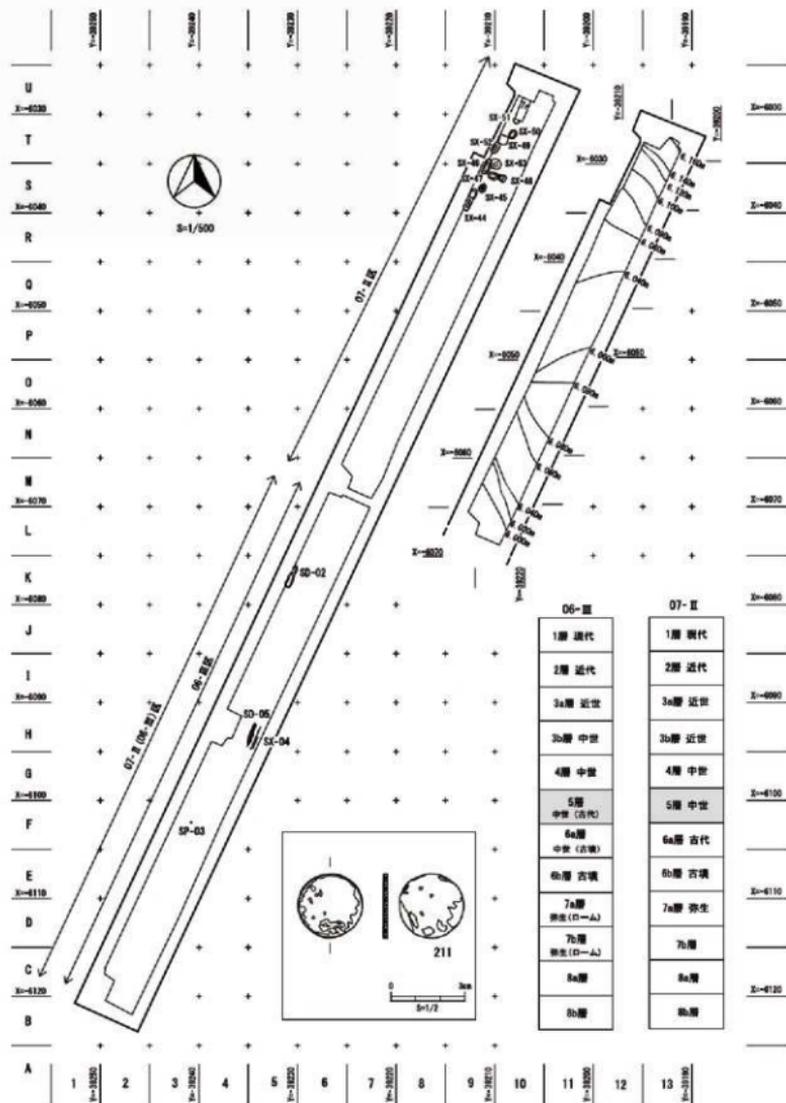
第 228 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6C-2 層遺構配置図



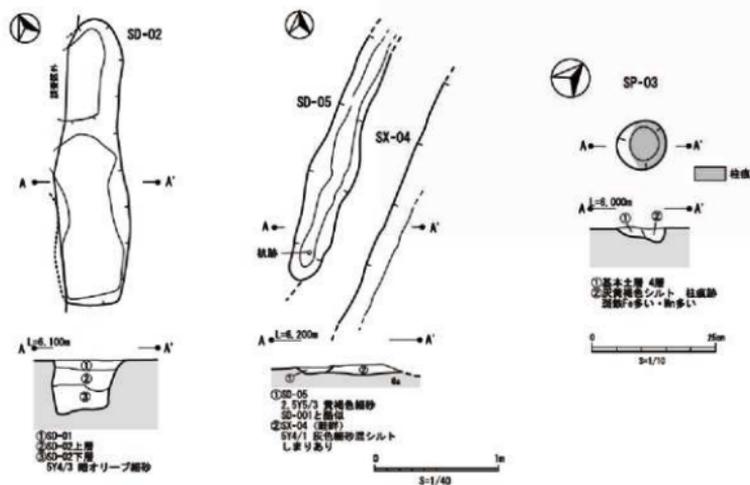
第 229 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6c-2 層 SX-08・09・11・13~14・SD-08 実測図



第 230 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区
6c-2 層 SD-05・18・SX-12 実測図・杭 1~23 検出位置図



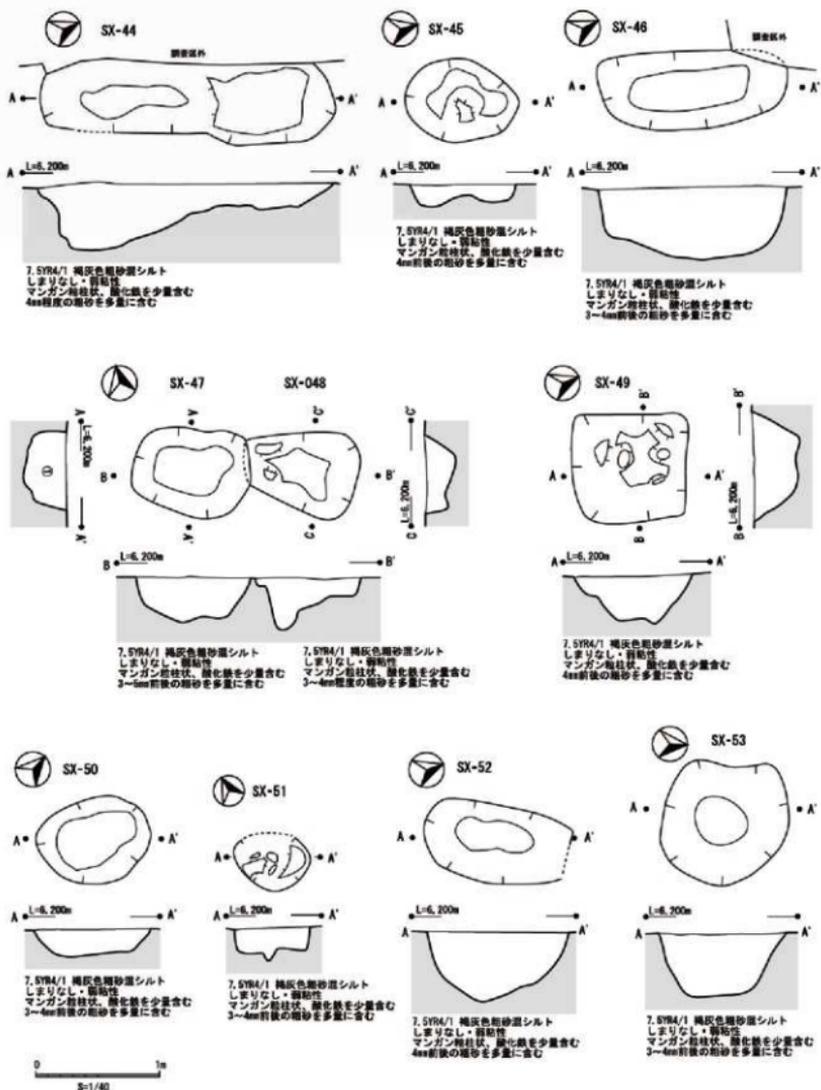
第 232 図 玉名平野条里跡 O6-Ⅲ区・O7-Ⅱ区 5層遺構配置図及び5層直上コンタ図



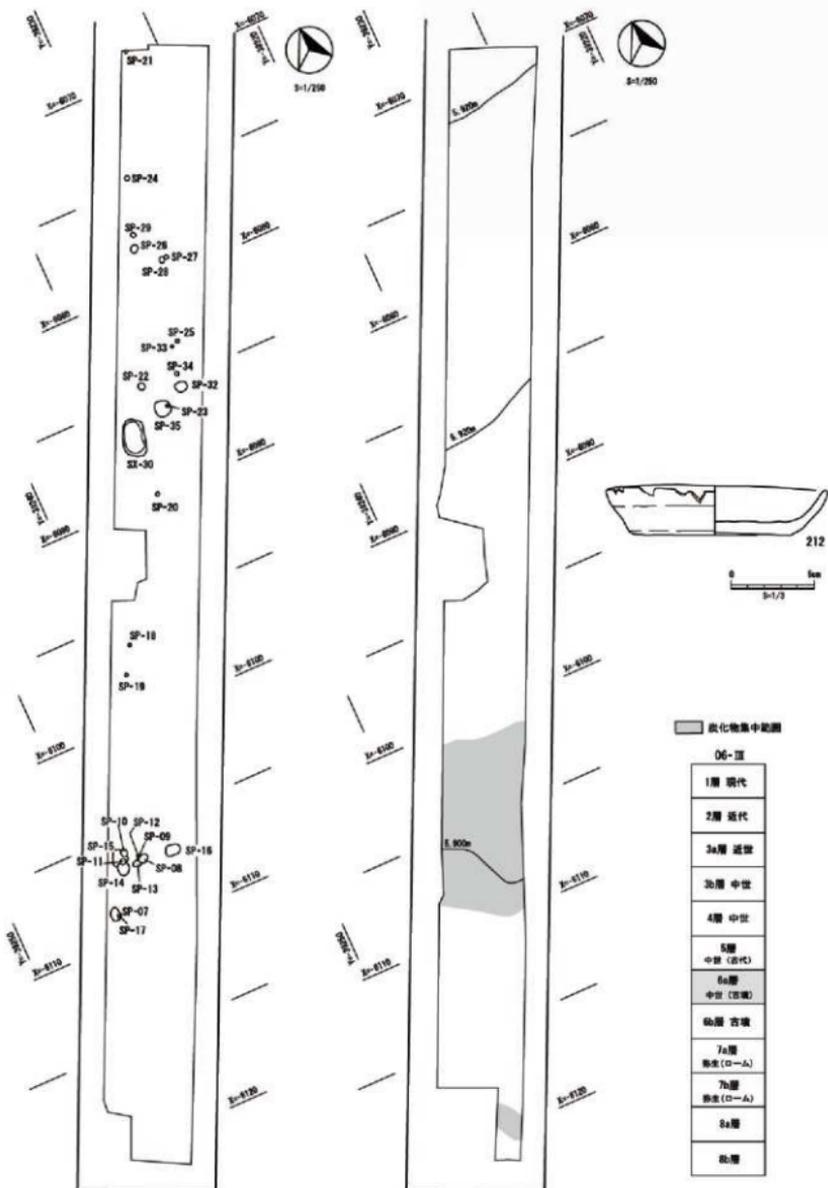
第 233 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 SD-02・05・SX-04・SP-03 実測図



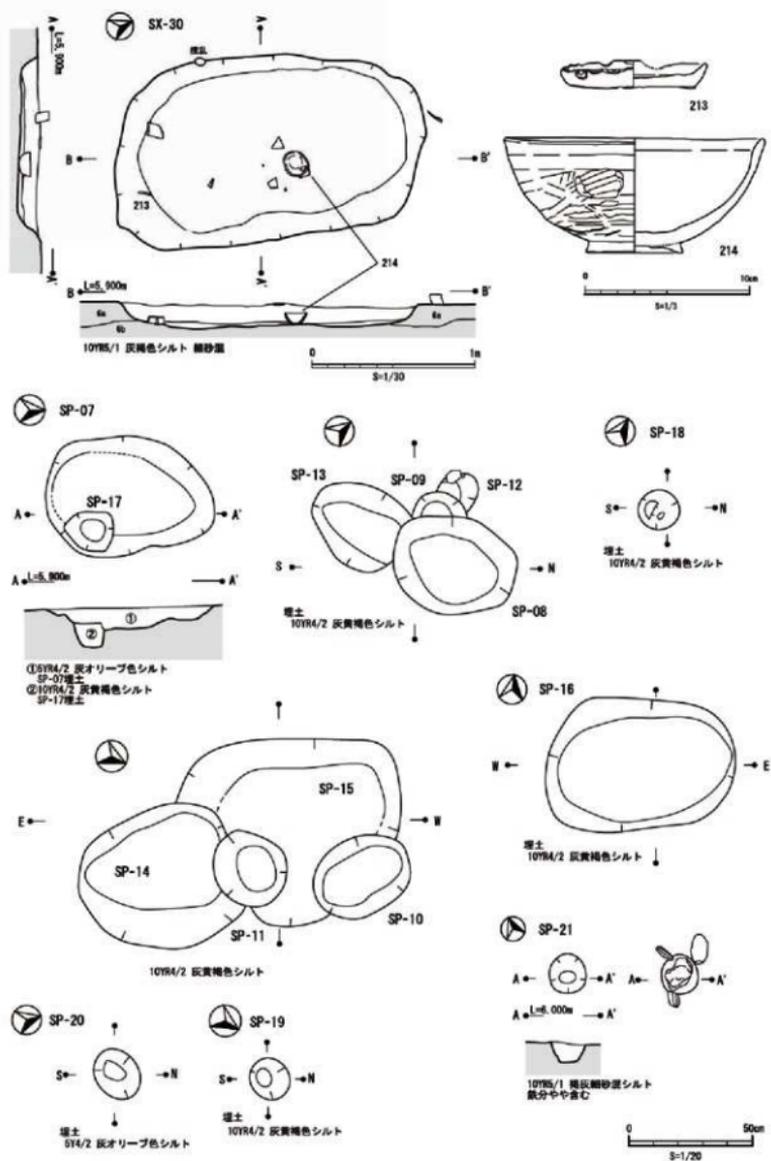
発掘作業風景



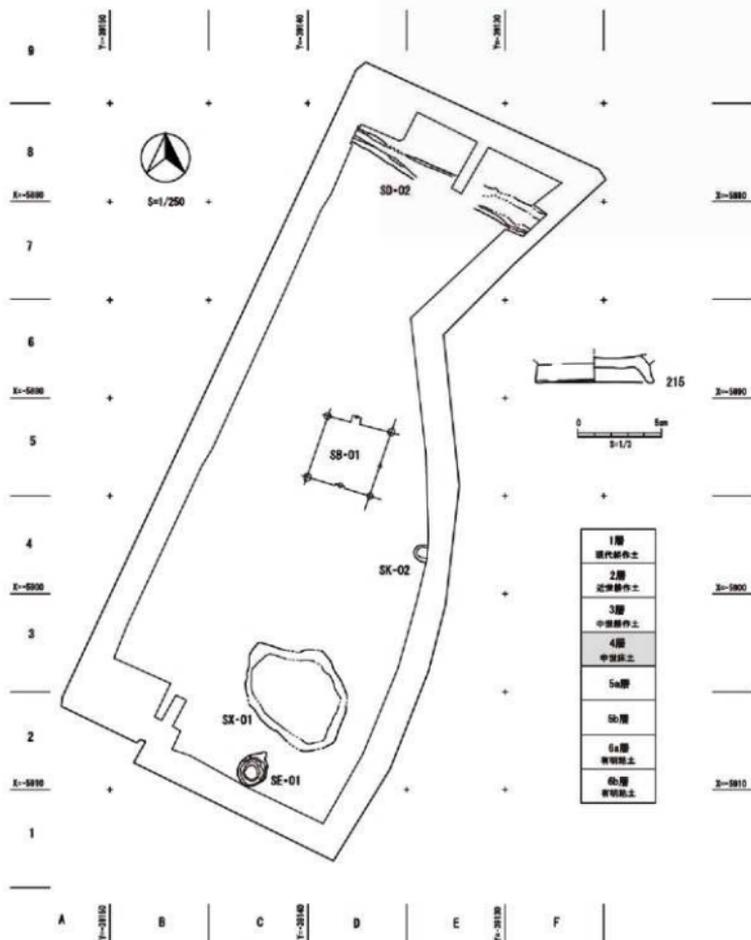
第 234 図 玉名平野条里跡 07-II区 SX-44~53 実測図



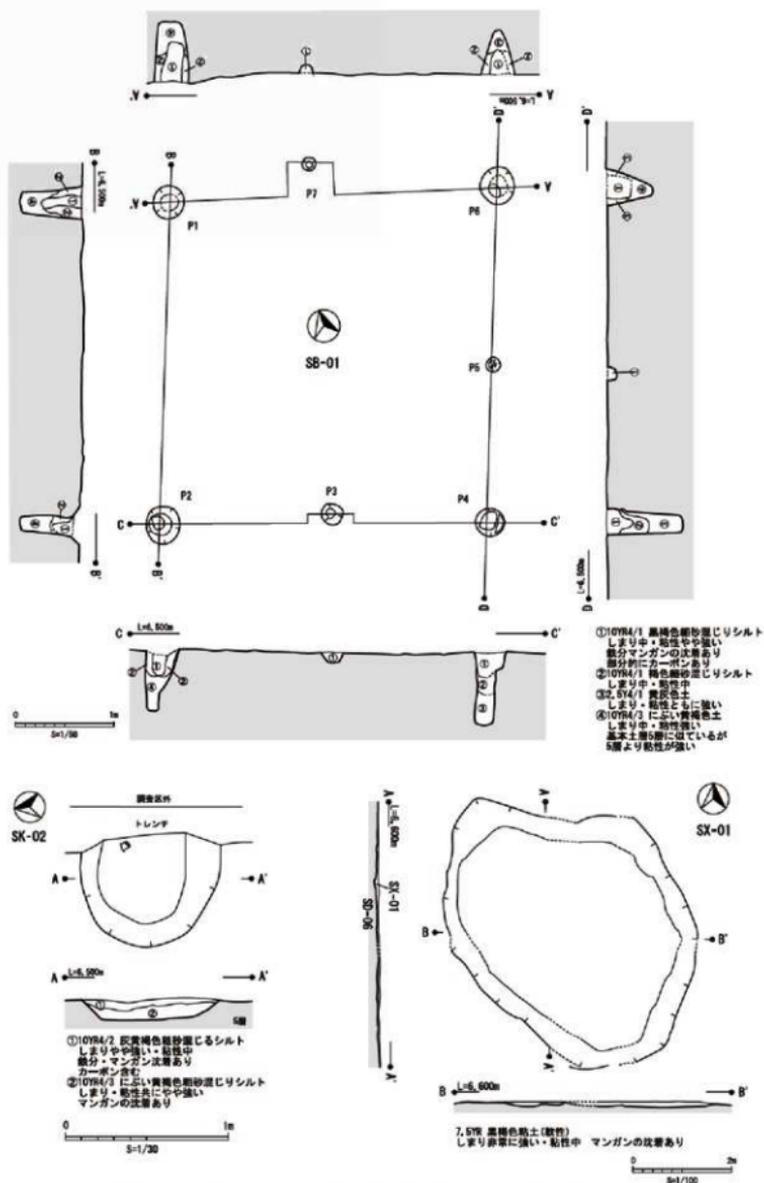
第 235 図 玉名平野条里跡 06-III区 6a層遺構配置図・6a層直上コンタ図及び出土遺物実測図



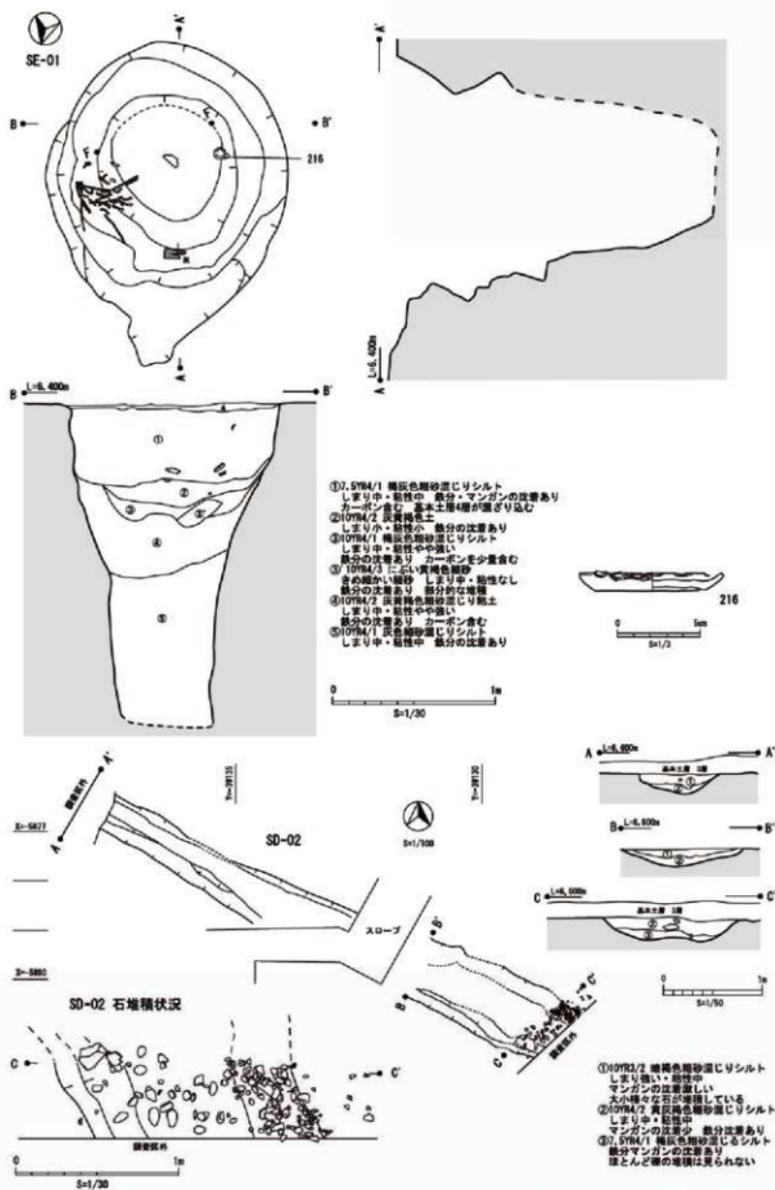
第 236 図 五名平野条里跡 06-Ⅲ区
SX-30・SP-07～21 実測図及び出土遺物実測図



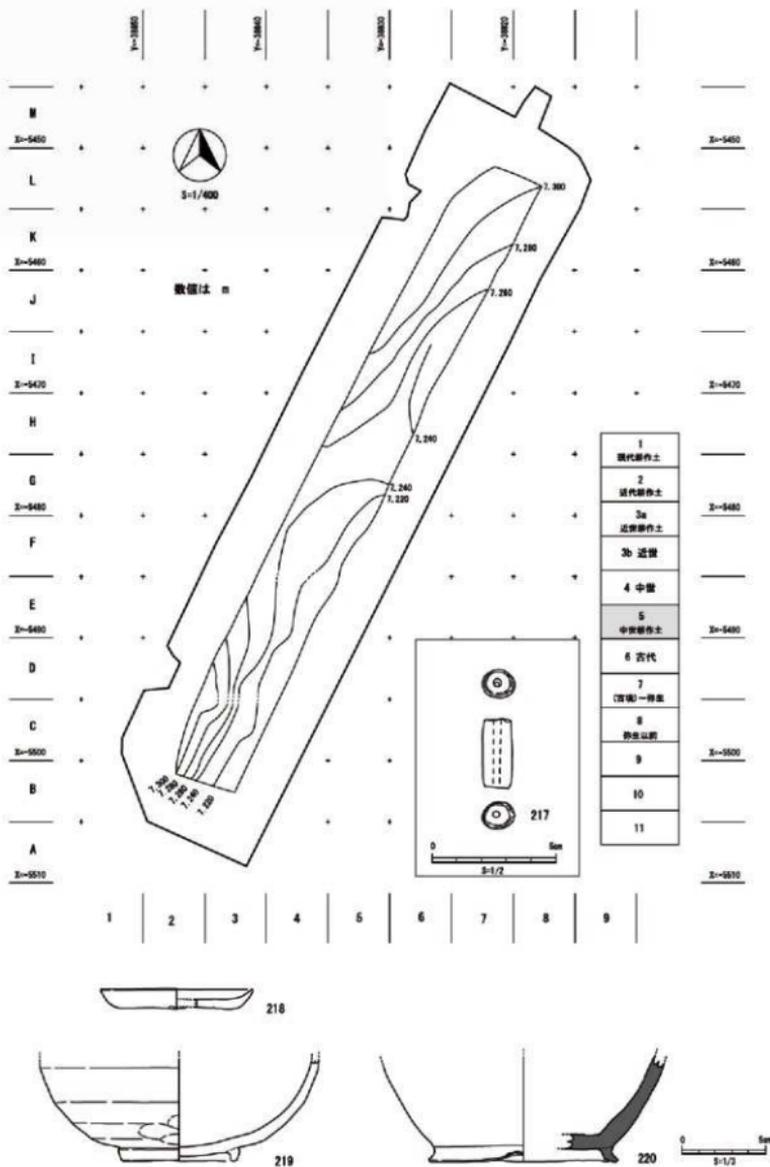
第 237 図 玉名平野桑里跡 07-I 区 4 層遺構配置図及び出土遺物実測図



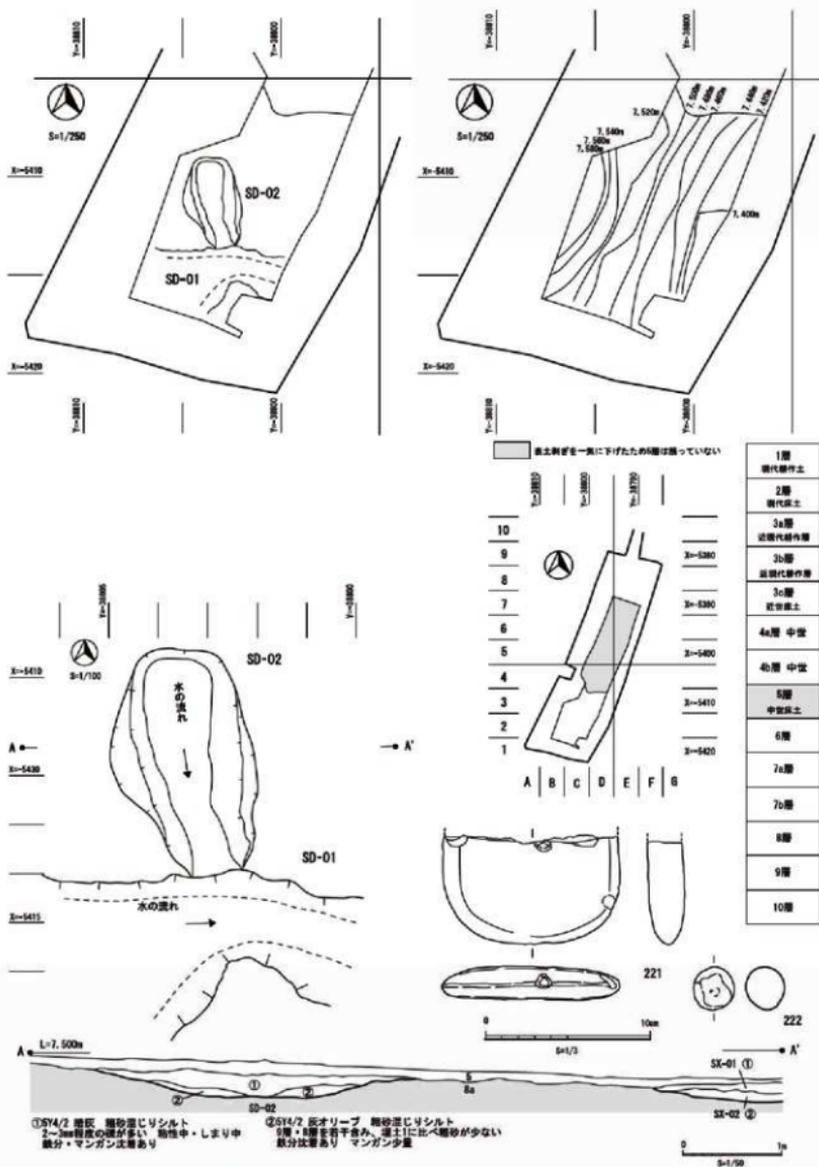
第 238 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SB-01・SK-02・SX-01 実測図



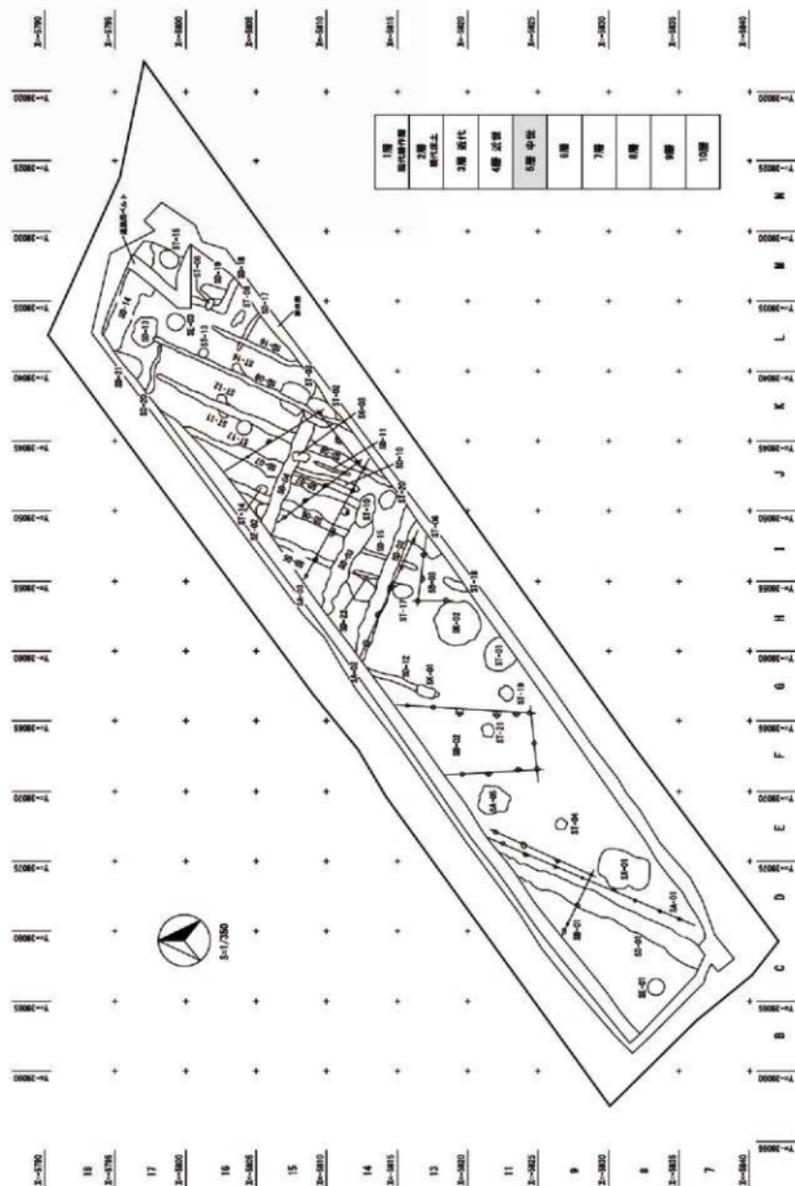
第 239 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SE-01・SD-02 実測図及び出土遺物実測図



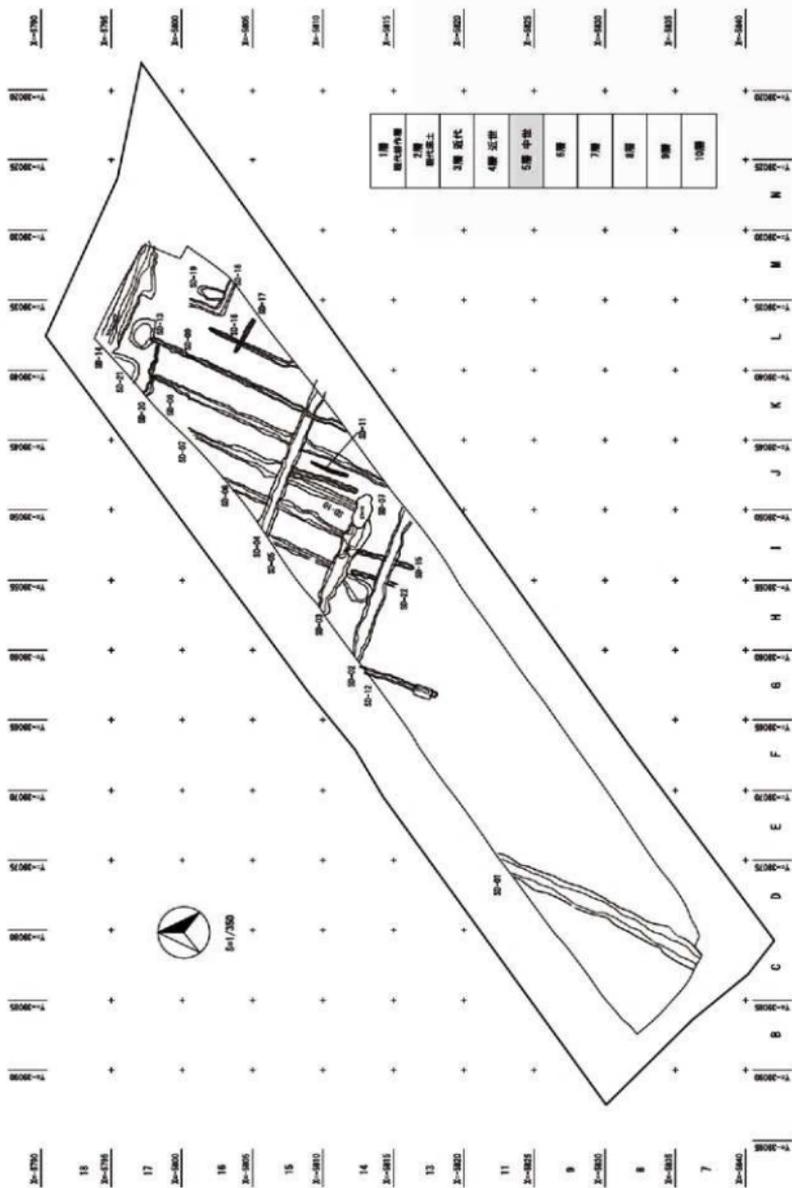
第 240 図 玉名平野条里跡 07-IV区 5層コンタ図及び出土遺物実測図



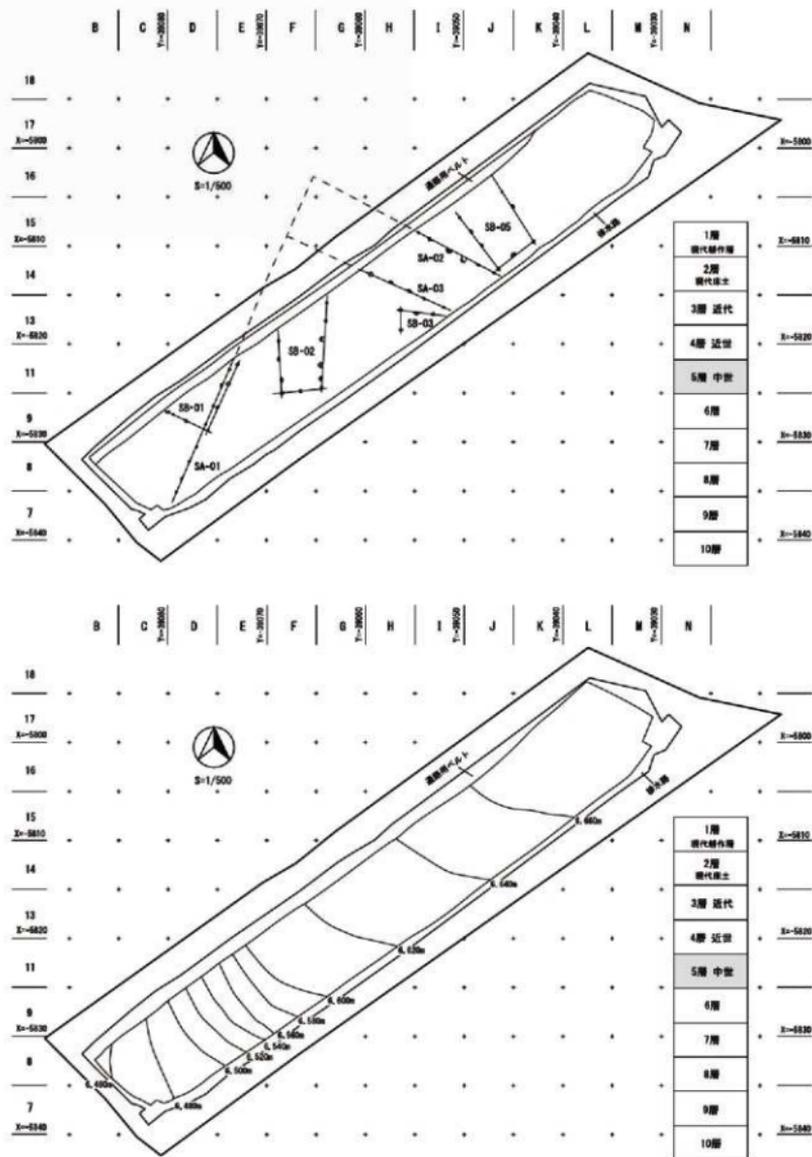
第241図 玉名平野糸里跡 07-V区
5層構成配置図・コンタ図・SD-01・02 実測図及び出土遺物実測図



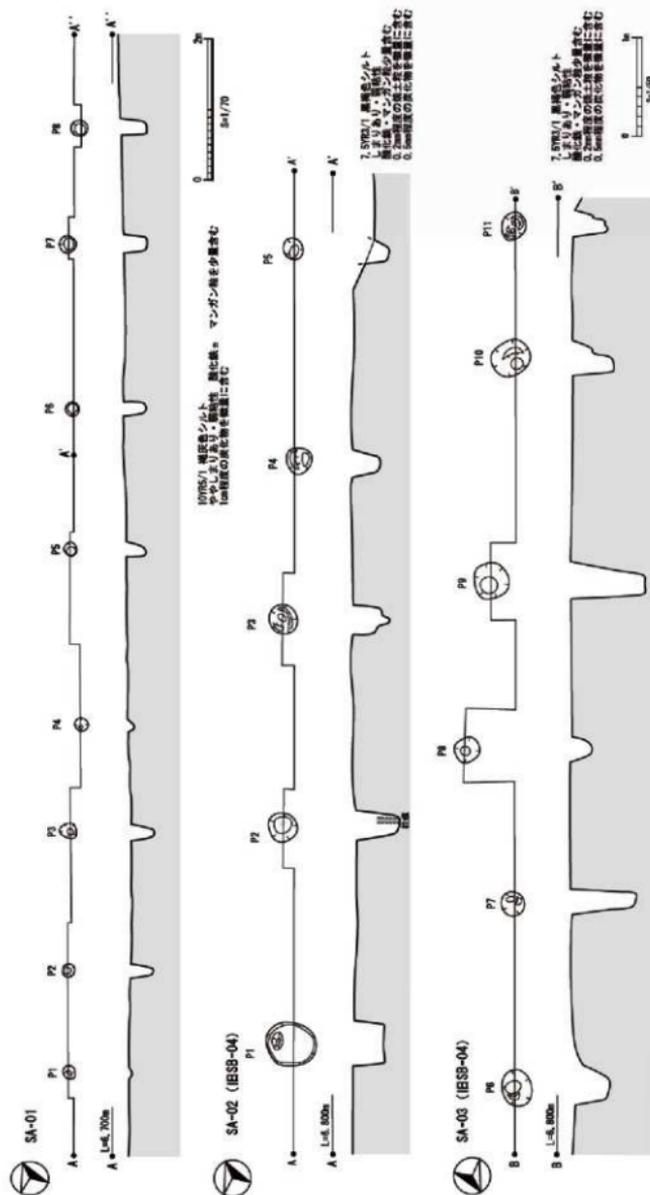
第 242 図 五名平野桑里路 08-I 区 5 層構造配置図



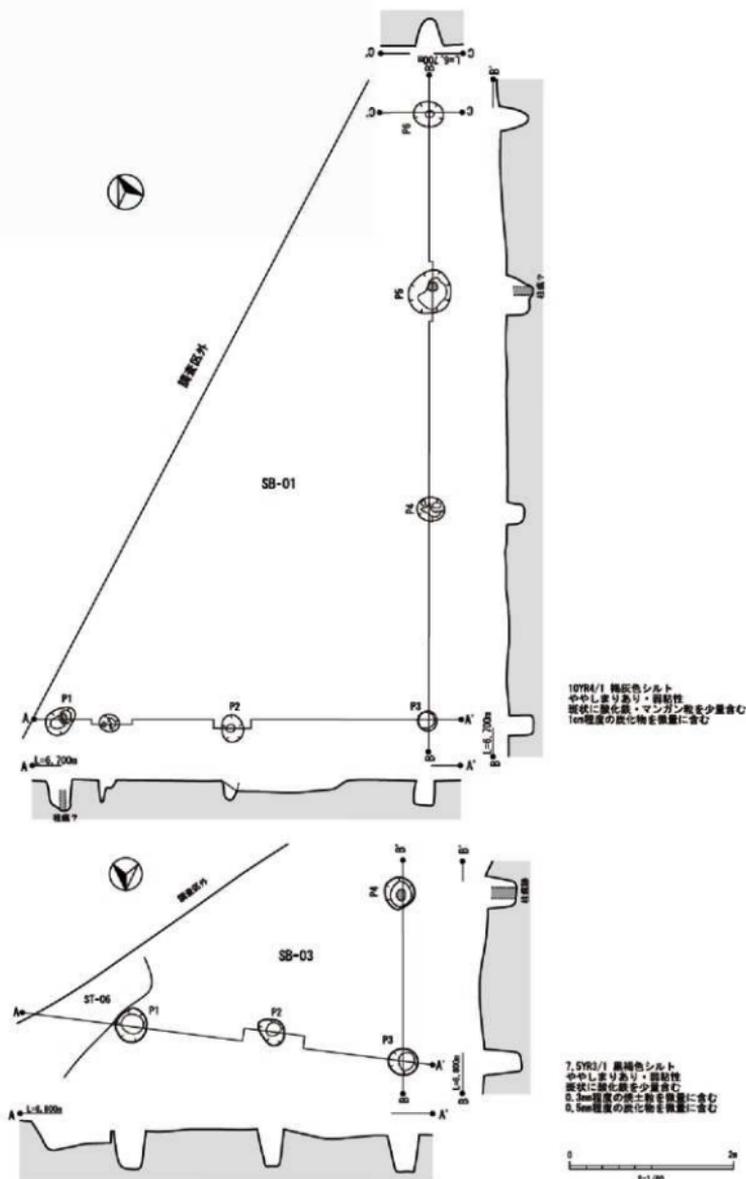
第243図 玉名平野条里跡08-I区 5層遺構配置図 (SDのみ)



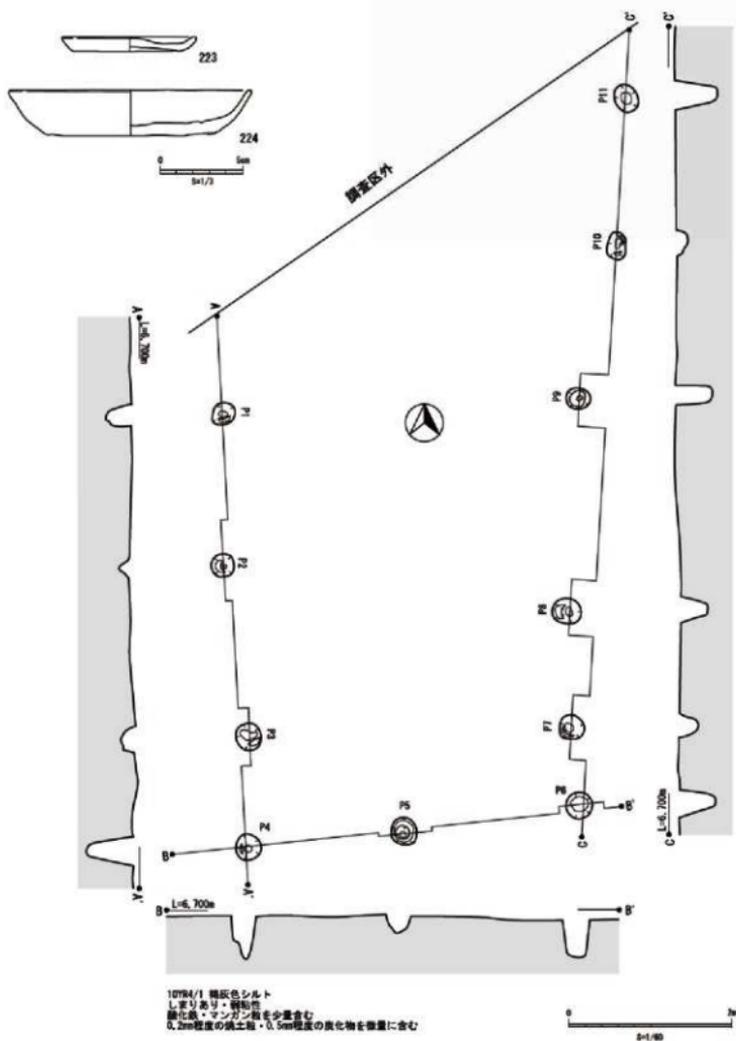
第 244 図 玉名平野条里跡 08-I 区 5 層遺構配置図 (SA・SB のみ) 及びコンタ図



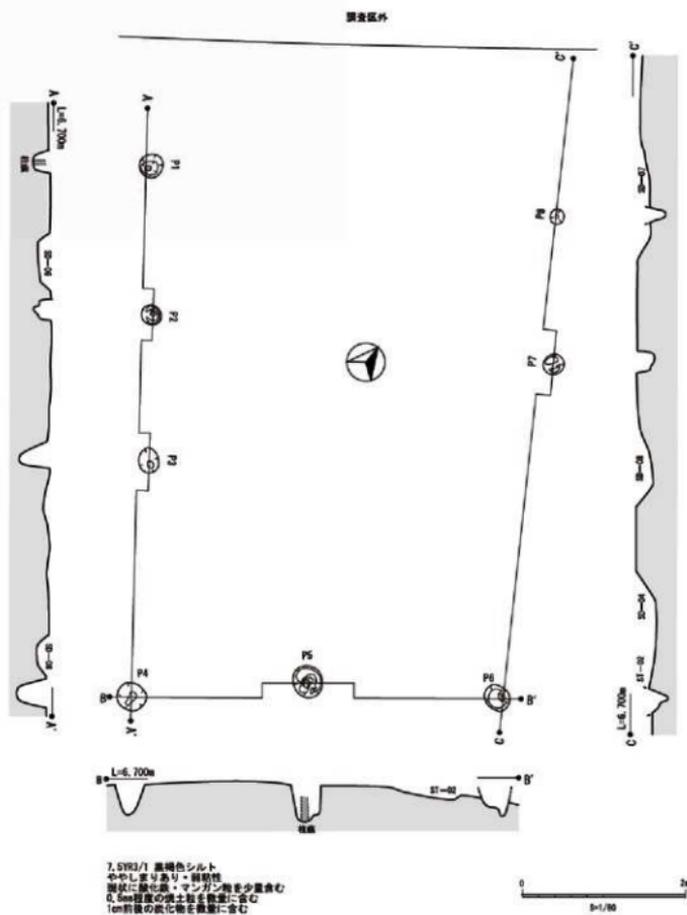
第 245 図 玉名平野奈良里跡 08- I 区 SA-01~03 実測図



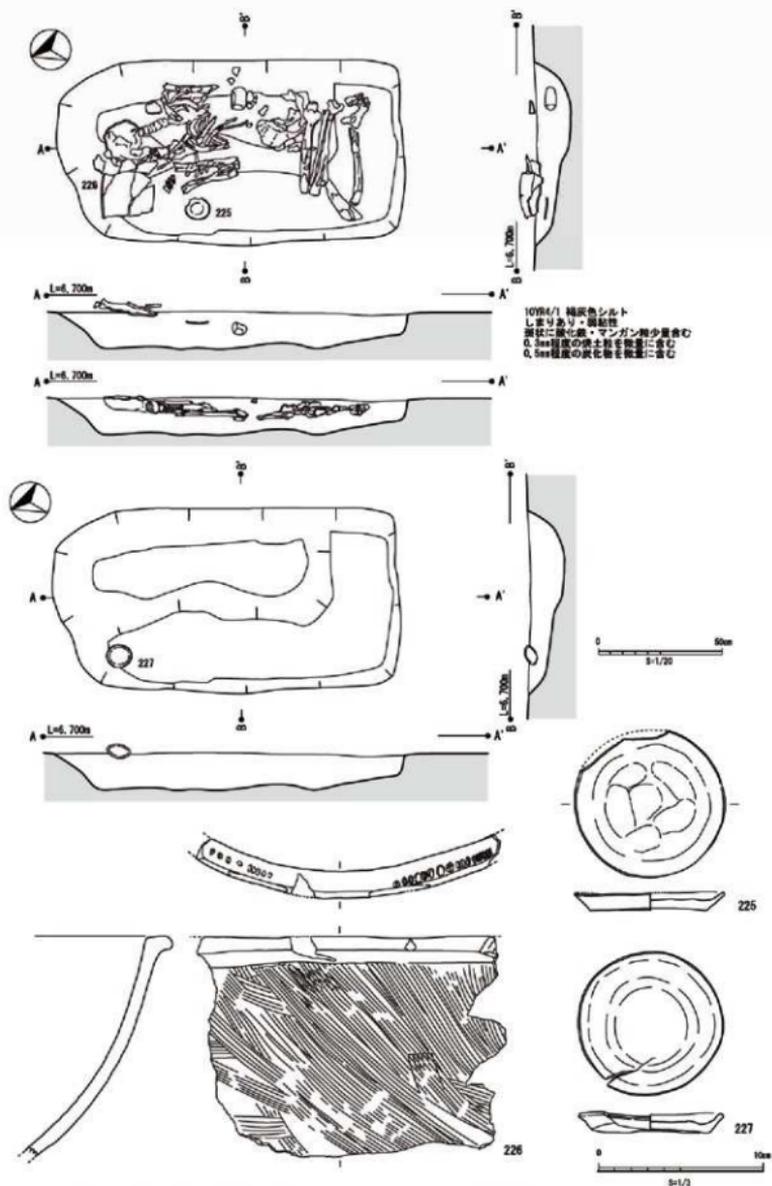
第 246 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-01・03 実測図



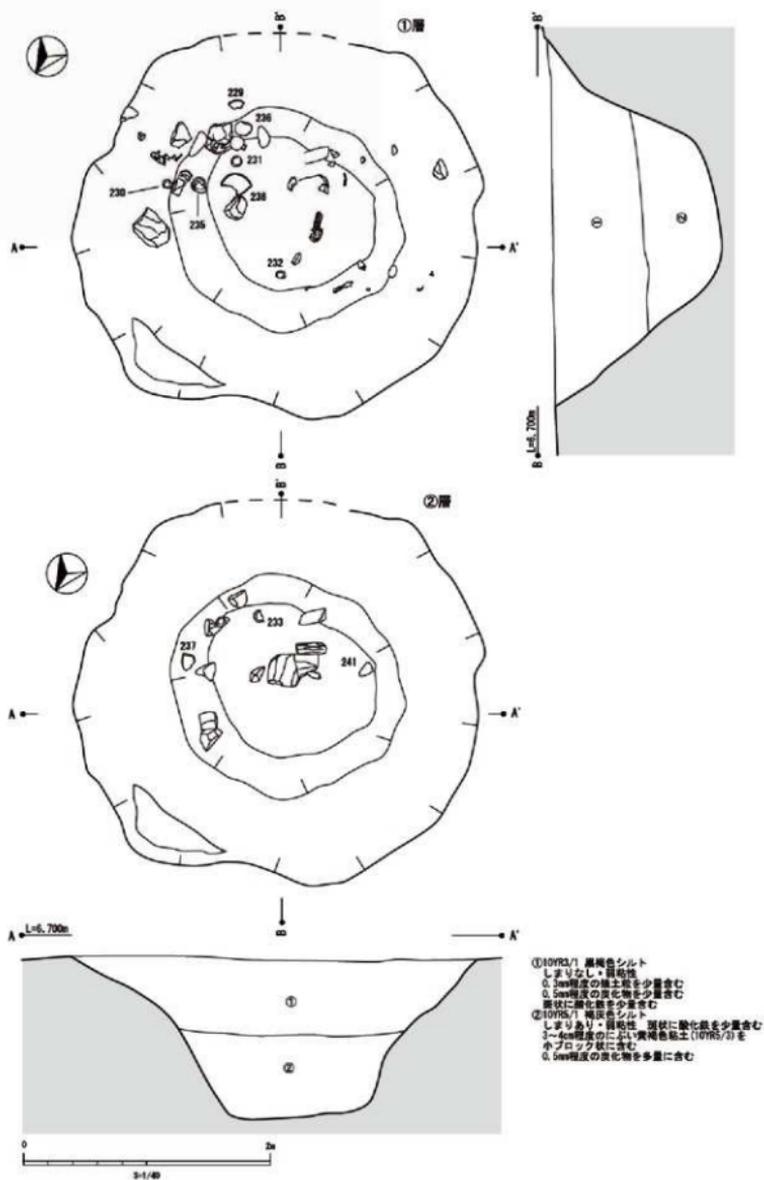
第 247 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-02 実測図及び出土遺物実測図



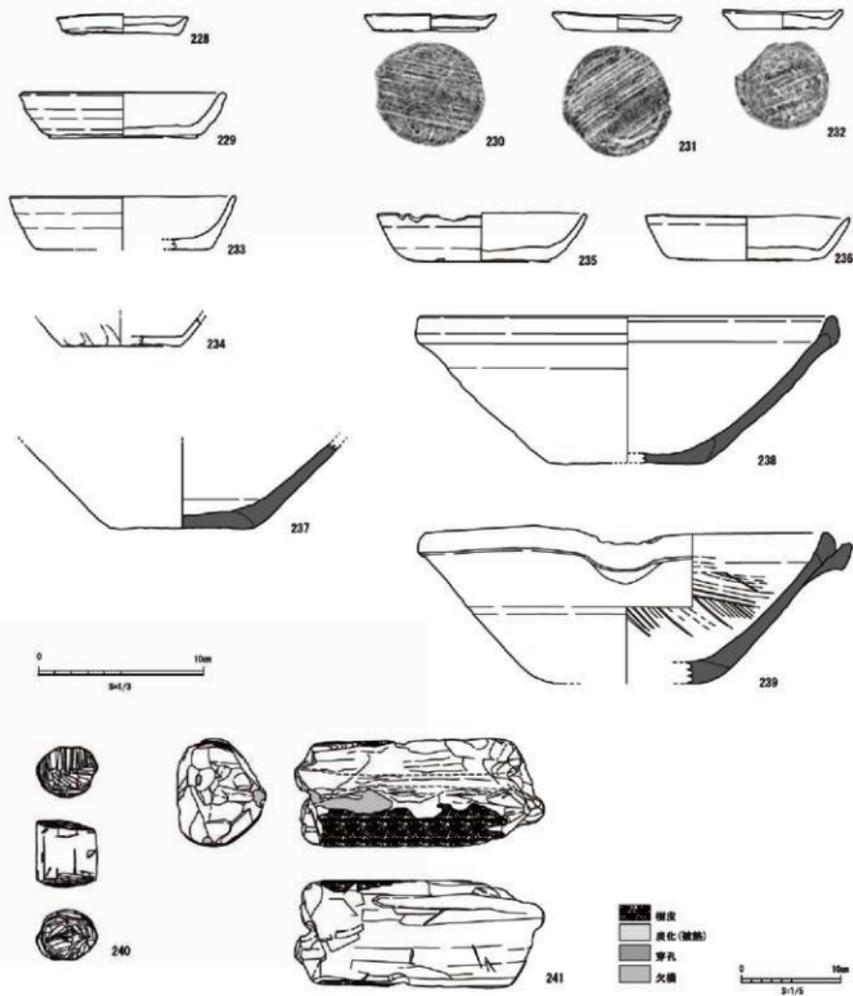
第 248 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-05 実測図



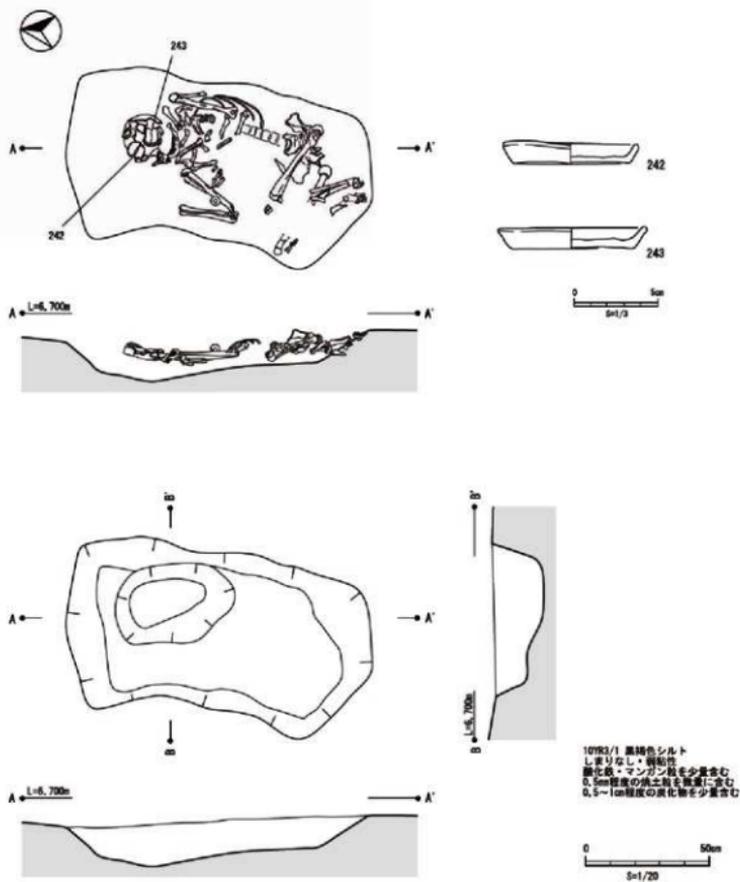
第 249 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-01 実測図及び出土遺物実測図



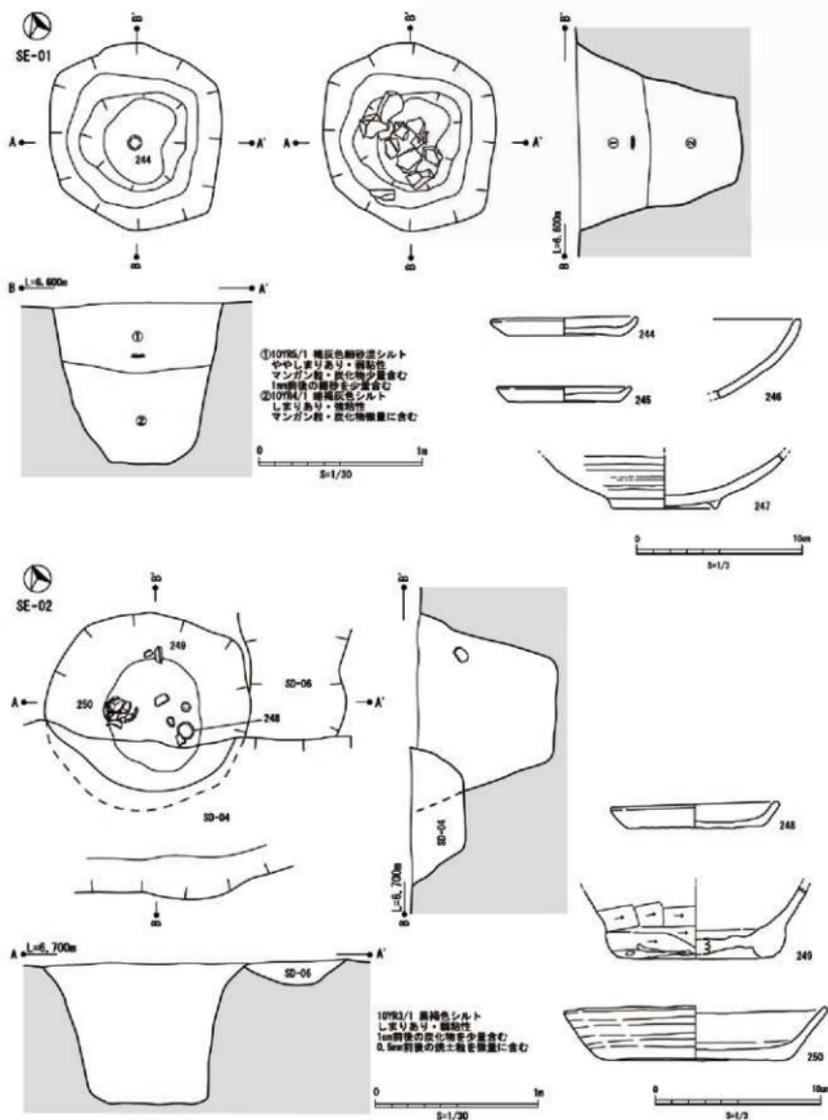
第 250 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-02 実測図



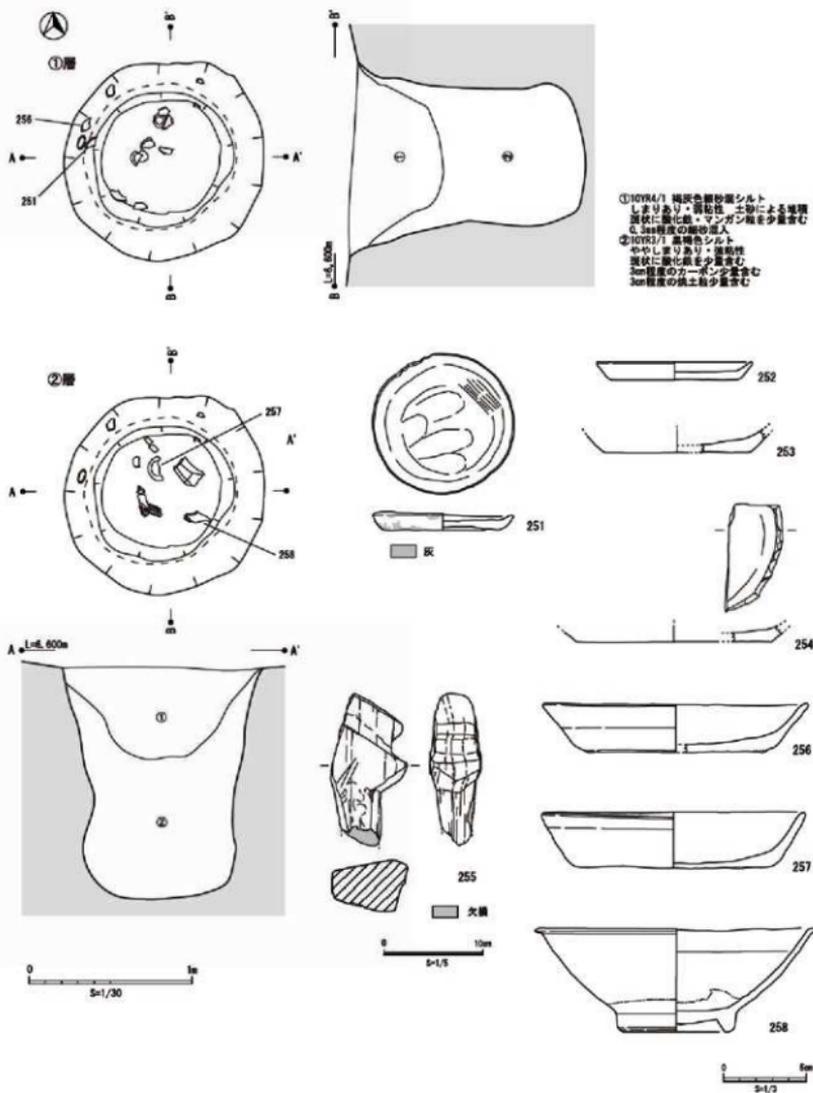
第 251 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-02 出土遺物実測図



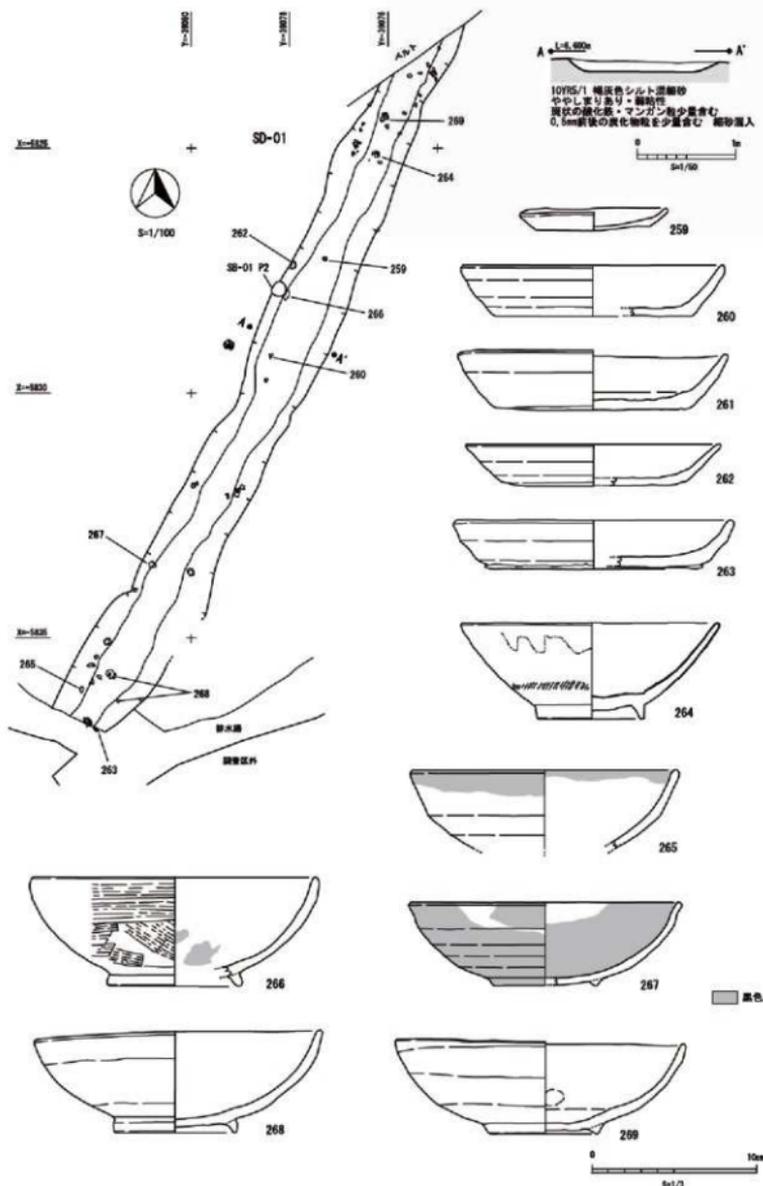
第 252 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-03 実測図及び出土遺物実測図



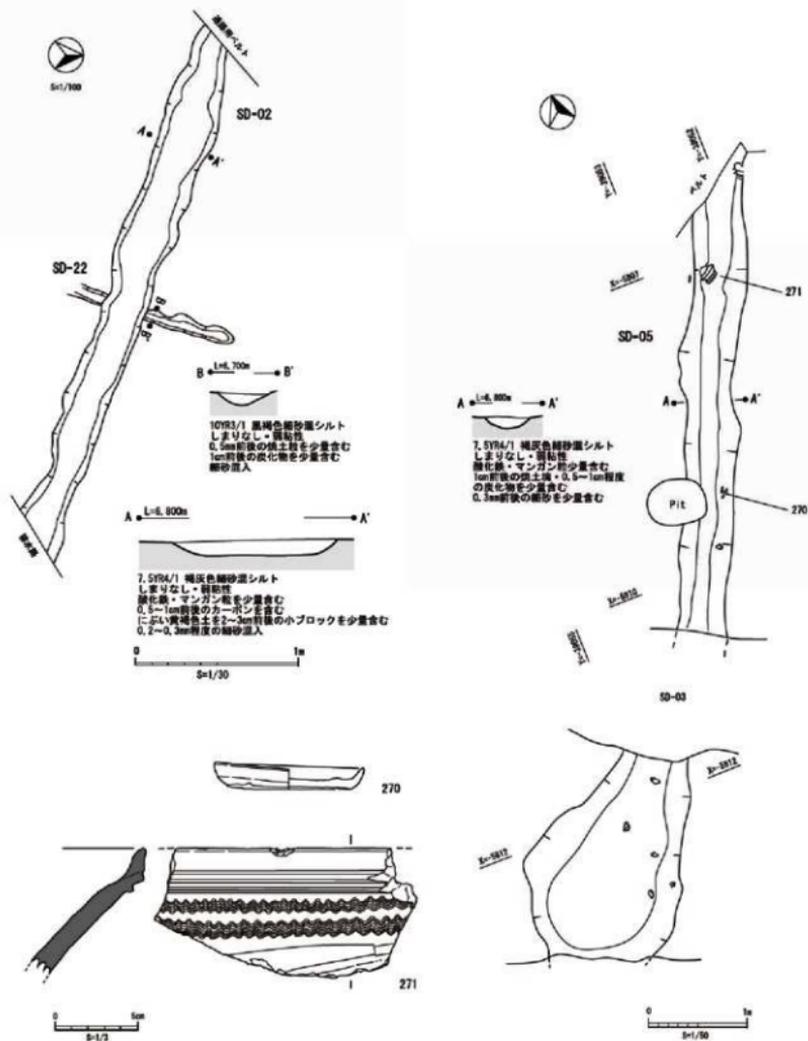
第 253 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SE-01・02 実測図及び出土遺物実測図



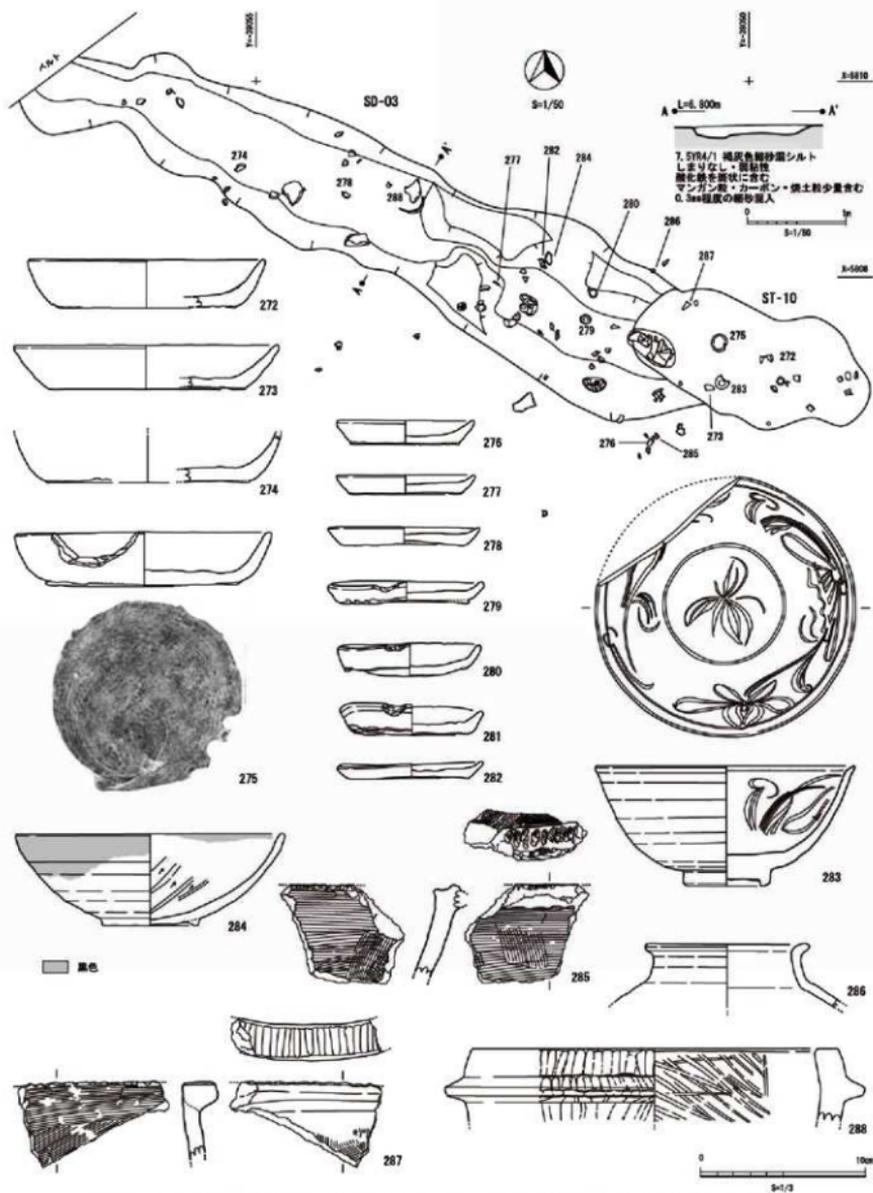
第 254 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SE-03 実測図及び出土遺物実測図



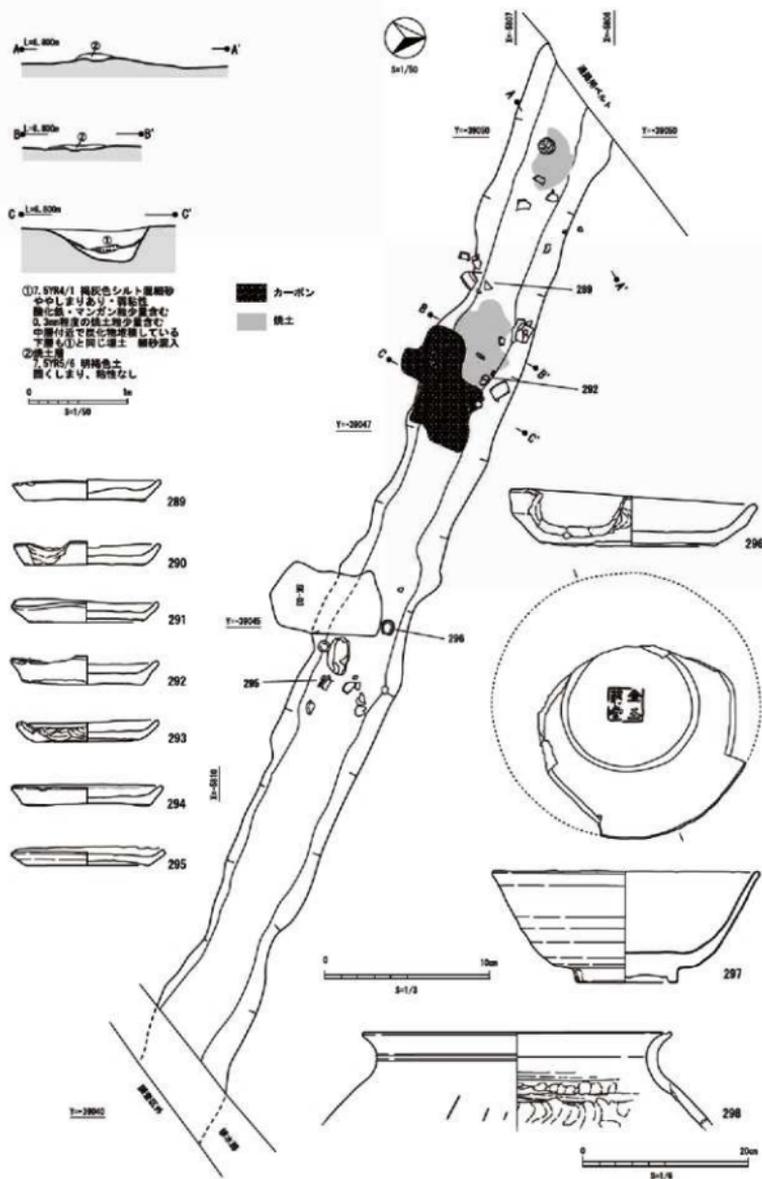
第 255 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-01 実測図及び出土遺物実測図



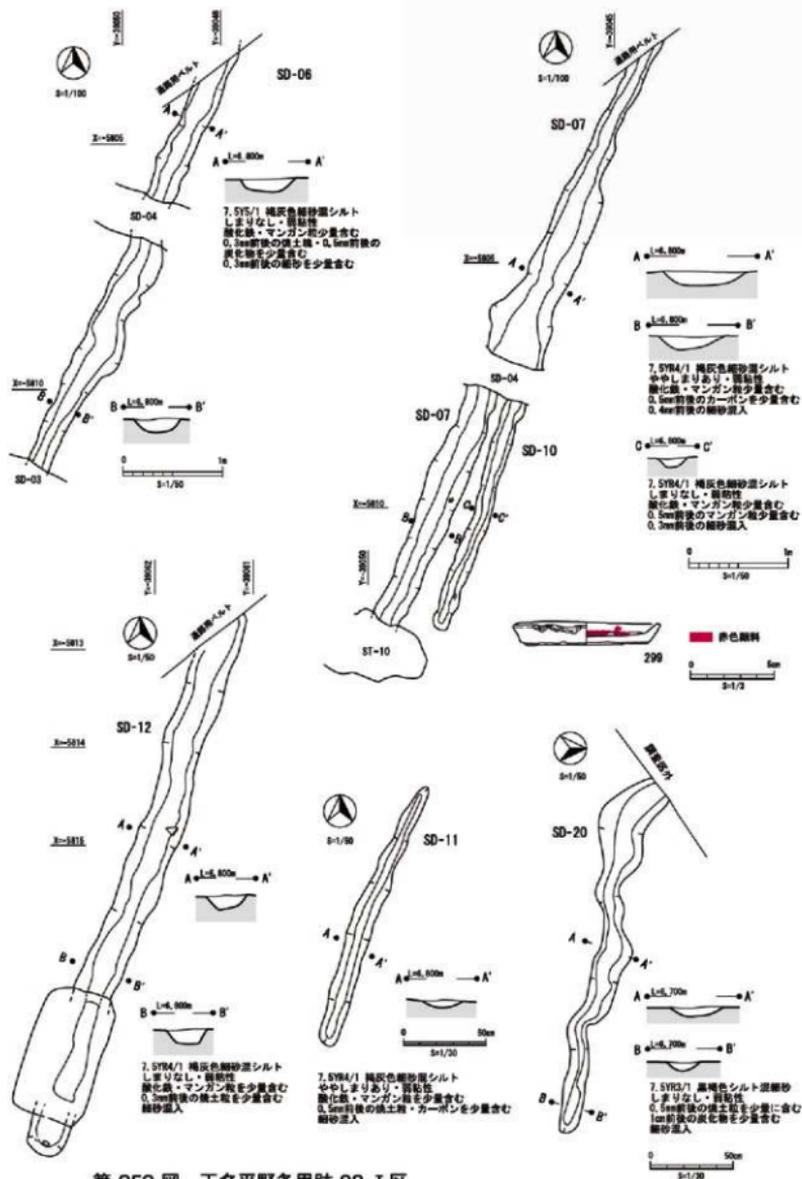
第 256 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-02・05・22 実測図及び出土遺物実測図



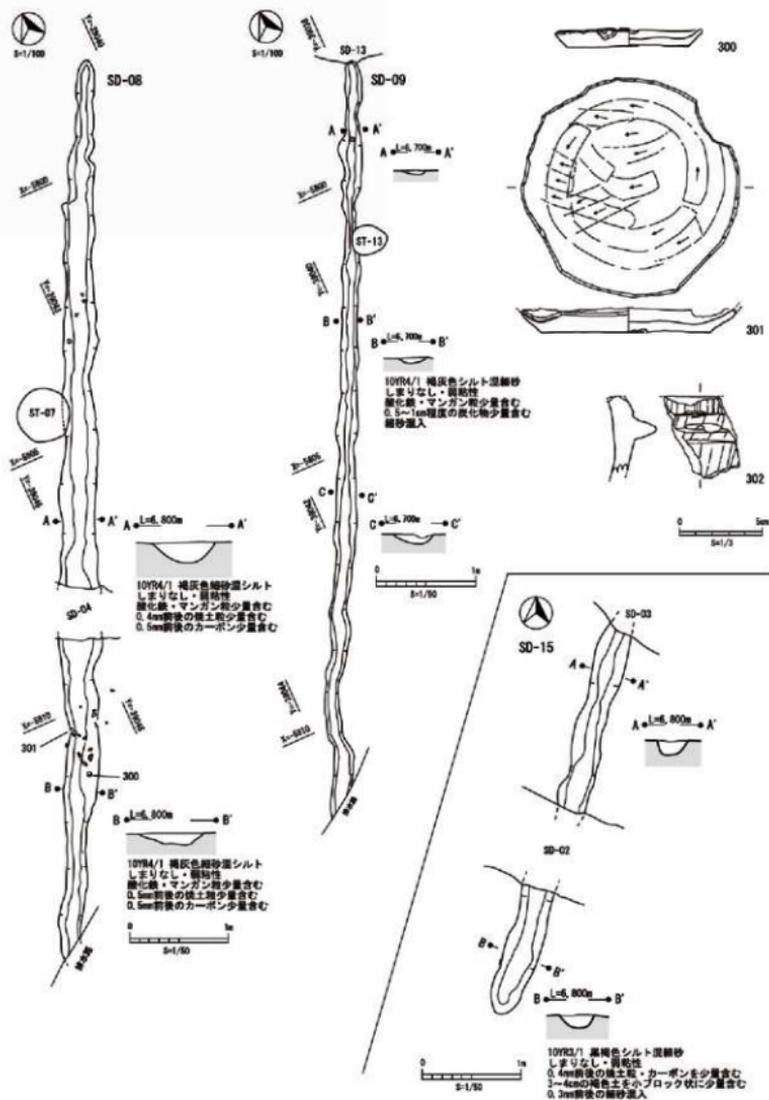
第 257 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-03・ST-10 実測図及び出土遺物実測図



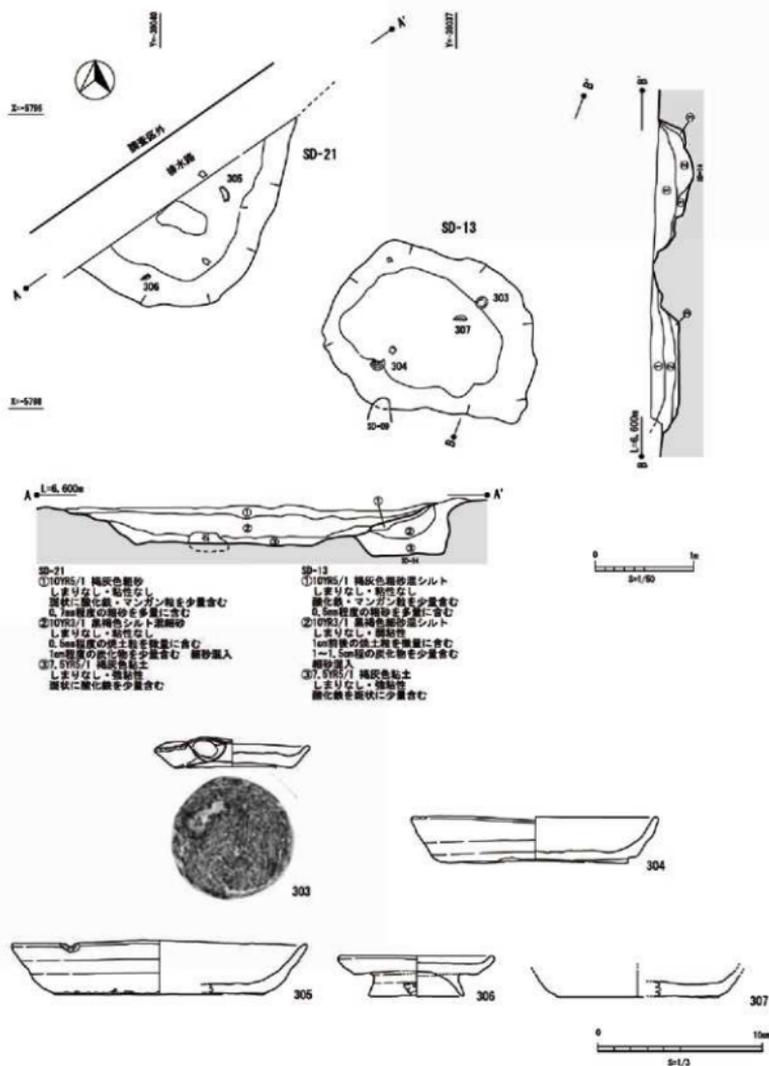
第 258 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-04 実測図及び出土遺物実測図



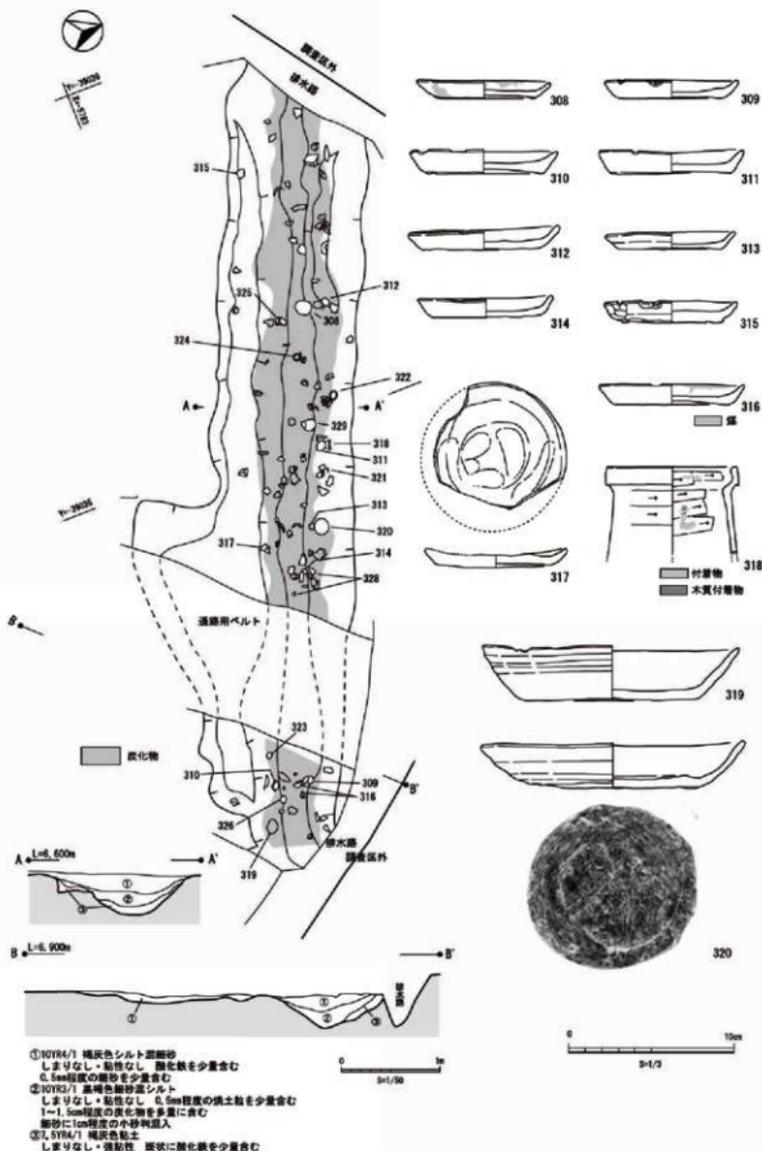
第 259 図 玉名平野条里跡 08-I 区
 SD-06・07・10~12・20 実測図及び出土遺物実測図



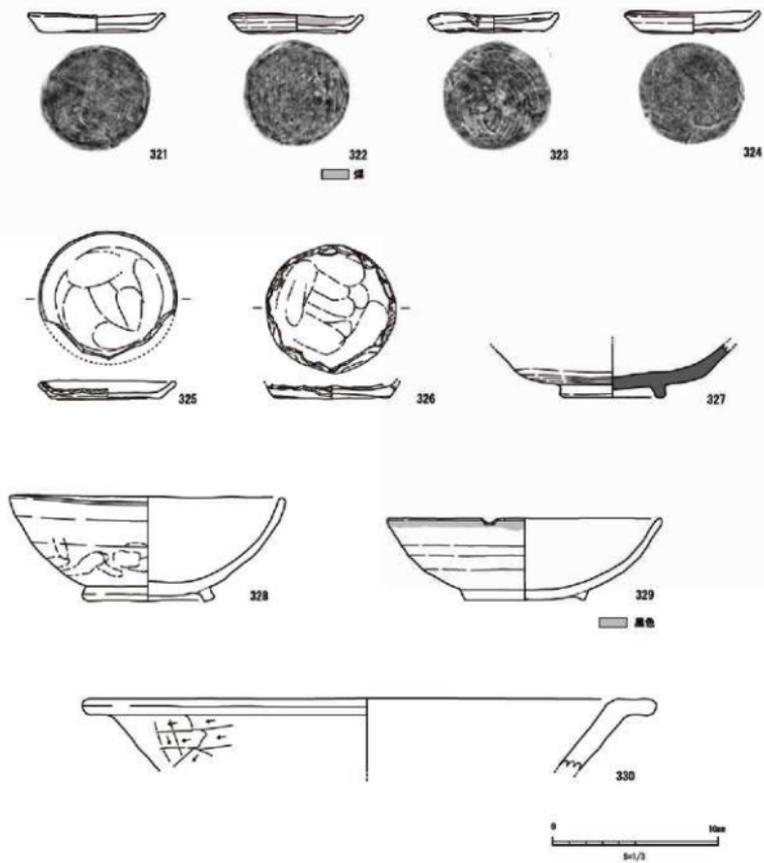
第 260 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-08・09・15 実測図及び出土遺物実測図



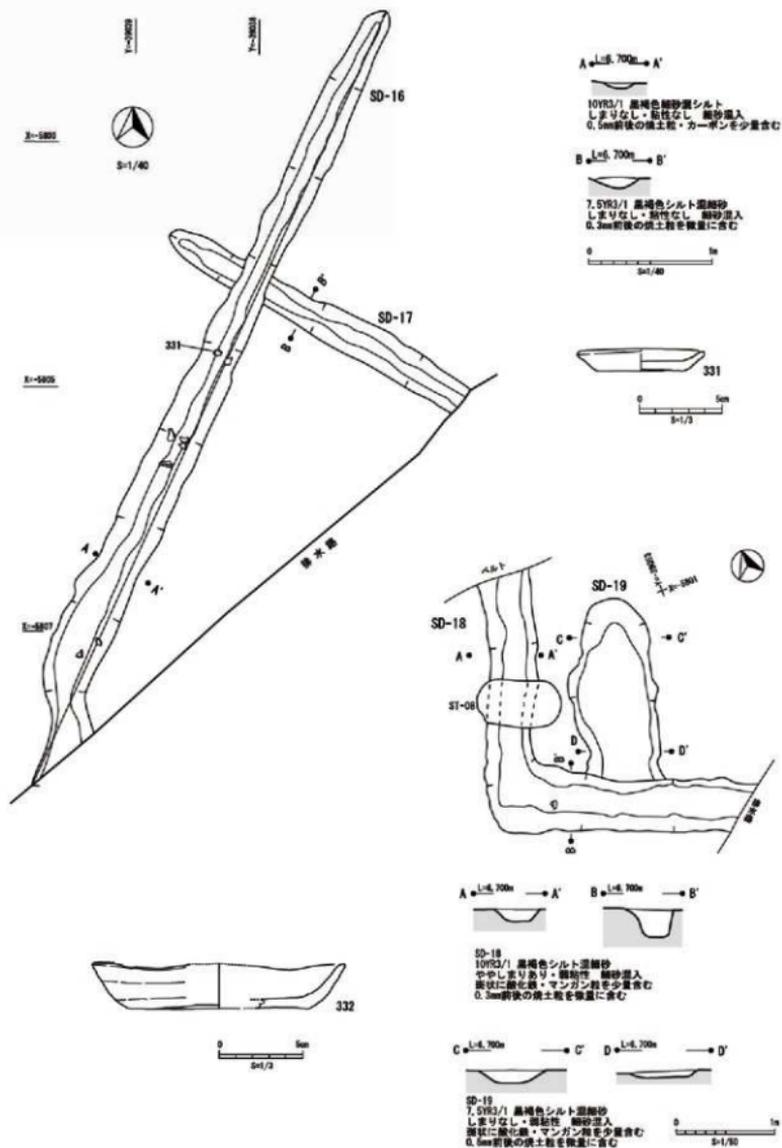
第 261 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-13・21 実測図及び出土遺物実測図



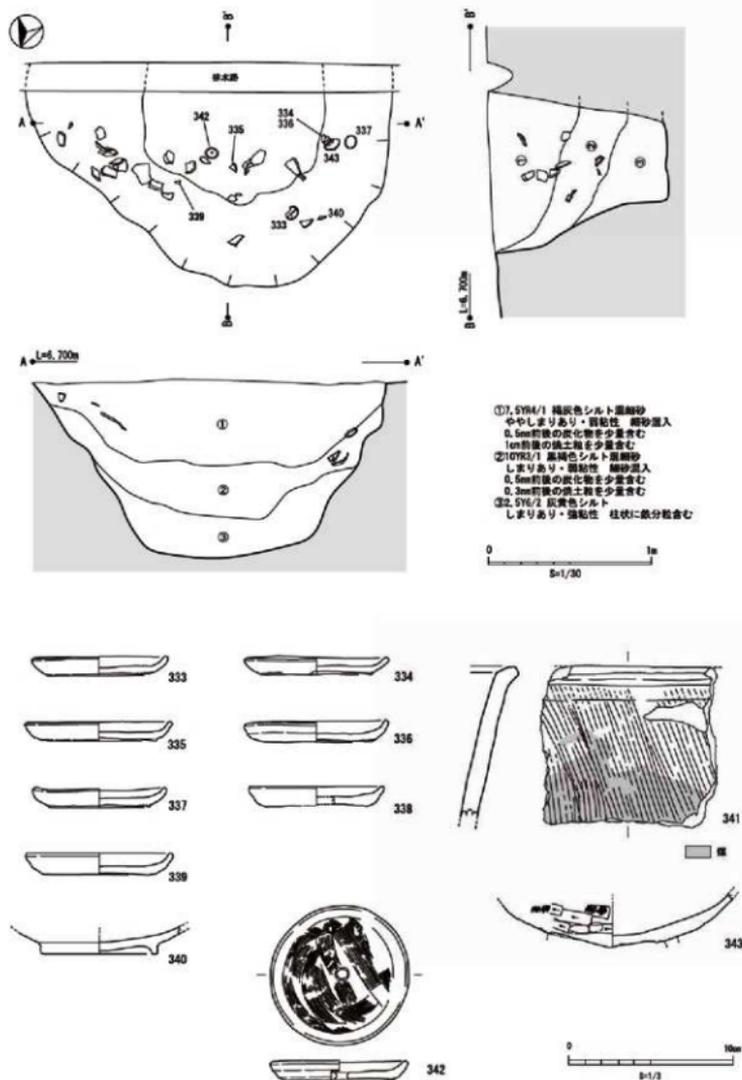
第 262 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-14 実測図及び出土遺物実測図



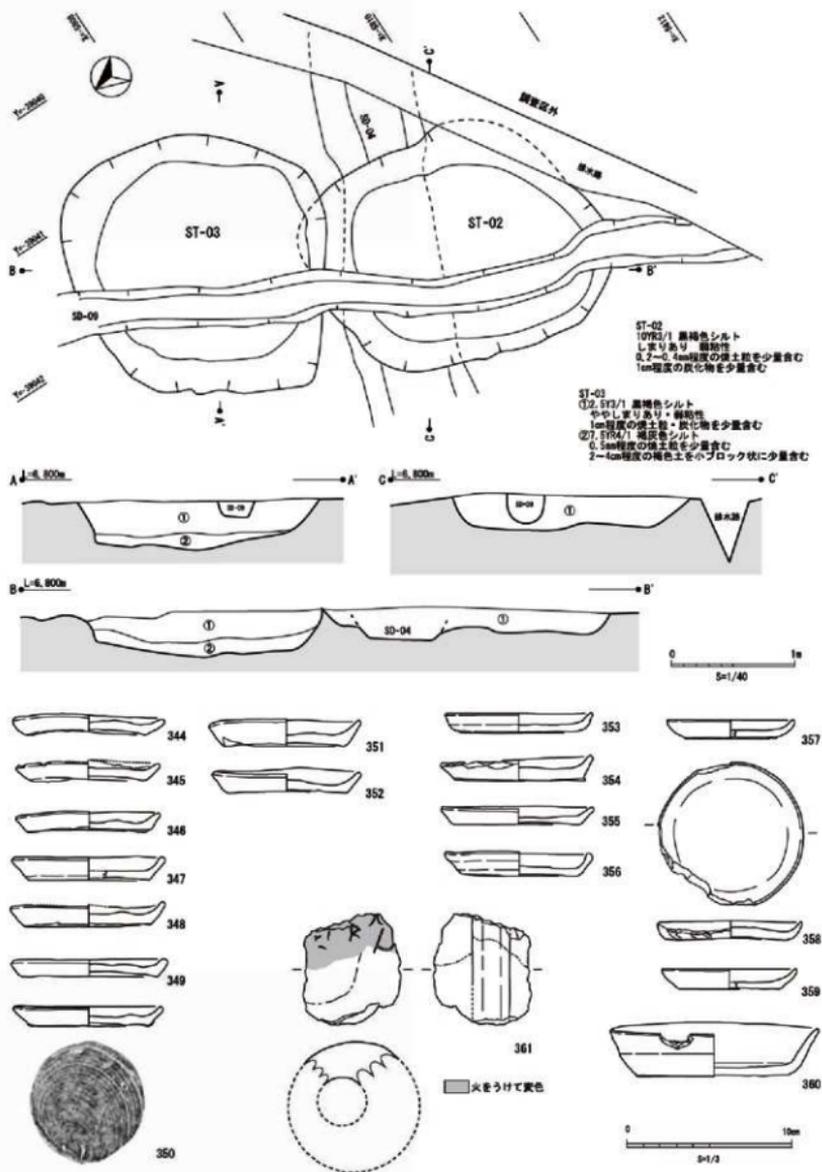
第 263 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-14 出土遺物実測図



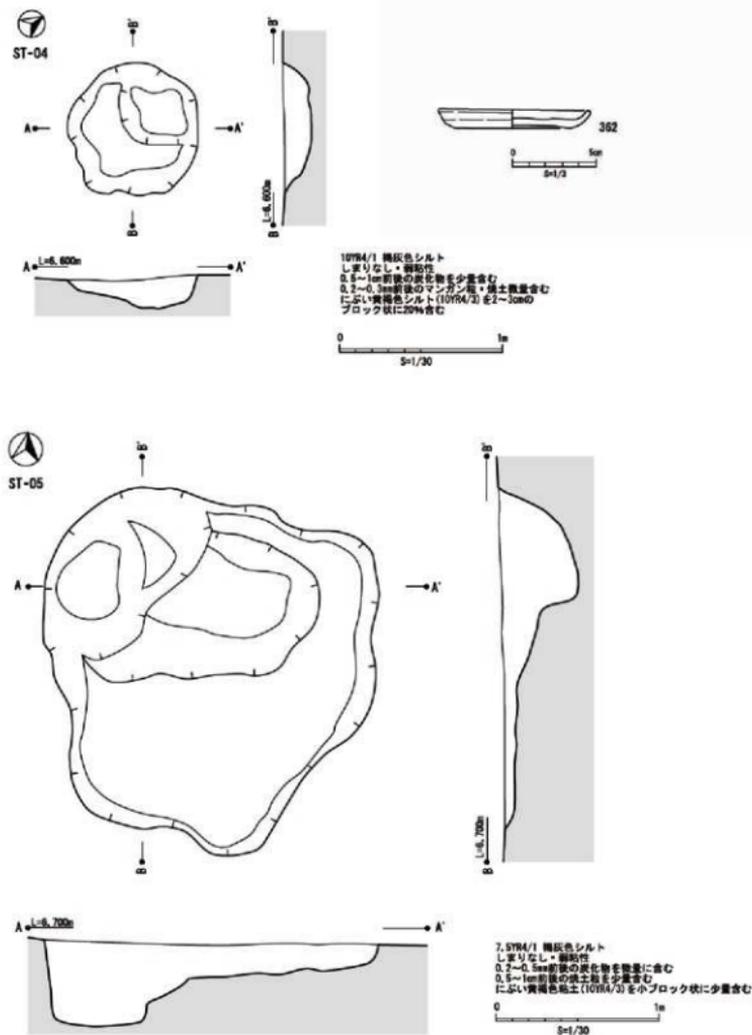
第 264 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-16~19 実測図及び出土物実測図



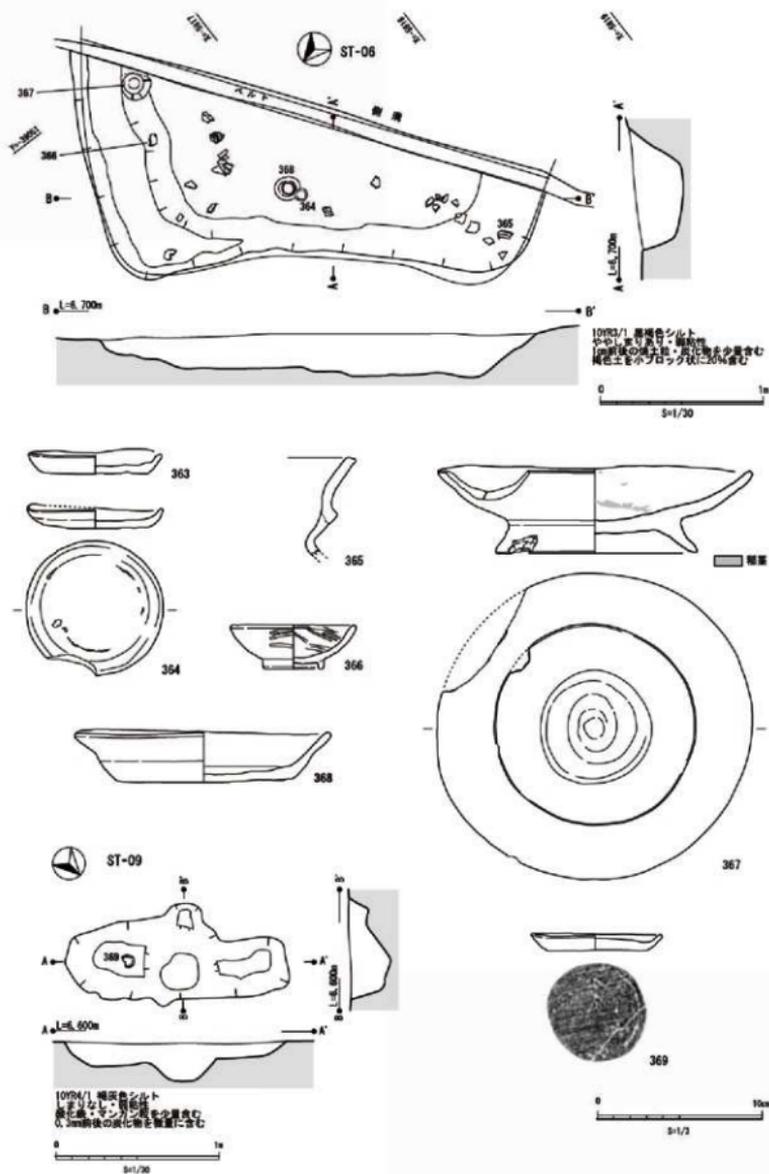
第 265 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図



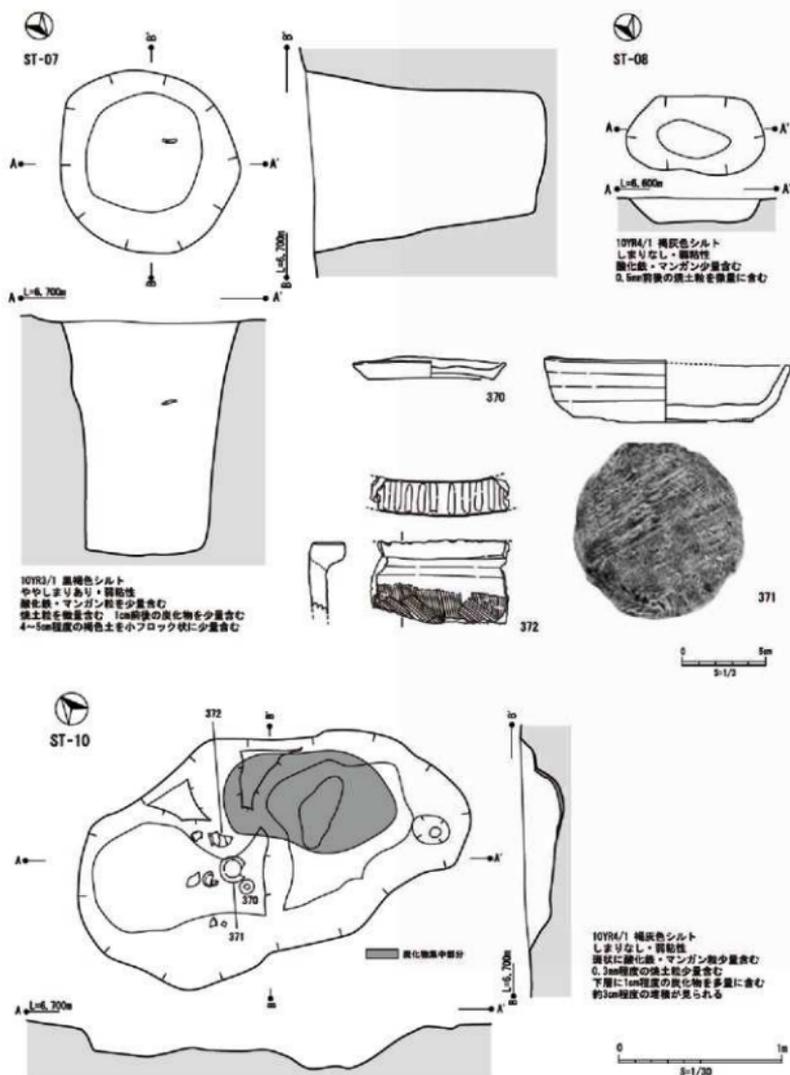
第 266 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-02・03 実測図及び出土遺物実測図



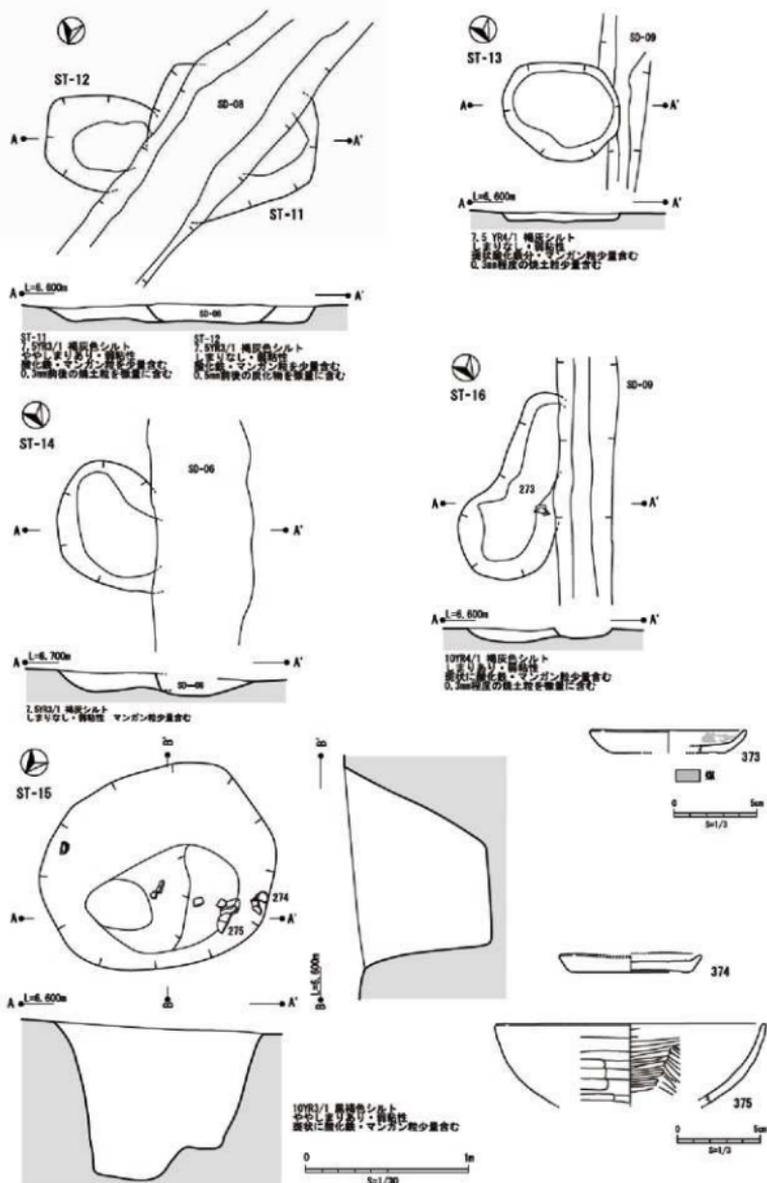
第 267 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-04・05 実測図及び出土遺物実測図



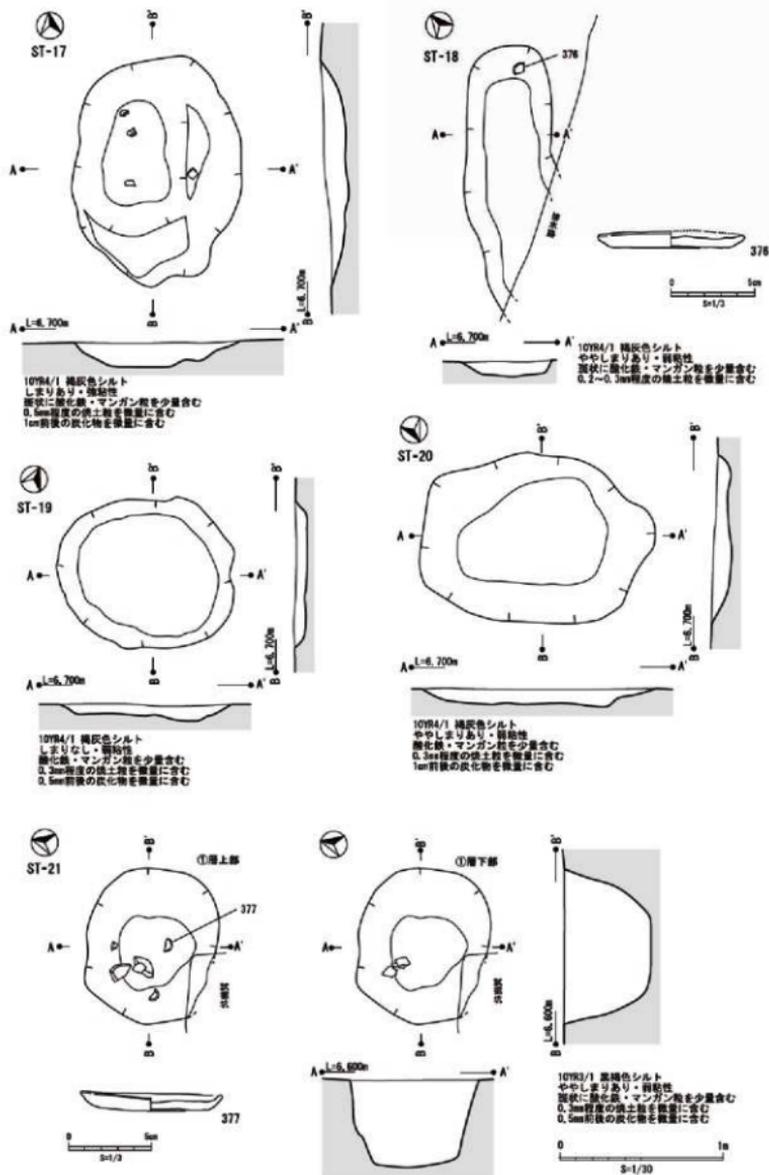
第 268 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-06・09 実測図及び出土遺物実測図



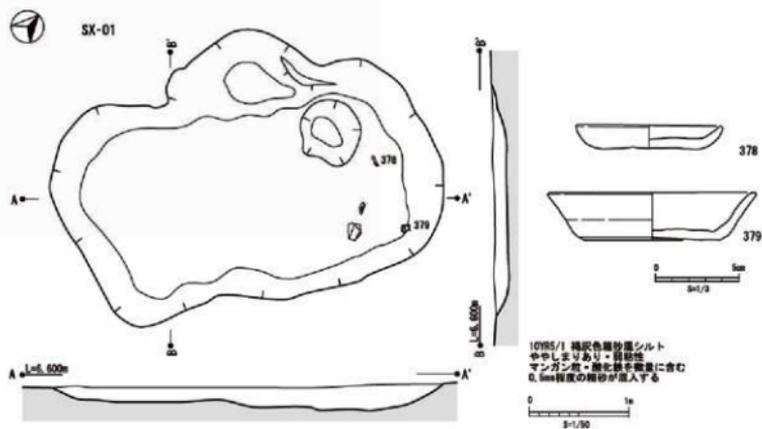
第 269 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-07・08・10 実測図及び出土遺物実測図



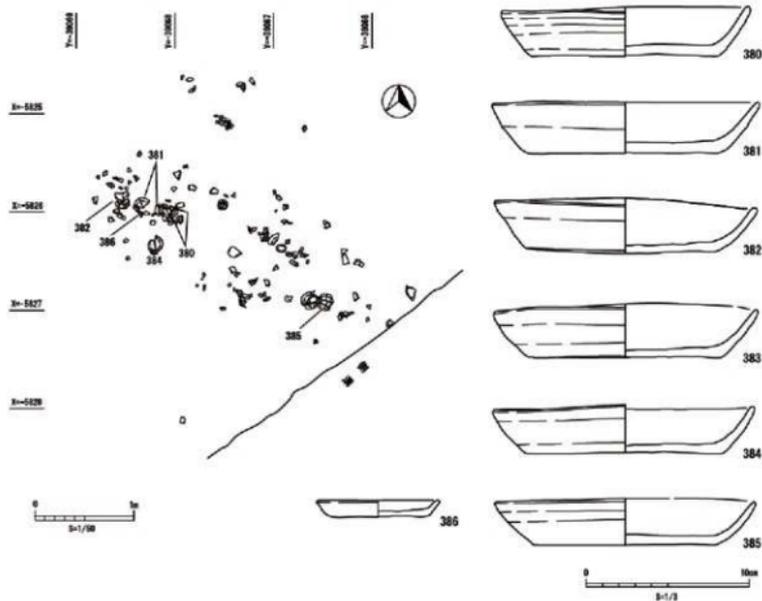
第 270 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-11~16 実測図及び出土遺物実測図



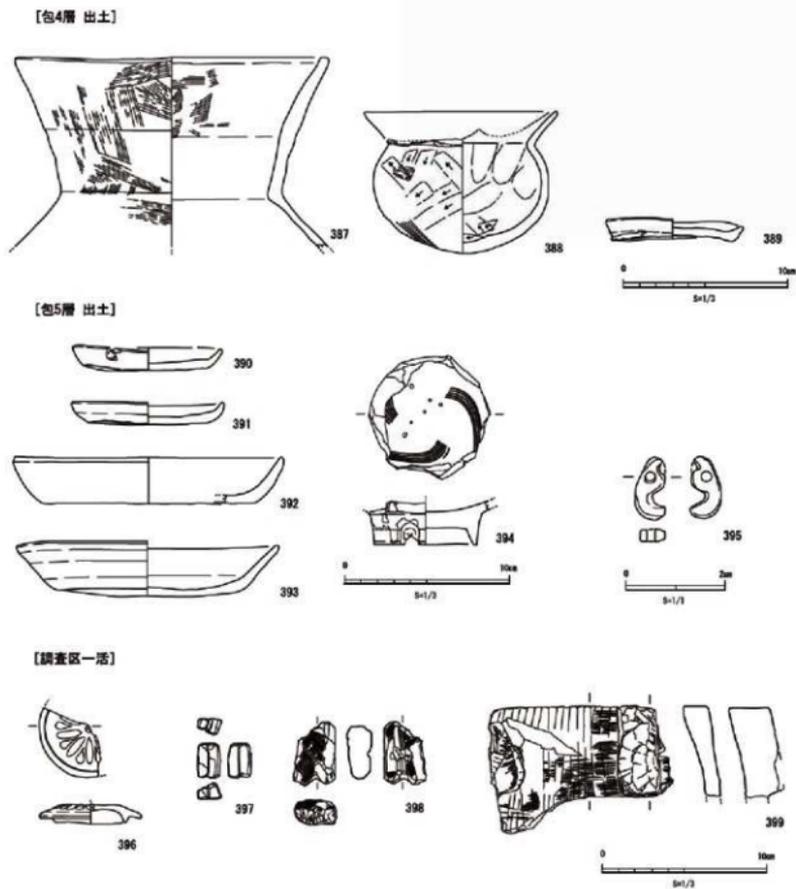
第 271 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-17~21 実測図及び出土遺物実測図



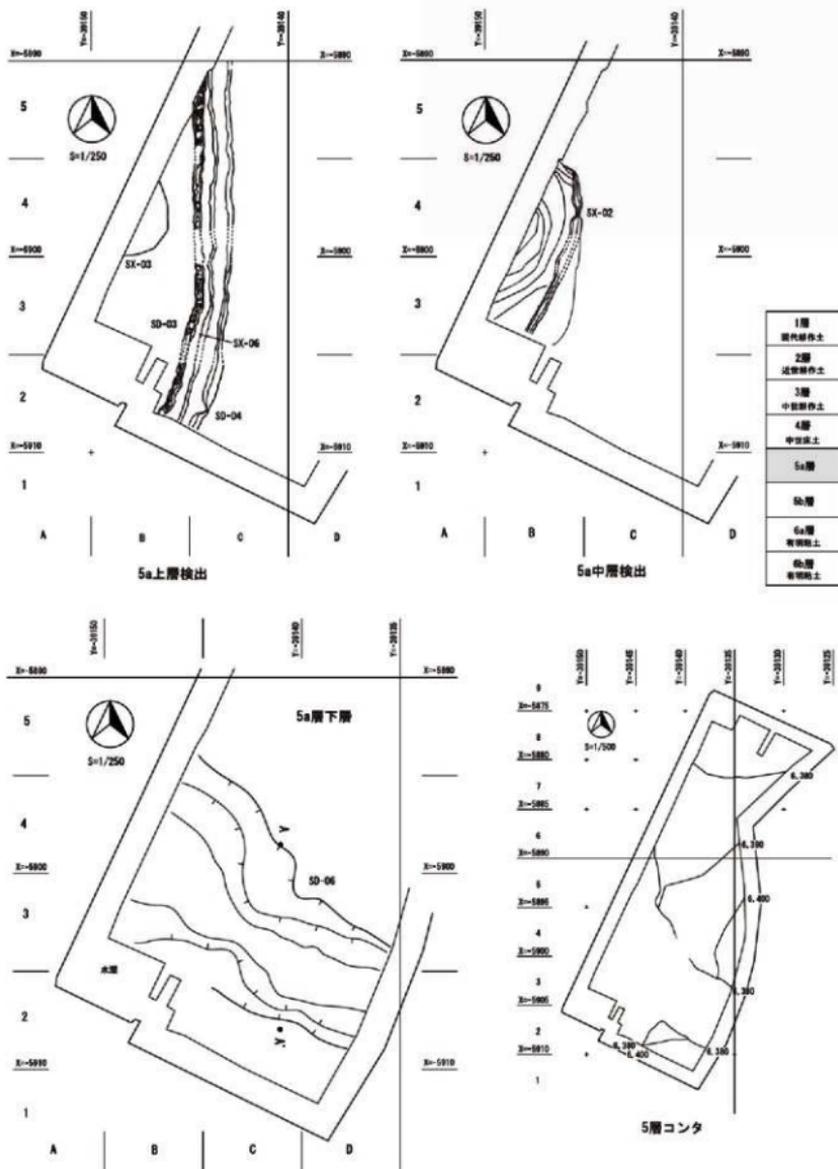
SX-02 F-9グリッド遺物出土状況



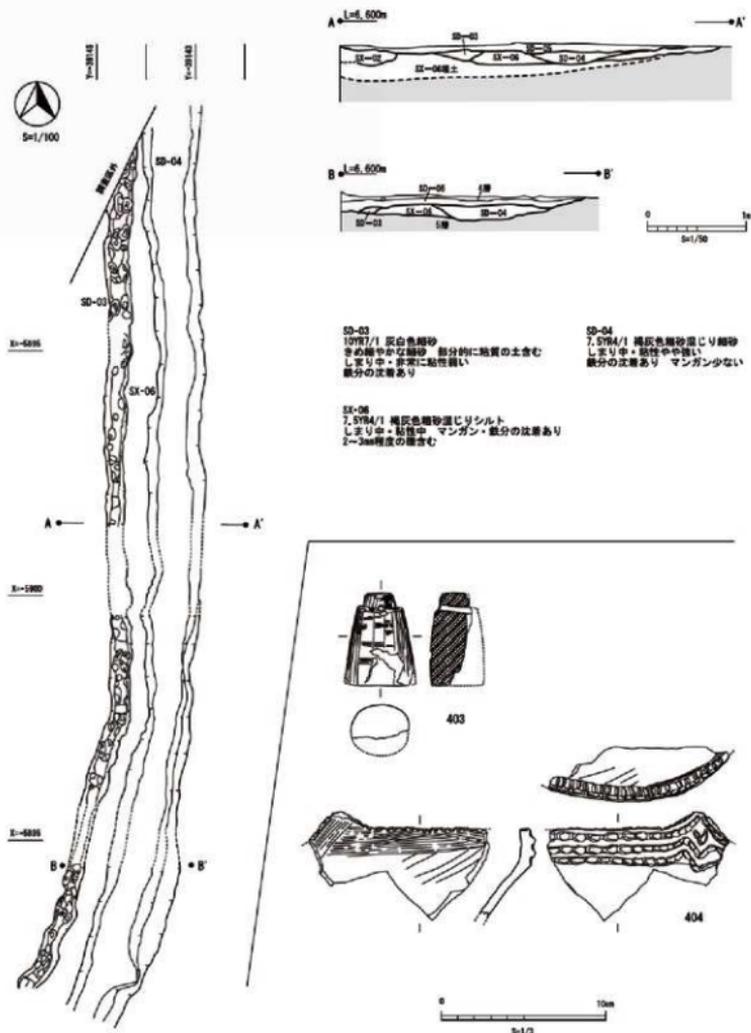
第 272 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SX-01・02 実測図及び出土遺物実測図



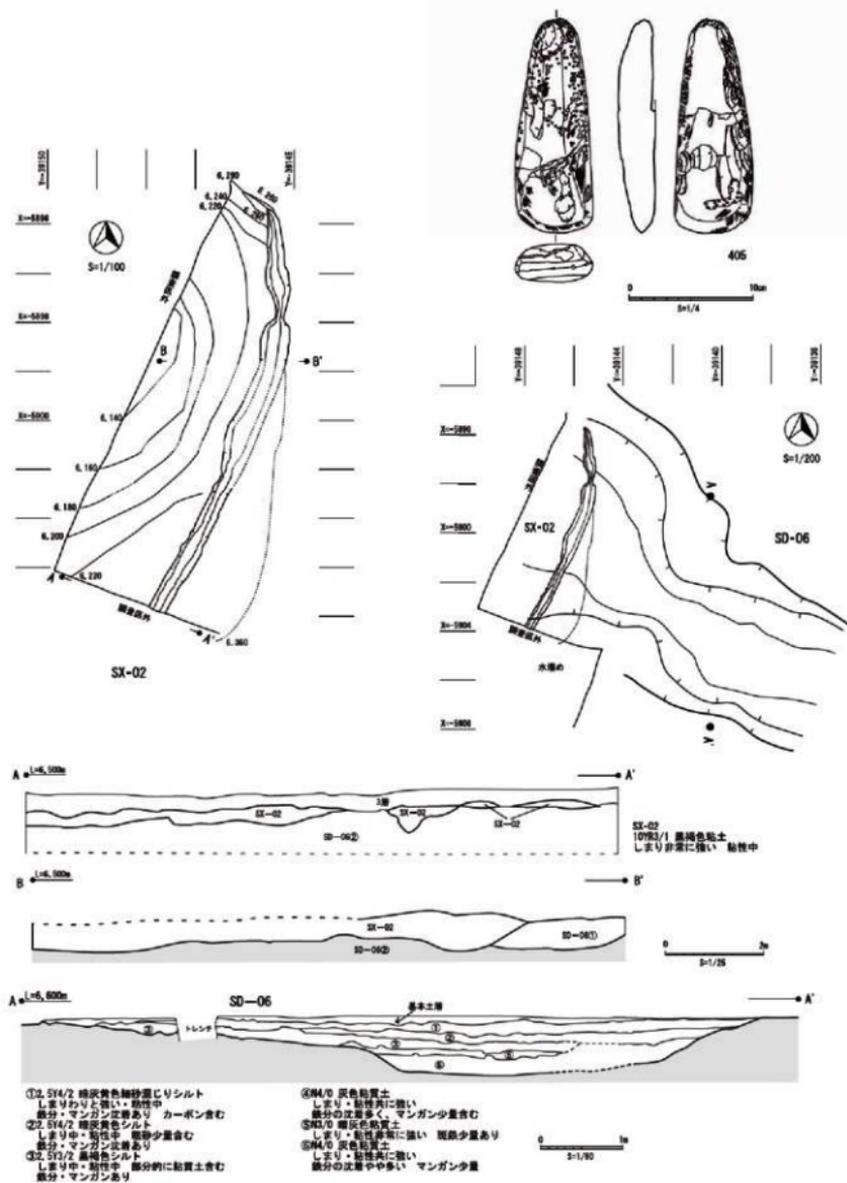
第 273 図 玉名平野条里跡 08-I 区 包 4・5 層・調査区 一括出土遺物実測図



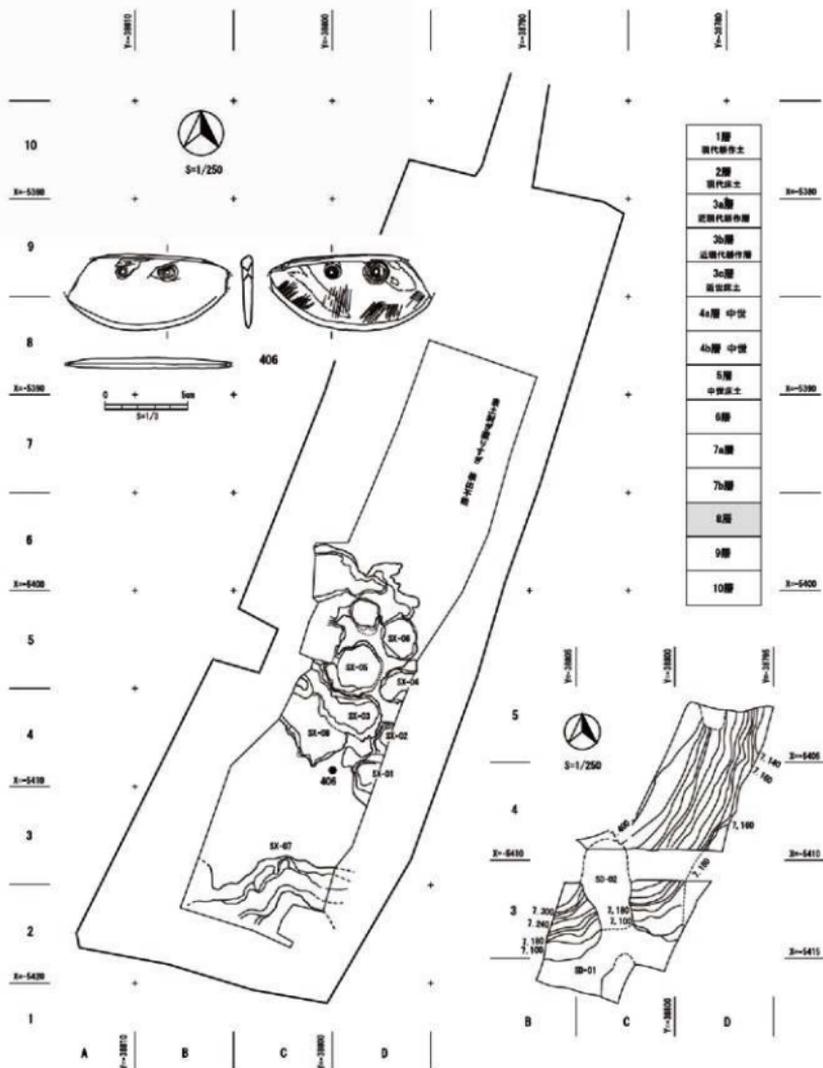
第 275 図 玉名平野築里跡 07-I 区 5a 層遺構配置図及び 5 層コンタ図



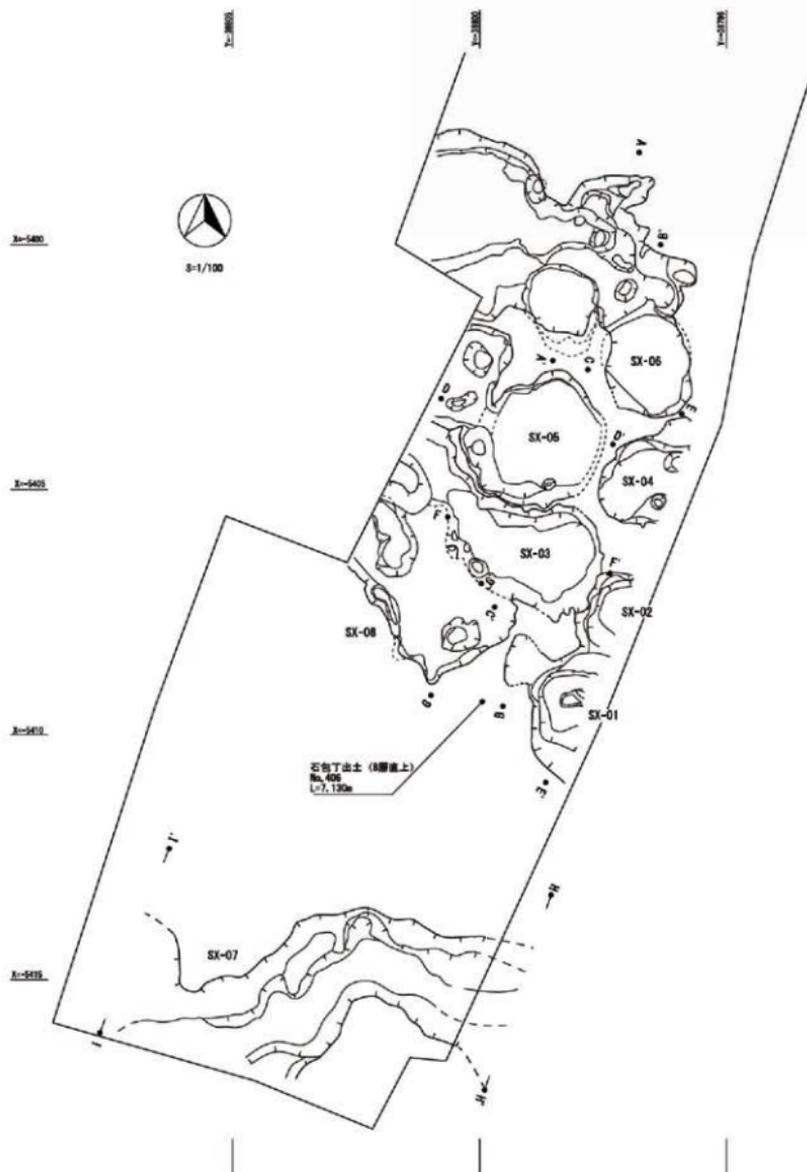
第 276 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SD-03・04・SX-06 実測図及び出土遺物実測図



第 277 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SX-02・SD-06 実測図及び出土遺物実測図



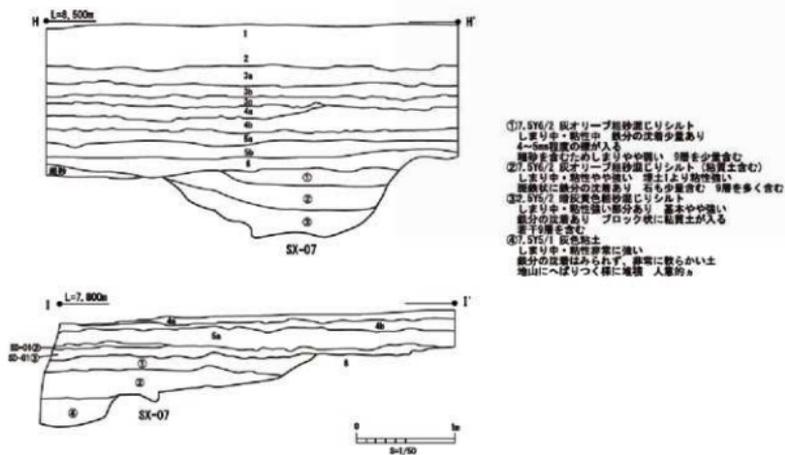
第 278 図 玉名平野条里跡 07-V 区 8 層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図



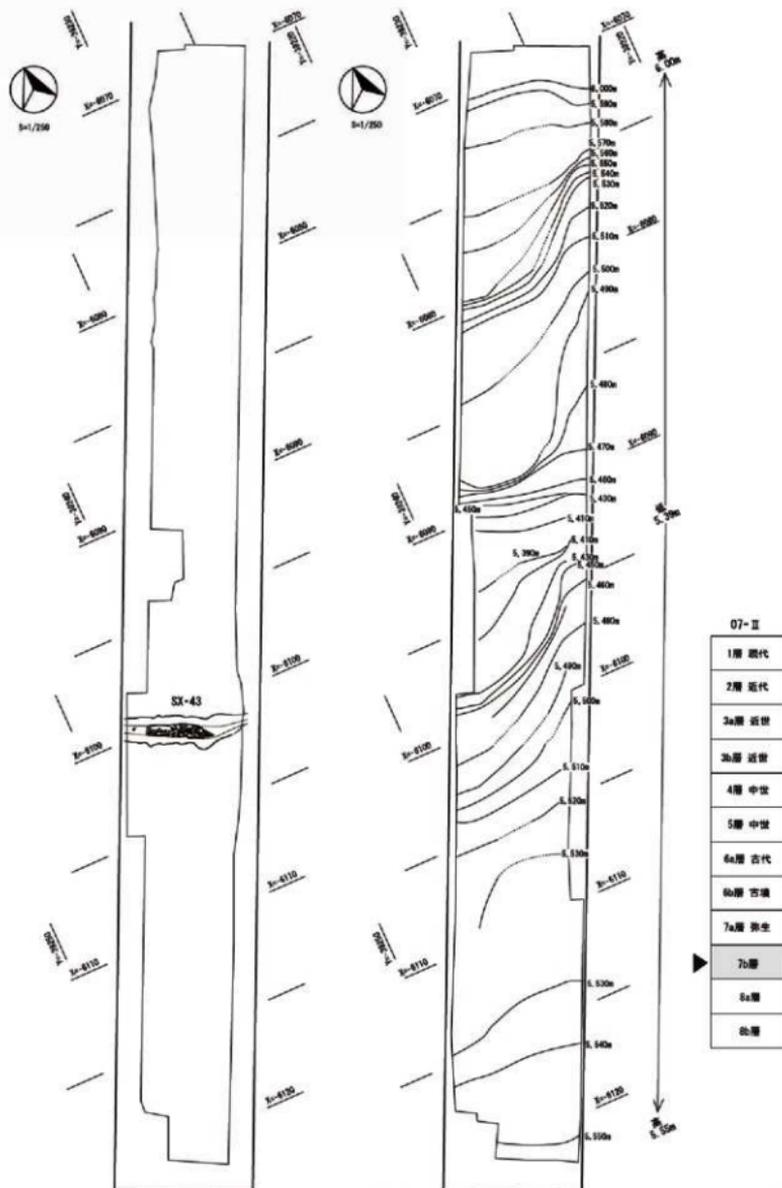
第 279 図 玉名平野条里跡 07-V区 SX-01~08 (粘土探掘坑) 実測図 1



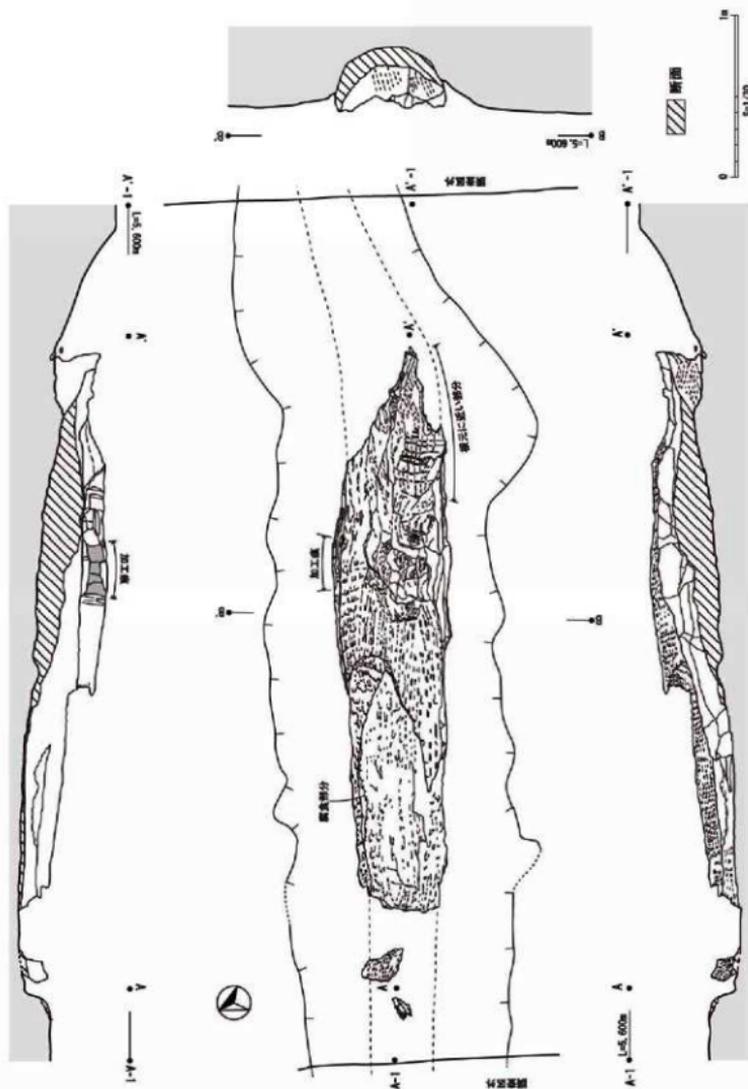
第 280 図 五名平野条里跡 07-V 区 SX-01~08 (粘土採掘坑) 実測図 2



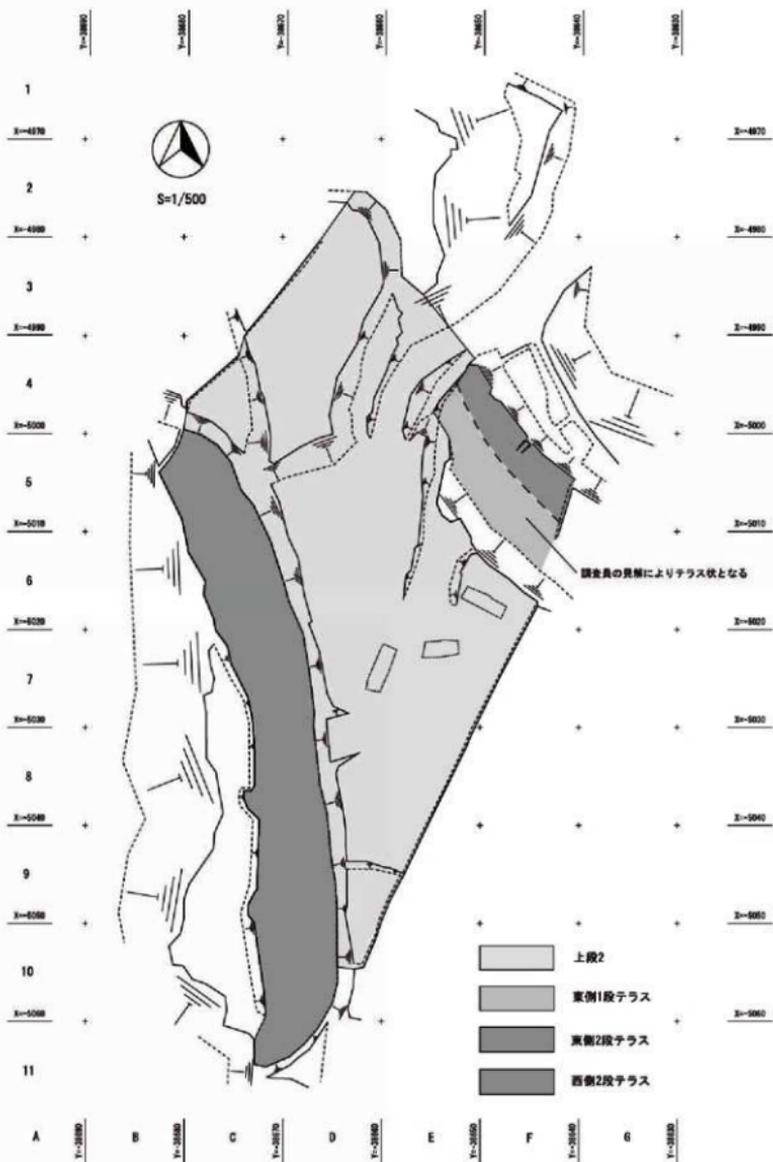
第 281 図 玉名平野条里跡 07-V区 SX-07 土層断面図



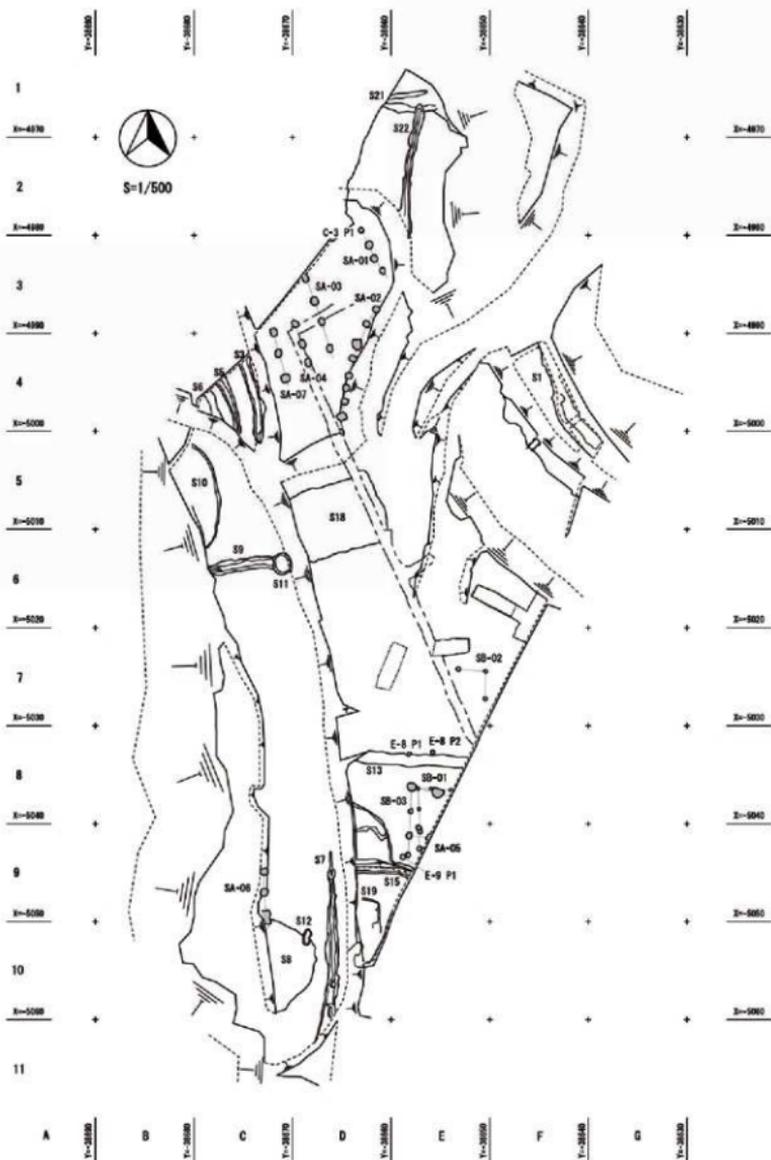
第 282 図 玉名平野条里跡 07-II (06-III) 区 7b 層遺構配置図・7b 層直上コンタ図



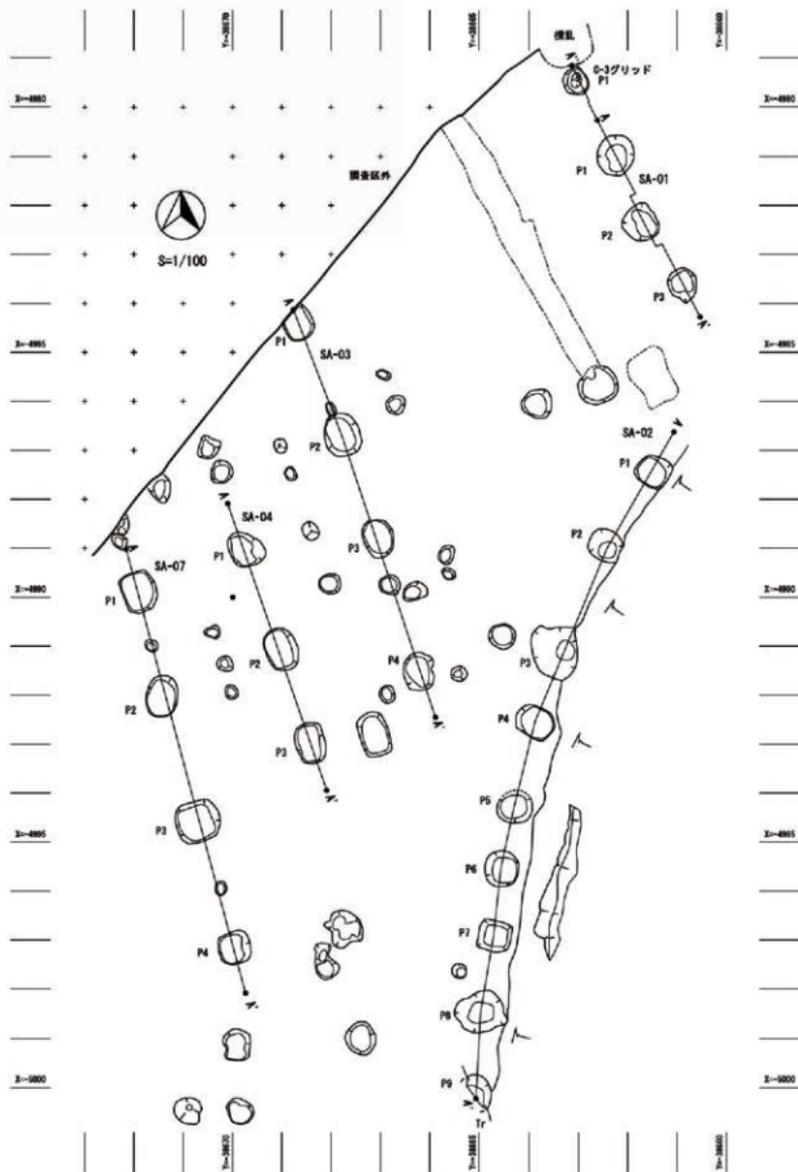
第283図 王名平野条里跡07-II(06-III)区 SX-43(木樋)実測図



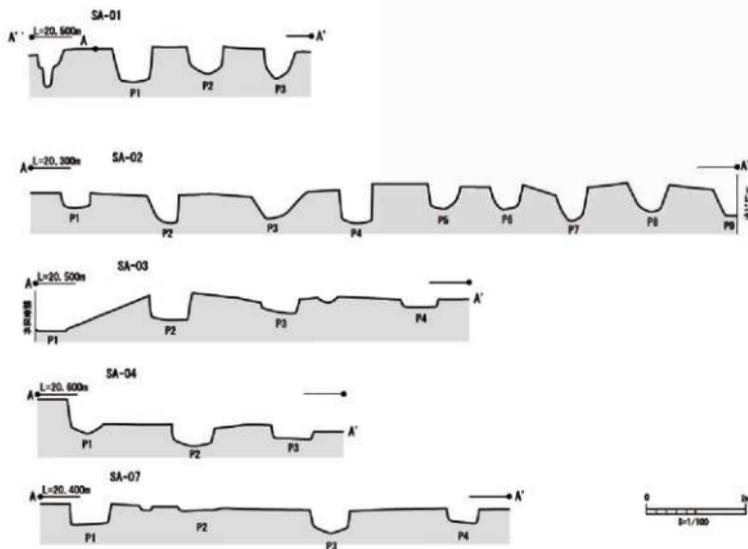
第 284 図 玉名の平城跡区画



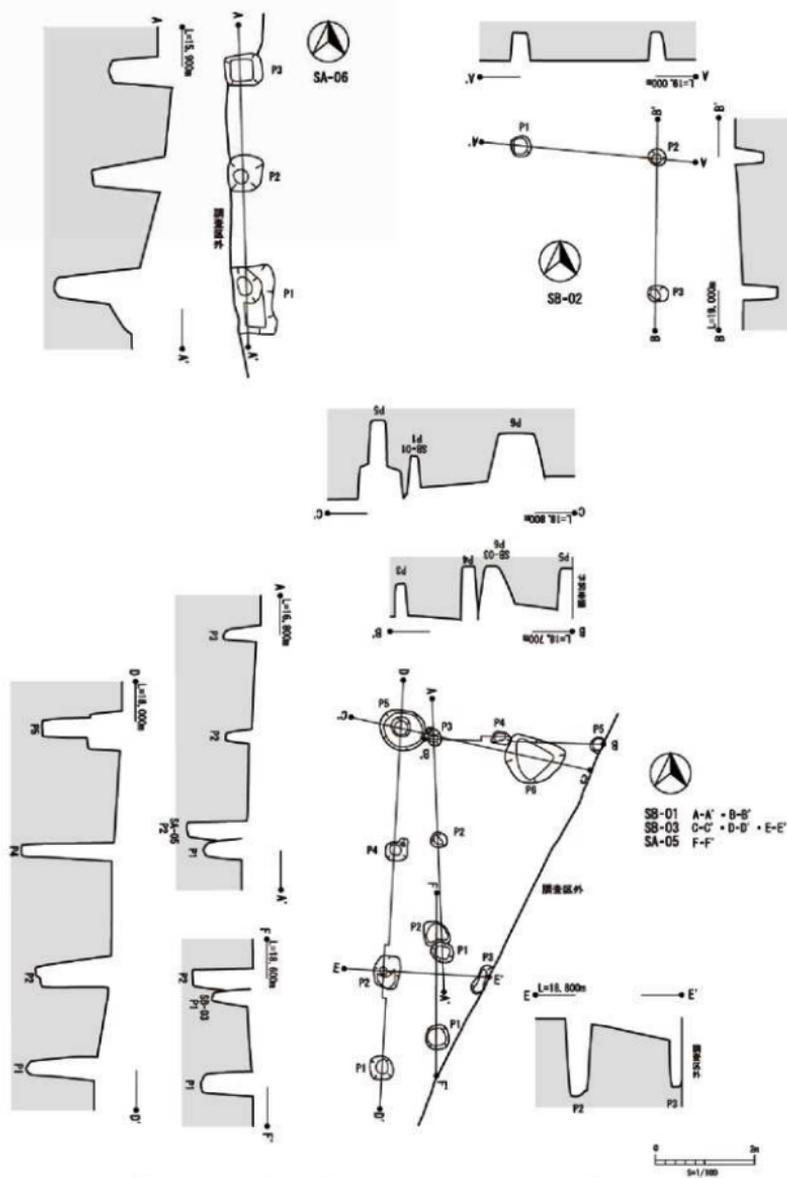
第 285 図 玉名の平城跡 遺構配置図



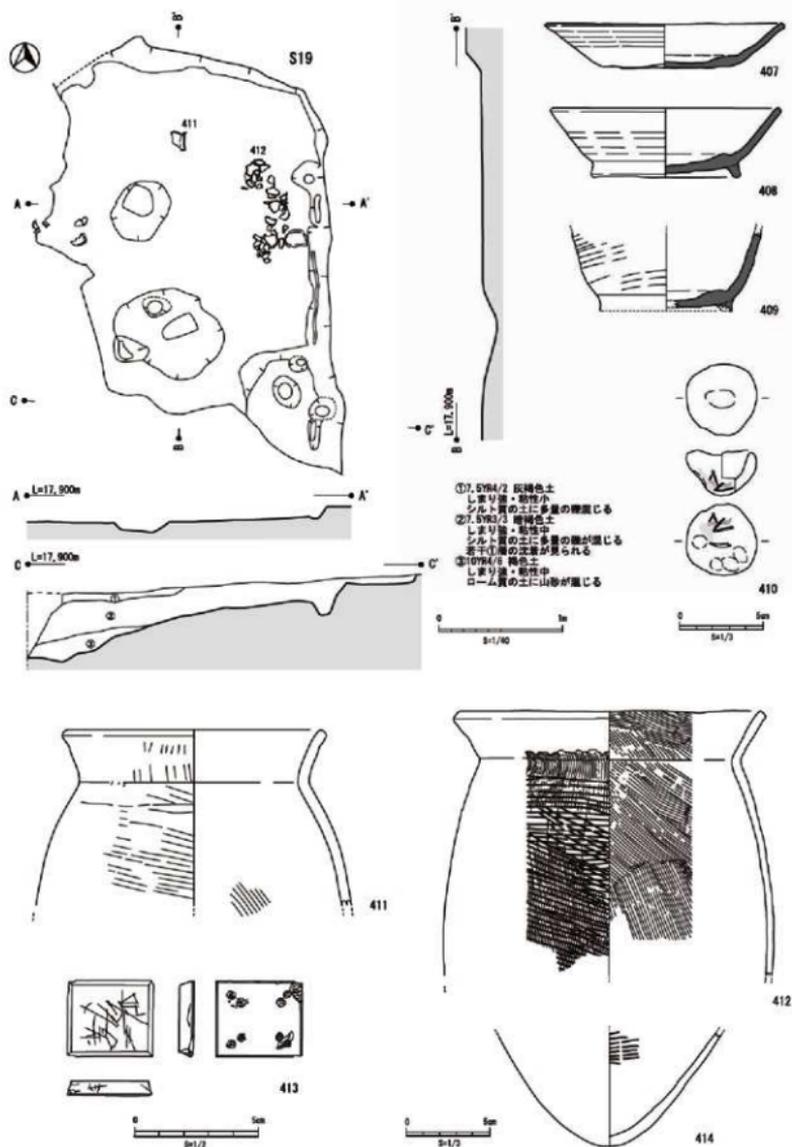
第 286 図 玉名の平城跡 SA-01~04・07 実測図 1



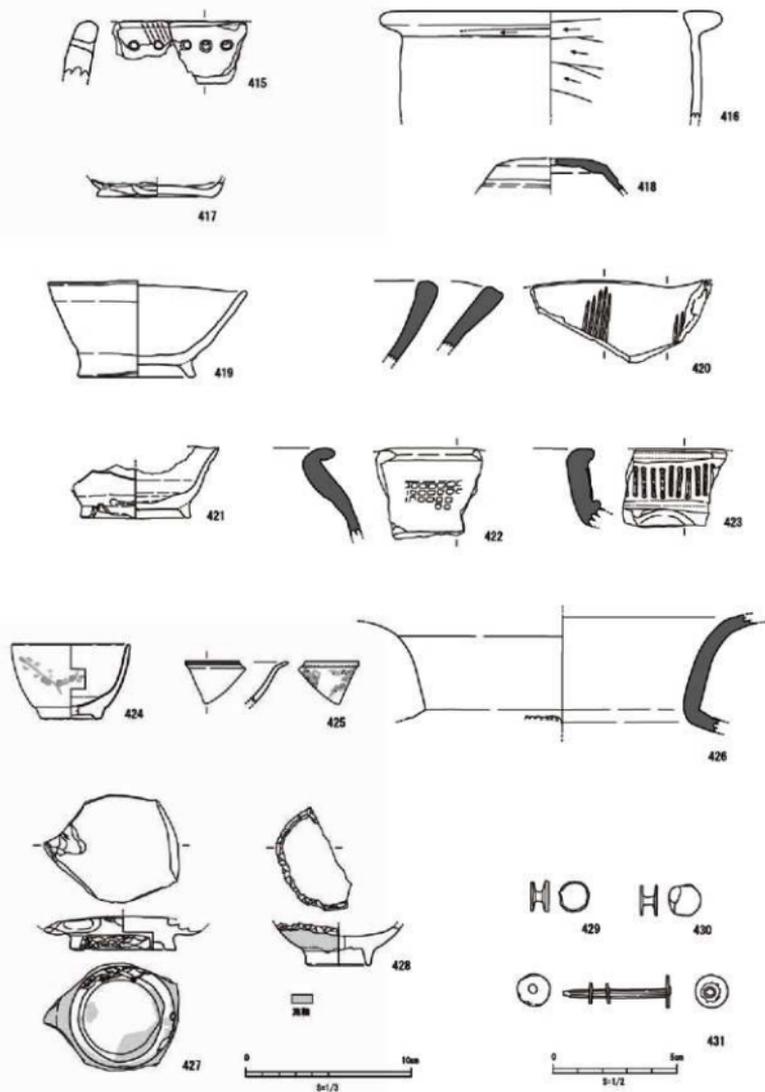
第 287 図 玉名の平城跡 SA-01～04・07 実測図 2



第 288 図 玉名の平城跡 SA-05・06・SB-01～03 実測図



第 289 図 玉名の平城跡 S19 実測図及び出土遺物実測図



第 290 図 玉名の平城跡 出土遺物実測図

第1節 人骨

熊本県玉名市玉名平野条里跡出土の中世人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、中世人骨、土墳墓、男性、仰臥

はじめに

県道の拡幅工事に伴う玉名市大字玉名に所在する玉名平野条里跡の2008年度（平成20年度）の発掘調査によって中世の埋葬人骨が2体出土した。

熊本県での中世人骨の報告例としては、荒尾市浄業寺（永井、1965）、宇土市緑川（故松野・他、1970）、城南町尾窪中世墳墓群（内藤、1973）、塚原中世墳墓（内藤、1975）、荒尾市杉谷遺跡（内藤・他、1978）、興善寺町馬場遺跡（松下、1980）、深田村沢塚遺跡（松下、2001）、西合志町船入遺跡（松下、2004）のほかに、植木町の松山遺跡や芦北町の花岡木崎遺跡、花岡古町遺跡からも中世人骨が出土している。

また、熊本市の二本木遺跡群からはこれまでに、熊本市教育委員会が調査をおこなった第8次調査区、第13次調査区、第14次調査区、第26次調査区、第27次調査区、第35次調査区の1区と2区、第32次調査区R地点、第40次調査区から中世人骨が、第28次調査区では中世以降の人骨が出土している。熊本県教育委員会の調査では、春日地区、合同庁舎区、さつま荘跡からも中世人骨が出土している。熊本市内では、二本木遺跡群のほかに上高橋遺跡、南新宮遺跡からも中世人骨が出土している。

尾窪中世墳墓群から出土した中世人骨は、比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は関東地方だけにみられる地域の特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代の特徴であることを示した貴重な例である。

今回出土した人骨の保存状態はけっして良好なものではなかったが、現場でできる限りの観察などをおこない、取り上げが可能であった人骨については、人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料

今回の調査で、2遺構から2体の人骨が出土した。その他に3ヶ所から散乱骨が検出されたが、いずれも獣骨であった。中世墓の埋葬遺構は土墳墓と推測されている。

2体の人骨はともに考古学的所見から、12世紀後半の中世に属する人骨と推測されている。各人骨の性別・年齢などは表1に示すとおりである。なお、年齢区分については表2を参照されたい。

*Masami MATSUSHITA, **Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

表1 出土人骨一覧 (Table1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	頭位	備考
SK-01	男性	熟年	仰臥屈葬	北頭位	
SK-03	男性	熟年	仰臥屈葬	北頭位	
ST-02	—	—	散乱骨		獣骨?
SK-02-1	—	—	散乱骨		獣骨 (中型ほ乳動物)
SK-02-2	—	—	散乱骨		獣骨 (大型ほ乳動物)

表2 年齢区分 (Table 2. Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井々浜遺跡第14次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所 見

SK-01 (男性・熟年)

埋葬遺構は土壇墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。ほぼ全身骨が残存していたが、骨は脆弱で原形を保った状態で取り上げることはできない程度の保存状態であった。頭蓋は右側に倒れた状態で検出された。頭蓋右側部に土師器などが副葬されていた。右側肘関節は強屈状態であったが、左側は約60度に曲げられていた。右側膝関節は約30度の屈曲状態であるが、左側膝関節は強屈状態で検出された。左側上腕骨は中央から折れ、遠位部が土坑底に突き刺さるように傾斜しており、また左側前腕の骨も近位部が欠失していたが、これは後世の遺構構築によって破壊を受けたために生じたものである。

頭蓋は潰れており、頭型は確認できない。鎖骨は長く、上腕骨、大腿骨、脛骨の骨体はいずれも大きい。現場で右側大腿骨の最大長を計測することができた。その長さは4cmあり、大腿骨の長さは長い。大腿骨最大長440mmから算出される推定身長値は164.03cm (Pearson)、164.35cm (藤井) となり、高身長である。右側の大坐骨切痕の観察ができたが、この角度は小さい。

大坐骨切痕の角度が小さいことと四肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は熟年と思われる。

SK-03 (男性・熟年)

埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。ほぼ全身骨が残存していたが、左側の肘の部分と下肢部分は後世の遺構に

よって破壊を受けており、右側大腿骨の大部分と右側の下腿の骨、左側の下腿の骨のうち近位半分を欠失している。顔面部（額）には土師皿が2枚副葬されていた。右側肘関節は約30度に曲げられた状態で、左側肘関節は90度の屈曲状態で検出された。また、左側膝関節は約60度に曲げられた状態であった。右側の下腿骨は残存状態が悪いが、残っていた部分から推測すれば、右側膝関節は強屈状態であったものと思われる。

頭蓋は潰れており、頭型の確認はできない。頭蓋壁は薄い。左側上腕骨の最大長を現場で計測できたが、その長さは約29cmしかなく、上腕骨は短い。上腕骨最大長290mmから算出される推定身長値は154.57 cm (Pearson)、154.98cm (藤井)となり、かなり低身長である。また、観察したところ大腿骨も長くないようである。四肢骨の骨体は大きい。寛骨は両側とも残存しており、両側の大坐骨切痕の観察が可能であったが、この角度は狭い。

大坐骨切痕の角度が小さいことと四肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は熟年と思われる。

要 約

玉名市大字玉名に所在する玉名平野桑里跡の2008年度（平成20年度）の発掘調査によって中世の埋葬人骨が2体出土した。2体ともほぼ全身骨が残っていたが、骨は脆弱化しており、原形を保った状態で取り上げることができなかったため、現場で人類学的観察や計測をおこなった。その結果は次のように要約することができる。

1. 今回の調査では埋葬人骨が2体検出された。2体とも12世紀後半の中世に属する人骨と推測されている。
2. 2体とも埋葬姿勢は仰臥屈葬（肘・膝関節を屈曲）である。
3. 2体とも成人の男性骨である。
4. 頭型や顔面の特徴は不明である。四肢骨は2体とも大きく、頑丈であるが、長さは1体(SK-01)は長く、もう1体(SK-03)は短いものであった。
5. 1体は大腿骨から、もう1体は上腕骨から推定身長値を算出することができた。前者は164.03cm (Pearson)で高身長であったが、後者は154.57 (Pearson)となり低身長であった。
6. 本中世男性の頭型や顔面の形態は明らかにできなかったが、2体とも四肢骨は太く、筋の発達もよかったことがうかがえる。しかし、この2体には四肢骨の長さに差異が認められ、1体はやや高身長であったが、もう1体はかなりの低身長という顕著な差がみられた。この差の原因究明にはまだ保存良好な資料が不足しているのが現状である。

謝辞

執筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様へ感謝致します。

《参考文献》

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸, 1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺 I (熊本県文化財調査報告第 45 集): 145-159
7. 松下孝幸, 2001: 熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡 (II) (熊本県文化財調査報告第 197 集): 239-245.
3. 松下孝幸, 2004: 熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡 一般国道 3 号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査 (熊本県文化財発掘調査報告第 217 集): 91-97.
4. 松下孝幸, 2007: 熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 III-二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書一: 126-129.
5. 松下孝幸, 2007: 熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 II-二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書一: 381-393.
6. 松下孝幸・他, 熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の人骨。(投稿中)
7. 松下孝幸・他, 熊本市二本木遺跡群 (さつま荘跡) 出土の古代・中世人骨。(投稿中)
8. 故松野茂・他, 1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌, 44: 999-1016.
9. 永井昌文, 1965: 荒尾市淨業寺中世人骨について。淨業寺と小代氏 (荒尾市文化財報告第 1 集): 51-53.
10. 内藤芳篤, 1973: 人骨。尾窪-熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査 (熊本県文化財調査報告 12): 62-78.
11. 内藤芳篤, 1975: 塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨について。塚原 (熊本県文化財調査報告第 16 集): 317-322.
12. 内藤芳篤・他, 1978: 杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡 (熊本県荒尾市文化財調査報告第 3 集): 116-122.



図1. 遺跡の位置 (1/25,000)
(Fig1. Location of the Tamana-heiya-jori site, Tamana City, Kumamoto Prefecture)

第2節 05- I -1 区 SX-03

両迫間日渡遺跡の自然科学分析

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 花粉分析	p. 1
3. 結果	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 花粉分析	p. 2
4. 考察	p. 2
(1) 周辺植生	p. 2
(2) 稲作の消長と植物利用について	p. 3
引用文献	p. 3

<図表・図版一覧>

表 1. 放射性炭素年代測定結果

表 2. 暦年校正結果

表 3. 花粉分析結果

図 1. 試料採取地点の模式断面図および試料採取位置

図 2. 主要花粉化石群集の層位分布

図版 1 花粉化石

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

兩迫間日渡遺跡は熊本県玉名市玉名上徳に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する。本遺跡は縄文時代～奈良時代、および中世の集落跡とされている。以前に分析調査を実施した04-II区からは古代や中世の遺物が検出されており、今回の調査区からは、弥生時代後期と想定される畦あるいは水路と推定される溝状遺構が検出されており、溝内から杭が多量に検出されている。そのほかにも、弥生時代後期や古墳時代初頭の水田の可能性が指摘される土層などが検出されている。

今回の分析調査では、これらの杭を対象とし、遺構の年代観に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。また、水田の可能性が指摘される土層を中心に、古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。

1. 試料

試料が採取された土層断面では、近世～現代の水田耕土より下位が5層に分層される。最下位は暗灰色粘土からなり、無層理で遺物を含まない。その上位は暗灰褐色シルトからなり、弥生時代後期の遺物を包含している。その上位は暗灰褐色シルトからなり、古墳時代初頭の遺物を包含する。この2枚の包含層は、その堆積状況から水田の可能性も指摘されている。その上位には下位褐色砂泥じりシルトが2層堆積しており、いずれも中世の水田で、下位層が床土、上位層が耕土と推定されている。なお、畦あるいは水路の可能性が指摘される溝状遺構は、弥生時代後期の遺物を包含する層に深を掘り込んでおり、古墳時代初頭の遺物を包含する暗灰褐色シルトに覆われる。溝内からは杭などのほか、弥生時代後期の土器などの遺物も出土する。

土壌試料は、当社技師が現地へ赴き、中世の水田耕土とされる褐色砂泥じりシルトから最下位層の暗灰色粘土まで各層1点の計5点（上位より試料番号1-5）、溝状遺構内覆土（試料番号6）、溝を覆う古墳時代初頭の暗灰褐色シルト（試料番号7）、溝が掘り込まれる弥生時代後期の暗灰褐色シルト以深2点（試料番号8,9）の、合計9点を採取した。試料採取地点の模式断面図および試料採取位置を図1に示す。

放射性炭素年代測定に用いた試料も、土壌試料採取時に当社技師が採取した。溝状遺構内より出土した杭、計4点（AMS-1～AMS-4）である。また、花粉分析に用いた試料は、試料番号3-9の、計7点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラフアイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる肥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による炭物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表 1 に、暦年校正結果を表 2 に示す。AMS-1 は $1,895 \pm 25BP$ 、AMS-2 は $1,820 \pm 25BP$ 、AMS-3 は $1,800 \pm 25BP$ 、AMS-4 は $1,800 \pm 25BP$ を示す。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を校正することである。暦年校正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。また、いずれの試料も北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、AMS-1 は calAD74-130、AMS-2 は calAD138-233、AMS-3 は calAD140-253、AMS-4 は calAD139-252 である。

(2) 花粉分析

結果を表 3、図 2 に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

いずれの試料においても花粉化石群集は類似しており、木本花粉と比較して草本花粉の割合がやや高い。群集組成も大きく異なっておらず、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ヒシ属、ミズワラビ属などの、水湿地生植物に由来する花粉・孢子も検出される。

4. 考察

(1) 周辺植生

木本類をみると、全体を通じて群集に大きな変化は認められず、コナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。このうち、アカガシ亜属は、シノキ属、ヤマモモ属、イスノキ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。このことから、弥生時代後期—古墳時代初頭にかけては、アカガシ亜属、シノキ属などを主体とした照葉樹林が、周囲の丘陵や後背山地に分布しており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹や、クマシデ属—アサダ属、コナラ属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹も生育していたと推測される。

また、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などは、沢沿いや河畔などの過湿地を好む種を含む部類群であることから、丘陵縁辺や紫池川沿いなどに生育していた可能性がある。

草本類をみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科などを伴う。その他に認められるクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、バラ科、ヨモギ属、キク亜科などは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、周囲の乾いた草地などにこれらの種類が生育していたと推測される。また、ガマ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属といった水湿地生植物に由来する花粉・胞子が検出される。イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部にも、同様の水湿地に生育する種を含む。よって、当時の水路、河川あるいは周辺域の湿地にこれらの草本類が生育していたと推測される。

本地域周辺の既存の研究結果を見ると、晩氷期遺構は落葉広葉樹が主体の植生だったものが、約 8,500 年前以降アカガシ亜属やシノキ属などと照葉樹林が発達するようになり、約 6000 年前頃に照葉樹林の最盛期に達する。その傾向は植生干渉の結果、アカガシ亜属、シノキ属が衰退し、マツ属、イネ科が急増する約 1,500 年前頃まで続くことされている（Hatanaka, 1985; 畑中ほか, 1998 など）。今回の結果はこれと調和的であり、放射性炭素年代測定結果や遺物などから推測される時代観とも矛盾しない。

(2) 稲作の消長と植物利用について

年代測定を実施した弥生時代後期とされる溝内より検出された杭の樹種をみると、アカガシ亜属、クリであった。花粉分析の結果を見ると、周辺域の植生はアカガシ亜属を主体とした照葉樹林と推定されることから、アカガシ亜属やクリなどは、周辺域で容易に入手が可能な種類であったと考えられる。

また、花粉分析を実施したいずれの試料においても草本花粉の割合が高く、イネ科が多産する傾向が認められる。今回分析した試料では、試料番号 3, 7 採取層準が古墳時代初頭の水田、試料番号 4, 8 採取層準が弥生時代後期の水田の可能性が、試料番号 6 採取層準が弥生時代後期の畦あるいは水路の可能性が指摘されている。しかし、分析結果をみると、試料番号 4 採取層準より下位の無遺物層（試料番号 5, 9 採取層準）においてもイネ科が多産し、草本花粉化石群集に大きな差は認められない。

今回、弥生時代後期の水田の可能性が指摘される試料番号 4, 8 においてイネ属同定を実施したところ、イネ科花粉全体に含まれるイネ属の割合は、試料番号 4 で 37.07%、試料番号 8 で 36.76%であった。中村（1980）によると、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は 30%以上の比率であることから、イネ属の割合が 30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせ

ると述べている。これに従うと、試料番号4,8の結果は、本層形成当時に稲作が行われていた可能性を支持している。また、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ミズワラビ属などは、水田雑草となりうる種を含む分類群である。よって、これらの水湿地生植物には、水田に生育していたものも含まれる可能性がある。

ただし、上位の古墳時代初頭の遺物包含層や下位の無遺物層の花粉化石群集をみると、弥生時代後期の水田層と群集に差がみられない。今後、植物珪酸体分析やイネ属花粉同定、珪藻分析などを実施し、イネ属の消長や堆積環境などについて情報を収集し、総合的に検討することが課題と思われる。

引用文献

- Hatanaka, K., 1985, Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. *Jornal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University*, 18, 29-71.
- 畑中 健一・野井 英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史, 安田 喜憲・三好 教夫 (編著), 図説 日本列島植生史, 朝倉書店, 151-161.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 - 総括報告書一, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.

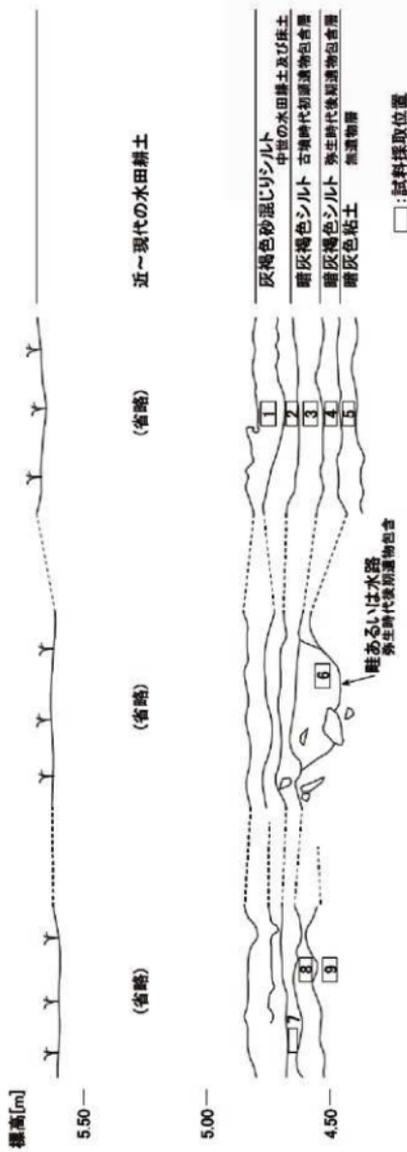


図1. 試料採取地点の様式断面図および試料採取位置

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Code No.	Measurement No.
AMS-1	材	コナラ属アカガシ亜属	1895±30	-30.51±0.13	8938-1	PLD-4622
AMS-2	材	クリ	1820±25	-28.11±0.29	8938-2	PLD-4623
AMS-3	材	クリ	1800±25	-29.18±0.11	8938-3	PLD-4624
AMS-4	材	コナラ属アカガシ亜属	1800±25	-27.96±0.14	8938-4	PLD-4625

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	cal AD 74 - cal AD 130	cal BP 1,876 - 1,820		
AMS-1	1,894±28	σ	cal AD 54 - cal AD 182	cal BP 1,896 - 1,768	0.934	8938-1
		2σ	cal AD 187 - cal AD 214	cal BP 1,763 - 1,736	0.066	
AMS-2	1,821±24	σ	cal AD 138 - cal AD 159	cal BP 1,812 - 1,791	0.255	8938-2
		2σ	cal AD 166 - cal AD 197	cal BP 1,784 - 1,753	0.407	
AMS-3	1,798±23	σ	cal AD 207 - cal AD 233	cal BP 1,743 - 1,717	0.338	8938-3
		2σ	cal AD 128 - cal AD 248	cal BP 1,822 - 1,702	1.000	
AMS-4	1,799±25	σ	cal AD 140 - cal AD 154	cal BP 1,810 - 1,796	0.125	8938-4
		2σ	cal AD 167 - cal AD 195	cal BP 1,783 - 1,755	0.254	
AMS-3	1,798±23	σ	cal AD 209 - cal AD 253	cal BP 1,741 - 1,697	0.622	8938-3
		2σ	cal AD 133 - cal AD 258	cal BP 1,817 - 1,692	0.909	
AMS-4	1,799±25	σ	cal AD 296 - cal AD 321	cal BP 1,654 - 1,629	0.091	8938-4
		2σ	cal AD 139 - cal AD 156	cal BP 1,811 - 1,794	0.138	
AMS-4	1,799±25	σ	cal AD 167 - cal AD 195	cal BP 1,783 - 1,755	0.277	8938-4
		2σ	cal AD 209 - cal AD 252	cal BP 1,741 - 1,698	0.585	
AMS-4	1,799±25	σ	cal AD 131 - cal AD 259	cal BP 1,819 - 1,691	0.904	8938-4
		2σ	cal AD 295 - cal AD 322	cal BP 1,655 - 1,628	0.096	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

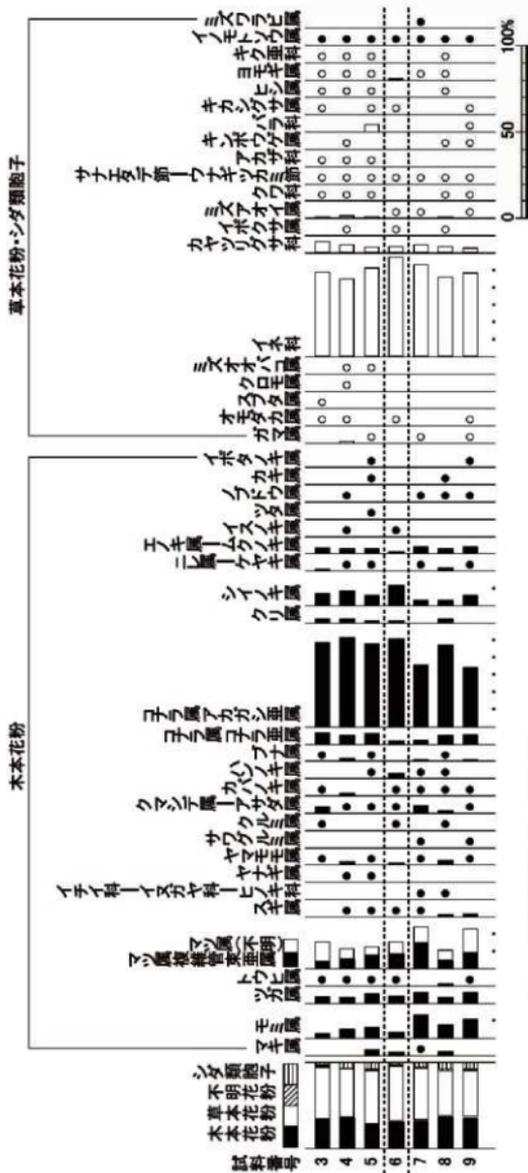


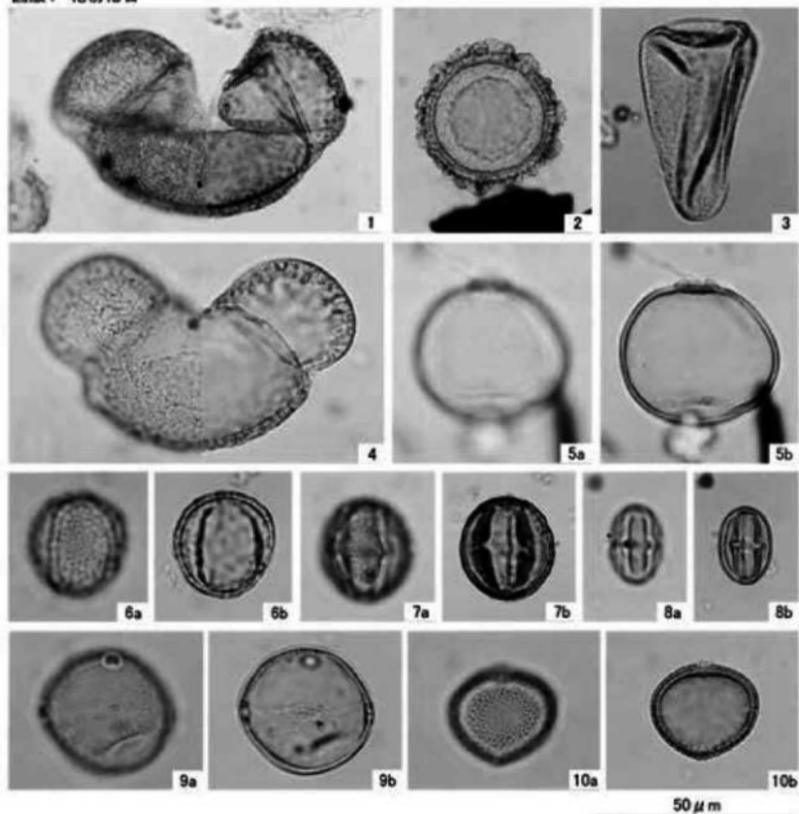
図2. 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

表3. 花粉分析結果

種 類	3	4	5	6	7	8	9
試料番号							
木本花粉							
マキ属	-	-	9	4	1	5	-
モミ属	7	12	16	7	28	16	24
ツガ属	10	8	16	10	13	7	14
トウヒ属	2	1	1	1	-	3	2
マツ属(榊管束属)	11	13	21	19	31	10	20
マツ属(不明)	27	14	13	15	20	13	31
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	1	-
スギ属	-	1	2	2	1	3	4
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	1	1	-
ヤナギ属	-	1	1	-	-	-	-
ヤマモモ属	1	5	2	3	1	6	2
サウグルミ属	-	-	-	-	1	-	2
クルミ属	2	-	-	1	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	9	1	2	1	9	3	1
カバノキ属	1	3	-	1	1	1	1
ハンノキ属	-	-	2	6	1	1	-
ブナ属	2	4	1	-	3	2	3
コナラ属コナラ属	16	12	16	4	5	11	12
コナラ属アカガシ属	119	120	129	111	75	100	75
クリ属	5	5	4	3	-	5	-
シノキ属	17	20	17	26	7	7	13
ニレ属-ケヤキ属	3	1	2	-	2	4	2
エノキ属-ムクノキ属	9	7	8	3	9	7	9
イスノキ属	-	1	-	1	-	-	-
コクサギ属	-	1	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	1	-	-	-	-
セシバ属	1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	1	-	-	1	-
モチノキ属	-	-	1	-	-	1	-
ツタ属	-	-	1	-	-	-	-
ノブドウ属	-	2	-	-	1	1	1
カキ属	-	-	1	-	-	1	-
イボタノキ属	-	-	1	-	-	-	1
トネリコ属	1	-	-	-	-	-	-
草本花粉							
ガマ属	-	7	1	-	2	-	1
オモダカ属	3	1	-	1	-	-	2
スプタ属	1	-	-	-	-	-	-
クロモ属	-	3	-	-	-	-	-
ミズオオバコ属	-	1	1	-	-	-	-
イネ科	337	287	470	384	340	253	284
カヤツリグサ科	46	30	31	24	29	20	17
イボクサ属	-	1	-	1	-	1	-
ミズアオイ属	9	11	10	6	3	7	5
クワ科	5	3	2	-	-	2	2
ギシギシ属	-	1	1	-	-	-	-
サナエタデ属-ウナギツカミ節	6	1	1	3	5	1	1
アカザ科	1	1	3	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	2	-	-	-
キンポウゲ属	-	2	-	-	-	1	1
アブラナ科	1	1	-	-	-	-	-
バラ科	-	-	39	-	-	-	2
キカシグサ属	1	-	1	1	-	-	1
ヒシ属	1	1	1	-	-	1	-
セリ科	1	-	-	-	-	1	1
オミナエシ属	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	6	6	5	7	3	3	-
キク亜科	2	1	4	-	-	1	-
タンポポ科	-	-	-	-	1	1	-
不明花粉	16	7	10	8	3	12	3
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	1	-	2	-	-	-	1
ゼンマイ属	-	-	-	1	-	-	-
イノモトソウ属	2	2	5	2	2	5	5
ミズワラビ属	-	-	-	-	1	-	-
他のシダ類胞子	21	41	73	19	39	39	45
合 計							
木本花粉	243	232	266	218	210	211	217
草本花粉	421	358	570	429	383	292	317
不明花粉	16	7	10	8	3	12	3
シダ類胞子	24	43	80	22	42	44	51
総計(不明を除く)	688	633	918	669	635	547	585

図版1 花粉化石



- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. モミ属(試料番号4) | 2. ツガ属(試料番号4) |
| 3. カヤツリグサ科(試料番号4) | 4. マツ属(試料番号4) |
| 5. イネ科(試料番号4) | 6. コナラ属コナラ亜属(試料番号4) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(試料番号4) | 8. シイノキ属(試料番号4) |
| 9. エノキ属—ムクノキ属(試料番号4) | 10. ガマ属(試料番号4) |

第3節 05- I -1 区・2 区

両迫間日渡遺跡の稲作の消長について

パリオ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 花粉分析・イネ属同定	p. 1
(2) 植物珪酸体分析	p. 2
3. 結果	p. 2
(1) 花粉分析・イネ属同定	p. 2
(2) 植物珪酸体分析	p. 3
4. 考察	p. 3
(1) 古植生	p. 3
(2) 稲作について	p. 4
引用文献	p. 5

<図表・図版一覧>

表 1. 花粉分析結果

表 2. 植物珪酸体含量

図 1. 各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置

図 2. 各地区における花粉化石群集の層位分布

図 3. 各地区における植物珪酸体含量

図版 1 花粉化石

図版 2 植物珪酸体

はじめに

両辺間遺跡は熊本県玉名市大字玉名字両辺間に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する弥生時代後期以降の遺跡である。本遺跡からは、水田の大畦の一部、小畦などの弥生時代後期の水田遺構や流路遺構などが検出されている。また、畦に伴う木製の杭が多数出土しており、水田内には足跡も確認されている。

当社では、これまでも本遺跡の自然科学分析を実施しており、当時の古植生に関する情報や、水田面の平面的広がりに関する情報を蓄積してきた。

本報告では、流路遺構が検出されたⅠ-2区を中心に、水田遺構の広がりや古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

分析に用いる試料は、Ⅰ-1区平面、Ⅰ-2区平面および断面、Ⅱ-2区断面から、当社技師が採取した。

Ⅰ-1区平面では、大畦の南側水田面より試料番号1-14, 16, 17、小畦上より試料番号15、大畦水口覆土より試料番号18, 19、大畦北側水田面より試料番号20-22を採取した。このうち、試料番号6, 22の2点について、植物珪酸体分析を実施する。

Ⅰ-2区平面では、調査区中央付近に検出された流路遺構とされるSX-01の南側平面より試料番号1-7, 9、畦畔状を呈していたと思われるSX-02より試料番号10、SX-01の北側平面より試料番号14-17を採取した。このうち、試料番号2, 4, 5, 7, 8, 11-14, 16の10点について、花粉分析・イネ属同定を実施する。

同じくⅠ-2区断面、SX-01南壁断面、および東壁断面では、試料番号8, 11-13の4点を採取した。いずれも10層より採取した。この10層の上面が、Ⅰ-1区平面、Ⅰ-2区平面に相当する。この試料番号8, 11-13の4点について、花粉分析・イネ属同定を実施する。

Ⅱ-2区断面では、5層、6a層、6b層、7a層、8a層、8b層からそれぞれ各1点（試料番号1-6）を採取した。発掘調査所見では、6層、7層が古墳時代の水田層、8層が弥生時代水田層とされている。このうち、試料番号3-6の4点について花粉分析・イネ属同定を、試料番号5, 6の2点について植物珪酸体分析を実施する。

各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置を図1に示す。

2. 分析方法

(1) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚

状況・粒径などを考慮し、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身細胞に由来した植物珪酸体(以下、細胞細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100個体以下は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後、10の位を丸めている(100単位にする)。また、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析・イネ属同定

結果を表1、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。以下、地点別に述べる。

・I-2区

SX-01より南側平面の試料番号2,4,5,7は、いずれも花粉化石群集が類似しており、草本花粉の割合が多い。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、ミズアオイ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、イボクサ属、ヒシ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出される。なお、イネ科花粉におけるイネ属の占める割合は、約43-52%である。

木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、モミ属、ツガ属、クマシデ属-アサダ属、エノキ属-ムクノキ属などを伴う。

SX-01より北側平面の試料番号14,16では、花粉化石の保存状態が良好とは言えず、試料番号14に至っては、定量解析ができるだけの個体数を得ることができなかった。試料番号16では個体数は認められるものの、種類数は少ない。木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属が多く産出し、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタ節-ウナギツカミ節などを伴う。なお、試料番号16におけるイネ属の割合は、約37%である。

I-2区断面の試料番号8、SX-01の南壁および東壁の試料番号11-13をみると、花粉化石群種は南側平面と類似しており、木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属、シノキ属などを伴う。試料番号12では、ノブドウ属、スイカズラ属がやや多く認められる。草本花粉ではイネ科が多く認められ、ガマ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属などを伴う。また、オモダカ属、

ミズオオバコ属、ヒシ属、ミズワラビ属なども認められる。なお、イネ属花粉の割合は、約29-36%である。

・II-2区

断面の連続層位より採取された試料番号3-6をみると、木本花粉は垂直方向で変化が認められる。下位にあたる試料番号6,5では、I-2区と同様にアカガシ亜属が最も多く、モミ属、ツガ属、マツ属などを伴うが、上位の試料番号4,3に向かうにつれアカガシ亜属の割合が減少し、マツ属の割合が増加する傾向が認められる。

草本花粉では大きな変化は認められず、イネ科花粉が多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属、タンポポ科などを伴う。また、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水湿地生植物の花粉・胞子も、わずかではあるが検出される。なお、イネ属花粉の割合は、約31-35%である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下、地点別に述べる。

・I-1区

水田遺構面の試料番号6と22でもイネ属が検出されるものの、その含量は少ない。短細胞珪酸体はともに100個/g未満、機動細胞珪酸体は試料番号6が100個/g未満、試料番号22が約240個/gである。この他には、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体などが認められる。しかし、その多くは100個/g未満である。

・II-2区

試料番号5,6からは、いずれも栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。ただし、その含量は少なく、短細胞珪酸体が200-400個/g、機動細胞珪酸体が400-500個/gである。この他には、I-2区と同様にネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。ただし、その多くが100個/g未満であり、多くても500個/g未満である。またイネ科起源の他に、樹木起源珪酸体の第IIIグループや第IVグループ(近藤・ピアソン, 1981)も多い点が共通する。第IIIグループは「Y」あるいは「K」の字状の形態を呈し、第IVグループは網目模様付いた紡錘形を呈する。

4. 考察

(1) 古植生

弥生時代後期の水田面とされるI-2区平面(試料番号2,4,5,7)、および同層準であるI-2区断面の10層(試料番号8,12,13)のいずれも、同様の花粉化石群集組成を示す。比較的広域の周辺植生を反映する種類についてみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属-ムクノキ属などの広葉樹に由来する花粉を伴う。多産するアカガシ亜属は、シノキ属、ヤマモモ属などとともに温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、マキ属、スギ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、当時の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹が林分を形成

していたと推測される。また、後背丘陵縁辺部などにはコナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹が、菊池川沿いや周辺の低湿地には、サワグルミ属、ニレ属—ケヤキ属などが生育していた可能性がある。

なお、試料番号16はやや群集が異なり、他の試料で多産するアカガシ亜属の割合が少ない。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998など）。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。花粉化石の保存状態が悪いことや、検出される種類数が少ないことなどを考慮すると、試料番号16の花粉化石群集は経年変化による分解の影響を受け、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。また、定量解析を行えるだけの個体数を得られなかった試料番号11,14では、その大部分が同様の理由により分解・消失したと推測される。

以上より、流路遺構SX-01を挟んだ南側と北側では、花粉化石の保存状態に大きな差が認められた。いずれの試料も同層であることを考慮すると、SX-01を挟んだ南側と北側では、堆積環境にある程度の差が存在した可能性がある。この点については、速凍分析や堆積物微細構造分析などを実施し、検討することが望まれる。

一方、Ⅱ-2区断面では、下位の8b層（試料番号6）から上位の6b層（試料番号3）に向かって、アカガシ亜属が減少し、マツ属が増加する傾向が認められた。増加するマツ属の多くは複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、九州では1500-1000年前頃とされ、その原因は農耕などにより森林が破壊されたことに起因するとされている（たとえば那須，1980；波田，1987など）。今回の分析では草本群集に大きな変化は認められなかったが、以前に実施したⅠ-2区断面の分析結果からは、同様にアカガシ亜属、シノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ亜属などが増加する傾向が認められ、さらにマツ属の増加と共にイネ属の割合も増加している。これらのことを考慮すると、弥生時代から古墳時代にかけて、本遺跡周辺の照葉樹林の伐採が増加しはじめた可能性が指摘できる。

草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科ヨモギ属などを伴う。これらは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、同様の生育環境を示すものではクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ナデシコ科、バラ科、キク亜科、タンポポ亜科などがあげられる。植物珪酸体分析からは、ネズサ節を含むタケ亜科、コブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されている。よって、当時の本遺跡内および周囲の草地などに、これらの草本類が生育していたと思われる。

また、ガマ属をはじめとしてサジモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、ヨシ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子・植物珪酸体も検出する。特にSX-01南壁および東壁からは、ガマ属と比較的水深の深い場所に生育するヒシ属がやや多く検出される。よって、SX-01内や、周辺河川内・河畔などの湿地区に、これらの水湿地生植物が生育していたと推測される。

(2) 稲作について

前回の報告においては、Ⅰ-1区からは大畦、小畦などの水田遺構が検出されていることから、稲作の検

証を目的としてイネ属同定を実施した。その結果、いずれの試料からもイネ属花粉が高い割合で検出されたことから、I-1区において水田耕作を行っていたと想定された。今回、その点を検証することを目的として、植物珪酸体分析を実施した。その結果、大畦の南側水田面の試料番号6、北側水田面の試料番号22ともにイネ属の葉部に形成される植物珪酸体が検出された。これより、各地点でイネ属の植物体が混入した可能性が考えられる。一般に稲作が行われた水田跡の土壌からは、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが知られており、この程度の産出が認められると安定した水田稲作が行われたと推定される(杉山, 2000)。ただし、畦畔などの水田関連の遺構が検出されている場合でも、土壌中に残留する植物珪酸体含量が少ないことがある。その要因には、稲作の標態や耕作期間、堆積環境などが挙げられる。以前に実施した花粉分析結果を考慮すれば、検出されたイネ属の植物珪酸体は水田面での稲作に由来すると考えられる。含量が少なかった点は、収穫後の稲藁を水田の外に持ち出し、耕作土に還元することが少なかったことなどが想定される。

I-2区をみると、SX-01南側平面ではイネ科花粉におけるイネ属花粉の割合が約43-52%、北側平面で約37%、SX-01内で29-36%であった。中村(1980)は、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせるとのべている。この点を考慮すると、今回分析したいずれの試料についても、稲作が実施されていた可能性がある。また、ガマ属、サジモダカ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属などには、水田雑草となりうる種を含む分類群であることから、SX-01内や周辺湿地だけでなく、水田雑草としても生育していた可能性がある。

II-2区においても、イネ属花粉の割合は31-37%であり、8a層と8b層からは、含量が少ないもののイネ属に由来する植物珪酸体も検出される。前述の研究例やI-1区の結果などを考慮すれば、これらの土層でも稲作が行われていた可能性が指摘できる。

引用文献

- 波田 善夫, 1987, 松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 -松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について-, 資料集, 日本自然保護協会, 41-49.
- 近藤 誠三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 -総括報告書-, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 那須 孝梯, 1980, 花粉分析からみた二次林の出現. 関西自然保護機構会報, 4, 3-9.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学 3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

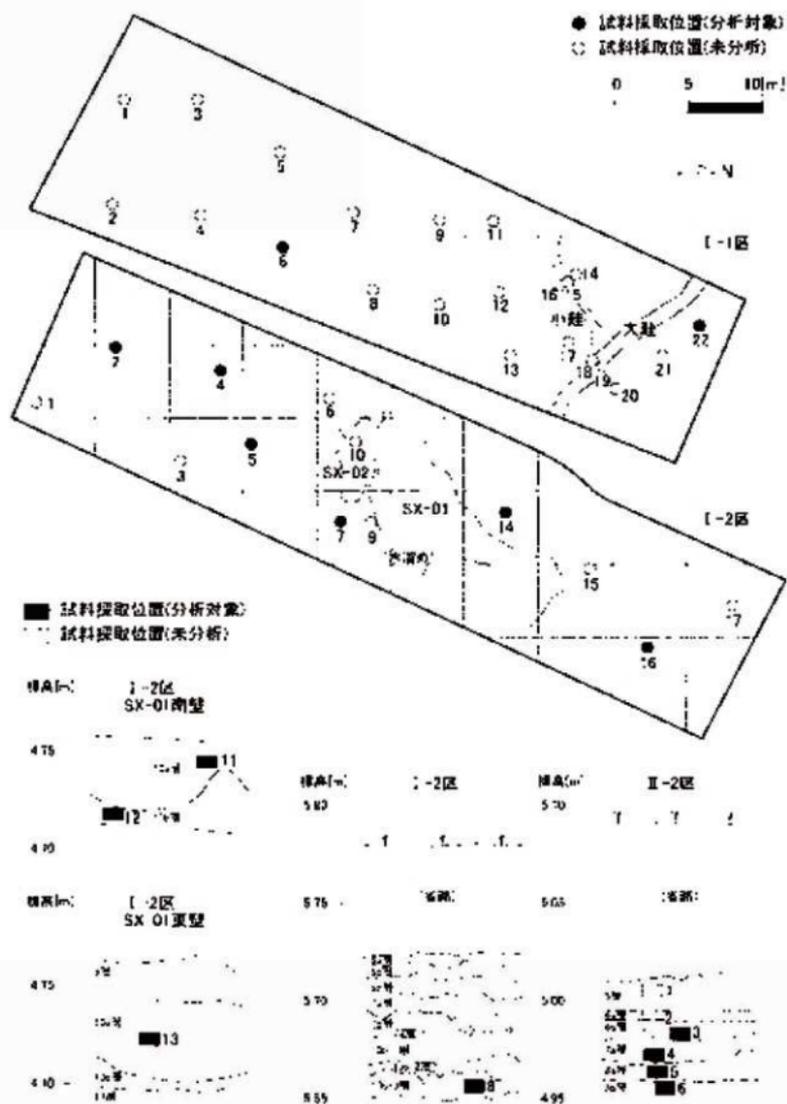


図1 各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置

表1. 花粉分析結果

種 類	I-2區										II-2區			
	3	4	5	7	8	11	12	13	14	15	3	4	5	6
天竺花粉														
マキ属	2	1	1	-	-	-	-	1	-	7	3	1	2	10
モミ属	12	5	9	12	6	1	9	9	1	57	30	33	26	46
ツガ属	6	2	7	9	10	1	6	3	-	46	61	34	24	23
トウヒ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
マツ属早緑葉表裏属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1
マツ属晩緑葉表裏属	27	19	17	21	11	2	11	15	-	56	62	44	43	27
マツ属 (不明)	16	11	7	9	11	3	5	5	1	23	23	50	12	9
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-
スギ属	1	4	4	2	-	1	3	-	-	1	3	-	-	1
イヌイチョーイヌガヤ科-ヒノキ科	3	-	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	1	2	5	3	-	2	1	-	1	7	3	2	6
ノグスチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤウグルミ属	3	1	2	1	1	-	3	1	-	-	1	2	3	2
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クマシロ子属-アサダ属	5	9	6	9	1	-	6	-	-	2	4	5	2	6
カバノキ属	1	1	3	2	3	-	1	3	-	-	4	3	-	-
ハンノキ属	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ブナ属	2	2	1	2	2	-	1	2	-	1	4	-	-	3
コナラ属コナラ属	12	17	13	15	1	1	10	17	-	2	11	14	3	12
コナラ属アカガシ属	67	101	105	116	51	10	76	96	-	20	72	95	93	112
クリ属	3	3	3	2	-	-	4	1	-	1	1	-	-	1
シノノキ属	14	11	19	20	3	1	19	11	-	1	2	11	6	9
ニレ属-ケヤキ属	1	4	2	2	3	-	-	2	-	1	3	2	1	3
エノキ属-ムクノキ属	3	10	6	6	-	-	5	12	-	-	4	3	12	-
イスノキ属	-	-	2	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
フウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジャコウバラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
アカメダシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	2	-	2	2	-	-	3	1	-	-	2	-	1	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ノボドウ属	-	-	1	1	-	1	23	4	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1
ツツジ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
カキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
エゴノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	38	1	-	-	-	1	-	-
草本花粉														
マメ属	19	4	2	1	-	2	23	78	-	1	-	-	-	-
ヤブモミダカ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オモダカ属	2	6	5	5	-	-	-	2	-	-	1	3	-	-
スプラタ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
豆ズオノハコ属	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ属	148	145	129	186	49	7	43	57	-	50	76	90	68	90
他のイネ科	140	135	173	197	103	22	106	99	-	84	169	188	139	168
カヤツリガサ科	23	24	26	37	18	5	15	36	-	12	48	32	19	11
イボウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズアザミ属	10	10	5	8	4	3	2	14	-	-	3	7	4	-
クワ科	-	1	1	2	1	-	1	7	-	-	1	-	-	-
ギンギン科	1	-	-	2	1	-	2	4	-	-	1	-	-	-
サナエダ節-ウナギツカミ節	3	2	2	2	-	2	-	1	-	8	21	6	5	5
アカザ科	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナギサ科	-	-	-	-	-	1	2	8	-	-	1	-	-	2
キンポウゲ属	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
バラ科	-	-	-	-	-	1	14	2	-	-	-	-	-	-
マメ科	-	1	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
キカシダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒシ属	-	1	-	1	-	-	6	5	-	-	-	-	-	-
アカバナ属-ミズキノシタ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
セリ科	1	1	1	1	-	1	-	-	-	4	-	1	-	-
シソ科	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オオノハコ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	6	4	7	5	3	1	11	3	-	1	8	4	1	2
キク属	1	1	1	2	-	-	-	-	-	-	1	4	-	7
タンポポ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	4	-	2
不明花粉	15	8	11	7	5	1	13	12	1	-	10	5	5	7
シダ類孢子														
ヒカゲノカズラ属	1	-	-	1	-	1	-	-	-	3	4	-	1	2
イノモトソウ属	1	1	1	1	1	1	1	3	-	6	31	5	1	3
ミズウラボシ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカカウキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	22
他のシダ類孢子	24	23	20	30	40	12	30	54	1	70	240	73	48	66
合 計														
草本花粉	203	206	215	244	106	21	226	200	2	222	294	312	229	288
草本花粉	356	340	369	453	180	45	231	311	0	186	334	313	241	294
不明花粉	15	8	11	7	5	1	13	12	1	0	10	5	5	7
シダ類孢子	28	24	21	32	41	15	31	57	1	79	276	78	51	113
合計 (不明を除く)	585	570	605	729	327	81	487	558	3	457	904	703	521	695

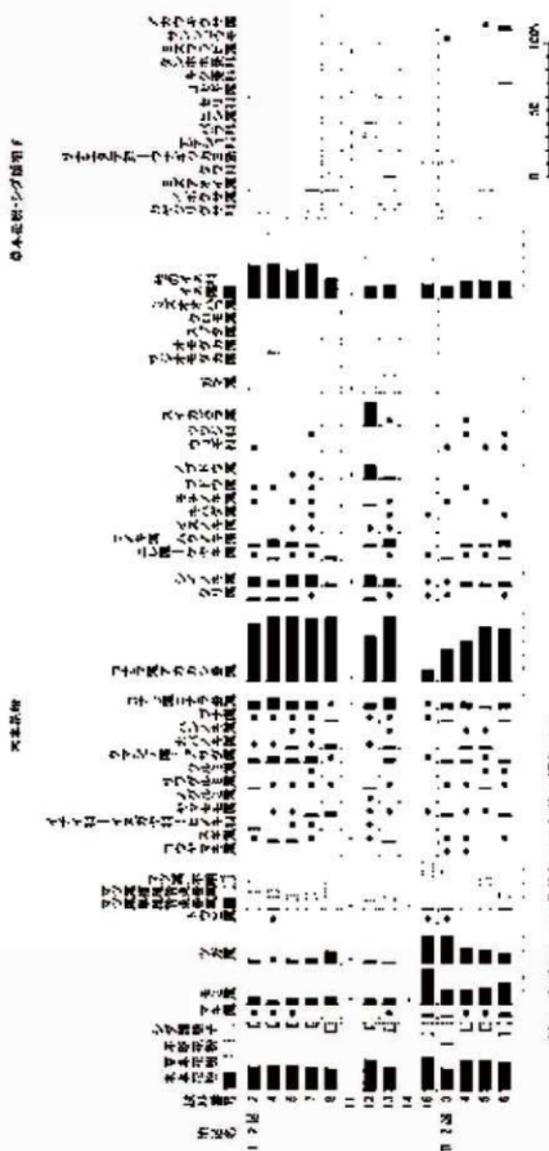


図2 各地区における花粉化石群集の組成分析
 出現率は、本花粉例は本花粉化石群集、草本花粉・シダ類花粉は総数より不明花粉を除く割合を基として百分率で算出した。
 なお、●は1%未満、+は大本花粉100個体未満の試料について推定した頻度を示す。

表2 植物珣酸体含量 (個/g)

種類	I-1区		II-2区	
	6	22	5	6
イネ科葉部短細胞珣酸体				
イネ族イネ属	<100	<100	417	219
タケ亜科ネザサ節	<100	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	216	137
ヨシ属	<100	<100	127	119
ウシクサ族コブナグサ属	-	<100	<100	<100
ウシクサ族ススキ属	-	<100	<100	<100
イチゴツナギ亜科	-	<100	149	<100
不明キビ型	<100	346	491	475
不明ヒゲシハ型	<100	<100	104	<100
不明ダンテク型	<100	113	134	110
イネ科葉身機動細胞珣酸体				
イネ族イネ属	<100	238	402	512
タケ亜科ネザサ節	<100	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	<100	<100
ヨシ属	<100	<100	<100	210
ウシクサ族	-	<100	<100	119
不明	<100	254	104	430
樹木起源				
第IIIグループ	-	<100	164	<100
第IVグループ	-	<100	<100	119
合計				
イネ科葉部短細胞珣酸体	100	800	1700	1200
イネ科葉身機動細胞珣酸体	200	700	600	1400
樹木起源	0	100	200	200
総計	300	1600	2500	2800

<100: 100個体以下

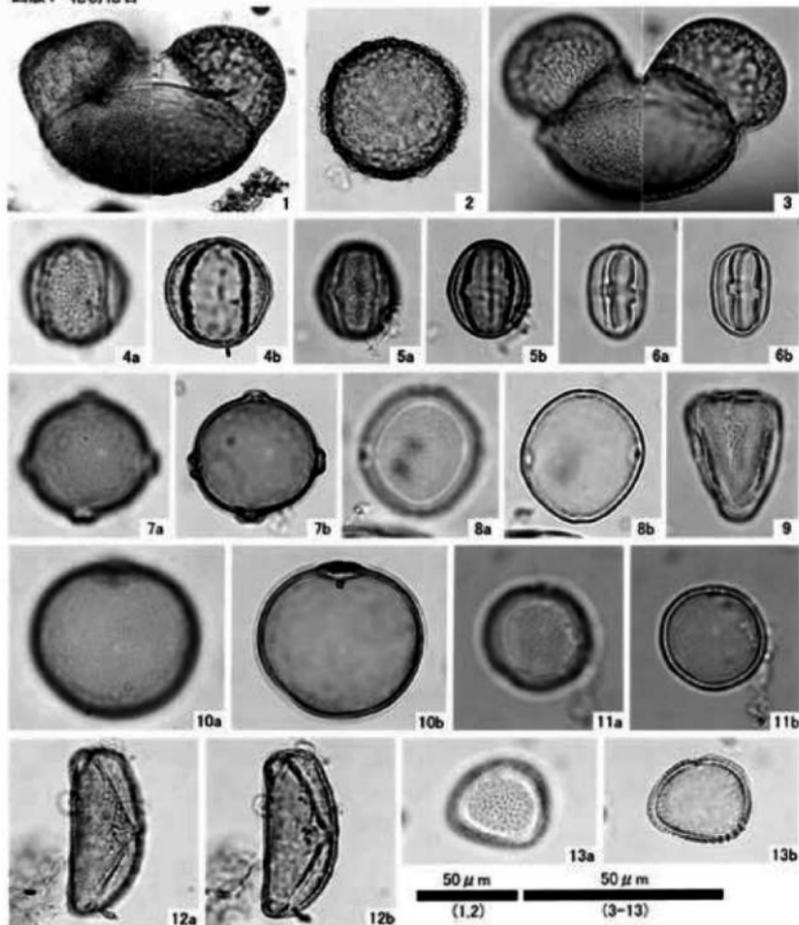
なお、総計は各分類群の丸めない数字を合計した後に10の位を丸めている(100単位にする)



図3. 各地区における植物珣酸体含量

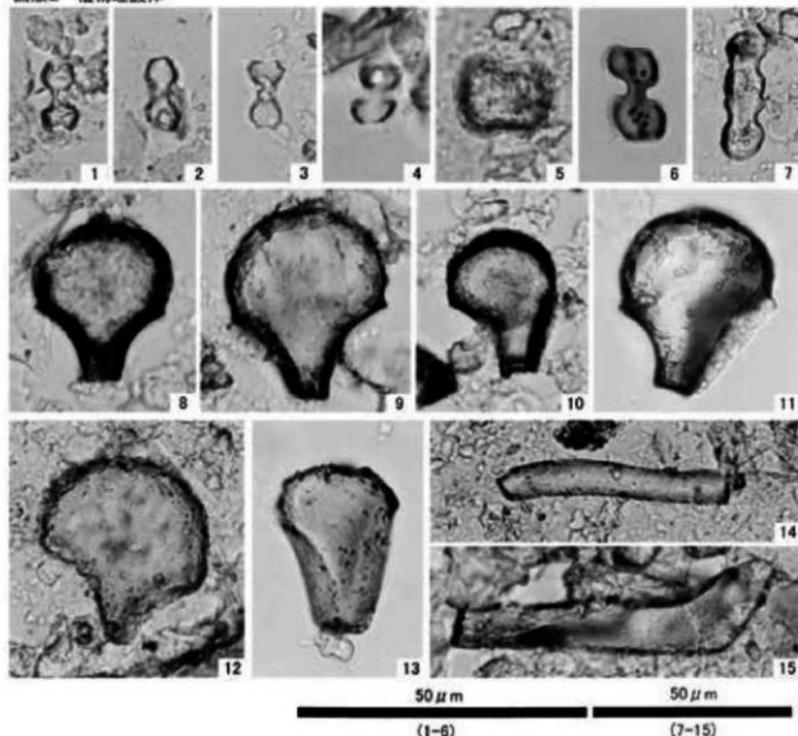
堆積物1gあたりに換算した個数を示す、●○は100個/1g未満の種類を示す。

図版1 花粉化石



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. モミ属(I-2区:4) | 2. ツガ属(I-2区:4) |
| 3. マツ属(I-2区:2) | 4. コナラ属コナラ亜属(I-2区:4) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(I-2区:2) | 6. シノキ属(I-2区:4) |
| 7. クマシデ属-アサダ属(I-2区:4) | 8. エノキ属-ムクノキ属(I-2区:7) |
| 9. カヤツリグサ科(I-2区:4) | 10. イネ属(I-2区:4) |
| 11. イネ科(I-2区:4) | 12. ミズアオイ属(I-2区:4) |
| 13. ガマ属(I-2区:2) | |

図版2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:5)
3. イネ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:6)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
9. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
11. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
15. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(Ⅱ-2区:6)

2. イネ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
4. イネ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
6. ススキ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
8. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:5)
10. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:6)
12. ヨシ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
14. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(Ⅱ-2区:5)

第4節 05- I -1 区・2 区・05- II -2 区

両道間遺跡における古植生と稲作の消長について（第2報）

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 1
4. 考察	p. 2
(1) 古植生	p. 2
(2) 稲作の検証	p. 3
引用文献	p. 3

<図表・図版一覧>

表 1. 花粉分析結果

図 1. I -1 区における試料採取位置および分析地点

図 2. 主要花粉化石群集

図版 1 花粉化石

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

両迫間遺跡は熊本県玉名市大字玉名字両迫間に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する弥生時代後期の遺跡である。今回調査を実施した I-1 調査区からは水田の大畦の一部、小畦などの水田遺構が検出されており、それに伴う木製の杭が多数出土している。

本報告では、当時の古植生に関する情報、および水田面の平面的広がりに関する情報を得ることを目的として、花粉分析・イネ属同定を実施する。また、以前に報告した I 区東壁の花粉結果のうち、今回の調査区と同じく弥生時代後期とされる層準で実施されたイネ属同定結果についても再録し、総合解析を試みる。

1. 試料

試料は I-1 区から平面的に 22 点（試料番号 1-22）、および I-2 区の断面から 3 点（試料番号 1-3）が採取されている。

I-1 区では、大畦の南側水田面より試料番号 1-14, 16, 17、小畦上より試料番号 15、大畦水口覆土より試料番号 18, 19、大畦北側水田面より試料番号 20-22 が採取されている。このうち分析対象とするのは、試料番号 1, 2, 5-8, 11, 12, 14-20, 22 の、計 16 点である。

I-2 区では、調査断面の 7b 層、8 層、10 層からそれぞれ各 1 点（試料番号 1-3）を採取した。このうち、7b 層（試料番号 1）は砂混じりの黄灰色シルトからなり、酸化鉄、マンガンの沈着が認められる古墳時代の水田層である。8 層（試料番号 2）は弥生時代水田層で、砂混じりの灰色シルトからなり、10 層（試料番号 3）も弥生時代水田層とされているオリーブ黒色シルトである。なお、10 層が I-1 区水田面に相当する。

既報の I 区東壁試料が採取された土層断面では、近世～現代の水田耕土より下位が 5 層に分層される。対象とする 7c 層は暗灰褐色シルトからなり、弥生時代後期の遺物を包含している。本層準から、試料番号 4, 8 の 2 点が採取されている。

各地点における試料採取位置および分析地点を図 1 に示す。

2. 分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚

状況・粒径などを考慮し、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

3. 結果

結果を表1、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。花粉化石の産出状況は良好であり、保存状態も良い。以下、調査区ごとに述べる。

・ I-1区

花粉化石群集は、いずれの試料においても大きな変化は認められず、草本花粉が多く認められる。木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属などの、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。

なお、イネ科花粉中におけるイネ属の割合は29.2-55.7%で、平均約45.4%である。

・ I-2区

花粉群集組成は、基本的にI-1区と類似しており、草本花粉の割合が高い。木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。層位的な変化についてみると、上位に向かうにつれアカガシ亜属、シノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ属などが増加する傾向が認められる。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。層位的には上位に向かってイネ科が増加する傾向がある。また、イネ科花粉におけるイネ属の割合は、試料番号3で53.7%、試料番号2で64.0%、試料番号1で79.4%であり、イネ属の割合も上位に向かって増加する傾向が認められる。その他に水湿地生植物であるガマ属、オモダカ属、ミズオオバコ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属なども検出される。

・ I区東壁

本地点の花粉化石群集も、I-1区、I-2区と類似しており、木本花粉と比較して草本花粉の割合がやや高い。群集組成も大きく異なっておらず、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属などの、水湿地生植物に由来する花粉化石も検出される。

4. 考察

(1) 古植生

比較的広域の周辺植生を反映する種類についてみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、シノキ属、エノキ属—ムクノキ属などの広葉樹に由来する花粉を伴う。多産するアカガシ亜属は、シノキ属、ヤマモモ属などととも温帯性常緑

広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、マキ属、スギ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、当時の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹が林分を形成していたと推測される。また、後背丘陵縁辺部などにはコナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹が、菊池川沿いや周辺の低湿地には、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などが生育していた可能性がある。

I-2区でみられた層位的な変化についてみると、下位の9層（試料番号3）から上位の7b層（試料番号1）に向かって、アカガシ亜属、シノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ亜属などが増加する傾向が認められ、増加するマツ属の多くは複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、九州では1500-1000年前頃とされ、その原因は農耕などにより森林が破壊されたことに起因するとされている（たとえば那須, 1980; 波田, 1987など）。今回の結果もマツ属などの増加に伴い、イネ属の割合が増加することを考慮すると、弥生時代から古墳時代にかけて、遺跡周辺の照葉樹林の伐採が増加しはじめた可能性がある。その結果、花粉化石群集に、二次林としてのマツ属や後背の針葉樹、広葉樹が強く反映されるようになったと推測される。

既存の研究結果から指摘される九州地方の植生変遷をみると、落葉広葉樹が優占していた植生から、約8500年前以降にアカガシ亜属、シノキ属などの照葉樹林が発達し始め、約6000年前頃に照葉樹林の最盛期に達する。その後、照葉樹林を主体としつつ針葉樹や温帯性落葉広葉樹を再び伴うようになり、約1500年前以降にアカガシ亜属、シノキ属の衰退とマツ属、イネ科の急増へと変化するとされている（たとえば畑中ほか, 1998など）。今回の分析結果は、既存の調査結果と調和的であることから、本地域も同様の植生変遷をたどったと考えられる。

草本類についてみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科ヨモギ属などを伴う。これらは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、同様の生育環境を示すものではクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ナデシコ科、アブラナ科、キク亜科などがあげられる。よって、当時の本遺跡内および遺跡周囲の草地などに、これらの草本類が生育していたと思われる。

また、ガマ属をはじめとしてサジオモダカ属、オモダカ属、スツバ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出する。よって、本遺跡内の流路や周辺河川内、およびその河畔などの湿地部に、これらが生育していた可能性がある。

(2) 稲作の検証

I-1区からは大粒、小粒などの水田遺構が検出されていることから、稲作の検証を目的としてイネ属同定を実施した。その結果、いずれの試料からもイネ属花粉が検出され、イネ科花粉におけるイネ属の割合は約29-56%と高い値を示した。中村（1980）は、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせると述べている。これを考慮すると、今回の結果は平均約45%を示すことから、調査対象としたI-1区試料採取範囲においては水田耕作を行っていたと想定され、発掘調査所見等と整合する。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、

カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属などは、水田雑草となりうる種を含む分類群であることから、流路や湿地部だけでなく、水田内にも生育していた可能性がある。

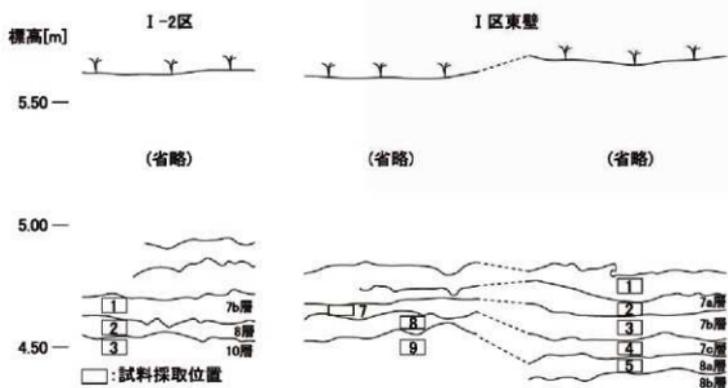
平面的な分布をみると、試料番号6で約30%、試料番号8で約37%、試料番号18,19で約35%と若干低い割合であり、それ以外の試料ではいずれも40%を超える値を示す。試料番号18,19は、発掘調査所見から大畦の水口と考えられていることから、覆土の堆積過程が他の地点と異なっていた可能性がある。試料番号6,8の差については、何を反映しているか現時点で不明であるが、採取地点が近いことから微地形など反映している可能性がある。

垂直的な変化をみると、9層から上位の7b層に向かって、イネ属の割合が増加する傾向が認められる。これは、水田における集約度の違い、あるいは耕作期間の違いなどを反映している可能性がある。

I区東壁において、弥生時代後期の水田の可能性が指摘される7c層（試料番号4,8）についてもイネ属同定を行った結果、イネ属の割合は試料番号4,8ともに約37%程度であり、今回の分析結果と同等の値であるといえる。また、水田雑草となりうるガマ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属なども検出されることから、I区東壁の7c層においても稲作が行われていた可能性が示唆される。

引用文献

- 波田 善夫, 1987, 松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 —松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について—。資料集, 日本自然保護協会, 41-49.
- 畑中 健一・野井 英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史。安田 喜憲・三好教夫 (編著), 図説 日本列島植生史, 朝倉書店, 151-161.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究。自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 —総括報告書—, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 那須 孝博, 1980, 花粉分析からみた二次林の出現。関西自然保護機構会報, 4, 3-9.



基本三射シダ類群7

基本花粉

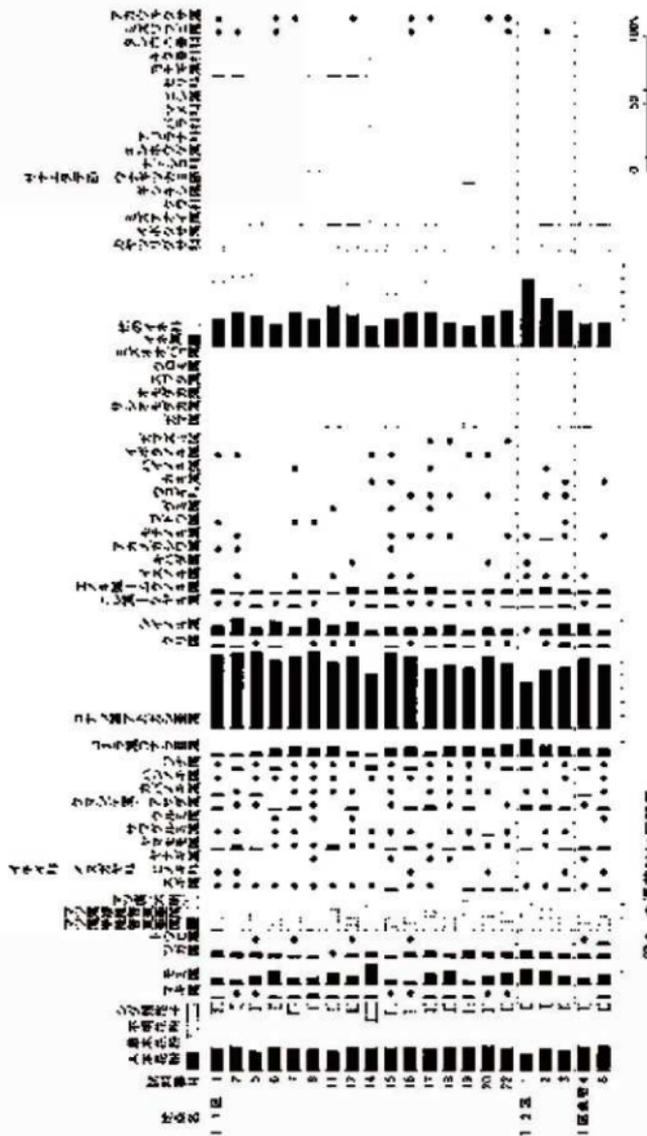
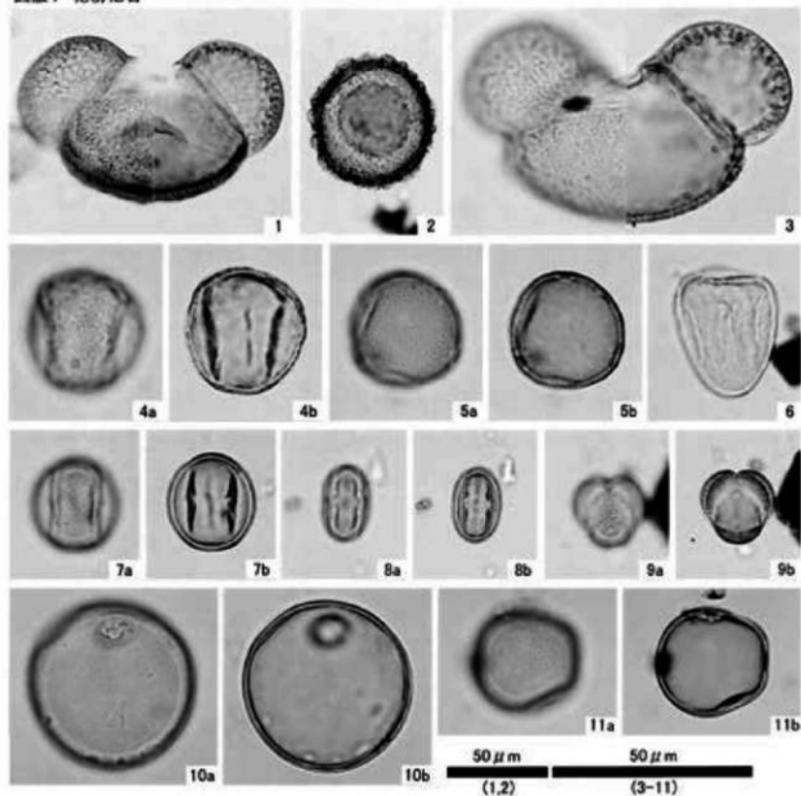


図2 主要花粉化石群集

出現率は、基本花粉は基本花粉化石群集、基本花粉シダ類群7は群集より不明花粉を減く数を基盤として百分率で算出した。なお、●○は194未調査を示す。

図版1 花粉化石



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. モミ属(I-1区:1) | 2. ツガ属(I-1区:1) |
| 3. マツ属(I-1区:2) | 4. コナラ属コナラ亜属(I-1区:2) |
| 5. エノキ属—ムクノキ属(I-1区:1) | 6. カヤツリグサ科(I-1区:2) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(I-1区:1) | 8. シイノキ属(I-1区:1) |
| 9. ヨモギ属(I-1区:1) | 10. イネ属(I-1区:5) |
| 11. イネ科(I-1区:5) | |

第5節 木樋 (SX-43)

両辺間日差遺跡検出木樋の自然科学分析調査

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 樹種同定	p. 1
(3) 珪藻分析	p. 2
(4) 花粉分析・イネ属同定	p. 2
(5) 植物珪酸体分析	p. 2
3. 結果	p. 3
(1) 放射性炭素年代測定	p. 3
(2) 樹種同定	p. 3
(3) 珪藻分析	p. 3
(4) 花粉分析・イネ属同定	p. 4
(5) 植物珪酸体分析	p. 4
4. 考察	p. 4
(1) 木樋の時代と用材選択	p. 4
(2) 木樋内の堆積環境と水質	p. 4
(3) 古植生	p. 5
引用文献	p. 6

<図表・図版一覧>

- 表 1. 放射性炭素年代測定結果
 表 2. 暦年較正結果
 表 3. 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群
 表 4. 珪藻分析結果
 表 5. 花粉分析結果
 表 6. 植物珪酸体含量

- 図 1. 主要珪藻化石群集
 図 2. 植物珪酸体含量

- 図版 1 木材・花粉化石
 図版 2 珪藻化石
 図版 3 植物珪酸体

はじめに

熊本県玉名市大字玉名字両迫間に所在する両迫間日渡遺跡は、菊池川右岸の沖積低地に立地しており、これまでの発掘調査により縄文時代～奈良時代、および中世を主体とすることが明らかになっている。当社では自然科学分析を継続実施しており、弥生時代以降の古環境の変遷にかかわる資料を作成してきたが、同時に弥生時代後期の水田遺構や水路をはじめとする各種遺構や土層を対象として、主に稲作の時空的な消長に関する情報を蓄積してきた。

今回の分析調査では、07-Ⅱ地区より検出された木樋を対象として、その時代観・用材選択に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施する。また、木樋内の水質、周辺植生等に関する情報を得ることを目的として、木樋覆土を対象に珪藻分析、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

07-Ⅱ区木樋は、基本土層の7b層を削んで形成された溝状の凹地に設置されており、その上位の6b層はこれらを覆って堆積している。先に分析調査を行った06-Ⅲ区では、7b層が弥生時代前期、6b層が古墳時代と想定されている。したがって、このような土層対比と周辺の遺物出土状況などから、この木樋は古墳時代中期以前の可能性が指摘されている。なお、当社技師1名による現地調査所見によれば、この木樋の内面には、数cm幅の工具痕が内面の湾曲面を平滑にするように連続的に認められており、特に節に相当する部分などではこれを除去するように工具痕が集中していた。

分析試料は、当社技師1名が現地調査時に木樋から採取した木材1点と、木樋覆土の土壌1点である。このうち木材試料1点は放射性炭素年代測定、樹種同定を実施することとし、観察できる範囲の中で最も樹皮側の外縁に近いと考えられる部分を対象に、年輪界2～3本が入るよう注意して採取を行い、アルミホイルで梱包した上でビニール袋に収納した。覆土土壌1点については珪藻分析、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施することとし、調査区内ベルトを利用して木樋底に近い部分を直方体（幅10cm厚さ5cm奥行き5cm）として塊状に採取し、ビニール袋中に収納した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投

入し封じ切る。鉄のあるパイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 95DH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柀目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール (飽水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から樹種を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林 (1991)、伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではないが、1 プレパラートあたり 50 個体以上の試料については 2 枚検鏡する)。種の同定は、原口ほか (1998)、Kramer (1992)、Kramer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺 (2005)、小林ほか (2006) などを参照し、分類体系は Round, Crawford & Mann (1990) に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms: 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無絨溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有絨溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms: 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有絨溝類は、単絨溝類、双絨溝類、管絨溝類、翼管絨溝類、短絨溝類に細分する。

各種類の塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に分け、貧塩性種については、さらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性が異地性を判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積

環境の解析は、貧塩性種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai & Watanabe (1995)、渡辺 (2005) の環境指標種を参考とする。

(4) 花粉分析・イネ属同定

試料約 10g について、水酸化カリウムによる肥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村 (1974) を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて表に示す。

(5) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「< 100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表 1 に、暦年較正結果を表 2 に示す。測定の結果、木樺の年代値は $2,980 \pm 40$ BP であった。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1

とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、木樋は calBC 1,288-1,130 である。

(2) 樹種同定

木樋はクスノキに同定された。以下に主な解剖学的特徴を記す。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高でやや階層状に配列する傾向がある。柔組織は周囲状~翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

(3) 建群分析

珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表3に、結果を表4、図1に示す。珪藻化石の産出頻度は少ないが、堆積環境を検討する上で有意な量が産出する。産出分類群数は、25属30分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が約80%と優占する。これに付随して、陸上のコケや土壌表面など多少の湿気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約17%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水性種が優占あるいは多産する。

主な産出種は、好流水性種の *Achnanthes crenulata* が約30%産出し、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、止水性の *Aulacoseira granulata*、*Stauroneis acuta*、水域にも陸域にも耐性のある陸生珪藻B群の *Eunotia praerupta*、その変種の *Eunotia praerupta* var. *bidens* 等を伴う。なお、陸生珪藻B群の2種は、沼沢湿地付着生種でもある。これらの種の汚濁耐性は、止水性種を除いて、好清水性である。

(4) 花粉分析・イネ属同定

結果を表5に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解しているものが多く認められた。

検出された種類についてみると、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。栽培種であるイネ属花粉は、1個体検出された。なお、本試料からはシダ類胞子が多産する。

(5) 植物珪酸体分析

結果を表6、図2に示す。土壌試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

栽培植物であるイネ属が検出され、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。ただし、その含量は少なく、短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約700個/gである。この他には、タケ亜科、ヨシ属、コブナダサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

またイネ科起源の他に、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアソン, 1981）も認

められる。

4. 考察

(1) 木樋の時代と用材選択

発掘調査所見より、木樋の時代時期は古墳時代中期以前とされている。今回これを対象に年代測定を実施した結果、約3,200～3,000年前(calBC 1,288～calBC1,130)の値を示した。

木樋に用いられていた樹種は、同定の結果、常緑広葉樹のクスノキであった。クスノキは、大径木になる常緑広葉樹であり、樹幹は比較的まっすぐに立ち、直径は大きいものでは1mを超える。樟脳を多く含むために保存性・耐水性・防虫性が高く、こうした材質から選択された可能性があるが、交錯木理を有するために加工は容易ではない樹種のひとつといえる。

熊本県内では、古墳時代中期以前の木樋について樹種を明らかにした例は知られていない。一方、九州地域全体でみると、福岡県の免(鶴町)遺跡、太宰府史跡、板付遺跡、上清水遺跡Ⅲ区で古墳時代中期以前の木樋について樹種同定を実施した例がある(嶋倉,1976,1977;松本ほか,1980;株式会社吉田生物研究所,1995)。免(鶴町)遺跡では、古墳時代前期とされる木樋本体2点がクリ、木樋を固定する杭にアカガシ亜属、シイノキ、スギが確認されている。太宰府史跡では、弥生時代中期とされる木樋がヒノキに同定されている。板付遺跡では、弥生時代中期後半とされる板組合せの木樋の横板と下板がシイノキ、上板がクリに同定されている。上清水遺跡Ⅲ区では、弥生時代末～古墳時代初頭の木樋状製品がアカガシ亜属に同定されている。これらの報告例をみると、太宰府史跡で針葉樹が利用されている他は、全て広葉樹材が利用されている。クスノキの利用例は確認できなかったが、広葉樹材を利用している点では既存の報告例とも調和的である。

(2) 木樋内の堆積環境と水質

木樋内覆土からは、好流水性種が多産した。よって、木樋が機能した頃には、木樋には流水あるいは流水を起源とした水が流れていたと考えられる。また、沼沢湿地付着生種を含む流水不定性種や陸生建群が産出したことから、沼沢や湿地などに堆積した土壌も流水に運ばれて木樋内に再堆積したと考えられる。なお、優占種の *Achnanthes crenulata* は、熱帯～亜熱帯性種、好清水性種、好アルカリ性種とされ、泉、小川、滝などから主に産出することから、日陰を好む陰性植物とされる(渡辺,2005)。よって、かつて木樋内に存在した流水は、半日陰に所在する泉、小川、滝などに起源する水が導水された可能性がある。なお、本遺跡が立地する熊本県五名市両迫間付近は、菊池川が山間を流れて低地に出た所の右岸に位置しているところから、この水系の一部が木樋に導水されたことが示唆される。

かつて遺構内に存在した水域の水質を検討するには、現在の水域で使用されている有機汚濁指数値(DAI_{po}値)を求める方法を応用することができる。これは、出現した珪藻化石を汚濁耐性の面から好汚濁性種(結果表のS)、広域適応性種(結果表のU)、好清水性種(結果表のT)の3つに類別して、汚濁の程度を珪藻の種組成に基づく汚濁指数として数的に表す方法である(Asai & Watanabe,1995)。この方法は、都市遺跡の側溝、溝、堀、上水道の水質においても応用可能なことが判明している(大浦ほか,2007;パリオ・サーヴェイ株式会社,1991a,1991b)。今回の試料は化石の保存が悪いため現地性の面で問題も残るが、希少な木樋の調査例であり、可能な限り水質についての情報を得るべく、算出を試みた。

DAIpo 値は、次式で求めることができる（渡辺ほか, 1988）。

$$\text{DAIpo} = 50 + 1/2 (\text{好清水性種の相対頻度の和} - \text{好汚濁性種の相対頻度の和})$$

DAIpo 値は、100-85 が極貧腐水性水域 (xenosaprobic)、84-70 が弱貧腐水性水域 (β -oligosaprobic)、69-50 が強貧腐水性水域 (α -oligosaprobic)、49-30 が弱中腐水性水域 (β -mesosaprobic)、29-15 が強中腐水性水域 (α -mesosaprobic)、14-0 が強腐水性水域 (polysaprobic) に区分される（渡辺・浅井, 1992）。

計算の結果、汚濁指数値は 69.7 を示す。この値は強貧腐水性水域の範囲に相当し、水質的には「きれい」という範囲に区分される（福島, 1982）。よって、木樋内の水質は比較的清浄であったと想定される。また、pH は真好アルカリ性種が多産したことから、弱アルカリ性と考えられる。

(3) 古植生

07- II 区の木樋覆土では、花粉化石の産出状況が悪く、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など）。また、花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。検出された花粉化石の保存状態や多産するシダ類胞子などを考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残された可能性がある。

わずかながら検出された種類をみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。アカガシ亜属はヤマモモ属、シノキ属などととも、温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、これらの木本類が、当時の本遺跡周辺に生育していたことが窺える。過去に分析調査を実施した 05 I-2 区、05 II-2 区、06- I 区、06- III 区における弥生時代後期とされる土層の花粉分析結果では、本遺跡周辺にアカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、周辺の丘陵部等にはコナラ亜属等の落葉広葉樹が、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹も生育していたことを推定したことがある。今回得られた結果も、過去の分析結果と調和的であり、木樋内に水域が存在していた当時も同様の植生が存在した可能性がある。

一方、草本類をみると、栽培種ではイネ属に由来する花粉・植物珪酸体が検出される。この木樋から 10m 前後離れた 06- III 区 I 杭直下壁面では、6b 層堆積時に稲作が行われたことが示唆されたことから、当初木樋周辺でも稲作が行われていたことが予想された。しかし、今回の両分析結果で見ると、いずれもイネ属の含量が少ないことから、この木樋の上流部に稲作地が存在していたことは想定しにくく、また木樋付近で稲作が行われたとは断定できない。

栽培種以外をみると、花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。植物珪酸体ではタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が認められる。これらの多くは開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、先の分析調査でも遺跡内および遺跡周囲にイネ科やカヤツリグサ科などが生育する草地のあったことが指摘されている。よって、古墳時代中期以前の微高地にも、同様な草本植生が分布したことが示唆される。

引用文献

- 安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and suproxyenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 福島 博, 1982, 6 多摩川の植物. 東京生物史, 創紀伊国屋書店, 92-104.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 株式会社 吉田生物研究所, 1995, 木製品の樹種同定. 北九州市埋蔵文化財調査報告書第160集 上清水遺跡 III区 -九州縦貫自動車道関係文化財調査報告 35, (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 142-146.
- 小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, 堀内田老鶴園, 531p.
- 近藤 隼三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト, 48, 46-64.
- 近藤 隼三・ピアスン 女子, 1981, 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, 217-229.
- Kramer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
- Kramer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaeae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Kramer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Kramer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eumotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Kramer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.

- Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L. 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松本 昂・堤 寿一・林 弘也・北原 龍士, 1980, 北部九州の遺跡から出土した木材及び木製品. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班, 東京プレス, 241-248.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 大浦 史雄・金原 正昭・池野 祐季, 2007, 都市遺跡における水利機能の解明に有効な珪藻種の考察. 日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集, 158-159.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1991a, 真砂遺跡第2地点江戸時代上水道に関する検討. 第3節自然科学分析の結果, 真砂遺跡第2地点文数ふるさと歴史館建設工事に伴う発掘調査報告書, 文京区遺跡調査会, 242-246.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1991b, 上水構築時の自然堆積層および上水内堆積物の各種分析調査. 神田上水石垣遺構発掘調査報告書, 文京区神田上水遺跡調査会, 209-230.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 嶋倉 巳三郎, 1976, 福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 鶴町遺跡, 福岡市教育委員会, 63-68.
- 嶋倉 巳三郎, 1977, 福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 板付周辺遺跡調査報告書(4), 福岡市教育委員会, 111-114.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 渡辺 仁治, 2005, 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性. 内田老鶴園, 666p.
- 渡辺 仁治・浅井 一視, 1992, 高優占度珪藻による有機汚濁の判定 (3) *Navicula* が第1位種となる群集. 日本珪藻学会誌, 7, 29-35.
- 渡辺 仁治・山田 愛恵子・浅井 一視, 1988, 珪藻群集による有機汚濁指数 (DAIPo) の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, 765-773.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

表1. 放射性炭素年代測定結果

地区名	試料名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
07- II区	木桶	木材	クスノキ	2,980 ± 40	-30.90 ± 0.54	3,080 ± 40	9690-1	IAAA-70343

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

地点名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
07- II区	木桶	2,981 ± 36	σ	cal BC 1,288 - cal BC 1,283	cal BP 3,238 - 3,233	0.035	9690-1
				cal BC 1,269 - cal BC 1,188	cal BP 3,219 - 3,138	0.675	
				cal BC 1,181 - cal BC 1,155	cal BP 3,131 - 3,105	0.172	
				cal BC 1,145 - cal BC 1,130	cal BP 3,095 - 3,080	0.118	
			2σ	cal BC 1,374 - cal BC 1,340	cal BP 3,324 - 3,290	0.043	
				cal BC 1,319 - cal BC 1,112	cal BP 3,269 - 3,062	0.938	
				cal BC 1,101 - cal BC 1,084	cal BP 3,051 - 3,034	0.014	
				cal BC 1,064 - cal BC 1,058	cal BP 3,014 - 3,008	0.005	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表3. 球藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe (1974) による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度 40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種 (海水生種)	塩分濃度 40.0 ~ 30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種 (汽水生種)	塩分濃度 30.0 ~ 0.5‰に生育する種
淡水生種	真淡水性種 (淡水生種)	塩分濃度 0.5‰以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	真塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	真塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	真塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に対応できる種
pH	真酸性種	pH 7.0 以下に生育し、特に pH 5.5 以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH 7.0 付近に生育し、pH 7.0 以下の水域で最も良く生育する種
	pH 不定性種	pH 7.0 付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH 7.0 付近に生育し、pH 7.0 以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH 7.0 以上に生育し、特に pH 8.5 以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38) による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
Hustedt (1937-38) による	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群 (小杉, 1988 による)	
外洋指標種群 (A)	塩分濃度が約 35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群 (B)	塩分濃度 35 ~ 26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群 (C1)	塩分濃度 35 ~ 12‰の海域で海藻 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群 (C2)	塩分濃度 12 ~ 4‰の汽水域で海藻 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群 (D1)	塩分濃度 35 ~ 26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群 (D2)	塩分濃度 26 ~ 5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群 (E1)	30 ~ 12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群 (E2)	塩分濃度 12 ~ 2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水産生種群 (F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群 (G)	塩分濃度 2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群 (H)	塩分濃度 20 ~ 2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群 (安藤, 1990 による)	
上流性河川指標種群 (J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群 (K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群 (L)	最下流部の三角洲の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群 (M)	水深が約 1.5 m 以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢地指標種群 (N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢地付着生種群 (O)	沼よりも深く水深が 1 m 前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の認められることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群 (P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群 (Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなどに常に大気に曝された好氧的環境 (陸域) に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群 (伊藤・堀内, 1991 による)	
陸生珪藻 A 群 (RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻 B 群 (RB)	陸生珪藻 A 群に陸伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻 (RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾燥に対する適応性の不明なもの

表4. 硅藻分析結果

種 類	生態性			環境指標種	木曜種土
	塩分	pH	流水		
Centric Diatoms (中心型硅藻類)					
<i>Hydrosera whampoensis</i> (A. F. Schwarz) Deby	Ogh-Meh	al-ii	ind	U	1
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.) Sinonsen	Ogh-ind	al-ii	l-bi	M, U	4
<i>Melosira undulata</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-bi		1
Raphid Pennate Diatoms (無縱溝羽状硅藻類)					
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	ind	U	1
Raphid Pennate Diatoms (有縱溝羽状硅藻類)					
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽状硅藻類)					
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	r-ph	T	29
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	r-ph	T	1
Biraphid Pennate Diatoms (雙縱溝羽状硅藻類)					
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R. E. M. Archibald	Ogh-ind	al-ii	ind	U	1
<i>Amphora</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		5
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerwald) Kramer	Ogh-ind	ind	ind	O, U	1
<i>Encyonema silosiacum</i> (Bleisch) D. G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2
<i>Gomphonema heterominuta</i> Mayas & Kawashima	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	2
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-ii	ind	T	2
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
<i>Cratocula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-ii	l-ph		4
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O, U	1
<i>Stauroneis</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Frustulia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Diadotmia confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	ind	RB, S	1
<i>Neidium gracile</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ii	ind		1
<i>Neidium</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Caloneis lauta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Pinnularia acrophaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-ii	l-ph	O	1
<i>Pinnularia acrophaeria</i> var. <i>undulata</i> Skvortzov	Ogh-ind	al-ii	l-ph	O	1
<i>Pinnularia rivularis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ii	l-ph		1
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	ac-ii	ind	S	3
<i>Pinnularia subangulata</i> Kramer	Ogh-hob	ac-ii	ind		1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-ii	ind	RB, S	4
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
管絨溝類					
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	1
<i>Hantzschia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Ogh-Meh	al-ii	ind	U	3
真管絨溝類					
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	r-bi	U	1
短縱溝類					
<i>Eunofia biserialoides</i> H. Kobayasi, K. Ando & T. Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T	1
<i>Eunofia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Raife) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-ii	ind	O	4
<i>Eunofia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-ii	l-ph	RB, O, T	3
<i>Eunofia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-ii	l-ph	RB, O, T	7
<i>Eunofia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					4
淡水生種					101
硅藻化石總數					105

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	G.R. : 流水に対する適応性
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	al-ii : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-hob : 貧塩好塩性種	ac-ii : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種

環境指標種群

M: 湖沼浮遊性種, O: 沼沢地付着性種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)

R: 陸生硅藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

表5. 花粉分析結果

種類	木種 試料番号 覆土
木本花粉	
モミ属	1
ツガ属	4
マツ属	2
ヤマモモ属	1
クマシデ属-アサダ属	1
コナラ属コナラ亞属	4
コナラ属アカガシ亞属	11
シノキ属	1
ウコギ科	1
草本花粉	
イネ属	1
他のイネ科	11
カヤツリグサ科	8
サナエタデ節-ウナギツカミ節	8
ヨモギ属	3
キク亜科	1
不明花粉	6
シダ類胞子	
イノモトソウ属	6
他のシダ類胞子	165
合計	
木本花粉	26
草本花粉	32
不明花粉	6
シダ類胞子	171
総計(不明を除く)	229

表6. 植物珪酸体含量

(個/g)

種類	木種 試料番号 覆土
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	200
タケ亜科	1,300
ヨシ属	1,500
ウシクサ族コブナグサ属	200
ウシクサ族ススキ属	1,000
イチゴツナギ亜科	200
不明キビ型	2,800
不明ヒゲシバ型	800
不明ダンテク型	1,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	700
タケ亜科	800
ヨシ属	1,100
ウシクサ族	400
不明	2,700
樹木起源	
第Ⅲグループ	500
第Ⅳグループ	1,000
合計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	10,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5,600
樹木起源	1,500
総計	17,100

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

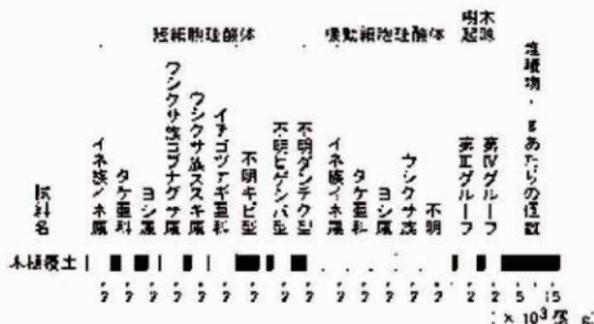
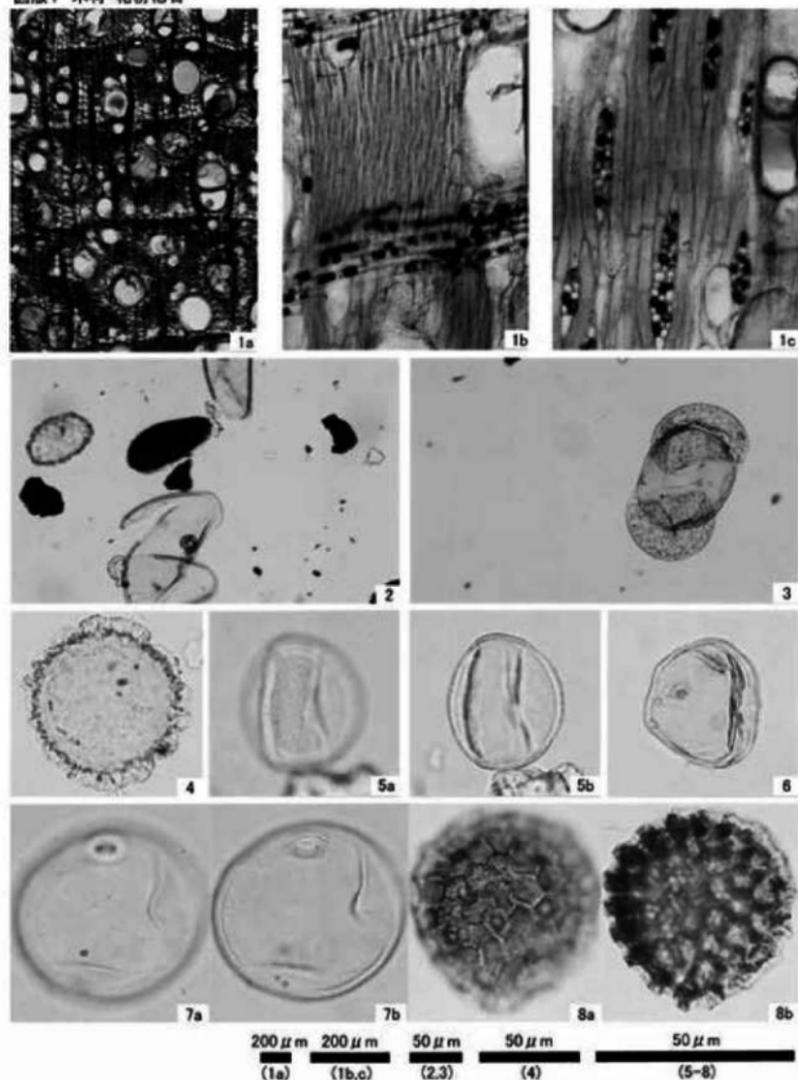


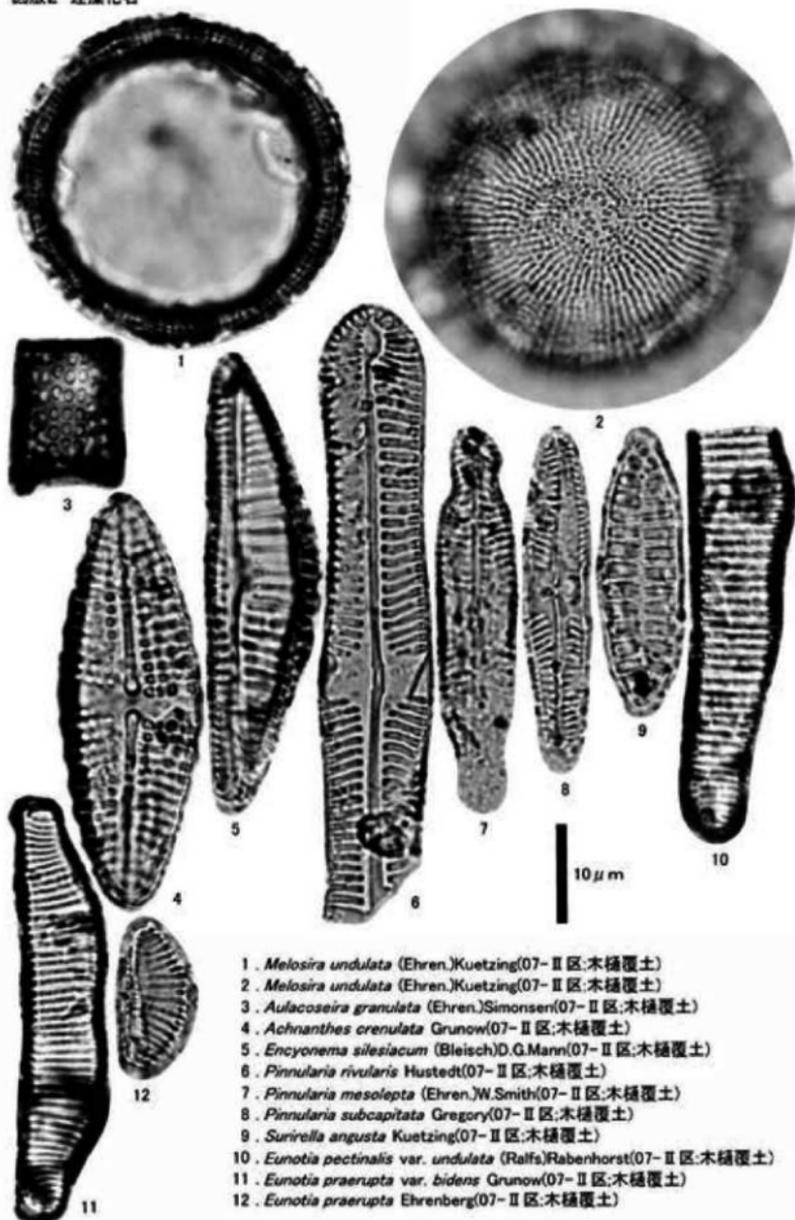
図2. 植物珪酸体含量
堆積物1gあたりに検算した個数を示す

図版1 木材・花粉化石



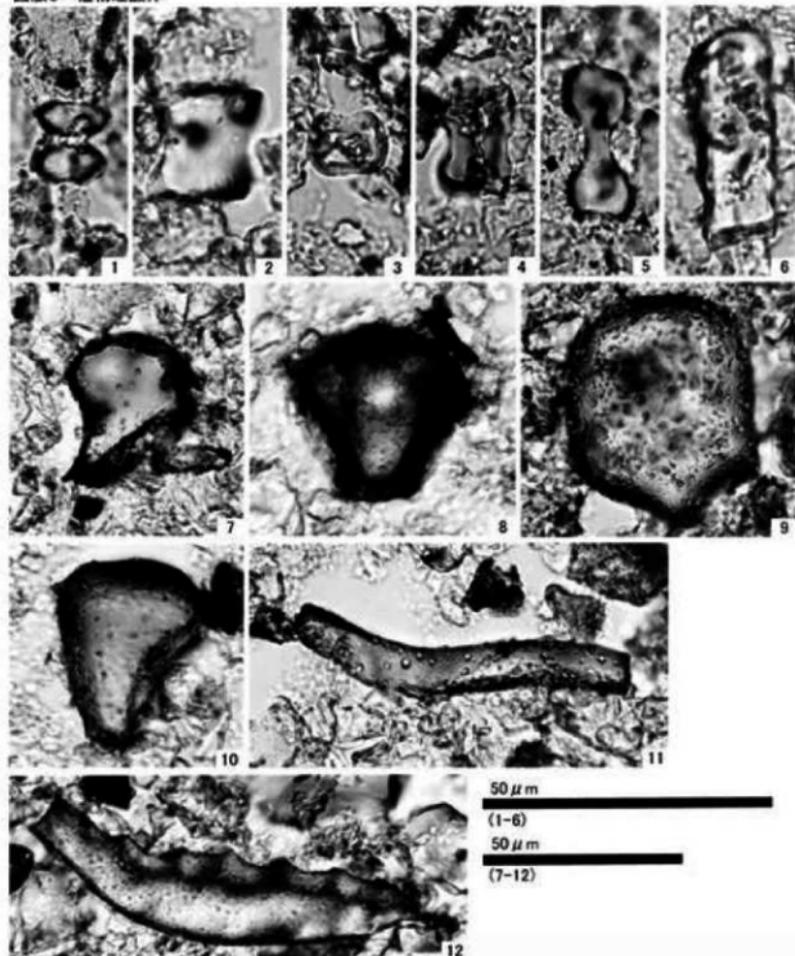
1. クスノキ(07-Ⅱ区:木桶) a: 木口, b: 年目, c: 板目
 2. プレバート内の状況(07-Ⅱ区:木桶覆土) 3. プレバート内の状況(07-Ⅱ区:木桶覆土)
 4. ツガ属(07-Ⅱ区:木桶覆土) 5. コナラ属アカガシ亜属(07-Ⅱ区:木桶覆土)
 6. イネ科(07-Ⅱ区:木桶覆土) 7. イネ属(07-Ⅱ区:木桶覆土)
 8. サナエタ節-ウナギツカミ節(07-Ⅱ区:木桶覆土)

图版2 硅藻化石



1. *Melosira undulata* (Ehren.)Kuetzing(07- II 区:木桶覆土)
2. *Melosira undulata* (Ehren.)Kuetzing(07- II 区:木桶覆土)
3. *Aulacoseira granulata* (Ehren.)Simonsen(07- II 区:木桶覆土)
4. *Achnanthes crenulata* Grunow(07- II 区:木桶覆土)
5. *Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann(07- II 区:木桶覆土)
6. *Pinnularia rivularis* Hustedt(07- II 区:木桶覆土)
7. *Pinnularia mesolepta* (Ehren.)W.Smith(07- II 区:木桶覆土)
8. *Pinnularia subcapitata* Gregory(07- II 区:木桶覆土)
9. *Suriella angusta* Kuetzing(07- II 区:木桶覆土)
10. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst(07- II 区:木桶覆土)
11. *Eunotia praeurupta* var. *bidens* Grunow(07- II 区:木桶覆土)
12. *Eunotia praeurupta* Ehrenberg(07- II 区:木桶覆土)

図版3 植物珪酸体



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) | 2. タケ茎科短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) | 6. イチゴツナギ茎科短細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) | 8. タケ茎科機動細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(07-II区:木桶覆土) |
| 11. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(07-II区:木桶覆土) | 12. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(07-II区:木桶覆土) |

第6節 種実

両道間日渡遺跡出土木種の自然科学分析調査

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 植物珪酸体分析	p. 1
(2) 種実同定	p. 1
3. 結果	p. 2
(1) 植物珪酸体分析	p. 2
(2) 種実同定	p. 3
4. 考察	p. 5
(1) 古植生について	p. 5
(2) 栽培植物について	p. 6
引用文献	p. 6

<図表・図版一覧>

表1 植物珪酸体含量

表2 種実同定結果

図1. 植物珪酸体含量の層位分布

図版1 植物珪酸体

図版2 種実遺体

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

兩迦間日渡遺跡は菊池川右岸の氾濫低地に位置する縄文時代～中世の複合遺跡である。今回の分析調査では、調査区内の土地利用および植生に関する情報を得ることを目的として06-II区の基本層序を対象とする植物珪酸体分析を実施する。また、当時の植物利用や植生に関する情報を得ることを目的として、調査時に出土した種実の種類同定を実施する。

1. 試料

植物珪酸体試料は、06-II区の6C層～10層から採取された17点である。採取層準の層相は、6層が灰色を呈する砂質シルト～砂混じりシルトからなる。砂の含有量、酸化鉄やマンガン斑の沈着状況などから6A層、6B層、6C層に区分されている。このうち、6C層は砂粒を多く含み、酸化鉄・マンガン斑の分布密度が高い。7層は灰色の粘土からなり、上位の7A層と下位の7B層に細分される。7A層は7B層に比較して砂勝ちで、酸化鉄やマンガン斑の分布密度が高い。8層は灰色を呈する砂混じり粘土からなり、酸化鉄やマンガン斑が沈着する。8層下層はオリブ黒色泥からなる。8層下層上面では水田が検出されており、8'層が本水田の畦を構成する堆積物とされる。8B層は泥からなる。8B層上面でも水田が検出されており、8B''層・8B'''層が畦を構成する堆積物とされる。9層はオリブ黒色シルト質粘土～粘土からなる。上面では水田が検出されており、9層上層が畦を構成する堆積物に相当する。10層はオリブ黒色粘土からなり、縄文時代晩期の遺物が出土する。

種実同定は、発掘調査により抽出された種実であり、層位、調査地点とも多岐にわたる。このため、分析試料の詳細は、結果表に記す。

2. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と植物珪酸体含量の層位分布図として示す。なお、各分類群の含量密度は10の位で丸めた値として示してある。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体表面に付着した泥を、面相筆を用いて丁寧に除去する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種類毎に瓶に入れて保管

する。水に入った種実遺体には、約70%のエタノール溶液を入れて保存する。

3. 結果

(1) 植物遺体分析

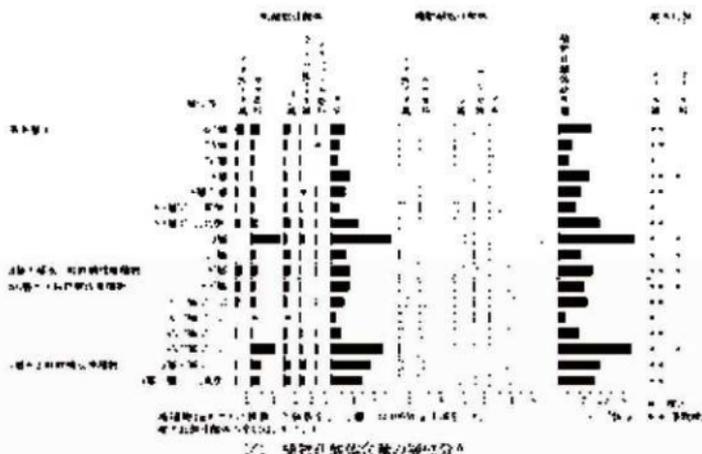
結果を表1、図1に示す。各試料からは植物遺体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

植物遺体含量は、10層～9層で増加傾向が見られ、10層の約10,000個/gから9層の約35,000個/g

表1. 植物遺体含量

分類群	試料名																
	IC層	TAN	T9層	8層	8層 下層	8層	8層 IC-11	8層 IC-11 高層	8層 IC-11 北側	8層 高層	8層 IC-11	8層 IC-11	8層 IC-11	8層 IC-11	9層	9層 上層 IC-11	10層 高層
イネ科葉部植物遺体																	
イネ科イネ類	1650	300	300	400	400	1600	300	700	900	700	-	200	-	-	300	300	-
タケ類	1650	400	600	400	800	1200	600	1300	700	1000	<100	400	400	4400	5400	1900	1000
サトウ	300	300	100	300	300	300	300	500	1300	500	500	<100	400	600	300	1100	1300
ワラビ科真入スズノ目	300	100	200	300	<100	100	300	500	200	200	100	400	400	400	800	1300	300
イネ科イネ科葉部	200	<100	-	-	200	400	300	300	-	200	100	200	400	300	300	300	300
合計	2550	1400	1200	1600	2600	3600	3600	1800	5300	3300	2000	1000	2000	9600	11900	7300	1700
イネ科葉部植物遺体以外の植物																	
イネ科イネ類	2000	1400	900	2900	3400	2200	1200	2000	1300	1000	500	900	100	-	300	200	200
タケ類	1200	400	100	800	900	700	300	800	400	1300	600	400	3700	5800	900	300	800
サトウ	1600	300	300	1800	800	1800	900	1300	400	600	400	600	2900	2200	1700	1300	1700
ワラビ科	200	-	-	400	<100	<100	300	800	200	200	200	<100	700	300	900	600	200
合計	2900	1800	1500	4900	2200	2900	2100	3300	2300	1700	200	2800	4700	8000	3400	2300	2300
合計	7000	2500	2500	4800	4200	7200	1800	8300	6000	4900	1400	3400	16400	17800	12100	9600	5100
イネ科葉部植物遺体以外の植物																	
イネ科イネ類	8500	3500	3300	9700	6300	8600	4700	10700	6300	8500	1900	4100	18200	17200	7300	7900	5500
タケ類	13300	6400	4900	14500	10700	13800	8900	13100	12300	13400	2300	9500	33000	35800	13000	10800	11400
植物遺体以外の植物																	
イネ科イネ類	**	**	*	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
タケ類	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**

数量は、100g中の含量(個/g)を示す。合計は各分類群の合計(層下を合計値に与えられた)である。(<100は100個未満、-は未検出を示す。植物遺体の検出状況は*で示し、**は多数の検出を示す。



と増加し、極大となる。8B''層 (C-12) でも多いが、8B'層以降減少し、5,000個/g～15,000個/gの間を変動する。

9層を除き、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体双方のイネ属が連続的に産出する。10層～8B'層 (C-12) にかけては短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも1,000個/g未満である。なお、8B'層 (C-11) では8B'層 (C-12) よりもイネ属の含量が多く、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約1,600個/gである。8B'層より上位では機動細胞珪酸体の増加傾向が見られる。その含量は1,000個/g前後～2,800個/gの範囲であり、他の分類群と比較して多い。また、8層は約2,800個/g、8B層 (C-11 北側) は約2,600個/g、8層下層と6C層は約2,400個/g、8'層は約2,200個/gであり、他の層位よりも含量が多い。

この他に、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども見られる。8B''層 (C-12) と9層では、タケ亜科の産出が目立つ。またイネ科起源の他に、イソノキ属やクスノキ科の樹木起源珪酸体も見られ、イソノキ属の産出が目立つ。

(2) 種実同定

結果を表2に示す。全試料を通じて、被子植物9分類群 (広葉樹のヤマモモ、クスノキ、ウメ、スモモ、モモ、センダン、クマノミズキ、エゴノキ属、草本のカラスウリ) 107個の種実が同定された。

栽培種は、ウメの核が2個 (接合し1個)、スモモの核が1個、モモの核が57個、計60個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、常緑高木のヤマモモの核が36個、クスノキの種子が4個、落葉高木のセンダンの核が1個、クマノミズキの核が1個、落葉小高木のエゴノキ属の種子が4個、つる性草本のカラスウリの種子が1個、計47個が確認された。各分類群の写真を図版2に、以下に形態的特徴等を記す。

・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核 (内果皮) は灰褐色、長さ7～8mm、幅6～7mm、厚さ4.5～5mm程度の歪でやや扁平な非対称広楕円体。内果皮は硬く、表面には数細な網目模様があり粗面。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科ニッケイ属

種子は灰黒褐色、長さ5.5～6.5mm、幅5～6mm、厚さ5～5.5mmの偏球体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く表面は粗面、断面は摺状。

・ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.)バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、のやや扁平な広楕円体。05-1-2区の番号6と7は接合して1個体となり、長さ19.76mm、幅15.42mm、厚さ11.51mm。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の小凹点が分布する。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、レンズ状広楕円体。出土核は、丸く臍点がある基部を欠損し、残存長14.78mm、残存幅10.14mm、残存厚9.88mm。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが見られる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

表2 種実同定結果

調査区	番号	グリッド	層位	同定結果				計測値(mm)				
				分類群	部位	状態	個数	備考	長さ	幅	厚さ	
05-1区	1	D-4	7層一括	モモ	核	完形	1		18.84	17.72	14.56	
	2		7層一括	モモ	核	完形	1		20.46	18.32	15.94	
	3		7層一括	モモ	核	完形	1		22.01	18.01	14.83	
	4	C-3	7層一括	モモ	核	完形	1		28.06	21.54	16.61	
	5		7層一括	モモ	核	完形	1	頂部欠損	21.81 +	19.22	14.72	
	6		7層一括	モモ	核	完形	1		24.61	18.28	15.13	
	7	C-4	7層一括	モモ	核	完形	1		23.42	17.53	12.49	
	8		7層一括	モモ	核	破片	1	半分未満	23.02 +			
	9		7層一括	モモ	核	破片	1	扁平のラベルED-4,半分,融合部に当たらない	22.85 +	19.62		
	10	C-6	7層一括	モモ	核	完形	1		19.53	15.12	12.59	
	11		7層一括	モモ	核	完形	1		26.74	19.86	14.42	
	12		7層一括	モモ	核	完形	1	融合部一部欠損	25.49	18.22 +	15.48	
	13	C-6	7層一括	モモ	核	完形	1		21.12	17.16	14.17	
	14		7層一括	モモ	核	完形	1	頂部わずかに欠損	22.57 +	19.28	15.92	
	15	D-4	7層一括	モモ	核	完形	1		30.44 +	17.55	14.14	
	16		7層一括	モモ	核	完形	1	頂部わずかに欠損,融合部一部摩耗	24.82	18.96	15.21	
	17	D-5	7層一括	モモ	核	完形	1		27.68	19.63	14.52	
	18		7層一括	モモ	核	完形	1	基部へ側面に鋭利な切斷痕	31.86 +	30.45	16.44	
	19		7層一括	モモ	核	完形	1		24.12	20.05	16.35	
	20	D-7	7層一括	エゴノトモ	種子	完形	1		11.5	7.07		
	26		B-3	7層	クスノキ	種子	完形	1				
	28		D-5	7層	モモ	核	完形	1		22.97	20.40	14.89
	29	D-5	7層	モモ	核	完形	1		21.35	16.21	13.37	
	30		B-7	7層一括	モモ	核	完形	1		24.55	19.77	17.04
	34		C-5	8層	クマノシズク	核	完形	1	側面一部欠損			
	35	C-7	8層	モモ	核	完形	1		26.29	19.96	16.89	
	36		D-4	8層	センダン	核	破片	1				
	37	D-5	8層	モモ	核	完形	1		24.59	19.28	14.83	
	38		D-6	8層	スモモ	核	完形	1	鋭利な切斷痕,基部欠損	14.78 +	10.14 +	9.88 +
	39	E-7	8層	モモ	核	破片	1	融合部に当たらない	20.12	14.45 +		
40	8層		モモ	核	破片	5	計1/2割未満					
1	A-2	8層	モモ	核	完形	1		24.16	18.74	14.95		
2		8層	モモ	核	完形	1		24.97	19.92	16.78		
3	B-2	8層	モモ	核	完形	1	表面全片摩耗	15.27 +	11.83 +	8.53 +		
4		B-3	8層一括	モモ	核	完形	1	303,丸磨状物	19.25	15.28	12.74	
5	B-4	8層	モモ	核	完形	1		27.50	30.19	15.68		
6		C-2	8層	クマ	核	完形	1	鋭利な切斷痕,基部欠損,7上縁合	18.76	15.42	11.51	
7	8層		クマ	核	破片	1	鋭利な切斷痕,基部,上縁合					
8	C-3	8層	エゴノトモ	種子	完形	1		13.94	6.18			
9		8層	モモ	核	完形	1		20.67	17.95	14.13		
27	D-7	8層	クスノキ	種子	完形	1						
38		8層	クスノキ	種子	破片	1	基部摩耗					
39		8層	クスノキ	種子	破片	1						
51	D-7	10a層一括	モモ	核	完形	1	497~470,丸磨状物,両融合線上欠損	17.94	15.06	13.71		
54		10a層	エゴノトモ	種子	完形	1		11.5	6.16			
65	C-4	7層	モモ	核	完形	1		19.84	15.29	13.23		
66		C-5	7層	モモ	核	完形	1	側面摩耗	24.34	19.38	16.27 +	
67	C-5	7層一括	モモ	核	破片	1	236,丸磨状物,半分,基部欠損	20.4 +	15.33	6.58 +		
72		D-4	7層	モモ	核	完形	1	側面一部欠損	30.96	16.44	14.48	
73	D-5	7層	モモ	核	完形	1	基部欠損	21.63 +	17.39	13.44		
74		D-5	7層	モモ	核	完形	1		23.36	19.27	16.97	
75	D-6	7層	モモ	核	完形	1	側面へ融合部一部欠損(尖突?)	26.17	18.61 +	13.12 +		
06-1区	D1-1	Y18	7層	エゴノトモ	種子	破片	1					
	2	Z15	7層	モモ	核	破片	1	乾燥状態				
	10	X13	7層	モモ	核	破片	2	乾燥状態,計1個体未満				
	12	Y15	7層	モモ	核	破片	2	炭化,融合し,完形1個,側面へ融合線食痕	17.63 +	13.9 +	9.92	
	13	A13	7層	モモ	核	完形	1	表面摩耗	22.43	16.68 +	11.37 +	
	14-1	Y15	7層	モモ	核	完形	1	表面摩耗,側面食痕	22.56 +	16.91 +	9.11 +	
	14-2	Y18	7層	モモ	核	完形	1		18.61 +			
	15	D11	7層	モモ	核	破片	1					
	17	B14	7層	モモ	核	完形	1		19.14	16.22	13.99	
	32	X14	8層	モモ	核	破片	1					
	40-2	C11	8層	モモ	核	完形	1	頂部欠損	22.22 +	18.08 +	16.24	
	43-1,5	B12	8層	ヤマモモ	核	完形	2					
	44-1-19	B12	8層	核	完形	18						
	45-9~23	C13	8層	核	完形	12						
	46	Y15	8層	モモ	核	完形	1	乾燥状態,表面摩耗,頂部欠損	13.24 +	12.51 +	7.75 +	

核（内果皮）は灰褐色、やや扁平な楕円体。欠損部位がない完形 27 個の大きさは、長さは、最大 28.1 ~ 最小 17.9mm（平均 22.85 ± 標準偏差 2.88）mm、幅は、21.5 ~ 15.1（18.23 ± 1.84）mm、厚さは、17.0 ~ 12.5（14.73 ± 1.25）mm、核の頂部は尖り、基部は切形で中央部に浅入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線に沿って発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた半分以下の破片がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。半割した内側表面は平滑で、種子 1 個が入る槽状の窪みが見られる。

・センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

核（内果皮）は灰褐色、完形ならば長さ 1 ~ 1.3cm、径 0.7 ~ 0.8cm の楕円体。破片は長さ 1cm、幅 6.5mm 程度。背面は浅く広い 5 ~ 6 個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面観は星型。破片は縦隆条に沿って半割している。表面は粗面。内面には、長さ 6mm、幅 3mm、厚さ 1mm 程度の非対称長楕円体の種子が入る浅い窪みがあり、窪みの表面には微細な横方向の筋が流れる。

・クマノミズキ (*Swida macrophylla* (Wall.) Sojak) ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）は灰褐色、径 4mm 程度の偏球体。基部に小さく浅い凹みがある。内果皮は硬く、表面には一周する 1 本のやや幅広く浅い縦溝と細く浅い縦溝数本が走る。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子は灰~黒褐色、長さ 1.2 ~ 1.3cm、径 0.6 ~ 0.7cm 程度の卵体。頂部から基部にかけて 3 本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、灰褐色、径 3mm 程度の粗面の着点がある。種皮は硬く、表面には微細な粒状網目模様がある。大きさはハクウンボク (*S. obassia* Sieb. et Zucc.) と思われるが、表面の状態がやや悪く、エゴノキ (*S. japonica* Sieb. et Zucc.) との明瞭な区別がつかないため、エゴノキ属にとどめている。

・カラスウリ (*Trichosanthes cucumeroides* (Ser.) Maxim.) ウリ科カラスウリ属

種子は灰褐色、長さ 8.5mm、幅 1cm、厚さ 3mm 程度のやや扁平な横楕円体。正中線は幅 4.5mm 程度の帯状に隆起し、基部に臍がある。種皮表面は粗面で低い突起が散在する。

4. 考察

(1) 古植生について

今回の 6C 層 ~ 10 層の植物珪酸体含量は、既報の 9 ~ 10 層で検出されている杭材の付着堆積物の植物珪酸体含量密度と同様に全体的に少ない値を示した。植物珪酸体は、pH 値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいとされる（江口、1994・1996）。今回の調査地点の植物珪酸体は保存状態が悪かったことから、風化作用を受け減少している可能性がある。この点については調査地点の堆積環境を踏まえた評価が今後必要である。

植物珪酸体群集から、調査区およびその周辺にはネザサ節、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科草本類が生育していたことが推定される。なお、イネ属を除くこれらの種類の含量密度は層間で異なっているが、これは全体の植物珪酸体含量密度の増減に概ね相関していることから、上記したように堆積環境に起因すると考えられる。ただし、相対的变化をみると 10 層から 9 層にかけて、ヨシ属機動細胞珪

酸体の割合が減少し、タケ亜科が増加している。この変化は、調査地点周辺の氾濫低地における植生変化を反映している可能性がある。また、8層、6C層でヨシ属の割合がやや増加することから、調査区の水文条件が変化するなどの理由で大型の抽水直物のヨシ属が分布を拡げた可能性もある。これらの点についても、調査区の地形発達過程を踏まえた評価が必要である。

また、草本由来の珪酸体のほかに、クスノキ科やイヌノキ属といった木本植物に由来する植物珪酸体が検出されている。これらの常緑広葉樹に由来する珪酸体も周辺に生育していたと思われる。なお、このような木本植物由来の珪酸体の産状は南九州の植物珪酸体分析結果でしばしば認められる傾向である（杉山，1999など）。一方、種実遺体をみると、常緑高木のヤマモモ、クスノキ、落葉高木のセンダン、クマノミズキ、落葉小高木のエゴノキ属、つる性草本のカラスウリが確認される。これらは、常緑広葉樹林とその林縁に生育する種類からなる。本遺跡で行われた花粉分析、種実同定、樹種同定の結果では、常緑広葉樹林（原葉樹林）の主要な構成要素である、アカガシ亜属やシイ属、クスノキ科が検出されている。

以上のことを踏まえると、調査区周辺の植生は、氾濫低地周辺の山地斜面が常緑広葉樹を主体とする暖温帯林、山地間隙部や氾濫低地の高燥な場所に落葉広葉樹やササ類などが植生攪乱の影響の違いによって分布しており、湿地にはヨシ属などが生育していたことが推定される。

(2) 栽培植物について

植物珪酸体分析の結果、10層～6C層から栽培種のイネ属が産出した。発掘調査により、9層、8B層、8層下層では水田遺構が検出されていることから、同調的な結果といえる。層的变化をみると、8B層より上位でイネ属機動細胞珪酸体の相対的割合が増加し、これとは逆にイネ属以外の種類が減少傾向を示している。この変化は、調査区の土地利用状況の変化を反映しているとみられ、耕作地の造成に伴い、ヨシ属などの植物が減少したことを示唆する。

一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いとされている（杉山，2000）。しかし、今回の8B層より上位層準での機動細胞珪酸体含量は1,000個/g前後～2,800個/gの範囲であり、上記の事例と比較して少ない。先に述べたように、今回の試料中の植物珪酸体の保存状態が悪く、風化による減少が指摘される。そのため、上記の事例をそのまま当てはめることはできず、8B層より上位層準では稲作が行われていた可能性が高いといえる。また、水田遺構が検出されている9層では、栽培植物のイネ属が検出されていないが、畦畔構成堆積物である9層上部からはイネ属が産出していることから、9層形成期にも稲作が行われていたことが示唆される。調査を行った9層からイネ属植物珪酸体が産出しなかった理由については、水田域における植物珪酸体の偏在に起因する可能性があり、今後地点数を増やし検証する必要がある。また、8層より上位の堆積物からも栽培植物のイネ属が産出している。これらは調査区内での栽培を示している可能性もあるが、再堆積したものに由来する可能性もあり、発掘調査成果や調査区の堆積環境を踏まえた慎重な評価が必要である。なお、これまでの植物珪酸体分析結果をみると、古墳時代とされる06-Ⅲ区の堆積層（6b層）や、中世とされる06-Ⅰ区東壁の堆積層ならびに06-Ⅲ区の堆積層（6a層）では今回より多くのイネ属珪酸体が検出されている。これらの試料では、今回の地点と比べ、植物珪酸体の保存状態が良く、そのことが原因で植物珪酸体含量が多くなっている可能性もある。

また、9層・8B層・8層下層の水田遺構の畦畔構成堆積物の植物珪酸体の産状は、必ずしも同層の植物

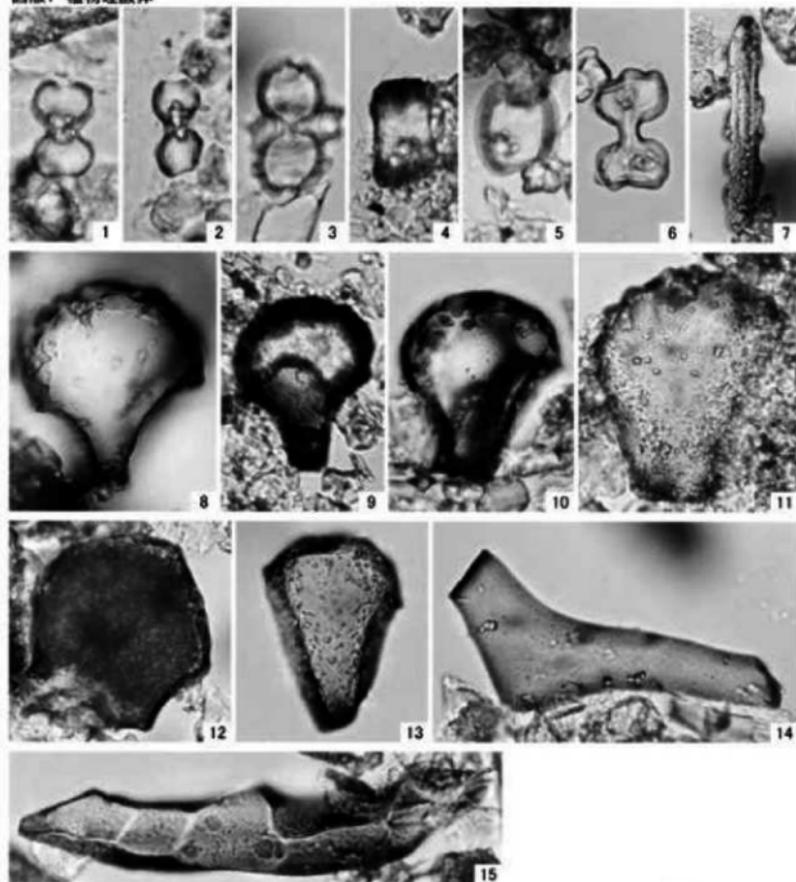
珪酸体の産状と一致していない。8B層の畦畔構成堆積物の植物珪酸体群集には下位の9層の群集に類似するものも認められる。これは畦畔構成堆積物が人為的営力により形成されたもので、下位堆積物などが利用されていることを示している可能性がある。発掘調査時の所見と併せた評価が必要である。

一方、05-Ⅰ区・05-Ⅰ-2区、06-Ⅱ区より出土した種実遺体のうち、栽培種は、モモの核が57個と、ウメの核が2個（接合し1個）、スモモの核が1個確認され、当時の利用が推定される。なお、前報でも、05-Ⅰ区・05-Ⅰ-1区・05-Ⅰ-2区、06-Ⅱ区より、モモの核が68個、スモモの核が3個、ヒョウタン類の種子が1個確認されている。

引用文献

- 江口誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究, 2, 19-27.
- 江口誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペトロジスト, 40, 81-84.
- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 近藤 鏡三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 杉山 真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38, 109-124.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

図版1 植物珪酸体



50 μm

50 μm

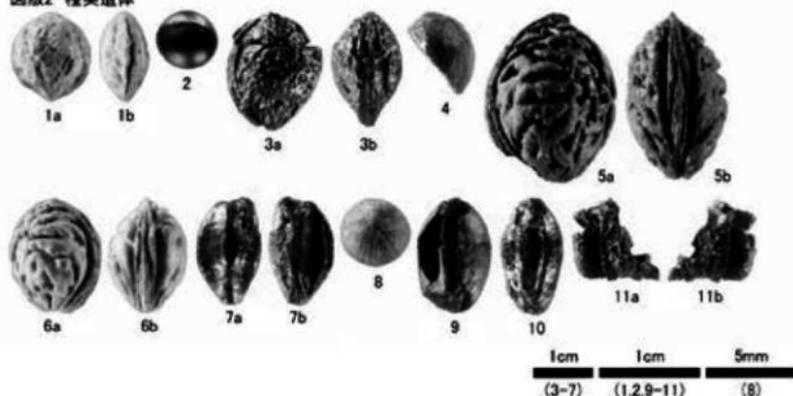
(1-6)

(7-15)

1. イネ属短細胞珪酸体(6C層)
3. イネ属短細胞珪酸体(9層上層(C-11東側))
5. ヨシ属短細胞珪酸体(8層)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(8層)
9. イネ属機動細胞珪酸体(7B層)
11. タケ亜科機動細胞珪酸体(8B''層(C-12))
13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(8B''層(C-12))
15. クスノキ科(樹木起源)(8層)

2. イネ属短細胞珪酸体(8B'層)
4. タケ亜科短細胞珪酸体(8B''層(C-12))
6. ススキ属短細胞珪酸体(8B''層(C-11))
8. イネ属機動細胞珪酸体(6C層)
10. イネ属機動細胞珪酸体(8B''層(C-11))
12. ヨシ属機動細胞珪酸体(8層)
14. イスノキ属(樹木起源)(6C層)

図版2 種実遺体



1. ヤマモモ 核(06-Ⅱ区 D44-1~19 B12 8b層)

2. クスノキ 種子(05-Ⅰ区 26 B-3 7a層)

3. ウメ 核(05-Ⅰ-2区 6-7 C-2 8層)

4. スモモ 核(05-Ⅰ区 38 D-6 8層)

5. モモ 核(05-Ⅰ区 4 7層一括)

6. モモ 核(05-Ⅰ-2区 4 B-3 8層一括)

7. センダン 核(05-Ⅰ区 38 D-4 8層)

8. クマノミズキ 核(05-Ⅰ区 34 C-5 8層)

9. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ区 20 D-7 7層一括)

10. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ-2区 54 10a層)

11. カラスウリ 種子(06-Ⅱ区 D1-1 Y15 7a層)

2. クスノキ 種子(05-Ⅰ区 26 B-3 7a層)

3. ウメ 核(05-Ⅰ-2区 6-7 C-2 8層)

4. スモモ 核(05-Ⅰ区 38 D-6 8層)

5. モモ 核(05-Ⅰ区 4 7層一括)

6. モモ 核(05-Ⅰ-2区 4 B-3 8層一括)

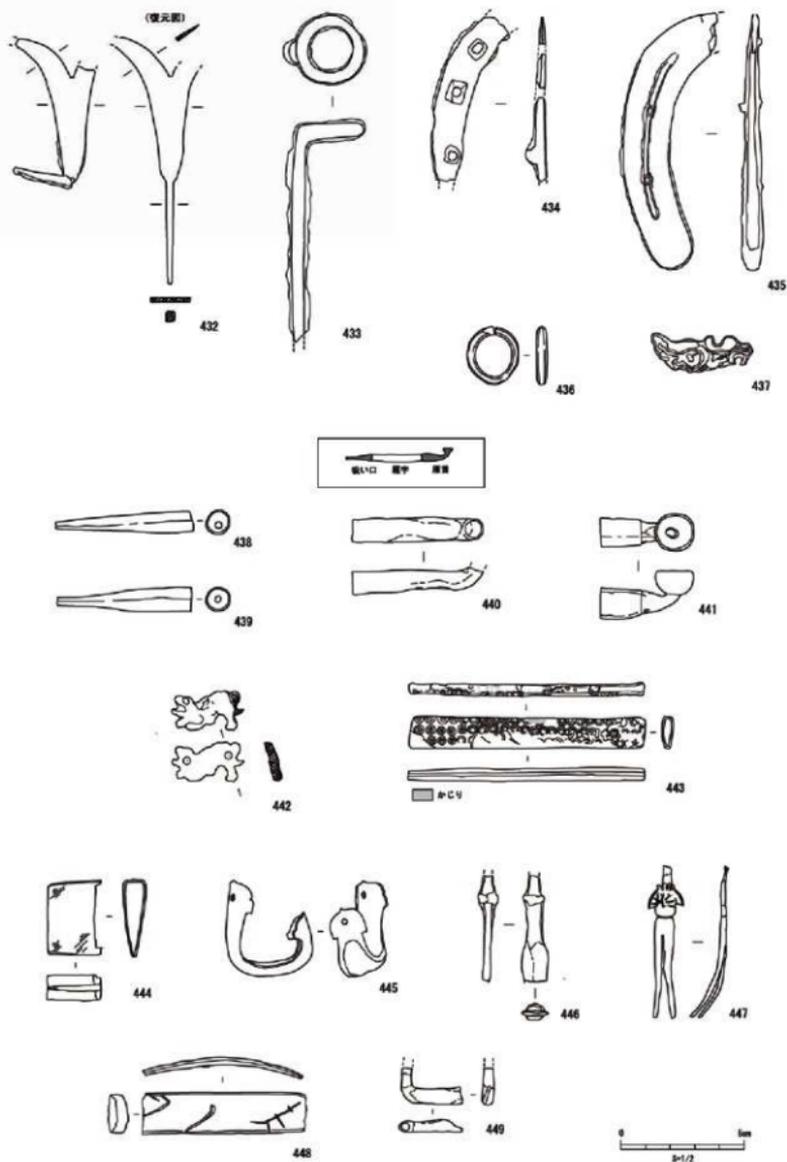
7. センダン 核(05-Ⅰ区 38 D-4 8層)

8. クマノミズキ 核(05-Ⅰ区 34 C-5 8層)

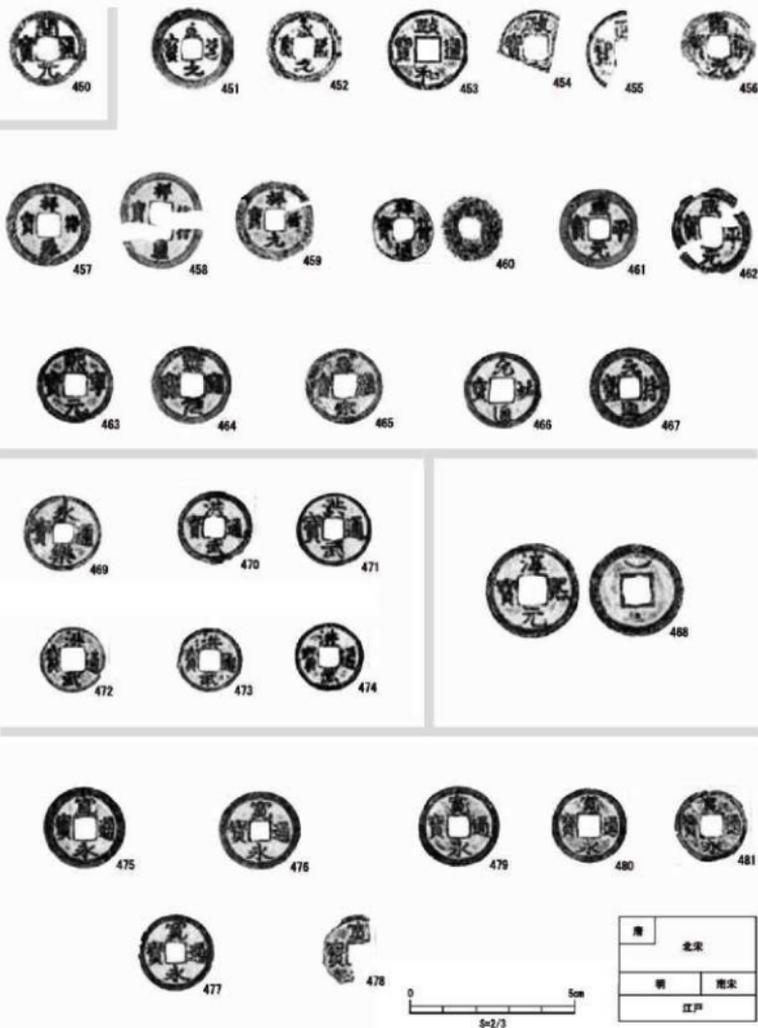
9. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ区 20 D-7 7層一括)

10. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ-2区 54 10a層)

11. カラスウリ 種子(06-Ⅱ区 D1-1 Y15 7a層)



第291図 玉名平野条里跡・両迫間日波遺跡 出土金属製品実測図



第 292 図 玉名平野条里跡・両迫間日波遺跡 出土銅銭一覧

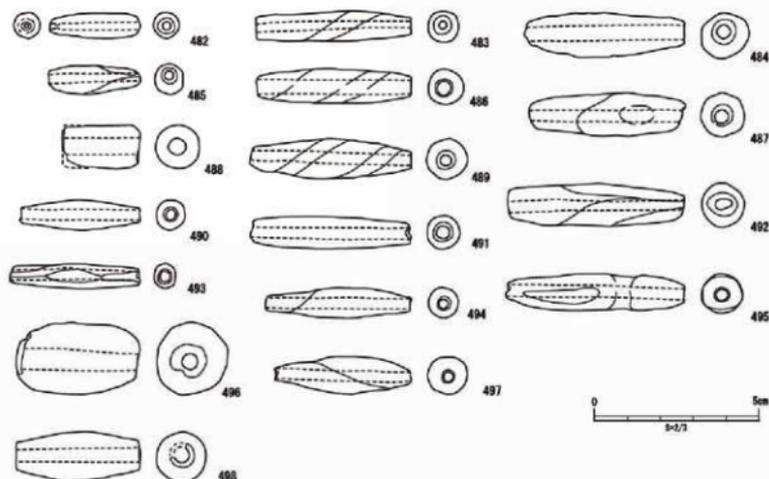
第4表 金属製品観察表(五名平野条里跡・両泊間日渡遺跡)

番号	調査区	遺構	グリッド	出土層	取上げ No.	法量(cm)			種別	備考
						最大長	最大幅	厚み		
24	跡附 05-1-2	SX-01	D-6			11.9	0.9	0.3	鍍銀*	
432	跡附 05-1-2			8層		10.1	3.2	0.2	産鉄類	
433	出土地点不明					9.1~	2.9	0.6	引手	馬具
434	跡附 03-Ⅲ		E-11	4層		7.1~	1.4	0.3	蹄鉄	馬具
435	跡附 06-1		D-9	6層		10.5~	2.0	0.8	蹄鉄	馬具
436	跡附 05-1		D-5	6c層		2.4	0.35	0.3	互環	鍍金が削がれ
437	出土地点不明					4.1	1.5		弊の飾り*	江戸期
438	跡附 05-1		D-4	3層		5.5	1.0	0.9	キセル(銜い口)	真鍮製
439	跡附 05-1		D-4	3層		5.5	0.9	1.0	キセル(銜い口)	真鍮製
440	跡附 05-1		B-2	4層		5.3~	1.0~	0.9	キセル(覆首)	真鍮製
441	跡附 05-1		D-7	3層		3.7	1.5	1.3	キセル(覆首)	真鍮製 18C 中環*
442	跡附 06-1			5層		2.8	1.6	0.3	真鍮製獅子	刀の柄の飾り 江戸期* 2体1組の可能性
443	跡附 05-1		D-5	5a層		9.5	1.3	0.4	小筒	魚子状
444	THJ 07-Ⅱ		B-5	4層		3.0	1.0	0.1	鋼	鍍金 金が残る
445	跡附 06-1		H-15	10b-3層	不明遺物 No.1	4.5	3.6	0.4	鍍金	
446	THJ 07-1		B-4	4層		4.7	1.0	0.3	両刀	
447	跡附 05-1		B-2	3層		6.2	1.4		刀	真鍮製 江戸期 女児用*
448	跡附 04-Ⅱ		D-3			6.6	1.7	0.3	不明銅製品	鍍物 銅鍍にしては大きい 鞘・武器の一部*
449	跡附 06-Ⅲ		D-3	3a層		1.6~	2.5~	0.6	不明鉄製品	青銅製ではない 絞具*

第5表 銅銭一覧表(五名平野条里跡・両泊間日渡遺跡)

番号	調査区	グリッド	出土層	銭名	書体	初鋳年	時代	備考
450	跡附 04-Ⅱ	P-21①	3層	開元通寶	真書	821年	唐*	穿孔部分を工具で丸く広げた感
451	跡附 04-Ⅱ	H-9	4層	延運元寶	草書	995年	北宋	
452	跡附 06-1		4c層	延運通寶	草書	995年	北宋	
453	跡附 04-Ⅱ	P-21	3層	政和通寶	楷書	1111年	北宋	
454	跡附 04-Ⅱ	D-4	4層	政和通寶*	分楷	1111年	北宋	意図的に破銭
455	THJ 07-1		3層	政和通寶*	楷書	1111年	北宋	
456	跡附 06-1	F-12	4a層直下	治平元寶	真書	1064年	北宋	
457	跡附 05-1	B-2	4層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	
458	跡附 05-1-2	E-9	6c層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	2枚に割れ
459	跡附 04-Ⅱ		4層	祥符元寶	真書	1009年	北宋	
460	THJ 07-Ⅱ	J-6	5層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	縁辺凸部が削られ意図的に楕円形を呈した。背面も平面化
461	跡附 05-Ⅱ-2	D-6	5層	咸平元寶	真書	998年	北宋	
462	跡附 05-Ⅱ-2	D-6	5層	咸平元寶	真書	998年	北宋	割れ
463	THJ 06-1	H-13		熙寧元寶	真書	1068年	北宋	
464	跡附 05-1-2	D-6	6c層	熙寧元寶*	篆書	1068年	北宋	
465	跡附 04-Ⅱ	P-21	3層	皇寧通寶*	真書	1038年	北宋	
466	THJ 02-Ⅲ	D-7	4層	元祐通寶	行書	1096年	北宋	
467	跡附 04-1	D-5	3a層	元祐通寶	行書	1096年	北宋	
468	跡附 06-1	E-10	6c層	淳熙元寶	真書	1174年	南宋	背月星
469	跡附 04-Ⅱ	P-21①	3層	永樂通寶	真書	1408年	明	
470	跡附 04-Ⅱ	P-21②	4層	洪武通寶	真書	1368年	明	
471	跡附 06-1		4a層	洪武通寶	真書	1368年	明	
472	THJ 02-Ⅲ	F-10	2層	洪武通寶	真書	中世末期~近世初期		破銭*
473	THJ 02-Ⅲ	F-10	2層	洪武通寶	真書	中世末期~近世初期		破銭*
474	THJ 01-3		1~2層	洪武通寶	真書	1368年	明	
475	跡附 05-1-2		6a層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
476	跡附 03-1		攪乱	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
477	跡附 05-1	D-8	4層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
478	THJ 07-1		3層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
479	跡附 03-Ⅲ		2層	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永
480	跡附 05-1		表土	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永
481	跡附 05-1	D-6	雑草	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永

*書体・初鋳年・時代は、『日本出土銭図説』1996年度版 兵庫県遺産調査委員会を参考とした



第 293 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 出土土錐実測図

第 6 表 土錐観察表・出土土錐分類表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡)

番号	出土地点				分層	質量 (cm)			L	P	判定	備考		
	調査区	遺構	グリッド	層位		全長	全幅	孔径					重量 (g)	
482	THJ	07-IV		J-6	4層	A	2.75	0.7	0.25 (0.1)	1.5	0.06	3.92	割	
483	野田	04-II		F-6	4層	D	4.75	0.9	0.2	4.6	0.04	5.27	割	全所に赤色顔料残る裝飾品。
484	野田	05-I-2		C-6	8層	E	4.8	1.4	0.45	7.8	0.20	3.42	割	
485	THJ	07-II		H-7	3a層	A	2.75	0.9	0.3	1.3	0.09	3.05	割	
486	THJ	07-IV		C-3	4層	D	4.7	1.05	0.45	4.4	0.20	4.47	割	
487	THJ	08-I		A-2(I-13)	5層	E	4.75	1.3	0.35	8.0	0.12	3.65	割	
488	THJ	07-IV		K-7	4層	A	2.35	1.35	0.5	3.4	0.25	1.74	割	
489	THJ	02-III		E-7	3層	D	4.9	1.2	0.3	5.9	0.09	4.08	割	
490	THJ	08-I		I-13		B	3.6	0.9	0.3	2.3	0.09	4.0	割	両端の作りが丁寧
491	THJ	08-I		L-17		D	4.85	1.0	0.4	4.8	0.16	4.65	割	
492	野田	04-II		H-22	7a層	F	5.4	1.3	0.35	10.0	0.12	4.15	割	
493	THJ	07-IV		K-7	4層	B	3.9	0.7	0.35	1.3	0.12	5.57	割	
494	THJ	08-I		A-1(I-13)	5層	D	4.4	0.9	0.3	2.7	0.09	4.88	割	
495	THJ	08-I	SD-06		1層	F	5.4	1.1	0.3	6.6	0.09	4.9	割	
496	THJ	07-III(南)				C	3.75	2.2	0.45	13.5	0.20	1.70	割	
497	THJ	08-I		H-14		D	4.1	1.15	0.3	4.2	0.09	3.56	割	
498	THJ	08-I		G-13		C	3.8	1.5	0.5	7.6	0.25	2.53	割	両端の作りが丁寧

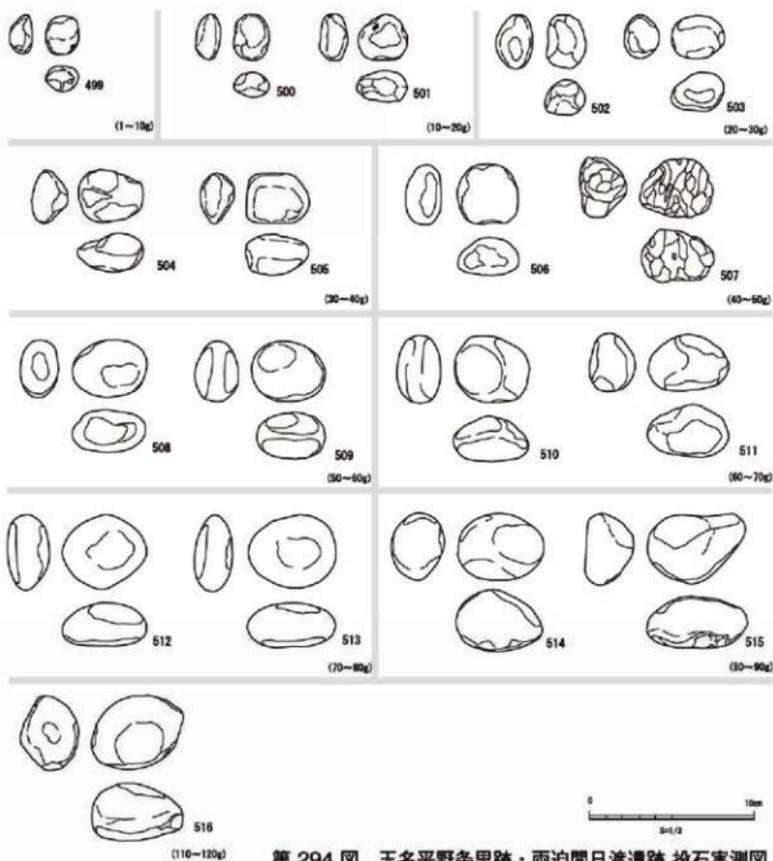
(割1網系 → 割2網系 → 破)

出土土錐分類別総数

分類	内容	個数
A	全長2~3cm・幅1cm程度	4
B	全長3~4cm・幅1cm程度	12
C	全長3~4cm・幅2cm程度	3
D	全長4~5cm・幅1cm程度	28
E	全長4~5cm・幅1.5cm程度	7
F	全長5~6cm・幅1cm程度	6

孔径の2乗値 L・土錐の長さを最大幅で除した数値 Pを計算すると $0 \leq L \leq 0.25$ で $1/P < 7.0$ の割網のもの $0.25L$ で $1/P < 3.0$ の破網系(地突網, 産突網)に大きく分けることができる

(久保保子 1997年)



第 294 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石実測図

第 7 表 投石サンプル一覧表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡)

番号	調査区		出土遺跡		グリッド	出土層	石材	重さ(g)
	調査区	遺構	遺構	グリッド				
499	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	9.1	
500	RH	05-C		C-6	S10	安山岩	12.3	
501	RH	05-C		D-3	S10	安山岩	18.4	
502	RH	05-C		D-3	S10	安山岩	20.6	
503	RH	05-C		D-6	S10	安山岩	21.3	
504	RH	05-C		C-3	S10	安山岩	30.5	
505	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	32.6	
506	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	43.0	
507	RH	05-C		D-4	S10	不詳	46.9	
508	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	52.5	
509	RH	05-C		D-3	S10	安山岩	54.3	
510	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	65.6	
511	RH	05-C		D-6	S10	安山岩	66.9	
512	RH	05-C		D-4	S10	安山岩	72.7	
513	RH	05-C	SX-03	D-4	S10	安山岩	76.6	
514	RH	05-C		D-3	S10	安山岩	85.6	
515	RH	05-C		C-3	S10	安山岩	87.6	
516	RH	05-C	SX-03		S10	安山岩	110.6	

調査区別投石出土数

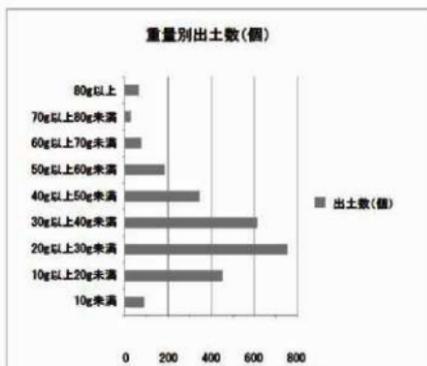
(総出土数2597個)

調査区	出土数(個)
TKJ 04-I区	0
R9H 03-II区	5
R9H 04-II区	57
R9H 05-I-1区	423
R9H 05-I-2区	333
R9H 06-I区	293
R9H 05-II-2区	3
R9H 05-II-1区	3
R9H 04-I区	5
R9H 03-I区	15
R9H 03-III区	13
TKJ 02-I区	5
TKJ 02-II区	0
TKJ 02-III区	2
TKJ 05-III-1区	0
TKJ 06-I区	358
TKJ 05-II-2区	0
TKJ 06-III区 (07-II区)	739
TKJ 07-II区	(0)
TKJ 07-I区	278
TKJ 06-I区	49
TKJ 07-IV区	5
TKJ 07-V区	6
TKJ 07-III区	5
総出土数	2597

※06-III、06-III(07-II)を含む
※投石として挙げていない

重量別投石出土数

重量(g)	出土数(個)	割合(%)
10g未満	89	3.4
10g以上20g未満	452	17.4
20g以上30g未満	752	28.9
30g以上40g未満	613	23.6
40g以上50g未満	345	13.2
50g以上60g未満	183	7.0
60g以上70g未満	74	2.8
70g以上80g未満	26	1
80g以上	63	2.4
総出土数	2597	



第8表 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土

遺構・その他の投石出土数

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
02-II区	不明	2

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
03-I区	SX-03	4
	SX-04	2
	SX-05	6
	包5層	3

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
03-II区	SX-06 塔1a層	3
	SX-06 塔2層	1
	SX-07 塔3層	1

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
06-II区	SH-01	3
	SH-01-02(包6a層)	8
	SD-05	51
	溝跡埋土	9
	包6a層	22
包7層	13	

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-III区	SD-01	2
	自然堆積層3	1
	北側調査区	1
	西壁溝跡	1

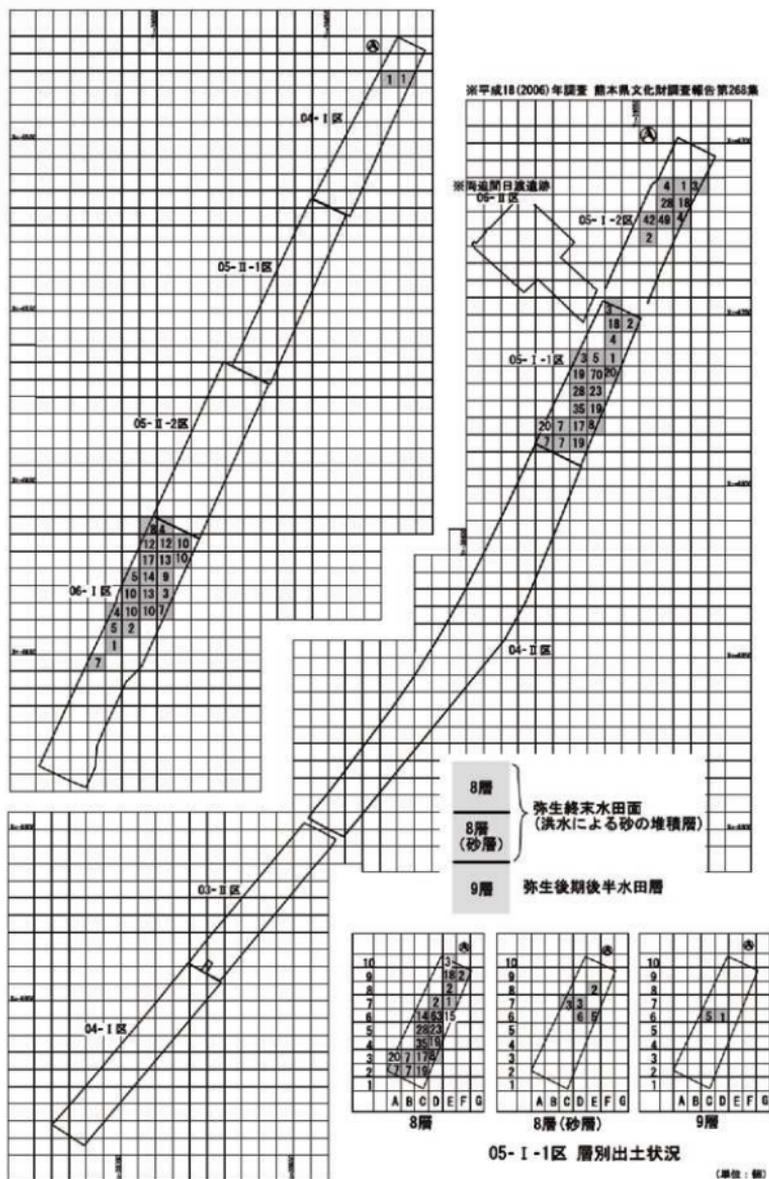
調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-V区	SX-04	1
	包4層-5層	1
	流路(溝)埋土	1
	後土剥ぎ	1

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
08-I区	SD-04	3
	SD-07	1
	SD-14	3
	SD-16	1
	SK-02	3
	ST-03	2
	不明	1

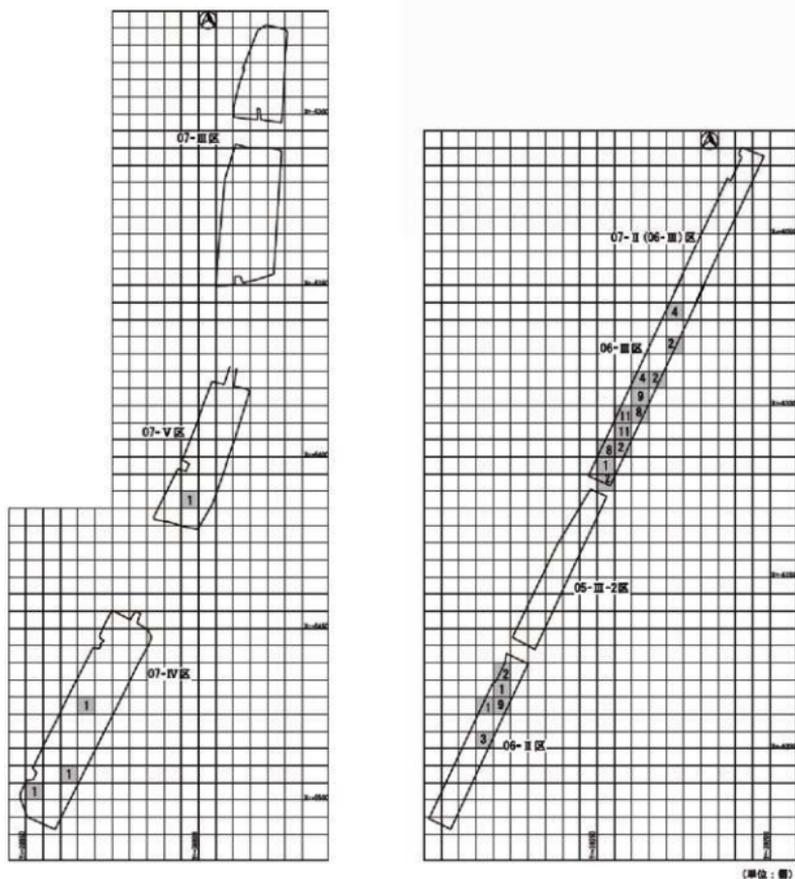
調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-I区	SD-02	87
	SD-04	5
	SD-03	5
	SD-06	81
	SX-01	3
	SX-03	2
	SK-03	7
	SX-02	13
	SX-06	17
	SE-01	3

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
06-III区(07-II区)	SD-02	1
	SD-31	47
	SP-35	1
	SX-36	1
	SD-37	10
	5層杭	8
溝跡埋土	3	
	溝乱	3

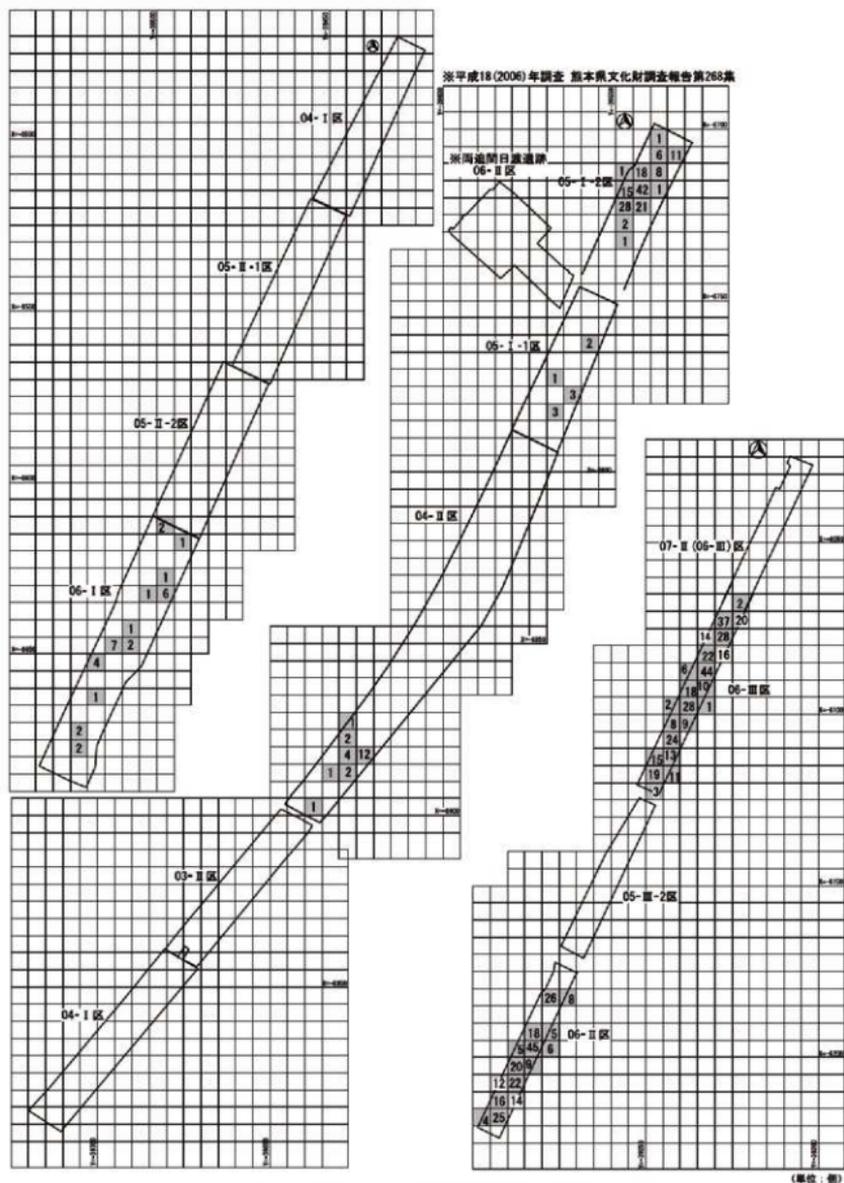
※07-II区、06-III区、06-III区(07-II区)出土を全て含む



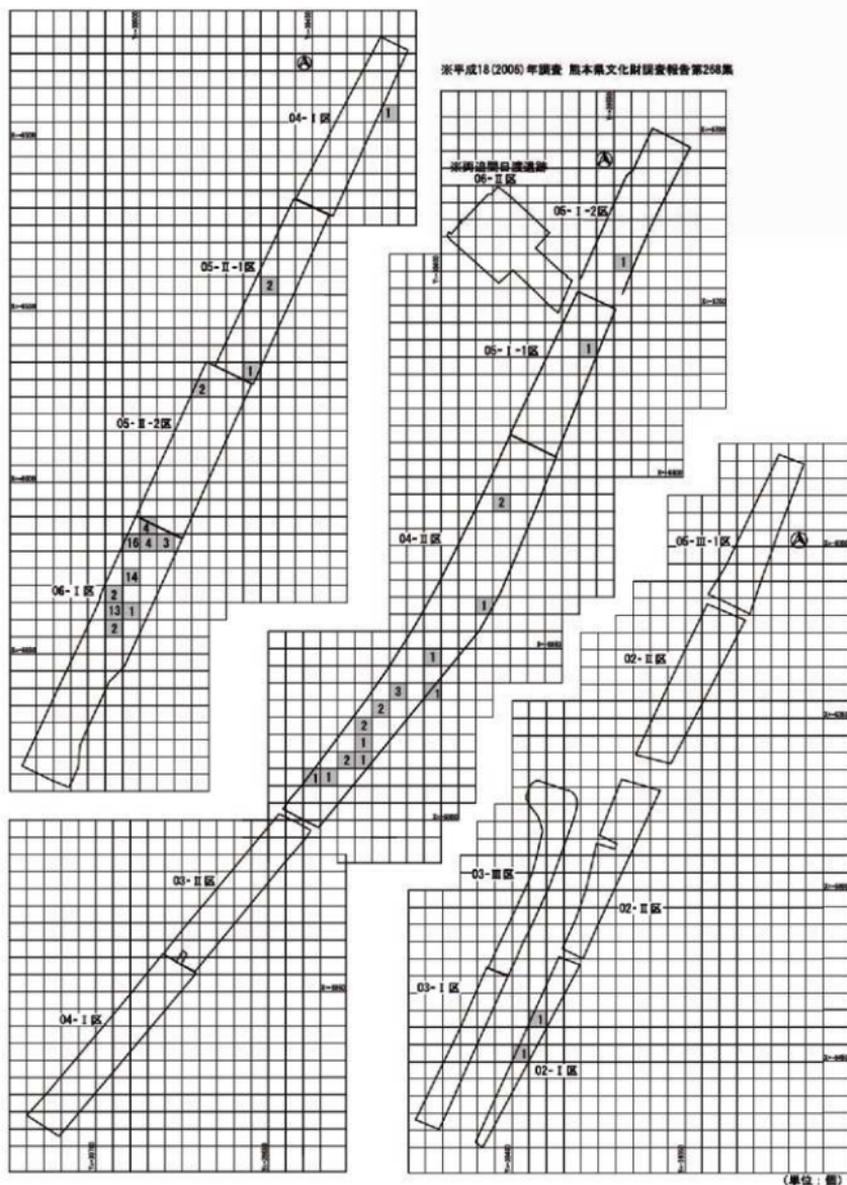
第 295 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 弥生 1



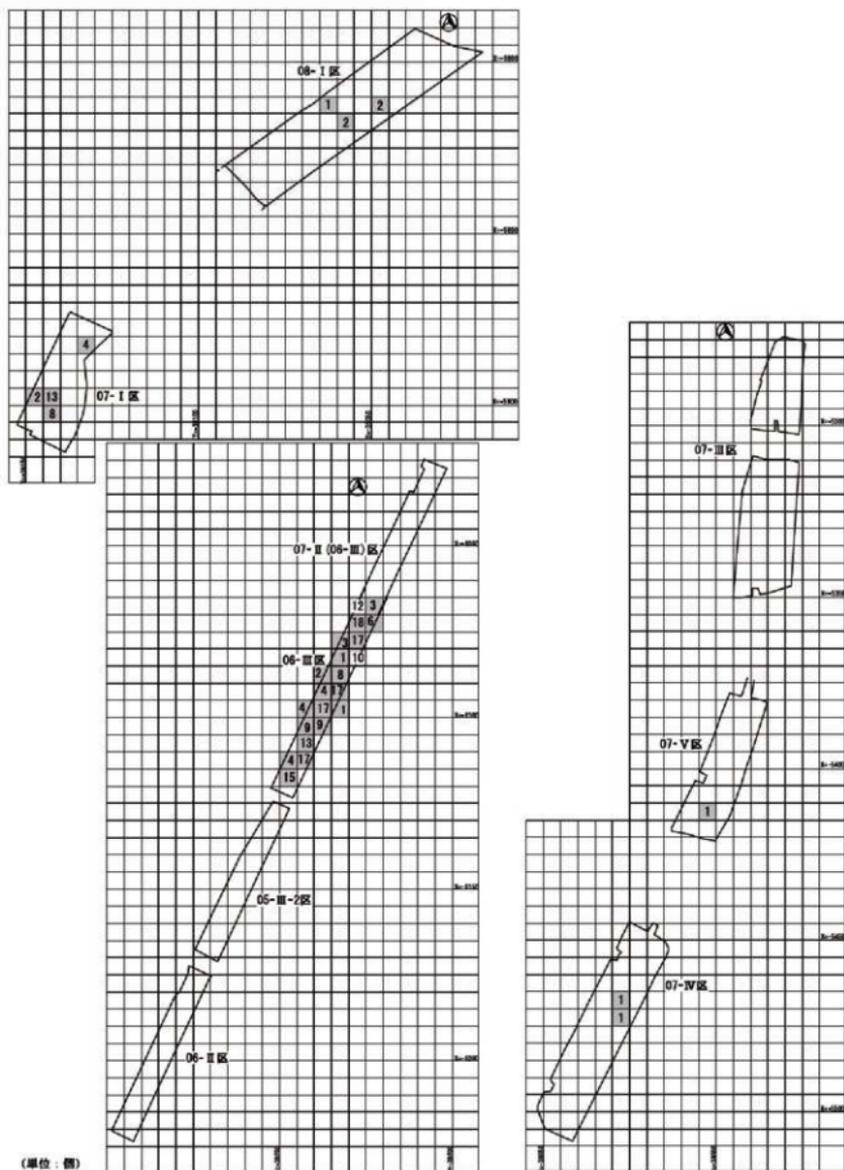
第 296 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 弥生 2



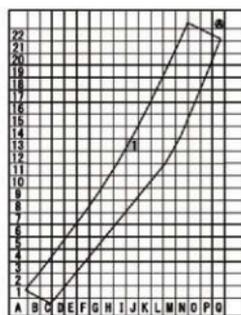
第 297 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 古墳



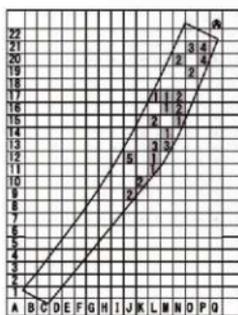
第 298 図 玉名平野条里跡・両泊間日渡遺跡 投石出土分布図 中世 1



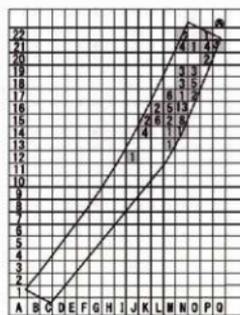
第 299 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 中世 2



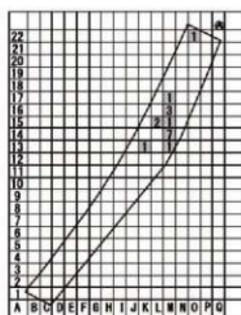
04-II区3層



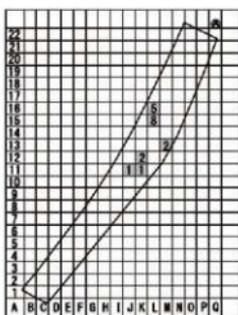
04-II区4層(中世)



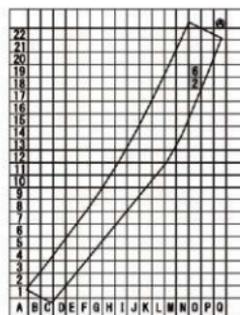
04-II区6層(古墳)



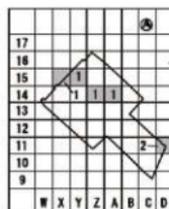
04-II区6b層(古墳)



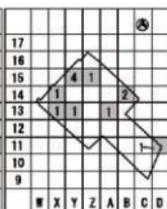
04-II区砂層(古墳)



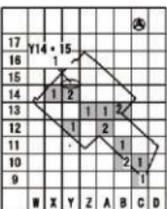
04-II区7a層



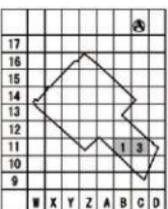
06-II区7a層



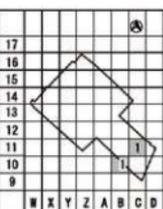
06-II区7b層



06-II区8層



06-II区8b層



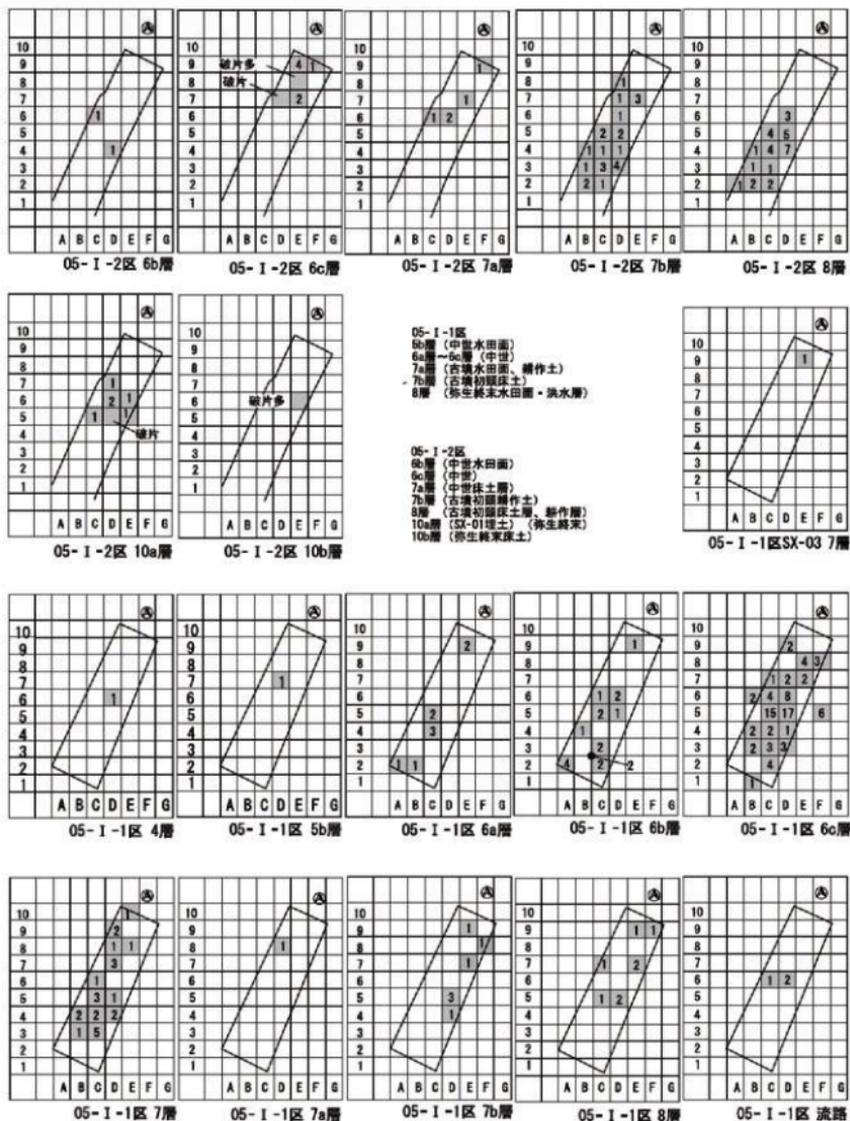
06-II区9層

※両道間日渡遺跡06-II区は、熊本県文化財調査報告 第298号

04-II区
4層(中世)
6層(砂層・砂層(古墳))
7a層(青明粘土)

06-II区
7a層(古墳後期耕作面)
7b層(古墳後期粘土・耕作土)
8層(古墳前期耕作面)
8b層(野生蕎麥未木田・耕作面)
9層(野生後期中葉以前)

第300図 両道間日渡遺跡04-II区・玉名平野条里跡06-II区 種実(桃)層別出土範囲



第 301 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区・05-I-2 区 種実 (桃) 層別出土範囲図

第9表 土器観察表(五名平野条里跡・高迫間日渡遺跡)

観号	土器基礎			位置	形状	寸法(mm)			用途	内装	土質	備考
	遺物番号	層位	出土層位			口徑	底径	高さ				
3	R44	06-1	35-40	35-12	35-12	35-12	32(3)	25(3)	25(3)	25(3)	25(3)	内底面黒い
4	R44	06-1	35-40	35-11	35-11	35-11	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
5	T41	07-3	35-40	35-11	35-11	35-11	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
6	T41	07-2	35-40	35-10	35-10	35-10	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
7	T41	07-2	35-40	35-10	35-10	35-10	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
8	T41	07-2	35-40	35-10	35-10	35-10	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
9	T41	07-2	35-40	35-10	35-10	35-10	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
10-1	T41	07-1	35-40	35-9	35-9	35-9	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
10-2	T41	07-1	35-40	35-9	35-9	35-9	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
11	R44	07-1	35-40	35-8	35-8	35-8	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
12	T41	07-1	35-40	35-8	35-8	35-8	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
13	T41	07-1	35-40	35-8	35-8	35-8	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
15	R44	06-1-1	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
16	R44	06-1-1	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
17	R44	06-1-1	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
18	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
19	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
20	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
21	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
22	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
23	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い
24	R44	06-1-2	35-40	35-3	35-3	35-3	35(1)	25(1)	25(1)	25(1)	25(1)	内底面黒い

番号	図面番号		図面名称		数量	単位	材質	重量(g)		寸法	内容	数量	内容	数量	内容	備考
	原簿	複製	原簿	複製				原簿	複製							
35	944	06-1-2	2-3 2-4 2-5	15x 15x 15x	1	銅	18.8	(18.2)	23.0	横子への手紙(45x45mm)横子	横子への手紙	5/17/22白	5/14/16	5/17/22白	5/14/16	遺品販売会
37	761	06-1-2	01-02 01-03 01-04	縦3 縦3 縦3	1	横文字巻	23.0	14.8	縦文字巻(横文字巻、縦文字巻、横文字巻)	縦文字巻	5/17/22白 5/17/22白 5/17/22白	5/17/22白 5/17/22白 5/17/22白	5/17/22白 5/17/22白 5/17/22白	5/17/22白 5/17/22白 5/17/22白	5/17/22白 5/17/22白 5/17/22白	遺品販売会
38	761	07-1F	縦3	縦3	1	横文字巻	(116.5)	32.2	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	2/19/71白	2/19/71白	2/19/71白	2/19/71白	2/19/71白	遺品販売会
39	761	07-1F	縦3	縦3	1	横文字巻	(104.0)	(83.5)	4.4	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	縦3/白	縦3/白	縦3/白	縦3/白	遺品販売会
40	761	07-1F	縦3	縦3	1	横文字巻	11.1	4.8	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	縦3/白	縦3/白	縦3/白	縦3/白	縦3/白	遺品販売会
42	761	07-1F	01-01	縦1	1	横文字巻	(42)	16.2	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
44	761	07-2	01-02	縦1	1	横文字巻	16.2	8.7	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
45	761	07-2	01-02	縦1	1	横文字巻	(116.0)	(22.2)	8.2	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
46	761	07-3	01-02	縦1	1	横文字巻	8.7	5.7	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
47	761	07-3	01-02	縦1	1	横文字巻	(104.0)	(31.7)	30	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
48	761	07-3	01-102	縦9	9	横文字巻	(146.0)	(16.5)	146.5	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
49	761	07-3	01-102	縦9	9	横文字巻	16.4	21.0	21.0	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
50	761	07-1	01-31 01-32 01-33	縦3 縦3 縦3	3	横文字巻	10.2	11.5	11.5	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
51	761	07-1	01-31 01-32 01-33	縦3 縦3 縦3	3	横文字巻	8.5	7.3	8.0	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
52	761	07-1	01-31	縦1	1	横文字巻	12.2	17.8	20.0	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
53	761	07-2	01-36	縦12	12	横文字巻	(183.0)	22.4	21.3	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
54	761	07-2	01-36	縦12	12	横文字巻	8.2	0.5	5.4	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
55	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(132.0)	30	21.0	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
56	761	07-2	01-114	縦1	1	横文字巻	(120.0)	12.4	11.8	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
57	761	07-2	01-114	縦1	1	横文字巻	13.4	5.4	5.4	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
58	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	16.4	7.9	7.9	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
59	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(172.0)	21.2	21.2	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
60	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(138.0)	13.4	6.8	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
61	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(122.0)	12.4	11.8	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
62	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
63	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
64	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
65	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
66	761	07-3	01-114	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
67	761	07-2	01-115	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
68	761	07-2	01-115	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
69	761	07-2	01-115	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
70	761	07-2	01-115	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会
71	761	07-2	01-115	縦1	1	横文字巻	(116.0)	11.6	11.6	横文字巻(横文字巻)	横文字巻	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	5/17/22白	遺品販売会

調査号	遺物基礎情報			調査	位置			調査	出土	備考
	調査地区	遺物番号	出土層		位置	西室	西室			
72	75a	01-3	DE-121	N109712	1	3	10	1075a/140壁	黒土	片断の破片・土器
73-1	75a	01-3	DE-121	N109712	6	61	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
73-2	75a	01-3	DE-121	N109712	6	61	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
74	75a	01-3	DE-121	N109712	6	62	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
75	75a	01-3	DE-121	N109712	6	63	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
76	75a	01-3	DE-121	N109712	6	64	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
77	75a	01-3	DE-121	N109712	6	32	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
78	75a	01-3	DE-121	N109712	1	22	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
79	75a	01-3	DE-121	N109712	6	36	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
80	75a	01-3	DE-121	N109712	6	35-35	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
81	75a	01-3	DE-121	N109712	4	33	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
82	75a	01-3	DE-121	N109712	6	42-46	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
83	75a	01-3	DE-114	N109712	2	52	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
83-1	75a	01-3	DE-114	N109712	2	52-54	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
83-2	75a	01-3	DE-121	N109712	5	32	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
84	75a	01-3	DE-121	N109712	2	34-35	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
85	75a	01-3	DE-121	N109712	1	34	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
86	75a	01-3	DE-121	N109712	1	47	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
87	75a	01-3	DE-121	N109712	1	14	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
88	75a	01-3	DE-121	N109712	2	2	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
89	75a	01-3	DE-121	N109712	1	63	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
90-1	75a	01-3	DE-121	N109712	1	20	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
90-2	75a	01-3	DE-121	N109712	1	20	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
91	75a	01-2	DE-121	N109712	1	1	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
92	75a	01-3	DE-121	N109712	1	1	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
93	75a	01-1	DE-121	N109712	1	1	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器
94	75a	01-2	DE-121	N109712	1	16	1075a/140壁	黒土	黒土	片断の破片・土器

番号	遺物名称			出土状況			数量	重量 (g)	寸法	材質	用途	調査		所在地	備考
	種別	形状	寸法	位置	層位	発掘年						調査年			
95	99H-01-3	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
96	99H-01-3	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
98	99H-01-3	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
99	99H-01-3	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
100	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
101	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
102	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
103	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
104	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
105	99H-04-1	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
106	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
107	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
108	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
109	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
110	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
111	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
112	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
113	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
114	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
115	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
116	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
117	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
118	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
119	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
120	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
121	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢
122	99H-04-2	土師器	丸底鉢	119	119	119	1	7.97	10.0	10.0	丸底鉢	丸底鉢	1978/2	丸底鉢	丸底鉢

品目番号	品名	出土位置	形状	材質	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	特徴	調査	出土状況	調査者	備考
123	銅貨	04-2	97-05	16	銅	12.3	6.0	4.5		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
124	銅貨	04-2	97-05	4	銅	6.8	4.1	4.1		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
125	銅貨	04-2	97-05	15	銅	117.7	15.8	11.5	1.9	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
127	銅貨	04-2	97-05	E-5	銅	2.8				銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
128	銅貨	04-2	97-05	0	銅	2.8				銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
129	銅貨	04-2	97-05	1	銅	1.10				銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
130	銅貨	04-2	97-05	1	銅	1.11				銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
131	銅貨	04-2	97-07	2	銅	11.80	1.2	4.0		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
132	銅貨	04-2	97-07	2	銅	13.4		15.1	1.6	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
133	銅貨	04-2	97-05	2	銅	16.4		15.7	22.3	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
134	銅貨	04-2	97-04	D-2	銅	6.3		4.0		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
135	銅貨	04-2	97-04	1	銅	10.1		6.8		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
136	銅貨	04-2	97-04	5	銅	16.4		20.0	22.3	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
137	銅貨	04-2	97-05	8	銅	16.6		21.1	24.8	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
138	銅貨	04-2	97-05	1	銅	16.40		21.2	25.0	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
139	銅貨	04-2	97-05	1	銅	14.0		17.1	18.0	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
140	銅貨	04-2			銅	11.2		22.2	24.3	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
141	銅貨	04-2	E-4	5	銅	(5.7)		4.5	6.5	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
142	銅貨	04-2	D-2	5	銅	(4.2)		6.8	4.0	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
143	銅貨	04-2	F-4	5	銅	(6.0)		7.9		銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
144	銅貨	04-2	D-3	5	銅			6.8	2.7	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
145	銅貨	04-2	F-4	5	銅	(6.4)		1.8	7.4	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
146	銅貨	04-2	K-10	5	銅			0.5	0.1	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
147	銅貨	04-2	E-5	5	銅	(6.5)		6.8	4.1	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
148	銅貨	04-2	D-2	5	銅	(10.1)		7.8	5.05	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
149	銅貨	04-2	E-4	5	銅	(10.1)		6.5	7.8	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
150	銅貨	04-2	E-4	5	銅	(11.1)		6.8	(8.2)	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
151	銅貨	04-2	D-4	5	銅	(11.0)		1.8	(4.4)	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
152	銅貨	04-2	E-4	5	銅	(7.8)		10.0	10.0	銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚
153	銅貨	04-2	E-4	5	銅	(11.0)				銅貨(1枚)	銅	銅	銅	高松市共 銅貨 5枚

標号	標本名称		種目	経緯	重量(g)		形状	材質	用途	発見	発見地	出土	備考	
	調査年度	調査方法			口徑	長さ								
234	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	1.5-	0.8	丸型	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
235	79a	08-1 1E-05	2個	北緯35°	東経138°	1.2-	(11.2)	丸型	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
236	79a	08-1 1E-05	2個	北緯35°	東経138°	6	(16.0)	(10.6)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
237	79a	08-1 1E-05	2個	北緯35°	東経138°	18	(18.5)	(12.3)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
238	79a	08-1 1E-05	2個	北緯35°	東経138°	24	(18.7)	(8.6)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
239	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	45	8.8	6.9	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
240	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	25	(16.8)	(12.1)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
241	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	29	16.1	11.8	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
242	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	23	(16.4)	(10.0)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
243	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	43	(16.6)	(12.6)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
244	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	46	(16.5)	6.0	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
245	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	40	(16.0)		銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
246	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	24	(17.0)	(7.7)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
247	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	32	(16.3)	(5.9)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
248	79a	08-1 1E-05	5個	北緯35°	東経138°	27-41	17.2	7.3	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
249	79a	08-1 1E-05	11個	北緯35°	東経138°	5個	17.6	6.1	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
250	79a	08-1 1E-05	2個	北緯35°	東経138°	2	9.0	(7.0)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
271	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	3	(14.0)		銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
272	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	10	(14.3)	(11.0)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
273	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	17	(16.6)	(12.0)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
274	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	87	(16.1)	(12.3)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
275	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	18	16.3	11.8	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
276	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	34	(8.2)	(6.3)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
277	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	59	(8.2)	(7.0)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
278	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	44	(8.1)	(7.6)	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
279	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	4	9.2	7.8	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
280	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	45	8.5	7.5	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
281	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	8	8.1	7.1	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土
282	79a	08-1 1E-05	1個	北緯35°	東経138°	55	8.7	7.2	銅	銅	10797/2にのみ発見	10797/2にのみ発見	銅	口縁部のみ出土

標号	遺物名称			数量	単位	時期	重量(g)			用途	材質	状態	出土	備考	
	品名	形状	寸法				長さ	幅	厚さ						
311	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	小皿	6.7	7.2	1.5	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	内蔵品・磁器(赤)の片断
312	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	小皿	8.0	7.1	1.5	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	磁器(赤)
313	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	小皿	6.8	7.3	1.1	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	磁器(赤)
314	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	灯台皿	8.0	6.6	1.3	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	1/2片断(赤石・磁器) 赤銅(赤)
315	7%	08-1	5D-04	1	個	土師器	小皿	7.9	8.1	1.4	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
316	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	灯台皿	8.7	6.6	1.3	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
317	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	小皿	6.5	7.1	1.1	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
318	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	鉢	8.0	8.0	8.0	土師器(子)	7E/1E-2E黄	7E/1E-2E黄	赤石・磁石・赤銅	口縁・磁器(赤)
319	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	皿	15.4	10.2	3.4	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	口縁・磁器(赤)
320	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	皿	15.8	10.1	2.9	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	口縁・磁器(赤)
321	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	小皿	8.1	8.3	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	口縁・磁器(赤)
322	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	灯台皿	6.0	6.3	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	口縁・磁器(赤)
323	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	小皿	7.8	6.3	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
324	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	小皿	8.0	8.2	1.4	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
325	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	小皿	8.1	6.5	1.1	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
326	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	小皿	7.0	6.0	1.3	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
327	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	鉢	6.7	5.8	5.3	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
328	7%	08-1	5D-14	2	個	土師器	鉢	11.4	6.0	6.5	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
329	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	鉢	11.4	7.2	5.0	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
330	7%	08-1	5D-14	1	個	土師器	土器	13.4	13.4	6.4	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
331	7%	08-1	5D-16	1	個	土師器	小皿	7.0	5.3	2.8	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
332	7%	08-1	5D-16	1	個	土師器	小皿	11.0	11.0	2.8	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
333	7%	08-1	5F-01	1	個	土師器	小皿	8.0	8.1	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
334	7%	08-1	5F-01	2	個	土師器	小皿	8.8	8.7	1.1	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
335	7%	08-1	5F-01	2	個	土師器	小皿	8.7	7.0	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
336	7%	08-1	5F-01	1	個	土師器	小皿	6.5	6.5	1.4	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
337	7%	08-1	5F-01	1	個	土師器	小皿	7.8	6.0	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
338	7%	08-1	5F-01	2	個	土師器	小皿	8.0	16.0	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
339	7%	08-1	5F-01	2	個	土師器	小皿	8.7	16.0	1.3	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)
340	7%	08-1	5F-01	1	個	土師器	鉢	7.1	7.1	1.2	土師器(子) 磁器(赤)	10977/2E-0A-黄	10977/2E-0A-黄	赤石・磁石・赤銅	赤銅(赤)

第10表 石器類観察表(五名平野条里跡・高迫間日渡遺跡)

標本	出土地区			種別	法			備考				
	調査区	遺層	刀切片		調査区	遺層	刀切片					
1	THJ 01-3	5-166	2	打石	磨石	0.6	0.5	22.1	加工後の断面が刃部の一箇のみの部分に僅かに残存			
2	THJ 01-6	5-168	1	打石片	打石片	9.5~	(8.0)	154.8	刃部先端に磨痕			
3	RHH 06-1区	北朝武路	3層	打石片	打石片	13.9	5.4	2.2	刃部 断面はもはや存在せず			
14	RHH 05-1-2	D-5	100層	打石片	打石片	2.1~	0.5	4.5	一部刃部 断面に磨痕			
35	RHH 06-1	C-3	100層	打石片	打石片	14.5	5.0	4.2	断面は磨痕でない磨痕			
41	THJ 07-IV	0-4	7層	打石	打石	4.7	2.7	1.1	全面磨痕			
43	THH 07-IV	3D-41	2層以上	打石片	打石片	5.5	11.7~	0.4	0.45	作中? 丁寧 断面が欠けた部分あり		
55	THJ 01-2	5E-38	MES 8層	打石片	打石片	2.6	8.1	4.5	1310.5	刃部断面に一部欠けた部分の磨痕		
67	THJ 01-3	5E-115	7層	打石片	打石片	4.3	4.9	1.6	14.2	断面に 刃部欠けた部分の加工の磨痕あり		
106	THJ 04-1	3E-34	D-8	打石片	打石片	5.1~	3.0~	0.6	0.5	12.9	断面に 刃部欠けた部分の加工の磨痕あり	
107	RHH 04-1	G-8	6層	小形丸石	丸石	6.5	1.8	0.95	16.6	石輪の二次加工品		
159	RHH 04-II	H-8	5層	打石片	打石片	3.9	5.7	2.0	60.6	刃部は厚み減衰 断面は不規則		
172	RHH 05-II-2	E-9	7層	打石片	打石片	11.4~	3.8	0.8	不規則	47.4	刃部は一部磨痕 断面は不規則	
175	THJ 06-II	0-4	6層	打石片	打石片	14.4	5.9	1.4	186.4	断面は全面に磨いて加工品		
181	THJ 02-II	3D-12	床底	打石片	打石片	5.0	3.9	0.8~	0.4	109.5	全面に加工品 刃部は全面磨痕	
185	THJ 02-II	E-8	4層	打石片	打石片	5.3	2.8	0.7	17.8	断面に 刃部磨痕 断面磨痕あり		
186	THJ 02-II	D-7	6層	打石片	打石片	4.3	6.7	2.4	4.2	90.7	全面に 刃部磨痕	
188	THJ 02-II	E-8	4層	打石片	打石片	2.8	1.95	1.0	8.3	石輪の粗磨		
196	RHH 02-II	自然武路	D-6 下層	打石片	打石片	6.8~	4.2~	0.8~	0.4	27.6	断面に磨痕	
206	RHH 04-1	C-4	カワラシ	打石片	打石片	3.1	3.5	1.8	30.9	断面に磨痕		
207	RHH 05-1-2	C-4	6層	打石片	打石片	5.2~	3.2~	0.3~	10.4	刃部は全面 断面の一部のみ磨痕 断面は磨痕あり		
208	RHH 05-1-II	F-9	6層	打石片	打石片	2.7	1.4	0.8	4.7	断面部分に多少の欠けた部分がある		
209	THJ 05-2	武路	A-3	打石片	打石片	5.0~	5.0~	1.2	0.7	0.35	24.6	刃部部分 刃部は磨痕減衰
221	THJ 07-V		4層	磨石	磨石	6.6~	16.7	2.1	374.3	両面磨痕		
387	THJ 06-1	K-15	打石片	打石片	2.1	1.4	1.0	2.7	27.6	断面上下断面に磨痕あり 断面部分ではない		
398	THJ 08-1	J-16	打石片	打石片	3.9	2.5	1.5	4.3	22.3	石輪の粗磨		
403	THJ 07-1	D-3	3層	打石片	打石片	5.70	4.1~	0.3	0.35	73.9	全面に磨痕に付いては磨痕に上磨痕	
405	THJ 07-1	3D-08	6層	打石片	打石片	17.5	8.1	3.1	491.1	全面に磨痕に磨痕と打石片		
406	THH 07-V	C-4	8層	打石片	打石片	4.7	3.75	0.6	0.4	43.1	全面に磨痕に磨痕と打石片	

第11表 土製品観察表(五名平野条里跡・高迫間日渡遺跡)

標本	出土地区			種別	法			備考			
	調査区	遺層	刀切片		調査区	遺層	刀切片				
27	THJ 05-1-2	3X-01	E-6	土玉	土玉	1.6	1.8	1.4	3.7	断面は加工品あり	
160	THH 04-II	F-5	5層	瓦葺片	瓦葺片	5.4~	6.4	1.9	74.9	厚みは不均	
197	THJ 02-II	D-9	6層	土製砂線	土製砂線	2.2	2.75	0.6	0.5	5.0	上下断面に小穴あり 全面に磨痕減衰
222	THJ 07-V		4層	土玉	土玉	2.65	2.65	2.35	14.2	断面部分	

第12表 木製品観察表(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡)

報告	出土地点				種別	木材	法量(cm)			備考		
	調査区	遺構	グリッド	層位			取上げNo.	最大長	最大幅		厚み	
18	RHH	05-1-1	SX-03			板③	杭	グリ	18.1	3.8	1.0	
19	RHH	05-1-1	SX-03				杭	グリ				
20	RHH	05-1-1	SX-03			板①	グリ		(27.5)	(6.9)	2.3	
21	RHH	05-1-1	SX-03			杭96	杭	グリ	45.5	7.9	3.9	
22	RHH	05-1-1	SX-03			杭75	杭	サイカチ	(48.4)	3.5	1.8	
23	RHH	05-1-1	SX-03			杭31	杭	グリ				
28	RHH	05-1-2	SA-01 PH01		10a層		杭	グリ	(33.8)	6.2	2.9	
97	RHH	03-II	SX-07		3層	No.6	輪	アカガシ	(25.5)	6.15	1.8	
137	RHH	04-II	ST-08				網代	タケ	(24.75)	(13.0)		継々
194	RHH	03-I				杭6	杭	マツ	(45.75)	5.5	5.0	
195	RHH	03-I				杭12	杭	マツ	(72.1)	5.2	5.0	杭上半分が被熱の高度化
198	RHH	03-Ⅲ				杭2	杭	マツ	(38.2)	4.5	4.0	
199	RHH	03-Ⅲ				杭13	杭	ネジキ	(34.5)	6.75	4.0	
200	RHH	03-Ⅲ				杭20	杭	モチノキ	(28.4)	5.4	4.1	
201	RHH	03-Ⅲ				杭22	杭	アカガシ	(56.2)	9.9	8.7	
202	RHH	03-Ⅲ				杭111	杭	カヤ	(78.85)	4.65	3.6	
203	RHH	03-Ⅲ				杭23	杭	クスギ	(61.8)	9.3	7.4	
204	RHH	03-Ⅲ				杭24	杭	クスギ	62.8	8.6	8.7	
205	RHH	03-Ⅲ				杭139	杭	クリ	51.6	4.95	4.3	
211	THJ	06-Ⅲ			3a層		小皿円形木製品		2.59	2.59	1.65	壁土遺跡々
240	THJ	08-I	SK-02		2層下層	No.54	杭	サクラ	6.8	6.15	5.1	
241	THJ	08-I	SK-02		2層下層	No.49	浮子	ツバキ	10.95	25.25	8.9	
255	THJ	08-I	SE-03		2層下層	No.22	網	アカガシ	(15.5)	7.8	5.2	
400	THJ	02-II	SD-02	B-4	5層	板状木片No.2	杭	イスノキ	(24.6)	6.25	1.6	

第13表 玉類観察表(玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡)

報告	出土地点				種別	石材	法量(cm)					色調	備考
	調査区	遺構	グリッド	層位			最大長	幅	孔径(上)	孔径(下)	重量(g)		
7	THJ	01-II	SI-34		上層	ガラス玉	0.17	0.28	0.9	0.9		C-197 トルコ石の青緑	宛形 不純物含む 気泡あり
25	THJ	05-1-2	SX-01	D-6	10a層	ガラス玉	0.77	0.62	0.27	0.25	0.4	C-186 濁の緑	宛形 管状のガラスをのびし切断し整形した形状(巻きガラス技法々) 厚みあり不純物含む 透明度に乏しい 外形は楕圓し孔径は斜目に歪み楕圓形
26	THJ	05-1-2	SX-01	D-5	10a層	ガラス玉	0.23	0.37	0.1	0.1		C-267 ラピスラズリ	宛形 気泡あり 孔径は上下とも平坦
176	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉	2.05	1.0	0.25	0.2	3.7	C-229 茶の緑	宛形
177	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉	1.75	0.8	0.3	0.1	2.2	C-229 茶の緑	宛形
178	THJ	06-II		E-3	6a層	管玉	2.5	0.7	0.25	0.1	1.8	C-204 あひるの卵の薄青	宛形
179	THJ	06-II		F-4	6a層	ガラス玉	0.55	0.63	0.23	0.23	0.3	C-256 北京の青	宛形 気泡多数 外形は楕圓
180	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉	1.35	0.45	0.2	0.15	0.5	C-229 茶の緑	宛形
395	THJ	08-I		H-11	5層	勾玉 クロム 白雲母	1.25	0.25	0.15	0.15	0.3	C-199 薄緑	一部欠損
報告	出土地点				種別	流量(cm)	法量(cm)					備考	
	調査区	遺構	グリッド	層位			最大長	幅	孔径(上)	孔径(下)	重量(g)		
102	RHH	04-I		D-5		土製勾玉	4.05	1.1	0.25	0.15	5.1	ほぼ宛形	
171	RHH	05-1-1		D-4	7b層	土製勾玉	5.9	1.1	0.35	0.3	16.1	一部欠損	
187	RHH	03-Ⅲ		SD-04	D-5	土製勾玉	3.1~	0.9	0.2	0.1	2.9	一部欠損	
217	THJ	07-IV		E-4	4層	土製管玉	2.8	1.2	0.3	0.25	6.0	ほぼ宛形	

第14表 五名平野条里跡・兩迫間日渡遺跡 遺構データ表

SHデータ

探洞	調査区	遺構	グリッド	法量(m(推定))			面積 ㎡(推定)	平面形状	断面形状	備考
				長軸	短軸	厚さ				
48	R04	02-I	SH-01	B-C-2				(方形)		P-1~P-4が所属する 炉跡出 SH-02の遺構後、ほぼ同一の位置りに軸を ずらして構築されたと考えられる
49	R04	02-I	SH-02	B-C-2	4.00		0.960	8.0056	(方形)	2基の違いP1cと堀内跡の土器遺構 東西両側にベツト状遺構が認められることから、入 口遺構の可能性 炉穴確認できず
122	R04	03-I	SH-01	C-2-3	4.25	2.00~		8.3732	(方形)	1/2保存 土には炭化物が含まれている
132	R04	04-I	SH-01	F-2-3	3.25	2.50~	0.280	6.94	不明	
88	THJ	06-II	SH-01	E-F-3-4	1.14	0.88	0.130		不明	柱穴はあるが、平面プランは不明確
98	THJ	09-III	SH-02	E-3					不明	柱穴はあるが、平面プランは不明確

SHデータ

探洞	調査区	遺構	グリッド	法量(m(推定))			面積 ㎡(推定)	平面形状	断面形状	備考	
				長軸	短軸	厚さ					
78	THJ	01-1-2	SH-02-1	E096~12	4.16	3.84	0.160	15.67	隅丸方形	凹状	SP-03-06-11が所属 焼土(伊 a)あり W-207 -4a
				E098~12	4.80	3.84	0.160	18.43	隅丸方形	凹状	SP-08-09-12が所属
				E096~9	4.58	2.88	0.160	13.13	隅丸方形	凹状	SP-01-06-07-10が所属
85	THJ	01-1-2	SH-15	E0912-15 E0912-15	2.85	2.15	0.300	3.17	(方形)	凹状	住居遺1部と灰2部あり、住居址内に住居編 絡後の土坑(土器遺あり)
47	THJ	01-1-2	SH-34	E0912 W0924-12 E0923-12	0.84	0.78	0.400	32.76	隅丸方形	凹状	炉あり
85	THJ	01-1-2	SH-41	E0912-15 E0912-18	4.75	2.80	0.650	6.17	(方形)	凹状	
36	THJ	01-1-2	SH-42	E0920-9 E0920-9 E1209	8.00	4.00	0.160	25.12	(横円形)	凹状	SP-1-2-6-9-10-11-12が所属する
				円形周溝 状遺構	E0920-6	1.80	1.50	0.120		(横円形)	凹状
37	THJ	01-1-2	SH-43	W096 E096~12	7.00	4.00	0.080	18.23	(横円形)	凹状	SP-1-2-3-4-8-9-11が所属する
81	THJ	01-3	SH-51	W0927 W0927-30 W0927-30	4.25	4.00	0.280	17.0	(方形)	凹状	P-01~04あり 遺構全体に大量の炭出土
				W0924 W0924-27 W0924-27	6.15	3.70	0.160	11.37	(方形)	凹状	P-01~03あり SK-01(野遺穴 a)あり
84	THJ	01-3	SH-53	W0918~24 W0918~24	3.75	3.55	0.450	6.65	(方形)	凹状	P1~2あり
79	THJ	01-3	SH-103	E0923-364	1.10	0.60	0.540		不明	凹状	ベツト状遺構あり
				W0930-33 E0933	8.70	4.14	0.300	16.0	(方形)	凹状	ベツト状遺構あり
				W0930-33 E0933	4.20	2.94	0.180	6.17	(方形)	凹状	
THJ	01-3	SH-141	E0933 W0933	5.88	2.10	0.600	6.17	(方形)	凹状		
105	THJ	01-3	SH-153	W0918-21 W0921	5.04	4.89	0.420	24.29	方形	凹状	ベツト状遺構あり P1あり
40	THJ	01-3	SH-153	W0930 W0933-36 E0923-36	5.00	2.00	0.120	6.54	(横円形)	凹状	P1~2あり
38	THJ	01-3	SH-166(A)	W0918~24 W0918~24 W12018-21	7.00	6.00	19.23	(横円形)	凹状	P1~2あり 炉あり	
				W0918-18	7.40	2.40		(円形)	凹状		
109	THJ	01-8	SH-531	W0942 W0929-42	3.50	3.50	0.200	12.25	方形	凹状	P-1-2あり

SBデータ

種類	調査区	遺構	階級	方位	検出レベル m	グリッド	深さ m(測定)	炭		備考
								m(平均値)	P値(番号)	
238	THJ	07-1	SB-01	2×2	N-21.5° - W	6.375	D-5	10.87 [1.64] P1-P2 1.4×1.875 P2-P4 1.7×1.6 [1.68]	P1-P2 3.275 P4-P6 1.6×1.775 [1.69]	
246	THJ	06-1	SB-01	2×3	N-27° - E	6.990	D-E-9-11	33.21 P1-P3 2.04×2.36 [2.20]	P3-P6 2.60×2.74+2.19 [2.48]	
247	THJ	06-1	SB-02	2×3	N-3° - E	6.800	F-G-11-13	35.466 P4-P6 1.88×2.14 [2.0]	P1-P4 1.88×2.12+1.34 P6-P11 0.82+1.42+2.88+1.84+1.82 [1.74]	
248	THJ	06-1	SB-03	1×2	N-97° - E	6.800	H-I-13	6.8544 P3-P4 2.06 [2.06]	P1-P3 1.72+1.80 [1.86]	
248	THJ	06-1	SB-05	2×3	N-37.5° - W	6.600	J-K-14-15	25.16 P4-P6 2.16+2.40 [2.28]	P1-P4 1.80+1.84+2.88 P6-P8 4.10+1.80 [2.494]	

平成21(2009)年 竪立柱建物(SB)より

土中に柱穴を形成し、これに柱を持って建物を形成する遺構を竪立柱建物とSBで表記した。

この中で柱の間隔は真々距で測定し、柱の跡が存在した場合は遺跡の中心から、また柱穴だけの場合はその中心からとした。

種別は列(SA)の柱間隔とも併用とした。竪立柱建物は平面形態の短軸と長軸をそれぞれ「奥行×前行」とし、これを提示し整理とした。位置はグリッドで提示した。

以下この分類に従って提示する。

SAデータ

種類	調査区	遺構	グリッド	柱間隔		備考	
				全長 m(測定)	m(平均値) P値(番号)		
245	THJ	06-1	SA-01	D-E-7-11	13.65	P1-P6 1.44+1.88+1.54+2.32+2.04+2.36+1.86 [1.834]	SD-01に併用番号
	THJ	06-1	SA-02	F-J-14-15	8.40	P1-P5 2.26+2.04+1.82+2.12+1.80 [1.906]	図5B-04
	THJ	06-1	SA-03	H-I-13-14	9.10	P6-P11 1.82+1.54+1.88+2.24+1.44 [1.764]	図5B-04

SEデータ

種類	調査区	遺構	グリッド	法量 m(測定)			平面形態	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
87	THJ	01-1-2	SE-19	E6N0	1.14	0.96	0.980	不定形	V字状	弁戸
88	THJ	01-1-2	SE-21	E6N3	1.92	1.50	1.800	円形	U字状	下層より小型丸扉遺出土
87	THJ	01-1-2	SE-26	E6N0	1.00	0.96	1.620	楕円形	U字状	SX-19を切る
89	THJ	01-3	SE-114	WN15	1.14	0.94	1.320	楕円形	U字状	
90	THJ	01-3	SE-115	WN15 W12N15-18	3.00	2.31	2.010	楕円形	U字状	
91	THJ	01-3	SE-121	WN15-18	3.40	3.25	3.100	円形	U字状	SE-121-114-115(持重量は少ない)
90	THJ	01-3	SE-140	W18N0	0.96	0.93	1.560	円形	U字状	
194	THJ	01-9	SE-98	S6N30	1.36	1.32	1.800	円形	U字状	
239	THJ	07-1	SE-01	O-2	(A-A)1.31	(D-D)1.42	1.983	円形	U字状	
253	THJ	06-1	SE-01	O-6	1.24	1.09	1.003	円形	U字状	
THJ	06-1	SE-02	F-J-15	1.14	1.03	0.875	円形	U字状		
254	THJ	06-1	SE-03	L-16-17	1.21	1.20	1.406	円形	U字状	

SPデータ

陣団	調査区	遺構	グリッド	流量 m (推定)			平面形状	断面形状	備考
				長軸	短軸	深さ			
90	THJ	01-1-2	SP-46	E9H18	1.20	0.92	1.000	円形	
	THJ	01-6	SP-418	E9S30	0.20	0.20	0.320	円形	U字状
	THJ	01-6	SP-420	E3S33	0.20	0.20	0.400	楕円	U字状
111	THJ	01-6	SP-421	E9S33	0.20	0.20	0.480	円形	U字状
	THJ	01-7	SP-706	W9M539	0.25	0.25	0.320	円形	U字状
103	THJ	01-7	SP-707	W9M539	0.25	0.25	0.240	円形	U字状
	THJ	01-6	SP-809	W9S45	0.32	0.26	0.520	円形	変形U字状
113	THJ	01-6	SP-810	W9S48	0.25	0.25	0.320	円形	U字状
	THJ	01-6	SP-811	W9S42	0.25	0.25	0.120	円形	U字状
	THJ	01-6	SP-812	W9S42	0.25	0.25	0.280	円形	U字状
	THJ	01-6	SP-813	W9S42	0.25	0.25	0.360	円形	U字状
	THJ	01-6	P-3	W9S45	0.58	0.52	0.280	円形	すり鉢状
82	R9H	05-I-2	SA-01 P1	F-6	0.24		0.248	円形	U字状
	R9H	05-I-2	SA-01 P2	F-6	0.24		0.184	円形	ビツ状
228	R9H	06-I	SP-01	D-9	0.25	0.24	0.170	楕円	ビツ状
86	THJ	06-II	SH-01-P901	F-4	0.29	0.22	0.120	円形	U字状
	THJ	06-II	SH-01-P902	F-3	0.27	0.22	0.120	円形	U字状
	THJ	06-II	SH-01-P903	F-4	0.32	0.21	0.180	円形	V字状
	THJ	06-II	SH-01-P904	F-3	0.27	0.27	0.160	楕円	U字状
	THJ	06-II	SH-01-P905	F-4	0.21	0.14	0.290	円形	U字状
	THJ	06-II	SH-01-P906	F-4	0.23	0.22	0.060	円形	U字状
	THJ	06-II	SH-01 SK-01	F-4	0.47	0.24	0.290	不明	V字状
	THJ	06-II	SH-02 P1-01	F-3	0.19	0.16	0.140	円形	V字状
	THJ	06-II	SH-02 P1-02	F-4	0.55	0.18	0.080	円形	蓋状
87	THJ	06-II	SH-02 SK-01	E-3	0.55	0.41	0.110	不明	蓋状
	THJ	06-II	SP-01	Q-4	0.19	0.17	0.010	円形	蓋状
89	THJ	06-II	SP-02	H-5	0.19	0.16	0.004	円形	蓋状
	THJ	06-II	SP-03	H-5	0.29	0.12	0.006	円形	蓋状
	THJ	06-II	SP-04	H-5	0.18	0.16	0.080	円形	蓋状
	THJ	06-II	SP-06	I-5	0.18	0.16	0.080	円形	V字状
233	THJ	06-III	SP-03	F-3	0.10	0.09	0.030	円形	不定
234	THJ	06-III	SP-07	D-2-3	0.67	0.51	0.128	楕円	不定
	THJ	06-III	SP-08	D-3	0.50	0.40	0.147	楕円	蓋状
	THJ	06-III	SP-09	D-2	0.24	0.10	0.098	不明	蓋状
	THJ	06-III	SP-10	D-2	0.42	0.32	0.051	楕円方形	蓋状
	THJ	06-III	SP-11	D-2	0.32	0.28	0.056	楕円	蓋状
	THJ	06-III	SP-12	D-2	0.16	0.12	0.108	不明	蓋状
	THJ	06-III	SP-13	D-2	0.40	0.34	0.051	不明	蓋状
	THJ	06-III	SP-14	D-2	0.56	0.56	0.064	楕円	蓋状
	THJ	06-III	SP-15	D-2	0.90	0.76	0.083	不明	蓋状
	THJ	06-III	SP-16	D-2	0.80	0.52	0.088	楕円方形	蓋状
	THJ	06-III	SP-17	D-2	0.20	0.16		楕円	U字状
	THJ	06-III	SP-18	F-4	0.16	0.16	0.140	円形	不明
	THJ	06-III	SP-19	F-4	0.18	0.16	0.080	円形	ビツ状
	THJ	06-III	SP-20	H-5	0.22	0.16	0.080	円形	ビツ状
	THJ	06-III	SP-21	L-6	0.18	0.14	0.080	円形	ビツ状

SDデータ

洞窟	調査区	遺跡	グリッド	法量 m (標準)			副産物状	備考	
				長軸	短軸	深さ			
87	THJ	01-1-2	SD-03	E890-3 E390-4 W090-8	6.80	1.38	0.800	混合形状	遺跡東側に土層が露出(遺集 a)
89	THJ	01-1-2	SD-07	E2161-1-30 E2162-1-30	3.80	0.85	0.500	混合形状	SD-09にも一層から
	THJ	01-1-2	SD-08	E21627-30 E21627-30	1.85	0.40		混合形状	SD-07に併せられる
87	THJ	01-1-2	SD-25	E653 E890 E890-3 W033-6	6.12	0.88	0.400	すり鉢状	
	THJ	01-1-2	SD-26	E890 E890-3 E390 W090	0.99	0.96	0.300	混合形状	
190	THJ	01-1-2	SD-29	E290 E893-6 E890 W090-9	1.02	0.88	0.450	U字状	
	THJ	01-3	SD-117	W0912-13	1.88	0.96	0.480	混合形状	
	THJ	01-3	SD-128	W0912-13	1.32	0.80	0.320	U字状	
	THJ	01-3	SD-131	W12912-13 W12915-13	6.40	2.24	0.320	陥凹状	
	THJ	01-3	SD-132	W0912 W12912-18	0.24	1.28	0.320	混合形状	
	THJ	01-3	SD-133	W1298-15 W13015	0.58	2.00	0.320	U字状	
192	THJ	01-3	SD-134	W1298 W13012-15	0.18	1.80	0.240	U-V字状	
	THJ	01-4	SD-103	W42327-42 W42327-42	13.50	1.40	0.150	U字状	
	THJ	01-4	SD-203	W42345-42 W42342-45	7.20	0.85	0.200	陥凹状	
	THJ	01-4	SD-204	W42342-48	0.30	0.50	0.250	陥凹状	
193	THJ	01-4	SD-205	W42345-51 W42345	7.40	1.60	0.150	陥凹状	
	THJ	01-4	SD-206	W42323-36 W42323-26	3.00	0.70	0.100	陥凹状	
	THJ	01-7	SD-701	W42327-36 W42321-34	10.40	0.85	0.400	V字状	土層が深い
	THJ	01-7	SD-702	W42323-36 W42321-33 W42321-34	7.60	0.75	0.500	V字状	土層が深い
196	THJ	01-7	SD-706	W03527-53 W03524	5.75	0.45	0.500	V字状	SD-706につながる可能性(第一の層)
	THJ	01-7	SD-708	W03515-16 W42315-18	0.00	1.00	0.400	V字状	埋土中に処理層
	THJ	01-7	SD-710	W03521 W03518-21 W03515-18	12.00	1.40	0.200	陥凹状	
	THJ	01-7	SD-717	W03524-29	7.30	0.50	0.200	陥凹状	
197	THJ	01-4-7	SD-46	W54323-42 W67523-36	0.00	1.30	1.800	すり鉢状	
199	THJ	01-6	SD-022	W6940-51	1.60	0.40	0.060	陥凹状	
113	THJ	01-6	SD-023	W0345-48 W0345-45	0.40	1.20	0.180	陥凹状	
186	THJ	02-1	SD-07	F-10-11, G-10	0.90	0.56	0.125	陥凹状	
	THJ	02-1	SD-08	F-9-10-11	0.20	1.80	0.286	陥凹状	
173	THJ	02-1	SD-09	D-7-8-9 D-6-7-7-7	35.52	2.66	0.371	平筒	09-01-02を切り、SD-10に併せられる SD-12を切る
187	THJ	02-1	SD-10	D-7-8-9	0.28	1.80	0.265	皿状平筒	SD-09の土層を切る
274	THJ	02-8	SD-03	C-5-6-7 D-4-5-6-7-8-9 E-5-6-7-8-9 F-8	21.25	10.25	1.365	皿筒状	
	THJ	02-8	SD-04	E-10-3-4	5.60	2.80	0.490	皿筒状	
197	THJ	02-10	SD-11	D-10, F-10-10 F-9	10.30	1.26	0.195	陥凹状	自然遺跡 段から露へ流れる
176	THJ	02-10	SD-12	E-11, F-10-11	7.84	3.16	0.409	U字状	古代水田層を穿っている
174	THJ	02-10	SD-14	C-D-16	0.30	1.80	0.129	U字状	溝としては非常に浅く(数分の深さがある)
178	THJ	02-10	SD-15	E-8-11-F-9	11.08	1.80	0.280	円形	堀に似ているが、このタイプは02-1区SD-09で見られた
121	R99	02-1	SD-05	C-3-5, D-4-7 F-9	27.30	2.96	0.293		
	R99	02-7	SD-04	C-D-6	4.20	16.470.44	0.113	陥凹状	
128	R99	02-8	SD-07	G-H-8-9	0.00	1.74	0.343	陥凹状	西側はSD-09に併せられる SD-07方向に水が流す水田の役割を果たしていた可能性はある。
195	R99	02-10	SD-01	D-E-11	7.00	1.25	0.244	平定	
	R99	02-10	SD-02	C-D-4-5	4.75	1.75	0.410	陥凹状	

SDデータ

探検	調査区	遺構	グリッド	測量 (m) (推定)			観察形状	備考	
				長軸	短軸	深さ			
195	R9H	03-03	SD-03	B-1-2, C-2-3	7.90	1.80	0.250	腐敗	SD-04 の上に覆っている。東の方が少し高めであるが、東側から掘り込んできたのではない。
	R9H	03-03	SD-04	B-3, C-2-3 D-4-3, E-4-3	33.00	4.40	0.305	不定	東に砂層で形成 土が層は北から南へと傾向が見られる 下部は粘土
124	THJ	04-1	SD-01	F-8	12.28	2.68	0.262	腐敗	
200	R9H	04-1	SD-01	G-9-9	2.40	0.44	0.673	腐敗	
206	R9H	04-1	SD-02	E-1-2, F-1-3	7.68		0.215	不明	自然沈積
210	R9H	05-1-1	SD-01	C-4, D-4-4 E-5	11.20	3.10	0.195	腐敗	後に河川の氾濫の影響で埋まったと思われる 木は東から西へ覆っていた可能性 ある。
	R9H	05-1-1	SD-02	B-C-4-4, D-5	8.00	2.80	0.190	V字状	SD-01 のすぐ西側に位置する 多量に土で、SD-01 に比べると形も整っていない 掘削より東側は土層の厚がすぐ西で変わったプラン不明
192	R9H	05-1-1	SD-03	B-C-4-4, D-5	9.81	1.93	0.200	不定	SD-01 のすぐ西側に位置する 多量に土で、SD-01 に比べると形も整っていない 掘削より東側は土層の厚がすぐ西で変わったプラン不明
	R9H	05-1-2	SD-01	C-F-4-9	12.88	2.08	0.422	不定	西から東に木が覆れていた様子が見える 特に SD-01 の東側部分は凹凸が激しい
187	R9H	05-1-2	SD-02	D-E-4-9	11.18	1.78	0.268	不定	SD-01 より深く、SD-01 の途中から掘り出された可能性 SD-01 に隠れているが、SD-02 の方が深いと考えられる
	THJ	05-1-1	SD-01	B-C-3	4.20	0.84	0.210	腐敗	西から東へ延びる 東側は比較的緩やかなV字状、東側側面は緩やかな傾斜
63	THJ	05-1-1	SD-02	D-5	3.24	1.00	0.980	V字状	西から東へ延びる
	THJ	05-1-2	SD-01	B-2-6	15.88	1.88	0.320	不定	西方向から緩やかに傾斜しながら、北西へ上延びる SD-01 - 02 は直線的に並列し、時期差はほとんどないと思われる
217	THJ	05-1-2	SD-02	B-2-5, C-5	16.02	0.88	0.463	腐敗	ST-01 に覆われる 西方向から掘削し、北東へやや傾斜しながら傾斜的に埋める
	THJ	05-1-2	SD-03	A-3, B-2-5	12.84	1.38	0.438	腐敗	西から東に木が覆っていた
84	THJ	05-1-2	SD-04	A-2	1.18	1.12	0.288	腐敗	西方向の調査区外に延びていと思われる
	THJ	05-1-2	SD-05	B-2-2, C-2-3	20.80	7.20		腐敗	自然沈積
230	R9H	06-1	SD-05	D-F-8-9	5.12	0.44	0.190	不明	2条の線跡を伴う水跡
229	R9H	06-1	SD-08	E-F-9	3.08	0.52	0.189	U字状	
228	R9H	06-1	SD-08	H-1-15	3.88	0.88	0.218	U字状	SD-19を切り取り溝状に掘削する 溝状等も見み
182	R9H	06-1	SD-10	G-13-14, H-13	9.08	0.98		連続状	SD-18に伴う水跡 SD-11より浅く SD-18の前にもう一つの線跡があったようだが、削平を受けて取り除かれている
86	R9H	06-1	SD-11	F-8	1.88	0.80	0.880	U字状	SD-01-02に伴う水跡
182	R9H	06-1	SD-12					腐敗	断面のみ
43	R9H	06-1	SD-13					不明	断面のみ
186	R9H	06-1	SD-14					腐敗	断面のみ
	R9H	06-1	SD-15					腐敗	断面のみ 沈降状の遺構
187	R9H	06-1	SD-16					不明	断面のみ
182	R9H	06-1	SD-17					腐敗	断面のみ SD-08より浅く
230	R9H	06-1	SD-18					不明	断面のみ SD-11と同様に伴う溝
231	R9H	06-1	SD-19					不明	断面のみ
186	R9H	06-1	SD-20					不定	断面のみ 水跡は西側一定範囲の水跡の広がりを示し、そこから南側は深溝で水跡としては利用されていないことがわかる
87	THJ	06-1	SD-04	J-4				不明	溝
	THJ	06-1	SD-05	B-1-2-3	19.80			不明	自然沈積
233	THJ	06-1	SD-02	J-5-9	2.32	0.62	0.330	条状	土質層のプランであった可能性
	THJ	06-1	SD-05	F-G-4	2.28	0.38	0.880	U字状	SD-04 - 08 は階層と溝というセット構造であると判断される
170	THJ	07-1 (08-1)	SD-01	D-F-2-4 D-E-4	5.10	1.78	0.250	腐敗	SD-07に併せ SD-01より土層は水跡を主とする水跡層
	THJ	07-1 (08-1)	SD-07	B-C-2, C-E-3	15.20	2.00	0.200	腐敗	SD-03に併せ 遺構が水跡の基盤土層と思われ土層は土 SD-03と同層
229	THJ	07-1	SD-02	D-E-4, E-F-1	10.52	1.56	0.260	U字状	水跡ではなく、土層に伴う溝 東側に土層管理のために石を敷き置いたものと思われる
276	THJ	07-1	SD-03	B-2, C-2-3	12.28	0.48	0.120	腐敗	
	THJ	07-1	SD-04	B-2, C-2-3	15.12	1.42	0.189	腐敗	
277	THJ	07-1	SD-06	B-C-4-4, D-4 D-2-3	13.90	8.78	0.720	不明	

SDデータ

項目	調査式	遺物	グリッド	法量 m (埋深)			調査状況	備考	
				長軸	短軸	深さ			
72	THJ	07-22	SD-01	B-0-1~3	7.93	1.75	0.300	不定	弥生後葉の可能性もあり 小形のもの、龍見川に流れるものだったと考えられる
73	THJ	07-22	SD-01	D-0-4, E-0-5 G-0-6	245.00	4.80	0.660	不明	埋没跡は弥生中葉頃 1層の階段にSD-01層土が堆積
241	THJ	07-19	SD-01	B-0-2-2	6.30	3.20	0.375	不明	自然沈積 調査区中央の粘土層厚さと同じものと判断 西から東へ流れ、流れはあまり急ではなかっただろう
	THJ	07-19	SD-02	C-3	4.65	2.80		陥伏	自然沈積 土から南へ流れ、SD-01と合流する層 土量は層厚が多少異なっている。以上流れの急な層だったのではない
250	THJ	08-1	SD-01	C-7-8 D-6-9-11 E-11	14.88	1.70	0.171	陥伏	崖内側の区画された集積層の境と考えられる SD-01・SD-01と併す
258	THJ	08-1	SD-02	G-0-14, I-13	10.80	1.15	0.418	陥伏	性質はやや不明だが、崖面に伴う層の可能性
257	THJ	08-1	SD-03	H-0-14, H-15	7.00	1.62	0.234	陥伏	自然沈積 SD-03-08-07層併っており、埋没後の130中葉一層中葉には形成されていたと考えられる
258	THJ	08-1	SD-04	I-0-15	11.38	1.00	0.372	陥伏	性質はやや不明だが、区画した層の可能性 粘土堆積
258	THJ	08-1	SD-05	H-0-14	8.10	1.64	0.249	陥伏	自然沈積
259	THJ	08-1	SD-06	F-14-15 J-15-18	6.80	0.80	0.183	陥伏	自然沈積
	THJ	08-1	SD-07	J-14~15, K-15	12.82	1.38	0.189	陥伏	自然沈積 南北方向の1番の層だが、南方の遺物からSD-10との境に分かれる
260	THJ	08-1	SD-08	J-14-15 K-15~17	10.24	0.92	0.276	陥伏	自然沈積
	THJ	08-1	SD-09	K-14~16 L-16~17	15.14	0.48	0.205	陥伏	自然沈積
260	THJ	08-1	SD-10	J-14-15	4.82	0.42	0.239	陥伏	自然沈積 南北方向の1番の層 SD-07が南方の遺物からSD-10との境に分かれる
	THJ	08-1	SD-11	J-14-15	2.82	0.28	0.081	陥伏	自然沈積 SD-10と同層併す
	THJ	08-1	SD-12	Q-13-14	6.64	0.44	0.230	陥伏	自然沈積
261	THJ	08-1	SD-13	L-17	2.22	1.68	0.213	陥伏	自然沈積 流木の集積で地形の落ち込みを埋積していたものと考えられる SD-01と同様な埋土を持つ。SD-01と併す同時層
262	THJ	08-1	SD-14	L-16-17 L-18	7.90	2.44	0.437	不定	性質は不明だが、調査区(SD-01)に伴う層の可能性
260	THJ	08-1	SD-15	F-13-14	4.18	0.38	0.252	陥伏	自然沈積
264	THJ	08-1	SD-16	L-15-16	6.62	0.48	0.148	陥伏	自然沈積 SD-17が埋没し、SD-16が形成されていたと考えられる
	THJ	08-1	SD-17	L-15-16	2.74	0.32	0.089	陥伏	自然沈積
	THJ	08-1	SD-18	L-16-16	4.30	0.80	0.328	陥伏	区画した可能性のある遺物遺構と考えられる SD-19・SD-18・SD-08の順で形成
264	THJ	08-1	SD-19	M-16	1.88	0.80	0.169	陥伏	自然沈積
260	THJ	08-1	SD-20	K-16-17	3.64	0.48	0.082	陥伏	自然沈積
261	THJ	08-1	SD-21	K-17	2.68	1.08	0.348	陥伏	自然沈積 SD-13と同層同時層
256	THJ	08-1	SD-22	I-14	3.38	0.38	0.180	陥伏	自然沈積 SD-09,22は埋没層ではない SD-22埋没後、SD-02が形成

STデータ

探跡	調査区	遺構	グリッド	測量 (推定)			平面形状	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
173	THJ	02-1	ST-02	C-D-4	1.80	0.64	0.215	圓形	遺状	
81	THJ	02-1	ST-03	B-2	0.80	0.34	0.138	隅丸方形	遺状	
123	R9H	03-1	ST-03	C-4	0.99	0.61	0.132	隅丸方形	遺状	土坑
	R9H	02-1	ST-04	D-6	0.70	0.20	0.158	不明	遺状	覆土により大部分削平されている
	R9H	03-1	ST-05	C-2	0.50	0.46	0.040	円形	遺状	
	R9H	02-1	ST-06	C-2	0.82	0.56	0.087	楕円	遺状	
	R9H	03-1	ST-07	C-1-2	0.80	0.64	0.592	不明	不明	ST-07はST-06より狭い
	R9H	02-1	ST-08	B-C-1	0.86	0.66	0.495	不明	遺状	
	R9H	02-1	ST-09	E-7	1.16	0.52	0.247	不明	遺状	浅い土坑 ST-09-10は埋土の浅いから両時期ではないと思われる
124	R9H	02-1	ST-10	D-7	0.86	0.66	0.323	楕円	遺状	浅い土坑
	R9H	02-1	ST-11	E-6	0.74	0.56	0.074	不明	遺状	
	R9H	02-1	ST-12	D-6	0.72	0.34	0.086	不明	U字状	
	R9H	02-1	ST-13	C-4	0.84	0.62	0.023	楕円	遺状	ST-13は本条SD-05を削っていた
	R9H	02-1	ST-14	D-6	0.86	0.80	0.408	長方形	U字状	
	R9H	02-1	ST-16	C-D-4	1.52	0.66	0.011	不明	遺状	ST-16-17は覆土により覆られており両期の大きさは等分らない
	R9H	02-1	ST-17	D-4	0.74	0.40	0.166	不明	遺状	
127	R9H	02-2	ST-18	G-H-9	1.28	1.16	0.071	楕円	遺状	
	R9H	02-2	ST-19	G-H-9	2.28	1.88	0.095	楕円	遺状	
	R9H	02-2	ST-20	H-9-10	1.50		0.046	不明	遺状	
201	THJ	04-1	ST-01	F-6	1.12	0.67	0.278	楕円	遺状	遺物土なし 埋土は基本土層2層と類似 2層が堆積する時に埋まった可能性あり 広義の土坑
203	R9H	04-1	ST-01	E-F-3, F-2	7.15	1.30	0.363	長方形	遺状	用途は不明だが、水が溜ったような跡は 見られる 水溜りとも考えられるが深く、邊が切れて 一部削ったとも考えられる
130	R9H	04-2	ST-01	E-4	(A-B)1.03	(C-D)0.83	0.118	隅丸方形	遺状	
	R9H	04-2	ST-02	C-3	(A-A)0.80	(B-B)0.59	0.161	楕円	V字状	埋土層から、自然に埋没した土坑
140	R9H	04-2	ST-03	E-5	1.25	1.17	0.745	楕円	U字状	ST-04の北に隣接 水が非常に多く溜り 窪の部分に少し段差あり
	R9H	04-2	ST-04	E-4-5	1.74	1.01	0.947	円形	U字状	ST-05の南に隣接、ST-06を切る 窪に落ちたにつれ、流水流しい 1層広い窪の部分に円形に掘り、次に楕 円形に穴を掘る2段階で掘造 両方が広い 調査掘削が行われた可能性
143	R9H	04-2	ST-05	E-5	1.40	1.29	0.890	円形	V字状	ST-03-04-06の中で湧水量が一番多い ST-03-04が穴に掘られ、それが埋没しな くなり、少し離れた場所にST-08が掘られ た。
	R9H	04-2	ST-06	E-4-5	1.34	1.01	0.558	円形	U字状	ST-04に切られ、平分以上掘平を受けて いる 元来は円形→楕円形。
144	R9H	04-2	ST-07	C-D-3	0.98	1.97	0.585	円形	U字状	
146	R9H	04-2	ST-08	D-3	1.20	1.10	1.354	円形	U字状	自然に埋没していく埋土土層を削り入れ た。火を焚いて、1層に埋め崩れしきり 時期との2時期があり(両期不明) 一度の調査掘削が行われていた可能性 併発出土
144	R9H	04-2	ST-09	D-3	0.50	0.45	0.197	隅丸方形	U字状	際(ほぼ覆土)を埋め込みで作られたか 遺構自体の規模は浅いが、SD-04-ST-08 と連続して掘べる為、意図的にこのよう な位置で作った可能性あり 併発的にはST-09→ST-08→SD-04の順 。
218	THJ	05-2	ST-01	B-3	1.50	0.60	0.224	不定	遺状	遺物なし ST-01～ST-43の並び方に規則性はな い いずれも人工的に掘られたのか、水の作 用で自然にできたのか判断できない
	THJ	05-2	ST-02	C-6	0.80	0.70	0.154	隅丸方形	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-2	ST-03	C-6	0.70	0.66	0.100	不明	不明	ST-01と同様
	THJ	05-2	ST-04	C-5	0.63	0.63	0.178	楕円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-2	ST-05	C-D-7	1.96	1.26	0.158	不定	遺状	ST-01と同様

STデータ

探洞	調査区	遺構	グリッド	土層 m (想定)			平面形状	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
218	THJ	05-Ⅱ-2	ST-06	D-7	1.26	0.95	4.574	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-07	D-8	0.83	0.54	0.065	不定	遺状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅱ-2	ST-08	D-8	1.13	0.85	0.178	横円	遺状	ST-01と同様
218	THJ	05-Ⅱ-2	ST-09	D-E-8	1.00	0.82	0.118	隅丸方形	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-10	D-D-7	1.34	0.89	0.148	不詳	遺状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅱ-2	ST-11	D-7	0.83	0.41	0.105	不詳	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-12	D-6	0.86	0.90	0.114	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-13	C-6	0.88	0.57	0.108	横円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-14	C-6	0.66	0.53	0.133	横円	遺状	ST-01と同様
220	THJ	05-Ⅱ-2	ST-15	D-7	1.85	0.83	0.123	不定	遺状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅱ-2	ST-16	D-7	2.49	1.35	0.136	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-17	D-18	0.76	0.60	0.123	横円	遺状	ST-01と同様
220	THJ	05-Ⅱ-2	ST-18	D-18	2.17	0.91	0.150	不詳	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-19	D-E-7-8	1.76	0.85	0.190	不詳	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-20	D-8	0.84	0.52	0.110	横円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-21	D-8	0.75	0.34	0.090	隅丸方形	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-22	D-8	0.83	0.62	0.112	横円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-23	E-9	0.77	0.68	0.080	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-24	E-9	0.81	0.58	0.064	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-25	C-5	0.87	0.44	0.124	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-26	C-5	0.51	0.48	0.156	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-27	C-D-6	0.90	0.39	0.085	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-28	C-6	0.95	0.51	0.125	不定	遺状	ST-01と同様
	221	THJ	05-Ⅱ-2	ST-29	C-6-7	1.37	1.13	0.156	不定	遺状
THJ		05-Ⅱ-2	ST-30	D-D-6-7	2.56	1.42	0.228	不定	遺状	ST-01と同様
THJ		05-Ⅱ-2	ST-31	D-6	2.08	1.12	0.181	不詳	遺状	ST-01と同様
THJ		05-Ⅱ-2	ST-32	D-6-7	0.54	0.82	0.255	不詳	遺状	ST-01と同様
222	THJ	05-Ⅱ-2	ST-33	D-7	0.71	0.43	0.157	横円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-34	D-7	1.37	0.39	0.186	不詳	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-35	D-E-8	0.88	0.40	0.144	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-36	E-8	0.46	0.38	0.100	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-37	E-8	0.54	0.90	0.110	横円	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-38	E-9	0.44	0.30	0.081	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-39	E-9	0.49	0.32	0.094	不詳	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-40	E-9-9	0.41	0.31	0.073	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-41	E-9	0.88	0.86	0.117	不定	遺状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅱ-2	ST-42	E-9-10	1.20	1.06	1.072	不定	遺状	ST-01と同様
41	ReH	06-1	ST-01	G-11	0.72	0.54	0.140	横円形	遺状	土層を一層して掘削したと思われる
265	THJ	06-1	ST-01	Q-H-11	2.19		1.061	不詳	U字状	形状・深さから井戸の可能性高い 遺土は洪水等で埋まり、壁・扉下層の土 片も混れ込み。
266	THJ	06-1	ST-02	K-14-15	2.44	1.94	0.286	横円	遺状	ST-02-00は埋土に焼土・炭化物が混入 土塊の間に炭燐灰をかけた状況は確 信できないが、埋土(焼土)が火を受けた 可能性もある。炭燐灰の土 SD-04埋没後にST-02-03の切り合いが あり埋没後SD-09が切ったと推定される
	THJ	06-1	ST-03	K-15	2.08	2.04	0.406	横円	遺状	炭燐灰の土塊
267	THJ	06-1	ST-04	E-9	0.81	0.81	0.196	横円	遺状	プランはやや不整形 遺土外ではあるが壁面に伴う土塊と考え られる
	THJ	06-1	ST-05	E-F-11	2.11	2.05	0.570	不定	遺状	テラス状に掘り込み西側部分はやや深い 井戸の可能性もあるが土塊と判断 ST-04と併す
268	THJ	06-1	ST-06	I-3	2.74	1.76	0.284	不詳	遺状	ST-06はSD-03を切っており、SD-02埋没 後には形成されていたと推定 ST-02-02と近接する埋土に焼土・炭化物 が混入 炭燐灰の土塊
269	THJ	06-1	ST-07	K-16	1.12	1.09	1.488	円形	U字状	円形に近い隅丸方形と深さから判断 一貫して下打足組の使用 ISK-01-03と同時期
	THJ	06-1	ST-08	L-M-16	0.84	0.48	0.176	隅丸方形	遺状	性格はやや不整形円形に近い土塊 遺物なし

STデータ

探洞	調査区	遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形状	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
266	THJ	08-1	ST-06	L-16	1.36	0.66	0.254	不定	凹状	不整形の長條円形、直線寄ラスタ状に掘り込み、中央部をややピット状に掘り込むピットを掘る為に応じた。
269	THJ	08-1	ST-10	I-J-14	2.31	1.32	0.329	不定	凹状	炭化物集中部分や積土が混入 磨機痕跡の土坑
270	THJ	08-1	ST-11	K-16	1.04		0.114	不明	凸状	ST-12を切り、SD-08に切られている為 性格もやや不明であるが人為的に掘られた土坑
	THJ	08-1	ST-12	K-16		0.60	0.142	不明	凸状	ST-11・12が切り合い、埋没した直後に SD-08が形成されたと考えられ、時期推定 が殆どないと考えられる
	THJ	08-1	ST-13	L-16	0.72	0.61	0.047	楕円	凸状	遺物なし
	THJ	08-1	ST-14	J-15	0.77	0.60	0.137	不明	凸状	性格はやや不明だが円形に近く、人為的 掘りの土坑 SD-08が掘っており両時期から少し前の 120後半頃と推定される
	THJ	08-1	ST-15	M-16	1.44	1.16	0.674	楕円	凸状	磨機りの片声
	THJ	08-1	ST-16	K-L-16	1.06	0.53	0.069	不明	凸状	SD-08に切られており、性格はやや不明 だがST-02・03と併う土坑の可能性あり
271	THJ	08-1	ST-17	H-I-13-14	1.40	1.02	0.170	隅丸方形	凸状	性格はやや不明、遺土に炭土・炭化物混入 磨機痕跡の土坑 SD-02を切り、楕円形に近く両端をラスタ 状に掘り込んだ土坑
	THJ	08-1	ST-18	H-11-13 I-13	1.56	0.52	0.366	不明	凸状	排水路で切られているため金首は明確で ない SK-01に併う遺物の所産。
	THJ	08-1	ST-19	Q-11	1.07	0.76	0.079	楕円	凸状	楕円に近い不整形の土坑 遺土に炭化物・積土が混入するが遺土 の層に火を受けた状態は観察できず
	THJ	08-1	ST-20	J-I-13-14	1.44	1.04	0.044	隅丸方形	凸状	不整形の土坑 遺土に炭化物・積土混入 近辺にあるST-19の土色遺土が類似する 為、同時期と
	THJ	08-1	ST-21	F-11	0.96	0.80	0.538	楕円	U字状	形状から片声の可能性もあり 性格は不明だが、使用後に土層や壁を 掘り込み一気に埋めたと考えられる

SKデータ

探洞	調査区	遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形状	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
78	THJ	01-1-2	SK-18	EN6	1.24	0.96	1.200			SK-02の貯蔵穴の可能性
86	THJ	01-1-2	SK-27	EN63	1.56	0.67	0.670	円形	凹状	SK-31を切る
	THJ	01-1-2	SK-27	E2N2	0.58	0.50	0.460	(円形)	U字状	
98	THJ	01-1-2	SK-44	E15N6-12	0.76	0.64	0.720	(円形)	U字状	3a層掘出
	THJ	01-1-2	SK-45	E3N0-3	0.37	0.38	0.420	(楕円形)	U字状	
82	THJ	01-3	SK-01	WSN21-24 WSN21-24	1.20	0.80		楕円形	凹状	SK-51の貯蔵穴。
95	THJ	01-3	SK-101	WSN21	1.52	0.66	0.520	不定形	凹状	
106	THJ	01-7	SK-712	WS616 WS616	1.10	1.00	0.500	円形	凸状	
	THJ	01-7	SK-715	WS609	2.30	2.80	5.000	(円形)	凹状	
	THJ	01-7	SK-716	WS624-30 WS624-30	1.40	1.00	1.500	楕円形	凹状	
108	THJ	01-8	SK-822	WS645 WS642-45		0.150		(楕円形)	凹状	
179	R9H	05-II-1	SK-01	D-6	1.09	0.60	0.200	楕円形	凸状	直下の SK-03 を切る 出土遺物は遺構に併うものではない 性格不明、保存に併うもの。
69	THJ	06-II	SK-01	E-3	0.55	0.35	0.011	不定	不明	伊の可能性
71	THJ	06-III	SK-06	F-4	0.46	0.26	0.350	不明	不明	SK-36内伊
249	THJ	08-1	SK-01	Q-13	1.40	0.76	0.194	隅丸長方形	凸状	磨機痕 人骨・土器
250	THJ	08-1	SK-02	H-11-13	3.28	3.08	1.347	円形	U字状	磨機痕
252	THJ	08-1	SK-03	J-15	1.22	0.62	0.233	隅丸長方形	凸状	磨機痕 人骨・土器

SXデータ

種別	調査区	遺構	グランド	法量(推定)			種類	平置形態	断面形状	備考
				長径	短径	深さ				
96	TKJ	01-1-2	SX-04-1	E9N6	1.72	1.32	0.720	円形	すり鉢状	土坑*
96	TKJ	01-1-2	SX-04-2	E9N3	2.25	0.89	0.660	円形	凹状	
97	TKJ	01-1-2	SX-06	E3S3 E3N0 W023	2.80	1.80	0.160		不定形	溝状
47	TKJ	01-1-2	SX-20	E12N12	0.70	0.66	0.800	楕円形	U字状	
98	TKJ	01-1-2	SX-35	E3N0	0.52	0.44	0.440		U字状	溝1層・溝2層あり
97	TKJ	01-1-2	SX-38						(溝状)	断面のみ 断面では250-28cm切り, 630-28cm切られる
98	TKJ	01-1-2	SX-39	E8N0	1.84	0.48	0.280		(楕円形)	適合形状
94	TKJ	01-3	SX-102	W8N18-24 W8N18-24	5.20	3.80	0.250		不明	溝+溝土あり 円形プラン*
99	TKJ	01-3	SX-106	W13N8	0.84	0.80	0.320		円形	凹状
	TKJ	01-3	SX-110	W8N18-21 W8N18-21	1.80	1.00	0.180		楕円形	溝状
	TKJ	01-3	SX-124	W8N18	0.80	0.80	0.240		(楕円形)	(溝状)
	TKJ	01-3	SX-125	W8N18	1.80	0.80	0.240		楕円形	凹状
	TKJ	01-3	SX-126	W8N18	1.36	0.68	0.250		楕円形	凹状
	TKJ	01-3	SX-128	W8N18-21 W8N18	0.82	0.76	0.240		不定形	凹状
	TKJ	01-3	SX-130	W8N18	0.80	0.80			円形	凹状
90	TKJ	01-3	SX-136	W12N3-9 W12N3-9 W12N3-9	5.40	4.80	0.050		方形	凹状
95	TKJ	01-3	SX-125-2 (SX-127)	W8N18-21 W8N18	1.60	1.36	0.240		不定形	凹状
90	TKJ	01-3	SX-161	W13N3	1.10	0.95	0.150		楕円形	直井
102	TKJ	01-4	SX-202	W42S48-48	1.75	1.25	0.420		円形	直井
	TKJ	01-4	SX-208	W42S30-33	0.50	2.30	0.100		(方形)	凹状
	TKJ	01-4	SX-207	W42S48-51	0.80	0.30	0.050			溝状
110	TKJ	01-6	SX-401	E21S12-15 E24S12	3.44	1.76	0.120		不明	凹状
	TKJ	01-6	SX-402	E21S9-12	2.56	0.56	0.080		不定形	溝状
	TKJ	01-6	SX-403	E19S9-12 E21S9-12	1.84	0.80	0.080		不明	(溝状)
	TKJ	01-6	SX-404	E18S15 E18S12-15	4.80	2.40	0.060		(方形)	(溝状)
	TKJ	01-6	SX-405	E21S15-18 E18S15-18	4.40	2.80	0.200		不定形	凹状
	TKJ	01-6	SX-406	E18S21 E15S18-21 E15S18	0.88	0.64	0.040		不定形	溝状
	TKJ	01-6	SX-407	E19S12-15	1.20	1.12	0.040		円形	凹状
	TKJ	01-6	SX-408	E9-15S30	4.60	0.40	0.060			
111	TKJ	01-6	SX-409	E9S30	5.60	1.76	0.060		(不定形)	溝状 3層上層積出
116	TKJ	01-6	SX-406A	E9S30-33 E9S30	6.40	1.00	0.200		不定形	V字状 4層上層積出
	TKJ	01-6	SX-409B	E9S36 E9S33-36 E9S30-33	6.80	3.30	0.200		不定形	不明 4層上層積出
110	TKJ	01-6	SX-410	E9S30	3.20	1.80	0.040		不定形	溝状
111	TKJ	01-6	SX-411	E9S30	1.76	1.80	0.200		楕円形	凹状
	TKJ	01-6	SX-412	E9S30	1.36	0.88	0.040		楕円形	溝状
	TKJ	01-6	SX-413	E9S36	2.00	0.64	0.180		不明	(溝状)
	TKJ	01-6	SX-414	E21S18-21 E24S18	4.60	1.80	0.060		不明	(溝状)
	TKJ	01-6	SX-415	E21S18-21 E24S18	1.20	0.40	0.040		不明	(溝状)
116	TKJ	01-6	SX-416	E9S30	2.60	1.36	0.160		楕円形	凹状
	TKJ	01-6	SX-422	E21S9-12 E24S12	6.00	3.00	0.150		(方形)	凹状 (溝状)
	TKJ	01-6	SX-423	E21S15 E24S12-15	6.50	3.00	0.150		(方形)	(溝状)
	TKJ	01-6	SX-424	E15S15-18 E18S15-18	6.50	5.00	0.050		(方形)	凹状
	TKJ	01-6	SX-425	E18S21	4.80	2.80	0.100		(方形)	凹状
	TKJ	01-7	SX-704	W03S36 W03S36	0.80	0.36	0.120		円形	凹状
103	TKJ	01-7	SX-705	W03S36-39 W03S36-49	0.92	0.40	0.120		円形	凹状
	TKJ	01-7	SX-712	W03S42	0.80	0.32	0.280		(円形)	凹状
106	TKJ	01-7	SX-718	W06S24-33 W06S24-33	6.80	2.80	0.100		(長方形)	凹状
107	TKJ	01-4-7	SX-47	W09S45	1.20	1.08	0.280		不定形	凹状
	TKJ	01-4-7	SX-61	W42S48	0.96	0.28	0.320		不定形	すり鉢状
104	TKJ	01-4-7	SX-1301	W42S39 W42S39-39 W48S30-33	12.80	2.00				

SXデータ

群	調査区	遺構	グリッド	測量 (単位)			種類	平面形状	断面形状	備考	
				長径	短径	厚さ					
104	THJ	01-4-7	SX-1002	W45245-45 W45233-45	15.00	0.50			円形		
	THJ	01-4-7	SX-1000	W47033-39 W44233							
	THJ	01-4-7	SX-1004	W42544-51	605.00	0.50					
114	THJ	01-8	SX-801	W46339 W4539	1.25	0.45	0.400		(横内形)	筒状	
113	THJ	01-8	SX-802	W45339-42 W45339-42	1.84	1.04	0.120		横内形	筒状	
114	THJ	01-8	SX-803	W46542 E3339-42 E3339	3.75	2.50	0.050		(方形)	筒状	P-1が埋積すると推される
	THJ	01-8	SX-804	W45239-42 W45339-42	6.50	3.35	0.050		(方形)	筒状	
113	THJ	01-8	SX-805	W45642	7.20	0.56	0.120		横内形	筒状	
114	THJ	01-8	SX-806	E3542	1.25	0.65	0.100		長方形	筒状	
	THJ	01-8	SX-807	W4642-45 E3542	1.90	0.75	0.150		不明	不明	
113	THJ	01-8	SX-808	W46545	0.64	0.56	0.400		不定形	U字状	
109	THJ	01-8	SX-821	W46548	1.20	1.20			(横内形)	筒状	
	THJ	01-8	SX-824	W46542	1.80	0.40			隅丸長方形	筒状	
	THJ	01-8	SX-825	W46548	3.20	1.20			不明	不明	
112	THJ	01-8	SX-829	W4645-46 W4545-46	3.00	2.60			(方形)	筒状	
	THJ	01-8	SX-829	E3633-39 E3236-39	5.20	2.40			不明	落ち込み	
103	THJ	02-1	11層埋積	C-3	4.50	0.75	0.060	磁罫	直線	筒状	
107	THJ	02-1	SX-03							不明	
102	THJ	02-2	SX-04	B-2~4	6.70	1.15	0.120		不定	不明	遺物なし。遺構番号 50-18 に変更した可能性 中層水田層が認められる時に当たったれども考えられる
176	THJ	02-2	SX-10	B-3	1.82	1.82	0.467		不定	不定	粘土・灰化物の集中埋積 粘土塊出土
110	R4H	03-1	SX-01	E-4~9	3.68	0.85	0.678	自然埋跡	不明	筒状	
	R4H	03-1	SX-02	D-5~7	3.80	1.78	0.421	自然埋跡	不明	筒状	
	R4H	03-1	SX-03	B-2~4	2.27	1.35	0.207		隅丸方形	筒状	遺構で敷設だった。土層が覆れた
	R4H	03-1	SX-04	B-2	1.33	1.30	0.598		不明	筒状	
125	R4H	03-1	SX-05	B-2	1.32	1.05	0.920		隅丸方形	筒状	
	R4H	03-2	SX-06	F-0-7 F-10-8-9 D-10	14.10	7.34	0.274		不定	筒状	SX-03に引かれる。2群構造で隅丸方形の上面に、中央部が隅形に1層埋まる 表を埋はSX-03-D10が表と違ってない 遺物なし。ずらりか埋積
128	R4H	03-2	SX-07	C-5, D-5-8 B-6-7 F-6-8 D-8-9	26.88	6.00	0.400		溝堀	筒状	表裏74cm SX-04に引かれる
134	THJ	04-1	SX-01	D-9	(A-A')X19	38-8'0.25	2.000	埋跡土坑	不定	U字状	1つ1つの石は大きく重さもあるが、流れ込んだとは考えにくい。No.12No.40のような埋積する石が1つの層から落ちしている。この層に埋めたものと推される No.20の土層をNo.1+10の石で積み込んだと推察している。人為的にこのように敷いた可能性も考えられる
	THJ	04-1	SX-02	E-8	(C-C')X19		1.800	埋跡土坑	不定	U字状	No.1+2に埋れ込み。No.4+9+12埋らからNo.5+7を並べ、その上にNo.4を敷いたようで、人為的にこのように敷いたと考えられる。土坑の底部にレンガ層が広がっているが、全体的に広がっている。この層との関係は考えられない
	THJ	04-1	SX-03	D-E-9	(A-A')X29		2.500	埋跡土坑	不定	U字状	No.1の自然埋跡は、大きく重さもありあるので、流れ込んだとは考えにくく、人為的にこの層に敷いたものと考えられる。土坑の側面や底部に磁片・マンガン層の埋積が見られる
202	R4H	04-1	SX-01	D-E-F-9	6.14	3.20	0.135	磁罫	やや直線	筒状	
203	R4H	04-1	SX-02	B-C-8	4.78	0.74	0.187	磁罫	直線	筒状	
202	R4H	04-1	SX-03(北側)	D-6-8, E-4+5 F-1+4	25.88	1.20	0.141	磁罫	不明	不明	
	R4H	04-1	SX-03(南側)	B-10 C-9-10	9.40	1.80	0.138	磁罫	不明	不明	
203	R4H	04-1	SX-04	B-C-9 C-8	3.70	0.48	0.139	磁罫	不明	不明	取水口跡
	R4H	04-1	SX-05	B-C-8	4.70	1.00	0.094	磁罫	直線	筒状	

SXデータ

陣跡	調査区	遺構	グリッド	法量(測定)			種類	平面形状	断面形状	備考
				長径	短径	深さ				
204	R04 04-1	SX-06	E-3				鏡形	遺跡	遺状	数本 ほぼ等間隔で1列に並んでいる
	R04 04-1	SX-07	A-9-10	8.62	0.70	0.065	鏡形	遺跡	遺状	
	R04 04-1	SX-08	B-8, 即C-8	7.72	0.80	0.137	鏡形	遺跡	遺状	
131	R04 04-1	SX-09	F-1-2	0.70	0.40	0.050	鏡形	遺跡	遺状	
206	R04 04-1	SX-11	A-10	0.70	0.40	0.050	鏡形	遺跡	遺状	
208	R04 04-E	SX-01(遺1)	G-H-7	10.88	0.88	0.121	溝	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺2)	G-H-8, H-7	12.06	1.26	0.120	溝	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺3)	H-7-8	5.22	0.30	0.095	溝	不明	不定	
	R04 04-E	SX-01(遺4)	G-I-7	10.20	0.74	0.060	鏡形	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺5)	G-I-8	12.32	3.28	0.068	鏡形	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺6)	G-I-7	11.02	0.36	0.229	溝	遺跡	U字状	溝1→溝より新しい
	R04 04-E	SX-01(遺7)	G-I-8, 即G-I-7	11.16	0.72	0.172	溝	遺跡	遺状	
127	R04 04-E	SX-01(遺8)	G-H-8, 即G-I-8	11.44	0.48	0.122	溝	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺9)	G-I-7	8.48	0.32	1.258	溝	遺跡	遺状	溝4→溝より古い
	R04 04-E	SX-01(遺10)	G-I-7	10.86	0.54	0.242	溝	遺跡	不明	
	R04 04-E	SX-01(遺11)	G-H-8 H-I-7	11.28	0.84	0.203	溝	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺12)	G-I-7	10.44	0.86	0.483	溝	遺跡	不明	溝1→溝より古い
	R04 04-E	SX-01(遺13)	G-I-7	1.84	0.80	0.220	溝	遺跡	遺状	
	R04 04-E	SX-01(遺14)	G-I-7				鏡形	不明	遺状	数1-3-4-8-7-11はSX-01に穿つ可能性
128	R04 04-E	SX-03	C-O-3	2.70	0.54	0.168		不定	遺状	SX-03突露後、真下でS7-06検出 SX-03がS7-06に続く可能性
144	R04 04-E	SX-04	C-O-2	1.89	1.40	0.457	鏡状土坑	不明	遺状	
145	R04 04-E	SX-04	O-2				井戸状	円形	V字状	断面図に描かれたが土層出土 遺物無し
208	R04 05-1-1	SX-01	C-B-0-7	11.80	1.36	0.140	鏡状鏡形	遺跡	遺状	中夜水田跡(決壊) 元々の鏡形の深さは3層あたりまでと思われる 土が鏡形の底に沈み込んで出ている事から鏡状鏡形。鏡形は東向きに並び、鏡状の断面に沿って並んでいる
181	R04 05-1-1	SX-02	A-D-2-3-4				鏡状鏡形	不定	不明	下部ではあるが鏡形の断面と考えると考えられるウレを抽出 1層と2層の境界に古墳の境界の土が出土するので、それ以降の小塚断面と推定される
95	R04 05-1-1	SX-03	D-10, E-F-8 D-F-9	13.26			大鏡形	遺跡	遺状	断面図による大鏡形 1層799-0-2 区(黒20区) に近く、SX-03を境に南東で全面、北が(黒4区)に つながる。
97	R04 05-1-1	小鏡形	D-8-8	7.89	0.75	0.050	鏡形	遺跡	遺状	遺品なし SX-03に穿つ
154	R04 05-1-2	8層小鏡形	C-8	1.43	1.14	0.075	鏡形	V字状	丸	断面図は不良 1層状態は10層状、形状も異なると思われる、本層は 東向きに小鏡形が並んでいると推定される
62	R04 05-1-2	SX-01	B-E-8-7	17.00	5.75			不定	遺状	新北条土層片多量出土
	R04 05-1-2	SX-02	C-O-4	5.75	2.00		鏡状鏡形	不定	遺状	本条はマウンドを有していた。 SX-02 位 SX-01 の流れにより崩壊。
179	R04 05-1-1	SX-01	E-8, F-9	8.64	0.96	0.110	鏡形	遺跡	遺状	
	R04 05-1-1	SX-02	E-F-9	3.62	0.42	0.100	鏡形	遺跡	遺状	
	R04 05-1-1	SX-03	C-5-6, D-5	7.62	0.82	0.000	鏡形	遺跡	遺状	断面と SX-01 に似られる
	R04 05-1-1	SX-04	B-O-3	6.40	0.86	0.100	鏡形	遺跡	遺状	出土遺物は中夜→古代末だが、中夜が主体
214	R04 05-1-2	SX-01	D-7-8, E-8	7.60	(A-9)30.40	0.177		遺跡	遺状	
	R04 05-1-2	SX-02	D-O-1, D-4	18.90	(G-10)30.20	0.202		遺跡	遺状	遺物GX-01 → SX-04を通りつづつ断面をなす可能性あり
	R04 05-1-2	SX-03	B-O-6 C-O-7	12.20	(I-10)20.20	0.147		遺跡	遺状	N-25 → W (SX-03で計測)
	R04 05-1-2	SX-04	A-B-3	2.20	(K-10)30.30	0.096		遺跡	遺状	
	R04 05-1-2	SX-05	B-3-4, C-3	8.80	1.10	0.223		遺跡	丸	断面に4Gに覆って次第に深くなっていく、断面と併せて いよいよ鏡形が深くなっていく
223	R04 06-1	SX-02	D-E-9, F-G-8	11.25	0.78	0.200		遺跡	不明	SX-02→04の下より検出 1枚の鏡形
227	R04 06-1	SX-03	C-2-3, D-3-4	10.34	0.66	0.190		遺跡	丸	南北に走る小鏡形
180	R04 06-1	SX-04	B-C-1, C-O-2	10.80	1.30	0.050		遺跡	環状鏡	
	R04 06-1	SX-05	B-D-4 B-C-5	11.80	1.10	0.050		遺跡	環状鏡	断面に走る小鏡形 断面をなしているとも考えられる 鏡状鏡形の可能性
	R04 06-1	SX-06	C-O-5	10.70	1.30	0.050		遺跡	環状鏡	
228	R04 06-1	SX-08	F-11 G-11-12-13	10.18	1.18	0.163		遺跡	環状鏡	SX-11→14と交わり、水田区画を貫する
	R04 06-1	SX-09	E-F-8, F-G-8	5.20	0.25	0.120		遺跡	遺状	
226	R04 06-1	SX-10	G-13-14 H-9-12	5.80	1.01	0.211		不明	不明	SX-11の直上におけるかに鏡形 北→南に穿つ小塚

SXデータ

探検	調査区	遺構	グリッド	土量 (m ³)			種類	平準形態	断面形状	備考
				長崎	短崎	厚さ				
224	RH4	06-1	SX-11	D-14, H-O-13		1.00	0.211			SX-10層より抽出 SX-08-11+12+14水田跡層を掘る。一帯でSX-11の砂土層と考えられる砂土層。砂土層を掘った層
230	RH4	06-1	SX-12	D-F-9-9	10.84	1.52	0.210			SX-07C: 砂土層か 1層の砂層
224	RH4	06-1	SX-13	F-10	2.18	1.24	0.114			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
	RH4	06-1	SX-14	G-11	4.28	0.88	0.262			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
226	RH4	06-1	SX-15	H-16-17	3.10	0.30	0.050			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
	RH4	06-1	SX-16	D-E-9	4.18	1.24	0.114			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
161	RH4	06-1	SX-17	F-10	2.48	0.80	0.152			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
	RH4	06-1	SX-18	G-H-11-13	13.76	1.44	0.154			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
	RH4	06-1	SX-19	H-O-13-14	4.85	0.75	0.080			SX-08-11+14と交わり水田跡層を掘る
66	RH4	06-1	SX-20	H-O-12	0.50	1.58	0.060			SX-07-11+14と交わり水田跡層を掘る
	RH4	06-1	SX-21	E-F-9-9	5.50	1.36	0.311			SX-02+25条の砂層をなす SX-11は砂土層
	RH4	06-1	SX-22	F-9-9	2.88	1.06	0.228			SX-02+25条の砂層をなす SX-11は砂土層
163	RH4	06-1	SX-23	D-E-9	0.70	1.80	0.320			鉄線土と止め土間に埋った層を掘る
231	RH4	06-1	SX-24							断面のみ SX-19C層と上ありD-10に認められる 砂層を掘る層砂層砂土層を掘っている
68	THU	06-2	SX-01	F-4	0.58	0.18	0.020			不明
232	THU	06-2	SX-04	G-4	2.48	0.52	0.700			不明
238	THU	06-2	SX-30	H-5	1.82	1.14	0.210			横丸長方形
71	THU	06-2	SX-36	D-3-4						不明
	THU	06-2	SX-38	D-E-3	0.74	2.18	0.060			不明
170	THU	06-2	SX-39	F-4						不明
70	THU	06-2	SX-40	J-5	0.28	0.22	0.104			不明
228	THU	07-1	SX-01	C-D-2-3	5.00	4.70	0.190			横円
277	THU	07-1	SX-02	B-3-4	0.50	0.80	0.350			横線
276	THU	07-1	SX-06	B-C-2-5	14.18	0.56	0.250			横線
170	THU	07-2	SX-39	F-4-5	2.18	0.70	0.120			不明
	THU	07-2	SX-42	J-5	0.85	0.47	0.240			不定
263	THU	07-2	SX-43	E-F-3-4	0.80	1.54	0.584			不明
	THU	07-2	SX-44	H-9	2.28	0.66	0.540			不明
224	THU	07-2	SX-45	H-9	0.92	0.70	0.220			横円
	THU	07-2	SX-46	S-9-9	1.54	0.84	1.280			横丸長方形
	THU	07-2	SX-47	H-9-10	0.96	0.72	0.320			横丸長方形
	THU	07-2	SX-48	H-10	0.96	0.70	0.450			横丸長方形
	THU	07-2	SX-49	S-10	(A-A)X0.92	(B-B)X0.88	0.440			方型
	THU	07-2	SX-50	S-10	(A-A)X0.82	0.70	0.240			横円
	THU	07-2	SX-51	S-10	0.82	0.48	0.360			不明
	THU	07-2	SX-52	S-9-10	1.26	0.64	0.470			不明
279	THU	07-2	SX-53	B-9-9-10	1.12	1.64	0.830			横円
	THU	07-2	SX-54	D-3-4	2.18	2.32	0.940			横土層跡
	THU	07-2	SX-55	D-4	1.78	0.88	0.580			不明
	THU	07-2	SX-56	O-D-4-5	4.28	2.40	0.510			横土層跡
	THU	07-2	SX-57	D-4-5	2.42	1.40	0.860			横土層跡
	THU	07-2	SX-58	D-4-5	4.28	2.80	0.340			横土層跡
	THU	07-2	SX-59	O-D-5-8	7.48	4.66	0.930			横土層跡
	THU	07-2	SX-60	B-D-3-3	1.14	2.50	0.900			横土層跡
272	THU	06-1	SX-01	D-E-9-9	2.88	2.80	0.250			不明
	THU	06-1	SX-01	D-E-9-9	2.88	2.80	0.250			不明

第15表 玉名の平城跡 遺物観察表

観測 番号	遺物 番号	出土地点	位置			数量	法量(m)			種類	色澤			加工	備考
			遺物 位置	方位	地上高		口径	底径	高さ		内径	外径	内面		
407	S15 S20	12層	遺物群	円	14.5	7.2	2.8			6/7/1 灰白			石質・角閃石・角閃石		
409	S16	3層	遺物群	円	14.0	9.0	4.3			2.5/6/1 黄灰			角閃石		
409	S16	2層	遺物群	遺物群			(8.0)	4.6~		2.5/6/1 黄灰			角閃石・角閃石		
410	S19	12	単文石	群	4.2		2.8			7.5/9/6/4E 白			角閃石・角閃石		
411	S19	1	土師器	壺	(14.7)		10.8~			7.5/9/7/6E 10/9/2/1 黒			角閃石・角閃石・白 磁器・黒色磁器		
412	S16	2層	所在土層	壺	18.3		16.2~			10/9/6/4E 白			角閃石・角閃石・輝 石・黒色磁器		
413	S16	2層	石質品	磁方	3.45 (磁石)	3.1 (磁石)	0.6 (磁石)	14.2					石質・角閃石・角閃石 黒色磁器・黒色磁器		
414	S19	15~19	所在土層	壺	7.6~		3.4~			10/9/6/4E 白			角閃石・角閃石		
415	S8		所在土層	鉢			8.5~			10/9/6/4E 白			角閃石・角閃石		
416	S1		所在土層	鉢	(19.3)		6.5~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
417	5A-02 P1		土師器	小皿			7.0	1.0~		10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
418	S20	1	遺物群	壺			2.0~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
419	S20	4	土師器	高台付鉢	(12.0)	7.1	5.8			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
420	観測 D-3		瓦葺土層	磁器			5.0~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
421	S20	9	土師器	高台付鉢	(1.0)	6.4	4.4			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
422	表土ハF		遺物群	壺			5.4~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
423	表土ハF		瓦葺土層	火鉢			4.8			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
424	S18	1層	磁器	ハ・磁方	(7.1)	(3.2)	4.7			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
425	S2		磁器	水注			2.6~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
426	S21		遺物群	壺			7.2~			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
427	S11		青磁	壺			6.4			10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
428	表土ハF		陶器	天目茶碗			(4.0)	2.3~		10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
429	S9		青磁製品	(火鉢)	1.3	0.7		3.4		10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
430	S9		青磁製品	(火鉢)	1.2	0.7		1.5		10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		
431	S19		青磁製品	(土師器)	4.4	1.3	0.4	3.1		10/9/7/7E 白			角閃石・角閃石		

第16表 五名の平城跡 遺構子ータ表

棟号	遺構	グリッド	形状		方位	積出しレベル m	身舎面積 ㎡(推定)	貯蔵面積 ㎡(推定)	面積	容積	積	備考
			長さm	幅m								
288	SB-01	E-9	2×2		N-25° - W	18.400			13.44		P3-P3 1.36×2.0 [1.676]	
	SB-02	E-7	1×1		N-1° - E	18.700			7.64		P1-P2 2.7	
	SB-03	E-9	1×3		N-4° - E	18.300	13.72	3.9	18.32		P5-P4 2.7	P1-P2-P4-P5 2.0×2.5×2.5 [2.35]

S19-1

棟号	遺構	グリッド	位置 m(推定)		面積 ㎡(推定)	平面形状	断面形状	備考
			東端	北端				
289	S19	D-10	2.86~	2.24~	0.3			S18とS19は同一遺構

SA-1-1

棟号	遺構	グリッド	長さ m	柱間隔		備考
				全長 m	柱間隔 m(平均値) P-ピット番号	
286	SA-01	D-3	3.7	P1-P3	1.9+1.4 [1.65]	
286	SA-02	D-3-4	13.95	P1-P9	1.8+2.35+1.8+1.85+1.25+1.3+1.8+1.7 [1.87]	
286	SA-03	D-3-4	8.2	P1-P4	2.3+2.2+2.3 [2.45]	
286	SA-04	D-4	4.5	P1-P3	1.8+2.0 [2.075]	
289	SA-04	E-4	3.85	P1-P3	1.3+1.15 [1.225]	
289	SA-06	C-6-10	5.6	P1-P3	1.3+1.15 [1.225]	
286	SA-07	D-4	8.3	P1-P4	1.25+1.27+2.1 [2.55]	

	食用・薬用	その他	備考	
木	ウルシ属	漢方では乾燥皮、浸出液、煎液、油、樹脂などに使用する	ウルシ属中に揮発性毒物のウルシオールを含有し、アレルギー性皮膚炎を起こす恐れると考えがで、過敏な人は樹の樹液を塗っただけでも症状があらわすことがある	ウルシ科 ウルシ属
	モチノキ属		皮を削いでぶどうに磨ける 冬になると引き上げると、木で叩くとヤニを引くようになる 水溜りしてガスが溜るとヤニ(臭)ができる ヤニモチでメジロの羽根を枯らした	モチノキ科 モチノキ属
	ブドウ属			ブドウ科 ブドウ属
	ノボドウ属	目を患うと、ノボドウの葉から汁を取って目を洗う 種皮の湯を切った殻の中に強い殺菌力を収めた ノボドウの葉を食べると死ぬ	赤痢が流行ると関係して、家の周りにノボドウを植えておいて置いた ノボドウは六月一日に祭典を弘むために家の入口、玄関に植える ノボドウの葉を竹筒の裏にこすりつける	ブドウ科 ノボドウ属
	ウコギ科	根を細かく食べる 根は刺になる	根にすると刺が刺れるようなヤニ(ヤニ)がする	ウコギ科
本	ミズキ属	鳥が好んで食べる	ミズキは良い水ではないが響きを作る 季節に響く ミズキの花時にアワダシを響き、響き場所の水を切り捨てる	ミズキ科 ミズキ属 ミズキ
	ツツジ科		牧場のあるところには群生している 有毒などで牛などは食べない	ツツジ科 ツツジ科
	カキ属	肉や根茎、血割き、おゆめには、漬物の葉を絞って水で洗って食用になる 高血圧にはカキの葉を日干しにして煎じて飲むと良い		カキ科 カキ属
	ハイノキ属		ハイノキ(イノコシ)の雪の日に、イノコシを積み上げると、イノシシの子がシノの中にもぐって来る シノから遺尿が上がる前を殺菌して撃つ 山で牛を調子弄す等事で体毛はハイノキの皮に塗る下す	ハイノキ科 ハイノキ属
	イボタノキ属	いぼ、おでき、鼻の前には、イボの根に赤を塗る イボタノキを塗る		モクセイ科 イボタノキ属
トネリコ属		昭和40年代にシノ科材木として出資した	モクセイ科 トネリコ属	
花	スイカズラ属	葉を乾燥させてお茶として飲む(吾冬茶) 肉や根茎には、地下茎を煎じて食用になる 打撲、発熱には、乾燥させて煎じた汁を患部に塗る 花を日干しにして煎じて飲むと解熱効果がある	スイカズラが、夜になるとスイカズラの中で眠ることから、スイカズラと言われる	スイカズラ科 センダン属
	センダン属	セトウは熟したセンダンの葉を好んで食べる	牛が葉を食うと嘔吐になるから牛の運動場には植えない センダンは死者の啼き声聞いてくるというので墓場には植えられる 女の子が生まれたら、嫁入りたんずを作るためにセンダンを植える	センダン科 センダン属
	イチノ科 - イスギヤ科 - ヒノキ科		アスナロ、サワラの無い地方ではヒノキを置かざる	
	ヤドリギ属		ヤドリギはランブにすがる科の木を寄生している ヤドリギは「いらぬものが付いた」という意味で出る ヤドリギの小さい葉を煮すとヤニモチが入っている これをトリモチに混ぜるとよくなる	ヤドリギ科 ヤドリギ属
	グミ属	山で茶を煮す時グミの葉を火に当てている グミの葉は薬効効果が良い 熟したものは甘い、多少渋みがある	グミを煮ると内臓に熱と腹方のたしを響かせる	グミ科 グミ属
粉	ガマズミ属	根茎のアクを煮くりに、この葉を入れる 葉が黒いとうまい 葉を煮たら食べれる	この水は染みから、取り回しがあり響くことも感らない	スイカズラ科 ガマズミ属
	トウモロコシ属			マツ科 トウモロコシ属
	イヌノキ属	中葉の葉になる	木は割れ難いのももたきたきりに使う 小枝を煮たの下に(巻き)は入れる 百本にはサルココクがたつ イヌノキは病気に強い 風に強いのでミズキの周りに植えて保護する	マンサク科 イヌノキ属
	コササギ属	根を煮た時、これを煮て行けると、ばい菌が入らずに済む ブドウ科に良いので、種に付けておくといふ 根は赤くない	葉をすくササギ(根)の丸い時を作る 軽く煮くると出る	ミズキ科 コササギ属
	カエデ属			カエデ科 カエデ属

		食用・薬用	その他	備考
木	トチノ木	トチ餅にして食べられる	葉葉は餅を蒸したような形で4センチほど熱すと3つに割れ、中からクワのようにいい、赤褐色で先尖のある葉ができる	トチノ木 トチノ木
	エゴノ木		葉葉には有毒成分がある葉をたたいて用に入れると虫が嫌われ、しびれずると薬にするワスという毒を抜く時の天狗餅を作る葉を水につけて洗むと毒が出るからセッケンというこの木でコマを作ったシラヌのはじきに使うシヤボに互定びにも使う材は良質で、舟紐、荷裏の物、コケンなどに使われている石鹸の代用として洗濯に使ったりした	エゴノ木 エゴノ木
木	ニフトコ	根葉にはニフトコの新葉を少し食べると臭い普通の人には食べると下痢をするニフトコの葉葉を蒸らして餅につく腫れ物に効ると良くなる	田舎人が餅むと、餅を詰りしした物を蒸籠に入れて湯かし、餅い終わった後カマスを蒸籠につけておけるこの蒸籠に浸かって体の痛みや疲労を癒した小枝で小鳥籠の止まり木を作ると小鳥が良く鳴る	スィカズラ科 ニフトコ
	ノグス			クルミ科 ノグス
木	フウ			マンサク科 フウ
	ジャケツヅイ	葉の中にいるテッポウムシはおがくずの際にお湯を入れると顔を出す顔を開いて引き出し、使いて煮る、歯磨の粉によい薬にする魚はカシの薬になる	ジャケツヅイは葉の上向き、下向きに割があるから両向きも飛ぶ鳥もこれにかかると逃げられないという	マメ科 ジャケツヅイ科 ジャケツヅイ
木	ツツ	山で水がおいしいときはこのカズラの木を煎んだツツカズラの葉は煎製すれば神薬に良い	ツツカズラは木の鼻ぐりに良い煎製が良い	フドウ科 ツツ
	モモ	葉の葉を煮て餅に煮ると痛みが治る葉の葉を煮た汁を湯に入ると汗疹の薬になる葉の葉は腫瘍葉の汁を、ほやりに湯とすと治る	「腫瘍のモモの木も時が来れば花咲くと人は虫みよしも選れた昔も時効薬すれば虫身共に毒するものである」といふことモモの葉は時が来ればスィカの毒を	バラ科 モモ 葉 モモ
花	クスノキ			クスノキ科 ニッケイ属 クスノキ
	ハクウンボク		花は白長い花冠から多くの花が筒状につり下がって咲く	エゴノ木科 エゴノ木属 ハクウンボク
花	スモモ		スモモが二度咲けば咲いて大葉が開く	バラ科 サウラ属 スモモ
	チャンセンモド		下駄を作る飲酒者は駄目水分に強いから腹割のわたりにはよい	ウルシ科 チャンセンモド科 チャンセンモド
粉	オニグルミ		シログルミは葉がなつて食べる方に使われ、アグルミはサワグルミのことを言っている	クルミ科 クルミ属 オニグルミ
	ムクロジ	葉を七割りり食べる	葉を石練の代わりにして手洗いをしたムクロジは煎山に多い小鳥や虫を殺して料理するときにはムクロジの葉を湯で煮て置いた鳥の羽をムクロジの葉に煎し、羽子ねを作った	ムクロジ科 ムクロジ
粉	ツツラフジ		ツツラフジを作るの葉は山師の必需品を入れて山仕事に行く	ツツラフジ科 ツツラフジ
	キカラスウリ	餅を蒸して卵がいてたべるとおいしい餅に果汁を入れて三日炊飯、そしてそのまま食べる(モモジカラスウリ)	餅を蒸して煮し、デンプンを取るインゲンが好んで食べる(モモジカラスウリ)	ウリ科 キカラスウリ モモジカラスウリ
粉	ガマ	結実から取れる淀粉は澱粉と呼ばれ、東方薬として用いられ止血や利尿に効果がある解毒や、餅のでん粉は食用にもなる	葉や茎(ルブや心しろの材料に、種はたばこ布の芯に、種は生け花の材料にされる)	ガマ科 ガマ
	サジオモダカ			オモダカ科 サジオモダカ
粉	オモダカ		葉のへりや水田などに生える枝こいりになると油中に葉が伸びて、その葉に小さい平がで、夏場にこの平から新芽が出る	オモダカ科 オモダカ
	クロモ			トチカガ科 クロモ
粉	イネ		中田半夏田植えは8月20日、夏まきは七月二十日頃が良い水稲は水田に作り野稲は畑に作る	イネ科 イネ
	他のイネ科			

	食用・薬用	その他	備考	
草	カヤツリグサ科		この草でマスができると特長になる 出来ないと乾燥になる 証拠を作って遊ぶ	カヤツリグサ科 カヤツリグサ属 カヤツリグサ
	イボクサ属			ツルクサ科 イボクサ属
	ヒズアオイ属		この植物は現在絶滅している	ヒズアオイ科 ヒズアオイ属 ヒズアオイ
	クワ科	森の木の蔭で飲むと中風にかからない	森の木を飲むと毒が強い 雷で仕事ができない時、しほいで毒を作る 葉を湯に通せると毒消ししない 中風の薬を作る クワ科で木魚を作る	クワ科 クワ
	ギンギン属	葉の裏からぞいでいる新芽をナイフで切り取り、湯で食べる たむしができた、ギンギンの根を掘り出して粘る 根葉類、根の断面にも臭い 根をすり潰して乾かると臭みが良くなるという しらべもできた、これをすり潰してつけると出る	根葉の裏辺などの置った土地に、群生する	クワ科 ギンギン
	サナエダ属-ウナギツカ属		トゲがあることからオニと書かれる	クワ科 イスダケ属 ダケ科 イスダケ属 ウナギツカ属
	ソバ属	ソバの花は蜜蝋の餌である	ソバ餅く時に水汲みする人や水筒持った人に会う ソバは水を練う ソバ餅餅等はソバの茎通りに切る 葉が枯れたら焼き、火の通えるのを待って焼く ダラの白花の種がソバの葉を噛 食飲木の花が咲いたらソバを焼く	クワ科 ソバ属
	アカザ科	味噌、醤油で汚して食べる ゆがいて味噌和えして食べる 魚刺されには、生葉をよくもんで付けると効果がある	社の根にする アカザの根をつくと中風に罹らない 道端から根、荒地などに自生している	アカザ科 アカザ
	ナデシコ科		海岸から高山に亘るまで多くの種類が分布している	ナデシコ科 ナデシコ属
	キンボウグ属			
	キンボウグ科		これらの仲間にはほとんどが有毒植物である 植物の果汁は、皮膚につけると赤く腫れ、のちに水疱ができる 毒性があるため、牛馬が食べないように細心の注意を要して草を刈った	キンボウグ目 キンボウグ科
	アブラナ科	原始時代には根で作って食から油を取った	昭和20年代には根の花の根が魚道に広まり、タビの根が根を付けても地面に落ちないほどに茂った	フウチョウ目 アブラナ科
	マメ科			マメ科
	粉	カタバシ属	ウサギの糞科に使う 尿を口に含んでおいてつぶった 葉を揉んで、虫歯の痛む所に貼っておくと治る 粉にしたものを煎じた汁は痔瘻薬につけるとよい しらべ(別に、カタバシを湯で飲んでつけるとよい	色出しに使うと赤色が濃くなる サヤに触れると葉がはげけるので子供の恰好の遊びになる 葉の形から、蜜蝋の「カタバシ」がつくられた
ミノハギ属			昔から水神様の用に使われていた 根皮におおる ミノハギの花が咲いたら蜜蝋蜂が採る ミノハギの花は二度咲いて三度咲く	ミノハギ科 ミノハギ属
キンギョサ属				ミノハギ科 キンギョサ属
ヒシ属			ヒシは危険だからこの草で遊ぶでいいけない	ヒシ科 ヒシ属
セリ科		岩岸を山道、食用にする 根にも効果がある 葉をすり潰して虫刺されの毒を飲むと解毒効果がある 草の七草の一つである	セリはネトトリスが強いから煮ると黒くならない	セリ科
ネナシカズラ属				ヒルガオ科 ネナシカズラ属 ネナシカズラ
キツネノマゴ属				キツネノマゴ科 キツネノマゴ属
オキナエシ属			根の断面の一つで、日月星やお猿の顔が 映えらる 葉は割になると茎端は花で黄色い色になった	オキナエシ科 オキナエシ属
ヨモギ属		ヨモギをハチに刺された時につけるとよい 飲用すれば血圧低下になる すり潰した葉は葉をもんで付けると虫が止まる ヨモギを湯で洗い乾燥して葉が乾いたら湯に入れて食べる	畑地や空き地、道端など、いたるところに生えていて、都市部の町中にも見られる	キク科 キク属 ヨモギ属
オナモミ属				キク科 キク属 オナモミ属
キク科			キク目 キク科 キク属	

	食用	その他	備考	
草	クシボク草属	クシボクは開花期に採集して、天日干し、煎じ服用すれば身毒剤となる クシボクの根は乾かして焼き、粉に漬してコーヒーマシで飲む クシボクの根は開花期に採集して香が痛む時煎じて飲む	クシボクはスズメノテグサのように密着草属のように香く	クシボク クシボク セイヨククシボク
	アカハゲ属-ミズユキノシタ属			アカハゲ属 アカハゲ属 アカハゲ科 ミズユキノシタ属
	スズラ属			トチカガミ科 スズラ属
	ミスオオハコ属			ミスオオハコ属 ミスオオハコ トチカガミ
	ハコ科			ハコ科
本	シソ科	シソは晩干しの着色剤として使う 傷病の葉を噛みしめていると冷る シソは身汗、傷病薬として使った 葉を晩干して粉末にして用いた 硝磺薬として 薬業を駆逐する アオシロ葉を傷病につけて飲むと絆創傷に効がある 刺身を食べた後はシソの葉を食べると食あたりしない	アオシロは葉が赤紫色をいり、アオシロ、シロジ は緑色をしたものをいり	シソ科 シソ
	オオハコ属	オオハコの全草を「ぬいち」の抽出しに使用する すれば止めめに良い	糖で目を興奮させて目に入ったゴミを掃除	オオハコ科 オオハコ
花	カラマツノ属	鮮やかな青い、山菜として利用される 若芽や全草した葉の先端、つぼみを手で折れる ところから湯み取り、軽く蒸してからだしやあん 粉にする つぼみは薄い衣で天ぷらにしてもよい	本州中部から北の高山の、やや湿った草原に 生えている 全体的に粉白色をしていて、葉はよく裂出して 風立し、高さ80センチほどになる 7~8月頃になると、先端に花弁がなくなり、長い 穂が目立つ白い花を付ける	マツ科 カラマツ
	ヒヨウタン属			ウラボシ科 ヒヨウタン属
	クダマ属	血崩されやかゆみには、生の葉を少量の塩で 揉み、患部に塗る	ヤナギダマをカシノ科で和名水溜りにいれて 魚を捕った ヤナギダマを焼いていれてシブがやをいり、油 をそそぎ、しぶがやアオシロが年を作る	クダマ属
	ジュズダマ属	根の節らんだ所を薬強壮剤に使われる	牛が喜んで食べる 馬手薬に入れる	イネ目 イネ科 ジュズダマ属
	タケ草属ネザサ属		ササの葉をジネの葉と同じ ササの葉がなると ネズミが増え飼育になる	イネ科 タケ草属ネザサ属
粉	ヨシ属	ヨシガサを切って湯き水でモヤシ漬けをした	ヨシガサが腐るときは湯水(みずみず)がでる ヨシの葉を取り外して豆腐を作ったり、ネズノ葉に 包み打る 葉の端るときはヨシを乾かしてすばすと落ちない	イネ科 ヨシ属
	ウツクサ属コブナグサ属			ウツクサ属 コブナグサ属
	ウツクサ属ススキ属	トキワの若い穂を食う ススキの穂を晩干して半穂不潔に煎じて飲む ススキの穂を灰汁の中には一日入れて取り出 して干して、食用すると喉小室によい	トキワススキは自然のしを編む 草束束の材料にする 穂がぬれたときに葉が厚みで乾いた そのために、草を乾燥ごとに出てくる場所(内 有地、茅場)があった	ウツクサ属ススキ属
	イチゴツナギ草属			イネ科 イチゴツナギ ミノイチゴツナギ
	ネザサ属型 クマザサ属型 サヤスガ草属 シバ属 キビ属		ササの葉がなるとネズミが増え飼育になる 正月はこの草を門前に飾る	イネ科 ネザサ イネ科 クマザサ イネ科 サヤスガ草属 イネ科 シバ コウライシバ イネ科 キビ
シダ	ヒカゲノカズラ属		ヒカゲノカズラ(サルノハクサ)は正月の飾るとも に飾る 焼酎にばり作るとき、サルノコシカケのある 所は塩を入らる ヒカゲノカズラ(キノコノゴザ)のでも用にはヒ ノキを編める ヒカゲノカズラ(サルノコシカケ)のある所は焼 きでスギを編んでもよらん	ヒカゲノカズラ科 ヒカゲノカズラ
	ゼンマイ属	管理が聞いたオトコゼンマイは食べないが、ま だ知らないオナゼンマイを食べる 若芽を食用にする	管、穂を取って糸で編めて穂を作った 管は穂を染めて毒(ゼンマイブシ)を作った 編で穂を染める	ゼンマイ科 ゼンマイ
	イノモトノ属	打ち身で覆れる、あるいは痛み止めがない時、 この草を湯煎にした粉末と黒砂糖を入れ、水 を少し加えてどろどろしたのを餅に蒸べて乾		イノモトノ科 イノモトノ
	ミズワラビ属 サンショウモ アカウキ草属			ウラボシ科 ミズワラビ属 サンショウモ科 サンショウモ属 アカウキ草科 アカウキ草属

(参考文献)

乙益正隆 1998 「熊本県植物方言と民俗」
齊藤文治 1988 「身近な山野草のすべて」

第Ⅶ章 総括

第Ⅰ節 遺物

(1) 土器

玉名平野条里跡・両辺間日渡遺跡は一部を除き、生業である水田層である。そもそも水田は生産地であって生活居住区でないため遺物の存在は極端に少ないが、氾濫等による流れ込みも多く、時代の特定は困難を極めた。時代によっては幾度も水田構築を行っており、これを体系的に俯瞰するのは整合性の課題がいつも付きまとった。よって中世・古代・古墳・弥生・縄文と大別せざるを得なかった。以上の条件から時期を特定できる遺物は稀で、井戸・土坑・土壇など条件に恵まれないと出土はなかった。この状況でミニチュア土器の出土は注目すべきことで、これは祭祀使用されたと思われ、民俗例から「川祭り」・「水口祭」等に使用されたものか、また彩色土器片も同様の意味をもつものだろう。最古となるのは(第41図)阿高式土器を伴う土坑(06-1区ST-01)で、これまで無遺物層と考えていた最下層の青灰色層に注目したが、浅い掘り込みであったために本来は検出層上からの可能性も否定できない。

(2) 金属器(第291図)

№432の雁又鎌などは武器であり水田とは関係が薄く、流れ込み遺物であるため近因に關する他の性格を持つ遺跡の存在を窺わせる。№433・№434・№435は馬具で、これらは農耕に馬を使用したのではなく武士団使用のものか、02-II区の東側玉陵中学校付近は「馬場」との微小地名としてある。またこれら武士団所持として小柄(№443)・(№442)・鎌(№444)・頭金(№445)などが挙げられる。№438・№439・№440・№441の喫煙具は近世以降の産物であろう。水田作業の合間に一服といったところであろうか。また小女子と思われる簪(№447)は髷の陰刻があることから小動物を模したものであろう。

(3) 銅銭(第292図)

唐から近世まで出土した。何れも遺構には伴わないが地鎮に使用されたか。また意図的に破銭(№454)されたものも儀礼等に関するものか。顛例を待ちたい。宋銭が大半を占めているため中世期と銅銭の関係が存在しうるのである。「近世の銅銭『寛永通宝』は鑄造時期と鑄造地により書風・材質・形状などに微妙な変化があり、江戸と近江坂本に鑄造開始以来、幾度の中断はあるものの幕末まで『寛永通宝』と同じ銭文の銭を全国各地で鑄造した。そのため各地にて多種多様な『寛永通宝』が存在することになった。」(日本出土銭総覽)

近世銅銭の総数は調査面積に対し少数であるが、水田生業作業に貨幣を持参することはないため調査においては拾得物という扱いか、または地鎮などの儀礼に伴うものか。

(4) 種実(第300・301図)

ここでは遺跡から多く出土した桃種を調査区に点描した。04-II区に集中し特に古墳・中世が顕著である。半屋田の土壌に桃の栽培を試みたくは考えにくく、儀礼に伴うものであろうか。「桃には邪気を払う力を持つ霊木とされ、実が多く成り花や葉の旺盛なさまから生命力を持つ根源として魔除けの力がある」と考えられている。また愛知県稲沢市尾張大國堂神社の夜^よ籠^{かご}追^お神事では、厄年の神男を追い払うの際に、神職が

参列者に桃と柳の枝のつぶてを投げつけるという（日本民俗大辞典 2000）事例報告がある。この類例から水田の生産を高める願いが存在したか、重量の課題はあるが鳥払いの使用であろうか、今後も注意したい。また 05- I -1・2 区出土は同定を委託した。その結果は裸子植物 1 分類群と被子植物 16 分類と大別され、栽培種はスモモの核 3・モモの核 68・ヒョウタン類の種子が 1 計 72 個である。（第Ⅴ章 自然科学分析 種実）

また本遺跡から検出された花粉については、「科学分析・プラントオバールにおける草木参考」（表 17）に記載した。植物は食糧としての対象でもあるが現在の食ではその機会が少なくなった。本遺跡からの花粉分析と「熊本県植物方言」クリについてもその保存方法など興味深い。また薬草としての使用も多く、この様な事は永年の中で生み出されたのであろう。

以上のことは民俗例であるため、本遺跡との直接的な関係は微妙であるが参考として提示した。年間の調査地で四季を感じ多少疑問に思うのは、本遺跡は水田を主とする生活形態であるが、本来は農閑期等の食糧状況まで考慮しなければ暮らしの概念が想定できなかったからである。一助として。

(5) 木器

① 竈代（第 147 図 No. 137）

本遺跡から 1 点の出土例（04- II 区 ST-06）がある。2 種類の編み方で構成され底部と側部に大別できそうである。廃棄物の断片資料であるが通称「籠」であろう。中身の対象物も存在しなかったためその用途は不明であるが、二本超え・二本帯・一本送が強固なためこれが底部に相当し、出土状態は反転している状況であろう。底部が緩やかな U 字型を呈しているため背負い籠・手籠等に該当するか。何れにせよ大型の籠ではない。

樹種同定

イネ科タケ亜科 (Subfam. Bambusoideae)

横断面は採取出来なかった。放射断面、接射断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が導管方向に配列している。タケ亜科は熱帯から温暖、一部温帯に分布する。（吉田生物研究所）

② 杭

本遺跡では半湿田という土壌のため、軟形成・水路の確保のため多くの杭が使用され、出土した。材質はクリ材が大半を占め、一部、サイカチ（第 12 表 木製品観察表 No. 22）も存在した。

杭は山林に入り当地にて杭を製し、水田に運び込むと考えるのが自然であろう。従ってその長さを含めたサイズは一定の規格性を持ち、また腐敗を防ぐため炭化も行われていた。杭にクリ材を多く使用していることは近隣にクリ林が存在していたことを窺わせ、またこれは重要な食生である。クリ果実保存については第Ⅵ章 植生を参照とされたい。

③ 鋤

本遺跡でも破片であるが 3 点の農具（鋤・第 12 表 木製品観察表 No. 18・19・97）が出土した。05- I -1 区 SX-3・03- II 区 SX-07 での鋤片はこの時期に伴うもので、その規格に明確な規格性は見出せない。

これは時期差の課題ではなく使用目的によるものであろう。民具例の端にも多くの種類が存在し、これらはその土地の土壌・使用目的により多種多様である。この弥生期に多種多様なまでの端の存在についての肯定は困難であるが、あえて農工具の変遷を行うならば土壌・使用目的・圃墾などの諸条件を考慮に入れなければならない。

④ 木槌

07-Ⅱ区 7b層検出のSX-43(第283図)については第四章 第7節 不明 で述べた。槌として使用されたことが想定されるが、出土層と科学分析の年代測定科学分析の結果(放射性炭素年代測定の結果は2,980±40年)により検出時より時期が遡る可能性が出てきた。第四章 第4章 時期不明 で述べたように時期・使用目的についても今後の課題を残した結果になった。

(6) 投石(第294～299図)

弥生期・古墳期・中世期の調査で出土した。当初はこの丸石の存在に疑問を持ったが、流れ込みの小石としての認識しかなかった。これが顕著であるため取り上げ、保管しておいた。後日、山崎純男専門調査員のご教示より鳥払いの「投石」と判明した次第である。

材質の殆どは安山岩で河原より収集したものであろう。総数2,597点中、20～30gが最も多く、これは人が投げやすい重量である。調査区より採集したこの投石であるが、農事暦からは次の稲作準備に入るためにはこの投石は取り除かなければ田起こし等に不具合が生じるが、調査では原位置を保った状態の出土である。このことは休耕田と放棄地などの課題を提示する。

(7) 土鍾(第293図)

断片的に出土した。全長4～5cm・幅1cmのD類が最も多く、また土鍾の計算式(久保楨子 1997)に当てはめると、菊池川などの川漁で使用された刺網等の小規模漁業の可能性が高く、また制作は粘土塊を棒状の芯部に絡ませ形成後、焼成の過程となる簡易な制作法で行われる。本遺跡出土土鍾は形成時の螺旋状のナゲ痕まで観察できる。この土鍾は現代の漁具としても殆ど形態を変えず、熊本県南部では「イワ」と呼称し、市販・使用されている。作成・使用状態からの掲載をした。またこの掲載状態で人の動きも想像できる。

(8) 勾玉(No.395)

08-Ⅰ区 4・5層調査区出土遺物である。近世から中世層にかけての包含層である。この勾玉については大坪志子専門調査員の見解は以下のとおり。

「やや縦長の勾玉状で頭部に刻みが入り、角(突起)が一本生えたような形態である。厚みがなく薄い板状の石材を加工しており、縄文時代後晩期の玉類に見られる形状。表裏面ともに割合平滑であるが研磨の痕跡が残り、腹部側・背部側面には粗砥の状痕と陵が残る。仕上げの研磨の直前の段階か。

右図の面の孔周縁は玉ずれたかのように陵がとれて凹み、右図の孔は陵が残る使用した状態でない。また穿孔は両側から行い回転痕が明瞭に残り、石材は薄緑色から緑色で、キラキラした細かい粒子が入り、

オレンジ色の粒、柄が僅かに入る。クロム白雲母と思われ、その中では青味がやや強い。」

蛍光分析の結果；クロム白雲母（福岡市埋蔵文化財センター）

(9) 足跡・他

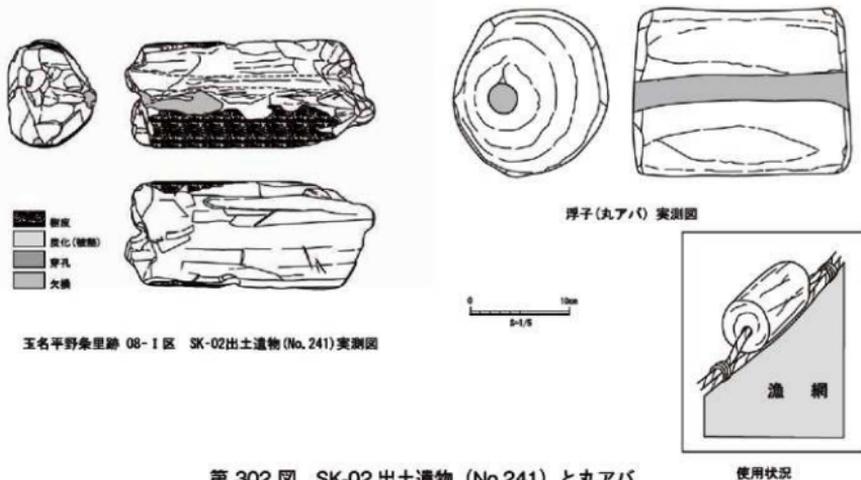
本遺跡では調査区に多くの足跡が検出された。これは遺構であり、また遺物とも言える。05-I区の足跡は全て実測し、その中の数点は石膏取りも行った。足跡には大小があり明らかに水田には明らかに子どもが存在があった。水田作業の労働形態を窺い知ることも可能であったが、その余力は稲集者ではなく、今後の機会を得たい。本来、水田の足跡は耕作深度に影響するため、これにより農耕具・土壌などの関係も考慮できよう。

08-I区 ST-03 出土の遺物は籾の羽口 (No. 361) で、これにより製鉄の断片資料であるが、製鉄が行われていたことを示唆する。鎌、金属製徳摘み具などの製作が行われていた可能性があるが、本遺跡から農耕具の出土はなかった。

使用不明木器

08-I区 SK-03 No. 241 と「丸アバ」(第302図)

整理時にSK-03 No. 241の木製品に孔が穿ってあるのに気付いた。木製品の風化は著しく孔が自然か人為に穿ったが判断が困難であり、またこの材質は樟である。この形態に酷似する民具として漁網の桐材浮子の「丸アバ」を提示した。この「丸アバ」は現在ではプラスチック製に素材変化レバンドルと呼称し市販・使用されている。



王名平野桑里跡 08-I区 SK-02出土遺物 (No. 241)実測図

第302図 SK-02出土遺物 (No.241)と丸アバ

使用状況

第2節 結 言

本遺跡は主に水田遺構であった。玉名平野の南北に細長くトレンチを設定したような調査であり、各時期の水田の検出に努めた。水田調査については各調査区にトレンチを設定し、分層にて水田層を確認した。

層位によっては数センチ単位で変化した。これは氾濫等による土砂の堆積によるものであり、これに耕作のための攪拌が加わる水田形成における一つの特徴があった（第3図 水田耕作概念図及び疑似畦畔概念図）。水田は灌水・停滞水（地下水）の作用によって、土壌が常に変化し畑地とは異なった特有の土壌状態であり、時代特定にも困難を呈し、洪水等で土積された埋土であるため層の上位・下位に注意を払い埋土中の遺物のピークを判断材料とした。

このような形成と粘質を含むため、水田には関係し薄い粘土採掘坑（07-V区 第278図）と想定されるなど粘質土を利用した痕跡も土壌性質を考える上で興味深い。

1 本遺跡の調査法

本遺跡は生産地である水田が主であったが、これまで述べてきたように幾層にも分層され、この状態で当初は水田層の把握が困難であった。トレンチにて断面観察を行い、床土と酸化土のセット関係が良好な条件で残されていればその可能性が高く、実際の調査時において平面・断面にて稲株痕や畦畔に恵まれると水田判定できるという調査法であった。しかし大半は「第Ⅲ章 第2節 基本土層 4 本遺跡における水田形成概略」で述べたように削平・氾濫などを受け良好な条件での検出は少なかったし、またどの層で水田が行われていたのか明確な確証が得られないまま調査を開始した。調査時に科学分析を依頼し花粉分量で水田耕作層を得られたことから、調査は以下の方法を採用した。

- (1) 調査区の開始時に先行トレンチを設定し分層を行い、これに科学分析を委託する。
- (2) 分析結果を受け、イネ花粉の多量な層を水田として想定し、この調査層のポイントとする。

これまでの調査方法はやや異なり、自然科学分析を取り入れたことで調査が明確化したことは今後の水田調査の一つの方法としてここに提示しておきたい。

2 水田としての認識

本遺跡における水田としての条件は以下のように設定した。

- (1) 畝の検出
- (2) 酸化土・耕作土がセットであること

これが最大の条件であるが、このような事例は稀であり、特に削平された畝は平面では検出が困難であるため、断面分層にて畝の存在の確認も行った。

水田と湿地との区別は困難で、したがって畝等の水田関連遺構の検出に依るところが多い。

前述した「第3図 水田耕作概念図及び疑似畦畔概念図」の耕作土と酸化土のセット関係を提示したが、これに加筆すると耕作土（床土）は攪拌が顕著に見られる。水田という遺構は堆積と耕作の繰り返してあるため作土・酸化土がセットではなく、それぞれが単体で検出される場合もあった。また「投石」は鳥害対策であり、稲穂の実る頃はスズメ、田植え直後は白鷺が土中の虫を啄むため苗を倒すという。

さらに科学分析がこれを補強した。「1m四方にイネの花粉が5,000個/g程度存在すると、水田稲作が行

われたと推定される。」(杉山 2000 年)と提示されている。また水田はイネ植生だけでなく、水田雑草の花粉検出を伴うことでさらに補強材料となる。本遺跡で検出された主な水田雑草は以下の通り。

草本類

- | | |
|---------------|----------------------------------|
| ・カヤツリグサ科 | 水辺に生育し畦畔の際に生えていることが多い。水田に伴って生育 |
| ・イボクサ属・ミズアオイ属 | 水生植物 |
| ・ミズワラビ属 | 水生植物 |
| ・ヒシ属・モ属 | ある程度の水深のある場所に生育 |
| ・ガマ属・オモダカ属 | 水際、岸部に生育 |
| ・オオバコ | 「人里植物」と呼ばれるもので、開けた明るい場所を好む。集落の縁に |

植生

本木類

- ・ハンノキ属・クルミ属・サワクルミ属・ヤナギ属

水辺に好んで生育。特にクルミ属・サワクルミ属は台地や山の筋、崖のヘリ等 水のある場所を好む。

などが挙げられる。また、

「05- I-1 区の弥生期の水田は湿地帯であったと考えられるため、もともと水生植物が生育していると思われるが、人の手が入る事によって植生のバランスが崩れるという。耕作をしていない時期に元の状態に戻ろうとし、耕作するとバランスが崩れるという繰り返して、水田の中に限れば生育に限りが出る。」(バリノ・サーヴェイ 辻本 崇夫 氏)との貴重な教示も頂いた。

また断面観察にて稲株と想定した縦長のシルト性の細長で湾曲ピットの痕跡が調査区によっては見られた。これは蟹などが土中に生育した痕跡で「生痕」と呼ばれるものである。これらも湿地帯での現象であり参考とされたい。

3 弥生後期後半の水田概念 (第 304 図)

参考として、玉名地域の農事暦を提示した (第 303 図)。これは玉名市史の記述を図化したものである。この民俗事例が弥生期に相当するとは考えてはいないが、水田耕作には様々な作業が伴い、またこれに季節・儀礼が関与してくることを提示した。本遺跡での水田には水口が確認され (第 57 図)、水口は水田で水管理の重要な地点で、参考として天草の水口祭風景を掲載した (Ph. 10)。自然相手の生産には 願い があるため本遺跡での彩色土器などはこれに関与していると思われる。

大畦畔 (05- I-1 区 SX-03) を中心として 05-1-1・2 区を構成してみると、前述した大畦畔 (第 55 図) が水田と水供給地の境の機能を持つならば、北側の 05- I-2 区は花粉分析の結果より、ガマ属・サジオモダカ属・スプタ属・クロモ属等や比較的水深の深い場所に生育するヒシ属の水湿地生植物が検出されていることから沼地等の存在が想定され、それは溜井としての機能を有し、大畦畔の水口を通過し水田に水を潤すのであろう。地形測量からも北方から南方への下方傾斜である。

またこれに両辺間日渡遺跡 1 (亀田 2012) の覆層検出面を加えたのが第 306 図である。本遺跡で検出された大畦畔は北西軸に連続しているため、この大畦畔はこの時期の重要な位置を占めよう。大畦畔の存在は水田の存在を意味し、大規模な水田を構築したことが窺える。

※玉名市史より

農事暦（玉名）



種播
カマヤス機に入れて二ツ（土間）の間に後背
運送の方法として、種を背負って田に置く前に
運水に連れて浮き上がって種を播きまくるやり方がある
この方法は昭和になって普及

苗代
水の便のよい、なるべく遠くに開いた水田の一部を選んで
設けていた苗代田は固定
苗代の多いところは、常に苗代を作ることもあり

雨水
田舎側あたりは、川に近いかも関わらずその川水を
利用できなかったそれで石瓦から水をもらっていた

種刈り
刈り取った後三日間は天日で乾燥

犁で地を突きかえす
草刈・草取り後
水を溜めて乾燥で焼く
次は稲蒔き前に畑に
代掻きした後、苗を立立て、
ナラシタで表層を整えた後、播種

半夏至 豊作祈願
南をカマドに供える

春秋の彼岸 豊作祈願（北牟田）
秋の彼岸 豊作祈願・彼岸祭り（石瓦）

（大減）収穫の開始 各家でオハツホ 新米を伏いて神仏に供える
収穫を開始するとハツホマイリ 初穂と芋、かぼちゃの量を測って外崎宮にお参りに行く

水不足で田植えができない時
（立腹寺）天野神社で太鼓をたたく
（高田宮）高田宮が今年の豊作に水をかけて田にいた
苗々では、豊作タライに水を入れて置いておき、それをかける

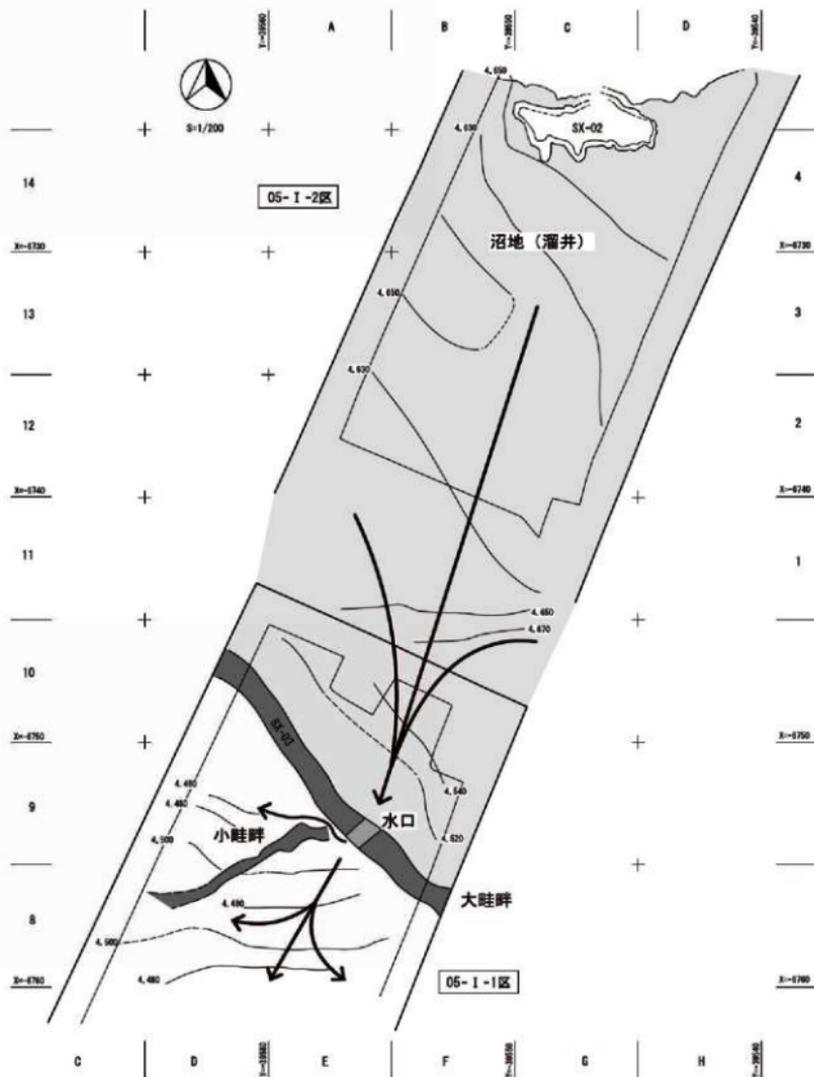
田植え後 サナボリ
ムラの田植え完了後 カフマツリ
人を集めた田植え後 ヒアガリ
ムラ全体の田植え完了後 アシアリヤ（足裏い）

ナカボシ
稲が出る直前に豊作を良くするために田の水を落とす

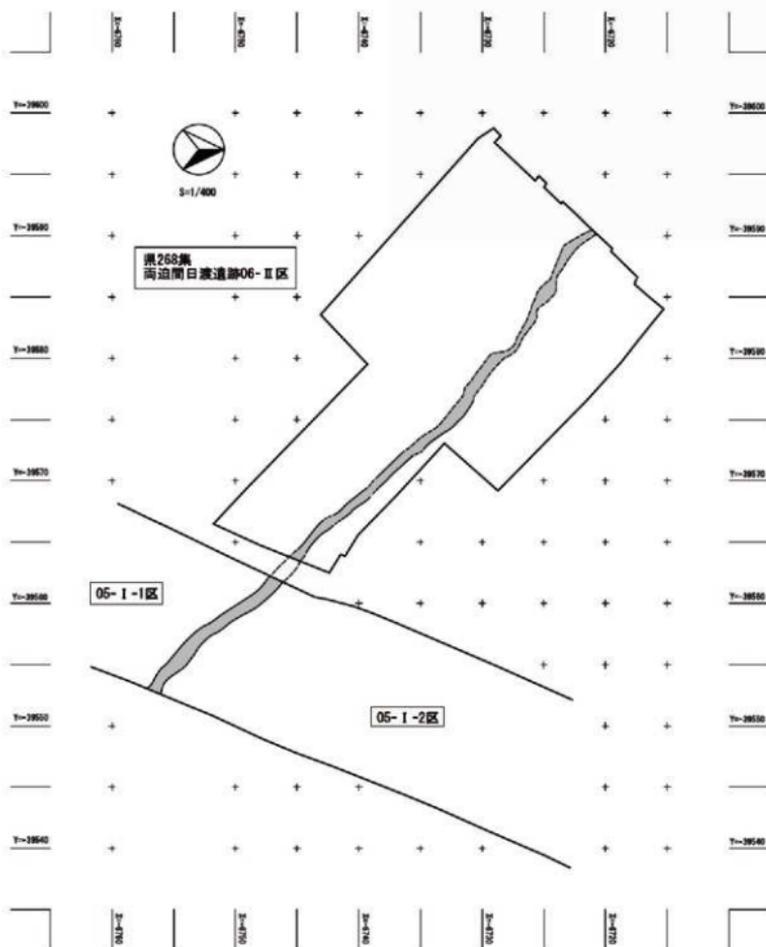
ノボシ
刈った稲をそのまま田に広げて2〜3日天日で干して乾燥させる

カケボシ（掛け干し）
稲を竿に掛けて干す

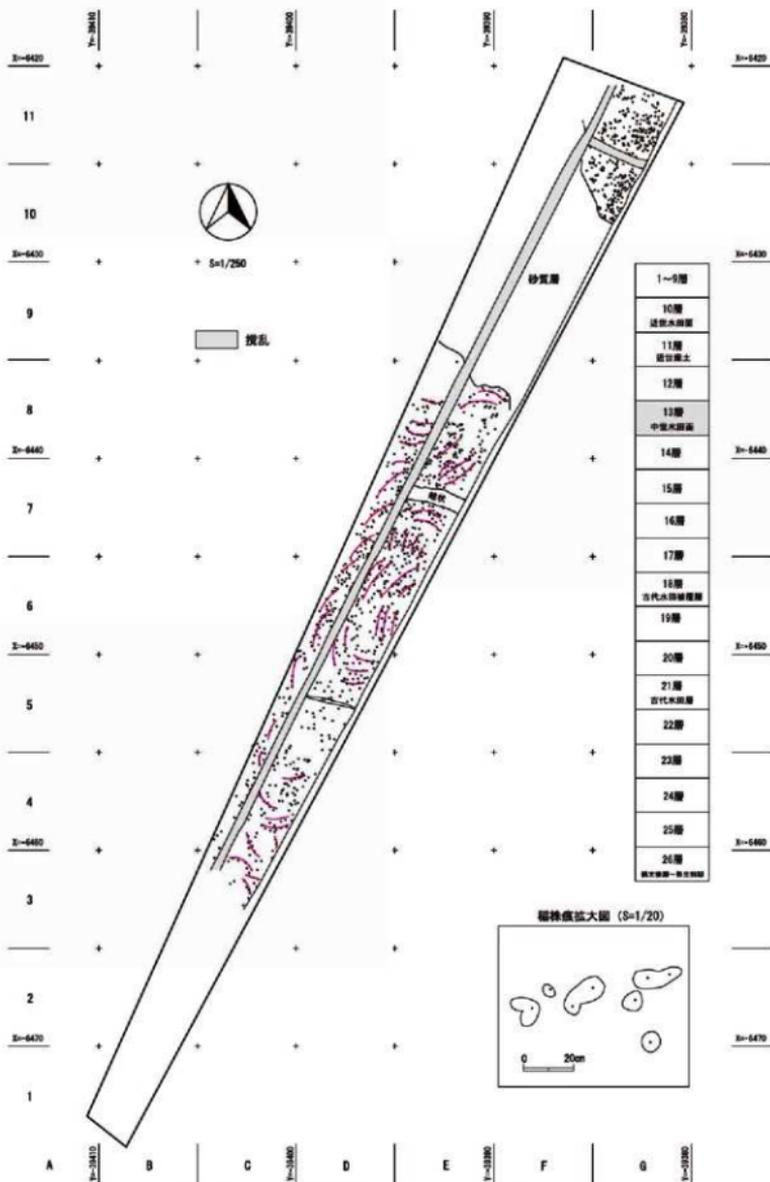
第 303 図 農事暦



第 304 図 両迫間日波遺跡 05-I-1 区・2 区における水田概念図



第 305 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区・2 区
及び両迫間日渡遺跡 1 (Ⅶ層) との整合性



第 306 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層稲株痕実測図

もう一つ、注目したのは足跡群で、これは幾つかのグーピングができる(第61図)これに進行方向(足跡の向き)を加えた。この05-I区は氾濫により川砂で全体が覆われたため足跡の検出が可能であった。氾濫直前に水田に入り小畦畔を越え移動した光景を想定した。僅かに小規模稲株痕は検出されたが、イネとして判定が困難で、イネの成熟期の台風時期ではなく、この足跡は梅雨時期の出来事か。足跡の「土踏まず」は見事で、足横幅が広くよく歩くことに発達した足跡である(第60図)。

また中世期の水田であるが稲株の密集に簡素な線引きを試みた(第303図)。これは田植えの状況の想定であり、この結果、近年の升目状の田植え法の規則性は見当たらず、どちらかといえば放射状に近い状態である。これは田植え際、担当役割に關与するものか。何れにせよ稲株痕の検出により得られた事例である。

4 水田の広がり(第307図)

今回の調査を終え、報告書で主眼においたことのひとつに玉名平野における水田の広がりがあった。そのため水田の時代ごとに図化し、水田と認識された調査区に彩色し、その広がりを試みた。

これによると中央に巨大な流路が存在している。初期水田期に傾斜を改良し広域の水田区を構築するのは技術的に困難で、連続した小区画の水田であろう。「1筆内の水深は均一でなければならず、10cm以上の差があつては稲は育たないと言われ、田に水を一定の深さで留める。すなわち灌水深を均平に保つことが必須の条件である。」(水田の考古学)従って本遺跡でも地形・水利条件の箇所部分的に水田を行い、古墳期に耕作技術の進歩により広がりをみせる。

古代は極端に少なく中世にほぼ全域に水田が展開する結果になった。時代ごとに技術が高度となり水田が広がるのが窺えるが古代に極端に少なることについて、以下の理由を挙げた。

水田耕作を放棄するという事は、古代に人々がこれまでの生産を大きく変えることであり、このことは考えにくく、耕作面が消失したと想定した。これには後述するが条里制を示唆する中世水田を広域に構築する大規模工事時に、かなりの労働力を投入して古代水田面を利用・改築したのであろう。この玉名平野の北方には弥生時代中期の永安寺遺跡・古墳時代初頭の柳町遺跡が立地することから、初期水田は谷水などを利用した山裾の堰田地帯の小規模水田から発生し、やがて菊池川護岸まで広がってゆくことになる。「現在も水田が作り続けられているような低地を発掘する場合には、地下に必ず過去の水田が何層か埋没していることを考慮に入れて調査にかからなければならない。」(水田の考古学)

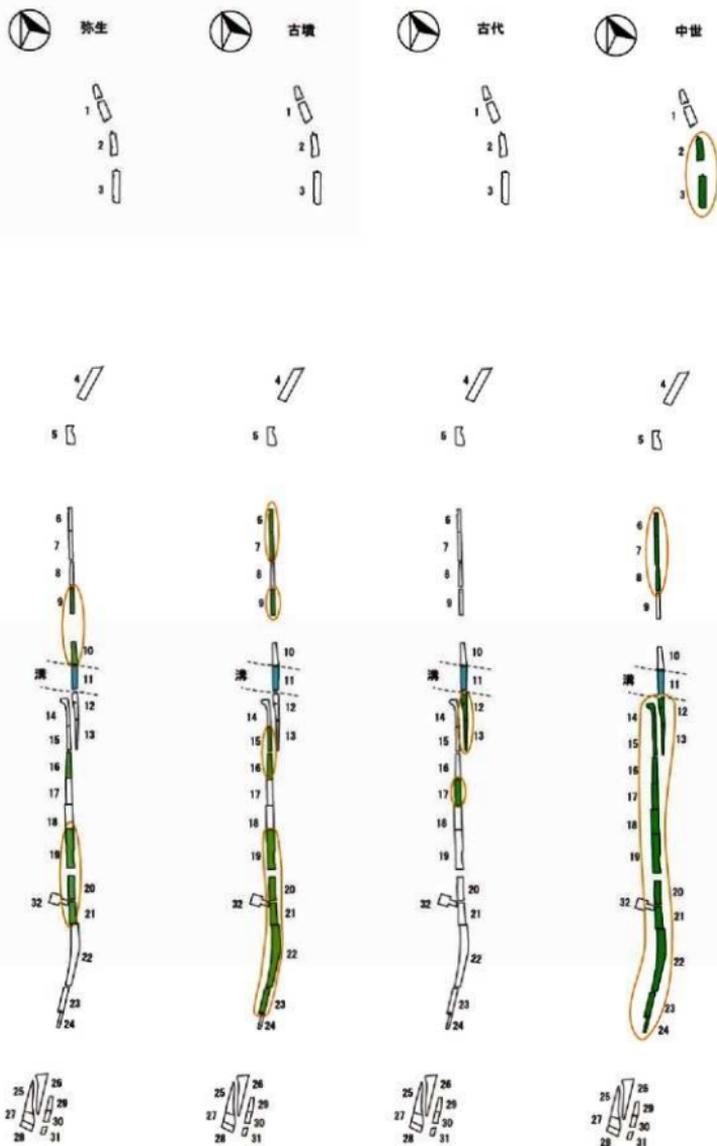
これは水田調査の機会を与えられた調査員の結言でもある。

これまでの調査報告例から水田を営む人々の住居をふくめた生活域は古墳初頭の柳町遺跡が存在し、06-I区付近までが連続した一つの耕作範囲であろうか。本調査では住居地群の検出がされなかったが各時代の生活空間・墓域など存在は可能性として当然であり、この玉名平野は農耕考古調査の宝庫であろう。

5 条里制について

「条里」というのは「条」と「里」とのことで「条」を横・「里」を縦との呼称と云われる古代の制であるが、玉名平野条里跡については、熊本県の条里(1977 隈昭志 島津義昭 熊本県調査報告書 第25集)にN-2°-Eの土地割が提示されている。これは置き換えるとN-68°-Wと同意である。

本遺跡の畝状遺構(第214・228図)の中世水田土地割はN-60°-70°の範疇で、熊本県の条里報告の



第 307 図 時代ごとの水田の広がり

土地割とはほぼ一致し、また水田区画も同様である。このことは中世期に大規模水田構築が行われたが、中世下層の06-I区SK-11・13では方位は多少異なるが、その素地が存在していたことが窺え、時間を経てN-68°-Wの水田区画へと整備していったのであろう。

それは02-I区(第185図)の畦畔に現わされるように近世まで継承され、ごく近年までその区画が存在したということになる。

この条里の成立をどこに求めるかについては、それを示唆する遺構として08-I区にて検出されたSK-01・03(第249・252図)を提示する。何れも土壌墓で熟年男性の白骨が出土し、それぞれの遺構には供献遺物が存在し、「屋敷墓」の可能性が想定され、この「屋敷墓」と竈に伴う領主級の遺構であることから、この玉名平野の条里に深く関与した人物との仮説を持つと、供献遺物から12C後半から13C前半に玉名平野は条里としての成立が想定できる。

6 地域の中での本遺跡

本遺跡の成果は本県初の弥生期水田の検出である。これまで各遺跡で弥生期の遺構、住居・墓域等の報告はなされているが、その生業跡については皆無であった。人々の生活の根底にある生業の発見の意義は大きい。また広義での玉名平野条里跡では古墳時代を中心とした「柳町遺跡Ⅰ・Ⅱ」の報告がありこの地点での生活基盤は本遺跡の古墳期水田地域に該当するのであろう。このことから玉名平野には弥生・古墳・古代・中世の各時代に「住まい」があり「埋葬地」があり、そして「生業地」があったことのセット関係を今後、主眼視しなければ、考古学としての本質が問われないだろうか。

また玉名地域での水田開始時期は「両迫間日渡遺跡 2009 玉名市教育委員会」にて弥生中期が指摘されている。本遺跡では縄文中期の遺構が検出され、流れ込み資料であるが縄文後晩期土器片が出土したことにより、本調査結果の広義に亘る「玉名平野条里跡」は現在の水田形成は中世期と想定し、それ以前は流路・微高地・谷部などの起伏のある地形であり、微高地には生活空間が存在し湿地帯は水田の生産地へと変化していくのであろう。

この玉名平野は有明海に近接しているため、海上ルートの一つを想定でき古閑前地区の天草式製塩土器の出土からでも当時の交易を窺い知る。水田に関しては現在において北部九州からの導入から、広義に捉えたと初期水田技術は朝鮮半島経由から九州の海岸の良好な条件の湿地帯から展開していくことを想定し、このことから玉名平野は今後、水田開始時期をさらに遡る可能性を示唆し、また本県に於ける水田調査のさらなる成果に期待し、本報告書の結言として閉じたい。

参考文献

- 熊本県の糸里 1977年 隈昭志・島津義昭 熊本県調査報告 第25集 熊本県教育委員会
- 両迫間日渡遺跡Ⅰ 2012年 亀田 学 熊本県文化財調査報告 第268集 熊本県教育委員会
- 両迫間日渡遺跡 2009年 荒木隆宏 玉名市文化財調査報告 第19集 玉名市教育委員会
- 柳町遺跡Ⅰ 2001年 高谷和生 熊本県文化財調査報告 第200集 熊本県教育委員会
- 柳町遺跡Ⅱ 2004年 坂田和弘 熊本県文化財調査報告 第218集 熊本県教育委員会
- 水田の考古学 1991年 工塚普通
- 糸里制 1967年 落合重信
- 日本民俗大辞典 1999年 福田アジオ 他
- 木製品・かご 2005年 野田真弓 他 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告Ⅰ 鳥取県埋蔵文化財センター
- 玉名市史・資料編3(自然・民俗) 1993年 玉名市役所
- 熊本県植物方言と民俗 1998年 乙益正隆
- 身近な山野草のすべて 1988年 斎藤文治
- 熊本県における中世前期の土師器について 1994年 美濃口雅朗 中近世土器の基礎研究Ⅹ
- 中世の出土銭 1994年 永井久美男 兵庫埋蔵銭調査会
- 日本出土銭総覧 1996年 永井久美男 兵庫埋蔵銭調査会
- 楠 ものと人間の文化史151 2010年 矢野憲一・矢野高揚 財団法人法政大学出版局
- 木の実 ものと人間の文化史47 1982年 松山利夫 財団法人法政大学出版局
- 日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究 2011年 国立歴史民俗博物館研究報告 第162集
- 菜畑内田遺跡(3) 2000年 三浦雄二 唐津市文化財調査報告書 第93集 唐津市教育委員会
- 安国寺遺跡 1989年 国東町文化財調査報告書 第4集 国東町教育委員会
- 板付 1976年 後藤直 他 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 上巻 本編 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(3) 1976年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第36集 福岡市教育委員会
- 板付遺跡調査概報 1979年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(6) 1980年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第57集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(8) 1982年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第83集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(15) 1989年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第210集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(19) 1998年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第576集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書第20集 1999年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第601集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書第22集 2001年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第680集 福岡市教育委員会
- 曲金北遺跡(遺構編) 1996年 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第68集(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 日高遺跡 1882年(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 池ヶ谷遺跡Ⅰ(遺構編) 1992年 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第38集(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 研究紀要Ⅳ 水田調査の方法と研究 1993年(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 梅白遺跡 2003年 佐賀県文化財調査報告書 第154集 佐賀県教育委員会
- 水田跡の構造と理解 2005年 斎野裕彦 古代文化57号
- 坂元A遺跡 坂元B遺跡 2006年 都城市文化財調査報告書第71集 都城市教育委員会



玉名平野条里跡 01-1・2区
SI-42と円形周溝状遺構



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43



玉名平野条里跡 01-1・2区 円形周溝状遺構



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43



玉名平野条里跡 01-1・2区 縄文時代 (SI-42・43 円形周溝状遺構ほか) 遺構検出



五名平野条里跡 01-3区 SI-164 遺物出土状況



五名平野条里跡 01-3区 SI-162 遺物出土状況



五名平野条里跡 01-3区 SI-166 竪穴建物



五名平野条里跡 01-3区 SI-166 石器出土状況



五名平野条里跡 01-3区 東側遺構検出



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-02



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 3層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 NE→SW



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 S→N



玉名平野条里跡 01-1・2区 SX-35 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SI-52・153・全景



玉名平野桑里跡 01-3区 SI-51炭化物出土状況



玉名平野桑里跡 01-3区 SI-51下層遺物出土状況



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-114・121 3層遺物出土状況



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況全景



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況全景



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 6層遺物出土状況



玉名平野桑里跡 01-3区 SE-121 7層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 8層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 9層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 S1-15 埋土1層中央部遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-4区 清検出状況SD-203-204(701)塚か



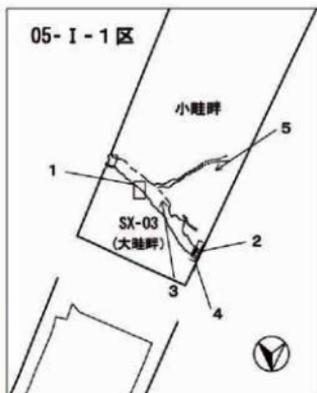
玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28・S1-02
竪穴建物・溝・遺物出土状況



兩迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大睦畔) 東側壁



兩迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大睦畔)



1



2



3



4



5

高迫間日渡遺跡 05-I-1区 SX-03 (大睦畔) 検出状況



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 人骨出土状況 (NW→SE)



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 人骨出土状況 (S→N)



玉名平野衆里跡 04- I 区 SX-01 石埋納出土状況



両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-07 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 06- I 区 ST-01 縄文土器出土状況



玉名平野衆里跡 07- II 区 木樋出土状況 (SE → NW)



五名平野条里跡 08-Ⅰ区 SK-02 遺物出土状況



五名平野条里跡 08-Ⅰ区 SE-01 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-08 検出状況時

みぐも
水口まつり (天草市河浦町今田)

初田植えの日、苗を水口（水の取口）近くに仮植し、丈夫な箱に見たてた男茅三本に、それぞれ、米、塩、干魚を紙に包み田んぼに立てる。御神酒を注ぎ今年の豊作を田の神に祈願した後、田植えを始める。



参考 水口まつり (松本 教夫 1990 写真集 天草・人と暮らし)
撮影場所 天草市河浦町今田



両迫間日渡遺跡 05- I -2区 8層 小睡群検出状況



両迫間日渡遺跡 06- I区 SX-10 検出状況



両迫間日渡遺跡 05- II -1区 中世水田足跡痕 (NW→SE)



玉名平野桑里跡 07- V区 粘土探掘坑検出状況



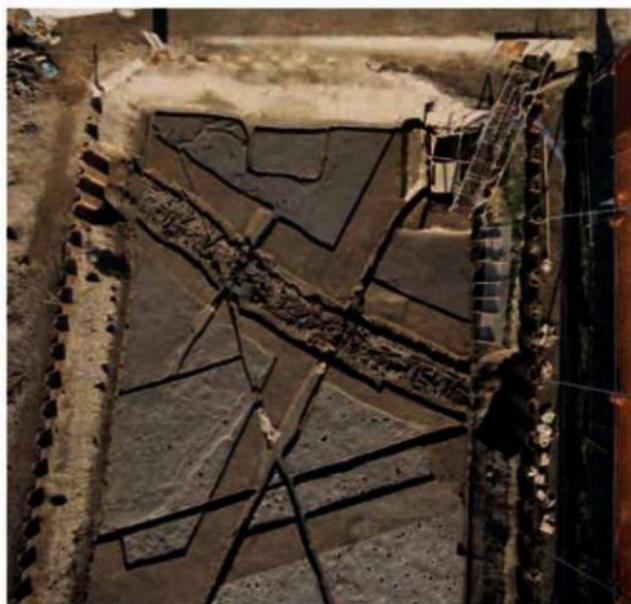
玉名の平城跡 (W→E)



玉名の平城跡 S19 遺物出土状況 (SE→NW)



兩泊間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大睦畔) (NE → SW)



兩泊間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大睦畔)



岡迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大睦畔)



岡迫間日渡遺跡 05- I -2 区 10b 層



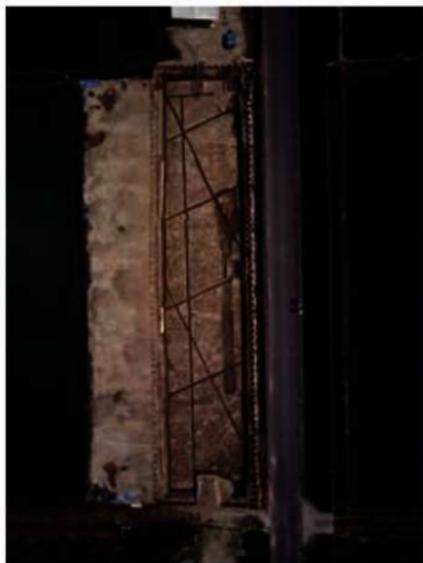
五名平野条里跡 02-Ⅲ区 7層屋根査検出状況



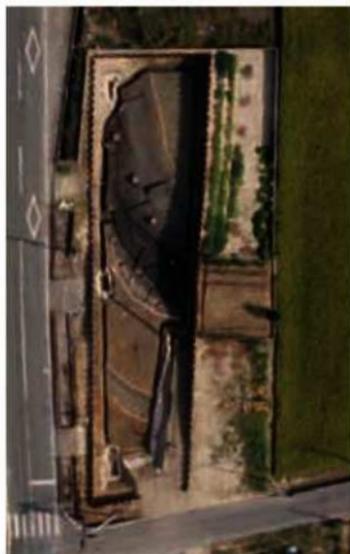
五名平野条里跡 02-Ⅲ区 9層屋根査検出状況



玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稲株検出状況 (N→S)



高迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a 層足跡



玉名平野条里跡 02- II 区 溝 (大型溝)



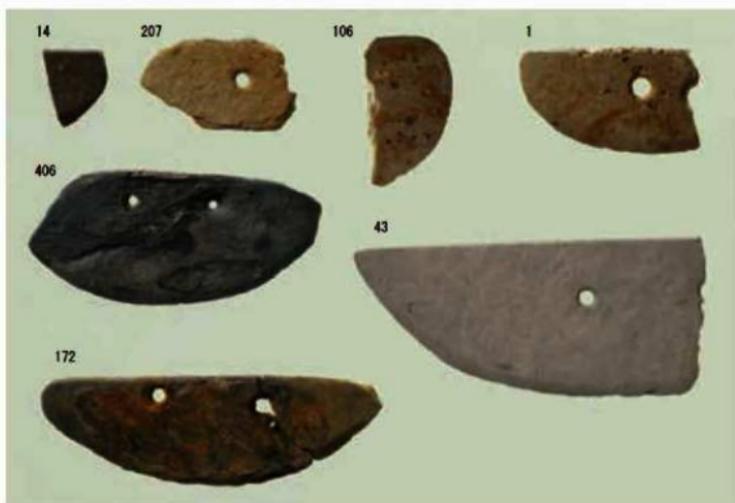
岡迫間日渡遺跡 05-1-2区 (NW→SE)



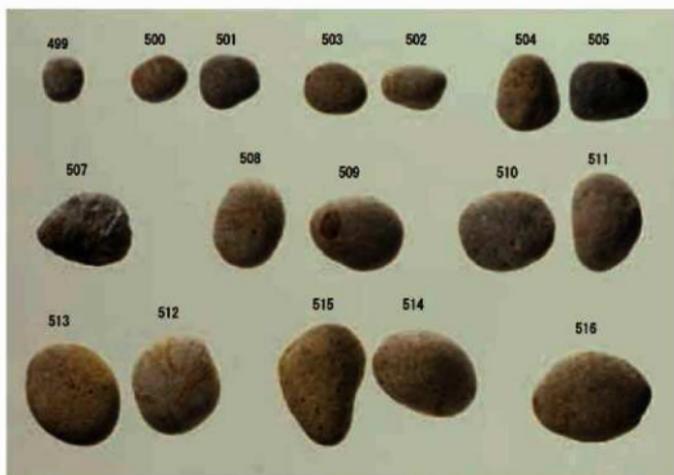
岡迫間日渡遺跡 05-1-2区 (SE→NW)



木杵



石包丁



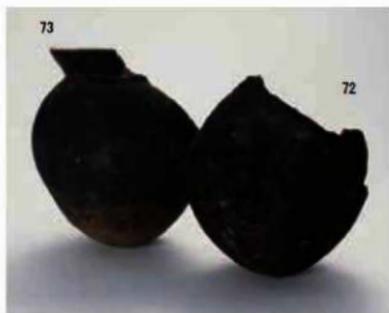
投石サンプル一覧



出土投石



五名平野条里跡 01-3区 SE-121 出土土器



五名平野条里跡 01-3区 SE-121 出土土器



五名平野条里跡 01-3区 SE-115 出土土器



五名平野条里跡 01-3区 SE-114 出土土器



両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-08 出土土器



両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 ST-08 網代



小型丸底土器



ミニチュア土器

Ph. 21



両泊間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 出土土器



玉名平野桑里跡 01-2 区 SE-36 出土土器



両泊間日渡遺跡 05- I 区 金属製品 (小柄)



両泊間日渡遺跡 04- II 区 被熱塊



五名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器



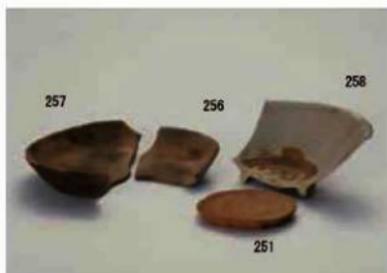
五名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器



五名平野条里跡 08- I 区 SE-01 出土土器



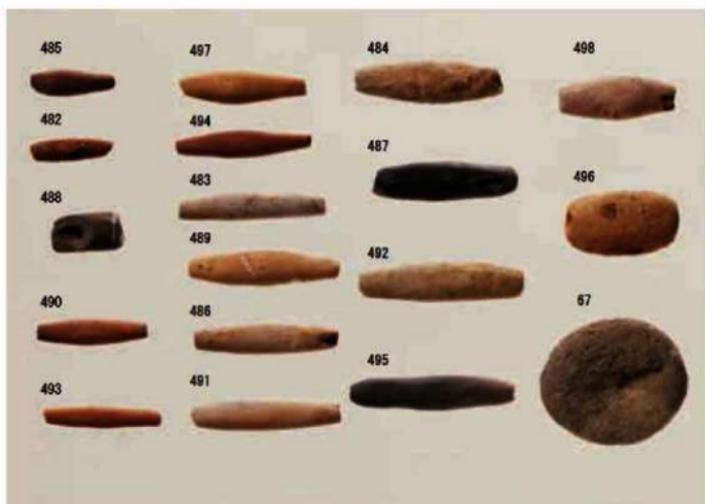
五名平野条里跡 08- I 区 SE-02・SD-03 出土土器



五名平野条里跡 08- I 区 SE-03 出土土器



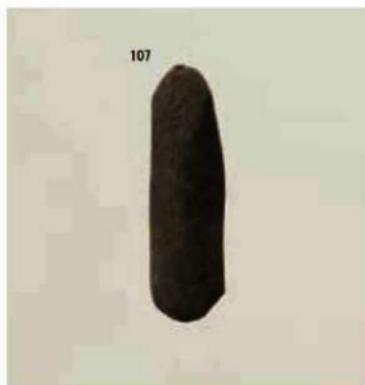
五名平野条里跡 08- I 区 SK-03 出土土器



土樋・浮子



生活用具・石碓・權



小型丸ノミ



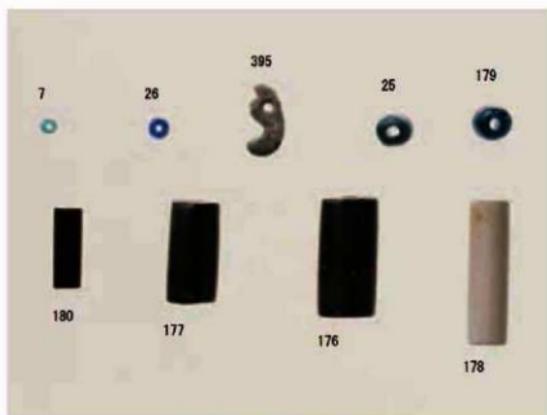
磨製石斧



打製・磨製石斧・敲石



玉名平野各里跡 08- I 区
出土勾玉 (クロム白雲母)

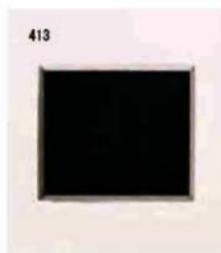


裝飾品 (勾玉・ガラス玉・管玉)



円形裝飾品・土製勾玉・石剣・土製管玉・土玉

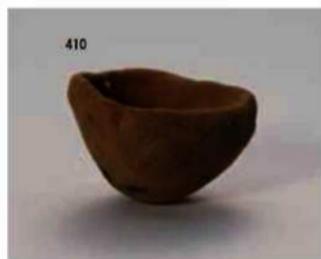
玉名の平城跡出土遺物



巡方（表）



巡方（裏）



ミニチュア土器



玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SX-43 木樋 (処理後)

編集後記

長い調査期間を要した遺跡であった。調査員も変動した。一度、現場を視察した時に、遺跡・調査について熱く語る亀田調査主査であったが、失礼ながら半分も理解出来なかった。そこを引き継ぐとは思ってもいなかったからでもあろう。

漁村育ちの私の水田調査は「陸に上がった河童」状態で、ことある毎に作業員さんに「田んぼ」について聞いていた。足跡検出の際は、耕す深度に足が入り込む事など初歩的なことから教示頂いた。鉄板矢板に囲まれ、調査深度が増すたびに夏期調査時の体温温度は凄まじく、現場作業員の方々は無口となり調査員は帰宅しても暫くは降車できないほど疲労した。今では「思い入れ」という形に昇華している。

整理作業では水田流れ込みの土器小片を粘り強く整理をされた。有り難いことで、調査・整理とも環境には恵まれたことに心から感謝の意を表したい。主査の能力不足は認めざるを得ないが、今では水田に出会うとこれを見つめ、食事を有り難くいただくようになったことは、私の財産になった。

表紙に足跡を掲載した。現場で石膏取りをしたその一つである。汗を流し生活をする光景が私には映る。それは私も含めて、精神的な何かを失ったと感じるからである。この足跡は考古学上の足跡であるが、これを「未来への足跡」として、これからの指針としたい。

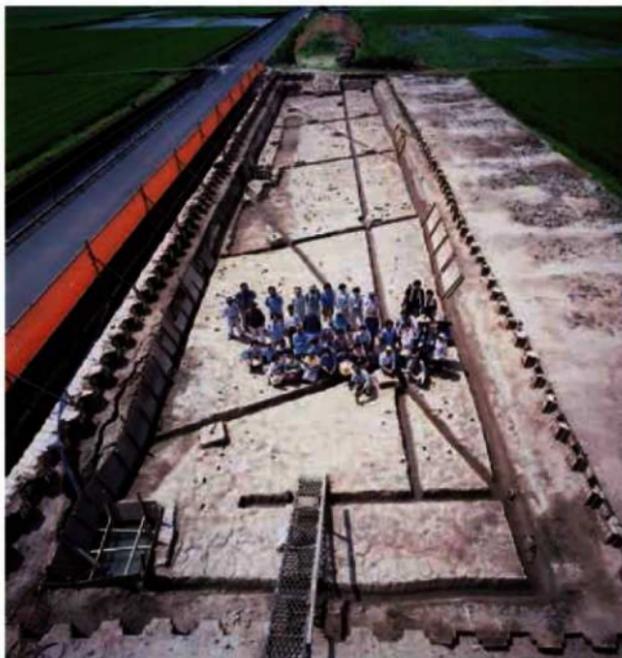
(山下 記)

現場作業員

荒木富士子 伊予和来子 宇野信子 坂崎和仁 坂田ツル子 嶋田千恵子 磯守タネ子 寺田トミ子 西村テロ ヲ 藤井晴美 藤井メイ子 藤村良一 三嶋邦子 雪野弘行 大西ミツ子 志水静香 寺田智子 西川弘子 西嶋ヨシエ 西村ミヨ子 平川英二 前村国博 村上勇二 井上 厚 宮本善治 星子一美 櫻木祐人 中川克徳 植田富代 植田夏代 植田美知男 木本行正 境エミ子 高野美智代 田中スミヨ 田中良一 宮尾孝子 山田恵子 米岡小雪 古城明憲 坂本 緑 友田とをる 中村初美 西田京子 藤岡吉博 宗村正孝 本山千代子 笹木秀利 高村洋美 木村節子 村上直子 村上久美子 川本暖美 林 新子 小山恵子 池田雅世 徳永智実 大森ツヤ子 岡田道子 五郎丸美智子 境 昭一 西由紀子 西嶋重子 西村清美 古川佐和子 堀内一正 松嶋克也 三次佳代子 宮本知恵子 荒木義武 北田テイ子 国武勝代 永松サヤカ 島田トヨミ 濱田勝也 濱地和代 松山美徳子 坪井義武 澤田弘行 荒木康利 高崎ハルコ 道口真由美 吉川ゆかり 吉田ムツ子 田上俊子 堀田祐子 北嶋百合子 高津千尋 新町加代子 村上勝也 倉田 昇 三森敏子 東信子 岡本博子 石元孝行 石原紀久代 村上常雄 尾浦公治 飯塚千恵美 村上美枝子 今村東亜子 三嶋賢代子 野田寿美 吉田祐子 権藤 功 佐々木功 坂崎征子 福田ツヨ子 白木直子 澤田智子 柴尾小百合 田上由美子 野添ゆかり 村上美香 増田正隆 梅林将旨 北崎 純 戸上 司 荒木武俊 松村健治 古川るみ子 立野和彦 武田昭男 木下洋一 谷口敬一 谷口洋介 廣田親男 松村鈴子 伊藤友美子 飯塚早子 浦田好子 大森 久 柏木愛矢乃 杉本美智子 鈴木洋子 竹熊健志 中林静代 中村孝光 西川ミツ子 藤田恭平 星野哲也 松本 崇 松本千夏子 三島文子 宮本優子 村上倉子 麻里山千恵子 毛利真吾 田中美子 西村由美子 明石由紀美 赤松みき 石川貴保 石元寿美子 井芹和美 伊藤幸子 内田祐子 有働静香 浦島ゆみこ 榎本ミチヨ 岡本喜代子 新町夏海 高本留美子 竹志田美奈子 雪野ミチ子

整理作業員

境美恵子 青木美代子 藤田繁子 井上裕美 古閑満代 富田知子 柴田クミ子 一野幸枝 清田幸恵 紫垣
博子 野口理絵 青山玲子 村田昭恵 堀々野ふみ 甲斐啓子 瀧崎清子 園田智子 田中洋子 丸山 勉 畑
島明美 内村尚美



報告書抄録

ふりがな	たまなへいやじょうりあと3・りょうはざまひわたしいせき2・たまなのひらじょうあと							
書名	玉名平野条里跡3・両迫間日渡遺跡2・玉名の平城跡							
副書名	県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	山下義満							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
玉名平野条里跡 両迫間日渡遺跡	熊本県玉名市 玉名・両迫間	43 206	483 138	32°56'	130°34'	2001年 5月1日～ 2009年 3月30日	約18,106㎡	県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査
玉名の平城跡	熊本県玉名市 玉名字平城		048	32°57'	130°35'	2003年 10月7日～ 2004年 2月4日	約2,200㎡	県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
玉名平野条里跡 両迫間日渡遺跡 玉名の平城跡	生産	弥生 古墳 古代 中世	水田 住居 堀立柱建物	弥生土器 土師器 金属器				
要約	<p>玉名平野条里跡という広範囲の遺跡に両迫間日渡遺跡は包まれたように位置し、調査の結果、両遺跡は同一の性格を持つ遺跡である。これらの遺跡は生産遺跡で水田遺構であった。調査時点で本県初の弥生期敷粗朶技法を用いた大畦畔を伴う水田が見つかったことである。またこれに伴う足跡の検出もあり当時の水田状況に恵まれた。また本遺跡における水田は弥生期から現代まで継続している。この遺跡は「条里」として周知の遺跡であり、この条里制の成立を中世期に想定した。</p> <p>玉名の平城跡は周知の中世城であるが本調査の結果、全体は後世の削平を受け、明確な塼などの検出は困難であったが堀立柱建物・櫓列、中世輸入磁器などから中世期の山城であろうが、本調査は開発工事の部分的な範囲であり詳細調査を今後、求められる。</p>							

熊本県文化財調査報告 第299集

玉名平野条里跡3・両迫間日渡遺跡2
玉名の平城跡

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査

平成26年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社 大和印刷所

〒861-8031 熊本市東区戸島町920-11

発 行 者：熊本県教育委員会
所 属：教育総務局文化課
発行年度：平成 25 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 299 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：玉名平野条里跡 両迫間日渡遺跡 玉名の平城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>